
コードギアス 起きたら異世界に来ていた者ゼブル

山ブル地帯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 起きたら異世界に来ていた者ゼブル

【Nコード】

N8643N

【作者名】

山ブル地帯

【あらすじ】

起きた場所はギアス嚮団！？

急にコードギアスの世界に連れて来られたギアスファンの主人公がギアス（チート）と謎の女神から貰った神秘の力（同じくチート）を使いコードギアスの世界を変えていく

他の世界からも少数ながら登場！（あまり出番は無いのですが）

第一話 ゼブル登場（前書き）

ご観覧して頂きまして誠にありがとうございます。

初作です。その上文章を書くのがド下手なので読みにくいかと思いますがご容赦ください。

完結まで書いていききたいと思いますので応援よろしくお願いします。

第一話 ゼブル登場

ゼロが現れる2年ほど前

薄暗い場所がある。どこかの洞窟か何かだろう。その場所には町が入るぐらいのスペースがあり、実際小さいながらもビル郡が建っている

その場所の中央に大きな柱のようなものがある

その柱の中の奥に扉があった。その扉には、赤い鳥の様な紋章がある大きな扉だ。その扉の前で仰向けになっている者がいた

どこかの学生なのか黒い制服を身に纏い身長は男としては大きい部類だ

「スー、スー」・・・どうやら寝ているようだ

そこに小学生位の体躯の少年がいた。男に比べると小さく、髪が驚くほど長い。少年の背丈同じ長さの金色の髪だ

「・・・おい起きろ」

少年が蹴りながら言う

「うっ、うっうん」

男があくびをしながら体を起こす

「起きたかい？」

「ふあああ・・・ああ」

男の目はまだブレていた

「君は誰だい？何故ここにいる？」
少年が訪ねた

「自分の家で寝てちゃ悪いか？」

男は下を向きながらさも当然のように呟いた

「・・・ここが君の家に見えるのかい？」

男が下を向きだるそうに答えた

「俺の家に絨毯なんかひいてないな」

「君の家は何処にあるんだい」

あくびをしながら答えた。

「俺の家は日本の東京の中だ」

「日本だって？何を言っているんだい、あそこは今はもうエリア1
1だろ？」

異変に気が付いた男

(待とう。うん、待とう。この展開はなんだ、まるでコードギアスの世界に来ちゃいました。みたいな展開。おかしすぎる何故だ・・・はっ！まさかそうだ、今日は俺の誕生日なのか。そうかそうか、みんなで俺を祝ってくれてるのか。俺がコードギアスが好きなのを知っているから、俺って恵まれてるな、みんなにこんなことまでして貰って、こんな子供にも協力して貰って。そうと解れば乗ってやらないと。)

男は考え

「それよりさ、おまえの名前はなんて言うの？」

「僕の名前はvv」

(声もそっくりだな)

男は内心驚いた

「俺の名前は(ここはかつこいい名前です)ゼブル(偽名です)って言うんだ」

とかつこよく少年(以降vv)にポーズをしながら言った瞬間

「うわわわわわわわ!!!」

男(以降ゼブル)は驚きで大声を上げ後ろに下がった

「ど、どうしたんだい？急に大きな声を出して」
ゼブルの急な反応に驚いたvvが言った

それ以上に驚いているゼブルは

(おかしい現実にこんなvvそっくりな奴が存在するはずが無い)

「お前vvか？本物か？髪とか顔とか？」

驚きのあまり頭が回らない

「おかしなことを言うんだね。僕以外のvvがいるのかい？髪も確かに長いけど本物だよ」

驚きを隠せないゼブルはあたりに目を回す

「な！ギアス教団じゃないかここは！！」

(本物はこんなに広いのか)

「何故そのことを知っている！」

vvが驚いた

(待て、このままだとvvに殺されるのがおちだ、ここをどう切り抜けるかが勝負の鍵だ)

ゼブルは頭の回転には自信があった。憧れのルルーシュには劣るけれども普通の人に比べては高い方だ

(ここはポーカーフエイスで)

「vv、たぶん俺は異世界から来たんだ」

「何を言っているんだい？」

「お前の話を聞いて確信した。俺の世界では日本は日本のままだったし、それに俺の世界にもこの場所はあった」
ハッターリをかましてみた

「何だって！そっちの世界でも研究していたのかい！？しかも同じ場所だ」

ハッターが聞いたようだ

「そこまでは知らない、なんせ俺の世界では最後に使われていたのは約200年前らしいし、今では既に廃墟となっていたがな・・・確かここは中国だろう？」

「中国？中華連邦の事かい？」

VVが落ち着きを取り戻して言う

「俺の世界では中華人民共和国と言う名前だ。中国に旅行で来たときにな、さっき言った通り廃墟だが観光名所として有名だった。あそこの世界は西暦何年だ？」

「西暦？何を言っているんだい？この世界は皇暦だよ。皇暦2015年」

「俺の世界は西暦なんだ、西暦2010年大体理解してくれた？」

「信じられないけど、信じるしか無いみたいだね。君みたいに他の世界から来た例もあることだし」

「そうなのか？」

(そんな設定あったか？)

「ああ、誰かとは言わないけどね」

「そうか、ではお前に頼みがあるのだがいいか？」

「なんだい？」

「俺には元の世界に戻る事もどこかに行く当ても無い、だから少しの間俺をお前の傍に置いてくれないか？この世界のこと知りたいし」

「君を置いて僕に何のメリットがあるのかな？」

「ギアスと言う物の俺に与えて実験してみないか？ここではそういう事してるんだろ？それに俺の世界のことも気になるだろ？」

（俺もギアスが欲しいしな）

「いいのかい？」

「俺から頼んだ事だ、しかし体とか脳を弄なよ」

（今のうちに言っとかないと後で弄りそうだからな）

「ふうーん、まあ、いいよ」

VVが残念そうに言った（こいつ本当に弄る気だったのか？）

「本当か？」

疑り深く聞く

「うん、面白そうだしね」

VVは笑った。

「では」

「うん、誓約だ」

こうして俺はギアスを手に入れた。俺のギアスは俺の『俺らしさを変えたい』という願いを具現化した物だった。最初はしょぼいと思っていた。いたこのギアスだが・・本当は凄いい道があった。この使い道にはv vも驚いてたな

俺はこの力で未来を変える

第一話 ゼブル登場（後書き）

ゼブルのギアス能力は次話に載せる予定です。

第二話 ゼブルのギアス(前書き)

二話目ですがまだまだ読みにくく、誤字脱字が目立つかと思ひますがご容赦して下さい。

第二話 ゼブルのギアス

ゼブルがこの世界に来てから数日が過ぎていた。その数日間ゼブルはvvの元で自分のギアスの能力や効果、使用条件などを理解し、空いた時間はvvが用意した部屋のパソコンで《自分が知っているこの世界》と《実際自分がいるこの世界》との違いを調べていた

「日本とブリタニアの戦争の年、蕨島の奇跡、日本解放戦線の存在は一緒だな」

ゼブルは体を反らしながら言う

（しかし憧れのルルーシュさんと愛しのナナリーちゃんを日本に人質として送ったことが乗っていない。まあ隠してるだけかもしれないな、それに俺はゼロが現れる2年前に来たことになる）

ゼブルが考えごとをしていると

『ゼブル様、教主vvが呼んでいます。至急黄昏の扉にきてください』

ゼブルはこの教団内では高い地位にいた。それは彼がvvのお気に入りだからだ

「分かった、すぐ行く」
椅子から立ち上がりいつもの黒い制服を身に纏い部屋を出る

そこは彼がvvと初めて会った場所、彼が異世界で……初めて寝ていた場所、黄昏の扉の前だ

「何のようだ？vv」

「ちよつと君のギアスの効果を理解しときたいんだよ」

彼が扉の前の椅子に座っている少年に聞いた。この少年こそ彼に食衣住とギアスを与えた人物vvだ
小学生のような小柄な体躯とその身長と同じ位の金色の髪それに濃いピンク色の大きな目をしている

「何をすればいい？」

「そうだね、まず君のギアスの能力と条件を言ってくれ」
vvがそう言うのと彼の周りに白衣を着た研究者らしき人達が十数人集まってパソコンなんかの準備をしている

そして俺の頭に嘘発見器らしき物を取り付けた

「君の体を弄らないと約束したからね。代わりにこれならいいだろ」

「……言わなきゃ駄目か？お前は知ってるんだし」

「今後のためにもさ、君のギアスはとても興味深いものなんだ、後

で実際に君のギアスである事を実験するんだ」

ゼブルのギアスは人の性格及び人格を書き換える能力。本人は「人のパーソナリティーを自分好みに換える力」と言っている

簡単に言えば勇気の出ないものに「勇気を出せ」とギアスをかければ、勇気の出ない方が消え新しい勇気を持っている性格を植えつけることが出来る。しかし記憶は変わらない

これを見る限りあまり良い能力と思うかもしれないが、実は人間の性格というものはとても面白い物で、例えば目の前の嫌いな食べ物を食べる命令しよう。性格が換われば考え方も換わり、同じ人でもわがままな性格に換えると「絶対に食べない」と拒み、言われたことに素直に従う性格だと「頑張つて食べてみる」とがんばる。つまり、同じ人間でも性格が違えば別の人間になると言っても過言ではない

さて、元に戻ろう、現状でゼブル自信が理解している能力の説明と効果と使用条件

1、ギアスの能力は相手の性格を書き換えるギアス

2、発動条件としては相手の目を見なければならぬが、ルルーシユのギアスと同じように光情報なので鏡に反射させてギアスをかける事もできる。しかし透過率の低いバイザー等を付けている者には発動し無い

3、ギアスをかけた対象に「元に戻れ」とギアスをかけると、植え付けた全ての性格を無くし元の性格に戻る

4、性格を植え換える時に複数の性格を植えつける事も可能。しかし「強くて豪快な暑苦しい熱血マンになれ」や「おしとやかで清らかなお嬢様になれ」等のキー単語を繋げる事も可能でこの場合1つとして数える（最大7回）。しかし相手が意味を理解出来なかったり、間違つて理解もする可能性もある

5、多数の相手にも一度で出来るが同じ内容の性格しか植え付けられない

6、同じ相手に何度も使える

7、書き換えた性格の上に乗させる形となる。

例、前に植えた性格+新しい性格の形になる（これも最大7回）

8、ギアスを発動する時に植えつける性格の内容を口で言う必要はない（頭に直接内容が届くので）

9、ルルーシユと同じ様にギアスを受けた対象は、行使された前後

の記憶に欠落が生じる

しかしこの能力の本当に凄い所は《1人の人間を別の人間とすること》が出来るのである

たしかに、記憶を無くしたり換えられたら、性格が変わるがその人の心の本質は変わらない
しかし、彼のギアスは心の本質を換える事が出来る

例えばルルーシユのギアスは1人に一回だが、ゼブルのギアスを使うと

ルルーシユのギアスをかけ終わる　ゼブルのギアスを使い性格を換える　ルルーシユのギアスをまたかける事が出来る

しかし同じ人《性格》にはギアスは効かない

ルルーシユのギアスをかけ終わる　ゼブルのギアスを使い性格を換える　ルルーシユのギアスをまたかける事が出来る　ゼブルのギアスで性格を元に戻す　ルルーシユのギアスは効かない

そして・・・

「何だここは？」
ゼブルがVVに聞く

説明を終えたVVと二人で手術室と思われる部屋に案内された。その真ん中に木製の椅子があるだけだった

「ちょっとした実験室だよ」

「SMプレイは遠慮するぞ」

「残念だけど違うよ」

そこに子供が来た推定年齢5、6才の女の子だ

その子が真ん中の椅子に座らされる。あまり怖がってはいないみたいだ

「この子にギアスをかけてみて」

「俺のギアスを？」

「そうだな、僕のことを大好きにさせて」

「分かった」

(そうは言ったものの、あまり気は進まん)

女の子の方を見てゼブルが言う

「ゼブル？ プレイエントが植える、偽りの人格を！」

ゼブルの右目に赤い鳥のような紋章が浮かんだ

「なあvv」

「なんだい？」

「この台詞とポーズ止めないか？すつごく恥かしいんだけど」

「何でさ？カッコいいじゃないか」

（皇帝族つてみんなこんな台詞やポーズが好きなのか？クロヴィス然りvv然りルルーシユさん然り）

「で、言われた通りにしたけど・・・どうするんだ？」

「うん、ちょっとね」

「う、うう」

女の子が声を発した

「起きたみたいだな」

女の子があたりを見回して

「きゃー！ー！！」

突然vvに襲い掛かった

「vv！」

襲われたのかと思ったが。しかし女の子はVVの胸に顔を擦り付けて、嬉しそうに「えへへへ」と笑っていた

「まったく、ここまでしなくても良かったのにさ……ちょっとどいてくれるかな？」

VVは上に乗っている女の子に言った

「あ、ゴメンなさい。体が勝手に……その」
女の子はばつが悪そうに下を向いた

「さて君に頼みがあるんだけど」

「頼み？うん、いいよ」

「では、契約しよう」

「えっ、私はもうギアス持ってるよ」

「いいから」

女の子の手を引き自分に近付けたVV

「キャッ！もう、乱暴なんだから………ポッ」

女の子は嬉しそうに頬を染めた

「……………（ポッってなんだよ！、ポッって！思春期かおまえは！）

自分のギアスの力を再認識したゼブルであった

「では、契約だ」

「あれ？ギアスの能力が変わってる」
女の子は不思議そうに言う

「やっぱりか」

VVが口元を歪めて言う

「何がだ？」

「二日前の実験でギアス能力者二人の内1人が君のギアスの後に何故かギアスがまるで使えなくなっていたんだ。その子にまたギアスを与えたらなんと違う能力だったんだ」

「俺のギアスが原因だったのか？」

「多分ね、次に彼女のギアスを解いてくれないかい？」

「…………ポーズと台詞は無しな…………元に戻れ」
ゼブルは女の子にギアスを解いた

「さあ、ギアスを使ってごらん」

「あれ？元のギアスに戻っています」

女の子を下がらせた後v vは言った

「君のギアスは本当に面白いね」

笑いながら続ける

「君がギアスをかけたもう一人には君のギアスはかかってなかったよね？」

「ああ」

「彼ね、多重人格者になってたよ」

「なんだって!?!」

(俺のせいかな?)

「君のギアスに反抗してギアスが消えたかと思っていたら。急に『男は汗と友情だ』って言うってテニスの素振りをしてらしい。元の性格に戻ったらしいけど、その次の日に全身筋肉痛になったんだって」

(確かに強くて豪快な暑苦しい熱血マンになれって言ったな。でも素振り程度で全身筋肉痛ってどんだけモヤシなんだよこの研究所)

「後で二人のギアス消しに行く」

「いや、経過が知りたいから消さないで。しかし君のギアスは本当に凄いな」

「そうかな？」

「ギアスってのはその人の願いを具現化したものなんだよ」

「俺のギアスを受けた前後で能力が違うのは、性格が違ければ考え

る事も願いも違つてのか？」

「多分ね」

「なるほどな」

多重人格

ギアス

目

光情報

性格

願い

ゼブルの頭にある名案が浮かぶ

「なあ、vv」

「なんだい？」

「ある実験をしてみたいか？」

「いったい、何をするんだい？」

「面白い実験さ」

ゼブルがおかしそうに笑った。

第二話 ゼブルのギアス（後書き）

すごく説明の所が長くて解りにくかったと思います。

すみませんでした。

ルルーシュ達が出るのは速くて次話、遅くて2話後です。

第三話 ゼブルのギアス 応用編（前書き）

いつもと同じく読みにくく思います。本当にすみません。

前話はギアス能力の説明で

今話はギアスの変わった使い道です。

第三話　ゼブルのギアス　応用編

薄暗い部屋に2つの影があった

部屋にあるのは椅子型の拘束器具が一つだけだ。その拘束器具に一人の白衣を着た女性が両腕と両足を椅子に拘束され目隠しもされている

「あの、教主vvこれから何をするつもりですか？」
女性は怯えながら目の前にいるであろうvvに聞いた

「ただの実験だよ。僕がいつまでそのままできてね」とだけ言い

きゅ、バタン！

vvがそう言いドアを開けて出て行ってしまった

「え、vv様？」

女性は声を出したが誰もいない部屋に彼女の声は響くだけだ

「・・・」

何分過ぎただろう

女性の不安はどんどん大きくなる一方だ

ガチャ、キ

「……VV様？」

か弱く今にも泣き出しそうな声で聞く

「残念だけど俺はVVじゃないゼブルってんだ。それよりVVってSM好きで君に頼んでるのかい？それとも君自信の趣味？」

ゼブル、VV様に気に入られている者。よくは知らないがあまり良くない噂が多い「VV様の弱みを握っている」とか「VV様を騙している」とか

「VV様が許可を出すまで外してはいけないと申されたので」

「ふーん、アイマスクぐらいはとつてもいいかな」

「え、でも」

困ったような声で言う

「VVには俺から言っておくから気にしない、気にしない」
そう言い目隠しに手をかけた

目隠しを取られた瞬間

「ギアス発動」

（死にたがりになれ）

ゼブルの瞳の赤き鳥が羽ばたいた

「なんだかすぐ死にたい。やだ死にたくてたまらないわ」

(ふむ、成功か)
ゼブルは右手の拘束器具だけ外し

「この銃を君に与えよう」
女性の右手に銃を持たせた

すると

「ありがとう」

彼女は笑顔で銃を構え、引き金を引いた
バン！

銃声が響いた

しかし

「あれ、死んでない」

女性は不思議そうに言った

すばやく

「元に戻れ」

女性の手から拳銃を奪い懐に入れ
彼の、彼のギアスを消すギアスにより彼女は元に戻った

「あれ何で私、貴方はどなたですか？」

「君の事を解いてやれってVVに言われてね。あ、俺はゼブルよろ

しくな」

（ゼブル、VV様に気「さ、解いたぜVVが仕事に戻れって言うていたぞ」・・・）

「失礼します」

彼女は部屋から出で行った

数分後

「どうだった」

VVはゼブルに聞いた

「ああ、成功だ」

「よかったけどさ、僕が変態だと噂が流れたらどうしてくれるんだい？しかし君のギアスは面白いね。本当に出来るとは思わなかったよ」

「試してよかったよ」

「本当に興味深い実験だったよ」

「さあ、次の実験だ」

「まだ実験することがあるのかい？」

「ああ、次はこれを使った実験をする。」
ポケットから手鏡を出した。

「それでどうするんだい？」

「簡単に説明すると、俺自身にギアスをかける、うまく多重人格を作ればその別人格の俺にお前はギアスをくれ。上手くいけば俺は1人で複数のギアスを複数持つことが出来る」

「出来るのかいそんなこと？」
「すごく驚いて言う」

「試してみるさ」
手鏡を持って

「（そうだコイツの前では・・・）ゼブル？ プレイエントが植えつける、偽りの人格を！（やっぱりハズいなコレ）」

VVは不安と興味そして嬉しそうな顔を混ぜ合わせた顔している

鳥が羽ばたいた。

「何！！くっ！！（頭が潰されそうだ）」
突然の襲撃に驚くゼブル

「！大丈夫かい？」
VVがゼブルに寄る。さすがに心配になった

少し経ちギアスを防いだゼブル

「ふー、ギアス発動」

そう言うが体からは大量の汗が流れる

「止めなよ」

「大丈夫・・・ギアス発動」

(全く、俺は、未来を変える男になるんだ、ただの男から。奇跡がくれたこのチャンスで・・・だから俺は負けられ無いんだ！)

体が急に楽になった

「ふー、終わった、7回が限界だな」

顔の汗を拭き呼吸を整えた

7つの性格を作り押さえ付けた

「大丈夫かい？」

心配そうな顔でゼブルを見るVV

「・・・・・・・・」

「どうしたんだい？ゼブル」

「ああ、大丈夫だ。さて次の段階だ」

「まだ何かするの？」

「次は自分自身に会うのさ」

そう言い胡坐をかき、背筋を伸ばし、手を組み、目を瞑る

「その構えはなんだい？」

「座禅だ。日本のいや、エリア11では精神を集中させるために使う座り方だ。今から自分自身の精神に入り込んでもう一人の自分に会って来る」

「そんな事できるのかい？」

「ま、自己催眠の一種だと思ってくれ。喋りかけたり集中をそぐことは止めるよ？では……」

「……………」

数分が経った

「よし、終わり」

ゼブルが目を開いて立ち上がる

「どうだった」

スッキリした顔で。

「ああ成功だみんな俺について来る。さあVV頼んだぞ。スタイルチエンジ・ハイド！」

掛け声ともに

「さ、おれっちにぎあすをちょうだい。おれっちのなまえはいどよろしくね」

やけに明るい笑顔で言う

「・・・分かった」

「おれっちをいれてななにんいて、ぜんぶにぎあすくれおわったらぜぶるにもどるとおもうからそれまでがんばれ」

「（聞きづらいいな）・・・分かった」

7人全員が終わり。いつものゼブルに戻った

「お疲れ」

「名前とか一人称とか、性格を変える時の掛け声はいつ決めたの？」

「座禅してる時にな、分かりやすくいいだろ？掛け声だってお前好みにしたのに」

「そうだね、でも1人で7個のギアスを持つってなんだかズルイ気がするね」

「まあ、そう言うな。あと、1つ頼みんでいいか？最近体が鈍ってな。どこかのスペースで運動できないか？」

このときゼブルは気付いていないが、彼の身体能力は何故か元の世界のころとは別人のようなになっていた。ゼブルはこの世界の枢木スザク以上の身体能力を所有しているのだ

《分かり身体能力表（ルルーシユく……くスザク〓星刻くゼブルくギアスの呪い発動中のスザク）》

「いいよ、君の身体データも取りたいし」

VVは楽しみだと言わんばかりの笑顔で言う

彼の笑い顔を見て

「……体を弄らないならいいぜ」

VVは残念そうな顔をしていたが、言おうとしたことを思い出した
「あと、君の着ている服ずっと気になっていて調べさせたんだけど、

どつやらエリア11にある学校、アッシュフォード学園っていうところの高等部の制服らしいけど知ってるかい？」

「（まあ当然知っているが。）いや知らないな。もしかしたら俺はその学校に行く運命にあるのかも知れないな」

「君はそこに行きたいのたい？」

V Vが少し俯いた

「まあ、この世界の学生生活をエンジョイしたいと思うけど、V Vが心配だしな」

「何が心配なんだい？」

「俺という大切な友達がいなくなったら寂しいだろ？」

「・・・僕がそんな子供に見えるかい？前にも言ったけど僕の年は君の少なくとも2倍はあるんだよ」

V Vが激しく睨む

V Vに睨まれたので話を戻す

「それ以前に俺はここを出ていいのか？」

「うん、君は僕のお気に入りで大切な友達だからね。そのくらいは構わないけど、約束がある。1つはギアスをあまり、いやできる限り使わないこと

2つ目は僕に活動報告をすること

3つ目は僕が呼んだら帰ってくること

4つ目はこの事を一切言わないこと。それが守れるなら行っていいよ。あと別人格の7人達はどうするの？」

「あいつらは俺の中に入れっぱなしでいいさ、話は出来るしな、しかし戸籍とかはどうするんだ？」

「そうだね、だれか適当なブリタニア人の大人に養子縁組をしてブリタニア人としてなら入学できるよね？」

「多分大丈夫だろ、けど俺は知らない人の養子になるのか？」
ゼブルは困ると言った顔をしている

それを見たVVは

「この教団内の研究員ならいいだろ？」

「まあ、俺のことを心良く受け入れてくれる人がいたらな」
悪い噂をゼブル自身が知っていたのだ

「何とかなるだろうね。どうやって学校に行くんだい？」

「寮とかがあつたらそこがいいな。何はともあれ、入るとしても半年後だし」

「今すぐじゃなくていいのかい？」

VVは不思議そうな顔した

「俺の年だとまだ中等部の3年、高等部になるならあと半年必要だからな。今から入ってもいかけど、俺がいないとやっぱり寂しいだろ」

VVは納得し

「なら仕方ないね」
と少し嬉しそうに言う

「あとナイトメアフレームってのここにあるか？あれの操縦の仕方を覚えたい」

VVは考え

「まあ、数機ならあると思うけど」

「もし才能があるならナイトオブブラウズってのになれるんだよね？」

「まあ、卓越した技術があるなら可能かもしれないね」
ゼブルの発言に呆れるように言った

ナイトオブブラウズと言うの帝国最強の12人の騎士のことだ。天才と言われる猛者達で、そう易々となれる様なものではない

「とにかく、半年後には分かれるんだ。今を楽しみなよ。あっ、お金は気にしなくていいよ。僕が責任を持って援助するから」
VVは笑って言う。やはり少し寂しそうだ

「何から何まですまないな。そうゆう事であと半年間は世話になるぜ相棒」

VVに握手を求める

驚いたVVだったが

「ふふ、仕方ないね。」

VVはゼブルの手を握った。その顔に寂しさは無かったように見えた

第三話 ゼブルのギアス 応用編（後書き）

VVのキャラがどんどん崩れていく気がします。
・・・どうしましょう。

次回、ゼブルがアッシュフォード学園に入学
まだ入学したての一年生ルルーシュ、リヴァルとゼブルの三人の話
を書きたいと思います。

第四話 ゼブルアッシュフォード学園に入学（前書き）

少しの間ルルーシュ達が1年生の話を出したいと思います。

第四話　ゼブルアッシュフォード学園に入学

ここは、アッシュフォード学園内にある体育館
そこで入学式が行われていた

（どこの世界も学園長の話は長いな。それにしてもこの学園広すぎるだろ。時間が余って散歩してたら道、ってより森に迷っちゃったし川もあつたな、あれの必要性を理解できないな）

欠伸を嚙殺しながらゼブルは思った

（小中高大一貫校だっけか？ブリタニアの貴族も多いからなのか、それでも広すぎるだろここは）

（vvは今頃はまだ寝てるのかな）

vvと別れて2日が過ぎた。何とか養子縁組の事を受けてくれた老夫婦がいたので、なんとか入学ができた

長い入学式が終り。自分のクラスに行く、クラスと言っても学年全員で1クラスなのだ

そこで担任の先生が来るまで自由時間とされていた

（ふあゝあ、眠い）

ゼブルは自席に座り本を読んでいた

すると

「何を読んでいるんだ？」

その声に驚き顔を上げた

その先には細い体躯に黒い髪、それに女性顔負けな魅せるような美顔、ゼブルの憧れの的ルルーシュ・ランペルージその人だ

「あ……ああ」

声が出なかつた。憧れの対象は二次元の者であり、三次元には存在しなかつたからだ。しかし目の前にいる彼はまぎれもなく三次元にしてリアル

「ん、どうしたんだ？」

心配そうにゼブルを見ている

「ああ、ごめんビックリしてて、声をかけられるとは思って無かつたからな」

ゼブルは心を落ち着かせて言う

「読んでる本は『猿でも分かるチェスのやり方』だ。そしてそれを読んでいる俺の名前はゼブル。ゼブル・オウサルトだ。よろしく」
握手を求めた。オウサルトは養子縁組をしてくれた老夫婦の名字だ

笑顔で握手に応じたルルーシュは

「ああよろしく。俺の名前はルルーシュ。ルルーシュ・ランペルージだ。席は君の隣だ。……チェスに興味あるのか？」
奇妙な目で聞く

「まあ、そうだな。今携帯チェスあるけどやる？」

「いいだろう、ただし初心者だからと手加減はしないぞ？」
笑いながら隣の席に着いた

「お手柔らかに」

対局して数分経ってルルーシュが聞く

「初心者じゃ無いのか？」

驚いたように言う

双方、コマを動かしながら話す。コマを動かす速度が速い、10秒と経たない内に次の手を打ち合う

笑いながら

「初めてだよ。コマの動かし方すらがまだ覚えてない」

「ふむ、それはすごい才能だな。ではコレでどうだ？」

ルルーシュのコマが前に進む

「微妙な所に置いたなルルーシュさん」

（本当に微妙ないちだな。攻めるために進むと取られ、守るために退くと陣形が崩れる）

「呼び捨てでいいんだぞ？俺もそうだし」

「俺がそう呼びたいだけだよ」

「なら構わないが」

「うわ、難しい所に置かれたな」
青い髪の少年が会話に声割り込んできた

「君は？」
ルルーシュが聞いた

「俺はリヴァル・カルデモンドだ。よろしく」

(ルルーシュさんの悪友だな後半は影が薄かったけど)
苦笑しながら

「よろしくリヴァル、俺はゼブル」

「俺はルルーシュ・ランペルージだ」

挨拶をすませると

「それより、この状況ヤバイじゃん。どうすんだ？」
ゼブルに話しかける

「さあ、どうしようかな」
実際どうしようか悩む所だ

「負けを認めるのも1つだぞ」
ルルーシュが言う

「やれるだけやるさ。それにしても」
一息置き

「ルルーシュさんは攻めるのが好きみたいだな、主要コマを失っても確実に勝てる方法を用いる。でも俺は攻めより守ることを選ぶ」
(俺も黒の騎士団に入ったらコマにされるのかな)

苦笑しながらコマを後退させる、後退させたことにより、陣形が崩れた

「なら」

崩れた陣形に向かってコマを前に進めるルルーシュ
必死で立て直す、ルルーシュのコマを押し返せず

「チエツクメイト」

詰まれた

「・・・負けました。強いなルルーシュさんは」
残念そうに言う

「何を言っている、初めてでこんなに強いやつは初めてだ」
困ったように返す

「ホントによかったよ、今の試合
なあ二人ともここだけの話賭けチエスしないか？俺のバイト先でちよつとな、二人の腕ならいけるって」

「ルルーシュさんはどうする？」

「面白そうだな、試しにやってみるか」

「よっしゃ決まり。ゼブルのほうはどうする？」

「まあ、試してみてからだな」

(金には困っていないけど少しでもVVの負担を減らさないとな)

そう思っているよ

「ちよつとそこの三人！」

ズカズカと迫つて来たのはオレンジ色のロングヘアに活発そうな顔の少女

「私はシャーリー・フェネット、話は聞いたわよ賭けチエスをするんですって？そんなことが許されると思ってるの？」

「許されているから賭けチエスなんてものが存在しているんだろ？」
ルルーシュが言う

「う、でもいけない事には変わらないよ」
反論し返すシャーリー

「賭けチエスの何がどう悪いんだ？」
平然と聞くルルーシュ

「えつと、それはお金を賭けることに決まってるじゃない」

「ではカジノはどうだ、お金を賭けている事には変わらない」

(ただのへ理屈だな)

ルルーシュ達の話の聞きながらそう思うゼブル

「それは、賭けでなく、ギャンブルで、その・・・」
言い返せないので言葉を濁す

(落ち着いて考えて反論しようと思えば幾らでも方法はあるのにな)

と、考えていると

「はい席について、ホームルームを始めるわよ」
先生が来たのでそこでその話は終わった

と思っていたが、しかし

「うー！」

急に寒気がしたのであたりを見回すルルーシュ
すると

目をギンギンにしてルルーシュのことを睨み続けているシャーリー
がいたのであった

「やり過ぎたねルルーシュさん。せいぜい殺されないように気を付
けないとね」

笑いながら言う

「ああ、まだ死にたく無いからな」

ホームルームが終わるまでルルーシュの寒気は治まらなかったそうだ

第四話 ゼブルアッシュフォード学園に入学（後書き）

そろそろ、新しいオリキャラを導入したいと思っています。

第五話　ゼブルと賭けチェスとナナリー（前書き）

書き方を変えてみました。見にくくなっているかもしれませんが、
容赦ください

第五話　ゼブルと賭けチェスとナナリー

ホームルームが終わり下校の準備をしていると

「なあ2人とも今から賭けチェスをやりに行かないか？
シャーリーのことを気にして小声で話し始める

「俺はいいけどルルーシユさんは？
ゼブルはルルーシユに聞く

「そうだな、別にいいが昼食をとってからのしらないか？
午前授業の為昼前に下校することになっている

「よし分かった、メールで場所を送つとくから昼食とつたら来いよ。
俺は先に行ってるから」
そう言い残し走っていった

「・・・でルルーシユさんはどこで飯を食つんだ？
リヴァルが行った方向を見ながら言う

「妹も今頃終わっているところだろうからいっしょに学食で食べよう
うと思ってる」

「へへ、じゃあ俺も一緒にいい？」

「別にいいがどうしてだ？」

「妹さんを見てみたいのとルルーシュさんと親睦を深めるためにね」

怪しそうに見ていたが

「・・・じゃあ中等部に迎えに行くんだが、ついて来るか？」

「もちろん」

中等部の教室

そこには車椅子の少女の周りに人だかりが出来ていた

車椅子の少女は長いウェーブのかかった栗色の髪で落ち着いた雰囲気が出ている

「ナナリー、迎えにきたよ」

車椅子の周りにいたクラスメイト達は挨拶を済ませ離れていく

「お兄様、お隣の方は？」

「ああ、コイツはゼブルって言うんだ俺の友達だ」

笑顔で話しかけるナナリー

「初めましてゼブルさん私はナナリーと言います。どうかお兄様のことをよろしく願います」

握手を求めてきたので

笑顔で握手に応じる

「俺はゼブル・オウサルト、よろしくねナナリーちゃん。ちょっと質問していいかな？」

「はい、何でしょう？」

「なぜ俺のことが分かったんだ？見たところ目は開けられないみたいだけど」

「足音でだいたいは分かるんです。知ってます？人によって足音って違うんですよ」

「へー耳がいいんだ。目以外にも見たところ足もだめなのかい？」
質問を続ける

「はい」

辛そうに答える

(目と足が使えない生活か・・・)

ゼブルはしゃがみ込みナナリーちゃんの手を握る。ナナリーは驚いたようだ

「ナナリーちゃん、俺に頼み事があつたら遠慮無く言ってくれよ？金銭以外なら何でもしてやるからさ」

「そんな、大丈夫ですよ？お兄様」

困ったように兄に助けを求めようとしている

「いや、ここは素直にお願いしよう。俺がずっと一緒にいる訳ではないし、咲世子さんだけに任せるのもどうかと思う、それにもしも

の時に頼れる人は多くいた方がいい」

ルルーシュからのまさかの了承に驚いたゼブルだが

「という訳でナナリーちゃんよろしくね」

「は、はいこちらこそお願いします」

「じゃあ飯を食べに行こうか、あっ車椅子は俺が押すね」
意気揚々に足を進めるゼブルであった

食堂は広がった

2、3百人位入るスペースだが、ここで食事を取る者は数十人しかない
ので席が大量に空いてる
適当に座る場所を決めて席につこうとしたが

「ふむ、この机は車椅子では高いから、さっそく俺の出番だな」
と意気込むゼブル

それにたいして

「え、待ってください、その・・・えっと」
困ったような声を出すナナリー

「あ、もしかして俺に体を触られたくないとか？・・・そうだよ
ねどうせ俺は・・・」

落ち込んでいるゼブルに

「いえ、そう言う訳でなくえっと、お兄様以外の男性の方にあまり
触られたことが無くて」

「それならさつき握手したじゃん。あ、大丈夫大丈夫。俺の場合は迅速、安全、快適がモットーだから……じゃあいくよ」

ゼブルが持ち上げ、ナナリーの身体が一瞬浮き上がる

「ひゃっ！」

椅子の上を滑るようにして着席

「はい終了。どこか痛かったりした」
心配そうに聞くゼブル

「いえ、大丈夫です。ただ驚いて胸がドキドキしています」
胸を押さえて言う

「それよりナナリーちゃん軽すぎじゃない？ちゃんと食べてるの？」

「いえ、私は小柄ですから」

「しかし軽いね、ナナリーちゃんを担いで学校を一周できそうだ。
今度やってみる？」

「え、遠慮させてもらいます」
ナナリーは困ったように言う

「椅子に座らして貰ったのか」
ルルーシュが来てナナリーに聞く

「はいお兄様、ゼブルさんすごいんですよ、私を持ち上げて、あっ
という間に私を座らせてくれたんです。感動しました」
興奮気味に言うナナリーに

「良かったなナナリー」

嬉しそうに言うルルーシュ

ナナリーが助けを求む相手はルルーシュとメイドの咲世子それに昔いた親友ぐらいしかいなかったのだ

昔いた親友は今どうしてるのかは知らないので実質2人だけ。ナナリーが頼れる人は多いほうがいい、ナナリーの持っているハンディ―キヤップは大きすぎるからだ

「はいお兄様」

笑顔で答えるナナリー

「で、ご飯はどうする？俺が食べさせてあげようか？」

ゼブルがナナリーに聞くと

「えっと、1人でも食べられますので大丈夫です。お気遣いありがとうございます」

「どづいたしまして。じゃあ食べようか」

ゼブルとルルーシュは昼食を食べ終え、ナナリーと別れてリヴァルの待つ場所に向かっていた

「なあルルーシュさん？」

立ち止まって質問をするゼブル

「なんだ？」

同じく立ち止まるルルーシュ

「ここだよね？リヴァルの言っていた賭けチェスをするところ」

「ああ、そうだが？」

「ここって高級なマンションにしか見えないんだけど？」

「住所はここになっている。まず間違いないだろ」

2人の目の前には高層マンションならぬ高層ホテルがある

再び歩き、2人はエレベーターに乗る

35階で止まり指定された部屋に入ると

「あれリヴァル？」

広い部屋の真ん中でリヴァルが老人とチェスをしている

2人に気づいたリヴァルは

「2人とも遅い過ぎだ！助けてくれ」

と泣きついてきた

「お、助っ人のご到着だな」

老人が微笑む

ゼブルがコマを見ると明かにリヴァルの不利だった

「へー、ピンチじゃん」

ゼブルが暢気に言うと

「分かってるなら何とかしてくれよ！」
リヴァルが本当に困って言う

少し見ていると

「・・・ルルーシュさんこのビショップを動かして
ゼブルがルルーシュに語りかける

「ああ、ポーンを守ってナイトで崩す」

「こっちのビショップの位置も変える？」

「いや、それだと動かされるから・・・」
2人が話し合っている

「なあ2人ともどうしたんだ？」
聞いてくるリヴァル

「リヴァル今から俺とゼブルの言う通りにコマを動かせ」

「左から崩す？」

「そうだな、ビショップをG4に動かしてくれ」
ゼブルの意見に頷くルルーシュ

「ああ」

ルルーシュの指示通りにリヴァルが動かす

「ふん、今更何ができる」
笑いながらコマを動かす

「次に・・・」

チエスが終わりホテルの入り口に戻った3人

「助かったよ2人共」

リヴァルがホツとしたように言う

「全部ルルーシユさんのおかげだよ」

「何を言っている、お前のアドバイスが無かったら危なかったぞ
ルルーシユが苦笑しながら言う

「それより夕飯食いに行かねーか？金も入ったし奢らせてくれ」
リヴァルが厚くなった財布を持ちながら言う

「俺は遠慮しておく、ナナリーが待っているからな」
ルルーシユが駅の前で止まり言う

「じゃ俺はご馳走になろうかな・・・じゃあルルーシユさんまた明日
日学校で」

「じゃあなルルーシユ、ナナリーって子にもよろしく」
ゼブルとリヴァルがルルーシユに向かって別れの挨拶をする

「ああ、また明日会おう」
「そういうルルーシユは駅に向かっていった」

ルルーシユ別れた後ゼブルとリヴァルの2人は町をブラブラしていた

「なあ、ナナリーって子誰だ？まさかルルーシユの彼女？」
リヴァルが聞く

「妹さんだよ・・・てか、なんで賭けチェスなんてしようと思ったんだ？」

不思議の思いリヴァルに聞く

「理由は無かったんだけど出来た。サイドカーでも買ってルルーシユを賭けチェスに連れ回す」

「それは面白そうだ。俺も免許は持つてるからスクーターでも買ってそれに付いて行く」

「スクーターなんかに乗って恥ずかしくないのか？」
リヴァルが驚いたように聞く

「別に中古で安いけりゃ構わないさ」

「で、どこで何食う？」

「腹的にはメン類かな」

ゼブルが答える

「ならもう少し先に美味しいラーメン屋があるぞ。イレブンがやっている店だけどいいか？」

「気まずそうに言う」

「俺はいいけどリヴァルは差別しないのか？イレブンの作ったラーメンだから食わない、とか」

「驚いたように聞く」

「普通ブリタニア人は差別意識が高いと聞いていたからだ」

「美味しいものに人種は関係無いだろ？それにラーメンは元々中華連邦の料理をイレブン風にアレンジしたものだぜイレブンが作った方がうまいだろ」

その言葉に納得したゼブルは

「確かにそうだな。よし行くか」

2人はラーメン店へ歩き出した

第六話　ゼブルと生徒会

ゼブルがアツシユフォード学園に入学して10日が経った。随分と慣れてきたが、そろそろ部活を決めねばならなかった

放課後

「さて、どうしようかな」

ルルーシユと同じ生徒会に入りたいと思っているが、制限人数が決まっているから今から入れるかどうか微妙なところだ

上半身を机の上に乗せ考えていると後ろから

「ゼブルちよつといいか？」

後ろを見ると

「何だい？ルルーシユさん」

ルルーシユがいた

「お前まだ部活決めていなかったよな？生徒会が人数不足なんだ、お前生徒会に入る気はないか？」

願ったり叶ったりである。自分の幸運に感謝せずにはいられない
「嬉しいね誘ってくれて、喜んで入っちゃいます」

ほっとした顔を

「そうか、リヴァルは何処にいる？」

と聞くルルーシュ

「外でバイクのお手入れ中だよ。その内磨き過ぎて装甲が薄くなっちゃいそうな勢いだ」

と答えるゼブル

「あいつもあいつだが、お前は何故あんなものを買ったんだ？」

ルルーシュが言っているものとは、ゼブルが買った中古で安い綺麗な緑色の小型スクーターのことだ

「元々欲しかったからさ。イレブンの人が経営しているバイク専門店でも中古のスクーターを頼んだら喜んで売ってくれたよ」

外見は普通の小型スクーターだが、性能はハイスペックである

小型スクーターなのに300ccという高馬力に加え、低騒音、最新式カーナビゲイション付き、最高時速370キロ、装甲が頑丈で特別な合金を使っている所以他の自動車と正面衝突してもスクーターは凹まず多少傷が付くだけなのである。

ゼブルがバイク専門店に付いた時、中でブリタニア人の子供達が好き勝手に店を壊しているところを止めに入り店の片付けを手伝ったところ、店主に気に入られ店主のお気に入りのお気に入りのハイスペックスクーターを超特別格安サービスで譲って貰ったのだ。その値段リヴァルが買ったサイドカーの約5分の1なのだが、実際はそのサイドカーの5倍はするものなのだ。お得すぎる

それが

「ゼブル専用特殊合金使用次世代型最新小型原動力採用式高馬力低騒音最新補助技術内臓型純日本製未来型高性能装甲着色翡翠色使用防錆加工済小型スクーター型バイク

その名も烈風山れつふうやま」

決めポーズとともにスクーターの名前を披露するが

冷めた目で見ているルルーシュが

「・・・古風なネーミングセンスだな」

そっつい歩き出しので追うゼブル

「性能はすごいんだぞ」

後を追いながら言う

「俺はバイクに興味は無いからな」

あっさり返す

「なら感心を持つとっ」

「考えておこう・・・いた、おいリヴァル」

外に出て見渡すと青いサイドカーを磨くリヴァルがいた

「なんだ？ルルーシュ」

顔を上げて聞く

「生徒会に空きがあるんだが入る気はないか？」

「生徒会ってめんどくさそうなんだよな」
体を伸ばして言う

すると

「ルルーシュ、生徒会に入ってくれる子見つけてくれた？」
後ろから金髪の女性がルルーシュに声をかける

「はい、ミレイ副会長」

ルルーシュが答える

「この人が副会長なのか？」

リヴァルがコソコソと聞く

「ああ、ミレイ・アッシュフォード副会長、この学園の創設者で理事長でもあるルーベン・アッシュフォードのお孫さんだ」

この学園の理事長の孫にして、ルルーシュとナナリーの秘密を知る数少ない人の1人

美人で姉御肌の女性である

「な、理事長の孫！」

リヴァルが驚きを隠せないように言う

笑顔でミレイは

「2-Aのミレイ・アッシュフォード生徒会副会長です。よろしくね」

自己紹介をする

するとリヴァルがコソコソと
「ルルーシユ生徒会の件だが俺も入るということで」
と言う

「まあ、いいだろう・・・副会長、この2人を誘いました。ゼブル
とリヴァルです」

「リヴァル・カルデモンドです」

「ゼブル・オウサルトです」

軽く自己紹介をし

「よかった人手が足りないところだったから助かったわ
嬉しそうに言うミレイ

「そんなに人数が少ないんですか？」
疑問に思ったりリヴァルが聞く

「3年生1人、2年生1人、1年生が君たち入れて6人よ」

「そうですね、俺等の役職って何ですか？」
ゼブルが聞く

「ルルーシユは会長補佐、ゼブル君には私の補佐をしてもらっては、
リヴァル君は書記をやってもらおうわ」

「えゝ書記ですか？」

リヴァルのが不満そうに言う

(ミレイ会、いや副会長の補佐をやりたかったんだろっな)
内心そう思いながら役職を交換しない自分もどうかと思うゼブルで

あつた

「あら嫌だった？」

困ったような顔をしたミレイに

「いえ、そういう訳じゃないんですが、それより仕事は何ですか？
うまく話をそらしたりヴァル

「そうよ、早速だけど仕事よ、部活の予算審査をしなくちゃいけないのよ。今すぐ生徒会のクラブハウスに来て」
早足で歩くミレイに付いて行く3人

生徒会クラブハウス

「ここが生徒会専用クラブハウスか、パーティーが出来そうな大きな
さだなこりゃ」
リヴァルが驚いたように言う

「元々舞踏会も出来るような設定で作られたところだからな」
ルルーシュが答える

「さあさあ急いで時間が無いの」

早口に言うミレイに

「そんなに時間無いんですか？」
ゼブルが聞く

「実は今日思い出してね、期日も今日までなの」
苦笑しながら言うミレイに

「何ですと!?!」

驚きの声を八モるゼブルとリヴァル

「だから急ぐぞ」

階段を上りながら言うルルーシュ

階段を上り手前の部屋に入るミレイ

「到着!」

「遅いですよ副会長! 会長なんて頑張りすぎて気絶しちゃったんですからね」

「うわぁ、無残」

そこに大男が唸りながら床に倒れている

「君はルルーシュさんとの相性微妙なシャーリーちゃんじゃないか」
ゼブルはシャーリーに気が付いて言う

「その言い方止めてくれない」

シャーリーが少し怒ったように言う

「ごめんごめん……最近は妙にルルーシュさんに親しげなシャーリーちゃん」

小声でシャーリーに言うゼブル

「な、何言ってるのよ」

顔を赤くしてシャーリーが言う

「ほほう、その話は興味深いわね」

野次馬ミレイが聞き耳を立てて言う

「副会長まで」

ゼブルを恨めしそうに睨むシャーリー

「最近ハルルーシユさんをルルと言う愛称で呼んでいるとか」

聞こえたのかルルーシユが

「別に愛称とか好きに呼んでくれて構わないぞ、お前だって『さん』呼びじゃなくてもいいんだぞ？」
と言う

「じゃあ、お兄様つてのはどう？」

ふざけ半分と言うと

「……」

すごい形相で睨んできた

「冗談です。すいませんでした」

あまりの迫力にミレイの後ろに隠れるゼブル
ミレイは苦笑しながらルルーシユを見る

「で、君は確か」

ルルーシユが聞く

「ニーナ・アインシユタインです」

濃い緑色の眼鏡をかけた少女が言う

「ああ、科学の天才少女じゃないか」

リヴァルは思い出したように言う

「確か科学のテストでルルーシユさんを上回る最高点だったんだろ？」

ゼブルが言う

「偶然です」

恥ずかしそうに答える

「たぶん俺の烈風山の性能を理解してくれるであろう」
ゼブルが自信満々に言う

「烈風山？」

ミレイが聞く

「俺の愛車の名前ですよ。ゼブル専用特殊合金使用次世代型最新小型原動力採用式高馬力低騒音最新補助技術内臓型純日本製未来型高性能装甲着色翡翠使用防錆加工済小型スクーター型バイクの名前で
す」

鼻息荒く語るゼブル

「うわ長ったらしい、よく覚えてるね」
シャーリーが驚く

「それは一度見てみたいですね」
ニーナが興味津々に言う

「そして君はガース・ミロット嬢だね」
リヴァルが揚々と言う

ガーベス・ミロツト、彼女は学園内でちょっとした有名な家が公爵家でその一人娘

紫がかつた瞳に、濃い青色の長髪をポニーテイルでまとめている。容姿端麗な美人でナイスバディーという魅力的な存在だが欠点があるそれは無口すぎるのだ

一日に一言喋るかどうかで、ミロツト家からあまり喋れないと学校側に説明があつたため無理やり喋らせるようなことはできないらしい。喋りたいことが合った場合はスケッチブックに書いて会話するやり方だ

リヴァルには頭を下げるだけ

「よろしく」

ゼブルが手を出したが

ガーベスが、？、何その手？というような顔をしたので

「挨拶ができないなら握手かな、と思って」

「!!!!!!」

驚いたようだがすぐに顔を赤くして

『男性の方に触られるのは慣れていなくてとスケッチブックに書いた』

「これから慣れればいいさ、それとも俺が相手じゃ嫌かい？」

困ったような顔をし、しばらくすると

『よろしくお願いします』

と書いたスケッチブックを見せて手を握ってきた

「はい、よろしく。俺はゼブル」

そついい握り返すとガーベスの顔が真っ赤になった

【嬉しい】

急に頭に声が響いた

「え？」

不審に思ったゼブルがガーベスを見たが

「じゃあ俺達とも握手しようぜ」

とリヴアルがいいガーベスと生徒会メンバーが握手をしている

声が一回しか聞こえなかったので

(気のせいか)

と思うゼブルであった

「副会長こんな話していいんですか？」
ルルーシュがミレイに訪ねた

「やばい、急がないと、シャーリー会長を起こして、ルルーシュとゼブルとリヴアルとガーベスはこの書類片付けて、私とニーナと会長とシャーリーはこっちの書類」

「」「」「はい」「」「」
『はい』

「会長、起きて下さいよ」

シャーリーは起きない会長に悪戦苦闘していた

深夜11時30分

「眠い」

リヴァルが言うと

「同じく」

「私も限界」

ゼブルとシャーリーが続く

「ガアアアツツ！」

急に大きな声で言う叫ぶミレイにみんなは驚いた

「きゃ！驚かせないで下さいよ」

シャーリーが胸を押さえて落ち着こうとしている

「はい、あなた達は頑張りたくなりまゝす」

ミレイのガッツの魔法である

「かかりませんよそんなインチキ魔法」

ルルーシュが書類に目を通しながら答える

「みなさん、お疲れ様です」

ドアが開き車椅子に乗った少女ナナリーとそれを押すメイドの咲世

子の姿があつた

「ナナリー、寝てなくちゃだめじゃないか」
ルルーシュが心配そうにナナリーを見る

「あれ、なんでナナリーちゃんがここにいるんだ？」
不思議に思ったゼブルが聞く

「目と足が不自由なナナリーには寮生活が厳しくてな、俺と一緒にこのクラブハウスに住まわせてもらっているんだ」
ルルーシュが答える

「初めまして、兄がお世話になっていきます。妹のナナリー・ランペルージです」

「私はアツシユフォード家に使え、ナナリー様のお世話係をしております。篠崎咲世子です」
ナナリーと咲世子が挨拶をすると

「よろしく、俺リヴァル」

「私はシャーリー。よろしくねナナちゃん」

「私はニーナです」

『ガーベス』

スケッチブックに書き込むガーベスに

「ガーベスちゃん、目が不自由なナナリーちゃんにそれは意味がないよ。無口な女性が1人いてねその子はガーベスちゃんって言うんだよ」

ガーベスに突っ込み+ナナリーに説明をするゼブル

「よろしくお願ひします。会長さんとミレイさんあとゼブルさんは

もう面識がありますからね」

ナナリーの微笑みに

「なんかミレイ副会長のガッツの魔法よりナナリーちゃんの方が癒し効果あるな」

とゼブル

「ナナリー様、そろそろ戻らないとお体が冷えてしまいます」

咲世子の言葉でナナリーが頷き

「そうですね、それではみなさんお先に失礼しますね」

ナナリー達が部屋を出て行った

「さあみんな、ナナリーのおかげで元気でたでしょ。最後の追い上げよ」

「『おおー』」

『おおー』

生徒会メンバーは一致団結したが

結局間に合わず

後日、馬術部が怒りでクラブハウスに突入して大混乱になったとか
ならないとか

第六話　ゼブルと生徒会（後書き）

メインオリキャラの導入で本編内容（いつ本編に入るか分かりませんが）が大きく変わるような気がします。

第七話　ゼブルとガーベスの真実

憧れの生徒会に入ったゼブルだが

「忙しくて死ぬ」

ゼブルは誰もいない生徒会の部屋で呟いた

イベント好きなミレイ副会長が3日連続イベントを起こし今ゼブルがその後始末に追われているのである

当の本人はゼブルに後始末を全部任せて現在家族旅行中

他の生徒会メンバーも自分の仕事で手一杯なのでゼブルを助けることが出来ず、1人で2人分の仕事をしているゼブルだが仕事が一向に減らないので心身ともに破裂寸前なのである

「大丈夫ですか？」

目の前のスケッチブックに書かれていた文字を理解し

「ガーベスちゃんか…仕事は終わったの？」
ゼブルが力なく聞くと

「今さっき終わったところですよ」
ササッと書き込みゼブルに見せる

「そう、お疲れ様。今日は早く寝るといい、今までの疲れが残っているだろ？」

たしかにガーベスの顔には少し元気がないような顔になっていて目には隈がある

『ゼブルさんはまだ終わってませんよね？私、手伝います』

「いいよ。女の子なんだから無理のし過ぎは肌に良くないぞ」

『大丈夫ですから手伝わせてください』

なかなか頑固だなと思いつつながら

「俺からしたら助かるんだけど……本当に疲れたら言ってくれな」と頼むゼブル

『はい』

ガーベスのおかげで数時間で半分以上終わっていた。

しかし

「ガーベスちゃんそろそろ休みな、後は俺1人でやるから」
ガーベスを心配したゼブルが言う

『大丈夫です』

しかし字が明かに歪んでいる

「俺のために休んでくれないかな？ガーベスちゃんが心配で仕事に

集中できないんだ。ガーベスちゃんが休んでくれた方が楽だ」

『私のことを心配してくれるんですか？』
驚いたように書く

「当たり前だろ？もつと体を大事にしなよ、美人さんなんだから」

【嬉しい】

またあの声が聞こえた

【誰だ？】

ゼブルが投げかけると

【！！】

ガーベスがピクンっと反応した

【ガーベスちゃんか？】

ガーベスの反応に気付き聞くゼブル

【ゼブルさんですか？なんでコレができるんですか？】

驚いた様に

ゼブルに聞くガーベス

【君の声が聞こえてな、言おうとしたことを念じてみたらできた】

【ゼブルさんは何者ですか、この世界にコレを使える人はいない筈です】

ゼブルは気づいていないがこの会話は念話といい

ゼブルは簡単そうにやっているは念話というのは普通の人間には出来る物ではない

【この世界？君は違う世界から来たのかい？】
驚いたように聞くゼブル

【頭がおかしいと思いますよね？】
苦笑しながら話すガーベス

「別にそうとは思わないけどね」
ゼブルは念話を止めしゃべった

【本当のことを言うてください。貴方から見て、私の頭はおかしいですね？】
自虐的に言うガーベス

「君は自虐過ぎるよ、君の話を否定する気は無い。君が嘘を言っていない事は解る」
実際ゼブルも異世界から来たので否定する気は一切ない

【何も知らないからです！私の力を知ったら私のことを化け物と思うはずですよ！】
顔を強張らせながら言う

ゼブルの頭に大音量で響く
「なら試してごらんよ、ガーベスちゃんの力とやらを」
挑発気味に言う

右肩に視線を向け

【……………ゼブルさん、貴方の右肩に傷がありますね？】

「どうして分かった？」
驚いた様に言うゼブル

【私は魔法使いなんです】

衝撃の告白に

「火の玉とかを投げるのかい？」
面白そうに聞くゼブル

【私は攻撃系魔法が使いません。使えるのは回復系だけです。攻撃系魔法が一切使えない代わりに回復系魔法の質が他の魔法使いより格段に高いんです。見ただけで身体的特徴、怪我、病気を理解することもできます】

ガーベスがゼブルの体に触れた
瞬間ガーベスの手が光った

「お、身体が楽になった」

【これで、私が化け物だと解ってくれましたか？】
俯きながら言う

「はっはっは、君が化け物なら俺は大魔王だ」

おかしそくに笑うゼブルに

【何を言っているんですか？この世界で私以上の化け物なんていません！】

目に涙を浮かべながら言うガーベスに

「君の秘密を知ったんだから、俺の秘密を教えないとね」

そう言い深呼吸を始めるゼブル

「スタイルチェンジ・ハイド」

その台詞とともに目に赤い鳥が浮かび羽ばたいた

「はじめましておれっちははいどよろしくね」

笑顔で語るハイドだが聞きにくい

【……何をしたのですか？】

変わりに変わったゼブルに驚いた

「いまからおれっちののうりょくをみてもらおうとおもってねさん
びょうかんめをつむってみて」

三秒経ち目を開けるとそこには

【どこにいるんですか？】

誰もいない部屋を見回しても何処にもハイドはいない

「きみのめのまえにいるよ」

笑いながら言う

【……いないですよ？】

確かに声は聞こえるが姿が見えない

「じゃあしようこに……たっち」

ガーベスの頭に何かが触れるた

それをガーベスが手で触れる

それは腕だ

【触れるのに見えない】

「これがおれっちののうりよくあいてにんしきされないことができるんだ」

目の前に急にハイドの姿が現れ驚き手を離れた

「すたいるちえんじ・ぜぶる」

掛け声とともに再び赤い鳥が羽ばたいた

「ふー、解つてくれたか？」

疲れたように言うゼブル

【あまり何がなんだかよく分かりませんでした】
よく解らない展開に戸惑うガーベス

「俺は多重人格者で人格1人1人が別々の能力を1つずつ持っているんだよ」

【そうなんですか】

「君は化け物なんかじゃないよ、人を救う事のできる力だ、人の本質を捻じ曲げる俺の方が化け物だ」

ゼブルが苦笑しながら言うと

「うっうっ」

体を震わせ始めるガーベス

「ちょ、どうしたの？急に泣き出して？俺なんか酷い事言った？今決め台詞っぽく言ってみただけ」

急に泣き出したガーベスに困惑したゼブルが聞く

【この世界で私の存在を、力を肯定してくれる人がいたのが嬉しいはずなのに涙が止まらないんです】

笑顔のまま泣いているガーベスに

「君は貴族の娘だろ？君のお父さんやお母さんも否定しているのかい？」

【いえ、こんな私の事を可愛がってくれています】

「ならどうして？」

反した答えに困るゼブル

【私が生まれた育った世界からこっちの世界に来たのは7歳の時でした。私は森で魔法の修行をしていると急に渦みたいのが現れて私の事を吸い込んだんです】

(俺もそうなのか？寝てから解らないけど)

【私が目を覚ますと家の中にいて、その家の人達は見ず知らずの私に良くしてくれて、私を自分達の娘のように可愛がってくれました。それから私がこの世界に来て約半年が経った時に、私を育ててくれた人達の友人が事故で目の前で死んでしまいました。しかし私がある魔法を使ってその人を生き返らせました。すると私の事を娘のように育ててくれた人たちは「宇宙人だ」や「化け物だ、人間じゃない」と言い私を村から追放しました。行く当ても無い私は町をさ迷いました。疲れと空腹で倒れた私を今のお父様が拾ってください私を養女として向かい入れてくださったのです】

結構悲しい過去に

「なんで俺に魔法や君の過去を話したんだ？俺が君の噂を流すかもしれないぞ？」

【私がゼブルさんを好きになってしまったからです。私の真実を知って貰うにたつきたらです】
顔を赤くしながら言う

「俺みたいなのやつに惚れたのか？止めとけ君ならもつと素晴らしい男性に会えるさ」

笑いながら言うゼブル

【いえ、私はゼブルさんだからこそ好きになれたんです。ありえない私の話を否定せず、私の秘密に嫌な反応をするどころか自分の方が化け物だと言い、自分自身の能力を私に見せてくれた貴方だから】
「実際に魔法をかけてもらったからね。それより俺は君を愛することは出来るが幸せにすることは多分できないぞ？」
少し悲しそうに言うゼブル

【何故です？】

「死ぬ可能性が高いから」
さらりとゼブルは言う

【！！】

その反応に驚いたガーベス

「俺はこれから起こることを知っている。もうじきこの世界は1人のテロリストによって壊され新しく創られる、俺はそのテロリスト

に力を貸さなくちゃいけない」
もうじき現れる黒のテロリストに力を貸す。この世界に来た時から
ずっと決めていたことだ

【どうして？自分の命の危険を犯して】

「俺の運命だからかな？そんな戦場に君を連れては行けないし、俺
と付き合えば俺が死んだ時に殺した人を恨むだろ？そんなこんなで
君に戦場へ入って欲しくは無いんだ」

ルルーシュを助けてることがこの世界に来た理由だと思っ
ているからだ

【私も手伝いますからお願いします。私を置いて行かないで下さい。
私の力があれば助ける事もできます】

「でも戦場に出るって事は殺したり、虐殺したり、拷問を受けたり、
今の親御さんに迷惑をかけることになったりするんだよ？それでも
君は俺に付いて来るのかい？」

これは脅しに近い

が

【はい】

迷いの無い瞳だった

実際この世界でガース・ミロツトなんて存在していなかった。ゼ
ブルと同じイレギュラーなのだろう

「解った、そんな覚悟をした君を幸せにしないと死んでも死に切れ
そうにないな」

一途な思いを否定する気にはなれなかったゼブルは仕方なく受け入

れる

実際ガーベスがいれば傷ついたゼブルを助ける事が出来るし
何より死者を救うことができるらしい
これはゼブルに多大なメリットになる

【あの…私たちは正式にお付き合いしていると言っことよろしい
ですか？】
顔を赤くしながら言う

「ああ、構わないよ」
（本当に俺のことが好きなのか、嬉しいけどここまで惚れられたら
騙してるような気がするな。騙していないけど）

【人前で手を繋いだり、頭を撫でたり、………き、キスをしてくれ
たりしてくれますか？】
顔がどんどん赤くなるガーベス

「人前ではどうかと思うよ、2人っきりの時とかなら別にいいよ」
笑いながら拒否するゼブル

【嬉しいです】
ガーベスは少し残念そうだが笑顔で言う

「さて早く仕事を終わらせるか」
気を取り直したゼブルが言う

【はい】
元気よく返事をするガーベス

「あっそうだ、ガーベスちゃんの口から好きですって言うてみて」
意地悪そうな顔で言うゼブル

【恥かしくて言えません】
それに気付いたガーベス

「まあ、無理にとは言わないから安心して」
ふざけ半分だったので書類に目を向けるゼブルだが

「す…好き です」
ガーベスの顔を見ると今まで以上に真っ赤な顔を俯けて恥かしそう
にしている

「はっはっは、可愛いな」
心からそう思ったゼブルであった

（未来を変え、多くを救うならまずは身近の人を救わないとな、こ
の子は俺が絶対に守らないと）
そう心に誓った騎士ゼブルは疲れて机に寝ているお姫様の頭を撫で
ている

このお姫様を幸せにすることを決意し騎士は書類に再び戦いを挑む

第七話　ゼブルとガーベスの真実（後書き）

次にオリキャラ2人のラブラブな話しを書きたいと思っています

第八話　ゼブルと青い妖精ハッピー（前書き）

PVが3万を超えました！！

今まで読んで下さいますありがとうございます！

これからも頑張っていきたいと思しますので御応援お願いします。

第八話　ゼブルと青い妖精ハッピー

そこは漆黒の世界

周りは上下左右黒に包まれた世界

「まったく、なんだ？ここは、寝ている間にまた他の世界に飛ばされたか？」

あたりを見回すゼブル

すると

【初めまして、少年】
活発そうな声がした

声の方向を見ると

「綺麗なお姉さんですね。俺に何の御用で？」

綺麗というか、全身水色でよくいる手の平サイズの妖精みたいだ

(よくいる水の精霊みたいだな)

【褒めてくれてありがと。じゃあ簡単に説明するわよ？実は君も良く知るこの世界に他の世界の人達が来てしまっているのよ。また他の世界でも同じような事が起きているのよね】

(俺もガーベスちゃんもそれに入るのかな？)

「なぜそのような事が？」

【最近世界の渦が暴走してね、多分自然に暴走したんだろうけど。復旧はできるんだけど少し時間がかかるのよ。そこで君に頼みがあるの】

「俺は何をすればいいですか？」

【君に力をあげようかと思うの、その力を使って出来るだけ他の世界に来た人を元の世界に帰してあげて。そして他の世界を回って世界中を未来を変えていいからハッピーエンドにして。理由は私はハッピーエンド至上主義だから。同じ理由で君にもハッピーエンドになって貰いたいから強制はしないし、途中で良い世界に留まりここで寿命を終えたいと思うならばそれでも構わない……どうする？】

「乗りましよう、俺もハッピーエンド至上主義者ですから、それに他の世界にも行ってみたいし」

【交渉成立！私は小鳥姿の分身を貴方の側にいるから悪しからず。力の使い方は君の机の上にあるから見てみて】

「どうして貴方は俺を選んだんですか？」

【君は神に愛されるといふ才能を持っているのよ。ちなみに私も女神で今の姿は仮初なのよ】

「前の世界じゃそこまで愛されていないみたいですけど」

【貴方のいた世界では神は人や物、自然現象に干渉できないのよ。だから今迄は卓越したものは無かったけれど、この世界に来て貴方は運が凄く良くなったり、運動神経が大幅に上がったたりしてるわ。

後で貴方の能力を教えてあげ「なんで後でなんですか？」長くて言うのが大変だからよ。創神（作者）もキャラ設定ページで乗せた方が楽だからよ】

「あと貴方の名前はなんと言つんですか？」
気になつていた事を聞く

【名前ね〜 とつくの昔に忘れちゃったわ】

考えているようだが思い出せないと

「不便ですね俺が決めていいですか？」

【それは良いわね】
上機嫌に答える

「じゃあハッピーで」

たった数秒で決まった名前に

【……随分簡単に簡単に簡単過ぎる名前ね。まあ、私に合う名前だからいいか】

ちよつと不満げに言うが、仕方ない、と言う顔になり了承を得た

「じゃあ改めてよろしくハッピーちゃん俺はゼブル」
笑顔で挨拶するゼブル

【よろしくゼブル。それでなんでちゃん呼びなの？】
思ったように聞くハッピー

すると

「俺は女性にはちゃん呼びで統一してるんだ。憧れの人（男女問わ

ず）にはさん呼びだよ
「さも普通のように言う」

【軽い男だと思われるわよ】
ため息をつきながら言う

「はっはっは、それはもてる人に言う事で俺みたいにもてない人は
そういう事は思われないのさ」
笑いながら言う

【（鈍感なのかしら）】
ハッピーから見たゼブルはカッコいい部類だと思っている
優しそうな顔立ちにどちらかというと細めの体

【（普通にもてる部類でしょ）】
「じゃあ俺への用事はここまでですか？」
話す事が無くなってきたのでゼブルが聞く

【そうね話はお終い。さあお別れよ。と言ってもまた分身の鳥に合
えるんだけどね。そろそろ朝になってきてるでしょうし】
ゼブルに微笑みながら言う

「はい、じゃあお願いします」
ゼブルは激しい睡魔に襲われ目を閉じた

「う」

朝日が目に付き頭を上げる

「ピーピー」

いつの間にか設置している鳥箱の中に青色の鳥がいる

「お早うハッピー」

(さてガーベスちゃんに元の世界に戻れることを報告しなきゃ)
目を擦りながら嬉しそうに朝の挨拶をするゼブル

「ピー」

ハッピーと呼ばれた鳥は飛び、ゼブルの肩に乗って嬉しそうに鳴いた

第八話　ゼブルと青い妖精ハッピー（後書き）

新しい力が入ってしまつと、ゼブルの他のギアスが空気になりそうな気がしています。

まあ、入れるんですけど…

今回の投稿は1週間後ぐらいにさせていただきます。

第九話 ゼブルと長い一日 (1) (前書き)

一日を出来るだけ長く書いていきます

第九話　ゼブルと長い一日（1）

今朝はもの凄い視線の数に戸惑っているゼブル

寮から学園に行く最中に多分あった殆ど全ての人がゼブルを見ている
いや実際にはゼブルの肩に乗っている青い鳥を見ているのだろう

何故かゼブルの肩から動こうとしない蒼鳥ハッピーに困るゼブル
すると

ゼブルの服を後ろから引っ張られる感覚があったので後ろを見ると

『おはようございます』

スケッチブックにそう書かれていた
書いたのは言うまでもなくガーベスだ

「おはよう、ガーベスちゃん」

『肩に乗っている、その子は何ですか？』
ガーベスが不思議そうに聞く

「ああ、ハッピーっていうんだ」

【何でちゃん呼びじゃないの？】
テレバシー
念話でゼブルに話しかけるハッピー

【ちゃん呼びは、人型限定なんだ】
ゼブルも念話で答える

【それって差別？】

【いや、区別】

【…どう違うのよ？】

【差別は正当な理由もなく分けることで、区別は正当な理由があつて分けること】

ゼブルに冷めた視線を送りながら

【てかなんでこの子スケッチブックに書いてんの？話した方が楽しいやない？】

ハッピーが聞く

【話すのが苦手な子なんだよ】

【へー】

納得したらしい

『私に懐いてくれるでしょうか？』

ガーベスが聞く

ちなみに今のやり取りは数秒程度である

「鳥好きなの？」

ゼブルが聞く

『小さくて可愛い動物は好きです』
笑いながら書く

「(さすが女の子だな)」
と思いなから

【だつてさ】
ハッピーに送る

【可愛らしい女の子は好きよ】
ハッピーは嬉しそうに言う

【そっちの趣味なのか?】

【どういふ趣味かしら?それよりさつきから口調が随分と砕けてない?】

さつきから気にはしていたらしい

【敬語の方がいいのかい?】
ゼブルが聞く

【堅苦しいの嫌いだからそのまんまでお願い】
ダルそうに答えガーベスの肩に飛び移る

ガーベスが
『ゼブル様、私に懐いてくれたんですかね?』
嬉しそうに言う

「:(ナンデサマヨビニナツテイルンデスカ?)」
固まるゼブル

【あんだそいふ趣味があつたの?】
仕返しとばかりにゼブルに言う

【どういう趣味だ？】

【分かってる癖に】

「なんで様呼びなの？」

困ったように言うゼブル

『その、ご主人様が旦那様が良かったのですか？』
顔を少し赤くさせ、もじもじと手を弄る

【ヤッパ】少し黙ってて…はい】

ハッピーが言おうとするのをゼブルが止める

「いやだからなんでだい？」

再び問うと

『将来の旦那様にさん呼びは失礼かと思ひまして、「あなた」はまだ早いですよね』
キヤッと両手で顔を押しさえ嬉しそうに言う

「……………」

またまた固まるゼブル

【あんだ達そういう仲だったの？】
驚いた様に聞くハッピー

話が随分と飛躍し過ぎている

（まあ別に構わないんだけどさ俺に彼女は今までいなかったし、ガ

「ベスちゃんみたいな可愛い子が彼女になってくれるのは嬉しいよ
しかし話をここまで盛られると学園内での俺の居場所が減ってく様
な気がするんだよね。ガーベスちゃん可愛いから人気だし」

さつきからいくつもの殺気の切っ先がゼブルの方を向いている
いくつかは既に刺さっている

「あまり誤解される物言い（物書き）は良くないと思うよ」
少し大きめに言う

『誤解何も事実ですから』
更に多くの殺気が体を突き刺す感覚が襲う

「……………」
身体が動かない

【ふふ、可愛らしい子ね。一途で飛躍し過ぎで、自分勝手に理解す
る、これが天然って奴？】
ハッピーが楽しそうに言う

【俺は天然の意味はよく知らないからなんとも言えないな】
口はあまり動かさせそうに無いが、テレパシーなら普通通りにできる

【しかし凄く惚れられてんじゃん、浮気したら「貴方を殺して私も
死ぬ」的な事になりそうね、これがヤンデレって奴？】

【多分使い方はあつてると思う】

【ツンデレキャラは出ないかしら？】

【もしかしたらいるかもな】

【にしても本当にデレデレね】
ニヤニヤしながら言う

「（鳥にもあんな顔ができるんだな）」
感心するゼブル

【それが問題なんだよな。この世界が終わったら旅に出たいんだけど、1人で行くとガーブスちゃんが悲しむだろうし、一緒に行つて危険な目に遭わせたくないし】

【それなら大丈夫だから気にしない、気にしない】
なんだそんなことがみたいな感じで言う

【どういうことだ？】
不思議そうに答えるゼブル

【いつか教えるから今はガマンしなさい】
もったいぶる様に言うハッピー

【まあいいか】

『そう、言えばこの子は一体どうしたんですか？』
ガーブスの疑問だ

「結構前に拾ったんだけど、どうも懐かれてしまつてね。ナナリーちゃんにどうかかなと思ってさ」
このでまかせも神の加護のおかげだろうか

『なんでナナリーさんなんですか？』
私も欲しいのと言う感じの顔で見てくる

「寂しい時にでもいたら紛れるかなって」
これからナナリーは1人になる時間が多くなる、その時に心の支えになる友達が欲しいはずだ

【いまさらだけどどうかな？美系清楚のロリっ子だよ
ハッピーに聞く】

【乳の大きさは？】
真剣に聞いてくる

「（何故バストサイズを？）」

【えっと】
小さいと言ったら傷つくよなナナリーちゃん

【正直に】
念を押されてしまった

【発展途上国レベル】
この例えが一番いいだろう

【もっと詳しく】
よく分からなかったみたいだ

【まな板レベル】

「（ごめんナナリーちゃん。そう言うのが好きな人は多い筈だから）」

【その話乗った！】
盛大に喜ぶハッピー

【いやー、もしその子の胸がお山さんだったら拒否ってたな】

【なんで？】

【ロリ清楚で巨乳って邪道じゃん】
当然でしょ？的な風言う

【そうなのか？】
あまり外見の好みが無いゼブルには「（体重が明らかにおかしい人とか人間じゃない奴は嫌だぞ）」分からない話だ

【無口でナイスバディーのこの子も新しいジャンルとしては中々なものよ】
興味深々に観察をする

【守備範囲広いな、どんな女性が好みなんだ？】
ガーベスちゃんやナナリーちゃんは間逆に近い

【可愛くて性格がいい子ならどんな子でも、あと外見は多少ギャップがあつた方が好きね、ナナリーちゃんとやらは「お兄ちゃん」とかいっついの？】
へへへ、と親父臭い笑い声が聞こえる

【いや、「お兄様」だ】

強調して言っ

すると

【うおおお、萌える萌えるよ。ナナたん萌え！】
悶える様な声が響く

【てか女神様ってそんなに知識無いのか？この世の全てを知ってる
と思っただのに】
異世界のことを知るのに、この世界のメインキャラの事を知らない
なんて

【神や女神、妖精って言たって人間達が思っているほど無敵でも全
知全能でも無いのよ？下手したら動物にも殺される可能性だってあ
るんだから】

【へー】

驚いたゼブル、神は無敵で最強だと思っただからだ

手の上で座るハッピーを逆の手で撫でるガーベス
(なんか、和むな)
「ガーベスちゃんもハッピーのこと気に入った？」
ハッピーは気持ち良さそうに撫でられ、ガーベスは嬉しそうに撫で
ている

『いいです、私にはゼブル様がいいますから』
ガーベスがゼブルの腕に抱きついた
すると

ゼブルに対する周囲の視線の温度が20度程下がった気がした
周囲の反応が今まで以上に辛いものだった

【おやおや、朝っぱらからお熱い】
冷やかすハッピー

「あのさ、ココでそれをやるのは止めてくれ」
そろそろ致死量に到達するほど周囲の視線は痛いものだ

『嫌でしたか』

上目遣いで見てくるガーベス

さらに威力の増す視線攻撃

「いや人前では止めて、マイナスのエネルギーで構成された槍とか
剣とかが俺を刺してくる」

残念そうな顔をするガーベス

『じゃあ生徒会室で一杯しましょう』

笑顔で先に行くガーベス

(イッタイナニイッパイスルノデスカ?)
再びフリーズ

ゼブルの肩に戻ってきたハッピーは

【もちろんあんな事やこんな事、○○○○や○○○○、拳句の果
てには○○○○○○○○なんかを】

子供達には言えない様な事をドンドン言うハッピー

【止める！本当に心配になってきたじゃないか！】
恐怖で顔が引きつる

【男なんだから何とかしなさい。じゃ、私は適当に見張ってるから何かあつたら呼んでね】
楽しそうに言い空を飛ぶハッピー

1人残されたゼブル
しかし彼の長い一日はまだ始まったばかりである

第九話　ゼブルと長い一日（1）（後書き）

何故か下のネタに進んでいる気がして怖いです。

第十話 ゼブルと長い一日（2）

数多の視線攻撃に耐え抜き教室に着くゼブル

「オッス、ゼブル」

リヴアルが声をかけてきた横にはルルーシュもいる

「おはよう2人とも」

力無く答えるゼブル

「なあ、ゼブルちょっといいか？」

リヴアルが聞いてくる

「なんだい？」

「朝お前の肩に青い鳥が止まっていたって噂があるんだが、本当か？」

（もう広まっているんだ、早いなこの学校の伝達スピード）
驚きながら困る

「ああ、ハッピーって言うんだ。ナナリーちゃんにどうかなと思っ
てね」

ルルーシュにそう言う

【ハッピーこっち来て】
ハッピーを呼ぶ

「ナナリーに？どうしてだ」
不思議がるルルーシュ

「ルルーシュさんだってナナリーちゃんはずっと一緒とは限らないでしょ？寝る時とか、出かけている時とかさ、そんな時にハッピーがいれば寂しさを紛わすことも出来るし、何かあった時には俺に知らせしてくれるから安心だよ。まあナナリーちゃんが気に入ればの話だけだね」

ルルーシュは考えて

「そうか、ありがとう後でナナリーに相談しに行くよ」
と言ってくれた

「俺も一緒に行っていていい？」

「別に構わないだろう、ナナリーもお前の事を気に入っているみたいだしな」

（ルルーシュさんも俺を信用してくれてんのかな？）
「それは嬉しいね。おっと、来たみたい」

窓から入って来たハッピーに周囲はざわめく

【どうした？】

ゼブルの肩に止まり聞く

【この人がナナリーちゃんのお兄様のルルーシュさんだ】
ルルーシュの方を向き言う

【へーこの子がイケメンね、もてるでしょ？】
ルルーシュの肩へ飛び移る

【モテモテだよ】

「うお！」
驚くルルーシュ

「大丈夫だよルルーシュさん。危なくないから」
ルルーシュを落ち着かせる

「ほう、随分人に懐くなこいつ」
肩で動くハッピーに驚くルルーシュ

「でしょ」

【イケメンも好きよ】
ルルーシュの肩の上で座る(?)ハッピー

【守備範囲本当に広いな】

【ゼブルも好きよ】

【……ありがとう】

素直に礼を言うゼブル

「いいな私にも触らせて」
後ろからシャーリーが来た

「あれシャーリーちゃんいたの？」

「失礼ね、さっきからいました」
顔を膨らませ怒ってますよアピール

実際ゼブルより早く教室にいた

すると

「可愛いわね」

「私にも触らして」

周囲の女子達が詰め寄ってくる

少しの間女子達に触られ続けるハッピー

撫でられ続けたせいか羽がボサボサになっている

【疲れた。そろそろあの子の所で休むわ】
と言いガーベスの所へ飛んでいく

「あれ？ガーベスの所に行っちゃった」
撫でていたシャーリーが言う

「ハッピーはガーベスちゃんに凄く懐いてるからね」
見るとハッピーはガーベスの左手の上で丸くなっている
そのハッピーを優しく撫でるガーベス

（ハッピーはあれが好きなのか？）
気持ち良さそうにしているハッピーをみて思う

「そっだ！お前とガーベスって付き合ってるって本当か？」
離れた席にいるガーベスがビクッと反応したようだ
（盗み聞きしてるのか？）

見ると他の男女共に聞き耳を立てている

【（ここの子達、面白いわね）】
みんなの反応を楽しんでいるハッピー

「そうか、3人ともちょっとこっち来て」
ルルーシュ、リヴァル、シャーリーを呼ぶ

小声で

「ガーベスちゃんが何故か俺なんか惚れてさ
俺は嫌じゃ無いんだけど、ガーベスちゃん男子に凄い人気でしょ？
周囲の俺に対する視線が痛くって困ってるんだよ。だからこの事は
あまり広めないで欲しいんだ」

そう言う

「あー、なんか納得」
リヴァルは頷きながら言う

「なんだそうなんだ！なら私にもチャンスあるんだ！」
大声で言うシャーリー

周囲からは安堵の表情が見えるが

「……………」
「ガーベスからは不のエネルギーが放出されてる様だ

「何故そんな大きな声で言う？」

ゼブルが聞くと

シャーリーが声を下げて

「これで噂は減るでしょ？」

感激のあまりシャーリーが天使に見えたゼブル

「ありがとうシャーリーちゃん、でもガーベスにちゃんと言わなくちゃ駄目だよ？下手したら君と俺が殺される」

実際殺気で撫でられる度にハッピーが震えている

【ゼブル！助けて】

ハッピーからの救援願

を

(幻聴だろう)

聞こえなかったふりをするゼブル

「うん、言っておかないと本当に殺されそうで怖いし」

ガーベスの異変に気付いたシャーリーが言う

「それからさ、イチャつく時は、2人っきりの時か生徒会の時だけにするようにしたいんだよ。協力してくれないか？」

「2人っきりは分かるけど、なんで生徒会なんだ？」

ルルーシュが聞く

「時間が少なすぎるって、ガーベスちゃんが文句言うだろうからさ」
困ったように言うゼブル

「な、お前は俺達に見せ付ける気か？」
リヴアルが怒ったように言う

「頼む。じゃないと俺が人に視殺されるのも時間の問題だし、もしかするとガースちゃんやんのファンの人にリンチ喰らう可能性もあるそれにガースちゃん以外に凄く積極的なんだ。いくら積極的と言ってもみんなの前だから自重するだろうから大丈夫だろうし、俺も安全で助かる」
頭を下げながら言う

「大変なんだなゼブルも」
リヴアルが同情してくれた

「ニーナには言わなくていいの？」
シャーリーが聞く

「彼女はあまり興味無さそうだからな、大丈夫だろう」
(同性愛者だからな。いやあれはユーフェミア限定かな？なんかB
L本書いてそうだし)

「イチャつくのは2人っきりの時と生徒会だけでお願いって事とあまり関係を広めないでってガースちゃんに言ってきてくれないか？シャーリーちゃん」
シャーリーに頼むゼブル

「なんで私が？殺されちゃうよ」
困ったように言うシャーリー

実際シャーリーに向けられたガーベスの不のエネルギーを彼女は感じ取っている

「早めに言った方がいいだろ？あんな不のエネルギー当てられ続けたらシャーリーちゃんも先に沈むよ？それにあんな噂（まあ事実だけど）が広まっているのにガーベスちゃんの所に俺が行くとわざわざ証明してるようなもんだろ？ルルーシュさんとリヴァルが行けばまた新しい噂が広まりそうだし、女の子同士でなら安心して話せるだろ？」

「イエスマイロード。もしもの時は私の遺骨は捨ててくださいね」
敬礼をするシャーリー

（遺骨って日本の文化じゃ無かったっけ？）
と思ったが

「ふむ、頼んだぞシャーリー副隊長、何かあった時には私自ら出撃しよう」
乗るゼブル

「では、いざ戦場へ」
早足で歩くシャーリー

話の途中で一瞬不のエネルギーが大きくなった時にはビビッたゼブルだが
不のエネルギーが少しずつ治まるのを感じ安堵した

「なんとかOKくれたよ」
疲れ気味のシャーリー

まじかであんな高密な不のエネルギーを浴びたのだから仕方ない

ガーベス変わらずハッピーを撫でている

しかしハッピーがまだ少し震えている

「これで第一条件はクリアされたしかし……」
ルルーシュが言う

「まだ何かあんのか？」
リヴァルが聞く

「そう、最後の砦ミレイ副会長
あの人には絶対言つなよ。あの人的事だから最悪の場合イベントを
起こす可能性もある。だから何か聞かれたら只の噂とだけ言つんだ
頼むぞ」

「ちなみにもしそうになったらどんなイベントを起こすと思う？」
リヴァルが聞く

「多分俺を捕まえさせて、その報酬にガーベスちゃんを好きにして
いいとかじゃないか？」

ミレイの考える事を分析しそう言うゼブル

「うわ、なんかありえそうで怖い」
シャーリーが引き気味に言う

「だから協力を頼む」

「了解」

見事なハモリを披露してくれた

4人の楽しそうな雰囲気を見ていたガーベス

(ふふふ、ガマンガマン。生徒会室でゼブル様に一杯：ふふふ
楽しみに待っていますよゼブル様)
怪しい笑みを浮かべるガーベス

その顔を見つめ

【(可愛そうなゼブル、私もこの子には逆らえそうに無いな)】
ゼブルに同情するハッピーであった

ゼブルの一日はまだ始まったばかりである

第十話 ゼブルと長い一日 (2) (後書き)

ゼブルが作ったハイド以外の人格をどう出すか困っています。

無理して出さなくてもいいよな

と思っ今日この頃です。

第十一話 ゼブルと長い一日(3) (前書き)

第十一話　ゼブルと長い一日（3）

「さて、腹減ったな。昼飯どうする？」

欠伸を噛み殺しながらゼブルがルルーシュに聞く

「ゼブル少しいいか？」

ルルーシュが立ち上がりゼブルに言う

「何？」

体を伸ばしながら聞く

「良ければいいんだが、ナナリーにあの鳥のこと説明しに行かないか？」

気まずそうに言うルルーシュ

「今から？別にいいけど」

少し驚きながら言う

「すまない」

「おい、2人とも飯行こうぜ」
リヴァルが早足で来た

「ちよつと待つてて、すぐ戻るから」
ゼブルが席から立ちリヴァルに言う

「2人して何処行くんだ？」
リヴァルが止まって聞く

「ちよつと、すぐ戻るつて」
ゼブルがルルーシュと共に教室を出ようとする

「（またナナリーの所かな、いつも遅くなるんだよな）分かった、早くしろよ」

リヴァルが困ったように言う

「ああ」

2人は教室から出る

「そついえば何で今なの？」
廊下を歩きながらゼブルが聞く

「早いに越したことはないしな。それに速いうちにナナリーも会つたほうが慣れるだろ？」

「気に入ってくれるかな？」
ゼブルは心配そうに言う

そんなゼブルに

「ナナリーは鳥が好きだしな、お前が飼っている鳥なら気に入るだろう」

励ますように言うルルーシュ

「凄いよハッピーは動物の中で世界一の頭脳を持ち主だからね」

少し驚くルルーシュは

「ほう、どのくらいいいんだ？」

と聞く

「人の言う事を聞き、覚え、理解し、考え、判断し、実行してくれるよ」

「本当か！？そんな高知能な鳥なんて聞いたこと無いぞ」

これには驚きを隠せないルルーシュ

「多分、世界広しと言えど人間の次に頭のいい唯一無二の1羽だろうね。パソコンもできるし話も出来るし、この事は俺とルルーシュさんだけの秘密だよ？」

こんな凄い知能を持った鳥が世界に知られたら後々面倒だからさ」

実際は人間よりも遥かに高い次元の存在（女神だし）なのだがこれは流石に秘密のしておくゼブルであった

「いいのか？ナナリーにそんな凄い鳥を預けて」

驚きを隠せずにルルーシュが言う

「大丈夫、ナナリーちゃんならしつかり世話をしてくれるでしょ？
それに何か困ったことがあったら俺に知らせる事もできるし」

「そうか、本当にお前には助けて貰ってばかりだな」
心からありがたそう言うルルーシュ

実際彼ら兄妹が頼れる人は少なかったに違いない

ルルーシュはまだ自分を強く持てたが、妹のナナリーには頼れる存
在が自分以外にいて欲しかった

そう言う意味で本当に心を許せたのは小さい頃の親友だけだろう

しかしその親友は今も生きているのかすら分かっていない

その事を知るゼブルは

「そんな事無いって、さあそろそろ着くよ」

そう言いルルーシュの背中を優しく叩く

「ああ、そうだな」

少し強かったのか体を曲げるルルーシュ
しかしその顔には笑みがあった

【来てくれ、ハッピー】

ナナリーのクラスに近づいたのでゼブルはハッピーを呼ぶ

教室に入りナナリーを見つけ近づくゼブルとルルーシュ

「ナナリー 食事中にすまない、ちょっと用事があったな」
声をかけるルルーシュ

「どうも」

ゼブルもそれに続く

「お兄様にゼブルさん、私に何かご用ですか？」
驚かずに聞くナナリー

(やっぱり気付いてたのか)

「ナナリーちゃんは鳥好き？」

「えっ、好きですよ。可愛くてふわふわしてて、でも突然どうしたんですか？」

ゼブルの突然の質問に少し戸惑うナナリー

【お待たせ】

外の本で止まっているハッピーが止まっている

それを見つけ

「なら…ちょっと手を拝借」
ナナリーの手を取って物を包む様な形にする

「あの、何ですか？」
急に手を取られて、少し嬉しそうな困ったような顔をする

その問いに答えず

【この子の手に止まって】
ハッピーに言う

【はいよ】
ハッピーが窓から入り
ナナリーの手で止まる

「きゃ、え？これは小鳥ですか？」
驚き手を離しそうになるがゼブルがナナリーの手を下から掴んでい
る為動かせない
落ち着きを取り戻し、触り始め、そして気付く

「正解、この子の名前はハッピー」
ゼブルはナナリーから手を離し答える

【ゼブルこの子がナナたん？】
ハッピーがゼブルに言う

【可愛いでしょ？】
ハッピーを見ながら言う

【いいわねこの子、結構好みよ】

「ナナリーちゃんにこの子の世話をお願いしたいけどいいかな？ ルーシユさんは良いって言うてくれたんだけど」

「嬉しいですけど、私こんな状態ですからお世話できるかどうかハッピーの頭を撫でながら言う

「大丈夫ハッピーの世話は殆ど要らないから、凄く頭が良い子なんだよ。呼べば来るし、だいたい事は言えば済むし」

「でも」

「それにハッピーはナナリーちゃんの護衛でもあるんだ、ルルーシユさんもずっとナナリーちゃんと一緒にはいられないし、ナナリーちゃんは重い過ぎるハンデを持っているから何かと大変だ。それにもしも君に何かあったらハッピーが俺かルルーシユさんに助けを呼ぶ事になっている…そしてナナリーちゃんも1人でいる時も寂しくないだろ？」

「ゼブルさんそこまで私の為に…」
実際ナナリーは独りの時が多いその時はいつも我慢していたが、やはり寂しいかった筈だ

そこを少なからず察したゼブルの考えである

「ナナリーが決めるんだぞ」
ゼブルの後ろからルルーシュが言う

「お兄様。この子は私が責任をもってお世話します」
兄に言われ、自信を付けたナナリー

「はっはっは、ちゃんとハッピーを可愛がってあげてな」

【じゃあ頼むよ、何かあったらすぐに知らせて】
ハッピーに言う

【任せなさい、そっちこそ何かあったら報告しなさいよ？】

【了解、あまりナナリーちゃんに手を掛けさせるなよ】

【はいはい】

「はい、ありがとうございますぞゼブルさん。よろしくねハッピーちゃん」

ゼブルに礼を言いハッピーに挨拶をするナナリー

「用事は済んだしそろそろ戻らないとリヴァルに文句言われるぞ」
ルルーシュが言う

「じゃあ行くか。またねナナリーちゃん」
ナナリーの頭を撫でて歩く

「はい行っちゃい。お兄様、ゼブルさん」
手を振るナナリー

に

【萌え！お兄様で萌え！はにかむ様な笑顔でお兄様は萌え！】
悶えるハッピーの声

ゼブルは笑いながら教室を出た

「お待たせリヴァル」

教室に着きゼブルがリヴァルに声をかける

「遅いぞ2人とも、腹が減りすぎて死んじゃまうぞ？」
腹を押さえながらリヴァルが言う

「俺も腹が空いて来たな」
ルルーシュも言う

「早く飯食いに行こうぜ、租界の何処行く？やっぱフードロード？」
ゼブルが提案する

フードロードとは租界に新しく出来たその名の通り飲食店だけの通路である

和中ブリ（和食中華ブリタニア料理のこと）は勿論他の国の民族料理も出す所がある

「そうだな、そこに着いてから決めないか？あそこは店が多いし」
ルルーシュがゼブルの提案を聞き言う

「俺の一押しはやっぱり『EMILYA』だね。若い夫婦で営んでい
る小さい店だけど料理は上手いし
旦那さんは顔は無愛想だけどいい人だし、奥さんは凜としてて美人
で可愛いし。でも旦那さん髪が全部白髪だぜ、やっぱり苦労してん
のかね」

「面白そうな店だな。そこに行ってみないか」
好奇心に駆り立てらるゼブル

「仕方が無いな、そこにするか」
ルルーシュからも了承があり

「じゃあ行きますか」
リヴァルが意気揚々に言う

「ちよつとストップ！」
後ろから女性の声が聞こえる

「あっ、ミレイ副会長じゃないですか。一体何用で？」

旅行に行っていたはずの生徒会副会長のミレイだ

「てか何時帰ってきたんですか？」

昨日は学校に来ていなかった筈である

「昨日の昼ぐらいに帰ってきたの。それより今日の朝、ゼブルの肩にガーベスが乗ってたって噂が流れてるんだけど本当？」

ミレイの発言に

「……」

「……」

「……」

固まり見合う3人

（（（一体どうしたらそんな噂が立つのだろうか？）（（（
そして3人とも同じ考えに辿り着きミレイを見る

3人の低い温度の視線に

「ちよつと聞いている？」

困ったような顔になるミレイ

「本気で思っているんですか？只の噂に決まっているじゃないですか。何の理由で担ぐんですか？」

呆れたように言うゼブル

実際本気で信じていたらそれはそれで困る

「いや、一応確認の為に聞いたんだ。イベントの使えないかゝな。と（嘘だったんだ）」
笑いながら言うミレイ

「俺はそこまで恥晒しじゃありません」

「それもそうね。あとそれで思いついた新しいイベントの企画が出来たからお昼に少しやって欲しい事があるのよ、やってくれない？」
そう言いルルーシュに書類を渡す

「今から俺ら外で昼飯を食べるつもりなんですけど」
ゼブルが言う

「女子のメンバーに頼んだらどうですか？弁当みたいだし」
ルルーシュも意見する

「本当をお願い！この企画は女の子を対象にしてるから、内容は秘密にしておきたいの」
頭の上で手を合わせ頭を下げながら言うミレイ

「知ってます？人生の内で食事の回数は決まってるんですよ」
ゼブルが言う

「お礼はちゃんとするから」
さらに下げるミレイ

「そういえば旅行のお土産まだ貰っていませんけど？」

リヴァルが思い出したように言う

「う、「まったく、どうせ忘」「あつ買ってあるのよ？渡すのを忘れてただけ。それじゃあ、今日夕飯奢ってあげるし、その時にお土産も渡す」

ルルーシュが言うのを止め、夕飯で釣ろうとするミレイ

「お、マジっすか！ならやります」
釣られたリヴァル

「仕方ないか（近いうちに会いに行けばいいか）
ゼブルも折れたように言う

「じゃあ、昼食はパンでも買いに行くか」
ルルーシュもため息を吐くが頷く

「じゃ後頼んだわよ！」
そう言い走って行ったミレイ

「しかしこの企画は…」
資料に目を通してしているルルーシュが言う

「どうかしたのか？」
リヴァルが聞く

「『気になるあの子をゲットチュー大作戦』だとき、全く次から次に

アイディアがよく出るな」
呆れながら言うルルーシュ

「……その内容って男性が女性を、それとも女性が男性を？」
ゼブルが聞く

「前者だ」
ルルーシュが答える

「で内容はどうなってるんだ？」
今度はリヴァルがルルーシュに聞く

「決められた道を男性が気になる（好きな）女性をを肩に担いで進み生徒会に着いたらその2人はその日一日中カップルとなる。道にはもちろん生徒会の作った妨害もあるし、守ると言う口実で女性を奪取する事も有り。ちなみに女性が女性にするのも有りだ
で俺らは妨害やルートを考えるだとか」

「中々面白そうだな。でもこの程度なら女子達でも出来るんじゃないか？」
リヴァルが言う

「（あんな噂でこれ程無駄なイベントを作るとは中々やるな、さすがミレイ副会長）まあ実際に女子が対象なんだしいんじゃない？」

尊敬？をしながらゼブルが言う

「まあ、了承した事からには俺達でやらないとな」

「しかしこれをつまく使えば俺とガーベスちゃんは皆に認められるな。安心安心」

（話的内容的にはばれてはいないみたいだ、あの人は感が鋭いからワザとふざけていった可能性も捨て切れなかったが大丈夫みたいだな）

「一日だけだろ？」

「そのまま仲良くなって付き合い始めました。ってのはどうかかな？」
リヴァルに言うゼブル

「いつその事、副会長に話したらどうだ？」
またリヴァルが聞く

「そうだね、今日はどうせ生徒会が有るんだし。その時のガーベスちゃんの動き次第だな。積極的なら話すし、消極的ならそのままでもいいしね」

「で考える事なんだが」
ルルーシュが話し始める

（朝の一杯しまししょうが解らないからな、臨機応変に行くか）
ゼブルは考えたがやはり『一杯しまししょうね』の意味が解らなかつた。聞こうとしたがハッピーのせいで怖くて聞けず解らないままで終わる

ゼブルの一日はまだまだ続く

第十一話　ゼブルと長い一日(3) (後書き)

……気付いてくれましたか？

その話は本編開始後に組み入れたいと思います

階段状にしてみたのですが、逆に見難かったですね。
すみませんでした

この長い一日はあと数話書きたいと思っています

第十二話 ゼブルと長い一日(4) (前書き)

長い一日編最後の話です

第十二話　ゼブルと長い一日（4）

夕刻

生徒会での話し合いが終わり寮にて

自室で休んでいるゼブル

（結局何も無かったな）

ガーベスの意味深なセリフに悩んでいたゼブルだが。何も無かったことにホツとしたのか、残念なのかよく分からない顔をしている

（そんな事より一番問題はガーベスちゃんにいつ話すかなんだよな）
元の世界に帰れると聞いたたらどう反応するか。多分喜んでくれるだろう

そこでの彼女は『普通』なのだから
ゼブルはガーベスに普通の生活、恋、人生を送って欲しいと思っている

しかしその事にゼブルは奇妙な不安を覚え始めている

(言わなくちゃいけないのに何故か言えないんだよな)

ガーベスが元に戻るのには悲しい筈ではないむしろ喜んで送るべきだ

なのにどうしても言えない

ガーベスがいなくなる事をあの笑顔が見れなくなる事を考えると何故か胸が気持ち悪くなる

(バットエンドを見た後みたいないな感覚だな。どうしたんだ？いつもの俺らしくない)
頭を掻きながら思う

はたから見れば恋と呼ばれる現象なのだが

他人の恋事情には人並みだが自分の事になるとどうしようもなく鈍感になるので

この感情に気付かないゼブルであった

ピーピー！ピーピー！

携帯が鳴る

(ガーベスちゃんから、一体なんだ？)

「『今すぐ生徒会室に来い、早くしないとお前の女がどうなっても知らないぞ』……へ？」

メールには写真が添付されており
そこにはには縄で縛られたガーベスの姿があった。

「……事と次第によっちゃ、コンクリ固めて海に投げるか」
走って生徒会クラブハウスに向かうゼブル
ゼブル自身は気付いていないがゼブルの顔がもの凄い形相になって
いた

生徒会クラブハウス

「おい来たぞ！俺になんのようだ！？」
ゼブルが大声で言う

「動くな」

真っ黒なローブに身を包み
声を変えているらしく男か女か分からない

「ガーベスちゃんはどうした」

シユー

「女はちよつと用が終わるまで別の部屋に置かせてもらった」
謎の人物は笑いながら奥の部屋に指をさす

（ギアスを使えば一発なんだが他に味方がいるかも知れないから無
闇に使えない）

「俺に何のようだ？何故彼女を巻き込む？」
辺りに注意を払いながら言う

シュー

「仕返しだよ」

その言葉に

「仕返し？俺が一体お前に何をした？」

身に覚えが無い、殆どルルーシューやリヴァルとつるんでいたし、他の人に迷惑は掛けていない筈だし

シュー

「まず目を閉じる」

(シューシューうるさいな)

と考えながら言われた通りにするゼブル

シュー

「動くなよ」

男は念を押し遠回りし近づいて来る

(スタイルチェンジ・ダイクン)

目を瞑っているのでギアスの紋章は見られる心配は無い

ゼブルの2人目の別人格ダイクンが

「どりゃ！」

近づいてきた謎の人物の腕を掴み後ろに捻じ曲げ背後を取る

「いたた！」

謎の人物が声を上げる

「いくら目が見えない状況でも気配がある相手なら私には見えてい
るも同然なのでがね……他に5人隠れていますね。厄介ですね、
まあ場所は分かっていますから無駄ですがね（スタイルチェンジ・
ゼブル）ふ、形勢逆転だな」
ゼブルの人格に戻る

「ふふふ」

笑い始める謎の人物
すると

「やはり1人じゃ無かったか」
近くから5人出てきた

「……」

ゼブルが身構えている
すると

急に生徒会クラブハウスの電気が一斉につく

「なっ」

急な事に驚き

謎の人物から手を離してしまった
「しまった！」

5人が一斉に手に持っていた物をゼブルに向かって引く
パン！パン！

「ハッピーバースデー、ゼブル！」
目が慣れて前を見ると
生徒会メンバーがいた

「な、一体どう言う事だこれは？」
よく現状が理解できてないゼブル

「ゴメンゼブル。ドッキリだったのよ」
笑いながらシャーリーが言う

「お前マジで怒ってるからビックリしたぞ」
リヴアルも笑いながら言う

「冗談が過ぎるな。俺は本当にガーベスちゃんが心配だったんだからな？」
やっと現状を理解し言う

『ごめんなさい、でも其処まで私の事を思っていて下さったのが凄く嬉しいです！』

勢い良く腕に抱きつくガーベスに
「ちよつとガーベスちゃん」

ゼブルが焦りながら言う

目の前には

「ふふ、ラブラブすぎて妬げちゃうわね。しかも隠してたみたいだけど私の情報網舐めないで貰えるかしら？2人の関係はとつくの昔からしってたのよ」

ローブのフードを捲るとミレイの顔が出てきた

「副会長だったんですね、全然分かりませんでしたよ」

声はガスを使っていたみたいだ。

シューという音はガスを出す音らしい

「全く腕の関節がズキズキ痛むわよ」

肩を回しながら言う

「本当は背骨を折ることまで考えていたんですけどね、てか今日でしたっけ？俺の誕生日」

ゼブルの誕生日は（あれ、いつだったけ？）…忘れているみたいだが今日では無いのは事実だ

「ええ個人情報欄にちゃんと載ってたわよ」

サラツと言っているがこの学園の個人情報の中には親の職業や住所や電話携帯番号は勿論、身長体重3サイズ、成績に至るまであまり

知られたくない秘密が多いのだ
それを見ているという事はこの学園の生徒のプライバシーを無視出
来るということだ

(vvが適当に決めてくれたんだな、近い内に教団に戻ってお礼し
なきゃな)

笑いながら小さい親友を思い出す

「副会長が生徒会終わった後に俺とルルーシュを呼んで、お前の誕
生パーティーをやるって事を企画してたのを聞いて急いでプレゼン
ト買って来たぜ」
リヴァルは包み紙に包まれた大き目の箱を持ってきた

「俺は知っていたんだが副会長に口止めされていてな。これは俺と
ナナリーの分だ」
ルルーシュ達のは手の平サイズの大きさである

「すみません。私はハッピーちゃんを貸して頂いてるのに何も渡せ
なくて」
奥からナナリーが料理を持って出てきた

「無理しなくてもいいよ、ナナリーちゃんがいるだけで満足だよ」
「そんな」

ナナリーは頬を少し赤し
ガーベスとルルーシュは少し意味深な目をしている

「女子達には既に言っておいたの、お昼の企画書の時には此処で準備をしたのよ。プレゼントは愛情たっぷりの料理よ」
ミレイが言う

ズラリと並べられた料理の数々

(この人数で全部食えるかな)
と思うほどの量である

「そっか、みんなありがとう」
ゼブルは誕生日と言う記念日を忘れるほど、自分とは無関係なものだと思っていたからだ

「考えたのはガーベスなんだよ」
シャーリーがガーベスの背中を押しながら言う

「昨日ガーベスが私にゼブルの誕生日を聞いてきて調べたら明日つまり今日ね、だったのが分かって急いで準備してたのよ。今日だって8割がたガーベスが仕込んだのよ」
ミレイが言うとガーベスはバツが悪そうに後ろに下がる

「ガーベスちゃんありがとう」

ゼブルが笑いながらガーベスに抱きつく

『ゼブル様ちよつと強すぎです』

強すぎたのか本当に苦しそつのか字が震えている書いている

「ああゴメン嬉しくてね、親が忙しくて誕生日なんてものは無いよ
うなものだったから」

ガーベスを離し言う

ゼブルの実の両親は海外相手の仕事をしていて、小さい頃はそうでも
なかったが大きくなるにつれ両親は忙しくなり、しまいには世界
中を巡り1年中帰ってこないなんて事もあった
それ故ゼブルは誕生日を意識しないようになり最後には忘れてしま
ったので

その事を察したミレイは

「そうなんだ：ならば今日は派手な誕生パーティーにするわよ！」
クラッカーをゼブルに向け撃った

ここは生徒会クラブハウスの2階のベランダ

【ガーベスちゃん今から話すことをよく聞いて欲しい】
ゼブルがガーベスに念話で話す

【なんですか？】
2人つきりなのに念話を使ったゼブルに驚くガーベスだが真剣な顔
をしているゼブルを見る

2人は今生徒会クラブハウスにいる
ゼブルの誕生パーティーは終わり
他のみんなは片付けの所この2人は主役と一番頑張ったからと言っ
理由で外されている

ゼブルは

【君は元の世界に戻ることが出来るけどどうする？】
今まで言えなかった事を言う

覚悟が出来た

言えなかったのは自分がガーベスから離れたく無いだけだった
だがガーベスには幸せになって欲しいと思う
その為に別れが必要なら悲しいけど受け入れるしかない

【本当ですか!?!】

驚きながら聞く

【言つて無かつたけど俺も異世界から来たんだよ約半年前にね、そして最近ある女神に頼まれて他の異世界から来てしまひ、帰りたがつているけど帰れない人を帰すのが俺の仕事になつたんだ】

【……昔の私だつたら帰りたひと思つてしよう。ですが今帰つても私の居場所は無いでしょうし、なにより私はこの世界には沢山の大切な人がいます。そしてゼブル様がいるこの世界が私は大好きです！ですから元の世界に帰る気は無いです】
清々しい笑みで言うガーベス

その言葉にゼブルは我慢出来ずガーベスを引き寄せ、口付けする

【ゼツゼブル様？】

少し時間が経ちガーベスの唇を離すと
ガーベスが少し惚けていた

ガーベスの肩を掴み目を見て

【：ガーベスちゃんこの世界で俺のすべき事が全部終わつたら、俺と結婚してくれないか？】
顔を真っ赤にしてプロポーズするをゼブル

【けっけっけ結婚ですか！？本当にわっ私とゼブル様が？】

顔を凄く赤くし顔を手で押さえ言う

【勿論嫌なら断ってもいいけど】
残念そうに言うゼブル

【そんな事ないです！嬉しいです、本当に凄く嬉しいです】
とうとう泣き出したしたガーベス

【ほらほら涙拭いて】
ハンカチを差し出すゼブル

【駄目です。止まりません】
次から次に出てきます。幸せ過ぎて死にそうです】
ゼブルの胸に顔を埋め泣くガーベス

【俺がのやる事が終わるまで君を絶対守り抜くよ】
何があっても必ず】
それを優しく包み頭を撫でながら言う

【それ以上言うのは止めて下さい】
嬉しすぎて本当に死んでしまいます】
頭を撫でる度にピクピク反応するガーベス

【テツテテー！ゼブルはガーベスを幸せにした】
報酬として『治女神の首飾り』を入手した】

何処から来たのかハッピーがいた

ハッピーから貰った力の一つでゼブルは異世界のから来た者を1人救う毎にその人に関係した何かしらの物や力が貰えるのだ

ハッピーの首には首飾りをかけている

色は白の中に青いサファイヤが埋め込まれている

【……】

それを取り首にかける

ちなみにガーベスはハッピーに気付いて無い

【ハッピー、お前に言うことがある】
ゼブルが言う

【大体分かるから大丈夫、その子を幸せにするから旅は出来ないでしょ？】

飛びながら言うハッピー

【ああだか「大丈夫、ゼブルは旅をしたい、この気持ちは自体は変わらないんでしょ？」…ああ】
ハッピーはゼブルの言葉を遮り言う

【ならいいよ。全てが終わったら話すよ】

【……ガーベスちゃんに危害を加えるなよ？】
ゼブルが言う

【愚問ね。私はハッピーエンド主義者だし、その子を傷つける気は無いわよ】
ハッピーは何処かに飛んでいく

【…分かった】
ゼブルは後ろ姿を見ながら言う

【落ち着いた？】
ゼブルがガーベスの言う

【……はい】
恥ずかしそうに言う

【そろそろ入ろうか】
少し肌寒くなり始めて来た
女の子をこんな長く外に出してはいけないと思いつ

【あの…】
ガーベスがゼブルの服を掴んで言う

「ん？」

後ろを向くと

今度はガーベスから口付けしてきた

【誓いのキスです。破ったら容赦しませんよ】
ウィンクをしながら言い室内に入る

「なるほどこれは俺に対するギアスカ」
笑いながら戻ろうとするゼブルに夜風が舞う

時を戻し

ゼブルたちが外で話を始めている頃
外室内で2人を見守る人々有り
その数6名

「なんかゼブルが真剣な顔をしてるぞ」
リヴァルが言う

「何でしょうかね？」
ナナリーも不思議そうに言う

「あつガーベスがなんか驚いてる」シ

「あら、今度は下を向いたね」ミ

「別れようって言われたのか？」リ

「ゼブルがそんな事言うとは思えないがな」ル

「お、今度は笑顔になった。」ミ

「コッココえ！」「」「」

ミレイ、リヴァル、シャーリー、ルルーシュ、ニーナの5人が驚く

「ゼブル良くやった！」

ミレイが大声で言う

「ちょ声デカいつスよ」

リヴァルはミレイに注意する

「如何したんですか皆さん？」

目の見えないナナリーは付いて行けず聞く

「ナナちゃんにはまだ早いね、これは」
シャーリーが鼻息荒く言う

「あいつこんなに大胆不敵な奴だったか」
ルルーシュは驚いた様に言う

「うわー、ガーベス嬉しそうな顔してるわね」三

「本当だ、目なんか蕩けちゃってる」
ニーナが興味津々に見る

「ファンの奴等に知られたら殺されんなゼブルの奴」り

「誰かさんもゼブルみたいな度胸があれば…」
シャーリーはルルーシュの方を見ながら言う

「あら、もう終わり？ガーベスも少し残念そうな顔してるわね」三

「今度は肩を掴んでる」二

「ガーベスが今度は顔が凄く赤くなってるので、てか副部長重いです」
リヴァルが上にいるミレイに言う

「男ならこの位我慢しなさい。お、今度は顔を手で押さえて首を振
つてる」三

「なんなんだ」ル

「あ、泣いた。やっぱり振られたのかしら」三

「でも顔は凄く喜んでるみたいですよ」シ

「しかも撫でられる度にピクピクしてないか？」リ

「本当だ」二

「あれ？なんでハッピーがあそこにいるんだ？」

ルルーシュはさっきまでいた筈のナナリーの手を見る

「え、今まで私の手の上にいた筈なのに」
ナナリーは驚く

「ハッピーの首に何か付いてない？」シ

「首飾りじゃない？」二

「本当だ」三

「お、ゼブルが首飾りを取ったぞ」リ

「誰のだろうな」ル

「ハッピーちゃんがゼブルさんの誕生日プレゼントじゃないですか？
頭いい子ですし」ナ

「その可能性もあるな」ル

「あ、またハッピーが何処かに行ったぞ」リ

「ガーベスは落ち着いてきたみたいね」ミ

「ゼブルがこっち来るぞ」ル

「ガーベスに止められた？」シ

「うお！今度はガーベスから行ったか」リ

「やるわね2人とも」ミ

「本当に大胆だな」シ

「あ、ガーベスが来た！皆散れ」リ

この後少し気まずい空気になるのだが
ナナリーのKY発言とガーベスの混乱ぶりによりゼブルがガーベス

にプロポーズをした事が
ガベスの口から漏れ、質問攻めになるのだが
しかしこれはまた別のお話

ゼブルの長い1日

これにて終了

第十二話　ゼブルと長い一日(4) (後書き)

次回から本編を始めたいと思っています

第十三話 本編1 ゼブルと魔神 が 生まれた日 (前書き)

PVが7万を突破しました！

これからは本編と組み合わせていきたいと思っています

誤字脱字は報告をお願いします

第十三話 本編1 ゼブルと魔神 が 生まれた 日

あるホテルの一室

初老の男と中年の男がチェスをしている

中年の男は偉そうな態度で爪を研いでいる。

服装を見る限り貴族であろう

一方初老の男はウェーターのような服装でありあまり余裕の無い表情だ

初老の男が黒コマ、中年の男が白コマを使っている

盤上を見る限り黒が圧倒的に不利である

ピッピ ピッピ

持ち時間が無くなった事を知らせる音

「持ち時間が切れました。此処からは一手二十秒以内でお願いします」

後ろにいた黒服の男が言う

「だそつだよ」

中年の男が爪を磨きながら言う

「あ、」

初老の男がどうしていいか分からず悩む

すると

ガチャ

後ろのドアが開いた

「代理人のご到着かな」

中年の男が言う

「いや助かったよ。はっはっはは
学校の方は良いのか？」

後ろから来る3人

「何だ学生か？」

中年の男が言う

「ふん、何だ貴族か」

一番前にいる青年が言う

「若者はいいな時間がたつぷりある後悔する時間が。名は？」

「ルルーシュ・ランペルージ」

「おいおい、いくらなんでもこりゃ勝てないって。なー？
ルルーシュの後ろにいたヘルメットを被った青年が言う

「ルルーシュさんならいけるんじゃない？」
ゼブルが横から顔を出して言う

「リヴァル。次の授業に間に合うには何分後にここを出ればいい？」
ルルーシュがリヴァルに言う

「あー飛ばせば20分程で」

「なら帰りは安全運転で頼む」

「はー？」

「ちなみに俺の烈風山なら本気を出せば30分はいける」

ルルーシュが椅子に座る

「九分で済む、マスターこの間の件」

「分かったよ、話はつけとく」

「九分？一手二十秒だぞ」

「充分」

黒のキングを持ちながら言う

「ん？キングから、ふふはははは」

笑う中年の男

その笑いを微笑みで返すルルーシュ

視点 変更

「ルルーシユは？」

ミレイが聞く

「リヴァルが連れてっちゃって」「
シャーリーが不機嫌そうに言う

「また代打ち？ポーカーかなそれとも」「2人とも生徒会の自覚が無
いんだから。お金賭けてるんですよ？頭良いのにルルは使い方おか
しいんです」「

「ちゃんと勉強すれば成績だって、ねー？」

「うちのルルちゃんは本当は真面目な子なのに？可愛いねー」

「ちよつと会長」

副会長から会長になったミレイ

「ガーブスはいいの？ゼブルを行かせて」
隣でもそもそ食べているガーブスに言う

『ゼブル様なら大丈夫でしょう、何かあっても逃げ切れると思いま
すし』

「道場に行ってるんだってね？外見はあまり変わらないけど強くな
ったの？」

『元々強かったです、師範のチャンさんのおかげで更に強くなりました。』

『でもまだチャンさんには及ばないみたいです』

『数ヶ月前から通っている、元々運動神経が良かった上に更に戦い方を学び、今ではゼブルに勝てる者は師匠のチャン位だろう』

『ゼブルってどの位強いの?』

『シャーリーが聞く』

『この学校で間違いなく一番強いと思います』

『そんなに? 凄いわね』

『驚いたように言うミレイ』

『私を守る為に強くなり続けるって言うてくれたんですよゼブル様
!!!』

『紙に書きながら嬉しそうに顔に手をやるガーベス』

『あー、ノロケ話はいいから』

『シャーリーが不満そうに言う』

『まさかそのお弁当もゼブルが?』

『はい、たまに作ってくれるんです』

『バイト先の料理屋さん腕良いからね。習えばいい料理人になれるんじゃない?』

『私もよく手伝いに行くんですが、殆ど料理を運ぶだけですからね。一向に腕が上がりません』

「ルルとゼブルどっちが料理上手いのかな」

『ゼブル様はルルーシュさんには及ばないといっていました』

「へー」

「ガーベスが羨ましいんですけど？」

ミレイがシャーリーに言う

「会長！何言ってるんですか！」

顔を赤くしながらシャーリーは叫んだ

視点 変更

何処かの道路で大きなトラックが走っている

「くっそーマックスって言う奴の言うこと信じて

やっと盗みだ出せたのに玉城の奴がナオトの作戦通りに動かないから」

トラックの中で愚痴を言っている長髪の男と赤髪の少女が乗っている

視点 変更

「貴族サイコー！プライドあるから支払いも確實だしね！
その上8分32秒の新記録」
リヴァルが上機嫌に言う

「相手の持ち時間も少なかったしゼブルのヒントがあったし。それに温いんだよ貴族って特権に寄生しているだけだから」

「んじゃイレブンとやってみるか？俺達ブリタニア人とは違って……」

外に出た3人だが周囲のざわめきを聞き
巨大スクリーンを見る

テロの報道をしているようだ

「お待たせしました。ブリタニア帝国第3王子クロヴィス殿会見の時間です」

クロヴィスが演説を始める

「帝国臣民の皆さん……………」

ゼブルがルルーシュを見ると一瞬だが睨んでいたすぐに歩き出した

移動しながら見ると本当に一瞬だけの様だ

「黙祷」

スクリーンの声が響く

（今日から全てが始まるんだな
準備はしてきた。後は実行するだけだ）

「あれやんないの？」

リヴァルが聞く

「リヴァルは？」

ゼブルが答える

「ふふ、恥ずかしいでしょ」

「そうだな、それに俺達が泣いたって死んだ人間は生き返らない」

「うわ、切なげ」

ゴーグルを付けながら言う

「ドライだな」

ゼブルも言う

「所詮自己満足、どれだけ背伸びをしたって。どうせ世界は変わらない」

（今はこんな事言ってるけど…世の中何が起こるか分からないからな
自分を世界さえも変えてしまえそうな存在はいつもすぐ傍に、か。
俺自身もその部類だろうな）

「ゼブル早く行くぞ」

「おっと、ゴメン」

考え事をしていたら置いてかれそうになったゼブルであった

バイクでの移動中

「最初の手つてき、なんでキングから動かしたの？」
リヴァルがルルーシュに聞く

「王様から動かないと部下が付いてこないだろ」
ルルーシュが言う

「ルルーシュさんてさ、もしかして弱いのに戦場に出てボロボロに
されちゃう感じ？」
前から聞くゼブル

実際はそうである

(出る度、機体を壊すしね)

「てかさ、考え方が社長じゃない？将来目指してんの？」

「まさか、変な夢は「パアン！パアン！」！！？」

後ろから大きなトラックがクラクションを鳴らす

「うわ！何ですか!?!」

慌てて急こうとするリヴァル

「急に何?」

そのリヴァルに驚いたゼブルがスピードを凄く上げてしまい
百数十メートル離れてしまった

視点 変更

「暢気に走りやがって」

先ほどの男が言いながらハンドルを左に曲げる

「止めるそっちは!」

それを止めようとしたが間に合わず立ち入り禁止の場所に突っ込んでいった

視点 変更

「あの、俺達のせい?」

土煙の上があった方を見ながら言うリヴァル

「まさか」
ルルーシュが言う

「ちよいと人とも大丈夫？」
前から戻って来たゼブルが言う

「なんだ？」
ルルーシュがトラックを見ながら言う

「おいルルーシュエナジーの線が切れたみたいなんだけど」
リヴァルが言う
どうやらさっきバイクに無理をさせたらしい

「なああれって「おい、こっちこっち」「」
ルルーシュが何か言おうとしたが
野次馬が出てきた

群がる野次馬を見たルルーシュが
「ふん。どいつもこいつも」
と言いヘルメットを席に投げ走っていく

「おいちよつと」
リヴァルがルルーシュを止めようとしたが

「あれルルーシュさん何処行ったんだ？」
ゼブルが聞いてくる

「何か助けに行きたみたい、ったくこつちを助けてくれよ」

壊れたバイクを弄りながら言うリヴァル

「体力無いのに無理するなルルーシュさんも」
呆れながら言うゼブル

「仕方ない押すか」

そう言い

壊れたバイクを押しリヴァルと後ろを歩くゼブル

「あのさ。やってる事は正しいんだけど、止めて欲しいんだよね。
無闇なプライド発揮するの、授業遅れちゃうって」
バイクを引きずりながら言うリヴァル

「どっちみち、そのバイクだと遅れるね」
ゼブルがリヴァルに言う

「まあそうだけどさ、何処かに置いてって電車で行けばギリギリ間に合うじゃん」

「なるほど」

少しすると

トラックが急に走り出す

それを見ていたリヴァルが立ち止まり

「ああ言うのも当て逃げって言うのかな？」

と言う

「まあ壊してるからそうなんじゃない？」
ゼブルが言う

「だな」

リヴァルが言い再びバイクを押し始める

(今頃出れなくて困ってるかな)

ルルーシュを探しているゼブルとリヴァル

「何処だよルルーシュ、学校行かないと」
リヴァルが大声で言う

「見付からないよ、先に帰ったんじゃない？」
ゼブルが言う

「マジかよ薄情な奴だな」
リヴァルが怒りながら言う

「じゃあ俺達も戻りますか」
そう言いスクーターを押すゼブル

「全く後で理由を問いたただすか」
そう言い道路に戻る2人

歩き始めて少し経つ

「あいつ俺を置き去りにして」
バイクを押しながら言うリヴァル

「正確には俺達だね」
リヴァルの間違いを正すゼブル

「ゼブル、お前は先に行って俺の事言ってくれないか？」
リヴァルが言う

「まあ良いけど、どの位で着く？」

「1時間強だな」

「分かった、じゃあお先に」
そう言うとスクーターにまたがり先に行くゼブル

（今頃はトラックの中かな、あのトラックがあると言つ事はカレンちゃん達は俺の情報を信じたかな？
まあ、俺は今回は手を出さない予定だし
頑張れルルーシュさん）

そう考えながら学園に戻るゼブルであった

第十三話 本編1 ゼブルと魔神 が 生まれた 日

(後書き)

一話につき本編一本でいきたいと思っています

キャラ設定(前書き)

本編2話はゼブルが介入しないので飛ばします

キャラ設定

オリキャラ

名前ゼブル(？ プレイエント) オウサルト (本名不明)

好きなもの ハッピーエンド ファンタジーなお話
嫌いなもの バッドエンド あまりに自分勝手な人

特技 料理でのバイトのおかげで和中華全においてプロ
並だが二流程度

趣味 散歩 ゲームセンターでのゲーム

ごく普通の学生だったが家で寝ていた筈がいきなり他の(しかもア
ニメの)世界に飛ばされた。

(本人は超幸運と喜んでいる)

VVとは親友と言っても過言では無いぐらいに仲良くなっている
未来を変えたいと考えているが、何をどう変えるかは決まっていな
いらしい

二枚目な上、優しくもてる体質なのだがもの凄い鈍感(自分だけで
他の人のはそれなり)な上に自己評価が低いため今まで彼女はいな
かった

運動神経、運がこの世界に来てかなり上がっている

能力

ハッピーがくれた力

1つ目

無限次元空間製作

（むげんじげんくうかんせいさく、インフィニットソリッドメイクス）

空間を作れる（三次元か四次元限定）。

複数の製作が可能で人や物などを入れる事が出来るが、広い次元を作るには時間がかかり短時間でやろうとすると激しい頭痛が起こる）

空間を作った本人の意思が働かなければ出る事も入る事も出来ない

次元を移動することができる

空間を曲げ好きな所に瞬時に移動する事が出来るが、目印としての指輪が無いと使えない

他次元世界（異世界）には行けず

その個々の世界の中でのみ能力が使える

2つ目

幸せの為に

（しあわせのために、ハッピーオルティナティブ）

他の世界から来た人を元の世界に戻すかその世界で幸せを見つけさせればその人に関係する物か技術または力を手に入れる事が出来る

（1つの世界で1人1回だけ個数は謎）

（会話が（理解）できない動物や他の生き物には適用されない）

対象 ガーベス

報酬 【物】治女神の首飾り

対象との関係性 ??

力 身に付けると自然治癒力が大幅に上がる

対象 チャン

報酬 【物】??

対象との関係性 前の世界で使っていたアイテム（武器？）
力 ??

対象 ??

報酬 【能】??

対象との関係性 元から持っていた能力
力 ??

対象 ??

報酬 【物】??

対象との関係性 自分の未来を変えた物
力 ??

ギアス

ゼブル

1、ギアスの能力は相手の性格を書き換えるギアス。

2、発動条件としては相手の目を見なければならぬ

ルルーシユのギアスと同じように光情報なので

が、

鏡に反射させてギアスをかける事もできる。
しかし透過率の低いバイザー等を付けている者
には発動し無い。

3、ギアスをかけた対象に「元に戻れ」とギアスをか
けると、

植え付けた全ての性格を無くし元の性格に戻る。

4、性格を植え換える時に複数の性格を植えつける事
も可能。

しかも「強くて豪快な暑苦しい熱血マンになれ」や
「おしとやかで清楚なお嬢様になれ」等のキー単語
を繋げる事も可能でこの場合1つとして数える
(最大7回)。

しかし相手が意味を理解出来なかったり、
間違つて理解もする可能性もある。

5、多数の相手にも一度で出来るが同じ
内容の性格しか植え付けられない。

6、同じ相手に何度も使える。

7、書き換えた性格の上に乗させる形となる。

例、前に植えた性格+新しい性格の形になる

(これも最大7回)。

8、ギアスを発動する時に植えつける
性格の内容を口で言う必要はない
(頭に直接内容が届くので)。

9、ルルーシュと同じ様にギアスを受けた対象は、
行使された前後の記憶に欠落が生じる

ゼブルの作った多重人格

スタイルチェンジ・ !の掛け声
とともに人格を換える(頭で言うのも有り)

1ハイド 一人称 おれっち

特徴 喋る時に全部ひらがなになる

ギアス 自身の存在を隠す力ギアス

自身の存在を認知及び感知させない
リーダーにも適用されない

(範囲内なら

(範囲は半径50メートルだが)調節

可能)

最大にすれば

触られていることにも気付かせない

2ダイクン 一人称 私

特徴 話言葉の最後に「…ね」が付く

来る

ギアス 気配の感知及び自身の気配の調節が出

殺気も調節出来る為

相手に大きな殺気を放ち気絶させる事

も出来る

3マジック 一人称 我

ギアス不明

4コンフ 一人称 ワシ

ギアス不明

5センス 一人称 ミー

ギアス不明

6ティグ 一人称 小生

ギアス不明

7ピース 一人称 僕

ギアス不明

オリキャラ

名前ガーベス・ミロツト

好きなもの 可愛らしい小動物と遊ぶ事 ゼブルという時

間

嫌いなもの 自分を化け物と罵る者 昆虫類

特技 高速早書き

趣味 編み物

異世界から来てしまった魔法使い。魔法は本人曰く回復だけしか使えないらしい（しかし効果は凄く死んだばかりの死人を生き返らせる程）

幼い頃の悲劇のためか魔法は人前では使っていなかったがコツソリ訓練はしていたらしい
無口（喋るのが苦手なだけ）で普段は書いて話すが大人数の性格で可愛いので男子層の人気は非常に高い
何故かゼブルとだけテレパシーが使える
異様にゼブルには甘えん坊で積極的である（唯一心を許せるかららしい）

能力

???

瀕死及び死んで数十分たった者でも救う事が出来る
（魂が体に付いている限り。）

逆を言えば死んで時間が経った者でも
保存状態が良く魂さえあれば生き返る。

しかし他の体に他の魂は入れられない)

???

来る

見ただけで怪我や病気、健康状態を確認する事が出

しかし何の病気だかは知識がないと分からない

???

除く

光が手から出、その手で触られた場所の疲労を取り

オリキャラ

名前ハッピー (本名不明)

の子

好きなもの ハッピーエンド 魅力的な女の子や魅力的な男

嫌いなもの バットエンド

特技 不明

趣味 不明

謎の女性？女神らしいが殆ど全て不明
ハッピーエンドが好きらしいが……

ノンオリキャラ

名前チャン（本名不明）

好きなもの 不明

嫌いなもの 不明

特技 不明

趣味 不明

ゼブル達と同じく異世界から来た者（世界は違う）

自分の世界では傭兵をしておりますあらゆる武術に精通しているほか、
風水や道教思想にも詳しい

今は拳法道場の師範をしておりますゼブルを鍛えている。

キャラ設定（後書き）

後書き 違う世界（漫画・アニメ）の事を入れたいのですが
キーワードか原作どちらにその登場人物の作品の名前を入れれば良
いでしょうか？

それともキャラの名前だけキーワードに入ればいいのでしょうか？

御教授頂けますと助かります

第十四話 本編3 ゼブルと偽りのクラスメイト (前書き)

誤字脱字は報告をお願いします

第十四話 本編3 ゼブルと偽りのクラス メイト

生徒会クラブハウス

「コラルルーシュ！？今寝てたでしょう？手が止まってた」
ルルーシュの頭を丸めた紙で叩きながら言うミレイ

「だからって叩かないで下さいよ」

「俺を置き去りにした罰だって」
椅子の上で胡坐をかいているリヴァルが言う

「だから俺達が正解だって」
それに突っ込むゼブル

「そうそう、何やってたのよ？昨日」
シャーリーが聞く

「ああ、いや」
言葉を濁すルルーシュ

(テロのをしてましたなんて言ないよな)

薄ら笑いをしながら思うゼブル

「はいはいはい、話を脱線させないの
今は部活の予算審査とつとと済ませないと何処も予算が下りないで
しょ?」

ミレイが言う

「そんな事になったら」

端っこの席にいるニーナが言う

「馬術部なんかマジ怒りまた此処に突入して来たりして」
ふざけるながら言うリヴァル

それに合わせたかのように馬の嘶きが聞こえる

『去年もそうでしたからね』
心配そうになるガーベス

「リヴァルあんたも一応生徒会メンバーなんだから」
同じく少し怖気づいたミレイが言う

「せめてもう一日早く思い出してくれていればよかったんですよ」
シャーリーが文句を言う

「去年もそれでミスしたんだし」
ゼブルも言う

「もう一日遅くが正解。諦めがつく」

「いい考えだ今からでも「ガッツツ!!」」
ルルーシュの言葉を遮ってミレイが大声で言う

驚いたメンバーは一瞬固まる

「またガッツツの魔法ですか？」
リヴァルが言う

「ヤバイ耳が」
隣にいたゼブルは大ダメージを受けた

「はぁーい、貴方はがんばりたくなりまーす」
ミレイがルルーシュ達に指を指しながら言う

「かかりませんよ、そんなインチキ魔法じゃ」
ルルーシュが言う

「ガッツツの魔法じゃなくて、ガッツツの催眠術にしたらどうです?」
ゼブルが聞く

「そんなんじゃない面白くないじゃない、こつファンタスティックな感じだ」

ミレイが答える

「会長私がかつた事にします」
シャーリー

「うん某肉体派の男子と違って肉体派の女子は素直で宜しい」
ミレイがゼブルを見ながら言う

「てか、某肉体派の男子つてまさか俺ですか？」
視線の意図に気付きゼブルが聞く

「鍛えていると言ってくれないと」
シャーリーが言う

（スルーですか）
ゼブルがため息をつきながら思う

「そうじゃなくつてさ、立派じゃんシャーリーは」
そう言い意味ありげな視線をシャーリーの
胸へ当ててる

「へ」

それに気付いたシャーリーが自分の胸を見る

「この間女子寮のバスルームで確かめた
トップとアンダーのバランスがいいよね」

「ほほ」

「へ」

2人の視線に胸を隠すシャーリー

「何言ってるんですか変態！」

廊下

「もう！会長って中身は絶対おじさんだよ。自分で話を逸らして
いくし」

シャーリーが怒りながら歩いている

「ミレイちゃんは昔からあんです」

「はっははは、まあ予算表間に合ったんだし良いじゃないの」
教室に着くと

「毒ガステロだったさ」

クラスメイトがテレビを見ながら言う

「怖いよなシンジユクなんて此処から30分と離れてないぜ」
その隣の男が言う

「シンジユク？」

シャーリーがルルーシュに聞く

「昨日この件で電話したんだよ、知り合いからリアルタイムで聞いてて」

ルルーシュが答える

『危ないですね』

ガーベスがゼブルに言う

「みんなも気を付けないとテロに巻き込まれるかもしれないよ」
ゼブルが言う

「本当だな」

ルルーシュは全くだと言う様な顔をしている

しかし急に口元を押さえて走り出した

「あれルルーシュさん何処に行くんだい？」
それに気付いたゼブルが言う

『急いで行ってしまいましたね』
後姿を見ながらガーベスが言う

「まあ気分が悪くなったんじゃないの」
そう言い教室に入るゼブル

（人を殺すってのはそういう事だよルルーシュさん。まあ俺はまだ人を殺したことは無いけどね）

「カレン久し振り」

「体良いの？」

クラスの一ヶ所で人だかりが出来ていた

「うんあんまり無理は出来ないけどね」
カレンと呼ばれた少女が答える

「（そうか、引っ掛った訳だ）」
ルルーシュがカレンを見ていると

「ルルーシュ君なーに見てるのかな？ひよっとして惚れちゃった？」
リヴァルが声をかけて来た

「マジで！」

それに反応するゼブル

（あ、シャーリーちゃんがルルーシュさんを見た。やっぱり気にな
っちゃうよね）

「珍しいだけだよ、彼女始業式以来でなかったよな？」
ルルーシュが言う

「カレン・シュタットフェルト
何か体が弱いらしくてさー前の学年でもたまにしかね、んでも成績
は抜群に優秀。シュタットフェルト家の御令嬢だから金はあるし性
格も穏やか、イヤー御目が高い」
茶化すように言うリヴァル

「違っつて」

ルルーシュが否定する

「隠さない隠さない、まあちょっと箱入り過ぎるけどね」

【ガーベスちゃん、あの子の体チェックしてくれない】
カレンの方を見ながら言う

【興味があるんですか？】

ガーベスが不審そうに聞く

【彼女の方は俺が見る限り、体は弱く無さそうなんだよね】
ゼブルが言う

【確かに平均を大きく上回る筋肉質を持ってるみたいですね、】
驚いた様に言うガーベス

【やっぱりね、この事は秘密にしてね】

【何ですかk【お願い】……分りました】
途中で止めてお願いするゼブルに悲しそうな顔をするガーベス

【そんな顔をしないでよ、今日ガーベスちゃんが寝るまで傍にいてあげるから】

ガーベスの頭を撫でながら言うゼブル

【!!!】

本当ですか!?!絶対他の人には教えません!!!】

ゼブルの言葉に猛烈に嬉しそうな顔に戻るガーベス

昼休み

ゼブルは廊下を歩いていると

「何してるんだい?」

外で会話をしているルルーシュとカレンを見ていたシャーリーに聞く

「ひゃ!ゼブル!?!」

驚き声を上げながらゼブルを見るシャーリー

「覗き見かい?中々の宜しいご趣味で」

ゼブルが言う

「ちっ違う偶然其処にルルとカレンさんが……」

顔を赤くしながらシャーリーが言う

「まあいいけど、次理科準備室だよ。2人に教えてあげないと」
ゼブルが窓の外の2人を見ながら言う

「あ、そっか！」

思い出したシャーリーは窓を開け

「ルルー！カレンさん！次理科準備室だよ、急がないと！」
と言う

「ルルーシユさん今日先生の手伝いするんじゃないっけ!？」
付け足す形でゼブルも言う

「やっべ！実験器具出さなきゃ」
そう言い走っていくルルーシユ

その後を考えながらゆっくり歩くカレン

それを見て

「……さて俺達も行くっか」
とシャーリーに言う

放課後

「何してんの？」

生徒会のクラスルームに付いたゼブル、シャーリー、リヴアルの3人が床で何かをしているニーナを見つけゼブルが聞く

「実験内容が入っている小型のデータメモリを落としてみたんだけど」

ニーナが言う

「大きさはどの位？他に特徴は？」
リヴアルが聞く

「この位の緑色です」
指で四角形を作りながらニーナが言う

「何処に落としたんだい？」
ゼブルが聞く

「此処に付いてから落としたのは確かなんですけど」

「そりゃあ大変だな、此処かなり広いし」
リヴアルが辺りを見回しながら言う

「じゃあ料理の方は私とゼブルとナナリーも手伝ってくれる?」
エブロンに着替えていたミレイが聞く

「はい、大丈夫です」

ミレイに車椅子を押されながらナナリーが言う

「ルルーシュさんは?」

ミレイにゼブルが聞く

「主役の迎えにでも行ってくれたんじゃないの?」

ミレイが答える

「そうですね」

「じゃあ他の皆は探し物を手伝ってあげて」
ミレイが手を叩きながら言う

「ハッピーも頼んだぞ」
ゼブルもハッピーに言う

【了解】

と言うとチヨロチヨロと辺りを歩き始めた

調理室

「ナナリーちゃんは何食べたい？ケーキはすぐ作れるから他に簡単な物なら、ちゃっちゃと作るけど？」

エプロンに着替えたゼブルが言う

「え、私ですか？じゃあ飲み物を作って頂けますか？」
ナナリーは困ったように言う

「もしかして今飲みたい？」
ゼブルが聞く

「いえ今すぐでは無いですので無理なら大丈夫です」
ナナリーが手を振りながら言う

「そう、じゃあ作るとします」ちよつとゼブル包丁とまな板出して
「解りました今行きます！じゃあナナリーちゃんは玉ねぎの皮を剥いてくれるかな？」

ゼブルが動こうとしたが、ミレイに呼ばれたのでナナリーに仕事を頼んだ

「はい、分かりました」

ナナリーは頷きながら玉ねぎを取り皮を剥き始める

(こう言う時に目が痛まなくていいね、いやこれは失礼過ぎるな。

ゴメンナナリーちゃん)

ナナリーに軽く頭を下げると

「ゼブル此処に食器を出して」

「はいはい」

ミレイに呼ばれたので早足で歩くゼブル

数十分後

クラブハウスの入り口付近で話し合う2人がいた

「此処なら邪魔は入らない」

「そういうことだ」

カレンとルルーシュだ

「あつた！」

大きな声が聞こえる

2人は階段のほうに目をやると

「あつたあつた！ほらこれでしょ？」

緑色の小さな四角形の物を掲げながら言うシャーリー

「あ、それです！実験データ」

ニーナが近づきそれを受け取る

『よかったですね』

後からハッピーを肩に乗せたガーベスがくる

「やれやれ、腰痛てー」

横からはリヴアルが来た

「そっち見付かった？こっちも出来たか始めよっか」

自動ドアが開き中からミレイがワゴンを運びながら出てくる

「うお、スゲー」

「さすがミレイさん」

2人の褒め言葉に

「へっへへー、もつと褒めるが良い」
上機嫌になるミレイ

「調理前の準備と調理中の整理と調理後の片付けを俺に頼らなければ完璧なのに」
その後ろからゼブルが文句を言いながら出てくる

「気にしない、気にしない」
笑いながら言うミレイ

「あの…何ですかこれ？」
状況があまり理解できていないルルーシュが聞く

「知ってて連れて来てくれたんじゃないの？カレンさん生徒会に入れるから」
ミレイが言う

「は？」
カレンが驚いた様言う

「お祖父ちゃんに頼まれちゃってさ」

「理事長に？」

ルルーシュが聞く

「うん、体の事もあるから普通に部活は難しいだろうって」

「あつ私生徒会長のミレイ、よろしくね」

カレンのほうに振り向いて言うミレイ

「あ、宜しくお願いします」

「俺リヴァル書記ね。分からない事があつたら何でも聞いて」

「シャーリーです水泳部と掛け持ちだけどよろしく」

「私、二つニーナです」

『ガーブスです』

4人が軽く自己紹介を終える

「あ、いえこちらこそ」

カレンがかしこまった様に言う

「俺はゼブ」
「あの、ゼブルさんスイマセンこれテーブルに」
「ああ
ゴメン忘れてた。今やるよ」

紹介の途中でナナリーが残りの物を運んできたのでそれをテーブルに乗せる

「ナナリー、お前まで」

ルルーシュが言う

不思議な顔をしたカレンに

「ルルーシユの妹よ」

ミレイが説明する

「私は中等部なので生徒会で無いんですけど」
ナナリーの手の上にハッピーが戻る

「いいでしょ準会員って事で」
そう言いテーブルに近づくりヴァル

「うん」

『そうですよ』

同じく向かうニーナとガーベス

「カレンさん宜しくお願ひします」

「宜しく、此方こそ」

笑顔で返すカレン

「さて、まずは乾杯といきますか」

リヴァルがテーブルに出したのは緑色の瓶にコルクが閉っている
「シャンパン！」

である

「生徒会自らこれはまずいんじゃない？」

ニーナが言う

「てか、それ俺の！隠してたのに何で見つけた？」
ゼブルが驚いた様に言う

『ゼブル様はお酒を呑むんですか？』

ガーベスが怪訝な目を見る

「俺自身アルコールは苦手だから呑まないけど調理用として手に入れたんだよ。結構高いらしいぞ」
入手先は秘密である

「まあまあ、硬いこと言わないで」
リヴアルがコルクに指を当てる

「駄目に決まってるでしょ」
シャーリーが止めに入る

耳を塞ぐニーナ

何が起きているのか分からないナナリーは

「何ですか？」
と聞く

「ナナリーはこっちね」
ミレイがナナリーの手にジュースが入ったコップを渡す

「それは俺がさっき作った果汁80パーセントの手作りオレンジジュースさ」
ゼブルが説明をする

「……残りの20パーセントは何ですか？」
ナナリーが聞く

「秘密………うそうそ、他の果汁や水なんかを混ぜただけだよ。市販のより美味しくて飲み易いと思うよ」
ナナリーがコップをテーブルに置こうとしたので説明をするゼブル

「あ、凄く美味しいです！」
ナナリーがゼブルの作ったジュースを飲みながら言う

「それは良かった」
ゼブルがナナリーに言う

「ルルーシュパス」
リヴァルがルルーシュに投げる

「え？」「ああ、もう！」「」
とっさに取ったルルーシュだが

シャーリーが駆けつけ
「ルルも簡単に受け取らないの」
取り合いをする2人

だが
「うわ！」「きゃ！」
バランスを崩し倒れる

倒れた拍子に
「ポンッ！」
コルクがカレンに飛ぶ
「シュッ」
それを振り払うカレン

「お見事！」
ゼブルが言うが

「」
「うっ！」

頭から盛大にシャンパンがかかったカレン

『勿体無いなですね』

ガーベスが言う

「どうかしました？」

ナナリーが聞く

「そうだね、題名シャンパン風味のミスカレンが出来上がった所かな？」

片付けを済ましテレビを見ているカレン、ルルーシュ以外のメンバー

すると

「お兄様大変！」

ナナリーが後を向き大声でルルーシュに言う

(足音で気付いたのかな?)

ゼブルも振り向く

「なんだい？」

いつもと違うナナリーの様子にルルーシュが聞く

「クロヴィス殿下が亡くなったのよ」

ミレイが言う

「殺されたんだってさ」

テレビのアナウンサーの声に耳を傾ける一同

「新しい情報が入りました。実行犯と思われる男が逮捕されました」

「発表によりますと逮捕されたのは名誉ブリタニア人です」

「まさか」

映像を見たルルーシュが小声で言う

アナウンサーの声が響く

「枢木スザク一等兵、容疑者は元イレブン。名誉ブリタニア人の枢木スザクです！」

ルルーシュの表情を見ながら

(さて、これで本格的にルルーシュさんは仮面を付けるか、俺も一つ目の仮面を付けるとしますか)

ゼブルは誰にも分からないように笑う

実際ゼブルの笑みに誰も気付いてはいない

「……………」

そう1人を除いては

第十五話 本編4 ゼブルとその名はゼロ(前書き)

いつも通り

誤字脱字は報告でお願いします

第十五話 本編4 ゼブルとその名はゼロ

体育館での校長先生の長い話が終わり
廊下を歩くルルーシュ達

「純血派って？」

シャーリーが聞く

「ブリタニア軍はブリタニア人だけで構成するべきだって連中だよ」
ルルーシュが答える

「ルッルーシュ、この後どうする？折角授業が無くなったんだし、
前から頼まれた『コレ』」
リヴァルがチェスのコマを置く手の動きをさせる

「駄目よ賭け事は！」

シャーリーが言う

「固いこと言うなって」

リヴァルがシャーリーに言う

「そうだな、もう止めるよ」
ルルーシュが横を少し見て言う

その横にはカレンが歩いている

「えー！」

「もっと手強いを見つけた」

驚くリヴァルにルルーシュは言う

「はい？何よそれ？」

シャーリーが聞く

「だったら俺にも噛ませろって」

リヴァルも言う

「止めたほうがいいってそう言うのじゃ無いし」
ルルーシュが言う

ルルーシュ達の少し後ろで

『ゼブル様、これから一緒に何処か行きませんか？』

ガーベスが言う

「ゴメンガーベスちゃん今日はちょっと、て言うより今日からだよ」

「つと一緒にはあまりいられないんだ」
ゼブルが手を合わせて言う

『そうですか、残念です』
頭を俯かせながら言うガーベス

「まあ今日は挨拶だけで済ませるつもりだし、早めに終わると思うから一緒に夕飯でも食べに行く？」
ゼブルがガーベスに言う

『はい！嬉しいです』
笑顔でゼブルに抱きつくガーベス

ゼブルは頭を撫でて
「（なんか凄い罪悪感だな。でも俺がいた方がもしかしたら良い方に狂うかも知れないしな）じゃあガーベスちゃん、後でね」
そう言って走り出すゼブルであった

視点 変更

とある電車の中

「あの、スイマセン」
ルルーシュが複数の人に言う

「ん？何だ？」
1人の男が聞く

「隣の車両に移ってくれないですか？そしてこの車両で起こって
いることを気にしないで貰いたい」
ルルーシュがギアスを発動させる

「分かった移ろう」
納得して隣の車両に行く

「あ、一体なんだ？」
今度は不良みたいな男たちの前に行き

「あなた達もお願いします」
ギアスをかける

「仕方ねーな、行くぞ」
男達も隣の車両に行く

「ふむ、これでいいだろう」
そう言う到着替え始めるルルーシュ

事前に隣の車両の人たちにもギアスはかけてある

【はは、でんしゃのなかできがえるひとなんてはじめてみるよ】
ギアスを発動させてルルーシュに認識されていないゼブル（ハイド）
がそう思う

【シャーリーちゃんが見たらどうなるだろうな】
とゼブルがハイドに言う

【たしかにおもしろそうだね】

話しているうちにゼロの服装に着替えたルルーシュ

携帯で誰かと話をしているようだ

【お、でんわしてる】

【カレンちゃんが相手だろう】

電話が終わり少し経つと

【ん、きたみたい】

隣の車両の扉が開いた

【次俺が合図をだしたら変われよ】

【もちろん】

そう言うときハイドは椅子に横になりながら傍観する

テロリスト達は

誰もいない車両で唯一後姿で立っている者を見る

「お前なのか？」

カレンが言う

「畏じゃ無いよな？」

ノースリーブの服を着た男（以降吉田）が他のメンバーに聞く

「なあシンジユクのアレは、停戦命令もお前なのか？」
カレンが聞く

「おい、何とか言えよ！」

青髪の男（以降杉山）が反応の無い目の前の者に言う

急に振り向いた仮面の者に驚く4人

「どうだ租界ツアーの感想は？」

仮面を付けたルルーシュ（以降ゼロ）が言う

「ツアー？」

リーダー格の男（以降扇）

「おい、こんなふざけた奴だったのか？」

杉山が小声で聞く

「正しい認識をして貰いたかった。租界とゲッター」
ゼロがマントを広げながら言う

【あんなうごきしてはすかしくないのかな？おれっちだってやんな
いよあんなこと】

冷やかな視線をゼロに送りながらハイドが思う

【本人はカッコいいと思ってるんだろう】
ゼブルが答える

「確かに我々とブリタニアには差がある、絶望的な差だ。だからレジスタンスとして「違うな」…う」
扇の話を止め

「テロではブリタニアは倒せないぞ」
ゼロが言う

「倒す？」
今までそんな考えをした事が無かった扇はゼロに聞く

「テロなんて子供っぽい嫌がらせに過ぎない」
ゼロが言う

「何だと！」
「俺達がかきだつて言うのか!？」
杉山と吉田が言う

「相手を間違えるな。敵はブリタニア人ではない、ブリタニアだ！」

【どっちがうの？】

ハイドが聞く

【多分、無関係な人を傷つけず国を傷つけろって事じゃないか？】
ゼブルが自信無く答える

【どっちにしろひとはきずつくじゃん】
ハイドが少し悲しそうの言っている

【まあ、テロよりは民間人の被害は少なくて済むな】
ゼブルが言う

【なんで？】

【テロって殆どの場合イキナリだろ？戦争は事前に避難勧告とか出せるからな】

【なるほど】
手をポンと叩く

「やるなら戦争だ、民間人を巻き込むな。覚悟を決めろ、正義を行なえ！」

【かつこいい！まさにせいぎのみかただね】

【まあさつきも言った通り戦争でも民間人は巻き込まれるけどな】

「ふっふざけるな！」

【おこった！】

【少しぐらい黙って見てろ】

テンションの高いハイドにいい加減疲れたゼブルが言う

「口だけなら何とでも言える。顔も見せられない様な奴の言うことが信じられるか！」

「そうだ！」

「仮面を取れ！」

「ああ、顔を見せてくれないか？」

4人に仮面を取るように言われたゼロは

「分かった見せよう」

「ただし、見せるのは顔ではない、力だ。不可能を可能にしてみせれば、少しは信じられるだろう？」

仮面の中で笑っているであろうゼロが言う

【よし！変われ】

ゼブルが言う

【りよゝかい。すたいるちえんじ・ぜぶる】

ハイドと入れ替わった瞬間ゼブルが

「俺もその話乗らせて貰おう」と言う

急に聞こえた声に驚く一同

「な、お前は誰だ？何時から其処にいた？」

ゼロが驚いた様に聞く

確かにギアスで全員隣の車両に移したはずだし

それより今まで気が付かなかった事に一番驚いている

それに今のゼブルの外見は異様だった

包帯で首から上をグルグル巻きにされており

口と目と少し出てる髪の毛しか分からない状態だそれに金色のカツラを被っており髪の色も違う

服装はオレンジと白のパーカーに黒のジーパンに黒いスニーカーそれに黒色の手袋をはめている

「結構前から。まあ俺は影薄い上に今まで寝てたしうるさいから起きたらテロがどうだとか言ってるし、何故か人でもないし。」

話は聞かせて貰ったけど旦那、アンタは面白い！俺も旦那の力になるってのはどうだ？俺も多少裏で動いてるんだ悪くないだろ？」
ゼブルが笑いながら言う

【よくゆづ】

ハイドが言う

【嘘も方便だ】

【それにしてもくちょうがいつもとちがくない？まじっくみたいだよ？】

【今の俺はゼブルでは無いからな、口調を変えないと混乱するから】

【かえたほうがこんらんするとおもっけど】

「まあ、人数は多い方がいいし、協力してくれるのなら助かるが、彼らはテロリストで実際に私の言う事を一度は聞き、信用しているがお前には信じる要素が無い！」
ゼロがポーズしながら言う

「ああ、俺が裏切らない根拠が欲しいのか？それならコイツ等に毒ガスの情報を教えたのは…俺だ」
ゼブルがあっさり言う

それを聞いたゼロが

「何だと？」

と驚き

「て、言う事は「そう俺がマックスだ」」

カレンが言う前にゼブル（以降マックス）が言う

「お前がああ情報を……」

扇が言う

「俺の事を一度信じてみないか？俺は旦那の良い左腕になってやるよ。例え何があってもどんな事があっても他の誰も裏切っても俺だけは裏切らず旦那を信じて信じつくしてやんよ」
マックスが口元を歪めながら言う

「いいだろう、マックス。信じようその言葉」
ゼロが恥ずかしいポーズを取りながら言う

視点 変更

粗大ゴミ置き場らしき所

「そうか、お前達だけか」

ゴミの上に立ち見下ろしながらゼロが言う

「すまない、もう少し時間をくれないか？ちゃんと話せば他のみんなも…」「いや、お前達が協力してくれれば、条件はクリアしたも同然だ」

扇の言葉を遮りゼロが言う

「馬鹿いうな、相手が何人いると思ってるんだ!？」
カレンがゼロに言う

「言っただろ？不可能を可能にすると」
そう言い紙を見せ

「明日までにコレを作れ、外側だけそう見えればいい」
と言う

辺りを見回し

「マックスの奴はどうした？」
扇がゼロに聞く

「ああ、あいつなら今別のしごと」おい、旦那持って来たぞ」「マックスがゼロに向かって言う」

「例の物はどうだった？」
ゼロがマックスに聞く

「なんだ例の物って？」
カレンが聞く

「毒ガスのカプセルだ」
ゼロはカレンを見ながら言う

「ああ、煤だらけだったけど拭けば以外に綺麗でまだ使えそうだ」
横に置いてある毒ガスのカプセルを叩きながらマックスが言う

「そうかならお前もこっちを手伝え」
ゼロがマックスに言う

「旦那はしないのかよ？」
マックスがダルそうに言う

「私は肉体労働は専門外だからな、それにお前は神出鬼没だからな
使えるうちに使っとかないと」
ゼロが言う

「なるほどな、おいオマエ等もとも早く手伝え」
納得し扇とカレンに言う

「ああ」

「分ってるわよ」
扇とカレンが答える

視点 変更

次の日の夜

皇子殺しの容疑者を乗せた車が止まり周りの人型の機械（以降ナイ
トメア）も止まる

「此処で停止するというのは予定にありません。何かのアクシデン
トでしょうか？」

テレビのアナウンサーが言う

「此方第五地点です。其方に向かう車があります」
他のアナウンサーが言う

すると

「こっこれはクロヴィス殿下専用の御霊車です。見えますか？」

そのクロヴィス専用の車の中

「（本当にこんな張りボテで）」

運転席にいるカレンそう思う

助手席にはマックスがいる

2人とも服装は白い礼服に着替えているがマックスの顔の包帯は変わらず巻いてある

車の外見は本物そっくりだが中はコードは出て、ガムテープでパーツを繋ぎ合わせてある昨日ゼロに指示されて作った今にも壊れそうな車である

「出て来い、殿下の御霊車を汚す不届き者が！」
青い軍服を着た男（以降ジェレミア）が言う

マックスがボタンを押すと

車の上にあるブリタニアの国旗から火が上がり
ゼロが現れる

「私はゼロ」

ゼロの姿を見た人々の声上がる

「なっ何者でしょう？この人物は自らの事をゼロと名乗り御霊車の前に立ちほだかっています」
テレビのアナウンサーが言う

「はっ、は」

カレンが体を震わしている

「カレン、おまえ震え過ぎ」
緊張か恐怖かそれとも両方で震えているのかは分らないがマックスがカレンの背中を擦りながら言う

「あんだなんでそんなに落ち着いていられるのよ？」
カレンが震えながら言う

「（テロリストだから肝は据わってると思ってたけど、違うみたいだね）旦那を信じろよ」
マックスが前を向いて言う

「そんな事、出来ないよ」
顔を俯かせて言う

「（まあ、女子だし無理ないか）」
マックスが思う

「ゼロと名乗る人物は何者何でしょうか？」

「テロリストなのでしょうが？しかしだとすればあまりに愚かな行為です」

アナウンサーの声が響く

ジェレミアが

「もういいだろうゼロ、君のショータイムはお仕舞だ」
手に持っていた拳銃を上に向けて撃つと

上からナイトメアが落ちてきた

車の周りをナイトメアで囲まれてしまった

「さあ、まずはその仮面を外して貰おうか」
ジェレミアが言う

仮面に手を向けるゼロ

だが

手を上に上げて
パチン！
と指を鳴らす

「はいよ」

合図が来たので

マックスが手に持っていた別のボタンを押すと
ゼロの後ろの箱状の物が壊れ中からマックスが取ってきた毒ガスの
カプセルが出てきた

「何！？」

驚くジエレミア

「ジエレミア卿あれは！」

後ろで褐色の肌の女性（以降ヴィレッタ）

「違う！それは……」

拘束服に包まれた男（以降スザク）が言おうとするが首に付けられ
た装置が反応し電流が体に走る

「（こっこいつ、ここにいるブリタニア市民を丸ごと人質に取った。
それも人質に気付かせないま
ま！）」

ジエレミアが銃をゼロに向ける

「撃ってみるか？分るはずだお前には」

銃を下に下げ

「分った、要求は？」

ジェレミアが言う

「交換だ、コイツと枢木スザクを」

「笑止！この者はクロヴィス殿下を殺めた。引き渡せる訳がない」
ジェレミアがスザクを見ながら言う

「違うな、間違っているぞジェレミア。犯人はそいつじゃあ無い。
クロヴィスを殺したのは」

カメラを持って近づいてきた男のカメラに向かって

「この私だ！！」

ゼロが言う

周りから大きなざわめきが生まれる

「なっなんとと言う事でしょう、ゼロと名乗る仮面の男が自ら真犯人を名乗って出ました！では今捕まっている枢木一等兵はどうなるのでしょうか？」

アナウンサーが困ったように言う

「無理だよもう」

（震えて怯える姿のカレンちゃんも中々そそるな…って俺は変態か！）

1人で乗り突っ込みしながらゼブルは

「ホラ、震えるなつて。全く最初から俺1人でいいつて言ったのに無理に意地張りやがって」

と毒を吐きながら言う

「イレブナー一匹で尊いブリタニア人の命を大勢救えるんだ。悪くない取引だと思っただがな」

そう言うゼロの周りをチヨロチヨロ動くカメラマンに

（ウザいなコイツ）

と思い近くのパーツを壊して投げる

「うっ」

見事に当たりこっちにカメラを向ける男（以降ディートハルト）

「今から少し危ないから離れた方がいいぞ？」

ディートハルトにそう言うマックス

「忠告感謝します」
驚いた様にそう言い少し離れて撮り始めた

「こやつは狂っている！殿下の御霊車を偽装し愚弄した罪贖つがい
い！」
そう言うと周りのナイトメアがゼロに銃口を向ける

「いいのか？公表するぞオレンジを」
ゼロが言う

言っている意味が理解できないジェレミアは
「ん？」
何だそれは？という顔をしている

辺りがまた騒がしくなる

ゼロが踵で進めの指令を出す

震えながら固まっているカレンはそれに気付かない
(全く、仕方ないな)
隣にいたマックスが代わりにアクセルを踏む

(俺がない時は出来るのに俺がいると駄目になるのか？この子は)

「私が死んだら公開される事になっている。そうされたく無かったら」

近づきながら喋るゼロ

「何の事だ？何を言っている？」

ゼロの仮面の左目の一部分だけ仮面が動きそこが露出する

「私たちを全力で見逃せ、そっちの男もだ！」
ギアスが発動し

「ふん、分った。その男をくれてやれ」
ジエレミアがギアスにかかる

「え！」
驚くカレン

マックスは笑いながら
「流石旦那だ、下りるぞカレン」
カレンにそう言い車から降りる

「ジエレミア卿今なんと!？」

ヴィレッタがジエレミアに聞く

「その男をくれてやれ」「しかし」「くれてやれ。誰も手を出すな!」「スザクに銃を向けている男が言うがジエレミアは頑なに言う

「どう言うつもりだ、そんな計画は「キューエル卿!これは命令だ」
」

金髪の男（以降キューエル）が聞こうとするがジエレミアが強く言う

周りから様々な文句の声が流れる

その中

「君は一体…う」

声を出そうとしたが電流が流れ後の言葉がいえない

「やはり声を上げる事が出来ないようだな」

ゼロが言う

マックスがスザクに近づき首の拘束具を見て

「特別なヤツだね下手に取ろうとすれば首が吹っ飛ぶぜ」と言う

「外せるか?」

ゼロがマックスに聞く

「俺にかかれば10秒で取れる」
マックスが笑いながら言う

「そうか」

「此处で逃がしたら私たちは」
ヴィレッタがナイトメアに乗り込む

「ゼロ、時間だ」
カレンが言う

「では、話は後で」
ゼロは手に持っているボタンを押すと
毒ガスのカプセルから紫色の空気が出る

それを見た
民間人が我先にという風に逃げる

その隙に
橋から飛び降りた4人は下にいた扇の助けにより難を逃れた

視点 変更

廃劇場

「まさか本当に助け出すなんて」
杉山が言う

「何なんだあいつは？」

吉田が聞く

「馬鹿馬鹿しい、あんなハツタリが何度も通じるかっての」
ひげ男（以降玉城）が言う

「しかし認めざる得ない」

「彼以外の誰にこんな事が出来る？日本解放戦線だって無理だ。少なくとも僕には出来ない」

扇が皆の方を向き言う

「みんなが無理だと思っていたブリタニアとの戦争だってやるかも知れない、彼なら」

「やるかもじゃなくてやるんだよ、旦那はよ」
マックスが後ろから言う

「うるせ！大体お前は何なんだ？」
玉城がマックスに近づき言う

「マックスだって言うてるだろ、馬鹿かオマエは？」

マックスが玉城に向かって言う

「んだと、おい！」

玉城があまり怖くない顔で睨む

「待て玉城。しかしお前の正体は何なんだ？名前もどうせ偽名だろ？」

扇がマックスに聞く

「旦那がゼロのように、俺はマックスだ。それだけ分れば十分だろ？」

マックスが言う

「はっ！俺はまだお前を信用しちやいないからな！」

玉城が言う

「それにしてもカレンのビクビク震える姿可愛かったぞ」
マックスがカレンのほうに体を向け言う

「なっ何言ってるのよ！」

カレンが顔を赤くしながら言う

「もう無理、怖いよとか 助けてお兄ちゃんとか」
笑いながら言うマックス

「そんな事言つてない！」

カレンが大声で言う

「はっはっは、さて俺は向こう行くか」

マックスが体の向きを変え真剣な表情で言う

「行くなつて言われただろ」

杉山が言う

「大丈夫オマエ等も勝手に解散してな最後に1つ言っておく旦那に付いていけば新しい世界に行けるぞ、だがそれを決めるのはオマエ達だ。旦那でも俺でもないオマエ達だ、もしこつちを選ぶなら何が有っても旦那を信じる！いいな？」

マックスがそう言いゼロ達の所へ向かつて行った

歩きながら

「分からない奴だ、何故あそこまでゼロに付いて行こうとする」
扇が言う

「なんか私あいつを信じていいと思う」
カレンが言う

「何故だ？」

吉田が聞く

「分ないけど、そんな気がする」

カレンはマックスが行ったほうを見ながら言う

視点 変更

「相手手荒な扱いを受けたようだな。奴等のやり口は理解できただろう。枢木一等兵、ブリタニアは腐っている。君が世界を変えたいなら私の仲間になれ」

ゼロがスザクに言う

「君が：本当に君がクロヴィス殿下を殺したのか？」

スザクがゼロに聞く

「これは戦争だ。敵将を討ち取るのに理由があるか？」

「毒ガスは？民間人を人質にとって」

「交渉事にブラフは付き物。結果的には誰も死んでいない」

「結果……そうかそう言う考えで
薄く笑うスザク」

「私の所に来い、ブリタニアはお前が仕える価値の無い国だ」
ゼロが手をスザクに向ける

「そうかも知れない、でも……だから僕は価値のある国に変えるだ。
ブリタニアの中から」
覚悟を持った目になっている

「変える？」
ゼロが言う

「間違った方法で手に入れた結果に価値は無いと思うから」
スザクが歩きながら言う

「待て！何処に行く？」
それをゼロが止める

「後一時間後に軍事法廷が始まる」
それを聞かず歩き続けるスザク

「ばつ馬鹿かお前は！あの法廷はお前を犯人にする為に仕組まれて
いる！検察官も判事も弁護人も！」

握り拳を固めたゼロが大声で言う

「それでも、それがルールだ。僕が行かないとイレブンや名誉ブリタニア人に対して弾圧が始まる」
「止まり言うスザク」

「だが、お前は死ぬ」

「構わない」

「馬鹿だお前は！」

「昔友達にもよく言われたよ。この馬鹿って」
ゼロから聞こえない程度の声が出る

「僕の欠点なんだろうが、君を捕まえたいが君の護衛に返り討ちに遭いそうだからね。どうせ殺されるなら僕はみんなの為に死にたい。でもありがとう。助けてくれて」

一瞬ゼロの後ろにいるマックスを見つめ振り向きながらスザクは言う

しかしすぐに体を前に戻し歩き始める

（この馬鹿が！体制の内部から変えていく？その体制に取り込まれるだけだ。何故それが分らないんだスザク！）

「旦那他のメンバーは帰ったぞ、それに…振られちゃったみたいだな」

後ろからマックスがゼロに言う

「ああ。あっさりな」

ゼロはスザクの後姿を見ながら言う

「でも、アイツは旦那のお陰で無罪になるだろ。ならなくてもそれに近い程度で済む。結果的に旦那はアイツを助けたんじゃないかね？」
マックスがゼロに言う

「慰められるとはな」

仮面を付けているから表情は読めないが多分苦笑しているだろう

「元気出せよ。大丈夫俺は旦那の左腕になり続けてやるよ、肯定してやるよ、いい事も悪いことも全て俺が知ってやるよ、俺だけは旦那の事を」

…さてと俺は帰るぞ？」

「ああ、今日は助かった」

ゼロがマックスに言う

「じゃあ、また何か用があったら連絡頼むぜ旦那」
マックスがスザクと反対の道を歩き始める

（何故だろうな、何故かあいつは信じられる。
マックスとなら俺はブリタニアに勝てる。いや勝つんだ！ナナリー
の為に俺は絶対に！）

（ルルーシユさんは信用してくれたかな？こっちは裏切るつもりは
毛程も無いんだけど、
ガーベスちゃん寂しがらるだろうな。

この世界平和にしたら次はガーベスちゃんを幸せにしてあげないと
な。

でもまずはユーフェミアちゃんだな。死なせない方法を考えないと、
全く急がし過ぎて困るよ

まあ明日はガーベスちゃんとデートだから今日は早めに寝るとする
か）

第十六話 本編5 ゼブルと皇女と魔女 (前書き)

サブタイトルに偽りあり

魔女とルルーシュが出せませんでした。

誤字脱字は報告をお願いします

第十六話 本編5 ゼブルと皇女 と 魔女

放課後

「残念だね急に授業が入るなんて」
ゼブルが言う

『はい、デートを楽しみにしていたのですが残念です』
隣で歩くガーベスが悲しそうに

「今からちょっと用事があるし、また今度にしようか」
ゼブルが言う

『用事って何ですか？』
ガーベスが聞く

「ちょっとシンジユクゲッターに野暮用、ガーベスちゃんは行きたくないだろ？」

笑いながらゼブルが言う

『ゲッターにですか？あそこは治安や衛生が悪いと聞いています。ですが、ゼブル様がお許し下さるのなら付いて行きたいです』
ガーベスが不安そうに言う

「行ってもつままないと思うよ？」
ゼブルがガーベスに言う

『大丈夫です』
ガーベスが答える

「じゃあ、着替えたら行こうか」

『はい』

視点 変更
十数分後 租界

着替え終わった2人は租界を歩いている

「あれは」
ゼブルが何かを見つける

『どうしたんですか？』
それに気付いたガーベスが聞く

「ちよつとね……ロイド君！」

濃い茶色の大きな車に向つて言うゼブル

「あは、ゼブル君じゃないか、彼女同伴で一体何をしてるんだい？」
車の窓が開きそこから白衣の男（以降ロイド）が出てくる

「ちよつとしたデート中に君を偶然見つけてね、そう言う君はセシルちゃんを連れて、しかもそんな敵つい車に乗って何をしてるんだい？」

ロイドにゼブルが聞く

「ちよつとしたストーキングをねえ。おつと残念でしたあ、時間切れだから行くね。また研究所に遊びに来てね」
ロイドが横を向き何かに気付きながら言う

「勿論」

ゼブルは笑いながら言う

「あは、じゃ、ねえ」

手を振るロイドに降り返すゼブル

『あの人達は何なんですか？』

ガールズが聞く

「ロイド君達は軍の特別派遣嚮導技術部、通称特派っていう技術部
ででナイトメアを主に作ってるんだよ、ちなみにロイド君はああ見
えて伯爵の位を持っているんだよ」
ロイドの事を簡単に説明する

『ゼブル様とはどういう関係で？』
ガールズがまだ聞く

「結構前にゲームセンターで一緒に最新の2対2のロボットゲーム
を偶然ロイド君と組んだら相性が良いみたいで勝ちまくってね、連
続30勝ぐらいしたのかな？それから妙に仲良くなってたまに一緒
にゲームやったり、軍にお邪魔してロイド君の仕事を手伝ったりし
てるんだ。ちなみにランスロットって機体にも俺が出した意見が少
なからず入っているんだよ」
ちなみにこの2人がしていたゲームは機動 土ガンダ と言う名前
のアニメが元のゲームである

『よく知りませんが、誰を追いかけているのでしょうかね？』
車の行った方向を見ながら言う

「きつと面白い人だよ、ロイド君少し真剣みたいだし」
そう言い向っていた場所に体の向きを戻し言う
「じゃあそろそろゲッターに行こうか」

視点 変更

シンジユクゲッター

「お酒が欲しいんですけど」

ゼブルはゲッターに入っすぐ近くの酒屋に入った

「ブリタニアのお若いのが何故イレブンの汚れた酒を欲するのだ？
ブリタニアの高級な酒を買えばいいじゃないか」
店主と思われる老人が睨み、皮肉げに言う

「ちょっと、理由がありましたね」

ゼブルは苦笑し言う

「まあいい、金さえ払えば好きなものを持って行ってくれて構わない」
老人は顔を伏せて言う

「じゃあ、あの瓶の奴をお願いします」
瓶に白い紙で包まれている物を指す

「毎度あり、アンタみたいにイレブンに敬語を使うブリタニア人も珍しいな」

それをゼブルに渡し料金を貰う老人

「俺はちょっと訳ありなんですよ（実際日本人だし）」
そう言い店を出るゼブル

『どうしてイレブンのお酒を？』
店を出てすぐにガールズが聞く

「烈風山って知ってるよね？それを俺に売ってくれた人がこの前の毒ガス事件で犠牲になって。実を言うとあのシャンパンをプレゼントにしたかったんだけどこっちの方が喜んでくれそうだし」
リヴァルが台無しにしたシャンパンを思い出しながら言うゼブル

視点 変更

ゼブル達は公園のような広場にいた
そこには幾つもの地面に刺さった鉄パイプ、コンクリートがあった

『これは何ですか？』
それらを見たガーベスがゼブルに聞く

「この下に人が埋まっているんだよ」
ゼブルが答える

『こんなに一杯』
実際その広場には狭い幅で沢山刺さっている

「被害者はもつと一杯いた筈だよ、あれを見てごらん」
指で1つの場所を指す

それを見たガーベスが
『オモチャですか？』
と聞く

見ると地面に刺さった鉄パイプの近くには何かのヒーローのおもち
やや、風車が置いてある

「あれを置いた人は多分親だね。自分の子をこんな所に埋めて、ち
やんとした墓石も置けず、供えられる花も無い。置けるのは墓石代わ
りの鉄パイプととその子の愛用していたオモチャだけ」
ゼブルが言う
淡々と、悲しみも無く、怨みも無く、喜びも無く、偽りも無い
感情も無く、只々事実を言う

しかし、その瞳には強い覚悟が見える

『悲しいです。まだ小さな子だったのでしょうね』

ガーベスは涙を浮かべながらゼブルの腕に寄り添い言う

その頭を撫でながら

「君は優しいね、その優しさをずっと無くさないで欲しいな」
言う

少しして歩き出すと

「シンジユクゲッターはもうお仕舞いです。やっと人が戻り始めていたんですが」

バイザーを付けている男が言う

「おや、カップルが此処にいるなんて珍しいですね。観光ですか？」
ゼブルが2人に聞く

「そう言う貴方たちはなんですか？」

男の隣にいた桃色の髪の少女が顔を少ししかめながら言う

「知り合いに会いにですよ、お嬢さん」
ゼブルが答える

「知り合い？ゲッターに来るといふことはイレブンですか？それに何故こちらに？それに私はユフィと言いますお嬢さんじゃありません」
止むことなく言い続ける

「ユフィちゃんか。俺とその人は知り合いといつても客と店主って仲なんだけど、その店主が一度でいいから浴びる程酒を飲みたいと何時も言ってるね」

歩きながらそう言い鉄パイプがかけられている場所の前ゼブルは止まる。そこには店主の写真が貼ってある

バイク店の店主が死んだ事をゼブルはハッピーから聞くまで知らなかったのだ

「（俺が前もって言うっておけばこんな事にならずに済んだのにな）」
残るのは後悔の念だけだ

酒のキャップを外し立ててある鉄パイプにかける

「生前に叶えられなかった夢はせめて死後には叶えてあげないと」

酒を立てかけてある鉄パイプに半分程かけ

残り半分は蓋をし、鉄パイプの横に置き眼を瞑り手を合わせる

少しして

「満足してくれたかな？」

ゼブルが誰に言う訳でなく只呟く

『きつと満足してくれたと思います』

横からガーベスが言う

「そつだと良いね」

空を見上げながらゼブルが言う

「ごめんなさい」

ユフィが言う

「何故君が謝るんだ？」
ゼブルが聞く

「それは……」

言葉を濁すユフィ

すると

「出てけよ、ブリタニアの豚共！」

後ろで声が聞こえた

振り向くと3人の男たちがアッシュフォード学園の生徒に絡んでいる
どうやらカメラでこの場所を取っていた学生にイレブンの人が怒ったようだ

「此処にいて」

そう言うつと荷物を投げ捨て走り出すバイザーの男

「（あの人たちはカレンちゃんと同じレジスタンスの人たちに、名前は知らないけど確か先輩の人達だな）面白そうだな、俺も行く」
その後を追うゼブル

「なっ、何だよ？イレブンの癖に」
太めの男が言う

「日本人だ！イレブンなんて言うな！」
前に出てきた玉城が言う

「何言っただ、お前等ウチに負けたんだろ。敗戦国の犬が！」
もう一人の髪の長めの学生が言う

「このブリキヤロー！」
握り拳を固めながら言う

「止めてください！暴力は」
バイザーの男が走りながら言う

「邪魔すんなよ！」
玉城がバイザーの男に手を横に振る
それに

バイザーの男のバイザーが当たり、外れ落ちる

「コイツ」

吉田が言う

「お前、枢木スザクか？」

玉城がバイザーをした男（以降スザク）に聞く

「クロヴィスをやった枢木？」

「馬鹿、やったのはゼロだろ！」

レジスタンスのメンバー口々に言う

「けっ、コイツは只の奴隷だよ」

玉城がそんなメンバーに言う

「何が名誉ブリタニア人だ、嬉しそうに。プライドも仲間も魂も売って、それでも日本人か！」
声を上げる玉城

「違う僕は「違はねーんだよ！このブリタニアの犬が！？」」
スザクが反論しようとするのを遮って玉城が拳をスザクに向けて放つが
スザクはその腕を掴み投げ飛ばした

「おー、見事な一本背負い」

その綺麗な動きを見てゼブルが感心しながら言う

「止めてください。自分は訓練を受けた人間です。これ以上同じ仲間です……」

玉城に向ってスザクが言う

「何が仲間だ！」

倒れた玉城が立ち上がり言う

「おい、もういいだろ」

ガツチリした体格の眼鏡男（以降南）が言う

「ちっ、この裏切りものが」

去りながら玉城が言う

「大丈夫ですか？」

スザクに向ってユファイが荷物を渡しながら言う

「ええ」

『ゼブル様も』

ガーベスもゼブルを心配そうに見ている

「俺は見ていただけだから大丈夫だよ」

そう言う

「大丈夫じゃ無いよ！僕のプライムGとMX4が
太めの男落ちたカメラを拾いながら言う」

「遅いんだよ！つたく、名誉の癪に」
髪の長めの学生が言う

「何で逃がしたんだ？やつちまえよ、どうせ何人もイレブンを殺してきたんだろ。誰がお前を養つてると思ってるんだよ？」

太めの学生がスザクに近づきながら言う

「これ以上この方を侮辱する事は許しません！」
その学生に向って張り手をお見舞いするユファイ

「ちっ何だよ一体、今日は最悪だ。カメラは壊れるし女の子には叩かれるし」

太めの学生が言いながら歩いていく

「覚えてろよ！」

髪の長めの男もそう言い後を追う

「ああ、行っちゃった。……そういえば自己紹介がまだだね、俺はゼブルそしてこの子はガーベスちゃんって言うんだ。宜しく2人も」

ガーベスはゼブルの後ろでコソコソと恥かしそうにしている

「僕はスザク」

「私はユファイ。よろしくね」

ユファイはガーベスの手を掴み言った

『よろしく願います』

その手を一回離し紙に書き込みまた掴み言う

「あら、ごめんなさい喋れないんですか？」

それを見たユフィが聞く

『いえ、苦手なだけです』

ガーベスが言う

「コミュニケーションは大切ですよ。一緒に頑張りましょ」
笑顔でガーベスに言うユフィ

『はい』

それを見て微笑むゼブルは

「でもスザクは気を付けたほうがいいよ。あんなの無視すれば良いのに首を突っ込んで、今回はよかつたけど中には逆恨みで権力を使用する人もいるからね。下手すると大きく強い相手に向わなくちゃいけないよ?」

と隣のスザクに言う

「強ければいいのかい?弱い事はいけない事なんだろうか。あの頃、10才の僕等には世界はとても悲しいものに見えた」

スザクは急に反対の方向を見ながら喋り始めた

『急に語り出しましたよ？』

ガーベスがゼブルに言う

「何だろうね」

ゼブルが言う

「飢餓、病気、汚職、腐敗、差別、戦争とテロリズム、繰り返される苦しみの連鎖。愚かなイタチごっこだ、誰かがこの連鎖を断ち切らなくてはならない」

スザクが言う

「理想だね」

ゼブルが言う

「勿論、そうしたものが全て無くせるとは思わない、僕は其処まで傲慢じゃない。だから大切な人を失わなくて済む、せめて戦争の無い世界に」

『そんな都合のいい世界なんて…』

「どうすれば」

ガーベスとユファイが聞く

「簡単な事だね、誰かが勝てば戦いは終る」

ゼブルが語る

「では、一体誰か？」

ユファイがゼブルとスザクに聞く

「僕にはまだ分らない…でも目指す事を止めたら、父さんは無駄死になっってしまう」

スザクは手に止まった古い時計を持つ

「枢木首相の？」

それをみたユファイは聞く

「そういえば、君は枢木首相の息子だったね」
ゼブルが言う

「あの戦争で父さんは死なねばならなかった！」
悲痛の声をスザクが上げる

すると

バーン！！

と、大きな爆発音が鳴り

バサバサ！

と、鳥が一斉に羽ばたく

爆発音がした方向を見ると古いドームのような場所で煙が上がっている

『何ですかね』

ガーベスがゼブルに寄り添いながら言う

「テロかな、見に行ってみる？」

ゼブルが面白そうに言う

すると

見た事のある轢ついで車が来る

「スザク君！」

濃い青髪の女性がスザクを呼ぶ

「セシルさん！」

スザクが言う

「あれ？ロイド君また会ったね。もしかしてさっき追っ駆けてた対象ってこの2人？」

後ろにいたロイドに聞く

「知り合いなんですか？」

スザクが困惑しながら言う

「それより此処は危険よ、みんな乗って！」
セシルと呼ばれた青髪の女性（以降セシル）が言う

「純血派の内ゲバなんだよ、とつとと逃げよ…ああそれと、スザク君釈放残念でした。また付き合ってもらおうよ」
スザクに言うのと車内の置くに戻るうとするロイド

「待つてください！ランスロットの戦闘データを取るチャンスでは無いでしょうか？」
そのロイドを止めてスザクが言う

「ロイド君、ランスロットに彼を乗せてるの？」
ゼブルが言う
ゼブルはランスロットの性能をロイドからイヤと言うほど聞かされていたのだ

「そうだよ、素晴らしいデヴァイサーでね通常稼働率94%、ここまで出せるのは中々ないよ」
ロイドが嬉しそうに言う

「それは凄いな、俺は確か60%だったよね？相性がいいただ」
驚いた様にスザクに言うゼブル

「スザク…」

スザクの後ろでユフィが言う

「ゴメンユフィ、ここでお別れだ。僕は行かなくてはならない、ラ
ンスロットなら止められる筈だから、だから！」
スザクが言う

「……」

何も言わないユフィ

「ここは笑顔で行かせてあげたらどうか？」
ゼブルがユフィに助言する

「時間がないわよスザク君」
セシルが言う

「僕は行くよユフィ、止める為に」
ユフィをの眼を見つめながら言う

「ランスロット発進！」

掛け声とともに大きくジャンプしドームの上に飛び移る

「ちょっと、何処行くの！？危ないわよ！」

ユフィがドームのほうに走って行くのを見たセシルが言う

『止まりませんね』

「困ったね本当に止めないと」

あららという風に言うガーベスとロイド

「なんでそんなに落ち着いてるの2人とものんびりしてる2人にゼブルが言う」

「. . .」
「. . .」

セシルが困ったように言う

「後を追いかける」

そう言い走り出すゼブル

『私も行きます』

その後をガーベスが追う

「2人とも待ちなさい！………もう、ロイドさん私たちも行きますよ」

止めようとしたが止まらない2人を見てセシルがロイドに言う

「走るのには苦手なのに」

嫌そうな顔をして走り出すロイド

視点 変更

ドーム内

「双方とも剣を納めなさい！」

そう言いながらナイトメアに近づくユファイ

「我が名において命じさせて頂きます！私はブリタニア第3皇女ユーフェミア・リ・ブリタニアです」

ユファイ（以降ユーフェミア）が言う

「本物の皇女殿下様。誠に……誠に申しわけございません！」
ランスロット以外のナイトメアが全機が膝を付き左手を胸の前で横にする

「知ってました？ロイドさん」
セシルがロイドに聞く

「うん、学生だからって表には出てなかった人だけどね」
ロイドが言う

「そう言うのは最初に言ってくれないと、もしスザクが助けられなくて彼女が死んだら国際問題だよ？」
事の大きさをロイドに説明する

『私、皇女殿下に手を握られました』
自分の手を見ながらガーベスが言う

「俺も握手しとけば良かったな、皇女様に手を握られた感想は？」
ゼブルがガーベスに聞く

『とても暖かかったです』
手を胸に当てながら言う

「皇女殿下！知らぬこととは言え失礼しました」
ランスロットから降りてきたスザクが言う

「スザク。貴方が父を失ったように私も兄、クロヴィスを失いました。これ以上皆が大切な人を失わなくて済むよう力を貸して頂けますか？」

スザクの方を向いてユフィが言う

「はっ、勿体無き御言葉」

ナイトメアと同じ動きをするスザク

「……」

それを少し悲しそうに見るユーフェミア

「さて、俺等は帰るとしますか」
見ていたゼブルがそう言う

『そうですね、もう遅いですし』
ガーベスも同意する

「ロイド君、あまり俺達の事スザクやユフィ…いや、皇女殿下に言わないでくれよ」
ロイドにゼブルが言う

「元々君の個人情報に殆ど知らないんだけどね」
ロイドは笑いながら言う

「じゃあ行くよ」

向きを変え来た道に戻ろうとするスザク

「ゼブル君、また近い内に来てね。待つてるから」

「じゃ〜ね〜」

セシルとロイドが言う

『さようなら』

「うん、じゃあまた」

ガーベスとゼブルが言い歩き始める

「ガーベスちゃんも今日のことは皆に言わない様にしてね」
歩きながらゼブルが言う

『はい、分かりました』

頷きながらゼブルの腕に抱きつくガーベスタ暮れの廃墟が並ぶ町を
歩く2人であった

視点 変更

その日の夜

「やあ、ゼブル。久し振りだね」
通信画面から金髪の少年が言う

「急に連絡を入れてどうかしたのか？」

「君さナイトオブブラウズになりたいって言ってたよね？」
VVがゼブルに聞く

「ああ、確かに言ったな」
頷きながらゼブルが言う

「今エリア11ではコーネリアが総督になっているだろ？」

コーネリアとはユーフェミアの実姉で第2皇女である。戦争では自らナイトメアに乗り先陣を切る姿からブリタニアの魔女という異名を持つ。皇族の中で唯一ナイトメアで戦場を駆けれる卓越した操縦技術を持つ者でもある

「そうみたいだな、報道はされてたけどまだ着いてはいないみたい

だぞ？それにラウンズとどう関係があるんだ？」
テレビでは殆ど毎日その話題で一杯だ

「シャルルがね、もしKMF戦でコーネリアに勝ち尚且つ適正試験を受ければラウンズにしてくれるってさ」

VV満足げに言う

「シャルルって皇帝の名前だよな、何で呼び捨てなんだ？」
ゼブルがVVに聞く

「言っただけ？まあ僕が凄い高い地位だからとでも言っておくよ」

首を曲げながら言う

「へー」

全てを知るゼブルはVVと皇帝シャルルとの関係も当然知っている

「とにかく、何時コーネリアとするんだい？ちなみに明日は何処かのテロリストの基地を殲滅するみたいだから駄目だって」
VVがゼブルに聞く

「じゃあ、明後日で」

「そう、分った。あと名前なんだけどオウサルトの方？それとも？

「プレイエントの方？」

VVが聞く

「？ プレイエントはゼブルがこの世界で名乗った最初の名前だ（勿論偽名だ）」

「VV、偽名って駄目か？それに顔を隠したい」
ゼブルがVVに言う

「何故だい？」

理由が分らないVVは驚いた様にゼブルに聞く

「ラウンズになれるという事は凄いいことで凡人にはなりたくてもなれないものなのだ」

「その一人一人の名は世界中に知れ渡る程でブリタニアの軍人はそんな名誉ある役職に就く為に日々頑張っている」

「それなのに顔や名前を偽るという事はラウンズとしての栄光を偽っている本人が受け取れないという事だ」

「栄光を欲した者は数多くいたが、必要ないという者をVVは初めて見ただからこそ驚いているのだ」

「俺はラウンズにはなりたいたいけど、それで自由を拘束されたくないんだよなあ。カミングアウトしちゃうとお前を守る騎士としてラウンズになりたかった訳だからさ」

VVにそう言うゼブル

「僕を守る為？嬉しいけど別に今のままでいいじゃないか？」
VVが少し嬉しそうに言う

「もしお前に何か遭ったら少しでも地位があつた方がいいだろ？融通も聞かしく、コネで何かと出来るしさ。それに実戦経験を積んでいた方が心持ちが違つだろ？」
ゼブルがVVに言う

「…分つたシャルルに聞いてみるよ、一応聞いてみるけど偽名のほうは何にするんだい？」
VVが聞く

「そうだな　　なんてどうだ？」
「カツコよくていいね。分つた。そつちはもう遅いんだろ？もうそろそろ寝むりだよ。コーネリアとの連絡手段は後で送つておくから」
ゼブルの作つた名前を面白そうに言い、睡眠の心配をするVV

「何から何まですまないな（本当に何から何まで俺の我がままを聞いてくれるな）」

「友達だろ？僕等は。じゃあお休み」
「ああ、お休み」
通信を切断した

(もう少いでVVを守る仮面を付けれる。今まで世話になってばかりだったからな、今度は俺がお前を助ける番だVV)

第十六話 本編5 ゼブルと皇女と魔女 (後書き)

次回ゼブルと奪われた仮面

第十七話 本編6 ゼブルと奪われた 仮面 (前書き)

また新しいオリキャラを導入しちゃいました

話が壊れないといいなと思う

今日この頃です

誤字脱字の報告

お願いします

第十七話 本編6 ゼブルと奪われた 仮面

アッシュフォード学園内の教室

今は昼休みで皆で昼食を食べている最中である

「なあ、知ってるか？今日5限目に転校生が来るんだってさ！」
リヴアルが2年生徒会メンバーに言う

「へー、それは興味深い」
ゼブルが本を読みながら相槌を打つ

「それよりゼブル、顔赤いぞどうかしたのか？」
リヴアルがゼブルに聞く

「そう？よく分らないけどな」
顔を傾げながらゼブルが言う

「本当に赤いぞ、大丈夫か？」
ルルーシュも気になっていたのか聞いてくる

「茹蛸みたい」

「そこまででは無いですが本当に赤いですよ」
シャーリーとニーナも言う

「マジですか？」

自分の顔が見れないゼブルは聞くと

「」「」「マジです」「」「」

皆が同じ答えを言ってきた

「そんなに？じゃあ、保健室行ってくるよ」
椅子から立ち上がり言う

「ああ、わかった気を付けろよ」
リヴアルが言う

「シャーリーちゃんさ、ガーベスちゃんにはちょっとした用事って
言っついて」

ゼブルがシャーリーに言う

ガーベスは今お手洗いに行っているのだ

「いいよ、保健室に行ったなんて言ったら何するか分らないからね」
シャーリーが苦笑しながら言う

「じゃあ、ちょっとくら用事に行つてきます」
笑いながら歩き始めるゼブルだが足元がおぼつかない

「俺も行くぞ」

それを見かねたルルーシュが言う

「助かるよ」

ルルーシュの肩に手を乗せバランスを取りながら言う

「ルルは早く戻つてきなさいよ」
シャーリーが言う

「はいはい」

視点 変更
保健室

「40度もあるじゃないの！今日はもう帰って体を休ませなさい」
保健室のおばさん先生が驚いた様に言う

「はい、ルルーシュさんにお問い合わせがあるんですけど」
ルルーシュのほうを向きながらゼブルが言う

「何だ？」

ルルーシュがゼブルに体を向ける

「ガーベスちゃんには用事で帰ったって言うてくれる？」
手を合わせながら言うゼブル

「分った。気を付けて帰れよ」

「ありがと」

ガーベスの事を頼むとルルーシュは教室へと戻っていく

その後姿を少し見て

「（あんな細い背中の世界の未来を抱えるのか、だからこそ俺は陰ながら力を貸すと決めたんだ）」
そう思いながら寮へ戻っていくゼブル

視点 変更

ゼブルの寮での一室

其処でゼブルは黒いスーツ姿で顔には口周りしか見えない濃い青のヘルメットに白い手袋をつけ革靴を履いている

「貴方がコーネリア皇女殿下ですか？」

パソコンに映し出された薄紫色の髪の女性とその周りに眼鏡の黒い長髪の男と厳つい顔に傷のある男それにオレンジ色のパーマのかかった髪の女性がいる

「ああ、お前がツヴァイ・ドウか？時間が無いから早めに済ませよう」薄紫色の髪の女性（以降コーネリア）が聞く

「確かに俺はツヴァイですが……1つ質問をしてもよろしいでしょうか？」

ゼブル（以降ツヴァイ）が指を1本立てながら聞く

「何だ？」

「其処の女性はどなたでしょうか？」
オレンジ色の髪の女性を見ながら言う

「ああ、アイネの事か」

コーネリアがオレンジ色の髪の女性（以降アイネ）の方を向きなが

ら言っ

「僕はコーネリア様の秘書でありコーネリア親衛隊副隊長でもある。
アイネ・ナハトムだ」

アイネが自己紹介をする

(こんな子はいなかった筈だけど……まあいいか)

「これは失礼。ギルフォード卿とダールトン卿は知っていたのです
がこんな美人な女性がいたとは知らないものでしたから」

「それより……」

コーネリアがツヴァイの方を向き直し言う

「ええ、明日が楽しみでしかたありません」
ツヴァイが口元を歪ませながら言う

「ふ、腕に自信があるようだな」

コーネリアが手を顔に当てながら言う

「まあ、貴女の実力ならば少し余裕を持って勝たないといけません」

「貴様姫様に何たる口の利き方！」
後ろの長髪眼鏡の男が怒鳴る

「まあ待て、我が騎士ギルフォード。私も腕に少なからず自信があるのだがな」

コーネリアが眼鏡の男（以降ギルフォード）をなだめながら言う

「聞いてますよ、ブリタニアの魔女といわれる異名を、皇族ながら卓越したナイトメアの操縦技術の持ち主。しかし俺はラウンズになるうとしてゐる者ですよ？貴方にギリギリで勝つ様な腕では到底ラウンズになれないでしょう」

ツヴァイが腕を前に組みながら言う

「ほほう、言うではないか」

「それに貴方の手腕は、このエリア11に来てから随分とテロ行為が減った事で証明されています、クロヴィス殿下が死んだお陰ですね。ゼロに感謝しなくては」

ツヴァイが言うと

「貴様、死んだ我が弟クロヴィスを愚弄する気か！？」

今まで耐えていたコーネリアが怒りながら席を立つ

「俺は事実しか言っていないませんよ？それに褒めて差し上げているのに何故怒るのですか？」

挑発気味に言うツヴァイ

「貴様！姫様までも汚す気か？それにゼロに感謝だと？ふざけるな！」

顔に傷のある男（以降ダールトン）が覇気のある声で言う

「あれ？失礼でも犯しましたかな？ダールトン卿、この仮面もゼロを真似したのですが」

仮面に手を当てながらツヴァイが言う

「今日の話はお終いだ。……明日、クロヴィスの為に意地でも貴様を負かすことになるであろうな」

席を立っていたコーネリアがそのまま扉のほうへ行き出て行く

「覚えていろ！」

アイネも顔に怒りを溜めながら大声言う

女性2人が出て行った部屋に残っているギルフォードとダールトン

「貴様、クロヴィス殿下だけでは飽き足らず姫様をも侮辱した罪、

只では済まさんぞ」

ダールトンがツヴァイを睨みながら言う

「そんな俺を憎むお2人に内緒でお願いがあります」

ツヴァイが言う

「聞く耳もた「皇女殿下に俺のイメージを少しでも低くしてください」……何故だ？」
話を遮り急に真剣みを持った口調になるツヴァイの言葉に疑問を抱くギルフォード

「皇女殿下には失礼だと思いますが、殺意が込められている剣で俺に向かつてきてもらわないと試験になりませんから」

「なるほど、だから姫様を怒らしたのか」
ダールトンは納得したように言う

「ええ、いい具合に俺に対する怒りが生まれました。もう少しで本当に殺す覚悟で俺に向かつてくるでしょう」
口元を歪めながら言うツヴァイ

「しかしそれでも君は皇族に無礼を働かしたのだから、ただでは済まされんぞ？」
ギルフォードがツヴァイに言う

「もとより覚悟は出来ています」
仮面のせいで顔は見えないがきつと真剣な目つきになっているに違いない

「わっはっはっは！貴様の姫様に対する無礼は許さぬが、心意気は大いに気に入った！」

ダールトンが笑いながらツヴァイを見る

「ありがとうございます…コホンコホン」
頭を下げた礼を言おうとしたが咳が出た

「どうした、病気か？」

ギルフォードが心配そうに見た

「ええ今日の昼頃から。風邪のようですね、40度近くまであったんですが今は39度まで下がってます」
普通は大丈夫では無いのだが鍛えているツヴァイには大丈夫なのだろう

「大丈夫か？日にちを延ばしても構わないぞ？」
ギルフォードがそう言う

「大丈夫です、お気遣い感謝します」

ツヴァイが言う

「そうか、頼まれた件は出来る限りしてみよう。では明日の朝、軍の訓練施設で待っているぞ。今日は早く寝る事を勧める」
ダールトンがそう言う

「何から何まですいません。では、また明日にお会いしましょう」
通信を切断する

「彼の態度は目に余るものですが、私にはどうも悪者に見えませぬ」
ね

何も映っていない画面を見ながら言うギルフォード

「風邪も嘘じゃないみたいだな。明日はどうなるだろうな」
ダールトンが真剣な顔で言う

「分かるんですか？」
驚いた様に聞くギルフォード

「子供が多いと自然と病気の気配と言うのが分かってな」
ダールトンには戦災孤児を養子として向かい入れている為子供が多
くいるのだ

「便利ですね」
心から思った本音である

「ああ、だがこの事を知らないアイネが何を考えるかが分らん。下手したらトラップなんかを設置している可能性もある」
ダールトンは笑いながらも予想が現実になりそうな気がしていた

「この事をいいますか？」

それを知ってか知らずかギルフォードが聞く

「いや、あいつは演技が下手そうだから言わないほうがいいな。それにどちらかといえば怒って力が出るタイプだからな。何か馬鹿な事をしそうになったら、その前に止めに入るのがいいかもしれんな」
想像したダールトンだが実現しそうなので少し焦ったようだ

「そうですね」

それを察したのかギルフォードが言う

「この事は……した方がいいと思うのだが？」

「確かに、そうしましょうか」

そう言い部屋を出て行く2人であった

視点 変更

ゼブルの部屋

寝巻きに着替えベットで寝ているゼブル

「（おかしいなこの治女神の首飾りを付けてい既に1時間以上経っているのに治る気配が一切ない何故だ？）
首飾りを見ながら考えるゼブル

治女神の首飾りを身に着けている時のゼブルは切り傷等小さい外傷が出来ても数時間ほどで治るのだが普段は身に付けてはいないが、今日は早く治すために付けたのである。
それなのに熱が40度近くまでに達しているのだ。

「全く試験は明日なのに神の幸運は何処に消えたのやら」
屋根を見ながら呟くゼブルであった

すると
バン！！

『何故病気の事を私に言わなかったのですか！？』
ガーベスが息を切らせながら扉を乱暴に開けた。ペンのキャップを加えながら

「あ、いらつしゃいガーベスちゃん。誰から聞いたの？」
ベットから起きてスリッパを出すゼブル

『お邪魔します。えっと聞いたのはシャーリーさんです……じゃないですよ！私の力を使えば簡単に直せるじゃないですか！それに安静にしてください』
スリッパを履きながら素直に答える

「君の力は本当に困った時にしか使う気はないよ。お茶はストレー
トティーでいい？」

話しながら部屋にある小さいキッチンに向かうゼブル

『早く寝てください体に障ります。それに何故使ってくださいさらない
のですか？私はゼブル様がタンスの角に小指をぶつけるだけで泣き
たいほど悲しくなるのですよ？』

それを止めてベッドにゼブルを寝かせる

「うん、ちよつと例えが例えだから伝わりにくいけど、君が俺を凄
く気にかけてくれてるのは分かったよ。しかし君の力でポイポイ
直っちゃ俺の体の免疫力が低下しちゃうんだよ（多分）。それに俺
が君の力を頼りっぱなしになるのはいやだからね。だから本当に重
症の時だけ使って欲しいんだよ」

横になりながら首飾りを弄るゼブル

『理屈は分かりませんが、でも、私……』

泣きそうになりながらガーベスがゼブルの手を握る

その手をガーベスの頬に当てながら

「それにこんな風にガーベスちゃんが隣で看病してくれながら寝る
のもいいもんだしね」

笑いながらゼブルが言う

『…ゼブル様には勝てませんね』
そしてガーベスも自らゼブルの手を自分の頬に当てて嬉しそうにする

「少し寝ていいかな？」

目蓋が重くなってきたゼブルが言う

『勿論です。お休みなさいゼブル様』

ゼブルの頭を撫でながらそう言うガーベスであった

次の日

「さで行ってくるね、ガーベスちゃん」

朝早く、ガーベスを女子寮のベットに寝かせる

ツヴァイの服装でまだ仮面はつけていない

「（置き手紙もしたから大丈夫だろう）」

机の上に置いているある手紙を見ながら思う

「(さて、行くか)」

仮面を付けて部屋を出るツヴァイ

「スタイルチェンジ・ハイド」

ツヴァイの姿が見えなくなった

視点 変更

ブリタニア軍第1訓練場

ハイドのギアスで難無く侵入したツヴァイ

「(広いな、道に迷いそうだな)」

ツヴァイが周りを見ながら言う

実際広く平べったい四角形の形をした訓練場だ

【あそこにいるのじゃない？】
ハイドが聞く

4人の人達が並びそれに導く道の様な形で多くの軍人が並んでいる
「（ああ、本当だ50人はいるな。じゃあ行くか）」

【すたいるちえんじ・ぜぶる】

「おはようございます」

ギアスを解いて後ろから声をかけるツヴァイ

「うお！何時の間に!？」

背後からの声に驚いたアイネが言う

周囲の軍人たちも気付いたようだが、何処から現れたのかは分からないらしくヒソヒソと声が聞こえる

「今さつきですよ」

欠伸を嚙殺しながら言うツヴァイ

「（全然分からなかったな）まあいい、大怪我するかもしれないが準備は出来ているか？」

コーネリアが聞く

「勿論ですよ」

ツヴァイが堂々と言った

「ほづ?言うのではないか」

コーネリアが言う

「俺の憧れの人のセリフだけれど『撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ』です」

胸を張って自慢そうに言うツヴァイ

「なるほど、傷つける者は傷つけられる覚悟を持った者だけと言う事か。面白い」

コーネリアの隣にいたダールトンが感心したように言う

「では始める前に1つお願いしてもいいですか？」
人差し指を上げる

「何だ？」

コーネリアが不審そうに聞く

「特派のランスロットに乗ってみたのですが、いいですか？」
奥にいるロイドに気付き、そう提案する

「…別に構わん、好きな機体に乗るがいい」

そんなことかと言わんばかりの態度でコーネリアが言う

「（この人ランスロットの性能を知らないのか？）しかしそれでは機体の性能差が激しいので俺1人对貴女を含めた4人で戦いませんか？」

「貴様、本気で私を愚弄するつもりか？」
ツヴァイを睨みながら言うコーネリア

「考え方を変えましょう。俺をナイトオブワンと同レベルの腕だと思ってください。最強の騎士の腕を持ち、最高の剣を携えていると。そうすれば納得出来ましょう」
ツヴァイが言う

「こんな無礼な奴コーネリア様が手を出さずとも僕一人で充分です！」
コーネリアの後ろにいたアイネが我慢できず言う

「君1人では試験になりませんよ……えっとクライネ・ジーク卿でしたっけ？」
首を傾げながら聞くツヴァイ

「どう間違えたらそうなるんだ！？僕はアイネ・ナハトムだ！」
怒って大声で言うアイネ

「まあいいとして「全然良くない！」…分かりました。とにかくこれで俺が負けたら口だけの雑魚という烙印が貼られるし、勝てばラウンスの資格ありの非凡な男って事になるのでは」
挑発気味に言うツヴァイ

「いいだろう、相手になるのは私とギルフォードとダールトン、それにアイネだ。しかしその軽口を2度と叩かせないようにしてやる」
睨み付けながら言うコーネリア

「交渉成立ですね。では、機体に慣れたいので30分後にまたここで」

そう言うと向きを変えロイド達の方へ向かうツヴァイ

「分った、遅れるなよ」

その後姿にコーネリアが言う

視点 変更

特派ヘッドトレーラー前

「という訳で、このランスロットを借りに来ました」
ツヴァイがロイドとセシルに言う

「そんな急に言われましても…」
セシルが困ったように言う

「データが取れると思えばいいじゃないですか？」
ツヴァイがロイドに聞く

「まあコーネリア皇女殿下からも頼まれてるし仕方ないけどあまり
傷つけないでよね？」

ロイドは少し不機嫌そうに言う

「頑張ってみます」
そう言いランスロットに乗り込むツヴァイ

ツヴァイは基本動作の確認を始める

「通常稼働率60%ですか、低すぎはしませんかスザク君に比べると動きが幾分遅いですね」
ランスロットの動きを見ながらそう言うセシル

「こんなデヴァイサーじゃ僕のランスロットに無駄な傷が付いちや
うよー！」
ブツブツ言いながらチェックをしているロイド

「しかし、命令ですからね」
ロイドを慰めるような言い方をするセシル

視点 変更

ランスロットの中

「60%での動きは慣れているから大丈夫だけれど、問題は60%で勝てるかどうかだね　ん、電話？」
ポケットで鳴っている携帯に目を向ける

「（リヴァルか、こんな時になんだ？）ハイ、ゼブルです」
ヘルメットを取り携帯を耳に当てる

「なあ、お前とガーベスの欠席理由って2人とも風邪だよな？」
リヴァルが聞く

「えっ？ガーベスちゃんも休んでんの？」
驚くゼブル

「ああ、そうなんだよ。ガーベスって携帯を持ってないだろ？だから連絡がつかなくてさ」

「（話せないから持っても意味が無いんだよね）」

「分かった。今日1度学校に行くからその時話そう」
ゼブルが言う

「ああ、待ってるぞ」
通信が切れた

「……………」
仮面を付け、再び操縦に戻るツヴァイ

視点 変更
第一訓練場中央部

「準備はいいか？」
コーネリアが聞く

「勿論ですよ」
ツヴァイが乗っているランスロットを4機のグロースターが囲む形で立っている

「……では、いざ尋常に勝負！」

「（以外に和風だね）」

笑いながらそう思うツヴァイ

「ちょっと時間が押してるのでさっくりと終わせますよ？」

そう言いながら2本のMVSを抜くツヴァイの操るランスロット

「ふざけるな！」

アイネが最初にランスを向けて来た

それを腕から出たシールドで受け流しMVSで両腕を切断

「な!？」

そのまま足を使い転ばせ、さらに両足も切断し動きを完全に封じた

「そんな、こんな容易くやられるなんて」

驚愕の顔を見せるアイネ

「まずは1人目」

そう言うとダールトンの乗るグロースターに向かうツヴァイ

視点 変更

特派ヘッドトレーラー内

「そんな！こんな事が」

モニターを見ながらセシルが言う

「どうしたんだい？」

いつもより大きい声に驚いたロイドが聞く

「通常稼働率が95.2%です！スザク君を超えています」

枢木スザクの通常稼働率94%、それを凌駕するパーセンテージで
ある

「そんな凄いデヴァイサーだったなんて、凄いね！」

喜びながらモニターを見るロイド

視点 変更

第一訓練場中央部

ランスロットがダールトン機に近づくと

「小癩な！」

ダールトン機からスラッシュハーケンが放たれるが

「ふ！」

ランスロットは飛び上がりそれを避け、尚且つ上からダールトン機に突撃をかける

「ふふ、これならどうだ？」

突撃に気付きランスを上にも構える

「危ないですね」

然程慌てずに持っていたMVSをランスに向かって投げる

「何!？」

反応が遅れランスにMVSが当たりランスが壊れる

「2人目」

MVSを投げてすぐランスロットのスラッシュハーケンを4つ全て同時に撃ちダールトン機の両手足を破壊する

「く、此処までか」

「ロイドさんあれは！」
セシルがロイドに言う

「なんで彼はハーケンブースターのパスワードを知ってるの!?!」
驚いた様に言うロイド

MVSを回収し次にギルフォード機に目を付け向かう

「スピードに追いつけないだど!」

アサルトライフルを乱射するもランスロットの機敏な動きにグロースターが付いていけない

「これで」
MVSを構えギルフォード機に近づこうとするが

「ギルフォード無事か？」
コーネリア機が放ったスラッシュハーケンでランスロットが下がった

「申し訳ございません、姫様」
ランスを持ち直しギルフォード機がコーネリア機に近づく

「いや、今回は相手が悪い。挟み撃ちで倒すぞ」

「イエス・ユア・ハynes！」

そう言つと

ランスロットを逃がさない様に周りを回りながら距離を縮めていく

「では、これで」

ツヴァイがそう言い、ランスロットの両手にあるMVSを投げる

「馬鹿な!？」

「何と？」

急に飛んできたMVSを避けれずグロースター2機の足に見事に当て2機共バランスを崩し倒れる

「3人目」

そう言いギルフォードのグロースターに当てたMVSを拾い同じく両手足を切断した

「貴女で最後ですコーネリア殿下」

コーネリア機に向かってツヴァイが言う

「まだ終ってはいない！」

機体を起こし声を上げるコーネリア

「では、終わせましょう」

そう言いスラツシュハーケンを手刀の様に構えコーネリア機に襲い掛かる

「はあああ！」

コーネリアが叫び、コーネリア機からスラツシュハーケンが放たれる

「ほいっと」

コーネリア機のスラツシュハーケンを避け手刀型のスラツシュハーケンでコードを切断し更に加速してコーネリアに向かう

「クソ！」

ランスを構えてコーネリア機も突っ込んでくる

「ランスの弱点は懐に入られたら終わりって事なんですよね」

シールドでランスを受け流し至近距離でスラツシュハーケンを放つ

「フィニツシュ」

コーネリア機の両手足を破壊した

「此処までか」
機体から降りたコーネリアが言う

「申し訳ございません姫様。我等の力が及ばず」
ギルフォードが頭を下げて謝罪の言葉を述べる。その後ろでダール
トン、アイネも同じ姿勢をとる

「仕方なかるう、あれほどの腕では」
壊された機体を見ながら言うコーネリア

ランスロットから降りたツヴァイがコーネリアに近づき

「今までの御無礼深くお詫び申し上げます」
地面に膝を付け左腕を胸と平行に当てブリタニア独特の服従のポ
ズを取った

「……………」
ツヴァイの行動に静かに目を向けるコーネリア

「コーネリア様に本気で向かってきてもらいたいが為とはいえ御無
礼の数々は拭いようのない事実でございます。しかし、それでは俺

の気分が収まりません。何とぞ罰をいただきたい」
頭を下げながら言うツヴァイ

「皇族に対するあの口の聞き方は嚴重な処罰の対象になるぞ？」
コーネリアの冷たい声が響く

「覚悟は出来ております」
声色を変えずに言うゼブル

「：なら仮面を取れ」
コーネリアが言う

「失礼ながらそれはだけは出来ません」
ツヴァイが立ち上がる

「何故だ？」
コーネリアが聞く

「俺はある人達以外にこの仮面を外す事は絶対にしません」
ツヴァイは仮面に手を当ててながら言う

「何だと？」
コーネリアが少し怒気のある声で言う

「俺の正体を知っているのは現在2名しかおりません。その内1人は皇帝陛下です。この仮面を人前で取るのは皇帝陛下ともう1人のみと心に決めております。それでも取れとおっしゃるのでしたら、俺はラウンズの試験は失敗として構いません」

皇帝シャルルにはVV経由でもうツヴァイの情報は送られているだろうと判断しツヴァイが言う

「何故隠したがるのだ？」

横からダールトンが聞く

「この仮面は俺の正体を知る者を守る為の顔です。そしてこの仮面を取った俺は又違う者を守る為の顔になります。他にも素顔を晒してしまいますと守るべき対象に迷惑をかけてしまうのです」

ツヴァイが説明をする

「つまりその仮面は正体を知る者を守る為の仮面だと言うことか？」

今度はギルフォードが聞く

「はい、この仮面を取れば俺はツヴァイ・ドウでは無くなります。そしてこの仮面を付けた顔こそツヴァイ・ドウなのです」

声を大きくしながら言うツヴァイ

「そうかもうよい、では、お前の試験の結果を伝える」

コーネリアがツヴァイに近づき言う

「お前の卓越した機体の操縦技術は認める。しかし皇族である私に對してのお前の態度は演技であつても許されるものではない」
ツヴァイを少し睨みながらコーネリアが言う

「……」

何も言わずただ聞く

「しかしラウンズに必要な忠義の心を持っている。正体は皇帝とたつた1人にしか見せず皇女である私にですら見せない正体、皇帝陛下に對する忠義の現れとして認識する。よつて貴殿ツヴァイ・ドウは私の試験の合格者とする！」
周りで大きな歓声と拍手が上がつた

「ありがとうございます」

ツヴァイがコーネリアに頭を下げ礼を言う

「私が担当した試験の内容はナイトメアの操縦技術と忠義だ。本国の最終試験は生身での実力と皇帝陛下のお眼鏡に適うかなのだが……お前のことは既に皇帝の知る所にあるみたいだからな少し気楽にやるといい」

コーネリアがツヴァイの背中を叩きながら言う

「試験合格、おめでとう」

「ふ、中々やるではないか」

ギルフォードとダールトンがツヴァイに近づく

「御2方のお陰です。約束は守ってくれたんですね」

「いや実は姫様は前から知っていたのですよ」
ギルフォードが言う

「は？」

ギルフォードの言葉が理解できず聞き返すツヴァイ

「昨日の会話は全て録画されていて姫様は姫様が出て行った後の会話を
見えておいでなのだ」

ギルフォードがツヴァイに言う

「と言う事は？」

コーネリアの方を向くツヴァイ

「お前風邪引いているらしいな大丈夫か」
笑いながら言うコーネリア

「そう言う事ですか、皇女殿下に心配されるとは思いませんでしたよ。
ちなみに熱は37度まで下がっていますので大丈夫です」

ツヴァイが笑いながら言う

「そんな状態で試験を受けたのですか？」
アイネが聞く

「たまに頭がボーっとするけど、咳は治まってきているから大丈夫です」

ツヴァイがアイネに言う

「では、結果は本国の父上に申ししておく、今日は帰って休むがいい。報告はまたする」

コーネリアが言う

「ではお言葉に甘えて……」
帰ろうとしたツヴァイだが

「あのツヴァイ……殿」
アイネに呼ばれる

「（殿？）ん？何でしょうか？」
急に殿と呼ばれて困ったツヴァイだがアイネに聞く

「あの……知らずとはいえ暴言を吐いたこと深くお詫び申し上げます。

実は僕もラウンズになりたいと思っています。頑張れば僕も貴殿みたいに強くなれるでしょうか？」
もじもじと手を弄りながら言うアイネ

「自分が命をかけてでも護るものを見つけるといい。人は護るものがあればこそ強くなれるのだから、例えそれが人であれ物であれ」
アイネにそう言うツヴァイ

「しかし……」
ギルフォードが呟く

「そう、護るものを持つという事は同時に弱点も増える事になる。大切な人が人質されたらパニックに陥るでしょう？ですから、弱点である護るべきものを護る為にさらに強くなってはならないのです。その為に鍛えた時間は護るものも理由も無く鍛えた時間の数十倍の質になる。その時間が重なるに連れ貴女は本当に強くなっています」

真剣な口調で言うツヴァイ

「護るべきもの……」
自分の胸に手を当てながら呟くアイネ

「このお2人もコーネリア様を護るため、コーネリア様はユーフェミア様を護るために此処まで強くなられたのです。貴女も見つけ、誓い、護りなさい。そうすれば貴女は俺より強くなるかも知れませんよ」

アイネの頭に手を当てながら言うツヴァイ

「はい！」

笑顔で頷くアイネ

「では、帰らせていただきます。ちょっと煙たくはなりますがご容赦を」

そう言うつと煙玉を放ち辺りが白く染まる

少しして煙が消えると

其処にはツヴァイの姿は無かった

「ふふふ、面白い奴じゃないか」

コーネリアは笑いながらツヴァイがいた場所を見る

「気に入りましたか？」

ダールトンがコーネリアに聞く

「ああ、惚れてしまいそうだがアイネはあいつに本当に惚れたみたいだな？」

アイネの方を見ながら言うコーネリア

「いえ、そんな！僕は別に……」
顔を赤くしながら言うアイネ

「好きなら好きといえれば良からうに」
そんなアイネに少し意地悪をしたコーネリア

「確かにツヴァイ殿は強くて優しい人のはずです、それは見れば分かります。しかし、あの人からは特別な何かを感じます」
胸に手を当て考えるアイネ

「何か？具体的には何だ？」
コーネリアが聞く

「力といますか、能力といますか？は分かりませんが昔小さい頃に似た感覚を放っていた子がいました」
昔の事を思い出すアイネ

「それはどんな子だったんだ？」
ダールトンが聞く

「喋るのが苦手で、可愛くて優しくして私の初恋の相手です」
顔を赤くしながら言うアイネ

「今は何処にいるか知ってるのかい？」
ギルフォードがアイネに聞く

「このエリア11にあるアッシュフォード学園という所に学生として通っているらしいです。会いたいのですが僕の事を忘れていませんか、偶然的な出会いにしたいのですが」
寂しそうに俯きながら言うアイネ

「そうか……なら明日からその学園に入学すればよい」
コーネリアがサラッと言う

「何を言っているのですか！？そんな簡単に！」
アイネが驚き言う

「私は腐っても皇女だぞ？その位の権力はある」
コーネリアがアイネに言う

「しかし、秘書の仕事もありますし、ユーフェミア様が騎士を選ばれるまでの補佐を勤めなくてはいけません」
アイネも負けじと言う

「気にするな、私の秘書の仕事はギルフォード、ユフィの護衛はダ

「ルトンがする。異存はないな？」
2人に聞くコーネリア

「勿論でございます」

「騎士として当然かと」

2人とも反論も無く受け入れた

「だから気にせず通えばよい、お前も青春を味わいたいだろ？」
コーネリアは笑いながら言う

「コーネリア様、感激の極みです！」

コーネリアに抱きつきながら言う

「こら、秘書風情が姫様に抱き付くなど」
ダルトンが止めようとしたが

「まあ、よいではないか。ギルフォード学園入学の手続き頼むぞ」
コーネリアが止めギルフォードに言う

「イエス・ユア・ハイネス」

そう言うと室内に戻り始めるギルフォードであった

視点 変更
アッシュフォード学園

一旦自室に戻り制服に着替え学校に登校

クラスに向かう途中で人だかりを見つけ近づくと

「あれスザクじゃないか、その制服を着てるということはもしかしてこの学校に入学したのかい？」
制服を着たスザクが猫を持っている

「君はあの時の　　この生徒だったんだね、僕も昨日から入ったんだ」
スザクもゼブルに気付き声をかける

「2人は知り合いなの？」
カレンが2人に聞く

「数日前にゲッターで偶然会ってね、凄いなだよ彼が女性と歩いて

いてんだけどその女性がなんと皇女殿下だったんだ！
ゼブルが興奮気味に話すと

「「皇女殿下！」」
他の皆も驚く

「……」
一瞬だがルルーシユの顔に形容できない何かが映った

「そういう事は出来るだけ
スザクに止められる」

「俺は昨日と今日は熱で休んだよ。てか、今更だけどこの
人だからって何？」
ゼブルがこの2日会えなかった理由を説明し、人だかりの理由を聞く

「実は
言葉を濁すスザク

「俺が屋根から落ちそうになった所をスザクが救ってくれたんだ」
ルルーシユが代わりに説明をした

「そうなんだ。ルルーシユさんは運動神経無いんだから無理なこと

はするもんじゃないよ。話を変えるけどスザクって部活決めた？知ってると思うけどこの学校は部活に属さないといけないんだ」「ルルーシュに注意をしスザクには部活の事を聞く

「ああ、知ってるよ」

頷くスザク

「なら生徒会はどうだい？ミレイ会長どうかな？彼は運動神経抜群だよ。何かあったら軍人だし助けて貰えるよ」

ミレイに向かって言うゼブル

「えっと、ゼブルあのね、彼少し前に生徒会に入ったのよ」

ミレイがゼブルに言う

「あ、そうなんですか？じゃあ、2回目の自己紹介だけど、俺はゼブル・オウサルト、この前一緒にいた子はガーベスちゃんって言うんだけど、俺の風邪が移っちゃったみたいで今日は休んでるみたいなんだよね。とにかくよろしく」

握手を求めたゼブル

「ああ、僕は枢木スザク。よろしく」

その握手に応じたスザク

「あ！もうすぐ体育館に行かないと」

シャーリーが気付いたように言う

「俺は帰るよ。病み上がり出し、ガ―ベスちゃんのお見舞にも行かなくちゃいけないしね」
ゼブルが皆に言う

「ああ、じゃあまた明日」

「気をつけるよ」

「また、明日」

皆が挨拶を返してくれる

それに手を振って答えるゼブルであった

視点 変更

ガ―ベスの部屋

不法侵入さながらに音をたてずに扉を開ける

「……………」

それに気づいて目を開けてゼブルを見つめるガーベス

「起こしちゃったかい？」

そのガーベスに向かって近づき聞くゼブル

【いえ、大丈夫です】

そう言うが顔は赤い

ゼブルが手を額に当てると温かった

【俺の風邪が移っちゃったみたいね。今度は俺が朝まで看病するよ】
近くにあるタオルを見つけ水で濡らしガーベスの額に置く

【今度は勝手に何処かに行かないで下さいよ？】
その手を握り目に涙を浮かべて言うガーベス

【ああ、勿論だよ。だから安心してお休み】
手で優しく頬を撫でる

【あの、私が寝るまで頭を…その…えっと】
何か言いたそうにゼブルを見る

【どうして欲しいのかな？】
意地悪そうに笑うゼブル

【あつ……頭を…手で……その】
ベットの中でもじもじと体を揺らすガーベス

【これがいいのかな？】
流星にやり過ぎると拗ね始めるのでガーベスの頭を優しく撫でるゼブル

【はい……凄く気持ちいいです】
目を頑張って開けながら言うガーベス

【無理しないで寝なさい。ずっと俺が隣にいるから】
撫でながら言うゼブル

【は…い………】
少しすると寝息を立て始めるガーベス

「（寝ちゃったか、可愛いね。そうだこの首飾りを着ければ治りも早い筈だ！てか俺の風邪いつの間にか治ってるし、よく分からないけど、まあいいか）」
ガーベスの首に首飾りを巻くゼブル

「（とにかくお休みガーベスちゃん）」

頭を撫でながら笑うゼブルであった

第十七話

本編 6

ゼブルと奪われた 仮面

(後書き)

遅い投稿となつてしまいました

それに見合うだけの長いものになってしまいました

第十八話 本編7 ゼブルとコーネリア を 撃て (前書き)

何かが色々と壊れたものになってしまいました

誤字脱字はいつも通り報告でお願いします

第十八話

本編 7

ゼブルとコーネリアを撃て

ブリタニア軍ナイトメア製作所

「第七世代のナイトメアフレームでして、その能力は通常の…」
ロイドがコーネリアに話しかけている

「そのランスロット、パイロットはイレブンと聞いた」
コーネリアがロイドのほうを向き言う

「はい、名譽ブリタニア人です。しかし…」
ロイドが言う

「一等兵から准尉に特進させた。それだけで満足せよ。ナンバーズになどに頼らずとも、私は勝つてみせる」

一等兵から准尉

イレブンである人間の階級が6段階も飛ぶと言うこと階級社会であるブリタニアでは殆どありえない事である

「そうですか。ツヴァイ・ドウ卿は何と言っておりましたか？」
残念そうに聞くロイド

「一度乗れば充分だと言っていた。もう乗る気はないらしい」
コーネリアが言う

「そうですか」
さらに残念そうに言う

視点 変更

アッシュフォード学園2年生クラス

「へっつくしょん！」
くしゃみをしたゼブル

『大丈夫ですか？もしかして、まだ治っていなかったんですか？』
心配そうに見るガーベス

「いや、風邪は治ってるはずだよ。多分誰かが噂してるんだよ（ハッピールかな？それともVV？意外にロイド君辺りかな？）」
笑いながら言うゼブル

「なあ、知ってるか？今日5限目に転校生が来るんだってさ！」
リヴァルが2年生徒会メンバーに言う

「また？スザクが来たばかりなのに？てか時間もセリフも同じ！？」
ゼブルが言う

「でもよ、今度は女子らしいぞ」
リヴァルがゼブルに言う

「へー、よかったね女子メンバーズ」
ゼブルが女子メンバーの3人に言う

「でも、どんな子が分からないよ？もしかしたらゴリラみたいな人かもしれないし」
シャーリーがゴリラの動きを真似しながら言う

『それは少し嫌ですね』
ガーベスが苦笑しながら言う

教室の扉が開き白いジャージを着た男の先生が入ってきた

「先生が来たぞ。自席に戻れ」
ルルーシュが言い、各々の席に座る

「えー、皆も薄々気付いているようだが一昨日に続きまた転入生がこのクラスに入る事になった。入って下さい」
（教師が敬語？かなり地位がある名家の子なのか？それとも…）

教師が言つと女子の制服を着たオレンジ色の髪の女性が入ってきた。
顔立ちは美人なのだが眼つきが少し鋭い

それを見て周囲の男が反応する
中には
「踏まれたい」
などの声も聞こえる

「アイネ・ナハトムだ。忙しくてあまり話さないだろうが、よろしく頼む」

淡々と言うオレンジ色の髪の女性（以降アイネ）

（あれ？何で学校に？でもスザクも同じだしな。軍人って以外に規制が緩いのか、それとも暇なのか）
などと考えるゼブル

「ええ、座席は何処に「先生、僕はあそこがいいです」… ガーベスの隣か、確かに誰もいないし大丈夫だろう」
先生の話を遮りガーベスの隣の席に指を刺した

『初めまして、ガーベス・ミロツトですよろしくお願いします』
隣に座ったアイネに自己紹介をするガーベス

「やっぱり…」
ガーベスの顔を見ながら頷くアイネ

『え？』

「僕の事を忘れたのかガーベス？昔、よく一緒に遊んだら？」
自分の手を胸に当てながら言うアイネ

『…！もしかして、アイネさんですか？』
嬉しそうな顔でガーベスが聞く

「思い出してくれたのか！？よかった！」
そう言うとガーベスに抱きつくアイネ

『アイネさん、苦しいです』
懸命に紙を見せるガーベス

「すまない、嬉しくってついやってしまった。痛かったか？」
ガーベスの肩を掴み揺らしながら言うアイネ

『いえ、大丈夫です』
揺られながら書いたので字が歪になっている

「でも、本当によかった。てっきり僕の事を忘れているのかと思っ
ていたぞ？」
今度は優しく抱きついて言うアイネ

『すみません、会いたかったのですが軍に入ってから忙しいと聞い
ていたので私が邪魔をしたらいけないと思ひまして』

「そんな事は無い！僕はずっと会いたかったんだぞ？」
ガーベスを見つめながら言うアイネ

(ドラマなんかだとキスシーンに移行しそうな雰囲気だな)
などと考えるゼブル

「2人は知り合いなの？」
前の席に座るカレンが聞く

『ええ、昔はよく一緒に遊んでいたんです』
カレンに言うガーベス

「ガーベス！僕は君を守れるくらい強くなったんだ。今はコーネリア様の親衛隊の副隊長を務める程だ！だから約束通り僕のお嫁さんになってくれ！」

教室が騒がしくなる

(まあ、急に美少女が美少女に結婚を申し込んだら騒がしくなっても当然かな)

ゼブルは冷静に考える

「質問いいですか？」
リヴァルが興奮しながら手を上げ、聞く

「何だ？」

少し睨みを効かせた目で聞く

「俺はリヴァルって言います。質問は女性同士で結婚は無理では無いでしょうかという事なんですけど」
周囲の人たちも聞きたがっていたのか耳を傾けている

「僕だって分かっている。でも僕にはガーベスが必要なんだ！ガーベスは僕の太陽なんだ！結婚できなくても軍人である僕がガーベスを養うことは出来る。それに男なんか僕に僕のガーベスを汚させるものか！それにある人に命をかけてでも護る対象を見つければ僕はもっと強くなるって言われたんだ。ガーベスを護る為に僕はまだまだ強くなれるんだ！だから同性とか関係ないんだ」
興奮しながら言うアイネ

熱く語りだすアイネに周りはどう対処すれば良いか分からず困惑する
「だってよ、ゼブル」
それを聞いたリヴァルがゼブルに言う

「……何故俺に振る？」
真顔で聞く

「お前ガーベスの彼氏だろ？此処はかつこよく『俺の女に手を出すな！』とか言ってみたらどうなんだ？」
リヴァルのセリフに一瞬だがアイネからドス黒い殺気が放出された

「……ルルーシュさんにパス」
それを感じたゼブルは横に座るルルーシュの肩に手を乗せながら言う

「何で俺に丸投げするんだ!？」
その手を振り解き聞く

「ここは知能派のルルーシュさんに任せたほうが無難かなと思って……いや本当はまだ、死にたく無いだけです」
アイネの邪悪な波動がゼブルに襲い掛かるのでルルーシュを盾にするように構える

「本当なのかガーベス? コイツとお前が付き合っていると云うのは?」
ゼブルに指を指しながらアイネが聞く

『ごめんなさい、私はもうゼブル様と将来を約束した仲なんです』
顔を赤くしてガーベスが言う

「嘘だろ!? 僕のガーベスがこんな冴えない男に! ツヴァイ殿は分かるぞ私も心が移りかけたし、でもこんな凡人顔の男に僕のガーベスが!」

泣きながら叫ぶアイネ

「（何で皆俺なんかに惚れるかな）まあ、決めたのはガーベスちゃんだからね。今からでもガーベスちゃんの心を俺から君に移せるかもしれないよ？」
それを見てゼブルが慰めるように言った

「本当か？よし、僕は何をすればいい？」
恋敵の筈のゼブルに聞くアイネ

「そうだね、今日の放課後ショッピングにでも行って来たらどうかな？」
それを律儀に教えるゼブル

「なるほど、それはいい考えだ！ガーベスいいか？」
顔をキラキラさせながらアイネが聞く

（この子馬鹿か？ガーベスちゃん関係の詐欺に遭いそうで心配だな）
ゼブルが思う

【どうでしょう？】

【一緒に行って、俺に比べてどうだったのか君の口から言わないと効果無いね】

【……もし、私がアイネさんを取ったらゼブル様はどうしますか？】

【君が決めた事に俺は反対しないよ。俺は君を幸せにしたいんだからね、その為に俺より彼女を選ぶのなら。俺はそれを受け入れるだけよ】

【私はゼブル様以外の人と一緒にいる気はありません。それにこういう時は俺の女に手を出すとか言っただけで欲しかったんです】

【ガースちゃんが嫌がるのかなと思ってね】

【女の子は好きな人に自分を独占して欲しいんですよ】

【そう言うもんかね？】

【そう言うもんなんです】

【分かったよ】

「どうなんだ？」

アイネがガースに聞く

「だが、この子は俺の所持品なんで俺に許可を取って貰おうか？」
アイコンタクトで『どう？』とガースに聞く

『オツケーです』

アイネに見えないように言うガース

「何？ガーベスは僕のだ！」
アイネがゼブルに食って掛かる

「残念だな、ガーベスちゃんは俺の物だ！」
決めポーズと共に言うゼブル

しかしその目は

ガーベスからのカンペを見る

『ちゃんは抜いてください！かつこ悪いです！』

「（了解）この子は俺の財産だ俺に許可を貰うのが当然じゃないのか？」

「なら僕と勝負しろ！」
アイネが戦闘態勢に入る

「何でそうなるの？」
ゼブルが聞く

「勿論どちらが本当にガーベスを護れるか、勝負だ！」
チヨロチヨロ変なフットワークで動くアイネ

「腕っ節の強さで男の俺に勝つだど？はっはっは可笑し過ぎて腹筋

「が更に割れてしまつぞ！」
ゼブルが言う

「舐めるな！僕はコーネリア様の親衛隊副隊長だぞ！」
アイネが言う

「俺の師匠は世界広と言えどあれ程最強の名に相応しい人物を今だかつて見たこと無いぞ！（バトルマニア、って言うより殺し合いマニアかな？俺も何度殺されそうになった事か）」
目に涙を浮かべあの時の事を思い出すゼブル

「そつそんなハツタリ僕には効かないぞ！」
それを見たアイネが変なものを見るような目で見る

「じゃあ、ルルーシュさんスタートの合図をお願い」
ルルーシュに言うゼブル

「お前らさつきから何してるんだ！LHRとはいえ授業中だぞ！？」
先生がキレた

「まあまあ、先生面白そうじゃないですか？」
ミレイが何故か先生の隣にいる

「き、君はミレイ君じゃないか！？なんで3年生がこのクラスにいるんだ？」

問いかける先生

「気にしないで下さい。では位置に付いて…ヨイ、ドン！」
ミレイの声で戦いの始まりを告げる

「はっ、ふっ、とりゃ」

始まった瞬間にゼブルに拳を放つアイネ

「おー、早いな」

リヴァルが感心言うしながら

「1つ1つの拳動が大きすぎだよ？動かない相手壁とかならともかく人は避けるよ」

それをステップだけで軽やかにかわしながら言うゼブル

「煩い！」

その言い方に怒ったのか顔を引きつらせる

「それに脚の使い方がなってない。ダンスのステップみたいなものじゃないか、あっ、もしかして踊れないの？」
尚もかわしながら言う

「黙れ！」

凶星の様だ

「そうなんだ。あつ、ごめん今のはわざと。でも結構大きいね」
偶然を装い胸に手を当てたゼブル

その感想を聞いた男子たちが叫ぶ、特にリヴァル

「貴様！」

顔を怒りと羞恥で赤くする

「お！今のは良い蹴りだね。でも、スカートだからパンツが丸見えだったよ。黒はまだ早いとお兄さんは思うな」
頭を縦に降りながら言う

さらに周囲の男子が叫ぶ、特にリヴァル

「クソ！当たれ、当たれよ！」

怒りと羞恥が限界近くに達し目に涙を浮かべながら攻撃をくり出す

「後、女の子でその口調はどうかと思うよ？それに怒りで顔に皺が出来てるし、折角の可愛い顔が台無しだよ？涙を浮べるのは君には似合わないな」

頬に手を当て涙を拭いながら言う

その手を払い

「なっ、へんな事を言うな！」

今度は怒りが消え羞恥だけで顔が赤くなる

「いいね、その恥じらい顔だったら大抵の男は君にメロメロだよ。君の言っていたツヴァイって人も墮ちると思うよ」
笑いながら言う

「な！別に僕はツヴァイ殿の事なんか…その…とにかく、僕にはガ―ベスがいるんだ！ツヴァイ殿は関係無い」
戸惑いながらもガ―ベスを見て言うアイネ

「そう？じゃあ、そろそろお話タイムはお終いにしようか。ちょっとだけ俺の本気を見せてあげるよ」
右手を前に突きだし腰を少し下げ構える

「っ！」

それを見たアイネは距離を取る

「イレブンには柔道や剣道なんかがちやんとあるのに、何故か中華連邦には功夫や少林拳等の武術が全然無いらしい」
ゼブルが笑いながら言う

「何を言っている?」

急に語りだすゼブルに戸惑うアイネ

「俺の師匠は中国の出身でね、中国の武術全てにおいて免許皆伝の実力を持つらしい。俺もまだその中の一部しか教わっていないんだけどね」

実際ゼブルが習得した武術は十数種類であるが師匠のチャンは計数百種類以上も習得している

「中国?何を言っているんだ?」

知らない単語が出てきたので困るアイネ

「おっと、喋り過ぎちゃったね。まあ、君にその技を見せる気は無いんだけどね。じゃあ終らせようか、少し寝る事になるけど我慢してね」

構えを変えず動かずにいるゼブル

「何を言うかと思えば師匠の自慢か?」

鼻で笑いながら言うアイネ

「まあね、あの人の弟子である事を俺は誇りに思っているんだからね。早くおいで、終らせよう」

「はあああ!」

沈めた腰をバネの様に伸ばして拳を放つ

「おっ！今のは良い突きだね」
そう言いながら右手で突いてきた拳を受け流し、アイネの後ろを取った

「な！これはツヴァイ殿と同じ……」
後ろを取ったゼブルの動きを見てアイネが言う

「技名、流木＋首チョップ」
そのまま、アイネの首に軽いチョップを当て、当てられたアイネは
気絶した

「って言っても受け流すだけだから技って程のものじゃないんだよね。でも、首チョップは結構難しいんだよ？って聞いてないよね。
じゃあ先生保健室に連れて行きますね？」
首チョップは下手をすると人を殺しかねないので気を付けよう

「あつ、ああ」

啞然としながら言う先生

『私も行きます』

ガーベスもゼブルの後を付いて行く形が出る

視点 変更

廊下

保健室に向かって歩く2人

「（軽いなこの子、ガーベスちゃんよりは重いけどそれでも普通の女の子より軽めだ。軍人なのにこんな細い体でガーベスちゃんの為に頑張ってきたんだね）」
ゼブルが思う

「さて、ガーベスちゃんにお願いがあるんだけどいいかな？」
アイネを両肩に担ぎながら言うゼブル

「何ですか？」
ガーベスが聞く

「折角再会したんだから今日は一緒に過ごしてあげてくれないかな？」
ガーベスを見ながら聞くゼブル

「勿論です。私もお友達としてなら一緒にいたいんですけどね」
アイネを見ながらガーベスが言う

「なら放課後に保健室で起きるまで待つてあげてね。あと2時間も
しない内に起きると思うから」
ゼブルが言う

ゼブルも大まかな時間は分かるが、師匠のチャンは1分単位で調節
が出来らしい(俺のギアスなんかよりあの強さのほう絶対チ
ートだな)

そう思うゼブルであった

『はい。私の事をこんなに思ってくれている人に会えて嬉しいです。
でも私の正体を知ったらきつと嫌
われてしまうんでしょうね』
悲しそうに顔を俯かせながら言う

「大丈夫だと思っけど言っっちゃ駄目だよ?でも、もしそうだったと
しても俺は絶対に君を離さないから安心して」
ゼブルはガーベスの頭を撫でながら言う

『ありがとうございます。ゼブル様……アイネさんもツヴァイと言
う人と結ばれればいいのですが』
嬉しそうに頭をゼブルの手に寄せながら言う

「まあ、難しいだろうね」

『何故です?』

ガーベスが聞く

「（だって、俺がツヴァイだもん。アイネちゃんは嫌いじゃ無いけどガーベスちゃんがいるからね、でもガーベスちゃんが許してくれるなら重婚もありかな？重婚だったら幸せな家庭を送れそうだな。でもガーベスちゃんに俺がツヴァイって事は教える気は無いから）……口調をもっと柔らかくして男勝りの性格を直したら文句無いんだけどね」

未来の事を考え少し嬉しくなるゼブル

『昔も男の子みたいだったんですけど、そのまま男らしく育ってしまっただんですね。その為か私なんかを護ると言ってくれたんでしょうね、ですから私はアイネさんに女の喜びを知って欲しいんです。そうしたら自然に女性らしくなると思っています』

笑顔でゼブルに言うガーベス

「（ガーベスちゃんのこの純粋な考えを見てると俺が捻くれてる考えを持つてるみたいでなんか悲しくなるな）そうなる事を望むしかないね。ハッピーエンドの為には」

ガーベスを見ながらゼブルが言う

視点 変更

生徒会クラブハウス

猫祭りの準備をしている女子2名とその他1人

「ねえ、大事なこと聞いてもいいかな？」
シャーリーが聞く

「ん、何？」

カレンがダンボールの中を整理している

「……………」

「カレン、私たちに隠し事してない？」
猫の遊び場所？を作りながらカレンに聞く

「え？」

猫（以降アーサー）を掴むカレン

「……………」

「いいよ、隠さないでも」

「いや、何の話？」

猫を抱くカレン

(俺ってハイドのギアスして無くても影薄いのかな?)

ゼブルが机でペンを弄りながら2人の会話を見る

「話してよ、私驚かないから……この間ね、見ちゃったんだ」

「(何を?ってカレンちゃん、何でナイフ出してんの!?アーサー逃げる!)」

カレンが持っていた小さい袋の中からナイフが出てきた。猫のアーサーが逃げようと必死になっている

「付き合ってるんでしょ?ルルと」

シャーリーがカレンの方を向き言う

「ルル？」

よく分からない様だ

「だって、この間校庭で！」

「(ガーベスちゃんとゲッターに行ってた時かな?それとも熱で休んでた時?)」

考えながら眺めるゼブル

「違う違う、待ってよ。あれは向こうが勝手にカレンが言う」

「ルルから!？」

驚いた様に聞くシャーリー

「いや、そんなんじゃないよ」

「(くっくっくっく)」

見てられなくて顔を下げ笑うのを必死で堪えるゼブル

「でも、この前だってその猫捕まえようとして」

アーサーを見ながらシャーリーが言う

「あれは違うでしょう?それにキス位でそんな…」

「位って?じゃあそれ以上の!？」

驚愕に顔を歪ませるシャーリー

「(くっく、ヤバイ…我慢が…腹が痛い。恋する乙女は盲目って言うけど本当だな…マジでヤバイ)」

シャーリーの勘違いの凄さが想像を超える為面白すぎて限界に近づいていた

「違う!変な想像ストップ!周り見えて無さ過ぎ」

「はっはっはっはっは！！駄目だ…はっは…限界だはっはっはっはっはっは！！！！」

限界が来て笑い出すゼブル

「何時の間に!?!」

2人が見事にハモった

「はっ、笑った笑った」

涙を拭い余韻を楽しむゼブル

「……聞いてたの?」

シャーリーが冷たい声で聞く

「うん、最初から」

その声で落ち着いたゼブルが言う

「何時からいたの?」

カレンが聞く

「君達が来る前からだよ。くっくっく、また始まった。くっくっく」
ゼブルは再発したように笑い出す

「とっとにかく私とルルーシュは関係ないから。あっ」
カレンが出ようとすると

「ルルーシュ？」
前からスザクが来た

「じゃあ、そう言うことで。何でもないから」
カレンがスザクに言いながら部屋から出る

「くっくっく、スザク、俺もちょっと席外すから。くっくくくく」
その後、笑いながら部屋を出るゼブル

「えっと、ルルーシュは？」
謎めいた2人を見たスザクはシャーリーに聞く

「知るわけ無いでしょ？あんな奴」
目に涙を浮かべながら言うシャーリー

不機嫌だったカレン、笑っていたゼブル、泣いているシャーリー
「僕は一体どうすれば……」
スザクの苦悩は続く

視点 変更

サイタマゲッター

G-1ベース

「責任者達の掃除は終わったようです」
ダールトンがコーネリアに言う

「うむ、時間でもあるしな。始めるか？」
コーネリアが言う

「はっ……全軍に告げる、これよりサイタマゲッター壊滅作戦を開始する。全軍第一戦闘態勢に移行」
G-1ベースから機体が次々に出て行く

「……」
コーネリアの後ろで腕を組みながら立つツヴァイ

「な？ 貴様は何者だ！？」
初めてツヴァイを見た人は驚いた様に言う

「……」
しかしツヴァイは変わらず無言

「ツヴァイか、どうして此処に？」
それを見たコーネリアがツヴァイに聞く

「あんな報道をしておいておいてよく言いますね」
ツヴァイがコーネリアの右隣に並ぶ

「どの位前から此処にいたんだ？」
左隣にいるギルフォードが聞く

「今さつきですよ、ダールトン卿が作戦の開始を言ったあたりですね」
ダールトンを見ながら言う

「ふ、ゼロは来ると思うか？」
ツヴァイにコーネリアが聞く

「まあ、何かしらは来るでしょうね」
少し考え言うツヴァイ

「何かしら？」

「ゼロが来るかもしれないし、ゼロを見て真似をする者が出るかも知れません。どちらにせよ何かが起こる気がします」

ツヴァイは戦況を観察しながら言う

「そうか、ならいいのだがな」

「それよりクライネ・ジーク卿はいないのですか？ダールトン卿やギルフォード卿がいらっしやるのに、もしかして前線ですか？」
ツヴァイがあたりを見回しながら言う

「……アイネの事か？如何していつもその呼び方をするのだ？」
少し考えクレイネ・ジークがアイネ・ナハトムだと気付き聞く

「前の世か……アイネ・ナハトムとクライネ・ジークを繋げると俺の好きなある音楽の名前になるんですよ。名前は教えませんが悪しからず」
クラシックが好きなのである

「……アイネは今日学校に行っている。アイネにもキチンとした学校の授業を受けて、少しでも頭が良くなって欲しいのだ」
3人が同じ風に首を縦に振る

「学校ですか、スカート姿が想像しにくいですね。それより、ナイトメアの操縦は確かに上手いと思います、女性で副隊長は納得のいくものですが。秘書なのに頭悪いんですか？」
実際は見ているのだが

「……報告書の字が間違っている事が多いんだ」
ため息を吐きながら言う

「その度に私が直すのだが、量が多くて」
ギルフォードもため息を吐く

「……違う秘書を雇えば良いのでは？」
誰もが思ふ疑問である

「まあ、そう言うな。しかし何も起こらなかつたら、暇でしかたない」
笑いながらコーネリアがツヴァイに言う

「それならば、俺1人とその他数人で貴女に挑みましょうか？」
少し考え

「……1人では駄目か？ランスロットやらに乘せてやるぞ？勝てば褒美付き」
と言うコーネリア

「褒美は何ですか？」
ゼブルがコーネリアに聞く

「好きなものを言ってみる」
笑いながら聞く

少し考え

「では、コーネリア様の膝枕で」
ふざけ半分で言うと

「……」満更でもない顔と

「……」形容できない顔と

「……」殺気が入った顔と

「……」その他冷えた顔とが

一斉にツヴァイに襲い掛かってくる

その重みに耐え切れず

「……それは冗談として、前にも言いましたがランスロットに乗る
気はありません」

と言い話題を変える

「何故だ？お前ほどの腕があれば……」

満更でもない顔の人が残念そうに聞く

「あれは枢木スザクの機体です。俺のではありませんから」
ツヴァイが言う

「しかし……」

コーネリアが言おうとすると

「この話はお終いです。どうやら来たようです」
ツヴァイが画面を見ながら言う

「何？」

コーネリアも画面を見る。さっきとは打って変わり真剣な顔になっている

「ゲスター隊通信途絶！」

「G47方面に敵影を確認」

「カシンスキー隊交戦中、伏兵がいたもよう」

「敵は我が軍のサザーランドを鹵獲して使用しているようです」
次々にロストしていく機体

「シンジユクの時と同じだ」

「現れたのか？ゼロが」

周囲の男たちからそんな声が漏れる

「ポイント17が落とされました！ハリー隊通信拒絶！」
橋が落とされ多くの機体が一斉にロストした

「此処までだな、全部隊に後退を指示せよ。これ以上の被害は意味が無い」

コーネリアが画面を見ながら言う

「退却ですか？」

「恐れながら、まだ戦えます」

参謀達がコーネリアの前に出て言う

「戦えんよ、これでは」

冷静に言うコーネリア

「全部隊に告げる、ゲットー外縁まで至急後退せよ。配置は問わない、ゲットー外縁まで至急動け！」

次々に市街地から離れていくナイトメア

「勝つのは私だ」

笑いながら言うコーネリア

「はい、総督は勝利の女神にございます」
ダールトンが言う

「行くか？我が騎士ギルフォードよ」
ギルフォードを見て聞く

「御下命、有難く存じます」
「そう言い出て行くギルフォード」

「お前も行くか？」
「今度はツヴァイに聞く」

「いや、俺がいなくともギルフォード卿なら大丈夫でしょう」
「口元だけ歪めながら言うゼブル」

「信号を発する機体が1機、市街地に取り残されています」
「ダールトンが言う」

「交信できないのか？」
「参報1が言う」

「破壊しろ」
「コーネリアが言う」

「そんな？敵の人質になっているのかも」
「参報2が言う」

「私は下がれと命じた。私の命令を実行できない兵士は必要無い」

コーネリアのセリフに

(ルルーシュさんと同じタイプだね。兵はコマか)

そう考えながら外を見る

煙が上がり

いたる所で火が上がっている

(一方的な暴力か)

そう考えながら

外にいる多数のナイトメアを見るツヴァイ

(この中にルルーシュさんがいるのか)

「そう言う事だ」

ダールトンが言う

「しかし!」

参報1が言う

「命を棄ててでも任務を遂行させる、私の部下なら当たり前前の事だ」
信号を発していた機体にロストの文字が浮かぶ

少しして

「また信号か？と言うことはその先に伏兵がいる。グロースターを増援して包囲しろ」

「（うん、正解だ。さすがはブリタニアの魔女だね……CCは何処の魔女だ？無所属？）」
そんなくだらない事を考えるツヴァイ

「敵影ありません」
参報1が言う

「此方の手を読んだか、本当にゼロを相手にしているようだ」
嬉しそうに言うコーネリア

しかし

「なんだ？呆気なさ過ぎる」
それから数分後次々と機体をロストしていく

更に数分後
「作戦終了。全軍第4フォーメーションに以降」

作戦が終った

「あつと言つまでしたね」
ツヴァイが言う

「シンジユクの様にはいかなかったなゼロ、それとも真似した奴か？まあいい、直に分かる」

コーネリアが少しつまらなそうに言う

「どつ言つ事ですか総督？」
参報1が聞く

コーナリアが何かを言おうとした
ところが

「ゼロだ！ゼロを発見！」
画面に映るゼロ。壊れかけた廃ビルの上にいる

「狙撃班撃て！」
指揮官らしい男が言う

射撃が足元に当たるが体には当たっていないらしい
後ろ向きで頭から落ちるゼロ

「姫様、如何いたしますか？」
ギルフォードが聞く

「うむ、畏の可能性は？」
ダールトンに聞くコーネリア

「考えられます、本人かどうかも分かりませんし。ハッキリしたのが総督の分析通りプライドの高い人物と云うことですが」
コーネリアに言う

「ならば追うだけ無駄か」

「はい、わざわざ敵の本陣まで姿を晒したと云うことは、逃走ルートを確認しての事でしょう」

「自己保身には長けているのか？なあツヴァイ？……………ツヴァイ？」
返事が無いので横を見ると

ツヴァイの姿は無い

「……………来る時も帰る時も気付かせないとは、流石だなツヴァイは」
笑いながらツヴァイがいた場所を見るコーネリア

視点 変更

下水道

「何故助けた？」
ルルーシュがゼロに聞く

「だから言つたら、死なれては困ると」
仮面を取ったゼロは黄緑色の長い髪をした女性（以降CC）だった

「条件が同じならば負けはしなかった！」
大きな声で言うルルーシュ

「負け惜しみだな、それだけの条件を揃えるのも力の内だ」
仮面を投げて遊ぶCC

「だったら揃えてやるさ、ブリタニアに負けない俺の軍を！人を！国を！」

覚悟の籠もった目でCCに言うルルーシュ

「それはそれは」

横から声ツヴァイが言う

「な！何時の間に！」

ルルーシュが手で顔を隠す

「なるほど、貴方がゼロの正体ですか。まあ、目が悪いものでして声しか分かりませんが2人とも一応ヘルメットは付けて下さい。正体を知るといふ無粋な真似はしたくありませんし、私は貴方の正体に興味はありませんから。其方の貴女は愛人ですか？」

そう言いCCに聞くツヴァイ

「お前は何者だ！？」

CCが聞く

「俺の名前はツヴァイ・ドウです。今はコーネリア皇女殿下に仕えています。もう少ししたらナイト・オブ・ラウンズになる男です」

ツヴァイが説明をする

「ラウンズだと！？では俺を捕まえに来たのか？（くそ！仮面を付けているからギアスは使えない）」
ルルーシュから焦りの表情が見える

そしてCCCがルルーシュの前で護るような形をとる

「まさか、貴方と話がしたかっただけです。俺は貴方のファンです。俺は貴方も真似して作ったんですよ」
仮面を叩きながら言う

「ファンだと？ふざけた奴だな」
CCCは笑いながら言う

「まあいいじゃないですか、それより貴方の策士が何故コーネリア様にいい様に負けたんですか？もう少し接戦出来たのではないのでしょうか？」
ツヴァイがルルーシュに聞く

「テロリスト共が俺の言うことを聞かずに勝手な行動を取ったからだ！本当だったら勝っていたのは俺だ！」
ルルーシュが感情的に言う

「なるほどイレギュラーに弱いタイプですね。だから先程条件が同じならと言っていたのですか」

うんうんと頭を縦に振りながら言う

「ああ、そうだ」

ルルーシュが言う

「では、もっと良い人材を集めなくてはいけませんね」
ツヴァイが言う

「お前に言われなくてもそのつもりだ」
ルルーシュが言う

コーネリアから貰った携帯が鳴った

「おっと、コーネリア様からのお呼び出しだ。では、また会いましょうゼロとその愛人さん。あつ、言い忘れていましたが此処からは早めに出たほうがいいですよ？今頃貴方が乗り捨てたナイトメアが見付かっているでしょうからね、此処に兵が来るのも時間の問題です。それではこれで」
手を振りながら言うツヴァイ

「お前は何者なんだ？」

ルルーシュが聞く

「只のしがたいファンですよ、それでは私は行きますので」
ルルーシュ達とは反対の方向に向かうツヴァイ

「（よく分からない奴だが、助けてくれたのは事実）礼を言っておく、助かった」

ルルーシュがツヴァイに言う

それを聞いたツヴァイがルルーシュ達のほうを向き

「それは本当に此処から抜け出してから言っただけ欲しいものですね。では近いうちに会えると良いですね」

そう言いツヴァイは歩き出した

（やはり使うコマはこの前のテロリスト達とマックス。これ以外は駄目だ、言うことを聞かない。テロリスト共はあまり信用できないが、何故だかマックスなら信用できる。もしかして俺はアイツの事を知っているのか？そしてツヴァイ、何故俺達を見逃したんだ？ブリタニア軍でラウンズになると言っていたな、少し調べてみるか）

(そろそろ、ルルーシュさんは動き始める頃かな？ガーベスちゃんを護るゼブルとゼロを護るマックス、それにVVを護るツヴァイ。1人で3役こなすのはやっぱりキツイな。まあ、ハッピーから貰った『あれ』を使えば結構楽なんだけど、『俺』じゃない『俺』が『俺』って変じゃない？まあハイド達も『俺』じゃない『俺』なんだけど……まあ、いいか。ハッピーを信じよう。うん、信じるものは救われるって言うしね)

第十八話 本編7 ゼブルとコーネリアを撃て (後書き)

次の投稿は2週間後位になると思います

次回 ゼブルと黒の騎士団

第十九話 本編8 ゼブルと黒の騎士団 (前書き)

更新が遅くなって申し訳ございませんでした

いつも通り

誤字脱字の報告お願いします

第十九話 本編8 ゼブルと黒の騎士団

2日前

金曜日の放課後

一緒に下校するゼブルとガーベス

最近はいネも混ざることが多いが今日は軍での用事があるらしく早く帰った

『ゼブル様、今週の日曜日会長さんやシャーリーさん達と河口湖に行く約束をしたのですけれど。ゼブル様も一緒に行きませんか？』
ゼブルの腕に抱きつきながら器用に書くガーベス

「ごめん、その日は用事があるんだ」
それを見たゼブルが頭を掻きながら断る

『それでは仕方ありませんね』
残念そうに俯きながら言うガーベス

「でも、ガーベスちゃんが俺の代わりに楽しんでくれれば俺が嬉し

いな」

その俯いた頭を撫でながらゼブルが言う

『皆さんとお泊まりは初めてなので楽しみですよ』
顔を上げて嬉しそうに言う

「うん、一杯楽しむんだよ」
その顔を見ながら言うゼブル

『はい、ではこれで』
ガーベスがゼブルから離れ言う

「じゃあ、来週の学校で」
手を振りながらガーベスを見送る

「（確か同じ日に日本開放戦線がホテルジャックをするんだっただな……ごめんガーベスちゃん……そういえばニーナちゃんが同性愛に目覚めるのも同じだな、色々すれば可愛くなるのに勿体無いね）」
ため息を吐きながら考えるゼブルであった

ある倉庫の中にある大型キャンピングカーの中

「どうした？早く入れ、今から此処が私たちのアジトだ
ゼロが奥のソファ―に足を組みながら言う

「それは…アンタが俺達と組むと考えて良いのか？」
扇がゼロに聞く

「ああ、私たちは仲間だ」
ゼロが答える

「この前言ったこと忘れるなよ？」
ゼロの横にいたマックスが扇たちに言う

「ああ、分かっているさ」
扇が答える

「スゲエ…何だコレ？」
玉城が車の中を見回しながら言う

「こんなもの一体どうやって」
扇がゼロに聞く

「頼んだら譲ってくれたよ、道楽者の貴族が
ゼロが答える」

「頼んだって…そんな簡単に」

「大丈夫だ、足はつかない」

「大きすぎないか？この車」
2階に続く階段を上りながら吉田が言う

「確かこの車数億円位するぞ、世界に数台しかない高級車だ」
マックスが言う

「そんなに!?!」
カレンが驚きながら車を撫で始めた

「まあ、この大きさを見る限りでは不思議でも無いな」
扇が言う

「でも、何でその事を知ってるの？」
濃い青の髪の子（以降井上）が聞く

「偶然知っただけだ」
マックスが言う

「テレビまで付いてる」
南がテレビの電源を入れると

テレビのアナウンサーが大きな建物の前に立っている
「此方河口湖のコンベンションセンターホテル前です。ホテルジャ
ック班は日本開放戦線と名乗っており、観光客等を人質に取ってお
ります」

「はあ？」
「なんだって！」
車の中にいる全員がテレビに注目する

「コレが犯人から送られて来た映像です集会で集まっている議員や
学生の姿も見られます」
その中には生徒会の女子メンバーもいる

「生徒会のみんな……」
カレンが呟く

「ん？」

それを聞いたゼロが立ち上がりテレビを見る

「動いてきたな」

「日本最大の反ブリタニア勢力だからな、意地もあるんだろう」

「俺達への？」

「かもな」

「喜ぶべきか悲しむべきか」

皆口々に言い合う

「まあ、俺等には関係ないな」

玉城がつまらなそうに言う

「（残念だけど関係あるんだな、これが）」

笑いながら画面を見続けるマックスの姿があった

視点 変更

ゼロの部屋

「ゼロ……人質どうなるのかな？」
心配そうに聞くカレン

「いずれにせよ、ブリタニア人達を生かしておく理由は無いな」
テレビの音量を消音にし後ろを向いたまま言う

「そう……そうだよね……」
俯きながら言う

それを見たマックスが
「悲しそうな顔をするな、まあ同じ学校の生徒が人質にいれば仕方ないか」
そう言いながら頭を撫でる

「何でその事を!？」
驚き無意識に手を払うカレン

「オマエがさつき独り言で生徒会がなんちゃらって言ってたからな、それで判断した」

払われた手で包帯の上から顔を搔きながら言うマックス

「うっ」

「おいゼロ、こいつ皆に配っちゃって良いのか？」

扇がダンボールの箱を持って部屋に来てゼロに聞く

「コレさ、カッコいいとは思うけど、俺達レジスタンスだし箱の中には黒色の服が入っていた」

「違う、私達はレジスタンスでは無い」
急に反対に向いてきた

「じゃあ、何だよ？」
扇がゼロに聞く

「私達が目指すもの、それは、正義の味方だ！」
立ち上がり何かを掴むような手の動きをするゼロ

「正義の味方？」
カレンが聞き返す

「なるほど、そう言う事か」

ポンつと手でジャスチャーするマックス

「分かったのか？」

ゼロが再び座り聞く

「ああ、それならクロヴィスを殺した理由にも納得がいく。よし！
なら、何を準備する？」

マックスが顔を歪めながら聞く

「本当に分かった様だな、頭の回転が速くて助かる」

ゼロが驚いた様に聞く

「準備つて、何のだ？」

話についていけない扇が聞く

「おいおい、正義の味方のすることはたった一つだろ？」
マックスが

「そう正義の味方のすることは
そしてゼロが言う」

「悪を裁くことだ!」「
綺麗に合わさった声が部屋中に響いた

視点 変更

数時間後

テレビ局の専用車『3号車』の上

車はゆっくりだが確実にホテルに近づく

「俺は車の中にいなくていいのか?」
マックスが隣にいるゼロに聞く

「ああ、構わない。どうせ直に出る事になるしな」

そうゼロが言った瞬間に目の前に4機のグロースターが道を塞ぐ
その内一番前の1機はコーネリア機だ

「また会えたなゼロ」

グロースターから出てきたコーネリアが言う

「お前は日本解放戦線のメンバーだったのか？それとも協力するつもりか？しかし今は此方の都合を優先させる。義弟クロヴィスの仇、此処で撃たせて貰う！」

杖の様な形の銃をゼロに向ける

「コーネリア、どちらを選ぶ？死んだクロヴィスと生きているユーフェミア？」

銃口を向けられても動じることなく言うゼロ

「あれ？旦那も気付いてたの？」
マックスが聞く

「どついう事だ？」
ゼロは推測で考えていたがこの推測はコーネリアの事を良く知っていないと思ひ浮かばないものだ。しかしコーネリアとは全く接点の無さそうなマックスが気付いた事にゼロは驚く

「映像で小さかったけど在日中のユーフェミアのボディーガードがいたからな。多分ユーフェミアは映像に細工してあったみたいだけど流石にボディーガードまでは考えが及ばなかったんだなあと思つてたんだが、あの動揺した顔を見れば一目瞭然だな」
コーネリアの顔を見ながら笑うマックス

「くっ！」

無意識に顔に出ていたのを気付き、マックスを睨む

「おい、何でお前はユーフェミア様の護衛の顔を知っているんだ？
後ろのグロースターからアイネが出てきて聞く

ゼロが驚いた様に体を強張らした

「！！（何だと！あいつは転校生の女、そういえばコーネリア隊の副隊長とか言っていたな……）」

「おいおい嬢ちゃん、それが人に聞く態度か？目つきも悪いし、そんなんじゃない男は寄ってこないぞ？」
マックスが呆れたように言う

「いいから質問に答えろ。そんな事は普通は知りえない筈だ」
マックスに尚も聞くアイネ

「答えは俺は普通の人より所有情報量が多いからだ。はい、無駄話終了。俺は作戦通り先に下から行ってる」
手を叩き車から降りる

「答えになってないぞ！」

馬鹿にされたと思ったアイネが大声で言う

「めんどいな嬢ちゃん、証拠を教えてやるよ……嬢ちゃんアツシユフォードの学生だろ？」

アイネに指を差しながら言う

「なっ！」

驚いた様に言う

コレにはゼロも驚いているようだ

「（何故その事を知っている！？まさか同じアツシユフォードの生徒なのか？しかしカレンには其処まで反応をしていなかった。知っていたからなのか？）」

「他にはコーネリア親衛隊の副隊長で、確か最近嬢ちゃんやコーネリアを含めた4対仮面を付けてるヤツ1人に負けるな？名前は確か、ツヴァイだったな。ラウンズ候補のツヴァイ・ドウだったな」

「何でそんな事まで分かるんだ？居合わせた軍の貴族と少しの軍務の者だけにしか伝わっていない筈だ」

アイネが聞く

「（あの時俺を助けた奴か、コーネリアと新鋭隊を1人で打ち負かすとはラウンズ候補は伊達ではないな）」

「他にも身長・体重・座高・3サイズなんかは見ただけで分かるぞ」
マックスがまじまじとアイネの体を見る

「本当か!？」

手で胸などを押さえる

「嬢ちゃんだつて人質の中にいるアッシュフォードの生徒を救いた
いだろ？」

アイネの体から目を離し言う

「何故アッシュフォードの学生がいることまで知っているんだ？」

「さっき言つたろ？俺は情報量が多いからだ。じゃあ俺はもう行く
ぜ」

ゼロのほうを見ながら言う

「死ぬなよ？」

ゼロがマックスに向かって言う

「俺は無敵のマックスだぜ？旦那は安心してな」
マックスがそう言いながら湖に向かう

「どうするつもりだ？」

コーネリアが聞く

「下から潜入するだけだ。ちょっと失礼……さてと行ってきます。とりゃ」

やる気の無い声を出し湖に跳びこむ

「なっ！下からの潜入は無理だ、出来るのであればもうテロリストを処分してるぞ」

ゼロに言うアイネ

「心配無用。彼ならやり遂げるだろう」
マックスが跳んだ場所を見ながら言う

「ツヴァイ殿がいればこんな事には」
アイネが悔しそうに唇を噛む

「では私達は2、3分後入れさせてもらうのが構わないな？」
ゼロがコーネリアに聞く

「仕方が無い」

コーネリアが言う

「コーネリア様、よろしいのですか？」

後ろにいたギルフォードが聞く

「ゼロが行く事により次の人質殺害までに若干のゆとりが生まれる、これは好機だ。ゼロも纏めて叩いてくれる」

視点 変更

ホテル内の食料貯蔵庫

解放戦線の兵士3人が三角形に並び人質を監視していた

「ひっ！イレブン…」

ニーナが目の前の開放戦線の兵士に言う

「今何と言った！イレブンだと？我々は日本人だ！」
癪に障ったのか銃口をニーナに向けて言う

「分かったわよ、だから止めて」
ニーナを庇うミレイ

「何だその言い方は、お前たち隣まで来いたっぷり教え込んでやる！」

兵士がニーナの腕を掴みながら言う

「いやああ!!」

ニーナが叫び拒む

「お止めなさい！私を貴方達のリーダーに合わせなさい」
後ろからユーフェミアが立ち上がり言う

「何だ貴様？」

兵士がニーナを投げ捨て言う

「私はブリタニア第3皇女ユーフェミア・リ・ブリタニアです」
伊達眼鏡を外し言う

周囲から大きなざわめきが起こる

「貴方大丈夫？怪我は無い？」
ユーフェミアが倒れたニーナに声をかけた

「あ、はい」

「ーナが自分を救った天使のような存在に見とれる」

次の瞬間

バン！

入口の扉を乱暴に開け

「うゝ寒、絶対風邪引く気がする」
マックスが濡れた体で入ってきた

「何者だ貴様！」

近くにいた兵士がマックスに向けて銃弾を放つ

「うお！」

それを寸前で避け兵士の顔に拳を当てる

「急に撃つなよ、ビックリして殴っちまった上に気絶させちゃったじゃねーか。其処のオマエ等もコイツが死んでほしくなかったら喋るな撃つな動くな、用があつて来たんだからな。どちらか1つでも守れなかつたらコイツを殺してオマエ等のどちらかを人質に取るから気を付けるよ」

銃を拾い兵士のこめかみに向ける

「くそ！」

兵士が言う

「それも喋るに入るから気をつけろ、次は撃つぞ」
ひとさし指に力を入れながら言う

あたりを見回し生徒会メンバーを見つけたマックス

「（ガーベスちゃん達は無事だね、良かった）」

「話は聞かせて貰ってたぞ。流石天下のユーフェミア皇女殿下様だな、ついでに俺も一緒に連れて行ってもらおうか。道が分からず迷子になっちまって困ってたんだよな」
マックスが言う

「貴方は？」

ユーフェミアが聞く

「俺はマックス、旦那の部下みたいなもんだ。因みに旦那はゼロの事だぞ。全く旦那は人使いが荒くてよ、下から潜入したから服が濡れて寒くてしょうがない」
濡れた服を弄りながら言う

「ゼロですって？」

驚いたユーフェミアが聞く

他の人質や兵士もゼロという単語に反応する

「まあ、アンタから見たら旦那は腹違いとは言え兄弟を殺した憎い相手かも知れないが今は気にするな。其処の解放戦線のオマエさつさと俺等を草壁の元へ連れて行け。後オマエは此処で今まで通り見張りでもしてろ、コイツは返すから良いだろ？分かってると思うけど俺に人質は意味ないからな」
そう言い兵士達を威圧するマックスであった

視点 変更

草壁がいる部屋の前の通路

「中佐のもとに先程連絡をした人質を連れてきました。ユーフェミアとマックスと名乗っていますが」
部屋に聞こえるように言う兵士

すると

ドン！ドン！
突然の銃声

「中佐！」
心配になり急いで入る兵士

ドン！
その兵士の肩に弾が当たる

「落ち着け」
撃ったのはゼロである

「ゼロ」
ユーフェミアが言う

「中佐達は自決した。行動の無意味さを悟ったのだ」
見ると兵士の手の中には銃が持たれていて、草壁は刀で自分の腹を裂いていた

「旦那、見つけたけどどうする？」
マックスが何でも無かったかのようにゼロに聞く

「ご苦労だったマックス。お前は人質達の所に行け」
マックスの言うゼロ

「了解」

ユーフェミアとゼロを残し部屋を後にする

「くっ、貴様等」

さっき撃たれた兵士がマックスとは逆の横を見て言う

其処にはカレンや扇をはじめとするメンバーがいた

「お、そっちも終わったのか？」
マックスが聞く

「ああ」

扇が答える

「じゃあ、俺は人質の所に行ってるから後は頼んだぞ」
手を振りながら扇達とは反対の道を進むマックス

「分かってるわよ」
カレンが答えた

視点 変更

さっきと同じホテル内の食料貯蔵庫

「やっと着いたか、結構時間が掛かっちゃまったな」
マックスが扉を開け再び入ってきた

「貴様！あいつ等はどうした!？」
残った2人の内1人が聞く

もう1人さっきマックスが殴った兵士はまだ気絶している

「草壁のところにいる……でアンタもちよっと寝てくれ」
兵士の目の前に立ちみぞおちを殴る

「ぐはっ！」
腹を押さえ倒れた

「えつと次にユーフェミアの護衛の女ちょっと来い」
少し考えてからユーフェミアの護衛の女を呼ぶ

「……………」

不安な目でマックスを見る

「変な目で見るなエロい事はしないから安心しろ。この紙をコーネリアに届ける」

ポケットに入っていた紙を渡した

言うまでも無く濡れていた

「コレは？」

濡れた紙を手に取り聞く

「オマエ等人質の中で数人連れて行かれただろ？アイツ等は屋上から落とされて死んだ」
マックスが言う

「嘘、ナースが？」

人質の若い女性が咳く

「何だ？その中に彼氏でもいたのか？」
マックスが聞く

「うっうっ…」
手を顔に当て泣き出した

「泣くな、俺の知り合いが助けてとある場所に隠しているから安心しろ。この紙にはその場所が書いてる。濡れてるが油性で書いたから大丈夫だ」
それを見たマックスが護衛の女持つ紙を指し言う

「本当ですか!？」
顔に笑顔が出た

「ああ、終わったら迎えに行つてやれ。今度はオマエ等の番だ、死にたくなければ言うことを聞け」
マックスがそう言うと人質達が助かることを知って安堵の表情になる

すると

大きくホテルが揺れ始めた

「何だ？」

「地震か？」

周囲から心配そうな声上がる
揺れが大きいから無理も無いが

「やっとブリタニア軍が動き出したか、早くしないとこのホテルと一緒に沈むことになるぞ。落ち着いて俺の後を付いて来い、護衛のオマエは後ろを手伝え」
気絶させた2人を肩に担ぎ護衛の女言う

「はい、分かりました」

頷き後ろへ向かう

視点 変更

河口湖及びテレビ画面

大きな揺れの後に爆発が起こり、ホテルはその爆発のせいで無残に崩れた

あれでは生き残っている者はいないとその場所にいた人々とテレビ

の前の誰もが思った

しかし

「ブリタニア人の諸君動じることは無いホテルに捕らわれていた人質は全員救出した。あなた方の元にお返ししよう」
ゼロがテレビの画面に現れ言う

少しゼロを映したカメラは次にポートの上の人質を映し無事を画面の前の人々に教える

ちなみにこのカメラを操作しているのはマックスである

「（影の男マックス！ってフレーズは如何なものか）」

カメラをゼロから離しライトを点ける

「人々よ！我等を恐れ求めるが良い！」

ゼロが言う

「我等の名は黒の騎士団！」

他の照明が点きゼロの後ろのメンバーにも光が当たる
扇やカレン達だ。勿論マックスには当たっていない

「（まあ、目立つより良いか）」

「我等黒の騎士団は、武器を持たない全ての者の味方である。イレブンであろうとブリタニア人であろうと」

「日本解放戦線は卑劣にもブリタニア人の人々を人質に取り、無残に殺害した。無意味な行為故に我々が制裁を下した」

「クロヴィス前総督も同じだ。武器を持たないイレブンに虐殺を命じた。故に同じく制裁を下した」

「私は戦いを否定しない。しかし強いものが弱いものを一方的に殺すことは断じて許さない！」

「力有る者が力無き者を襲う時、再び現れるだろう。例えその敵がどんなに大きな力を持っていたとしても！」

「力有る者よ、我を恐れよ！力無き者よ我を求めよ！世界は…我々が黒の騎士団が裁く！」

（これがゼロの言う正義の味方。ブリタニア人を倒すのではなく、ブリタニアという強者を倒す事。最終的にはそうなるのかな？でもゼロがいれば無理じゃない気がする。ゼロに付いて行けば私たちは……）

（これで世間は黒の騎士団の噂で持ちきりになるだろう。しかしアインに会う事になるとはな、知っているだけに戦場で会った時の対応に困るな。今の内に会った時の対応策を練っておかなくてはな）

（寒い、風邪は引かないと思うけど微妙だな。まあガーベスちゃんも無事だったからいいかな？それに今頃はもう軍が俺の書いた場所にいる所かな？5人いた筈だけど反応したのは1人だけだったな、気付かなかっただけか？まあ、今頃あの女の人は彼氏にでも抱きついてるだろうしいいか。ガーベスちゃんは心配だけど少しの間は学校に行けないしな。ごめんガーベスちゃん数日後に会った時に一杯甘えて良いから許してください）

第十九話 本編8 ゼブルと黒の騎士団 (後書き)

次回 ゼブルとリフレイン

ではなく

飛ばして

番外編ゼブルとラウンズへの道です

1話1話が短くなっていますが

お楽しみに

第二十話 番外編？ ツヴァイとラウンズへの道（1）（前書き）

サブタイトル名を変更しました

また何か壊れたような気がします

誤字脱字は報告をお願いします

第二十話 番外編？ ツヴァイとラウンズへの道（1）

黒の騎士団が世間の前に現れてから数時間後

軍専用滑走路にて

大きな飛行機がありその入口付近にコーネリアとギルフォード、ア
イネがいた

「こんばんわですね皆様」
ツヴァイが後ろから声をかける

いつもと同じようにスーツ姿に仮面と言う意味不明なファッション
センスである

「来たか」

コーネリアが後ろを向かず言う

「今日は本当に申し訳ございませんでした。何分山奥にいたのでテ
レビ等も無く知ったのは今さっきなのですよ」
ツヴァイが言う

「まあ、仕方なからう。休めと言ったのはこの私だから気にするな」
コーネリアがツヴァイのほうを向きながら言う

「しかし、早くないですか？今から乗ったら前日の夕方位に着く
じゃないですか？」
ツヴァイが聞く

「いや、この飛行機で行けば朝早くには着く」
今の時間は23時である

民間飛行機に乗ったのであれば約16時間でブリタニア本国着くが
この飛行機に乗れば半分以下の約7時間で本国に着くのだ

「お前はエリア11からあまり出たことが無いのだから？久々の故
郷を楽しむ時間があっても良からうと思ってこの時間にした」
実際は久々どころか初めてなのだがそれを知るはずも無いコーネリア

「姫様のお心に深く感謝しろよ」
ギルフォードが言う

「はい、ありがとうございますコーネリア殿下」
コーネリアに頭を下げながら言うツヴァイ

(初めてのブリタニア本国か、楽しみだな)
そう思い期待に胸を膨らます

「その代わりとは言っては何だが頼みがある」
コーネリアが言う

「はい、何ですか？」

コーネリアからの頼まれ事を聞くのは初めてなため少し緊張が走る

「アイネも連れて言っでは貰えぬか？」
コーネリアがアイネのほうを見ながら言う

「え？アイネ卿も一緒にですか？」
ツヴァイもアイネを見る

「駄目ですか？」
コーネリアの横で上目遣いで聞く
よく見ると服装がアッシュフォードの制服だ

(私服を着ない辺りがアイネちゃんらしいね)
「いえ、別に俺は構わないのですが。何故一緒に？」
ツヴァイが聞く

「知つての通りアイネはラウンズになりたがっているからな、参考代わりにどうかと思つてな」

コーネリアが笑いながら言う

「ああ、なるほど分かりました。アイネ卿が良ければ俺は別に構いません」

アイネのほづを見ながら言う

「本当ですか？ではお言葉に甘え付き添わさせていただきます」
アイネが嬉しそう頭を下げて言う

「はい、此方こそ」

ツヴァイがアイネを見ながら言う

「では、行くがいい。結果を楽しみに待っているぞ」
コーネリアが口元を歪めながら言う

「ご期待にそえる様全身全霊で悔いの無いようにします」
ツヴァイは深く頭を下げ言う

「では、行って来ますコーネリア様にギルフォード卿」
アイネが2人に一礼をする

「ああ、すっかり見てくるのだぞ」
ギルフォードが言う

「アイネ、もし可能性があるなら。ツヴァイと初夜を迎えてきても良いのだぞ?」

少し大きめの声で言うコーネリア

「コッコ、コッココーネリア様何を言うんですか!?!」
顔を真っ赤にしながら手を振り回し言う

「そうですね、そんなことある訳無いじゃないですか」
ツヴァイがきつぱりと言う

「え?あ……そうですね 僕なんかでは……」
それを聞いたアイネは深く落ち込む

「初夜は新婚の夫婦が初めてやる夜の営みの事ですよ?俺なんかにはアイネ卿は勿体無い、アイネ卿は美人ですからね。俺よりもっと良い人が夫になってくれますよ」
ツヴァイがアイネのほうを向きながら言う

「(え?ツヴァイ殿が僕の事を褒めてくれた?美人?この僕が?…
…えへへへ)」

ツヴァイの言葉に感激を覚えるアイネ

「時間だな、行って来るがいい」
コーネリアが少し飛行機から離れる

「健闘を祈っている」
それに続きギルフォードも動く

「はい、ではこれで」
「行ってまいります」
ツヴァイとアイネが飛行機に入っていった

視点 変更

それから数時間後
飛行機の中で少しでも休もうと本国に着くまで睡眠をとることになった

「……」

「……」

「ツヴァイ殿、起きてますか？」
アイネが横のツヴァイを見ながら聞く

「……………」
返事が無いただ寝ているだけの様だ

「寝てますよね？」
アイネが聞く

「……………」
返事が無いただ寝ているだけの様だ

「仮面の中の素顔、見ますよ？」
尚も聞くアイネ

「……………」
返事が無い……………疲れたので省略

「ツヴァイ殿」
アイネがツヴァイの仮面に手を触れると

「うー」

アイネが苦しそうに言う

「何者ですか？俺の顔を見ようとする者は」
寝ぼけているツヴァイがアイネの首を凄じ力で絞めている

「ツ、ツヴァイ殿」
アイネがツヴァイの名を呼ぶ

「！すみません、アイネ卿でしたか、大丈夫ですか？」
ツヴァイが気付き手を離す

「ゴホツゴホゴホ」
開放されたアイネが咳き込む

「言い忘れていました。俺の仮面に触れようとするのと今の様な事になっってしまうので気をつけてください」
ツヴァイがアイネの背中を撫でながら言う

「はあはあ」
落ち着き始めたアイネ

「そろそろ落ち着きましたね、首にあざが出来ていますが大丈夫ですか？」

顎を手で上げながら見るツヴァイ

「だっ、大丈夫です（顔が近い）」
アイネが顔を赤くして言う

「しかし、女性にを傷つけるとは俺とした事が」
ツヴァイが落ち込んだように言う

「気にしないで下さい、僕が無許可で顔を見ようとしたからです」
そのツヴァイを見てアイネが言う

「いや、それにしてもやり過ぎました。寝呆けているとはいえこんな傷をつけたのは事実ですから………そうだ、確かかばんの中に」
思い出しながらカバンの中を探すツヴァイ

「どうしたんですか？」
ツヴァイに聞くアイネ

「ちょっと失礼します」
そう言いアイネの目に何かが覆い被さった

「え？目隠しですか」
アイネが聞く

「すみませんが俺は秘匿主義者でしてね、目隠しを着用してもらいます」
ツヴァイが説明する

「あの、一体何を？」
目の前が見えなくなった事で期待感と不安感で緊張するアイネ

「コレを首につければ…首を上げますよ…はい、つけましたが触ってはいけませんよ」
アイネに治女神の首飾りをつけた

「何をしたんですか？」
首に感じる違和感を聞く

「ある物を首につけました。触ってはいけませんよ、触らなければあざは明日には治っているでしょうから」
触らせないように言う
(マジックアイテムなんて知れたら俺の身が危ないからな、てか、俺って魔法使えるのかな?)
などと考えるツヴァイ

「そうなんですか、ありがとうございます」
よく分かっているがお礼を言うアイネ

「他に何か出来ることは有りますか？俺に出来ることであれば何でも言ってください」
ツヴァイがアイネに言う

「え、あの…何でもですか？」
アイネがツヴァイの袖を掴んで聞く

「今俺に出来ることであればですけどね」
流石に死んでくださいとかは駄目と念を押す

「では、胸枕をしてくれませんか？」
アイネが言う

「はい？胸枕？」
（胸って何？腕とか膝とかは聞くけど胸って、男の人が女の人に頼んだら犯罪じゃん）
初めて聞く単語に少し焦るツヴァイ

「いえ！無理ならいいです！本当に嫌だったら嫌と言ってください」
恥ずかしそうに言うアイネ

「いえ、構わないのですがいいのですか？俺の胸なんかより枕の方

がゆっくり眠れますよ」「
ツヴァイがアイネに聞く

「ツヴァイ殿の胸がいいです!」
きっぱりと言うアイネ

「まあいいでしょう、男に二言はあまりありませんし」
目隠しのせいで目が見えていないアイネの体を引っ張って自分の胸
に乗せるツヴァイ

「きゃ!　これがツヴァイ殿の胸」

急に動かして驚いたがツヴァイの胸の感触に不思議と惹かれるアイネ

423

それを見たツヴァイは

「やっぱり硬くて寝難いでしょう?」
と聞く

「いえ、暖かくて落ち着きます」
頭を振りながら答える

「そうですね、なら良いのですが」
そう言い手を頭に乗せ、撫で始める

「ひゃっ！ツヴァイ殿？」
急な事にビックリしたアイネが聞く

「ん？どうしました？頭を撫でられるのは嫌いですか？」
手を頭から離して聞くツヴァイ

「駄目です！止めないで下さい」
必死にツヴァイの手を自分の頭に乗せるアイネ

「（ガーベスの言う通りだ、撫でられるのって凄く気持ちいい。それにツヴァイ殿良い匂いがして落ち着くな、胸に顔を擦り付けちゃ駄目かな？ツヴァイ殿なら怒らないと思うけど　少しだけならいいよな……んん…何だか分からないけど胸がドキドキして心地よくて好きだな、もっとしても良いよな？怒られたら止める、嫌われたくないし……ううん…はぁ頭を撫でられながら胸に顔を擦ると甘えてるみたいでいいな、もうちょっとだけ。本当に後少しだけ……えへへ」

後半の殆どが口から漏れているのに気付かず惚けるアイネ

（丸聞こえなんだけど、ヤバイな可愛過ぎて惚れそうだな、しかし！俺にはガーベスちゃんがいるんだ。それにしても心臓の音凄いな、聞かれてないか心配になるよ。学校ではツンツンしてるけど、こんな風にデレられると俺の耐久力を凄い勢いで奪われる。ガーベスちゃんこれは浮気ではないです。甘やかしてるだけです。なのでゆるしてください！…）

ガ―ベスへのいい訳唱えるツヴァイ

「ツヴァイ殿」

顔を緩め過ぎて惚けた声がだだ漏れなのだがそんな事に気付かず嬉しそくにツヴァイの胸に顔を擦るアイネ

(それ反則!!!)

その反応にツヴァイもがくように暴れるがアイネは離れずしがみ付いたままであった

視点 変更

更に数時間後 神聖ブリタニア帝国首都ペンドラゴンの隅にある小さな町ニルジヨワ

2人はこの町の更に端にブリタニア軍の基地があり、その滑走路で飛行機から降りてこの町に来た

この町は首都の端とはいえない程活気ある商店街とその逆に木々が多く落ち着きのある住宅地が混ざった町なのだ

「ニルジヨワに到着です」

アイネが上気分で歩く

「よく眠れましたか？」
ツヴァイが聞くと

「はい、気持ちよく寝れました」
実際アイネはあの後すぐに寝て、ツヴァイも寝ようとしたら、アイネの頭を撫でる手を止めようとすると何故か泣き出し、逆に撫でると笑顔になるので止めるに止めれずそのまま撫で続ける事になったのである

つまりツヴァイは睡眠不足なのである
(眠い……)

「首のあざも取れていますね、よかった」
首に手を当て撫でる様に見る

「あつ（首を優しく触られるのも気持ちいい）はっ！（危ない危ない）あの首に付けたのは何だったのですか？」
疑問に思ったアイネが聞くが

「秘密です」
あつさり言うツヴァイ

「そうですか……あの、ツヴァイ殿……今日の……えっと……今夜も出来れば……その」

アイネがまた添い寝を頼もうとすると

「さて、時間は結構ありますからまずは何処から行きましょうか？」
聞こえなかった振りをし、聞くツヴァイ
(これ以上は本当に理性が持たない)

「はい(言えなかった。でもよく考えたらこれってツヴァイ殿とデートしていることにならないか?)」
アイネが嬉しそうに顔に手を当てる

「それとも別行動にしますか？俺みたいな仮面付けてちゃアイネ卿も怪しまれてしまいますし」
仮面に手を当てながら言うツヴァイ

青い仮面に黒いスーツと言う格好は嫌でも目に付く

「いえ、僕は構いませんから一緒に回りましょう(ツヴァイ殿とデートだ！でも何に興味があるんだろう)あの、ツヴァイ殿は見たい所などありますか？」
アイネが聞く

「そうですね、俺は少し町を見て回りたいのですがアイネ卿は？」
少し考えアイネに聞くツヴァイ

「僕はあまり見たいものが無いのでお付き合います（よし！）」
勇気を出してツヴァイの腕に抱きつくアイネ

「そうですか？では行きましょう」

（本当に止めて……ガーブスちゃん助けて……）
心の中ではもがき苦しむが、それを表情や声で出さないのがツヴァイの凄い所

「はい」

止められると思っていただけだが、拒まないツヴァイに嬉しそうに言いさらに強く抱きつくアイネ

（本当に止めて……！！……！！……！！）

視点 変更

商店街

少し歩き回った2人は活気溢れる商店街に置いてあるベンチに座っていた

「喉が渴きましたね、飲み物を買ってくるので此処でお休みになっていてください」
再び立ち上がるツヴァイ

「僕が買いますよ」

アイネがツヴァイの袖を掴みながら言う

「休んでいてください、すぐに戻ると思いますから」
それをやんわり外しその手を握りながら言うツヴァイ

「はい」

その手を悔いありげな顔で離すアイネ

「お腹が空いてきたな」
アイネが呟く

今時間にして午前9時だが何故かこの商店街はどこも7時からの営業になっている

アイネは色々なお店から出る良い匂いにお腹を鳴らす

すると

「え、なんですか？」

女性の声だ

辺りを見ると少し近くで男が群れていた

「ちょっとお嬢さん一緒にお茶しない？」

身なりのいい若い、多分貴族であろう男達が少女を囲っている

どうやら軟派をしているようだ

「いえ、遠慮します」

声の正体の女性は金色の髪の少女だった。少女はオロオロしながら言う

服装を見る限り何処かの学校の制服みたいだ

「そんなつれない事を言うなよ、なあなあ」

1人の男が少女に近づく

「あの、困ります。止めてください」

それを手で否定する少女

「いいじゃないの……ほら」

男の顔が少女の顔に近付いた

「いや、止めて！」
顔を振り遮ろうとする

「お前ら其処までだ！」
今まで見ていたアイネが怒って男達に言う

「そんないたいけのない少女に何をしている。恥を知れ愚図共が！」
男達に指を指し言う

「なんだと！この女」
それに怒った男1が近付く

「ぐわあ」
その男の顔面を殴るアイネ

「な！」
周りで見ていた人たちが声が漏れた

「ふん、こんなものか」
男を殴った手を撫でながら言う

「クソ！バツテルさんこの生意気な女に礼儀を教えてやって下さい」

殴られた男1が言う

「今度はお前か」

アイネはその男を見る

「ほほ、強気な女だな、俺の好みだ」

バトルと言われた大柄の男はアイネの顔を見ながら下品そうに笑う

体は大きくツヴァイより大きい、そして太っている訳でなく筋肉質な男だ

「ふん、そのイノシシみたいな顔をどうにかしてから言え」
アイネがバトルを睨みながら言う

「ほほ、気が強くて本当に俺の好みだな。俺の物にしてやる」
バトルがアイネに近付く

「やれるもんだっいたらやつてみる！」
アイネが渾身の力を込めて殴る

「うん？」

それを蚊に刺された程度しか効いてないバトル

「何！？効いてないのか？」
驚愕に顔を歪めるアイネ

「その程度の攻撃じゃびくともしないぞ」
頭を掻きながらバトルが言う

「っち、まだまだ」
殴り蹴るアイネ

「弱いなお前」
しかし効果はあまり無い

「はあはあ」
疲労でアイネは息を切らす

実は空腹の為いつもより力が入っていないのである

その瞬間

「バトルさん捕まえました」
後ろからアイネがさつき殴った男1がアイネを両腕を掴み背中へ曲げる

「よくやったぞ」

バトルは笑いながら男1に言う

「離せ！この卑怯者！！」

暴れるアイネ

「無駄だ女のお前には無理だ」

しかし後ろを取っている男は余裕で言う

「クソ！クソ！」

尚も暴れるアイネ

「お、近くで見ると以外に可愛いなこいつ」

男2がアイネに近付き顔を見る

「この女は俺のだ。お前らはあの女でいいだろ？」

バトルが男3が掴んでいる金髪の少女を指で指し言う、その少女は恐怖で顔が引き攣っている

「へい」

男2少女の下に行く

「ほほ、いい体付きしてるな」

それを見てバトルはアイネの体を凝視し、腹や足に触る

「さっ触るな！」

バトルを蹴るアイネだが効果が少ない

「ほれほれ、此処も触っちゃうぞ」

胸に手を当てようとすると

「はい、其処まで」

バトルの肩に手を置き言うツヴァイ

「何者だ？」

バトルは不愉快そうにツヴァイを見る

「只のしがたいツヴァイ・ドウです。そこを触るのはこの子の旦那さんになってからにしましょう」

バトルを見ながら言う

「ツヴァイ殿」

目から涙を零しアイネが言う

「遅くなつてすみませんね、まずは………それ」

アイネを拘束していた男に一瞬で近付き顔を殴る

「ぐは！また同じ所を殴られた」
男が倒れアイネが開放される

「きゃ！」

急に開放されたアイネが地面に尻餅を付きながら呆然とツヴァイを見る

「はあ！何だテメーヤんのか？」
男2が聞く

「まあ、勿論やらせて頂きますがね」
アイネの無事を確認し言う

「バトルさんやっちやてください」
少女を掴んでいる男3が言う

「ほほ、こんなヒョロそうな奴、相手にならんわ」
笑いながらバトルが近付きツヴァイを殴る

「この程度ですか？」
それを片手で楽々防ぎ言う

「なに!？」

力には自信があったバトルが驚いた

「凄い」

体格から見てもツヴァイには勝てる要素は無かったなのに軽々防いだツヴァイに魅入る

「では、こちらの拳を喰らってみてください」
ツヴァイが握り拳を見せ言う

「1回防いだけで調子に乗りやがって」
怒ったバトルが拳を無造作にツヴァイに向けて放つ

「何度やっても無駄ですよ」
それを軽々避けるツヴァイ

「はあはあ、何故当たらないんだ」
少しもツヴァイに触れないことに困惑するバトル

「アイネ卿、今から俺がやる技を見て覚えてください」
ツヴァイがアイネに言う

「え？技ですか？」
地面に尻餅をついたままのアイネが聞く

「ええ、この技は体が軽い女性でも一発一発が必殺技の域にまでいくことがありますから、護身用に覚えてください」
ツヴァイが拳を構えて言う

「は、はい」

いつもと違うツヴァイの雰囲気アイネが焦る

「ゴチャゴチャとうるせえぞ！」
バトルが息を切らしながらも言う

「まずしゃがみながらへそから約9センチ下に体重を全て送ります。これは感覚的な問題ですね」
椅子に座るような姿勢を取るツヴァイ

「次に左腕を顔と平行にするように曲げます。この時体重は右足に移す」
左腕を曲げ顔と平行させる、左足はつま先立ちに立たせる

「その後直に、体重を左足に集め一気に地面に体重を送る。これも感覚的です。分かり易く言えば体から体重が抜ける感じですね」
バンと大きな音がしツヴァイの足元から響く

「その反発力を活かし右足を少しずつ伸ばし
ゆっくり右足を伸ばしながら言う」

「クソ！死ぬ！！」

バトルがツヴァイに突っ込んできた

「ツヴァイ殿！」

アイネが叫ぶ

「そしてピークになったら………重力を前に向けて」
説明をしながらもバトルからは目を離さないツヴァイ

「放つ」

その瞬間辺りの張り詰めた空気が破裂したような感覚がアイネに襲い
バトルは吹っ飛ばされ廃屋の壁を壊しながら止まった

「凄い」

アイネが感動したようにツヴァイを見つめる

「少し怒っているので強めに攻撃しました。数本は確実に折れていますよ」

少女を抑えていた男に言う

「くそ！覚えてろよ」

男1、2、3がバツテルを抱えて逃げ出す

「ふう、やれやれですね……大丈夫ですか？」

その後ろ姿を見送り少女に聞くツヴァイ

「はい！助けただいてありがとうございます。本当に助かりました」

金髪の少女がツヴァイのもとに近付く

「いえいえ、以後気を付けるのですよ？」

首を振りながら言うツヴァイ

「はい、ありがとうございます。すいません急用がありますので、また会えましたらお詫びの印をお渡しします。ではこれで失礼します」

そう言い走っていく少女

「……………」

アイネは返事が無く地面に尻を付けたままだ

すると

「兄ちゃんカツコ良かったぜ！」

「本当スツキリしたわ」

「あの貴族のガキ共に手を出したら何されるか分からなくてよ、みんな助けたかったが商売が出来なきゃ元も子も無いからな」

「お兄さんのお陰よ」

商店街にいた人々がツヴァイに駆け寄る

皆助けたい気持ちはあったのだが貴族に逆らえる筈も無く、皆見てみぬ振りをしていたのだ

「いえいえ、俺はそんなに凄い事はしていませんよ」
ツヴァイが言う

「宿は決まっているのか？俺が経営してる宿で良かったらタダでいいぜ」

体格の良い老人がツヴァイに言う

「本当ですか？嬉しいですね。お言葉に甘えて良いですか？」

ツヴァイが老人に聞く

「勿論だヒーロー」

老人が嬉しそうに言う

「朝ごはんはもう食べたかい？まだならウチの店で朝飯食べに来な、量が多くて旨いよ」

何処かのお店の女店主らしき人が言う

「すみません、少し疲れたので宿に行きたいのですか……」
頭を掻きながらツヴァイが言う

「おう！なら来いよ、すぐ近くだから」
老人が元気良く歩く

「へー、そうなんですか」
それについて行くツヴァイ

「おうよ、小さいが清潔と落ち着く空間ってのが売りなんだぜ」
老人が笑いながら言う

「では、アイネ卿も行きましょつか」
ツヴァイがアイネを立たせて言う

「……………」
何も言わずついて来るアイネ

「おっと、すまねえが2人1部屋でいいか？他が空いてなくてよ、ベットはちゃんと2つあるぞ、それとも1つで良かったか？」
老人が2人を見てにやけながら言う

「そう言う関係では無いですから」
首を横に振って言うツヴァイ

「この部屋だ。好きに使ってくれよ、防音も一応付いてるから少しうるさくしても大丈夫だぜ」
笑いながら老人が言う

20畳位の部屋だ机とベットだけと言う質素な部屋だ

「ありがとうございます」
ツヴァイが見渡しながら言う

「気にすんな、じゃあゆっくりしてけよ」
老人が部屋から出て行った

「ふう、いい雰囲気の部屋ですね」
ツヴァイがアイネに言う

「……………」
しかし、返事は無い

「さつきから、静かですがどうかしましたか？」
ツヴァイがアイネに近付き聞く

「う、うう……………ひつくツヴァイ殿！」
急に泣き出し勢い良くツヴァイに抱きつくアイネ

「おっと！どうしました？急に」
バランスを崩しそうになったツヴァイが何とか持ち直しアイネに聞く

「怖かったです。凄く凄く、本当にあんな奴等にいいようにされそうになったのが、弱い僕が怖いです」
嗚咽を漏らしながらツヴァイに言う

「……………」
それを無言で聞き入れるツヴァイ

「弱いせいで何もできず、何も救えず、何も守れない。その事が怖いです」

ツヴァイを抱く力を強めて言う

「大丈夫、君は強いですよ」

アイネの頭を撫でながら言う

「弱いです、女の僕がどんなに背伸びをしてもあんな男にすら勝てませんでした」

ツヴァイの胸の中で顔を振りながら言うアイネ

「君の強さは体じゃなく、心です」

そっと優しくツヴァイは言う

「心？」

涙でグシャグシャの顔を上げて聞く

(その顔は反則)

「そう、貴方の腕っ節のではまだ男には勝てません。しかし貴方の心の強さがあればいずれどんな強者にも勝てるでしょう」

ツヴァイが言う

「どうやって？」

子供の様な顔つき聞くアイネ

「勝てない相手に挑もうとするとき、勝つ気持ちがある人と無い人どちらの方が良い戦いができますか？」
ツヴァイが聞く

「ある人です」
当たり前を聞かれ困惑するアイネ

「そう、幾ら体を鍛えても心を強く持てない人は人は弱いままです。したがって真に強くなるうと思うなら体だけでなく心も鍛えねばなりません。しかし、君はあの大勢の男達に向かっていった。何故ですか？」
ツヴァイがアイネの頬を優しく撫でながら聞く

「あの子を救おうとして……」
弱いものいじめを昔から嫌っていたアイネの気持ちである

「あの少女を救おうとした。弱者が強者に一方的にやられる所を止めた。例え相手の数が多くてもそれに挑もうとした、その心の強さがあれば後は時間をかけて体を鍛えればいい」
力強くはつきり言うツヴァイ

「ツヴァイ殿」
すっかり泣き止みツヴァイを見つめるアイネ

くううゝ

「きゃー！これは … えっと…その」
恥ずかしさのあまり顔を真っ赤くしながら言う

（ヤバイ本当に可愛い）

「朝食もまだでしたね、一緒に食べに行きましょうか」
笑いながら頭を撫でるツヴァイ

「はい」

アイネは本当に恥ずかしそうにツヴァイに見て言った

この後、この仮面のヒーローの話は町中にそして都市中、さらには
ブリタニア全土に流れる事になり、数年後その話のある出版社が子
供様に本にして発売した所、空前絶後の人気本になったのはまた別
の話

第二十話 番外編？ ツヴァイとラウンズへの道（1）（後書き）

この番外編は後4、5話書きたいと思っています

第二十一話 番外編？

ツヴァイとラウンズへの道(2) (前書き)

誤字脱字の報告お願いします

第二十一話 番外編？ ツヴァイとラウンズへの道（2）

ニルジョワに着き一日たった日の朝

朝食を食べた後に2人は再び町を歩くとツヴァイは何時も声をかけられ、話し、町の子供達と遊んだり、困っている人を助けたり、車に轢かれそうになった老人を助けたり、清掃活動の手伝いをしたり、町の不良にぐれた理由を聞き相談に乗ったりと濃厚な一日だった

そのお陰でニルジョワの町ではツヴァイを知らない人はいない程であり、尚且つ人気である。しかもニルジョワの町だけではなく、近隣の町々にも噂が広がっているほどである

しかし、ツヴァイは此処に来た理由だけは話さなかった

アイネが聞くと

「ちよっとしたドッキリです」
だとか

ニルジョワの町のとある道

ここにも噂を聞いて見に来た2人がいた

「此処か？仮面のヒーローがいるってのは」
長身の独特に編んだ金髪が似合う少年と

「多分そう」
手に携帯を持ったピンク色の髪の少女がいた

「でも何で今なんだ？もうすぐ、新しく入る奴が来る筈だろ？」
少年が少女に聞く

「その人もこの町にいるらしいから、ついで」
少女が携帯を操作しながら言う

「じゃあ、同一人物だったりしてな」
笑いながら辺りを見回す少年

「かもね」
少女は尚も携帯を弄る

「おっ！あいつじゃないか？」
少年が公園で遊んでいる子供達を指差し言った

その中に仮面を付けた男がいた

視点 変更

芝生の生い茂る広い公園

「こら！お前たち、ツヴァイ殿に乗らない」

アイネがツヴァイの上に乗っている2人の男の子に言う

「え？何で？」

1人の男の子が聞く

「ツヴァイ殿が疲れるだろ
降ろそうとするアイネ

「別に構いませんよ、アイネ卿」
ツヴァイがアイネをなだめるように言う

「ツヴァイ殿が甘やかすからいけないんですよ？叱る時には叱らな
いと」

「アイネ卿は良いお母さんになりますね」
ツヴァイがアイネに言う

「なつな！ツヴァイ殿何を言ってるんですか」
アイネが顔を赤くする

「わぁーお顔が真っ赤」
アイネと一緒に「おままごと」をしている女の子が言う

「うるさい！もう遊んでやらないぞ」
まだ赤い顔に手を当てて女の子に言うアイネ

「わぁー！怒った怒った」
ツヴァイに乗っている男の子が言う

「ツヴァイ殿が変なことを言うから」
ツヴァイを見ながらアイネが言う

「俺は事実しか言ってますよ？」
ツヴァイが言う

「だから……その……もう知りません！」

頬を膨らませながら言うアイネ

「ちよつといいかい？」

先程の金髪の少年がツヴァイに言う

「ん？何でしょうか？」

ツヴァイが振り返り聞く

「あんたがツヴァイか？」

少年がツヴァイに聞く

「はい、確かに俺がツヴァイですけど……貴方は？
子供を背中から降ろしながら聞く

「ツツ、ツヴァイ殿はこの方をご存知無いですか！？」
アイネが驚いた様に聞く

「はい、失礼ながら俺は世間の流れに疎い者ですから。有名人です
か？」
ツヴァイがアイネに聞く

「この方はナイト・オブ・スリーのジノ・ヴァインベルグ卿ですよ
！」

アイネが大きな声で言う

「それはそれは、その若さでラウンズとは恐れ入りますね」
ツヴァイが立ち上がり握手を求めた

「お褒めに預かり光栄だね。でもアーニヤのほうが若いけどね」
それを笑顔で受ける少年（以降ジノ）が少女のほうを見ながら言う

「アーニヤ・アールストレイム卿まで！」
少女（以降アーニヤ）を見ながら言うアイネ

「なるほどお若いですね」
ツヴァイが言う

「悪趣味なファッション……保存」
写真を取りながら言うアーニヤ

「酷いですね。かつこいいのを選んだつもりだったんですけど」
ツヴァイが服装を見ながら言う

「へー面白いな、あと、あんたが最近有名な仮面のヒーローかい？」
ジノが聞く

「違うと思います。俺は仮面をつけているだけでヒーローでは無い
ですからね」

ツヴァイが首を振りながら答える

「ツヴァイはヒーローだよ」

男の子が言う

「うん、人助けよくするし、私たちと遊んでくれるし、ヒーローだ
よ」

アイネとおままごとをしていた女の子も首を振りながら言う

「そうだよ！ヒーローだ！」

もう片方の男の子が言う

「俺がヒーローですか」

ツヴァイは立ち上がり呟く

「じゃあ、ヒーローになる為の試験を受けに行くか？」

ジノがツヴァイに聞く

「そうですね」

ツヴァイが言う

「ツヴァイ何処かに行っちゃったの?」
女の子がツヴァイに聞く

「ええ、ヒーローになったら戻ってきますよ」
その女の子の頭を撫でながら言うツヴァイ

「時間が無い」

アーニヤがツヴァイに言う

「では、行きましょう」
ツヴァイが言い歩き出す

視点 変更

首都ペンドラゴンの中心部にあるペンドラゴン皇宮

「着いた」

「此処が試験会場だ」
いつの間にか服を着替えたアーニヤとジノが言う

「広いですね」
ツヴァイが驚嘆の言葉を上げる

広さはアッシュフォード学園の体育館の数十倍はあるだろう

「待っていたぞ、ツヴァイ・ドウ」
左目にピアスをしている大男が言う

「貴方は知っています。ナイトオブワンのビスマルク・アインシュ
タイン卿ですね」
ツヴァイが言う

「……………」
左目にピアスをしている男（以降ビスマルク）が黙る

「違いますヴァルトシュタイン卿です」
アイネが小声でツヴァイに言う

「そうでしたっけ？とにかく間違えてすみませんでした」
ツヴァイが頭を下げて言う

「ふっふ、面白い奴だね」
銀髪の女性がツヴァイを見ながら笑う

「えっと、あの人は？」
ツヴァイがアイネに聞く

「ナイトオブナインのノネット・エニアグラム様です。コーネリア様の先輩にあたる人です」

アイネが銀髪の女性（以降ノエット）を見ながら説明する

「名前を覚えるのに時間がかかりそうですね」
ツヴァイが言う

「軍に身を置く者にとっては常識ですよ？」
アイネが呆れたように言う

「俺は普通じゃ無いんです。それで、試験は何をすればいいのですか？ヴァルトシュタイン卿」
ビスマルクを見ながらツヴァイが聞く

「簡単だ、我等の中の相手を選び一対一の勝負を行う」
ビスマルクがマントを翻し言う

「ルールは？」
ツヴァイが聞く

「選んだ相手と戦い負けを認めたほうの負けだ。勿論無残に負けたら即不合格と言いたい所だが、我々がラウンズになるに値すると判断した場合は合格だ」

ビスマルクが言う

「なるほど」

ツヴァイが頷く

「で、相手はどうする？」
ジノが聞く

「どうでしょうか」
ラウンズ総数7人を見るツヴァイ

「僕はアーニヤ・アールストレイム卿がいいと思います。若いです
し力も弱いかと」
アイネが言う

「見学のお前は口出しするな」
黒い肌の女性が言う

「はい、すみませんドロテア・エルンスト卿」
後ろに下がるアイネ

「俺は女性以外なら誰でも構わないんですが」
女性を抜くとビスマルク、ジノそして……

「アイネ卿に一任しても宜しいですか？」
ツヴァイが黒髪の女性（以降ドロテア）に聞く

「さっきも言った通り口出しは無用だ」
ドロテアが首を振った

「なら、俺とやりたい人とやりたいです」
ツヴァイが言う

「では、俺が行こう」
オレンジ色の髪の男が来た

「えっと、貴方は？」
ツヴァイが聞く

「駄目ですツヴァイ殿！ルキアーノ・ブラットリー卿とは絶対に駄目です。下手したら殺されてしまいます！あの人はブリタリアの吸血鬼と言われ人殺しの天才と自称しているくらい残忍な性格をしているのですよ？」
アイネが言う

「そつだ、変えるのなら今のうちだぞ？」

オレンジ髪の男（以降ルキアーノ）が口元を歪めながら言う

「別に殺される気は無いですから大丈夫です。って言うより死ぬ可能性ってあるんですか？」
ビスマルクに聞くツヴァイ

「……」
頭を一回縦に振るビスマルク

「……………」
無言のツヴァイ

「ツヴァイ殿」
心配そうにツヴァイを見るアイネ

「そろそろいいか？」
ルキアーノがマントを取りツヴァイに近付く

「まあ、何とかなるでしょう」
ツヴァイも少し近付く

「一つ聞こう。お前の大切なものは何だ？」
ルキアーノが聞く

「？ 命ですかね」
ツヴァイが答えた

瞬間

「その通り命だ！」
ルキアーノがツヴァイに襲い掛かる

「ツヴァイ殿！」
アイネが叫ぶ

「ちょっと、スタートの合図も無いんですか？」
ルキアーノの攻撃を避けながら聞く

「ルキアーノ！」
ビスマルクが言う

「別にいいでしょ、もうスタートって事で」
笑いながらツヴァイに攻撃し続けるルキアーノ

「危ないですね」
避けながら言うツヴァイ

「これからがもつと危ないぞ」

ルキアーノが懐から小さい剣を出し、構え、襲ってくる

「武器もありなんですか!？」

ギリギリで避けながら言う

「ブラットリー卿卑怯ですよ!」

ジノが言う

「この程度でやられるならその程度だったと言つことだ」
ルキアーノが言う

「ヴァルトシュタイン卿、俺も武器を使って構いませんか？」
ツヴァイガルキアーノの攻撃を避けながら言う

「まあ、仕方なかつ」

ビスマルクが頷く

「では」

腰から二丁の拳銃を出し構える

「ほう、銃か」
ドロテアが言う

「これはとある戦場で拾ったのを改造した銃です。体には当てませんのでご心配なく」
ツヴァイが言う

「それで？人を撃たない銃に一体何が出来る？」
構えながらルキアーノが聞く

「貴方みたいな、人の不幸を見て喜ぶような人は嫌いなんですよね」
ツヴァイが言う

「だからどうした！」
ルキアーノが再び接近し攻撃を繰り返す

「不本意ながら本気を出します」
ツヴァイが言う

「本気？一体何が出来るんだ？」
ルキアーノが休まず攻撃を続ける

「例えばこんな事です」

ツヴァイが構え、撃つ

バン！

「何！」

ルキアーノが持っていた小剣に当てルキアーノの手から離れる

その小剣を

バン！バン！バン！

3回とも当て、ルキアーノの足元に落とす

「凄い腕だな」

ノエツトが呟く

それを見つめていたルキアーノに

「銃弾は当てませんが蹴りは当てますよ」

渾身の蹴りを放つ

「ぐはあ！」

それがルキアーノに当たり、体が宙を浮きそのまま壁にぶつかる

「最初は驚きましたがこの程度ですか」
ツヴァイが言う

「ふむ、合格だ！」
ビスマルクがそう言っていると救護班が現れルキアーノを担架に乗せて運ばした

それを

「保存」

カメラで撮るアーニヤ

「ツヴァイ殿！」

アイネがツヴァイに寄る

「アイネ卿？」

それを見るツヴァイ

「よかったです。本当に心配してんですよ？」

アイネが目には涙を浮かべ言う

「まあ、武器を出された時には驚きましたが、俺も武器を使っているのにお姉さま！」おや？

大きな声が聞こえたので見るとどこかで見た顔である

「アーリア？」

緑のマントを来た女性が言う

「あの人は？」
ツヴァイが聞く

「ナイトオブトウエルブのモニカ・クルシェフスキー卿です」
アイネが答える

「お姉さまと他のラウンズの皆様にお差し入れを」
金髪の少女が言う

「昨日来たばかりじゃないか」
緑のマントの女性（以降モニカ）が金髪の少女（以降アーリア）に
言う

「ワシも来たぞ」
今度は髪のない体格の良い老人が来た

「おじい様まで！」
モニカが驚いた様に言う

「あの人は？」
ツヴァイが聞く

「流石にラウンズの親族までは分かりませんよ」
アイネが困ったように言う

「お久し振りです。最高司令官」
ビスマルクが頭を下げる

「ほっほっほ、もう引退した隠居ジジイじゃからそんなに硬くなるな」
老人が笑いながら言う

「貴女は先日お会いした」
ツヴァイがアーリアに言う

「あ！あの時の方ですよね！？この前は本当にありがとうとついぞいま
した」
頭を深く下げて言うアーリア

「いえいえ、お気になさらず」
手を振りながら言うツヴァイ

「彼かい？アーリア」
老人がアーリアに聞く

「うん、本当に強いんだよ。大きな人が飛んでたもん」
アーリアが老人に言う

「孫を助けてくれたようだね、本当にありがとう」
老人が頭を下げてツヴァイに礼を言う

「話は聞いているわ、妹を救ってくれてありがとう」
モニカもお礼を言う

「お顔を上げてください。それに彼女を救おうとしたのは俺でなく
この子です」
ツヴァイがアイネを掴み言う

「いえ、助けたのはツヴァイ殿で僕は何も出来ませんでした」
アイネが首を振りながら言う

「それにしても何故君が此処に？」
老人がツヴァイに聞く

「ラウンズの試験を受けに来ましてね」
ツヴァイが言う

「はて？試験などあったかの？ラウンズは戦場での功績で決められる筈だが」

老人が首を曲げながら言う

「俺は異例ですから、戦場での功績もありませんし、こんな仮面をつけて素顔を晒さないですから試験で実力を試したんだと思います」
ツヴァイが言う

「ほう、試験の結果はどうじゃった？」

ビスマルクに聞く老人

「文句無しです。今さっきルキアーノとの一対一で見事に勝利しました」

ビスマルクが言う

「ナイトメアは？」

老人が聞く

「コーネリア様とその騎士であるギルフォードそれに軍の上位2名の計4人対1人でしたが無傷で勝利してました」
ビスマルクが言う

「あの動きは凄かった」

ジノが言う

「あれは機体の性能のお陰です。てか、皆さん俺の戦い観られてたんですね」

ツヴァイが首を振りながら言う

「しかし、その性能を使いこなせた事は事実だろう？」
ノエツトが聞く

「まあ、確かにそうですが」
ツヴァイがバツが悪そうに言う

「自信を持ってください。ツヴァイ殿は強いです」
アイネがツヴァイに言う

「そうですね、ではそろそろ」
ツヴァイがビスマルクのほうを向く

「そうだな、皇帝陛下が待っているぞ。私が案内する」
ビスマルクが扉のほうを向き進む

「はい」

それを追いかけるツヴァイ

「私も行く」

アーニヤが言う

「アーニヤも？何で？」

ジノが聞く

「何となく」

アーニヤが言う

「じゃあ俺も行く」

ジノも面白そうに言う

「僕も行っていいんですか？」

ビスマルクに聞く

「多分大丈夫だろうが3人とも入口までだ、中に入るのは私とツヴ
アイだけだ」

そう言い歩き出すビスマルク

視点 変更

ブリタニア皇帝謁見の間

「此処に来たと言う事は試験に合格したと言うことだな？」
皇帝であるシャルル・ジ・ブリタニア（以降シャルル）がツヴァイに聞く

「はい」

ツヴァイが片膝を床につけながら言う

しかし頭の中では

（髪の毛どうなってるのかな？）
などと考えていた

「ビスマルク、どうであった？」

シャルルがビスマルクに聞く

「はい、実力は申し分無いかと。しかし……」
途中で言葉を濁す

「何だ？」

シャルルが聞く

「ナイトメアの操縦技術と身体能力はラウンズに相応しいと思いますが、戦場での状況判断力及び指揮能力が不明でありますので結論はまだ出せないかと」
ビスマルクが言う

「そうですね、俺はまだ戦場に出ていませんから」
ツヴァイが言う

「そうか、ビスマルクお前に何か良い考えがあるか？」
ビスマルクに聞くシャルル

「試しに任務を出すのが宜しいかと。EUの西側にある孤島、カルブ島の施設破壊及び占領がどうでしょう？」
ビスマルクが言う

「出来るか？」
ツヴァイにシャルルが聞く

「勿論やらせていただきます」
ツヴァイが堂々と言う

「そうか、ではその事は後でビスマルクと決めてもらおう。ビスマルクよ、少し席を外してくれ」
シャルルが言う

「宜しいのですか？」
ビスマルクが困ったように聞く

「よい！」

シャルルが言う

「では、失礼します」

扉から出て行くビスマルク

「俺に何かご質問でもされるんですか？」
ツヴァイがシャルルに聞く

「そう一つ聞こう、VVとはどう言う関係だ？」
シャルルが聞く

「VV？親友ですよ、とても大切な。そういえばVVと皇帝陛下は
どういうご関係なのですか？」
ツヴァイが聞く

「それは答えられん、もう下がってよい！」
シャルルが言う

「イエス・ユア・マジエスティ」

ツヴァイが言い皇帝の部屋から出て行く

ツヴァイが出て行ったすぐ後

V Vがシャルルの座っている席の後ろから現れる

「どうだった？彼は？」

V Vがシャルルに聞く

「最初は兄さんのふざけたお願いかと思いましたがビスマルクがあそこまで褒めるのは珍しい、本当に有能みたいですね」
シャルルがV Vに言う

「当たり前だよ。なんたって僕の親友だからね」

V Vが嬉しそうに言う

「会わなくて良かったのですか？」
シャルルが聞く

「少し後悔してるかな、でも終わってからのほうが良いと思ってるから」
「VVが言う」

「そうですねか」

視点 変更

皇宮内の廊下

「聞きましたよツヴァイ殿、カルブ島に行くんですって!?!」
部屋から出てきたツヴァイにアイネが聞く

「そうですねよ」
ツヴァイが答える

「知らないんですか?あそこは難攻不落の要塞として有名なんです。そんな危険な所に行くなんて」
アイネが怒ったように言う

「軍人が危険を犯さないでどうするんですか？」
ツヴァイが逆に聞く

「うっ、そうですけど」
アイネが下がる

「俺も一度試してたけど全然駄目だった」
ジノが残念そうに言う

「ジノ、ヴァルトシュタイン卿に怒られてた」
アーニヤが写真を見せる

ビスマルクに怒鳴られているジノの姿があった

「そうそう減俸が痛かったな」
思い出すように言うジノ

「多分大丈夫です」
ツヴァイが言う

「心配」

アーニヤも携帯を弄りながら言う

「アイネ卿にアールストレイム卿それにヴァインベルグ卿も心配無用です。俺はまだ死ねませんから」
ツヴァイが言う

「なんでこの子だけ名前なの？」
アーニヤがアイネを見ながら聞く

「変でしたらナハトム卿に変えますけれど」
ツヴァイがアイネに向かって言う

「僕は今のままでいいがです」
アイネが言う

「私もアーニヤでいい」
「俺も呼び捨てで構わないぞ」
アーニヤとジノも言う

「ではアーニヤ卿にジノ卿で、ラウンズになれたらアーニヤ先輩にジノ先輩でどうでしょう？」
アーニヤとジノに言う

「まあ、いいか」

ジノが頭に手をやり言う

「先輩……うん、保存」

アーニャも携帯を弄りながら言う

「では、行きましょうカルブ島へ！」

第二十二話 番外編？

ツヴァイとラウンズへの道(3) (前書き)

番外編？の最終話です

誤字脱字の報告をお願いします

第二十二話 番外編？ ツヴァイとラウンズへの道（3）

今ツヴァイとアイネ、そしてアーニャとジノはカルブ島に来ている

カルブ島は小さく真ん中に小さく低い山がある円形の島だ

山が低いのでの斜面は少ないがいたる所に金属が見え、島の入口付近には大きな大砲が数十台見える。斜面にも大砲が幾つかあり、大きめに作られている

頂上には大きな灯台があり、広範囲を照らせるようだ

「凄いですね、島が要塞化してるなんて」

ツヴァイが島と島の上空写真を見ながら言う

ツヴァイが預かった軍の勢力はポートマン4個大隊と戦艦2隻である
ポートマン部隊は第1部隊が北、第2部隊が西、第3部隊が南、第4部隊を東に置き、戦艦は北と南に配置
ツヴァイ達は南の戦艦にいる

「俺の時より強化されてるな。噂によれば、動植物の生産や料理、それに兵器の運用はなんかも全て機械が管理しているから人間は見張りとナイトメアを動かすだけしか仕事が無いそうだ」

ジノも驚嘆しながら言う

「改造費がどの位かかったか気になりますね」
ツヴァイがしみじみと思う

「そんな暢気な事を言っている場合じゃ無いですよ！」
アイネがツヴァイに言う

「バカばっか」
島の写真を取りながらアーニヤが言う

「さて、そろそろ作戦を始めますか」
ツヴァイが言う

「内容は？」
ジノが聞く

「俺一人で基地内に侵入し内部工作を行いその混乱に乗じてポート
マンで攻撃を仕掛けます」
ツヴァイが準備を始める

「1人でなんて危険ですよ」
アイネが言う

「複数いると足手まといになるからいりません」
「淡々と作業をするツヴァイ」

「俺等は何をすればいいんだ？」
「ジノが聞く」

「あなた方3人は見てるだけで良いですよ」
「笑いながらツヴァイが言う」

「何ですか？」
「アイネが聞く」

「これは俺1人でやるラウンズになる為の任務ですから他の人の力、
ましてやラウンズの力を借りる分けにはいけませんよ」
「ツヴァイが言う」

「大丈夫？」
「アーニヤが聞く」

「はい、俺は不死身のツヴァイですよ？」
「ツヴァイが笑いながら言う」

「不死身？」

アイネが聞く

「今考えました、かつこいいでしょう?」
ツヴァイがポーズを取りながら言う

「それにしても、持ち物が酸素ボンベと小型爆弾とそのスイッチ、
そして通信機だけか?」
ジノが荷物を見ながら言う

「爆弾の量が少な過ぎますかね?」
ツヴァイが聞く

「いや、逆に多いと思ぞ? バックがパンパンに膨れてるし。それに、
それは小型だけど威力は結構あるんだぜ?」
シオルダーバック一杯に入っている爆弾を見て言う

「では試しに一個爆発させてみましょうか」
バックから1つ取り出す

ライターぐらいの大きさだ

「お! そりゃあいい考えだ! この前使った時より威力が上がったら
しいからな見てみたかったんだ」
ジノが興味津々に言う

「では……………ポチッと」
ツヴァイが爆弾を投げてスイッチを押す

バアン！

大きい音がした

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
4人が黙る

「微妙」
アイネとアーニヤが言う

確かに微妙であった

「まあ、あの大きさでこの威力なら良い方でしょうか」
爆弾を見ながら言うツヴァイ

「威力弱くなってないか？」
爆発を見たジノがつまんなそうに言う

「……では、そろそろ行きますね」
ツヴァイが発信機を持ち酸素ボンベとバックを担ぎ言う

「南側の第3ポートマン部隊が奇襲のメインとして動きますので覚悟しててください。北側の第1部隊は合図を出したら作戦開始。第2、第4部隊、それに第1部隊はもしかしたら出番が無いかもしれませんが用意だけは十全に済ませておいて下さい。では次の連絡を待っていてください」
連絡を終えポケットに通信機をしまつツヴァイ

「さて、行って来ます」
後ろを振り返り3人に言うツヴァイ

「ツヴァイ殿」

アイネ

「死んじゃ駄目」

アーニヤ

「気を付けるよ」

ジノ

が心配そうにツヴァイを見る

「大丈夫ですよ。しかし数時間たって連絡が行かなかった場合兵を引き揚げてください」
ツヴァイが笑いながら言う

「何言ってるんですか!」
アイネが怒りながら言う

「世の中に絶対はありませんからね。しかし俺はまだ死ねませんから、大丈夫ですよ」

そのアイネの頭を撫でながらツヴァイが言う

「ツヴァイ殿!戻ってきて下さいね?」

アイネがツヴァイに抱き着き上目遣いで聞く

「勿論ですよ俺は不死身のツヴァイですからね」
ツヴァイが笑う

「私も」

アーニヤと

「俺も」

ジノも抱きつく

数分経っただろう

「あの、そろそろ行って良いですか？」
ツヴァイが困ったように言う

視点 変更

カルブ島内にある廊下

島に潜入したツヴァイは勝手に人の部屋などに侵入してシャワーを浴び、着替えを拝借し今の姿は仮面にジャージとなっている
アーニヤが見たらまた悪趣味と言われそうである

【らくにしんにゆうできたね】
ハイドが言う

【お前のギアスお陰だな】
ツヴァイ

【えっへんそれほどもあるかな】
胸を反らし、偉そうなポーズをとるハイド

ハイドのギアスで簡単に潜入したツヴァイが歩きながら話す

【さて、主要施設や兵器に爆弾を設置するか】
地図を見ながらハイドに説明する

【でもおおぜいのぎせいしゃをだすのはどうかとおもつよ?】
地図のほうに向いながらハイドが言う

【その辺はちゃんと考えているから安心しろ。あ、其処にも置いて
ツヴァイがある場所を見ながら言う

【そう?ならいいけど】
ハイドはツヴァイがいった所に爆弾を置いていく

数十分後、爆弾を置き終えたツヴァイは廊下を歩きながら言う

【そろそろ、設置作業は終了だな。次は】
地図を見るツヴァイ

【どこいくの？】

ハイドが聞く

【放送室】

ツヴァイが言う

【なんで？】

ハイドが歩きながらも聞く

【お楽しみは残しておかないと】

ツヴァイが楽しそうに言う

放送室に着いたツヴァイは誰もいない事を確認するとマイクを持ち

「え、ただいまマイクのテスト中です、こんにちは皆様。俺はブリタニア軍のツヴァイと言います以後お見知りおきを。さて、俺はこの島に入って数十分経ちますがその間に爆弾をいたる所に設置しております。残り数分後に爆発させますのでお気を付け下さい。因み

に一番北にある空人の青い屋根の民家を失礼ながら特設避難所にさせていただきます。其処には爆弾は一切置いてありませんしブリタニア軍に攻撃をさせる気は無いので一番安全です……後3分で爆発させますので悪しからず。では、生き残りたい人は俺の言う事を信じて最北側の青い屋根の民家に行ってください。以上です」

早口で言う

言い終わって少しするとサイレンが鳴り響く

【これで犠牲者は少し減るだろ？移動しろ】
ツヴァイがハイドに言い放送室から出る

【なるほど、あたまいい！】
ハイドがギアスを発動しながら言う

【この放送を聞いてどの位の人が俺の言う事を聞いてくれるだろうな】
ツヴァイが呟く

【200にんぐらい？】
ハイドが考えながら言う

【此処の総人口ってそんなもんか？おっと、そろそろ軍にも連絡いれないとな】

少し移動するとハイド達は灯台の上に着いた。

見渡しも良好、此处なら指揮するにはちょうど良いだろう

発信機に声を通す

「第3部隊は準備を始めてください。もうすぐ爆発が各所で起こりますので爆発が始まってから十二秒後に作戦を開始してください。作戦開始の陣形は前もって言ったいた突破力のある三角形をお願いします。あと、一番北の青い屋根の家は避難所となっていますので其処とその周りを攻撃することは許可しません。もし無視するのであれば、俺がその違反者を殺すかも知れないので注意してください」

最後の所はツヴァイが怒気の籠った声で言う

少しして爆発がいたる所で起き、島の建物が幾つか崩れ始めた

爆発後ポトマンが島に乗り込み抵抗する相手との銃撃戦が始まる
カルブ島の住民も軍人の島だからなのか抵抗も激しい
しかし人間が使う普通の銃では多少の水圧を想定して作られたポ
トマンには効かない

この島にあるナイトメアは既に爆弾で壊してあるので使えない

勝利は決まったのだがそれで終わりではない。

勝利が決まっているのなら次はどの位被害を無くすかが問題だ

ポトマンが島に上陸して3分経った

途中売店で拝借した菓子パンを食べながら双眼鏡で戦況を確認する
ツヴァイ

勿論ヘルメット付きだと見難いので、ヘルメットは外している

「抵抗が多少あるようですね。第1部隊上陸開始、同じく一番近く
にある青い屋根の民家には危害を加えないで下さい。ポトマン数
機をその民家に残して後は後ろから抵抗勢力を攻撃してください。
残った機体は民家の防衛をお願いします」

ツヴァイが通信機を持ち指令を出す

北側からポートマン部隊が島に上陸し4機民家に残り、残りのポートマンは後ろから抵抗勢力の殲滅に向っている

第3部隊の状況を見ると同じ場所に固まり動き難そうだった

「第3部隊は一ヶ所に集まり過ぎですかね？三角形から陣形無しで好きなようにその辺りを2人1組で組んで敵勢力を逃がさないようにお願いします、見つけても第1番隊の援護まで無闇に攻めないで下さい。投降者は撃たず避難所へ案内してあげて下さい」

被害を減らすのは自軍だけでなく敵軍でもあるとツヴァイは考えている為コーネリアのように投降者を殺すようなことはしない

「第3部隊、後ろから第1部隊が来ますので1回ポイントC8に集まってください。集まったら陣形を敵勢力範囲を囲むように包囲型の半円形に変えて同じく第1部隊も半円形で包むように包囲」
ツヴァイが地図を見ながら言う

「其処のポートマン投降者を撃とうとしないでください！そう貴方！俺には見えてるんですよ？投降者は避難所に案内して下さい」
投降者を殺そうとしているポートマンにツヴァイが大声で言う

更に10分過ぎた頃

「作戦終了です。お疲れ様でした
第1部隊の戦艦は島のすぐ傍に移動、投降者の身体検査を行い武器などが無かった場合艦の特別室に入れてください。武器などがあつた場合即処分をお願いします。抵抗があつた場合は傷害の許可も与えませんが程々にしてくださいね、第3部隊の戦艦も第1部隊の所に行つて下さい」

ツヴァイが戦況を確認しもう残存戦力は無いと判断し言う

「さて、俺も戻りますかね」

ツヴァイも再び仮面を付けて灯台から下に向おうとする

視点 変更

第3部隊の戦艦

全てを終わらせ帰還中の戦艦に着いたツヴァイ

「ふう、疲れました」

ツヴァイが船に乗り込み言う

「ツヴァイ殿！」

アイネがツヴァイに抱きつく

「アイネ卿？」

体が震えているのに気づきツヴァイが聞く

「よかった……よかった……」

アイネが泣きながら言う

「心配をかけましたね」

ツヴァイがアイネの頭を撫でる

「ひゅー見せ付けてくれるね。てか何その服装？」

ジノが囁し立てツヴァイの服について聞く

「途中で拝借しました」

ツヴァイが言う

その前に着ていたのはシヨルダーバックに入っている

「むか」

アーニヤもツヴァイに抱きつく

「アーニヤ 卿まで……」

ツヴァイがアーニヤを見て言う

「何してるんですか!？」

アイネがアーニヤの行動に負けじと強く抱きつく

「駄目？」

アーニヤはツヴァイの手を自分の頭に乗せ上目遣いで聞く

「駄目では無いですが…」

そう言いながらアイネとアーニヤの頭を撫でるツヴァイ

「俺も！」

ジノがツヴァイに背中から抱きつく

「何ですかこの状況？」

左右後ろから3人に抱きつかれて身動きが出来ないツヴァイ

「まあ、いいじゃないか後輩」

ジノが後ろから顔を出してきて言う

「それでどうでしたか先輩？俺の働きは」
ツヴァイがジノに聞く

「凄かったぞ、俺等の被害は負傷者9名に死者がゼロ！」
ジノが感動したように言う

死者がゼロと言うのは戦争ではまず有り得ない事である。それが難攻不落と言われるこの島なら尚更であり、ジノの時では100人はゆうに超えていたらしい

「それは良かった」

ツヴァイが心底嬉しそうに言う

「それに相手側がツヴァイに感謝してた」

ツヴァイに頭を撫でられていたアーニヤがツヴァイに言う

「壊した張本人に？」

ツヴァイが聞く

「そうそう、親切に爆破時間を教えてくれた上に避難所まで用意してくれる奴なんて普通いないもんな」

普通は奇襲し侵略し抵抗する者は皆殺しなのだが

「被害を最小限にしたかっただけですよ」

まさか感謝されるとは思っていなかったツヴァイが嬉しそうに言う

「それにしても、どうやって侵入したんだ？」

ジノが聞く

「水中で一ヶ所を爆発させてその中を侵入しました」
ツヴァイが考えながら言う

「ヘーでも危なくないか？それ」
ジノが感心したように聞く

「まあ、賭けでしたからね」
ツヴァイが苦笑する

「うう〜、そんな危険な事をしてもしも何かあったらどうするんですか？」
アイネがツヴァイを抱く力が更にながった

「その時はその時で」
ツヴァイが言いかけた時

「ぎゅ〜」
アーニヤもかなりの力を込める

「あは！俺も」
ジノまでも

体が悲鳴を上げつつあるツヴァイの体

「ちょっと皆さん自分の力分かってます？俺の体が今にも潰れそうですよ？ただでさえ疲れてるのに」

圧迫されている為声がおかしくなっている

「すみません」

「おっと失礼」

アイネとジノがツヴァイから離れるが

「ぎゅ〜」

アーニヤだけは離そうとしない

「アーニヤ 卿離し「先輩」…アーニヤ先輩離してください」
ツヴァイの言葉を遮り言い直させた

「嫌」

アーニヤが首を振りながら言う

「嫌じゃなくて、俺は少し寝たいのですが」
ツヴァイが欠伸をしながら言う

「このまま寝ればいい」

アーニヤが更に力をいれて言う

「それでもいい位眠いのでそうさせてもらいます」

ツヴァイはアーニヤを引きずって自室に戻ろうとする

「じゃあ僕も一緒に！」

「俺も！」

アイネとジノも付いて来た

「添い寝なんて久し振りだな」

ジノは楽しそうに言う

「やれやれ、1つ言っておきますね。寝ている時に俺の仮面には触らないで下さい」

ツヴァイが仮面を触りながら言う

「何で？」

アーニヤが引きずられながら聞く

「下手したらあなた方を殺す可能性があるからです」
ツヴァイの真剣な声にアーニヤとジノが驚く

「本当か？」

ジノがツヴァイに聞く

「アイネ卿が1回やってしまい、首を絞めてしまった事がありますからね」

アイネを見ながらツヴァイが言う

「そうなの？」

アーニヤがアイネに聞く

「はい」

俯いて答えるアイネ

それを見て

「ですから俺の仮面には触らないで下さいよ」
ツヴァイが言う

「分かった」

ジノが真剣な目で言う

「」（素顔は見れないのか、残念）」「
アーニヤとジノが同じ事を考える

「では、寝ましようか」
ツヴァイが自室のドアを開けて言う

「私はツヴァイの上」
ツヴァイがベットのの上に寝た瞬間にアーニヤがツヴァイの上に飛び乗る

「ぐは」

衝撃が辛かったが、アーニヤの体重は軽いのですぐ安心したツヴァイ

「ズルイぞアーニヤ！僕も上が良いのに」
アイネがアーニヤに言う

（てか、呼び捨てになってるけどそんなに仲良くなったの？）

「俺は横！」
ジノがツヴァイの左側に寝る

「私の方が軽いから上」
アーニヤが仰向けのツヴァイの上に仰向けの姿勢で言う

「むう、仕方ないですね、ツヴァイ殿腕枕してください！」
アイネがツヴァイの右側に寝てツヴァイの腕を伸ばしその上で寝る

「俺も」

ジノもツヴァイの腕を伸ばし言う

「本当に限界なので好きなのよに……てっさ……い
ツヴァイが寝息を立て始める

「私には？」

アーニヤがツヴァイに聞くがツヴァイは寝ている

周りを見ると皆寝ている

「ジノもアイネもツヴァイも寝た……私も寝よう」
アーニヤも俯けで寝る

視点 変更

ペンドラゴン皇宮

「これより任命式を行う。ツヴァイ・ドウ」

よく教会の人が着そうな白い服を着た老人がツヴァイを呼ぶ

ツヴァイの服装はジノやビスマルクと同じラウンズの服装で、何時もと同じ仮面を付けている

「彼の者は難攻不落と言われた彼のカルブ島にて、たった1人で島に侵入し主要施設の破壊工作を行ないその隙に兵を島入ることに成功した。さらに巧みな指揮で我がブリタニアの被害を最小限に抑え何と

死者ゼロ人と言う偉業を成し遂げたのである。この功績を称えラウンズの称号を与える事となった」

老人がかけてある灰色のマントを伸ばしツヴァイに見せ言う

何故灰色かといえば本当は緑が良かったツヴァイだが緑系はジノとモニカと同じ為駄目であった、他に白か黒がいいと言ったら白はビスマルク黒はシャルルと同じなので同じく駄目、ではと灰色を頼んだら許可が降りた為灰色になった

「このマントを羽織る事によって貴殿は正真正銘の帝国最強の騎士、ナイトオブラウンズになる」

ツヴァイが渡されたマントを羽織る

「此処に新たなラウンズが生まれた！彼の者にはナイトオブツアの称号が与えられる。ナイトオブツア、ツヴァイ・ドウの誕生だ！」
その途端大きな歓声が響きツヴァイを包む

「貴殿は今この瞬間より帝国最強の騎士の1人となった、その事に
恥じぬ働きを見せよ。オール・ハイル・ブリタニア!!」
老人がシャルルそっくりに言う

「オール・ハイル・ブリタニア!!」
「オール・ハイル・ブリタニア!!」
「オール・ハイル・ブリタニア!!」

その声はツヴァイを歓迎するかのように果てしなく響いた

視点 変更

ブリタニア基地

ツヴァイ達が最初に来た町である

其処にはツヴァイとアイネ、そしてアーニヤとジノがいた

「では、俺はエリア11に戻ります。コーネリア様に挨拶をしたい
と思っていますので」

ツヴァイがアーニヤ、ジノに言う

「そうか」

ジノが名残惜しそうに言う

「忙しいのに見送りまでしていただきありがとうございます」
ツヴァイが頭を下げて言う

「ツヴァイ殿、そろそろ時間です」
アイネが時計を見て言う

「バイバイ」

「2人とも元気でな！」
アーニヤとジノが飛行機に乗り込もうとするツヴァイとアイネに手を振りながら言う

「それではお世話になりました」

「では、これで」

ツヴァイとアイネもアーニヤとジノに手を振る

飛行機の中

「さて、久し振りのエリア11だ」
ツヴァイが嬉しそうに言う

「コーネリア様が主宰のツヴァイ殿の歓迎会を開くそうですよ」
アイネがツヴァイに資料を渡す

それを見て

「そうですか、あまり大きく報道されたくないのですがコーネリア様が主宰では何も言えませんか。しかし次はアイネ卿の番ですよ？」
ため息を吐きアイネに言う

「はい、僕も頑張ってツヴァイ殿に早く追い付きたいです」
アイネが笑顔で言う

「ゆっくり待っていますよ」
その笑みを見てガーベスの事を思い出すツヴァイであった

(いい訳どうしようかな、北海道に行っていたでいいかな？お土産は空港で買えばいいか、ルルーシュさんにガーベスちゃん、カレンちゃんにリヴァル会長ニーナは元気でやってるかな？楽しみ楽しみ)

(ツヴァイ殿は凄いです。本当にラウンズになるなんて、僕も負けられませんね頑張って追い付いて追い抜きます！)

第二十二話 番外編？

ツヴァイとラウンズへの道(3) (後書き)

次回は本編に戻ります

次回 ゼブルと 紅蓮 舞う

第二十三話

本編 10

ゼブルと紅蓮

舞う(前書き)

誤字脱字の報告をお願いします

エリア11に戻って一日経った
今日

生徒会室で仕事をこなすメンバーに

「皆久し振り！」

威勢良くゼブルが扉を開けて入ってくる

「ゼブル？」

「ゼブル様！？」

ルルーシュとガーベスが驚いた様に言う

それを聞いて他のメンバーの手も止まる

「お前今まで何処に行ってたんだ？」

リヴァルが小突きながら聞く

「ちょっと烈風山でホツカイドーに行ってたんだよ。はい、お土産の白い恋人」

紙袋にお菓子の入った箱ををテーブルに置く

『ゼブル様！』
ガーベスがゼブルに飛びつく

「大変だったみたいだね、大丈夫だった？
ゼブルがガーベスをキャッチする

『大丈夫じゃありません！凄く怖かったですよ？終わってゼブル様に慰めて貰おうとしたらゼブル様はいませんし』
頬を膨らませ少し怒ったようにガーベスが言う

「ごめんごめん。でもまあ、皆無事で良かったよ。ゼロの騎士団のお陰だね」
ガーベスを撫でながらゼブルが言う

「黒の騎士団だよ」
スザクが言う

「そうだったけ？それに新しくナイトオブブラウンスになった仮面の人も今トウキョウ租界にいるんだってね。仮面が今ブームなのかな？
そうそう、そう言えば皆をテレビで見たよ」
ガーベス、ミレイ、シャーリー、ニーナを見ながらゼブルが言う

「だ、そうですよスターさん」
リヴァルがシャーリーに言う

「そう言う冗談止めてよ。あの後本当に大変だったんだから。四六時中追い掛け回されて質問攻め、お風呂の中までよ!」
シャーリーが困ったように言う

『お風呂の中では私は無害でした』
誇らしげにガーベスが言う

「喋らないもんね」
ガーベスを見ながら微笑む

「マスコミのせいだここ一週間学校から出られなかったしね」

当時、学校が凄いマスコミで囲まれていたそうだ

「だからって何で俺達まで外出禁止なんですか？」
リヴアルが不服そうに言う

「友情って奴でしょ。我等生まれた時は違えど死すべき時は同じと願わん、by三国志」

「(この世界にも三国志ってあるんだ)」
感心しながら聞く

「それってプロポーズ？」

リヴァルが期待に満ちた顔で聞く

「死にやば諸共ってこと」

ミレイは猫のように言う

「ヒデーよなあスザク？」

リヴァルがスザクに聞くと

「良かった」

目に涙を溜めながらスザクが言う

「へ？」

驚いた様にリヴァルが言う

「また皆で集まれて本当に良かった」

袖で涙を拭きながらスザクが言う

「何だよ、此処は笑う所なんだよ！」

リヴァルがスザクに技をかける

それを見て皆から笑い声が漏れる

すると

「ガーベス!!」

ドアを威勢良く開けてアイネが生徒会室に入ってくる

『ア、アイネさん?』

ガーベスが急な轟音に驚きながらも振り向く

「こら、ガーベスから離れる!」

ゼブルとガーベスがくっ付いているのを見てアイネが離そうとする

『そっそれより、今までどうして学校を休んでいたんですか?』

ガーベスが1回離れてアイネに聞く

「それは、最近ラウンズになって今このエリアに来ているナイトオ
ブツのツヴァイ殿がいるだろ?その人のラウンズになる為の試験
をここ数日見学させてもらっていたのだ」

アイネが自慢げに言う

「凄いじゃん!って事はアイネはその人と仲がいいのか?」

リヴァルがアイネに聞く

「ふん、当たり前だ。ツヴァイ殿は素晴らしいぞ」
自分の事を言うようにツヴァイの事を褒める

「素晴らしいな、此処最近のニュースで黒の騎士団と同じくらい持ちきりだ」

ルルーシュが近くにある雑誌の1ページを開いて皆に見せる

「確かに有名よね、他のラウンズは知らないけどツヴァイ・ドウ卿は町で悪漢共から弱い女性を助けたとか、子供達と遊んだり、車に轢かれそうな老人を助けたりしてるってニュースでやってた」
シャーリーが言う

「本当なの？」

カレンがアイネに聞く

「全部事実だ、僕は感動した！最初は人をおちよくる人だと思っていたが、強く優しく頭も良い最高の人だ！ツヴァイ殿は」
顔を少し赤く染めアイネが言う

「じゃあさ、ガーベスは諦めてそのツヴァイって人とくっ付けば？」
リヴァルがアイネに言う

「そんな、僕なんかではツヴァイ殿に合わないし、確かに僕の事を褒めてくれたけどそれはお世辞だろうし、僕の気持ちをツヴァイ殿

は絶対分かってない、そうさ、たまに積極的に攻めるけど受け流されるし、アーニヤもなんだかんだでツヴァイ殿を狙っている雰囲気だし、それに最近はコーネリア様とよく一緒にいるし、それから……ブ……ツ……ブ……ツ……

アイネが顔を色々な変えながら言う、後半は主に暗い顔であった

「な、なんだか大変そうね」

ミレイがそんなアイネの肩を叩き言う

「だからガーベス慰めてくれ！」

アイネがガーベスに飛び掛る

『今日は駄目です。私がゼブル様にホテルジャック事件の事で一杯甘えるんですもの』

それを避けゼブルの胸元に抱きつくガーベス

「どうして今なんだ？もつと前に甘えれば良かっただろ？」

顔を床に強打したらしく顔を押しさえながら涙目でガーベスに聞く

「ゼブルも今までいなかったのよ」

ミレイがアイネに言う

「アイネと同じ日からホツカイドーに行ってたらしいの、ね？」
シャーリーが言う

「アイネちゃんも俺に甘えるかい？」
両手を広げてゼブルが手招きする

「余計なお世話だ！僕が甘えるのはツヴァイ殿とガーベスだけだ」
ゼブルに近付き大声で言う

「そのツヴァイ殿にどんな風に甘えるのか聞きたいな」
ゼブルが笑いながら言う

「なっ！馬鹿な事を言うなそんなの恥ずかしくて言えないに決まっているだろう！」
アイネが顔を赤くしながら叫ぶ

「へー、そんな恥ずかしい位甘えるんだ」
ミレイが待つてましたとばかりに言う

「え？あ！それは・・・その」
ミレイの言っている意味に気が付きアイネがしまったと言う顔をする

「いやー見てみたいな、アイネちゃんのそんな姿、どんなんだと思う？」
ゼブルがスザクとリヴァルに聞く

「猫の真似したり、ニャーとか」
スザクが言う

「ドキ！（それをやった後に恥ずかし過ぎてずっと喋れなかったのに！）」
アイネの体がぴくつと動く

「いや犬の真似でしょ、ワンワンって」
リヴァルが言う

「ドキ！（だから、何で知ってるんだよ！あの後も本当に気まずかった！）」

アイネの体が更にぴくつと震え顔を凄く赤くさせる

それを見た皆が微笑む

「（いや、恥ずかしながら健気に頑張るアイネちゃん破壊力は凄かったな。可愛すぎて襲っちゃいそうになったしね。よく襲わなかったよ。本当に）」
うんうんと思いつながら自分に感心する

「ぼ、僕はブリタニアのお土産を渡しに来ただけだからな」
アイネが箱に入ったクッキーを机に置く

「何だ？仕事でもあるのか？」
リヴァルが聞く

「ああ、ちよつと大きい仕事だ」
大きいを少し強調して言う

「俺の買ってきたこのお菓子を1箱持っていけば？」
ゼブルが白い恋人をアイネに差し出す

「いいのか？」
受け取ったアイネが聞く

「沢山買ったから大丈夫」
数箱机に置いてあるのを指差し言う

「そうか、1つ頂く」
カバンの中に入れるアイネ

「気を付けるよ」
「じゃあまた、学校で」
『さようなら』
「ツヴァイって人に宜しく」

「勉強も頑張りなさいよ」
皆が一言づつアイネに言う

「ああ、また」

アイネが笑顔で出て行く

少し経ち

「さて、俺も帰ろうかな」

ゼブルも体を伸ばしながら言う

「何だよ？もつと話そうぜ」
リヴァルがゼブルに言う

「ごめん、旅の疲れが出たみたいで眠いんだ。お休み」
欠伸をしながら部屋を出て行くゼブル

「私も一緒に失礼します」

その後を追いかけるガーベス

ゼブル達が出て行って数分後

「あ！しまった！」

ミレイが何か思い出したように言う

「どうしたんですか？」

それを見たシャーリーが聞く

「ゼブルとアイネにライの事を言うのを忘れてた」

ミレイが困ったように言う

「まあ、今すぐじゃなくてもいいじゃないですか、それにガーベスが気付いて言うかも知れませんが」

「それもそうか」

そう言い仕事に戻るのであった

視点 変更

黒の騎士団 武器用倉庫

協力者やナイトメアも増え、世間では黒の騎士団で持ちきり状態
皆嬉しくて頬が緩みっぱなしである

「玉城はともかく、井上達までも浮かれ気分だとは」
それを見てゼロが呟く

「キョウトは複数のレジスタンスを支援しているそうだな」
ゼロがカレンに聞く

「はい、その中にやっと私達も入れて貰えて「違うな、間違っているぞカレン。これは只の試験に過ぎない」」

赤い純日本製のナイトメア紅蓮を見ながらゼロがカレンの言葉を遮る

紅蓮は純日本製のナイトメアで黒の騎士団に提供された機体であり、第七世代のナイトメアに相当する性能を持つ

526

「そう思って頂いただけでも充分です」
ゼロの言葉を聞いてもカレンは嬉しそうに言う

「前向きだな」
それを見たゼロがカレンに何かを投げる

「これは」
それは紅蓮のキーであった

「この紅蓮式式はカレン、君の物だ」

ゼロが紅蓮を叩きながら言う

「私が？でも今は人も増えたし、紅蓮の防御力なら貴方こそが」

「君がエースパイロットだ。私は指揮官、無頼は使うが戦闘の切り札は君だけだ。それに、君には戦う理由があるだろ？」

「俺はエースパイロットじゃないのか旦那？」

紅蓮から声が聞こえる

実際には紅蓮の頭にいたマックスである

「お前はいつから其処にいたんだ？」

ゼロが聞く

「違うな間違っているぞ位からいたぞ」

ビニール袋を持って紅蓮から降りる

「お前の腕を私はまだ知らないからな、それに今まで何処にいたんだ？」

ゼロが少し苛ついているように言う

「そう言えば見せたこと無かったっけ？それと今まではキュウシュ

ウに情報収集の為に行ってた、お土産は辛子明太だ」
ビニール袋から箱を4箱出し見せる

「そうか」

ゼロがため息を吐きながら言う

すると

「ゼロちよつと良いか？」

後ろから扇が資料らしき紙を持って来た

「変な情報が上がってきた。入団希望のブリタニア人からだ」
扇はゼロに資料を見せる

「我々を誘い出す罠じゃないかな？裏を取ろうにもこの男に迂闊に接触するのも危険だし、でも無視するには大きすぎる情報だ、どうすれば良い？」

ゼロを見ながら扇が聞く

「週末はハイキングかな？ナリタ連山に」
ゼロが書類から目を離し言う

「それじゃあ……」

「まあ、俺は行けないけどな」
扇が言い終わらない内にマックスが言う

「何故だ？」

扇がマックスに聞く

「俺はカレンと同じで他の生活がある。それに今ある物を作っている最中なんだよ」

「ある物？」

カレンが聞く

「そう俺専用のナイトメアフレーム、その名も翠竜」
口元を歪めながら言う

「お前ナイトメアを作れるのか？」
扇が驚きながら言う

「残念だが俺に其処までの技術は無い、俺が作っている翠竜はサザ
ーランドとグラスゴーのパーツを混ぜてカラーリングしただけで武
器もスラッシュハーケンしかない」
首を振りながらマックスが言う

「いつ頃出来上がる?」
ゼロが聞く

「早くて数日後には出来上がるだろうな、でも微調整が必要だから
乱用は出来ない」
マックスが言う

「そうか」

「あと、俺がキュウシュウにいた時仕入れた情報だとナイトオブツ
ーのツヴァイ・ドウはこの作戦に参加する気は無いらしい」
マックスが3人を見渡して言う

「何だと?」

「本当かそれは?」

ゼロと扇がマックスに聞く

「まあ、ピンチになったら駆けつけるらしいが、その作戦の前半は
何か用があるらしくて来れないらしい」
頭を掻きながら言う

「では、お前はこの情報を知っていたんだな?」
ゼロが聞く

「だから帰って直に此処に来たんだぜ」
マックスが辛子明太を見せながら言う

「ふっ、お前の情報源が何処からなのか気になるな」
ゼロが笑いながらマックスに言う

「それは秘密だ。お土産は皆で食べ、旦那には別に一箱あるから帰って食べな。それじゃあ俺はこれで」
手を振りながら帰っていくマックス

「全く良く分からない奴だな」
ゼロが呟くように言う

マックスが消えて少し経って

「あ！しまった」

カレンが何か思い出したように言う

「どうした？カレン」
それを聞いた扇が聞く

「ライの事を言うの忘れてた」
頭を掻きながらカレンが言う

「まあ、マックスなら知っているかもしれないし、それに今すぐじや無くても問題ないだろう」
扇が言う

「それもそうね」

そう言い紅蓮のコックピットに乗り点検を始めるのだあった

視点 変更

クラブハウスのナナリーの部屋

「咲世子さん、朝食お兄様の分はいらないわ」
ベットから起きてナナリーが言う

「お出かけですか？」

ナナリーの着替えをベットに置き咲世子が聞く

「今日から3日ほど旅行に出るって」

「そうですか、最近よくお出かけになりますね。恋人とか？」

咲世子がそう言い部屋から出て行く

「そうかも知れませんね」

俯いて言うナナリー

「ナナリーちゃんはやっぱり寂しいかい？」

ゼブルがナナリーに聞く

「ひゃっ！ゼブルさんいつ此処に？」

急に聞こえた声に戸惑うナナリー

「結構前からだよ。この前ルルーシュさんが次旅行に行く日は咲世子ちゃんも用事があるからナナリーちゃんと一緒にいてくれてさ」

「そうだったんですか」

少し顔を赤く染めながら言う

「では、ナナリー様を任せて宜しいですか？」

咲世子がゼブルに聞く

「勿論ですよ」

ゼブルは笑顔で返す

「では、失礼します」

2人に一礼を部屋から出て行く咲世子

【久し振りねゼブル】

ハッピーがゼブルの肩に飛び乗り言う

【本当だね、ナナリーちゃんとはどう?】

それを撫でるゼブル

【楽しいけど、可哀相に寝てるときによくうなされてるのよ】

【そうか】

【護ってあげなさいよ】

【こっちのセリフだ】

【そうだったわね。護るのは私の役目か】
思い出したようにハッピーが言う

「ゼブルさん」

ナナリーがゼブルの手を握って言う

「何だい?」

ハッピーとの話を切りナナリーに聞く

「あの、お手洗いに連れて行ってくれませんか？」
もじもじと体を震わせゼブルに言う

「おつとごめんね、よいしょ」

ナナリーを抱きかかえて早歩きでトイレに向うゼブル

「ナナリーちゃん本当に軽いね」

ナナリーを少し体に寄せて言う

「そうですか？」

ナナリーがゼブルに聞く

「うん、もっと食べた方がよいよ。と言っている間に着いたよ」
トイレの前で止まるゼブル

「え！もうですか？」

驚いた様にナナリーが言う

「よつと、じゃあ車椅子持ってくるから終わってもちよつと待って
て」

ナナリーをトイレに残し部屋に戻るゼブル

数分後、居間

「さて、朝ご飯だね。すぐ作るから待っててね」
エプロンを着て台所に立つゼブル

「ゼブルさんが作るんですか？」
ナナリーがゼブルに聞く

「カレンちゃんが生徒会に入った時にジュース作ってたでしょ？」
果汁80パーセントのオレンジジュースである

少し考え

「あ、そうでしたね。あのジュースは美味しかったです」
ナナリーが思い出したように言う

「なら、作り溜めしてあるから今度持って来るね」
ナナリーの頭を撫でながら言う

「本当ですか？楽しみです」
ナナリーが嬉しそうに言う

「そんなに気に入ってくれたんだ」
ナナリーの表情を見てゼブルも嬉しくなった

少して料理を運ぶゼブル

「お待たせ、ナナリーちゃんにはあっさりした海鮮リゾット、ハッピーには焼き鳥だ。残さず食べるんだぞ」
1人と1羽の前に料理を置く

「……………」
ハッピーには焼き鳥だ。を聞いて固まるナナリー

【同類を食えってか!?!】
ハッピーが怒ったようにピーピー鳴く

【お前は女神様だろ?気にすんな】
ゼブルが席に座りながら言う

【それもそう、って自分を食べてるみたいで気持ち悪いわ!】
関西人っぽいのリツッコミだ

「あのゼブルさんハッピーちゃんに焼き鳥はどうかと
そんなハッピーの鳴き声を聞いてナナリーが言う

【ホラ見なさい、ナナたんは私の味方ね】
ナナリーに肩に乗り言うハッピー

「ナナリーちゃんがそう言うなら変えるか。おいハッピー、鳥の唐揚げか鳥のささ身か鳥の【結局鳥かい！？せめて豚か牛にせえへんかい！はあはあ、仕方ない果物でも食べますか】分かった分かった、ほら、バナナで良いか？」

冷蔵庫を見ながら言うゼブルが意地悪に言うがハッピーのツッコミに折れてバナナを見せるゼブル

（たまに関西が入るな。出身は関西方面か？）
等と変なことを考えるゼブル

【リンゴが良い、ちゃんとすりおろしてね】
ハッピーが言う

「仕方ないな。ナナリーちゃん、リンゴ剥くけど食べれるよね？」
リンゴを剥きながらナナリーに聞く

「大丈夫です。ありがとうございます」

「じゃあ、焼き鳥は俺が頂くか」
リンゴを剥きながら呟くと

「あつ！」

ナナリーがスプーンですくったリゾットが太ももに零れる

「おっと！リゾットは食べ難い？」

急いでこぼしたリゾットを取り太ももに氷を置く

「いえ、大丈夫です」

ナナリーが目には涙を浮かべ言う

相当熱かったようだ

「でも……………そうだ！ちよつと失礼」

少し考えナナリーを自分の太ももの上に座らせ左腕でナナリーの背
中を支える

「え？何を？」

急なことに戸惑うナナリー

「これでよし。少し冷まして。はい、あーん」

リゾットをスプーンですくいフーフーと冷ましてナナリーの口に運

ぼつとする

「はっ、恥ずかしいです」

ナナリーが顔を赤くさせながら言う

「気にしない気にしない。ほら、あーん」
ナナリーの唇にスプーンを当てると

「あ、あーん……美味しいです！」
口を少し開けスプーンを受け入れる

「良かったほら、もう一口」
もう一度冷ましスプーンを運ぶ

「あーん」
さっきより少し大きめに口を開ける

「口の周り拭くよ？」
ナプキンで口の周りを拭く

【（微笑ましいわね）】
それを見ていたハッピーが思う

【（それより私のリンゴはまだ？）】
腹を鳴らしながらそう思うのであった

朝ごはんを食べ終えた2人

「さて、洗い物も片付いたし次は何をする？」
台所から出てきてエプロンを外すゼブル

因みにハッピーは現在進行形で食事中である

「私は普段ポーっとしていることが多いのですが、ゼブルさんは何をなさりたいのですか？」

ナナリーが申し訳なさそうに言う

「そうだな、天気も良いし散歩にでも行く？」
外を見てゼブルが言う

「でも昨日の朝の雨で土がまだ少しぬかるんで車椅子では移動は出

来ませんね」

ナナリーが言う

「そうなの？じゃあ俺が抱っこして連れて行ってあげるよ」
ナナリーを抱き上げて言う

俗に言うお姫様抱っこである

「え？いや、それは恥ずかしいです」
流石に他の人にゼブルと2人っきりの所を見られるのは恥ずかしい
のである

「そう？よし！じゃあ、屋上に行こう」
ゼブルがナナリーを抱いたまま屋上を目指し歩き出す

「屋上ですか？」
ナナリーが聞く

「ナナリーちゃんに俺の秘密を教えてあげるよ」
階段を2段飛ばしで上る

「秘密ですか？」

「楽しみに待って さあ、着いたよ」

屋上の扉を開けてゼブルが言う

屋上には椅子が無く仕方なく屋根に上り其処にナナリーを座らせその隣にゼブルも座る。大きいせいかな緩やかな三角形の屋根なので落ちる心配も無い

「あの、秘密とは？」

ナナリーが聞く

「ナナリーちゃんも俺達に何か隠しているように俺もルルーシユさんもスザクもガーベスちゃんも会長も皆が皆に何かを隠し偽り生きている」

「……………」

ゼブルの言葉にナナリーは俯く

「君にはこれから俺のしている景色を見せるけどこれは他言しちゃう駄目だよ？」

ナナリーを自分の足と足の間で寄せ包むようにしゼブルが言う

「見せる？どうやってですか？」

喜びと不安と緊張が入り混じった顔でゼブルを見る

「催眠術の一種だね、今から言う事を頭の中で思い浮かべ考えてらん」

ナナリーの頭に手を乗せる

「……はい」

ナナリーが空を見上げながら言う

(スタイルチェンジ・コンフ)

目を閉じる

「真っ青の空に小さく漂う白い雲の群れ、大きい」
もう一度目を開け語りだす

(ギアス発動)

目から鳥が羽ばたいた

「え？見える？瞼は開いてないのに景色が見える」
ナナリーは自分の目に手を当て確かめる

「空は何色じゃ？」

コンフが聞く

「青いです」

ナナリーが答える

「雲は何色じゃ？」

コンフが聞く

「白いです」

ナナリーが答える

幾つか似たような事を繰り返す

最後に

「景色は綺麗か？」

コンフが聞く

「はい、凄く綺麗です」

ナナリーは空を見つめながら涙を流す

(そろそろ変わるぞい、スタイルチェンジ・ゼブル)
コンフからゼブルに戻る

「あ！」

ゼブルに戻った事によりコンフのギアスが消え、ナナリーは暗い世界に戻る事となった

「ごめん時間切れた」

空を見上げながら言う

「ひっぐ、えっぐ」

ナナリーから嗚咽がもれる

「ごめんね、こんな少ない時間でしか見せられなくて」
ナナリーを後ろから抱くゼブル

「いうえ、嬉しいでひっく、本当に」
何とか我慢しようとするが止まらない

それを見たゼブルが

「我慢しないで泣いてもいいんだよ。久し振りに見た景色がこんなのでごめんね、ルルーシュさんの顔とかが良かったよね？」
さらに力を込めてナナリーを抱く

「うえええええん！」

ナナリーが振り返りゼブルの胸に顔をつけ大声で泣く

「よしよし、一杯吐き出しな」
その頭を撫でながらゼブルが慰める

【良いの？ナナたん力を使っちゃって
ハッピーが何処からとも無く飛んできた

【ナナリーちゃんはかわいそうな子でさ、もう少してルルーシュさんと会えなくなるんだ】
自分の胸で泣いているナナリーを見ながらゼブルが言う

【そうなの？】

【そう、だから今は……今だけは少しでもナナリーちゃんを……】
ゼブルの目から雫が一粒垂れる

【分かったわ、私がこの子を護る】

【頼んだよ】

「ゼブルさんも泣いてるんですか？」

ナナリーがゼブルの顔に手を当てたことでゼブルは気付いた

無意識に流れていた涙に驚きながら

「ちよつと君の未来の事でね」

と言いナナリーの顔にハンカチを当てて涙を拭き取る

「やっぱりゼブルさんは私たちの事を知っているんですね？」
ナナリーが確信したように言う

「何でそうなるのかな？」

驚いたゼブルが聞く

「久し振りに見た景色と言っていました。この目が生まれつきでないこと知っている言い方です」
先程言ったゼブルのセリフである

「バレちゃったか（洞察力のある子だね）」
隠さずに開き直るゼブル

「お兄様と仲良くなったのは私達を知っていたからですか？」
ナナリーが真剣な表情で聞く

「俺がそんな男に感じるかい？」
ナナリーを見つめながら言う

「それは……」
顔をそらす

「俺は君たち兄弟に同情と尊敬の念を抱いている。大丈夫この事は
他言する気は無いよ。それに俺もナナリーちゃんに秘密を教えたか
らおあいこだよ」
笑いながら言うゼブル

「では、どうやって私たちの事を知ったんですか？」
再び真剣な顔で聞く

「君の伯父さんに当たる人の所でお世話になっている時に写真だね」
勿論嘘であるが、VVがナナリーの伯父に当たるのは事実である

「そうですか」

「ごめんね黙ってた」

ナナリーを撫でながら言う

「いえ、私達も同じですし」

ナナリーが申し訳なさそうに言う

「俺は何が遭っても君達兄弟の味方であり続ける。だから誰にも言えないことも俺には言って良いんだよ？」

ナナリーを抱いて言う

「ゼブルさん」

ナナリーがゼブルの服を強く握る

「（やはり、ルルーシュさんにも言えないことがあったのか）
そう考えて

「そろそろ冷えてきたね、部屋に戻ってお昼寝でもする？」

ゼブルが抱いたナナリーをそのまま持ち上げ室内に入る

「どうしてですか？まだ午前中ですよ？」

ナナリーがゼブルに聞く

「最近あまり寝てないでしょ？顔色が悪いよ、女の子なんだから気をつけないと」

ナナリーの顔を撫でる。よく見ると疲れているのか瞼が重そうだ

「でも、寝るのが怖いんです。いつも夢の中でお兄様が私から離れて遠くに行ってしまうんです」
震えながらナナリーが言う

「……」

部屋につき無言でナナリーをベッドに乗せ寝かすゼブル

「それで中々寝付けないんです」
仰向けになりながら言うナナリー

「俺が寝るまで一緒にいるから大丈夫だよ」
ゼブルがナナリーの手を握りながら言う

「ゼブルさん……」

「眠くなってきたみたいだね、お休みナナリーちゃん」
空いているほうの手でナナリーの頬を優しく撫でる

「お休 みな……い」
ナナリーは深く寝入った

「全く、どうしようかな」
ナナリーの寝顔を見ながら呟く

「只今帰りました」
咲世子がいつの間にか後ろに立っていた

「お帰り咲世子ちゃん」
後ろを向いて言う

「ナナリー様はお休みになつて居るのですね」
ベットに来て寝顔を見る咲世子

「俺はそろそろ行くからナナリーちゃんの事宜く頼みますね」
ゼブルがナナリーから手を離す

「畏まりました」
頭を下げ何処かに行く咲世子

「ごめんねナナリーちゃん、行って来る」
ナナリーを少し撫で部屋を出て行くゼブル

【ナナリーちゃんの事宜しく頼むよ】
ツヴァイの服装に着替えるゼブル

【任せなさい】
ハッピーがゼブルの部屋の机に立って言う

【じゃあ、行きますか。スタイルチェンジ・ハイド】
ギアスを発動しながら出て行くツヴァイ

【ふふ、いってらっしゃい】
ハッピーがその姿を見送る

【あ！新しく来た記憶喪失の子の事言うの忘れてた。まあ、大丈夫かな】
ハッピーが呟きながら部屋を出て行く

ゼブルのギアス3人目

コンフ

一人称ワシ

特徴：喋り言葉が老人みたくなる

能力：自分の見た映像、身に起きている痛み、嗅いだ匂い等を任意で相手に送る。しかし送れるのはリアルタイムの出来事のみである

発動条件：相手の体に触れる。間接的でも可だが間接的の場合人のみで人以外の有機物及び無機物が間接したのでは発動しない。しかし送れる数は今の所不明で繋がっていればであれば数十人規模に送れる

お待たせしました！ Fate参戦！

と言っても分からない人が見たら「何それ？」ですよね？

出てくる用語は一番下に分かりやすく書いたつもりです

見難かったり間違いがあつたらすみません

ナリタ連山の入り口付近にある G - 1 ベース内

「ナイトオブツアのツヴァイ、只今を持ちまして戦線に復帰します」
ツヴァイが後ろのドアから入り声をかける

「ツヴァイ・ドウ卿」
振り向いたユーフェミアが呟く

「しかしランスロットが出たのではもう俺のやる事は残っていませんね」
画面を見るとランスロットが交戦をしている所だった

「遅すぎですよ！今まで何してたんですか？」
アイネが少し怒りながらツヴァイに言う

「野暮用です。しかし、アイネ卿は何故この G - 1 ベースにいるんですか？俺はてっきり出撃していると思っていましたが」
ツヴァイがアイネに聞く

「僕はコーネリア様からユーフェミア様を護るように命令されているんです。ツヴァイ殿は早く僕のグロースターに乗ってコーネリア様の援護に行ってください」
ツヴァイの背中を押し、急かす

「まあ、確かに乗る事には変わりないんですが……しかし作戦のほうはもう終わりますよ？」

「え？」

押していた腕の力が抜ける

「もうすぐギルフォード卿から作戦終了の命令を出すでしょうから」

「そんな筈」

アイネが画面を見ていると

「作戦終了撤退を始める。繰り返す、直ちに撤退せよ」
ギルフォードの声が響く

「何故分かったのですか？」

アイネが驚きを隠せない表情で言う

「只のしがたい未来予知です。今回の俺の仕事は枢木卿のランスロットを戦闘不能にする事位ですね」

ツヴァイが司令室から出ようとする

「何故スザクを？今からゼロの捕獲すると通信があったそうですが？」

ユーフェミアが聞く

「その途中で錯乱状態になるんですよ」
ツヴァイはため息を吐きながら言う

「未来予知ですか？」

アイネが聞く

「ええ、ですから俺自身が行かなくては」

「しかし、エナジーファイラーが尽きるまで待てばどうでしょう？」
ユーフェミアが聞く

「ランスロットは一機でサザールランドの十数機分以上に値します。
そんなものが暴れて犠牲者が出てからでは遅いのです」

「ツヴァイ殿は大丈夫なんですか？そんな機体相手にグロースター
でも危ないですよ」

アイネが心配そうな顔でツヴァイに聞く

「心配無用です。俺の肩書きが伊達では無いところを見せて差し上げます」

そう言いツヴァイは出て行った

視点 変更

ナリタ連山

「これはこれは」
現状をみてツヴァイは驚く

「わあああああ！」
叫びながら周囲の木々を蹴ったり殴ったり撃ったりして壊している
ランスロット

周りの地面には小さなクレーターが幾つも出来ている

「ここは不意打ちで落としますか」
ツヴァイの乗るグロースターがランスロットに向かってスラッシュ
ハーケンを放つ

「!?!」

見事に脚に当たりバランスを崩し倒れる

「これで動きは止まりましたね」

脚が壊れている事を確認し近づくと

「ああああああ!!」

手をバタバタ動かして暴れるランスロット

「うるさいですよ」

近づいて槍で腕を壊そうとした

瞬間

「わああああ!!」

ランスロットがグロースターに向けて腕のスラッシュハーケンを放つ

「おっと!危ないですね。当たったらどうするんですか?」

それを寸前で避けランスでその腕を刺す

「あああ!?!」

反対の腕を向けたがそれも刺され動くこともままならない状態になった

「これで動けなくなりましたね。さて、皆さんが待ってますよ」
そのランスロットを引きずりながらツヴァイが言う

視点 変更

特派ヘッドトレーラー付近

「枢木卿を連れて来ました」
ツヴァイがグロースターから降りて言う

「僕のランスロットがこんな無残に!!」
ポロポロのランスロットを見たロイドが騒ぐ

「すみませんね、こうでもしないとランスロットが運べませんので」
ツヴァイがロイドに近づき言う

「ロイドさん！そんな事よりスザク君を」
セシルがランスロットに近づき言う

「まあ、何とか修復は出来るかな？」
セシルの言葉が耳に入っていないようだ

「ロイドさん！」

大声言うつと慌ててランスロットに駆け寄る

「では、俺はこれで失礼します」

ツヴァイがその様子を見て微笑みながらアイネに言う

「帰るんですか？」

アイネが少し残念そうに言う

「これ以上俺がいてもやる事が無いでしょうから」
そう言い帰ろうとしたが

「スザクは無事でしょうか？」

ユーフエミアがツヴァイに近づき聞く

「奇声を上げて味方機に攻撃をする時点で無事ではないですね」
ため息を吐きながら言う

「そうですね」

俯きながらユーフェミアが言う

「コーネリア皇女殿下には俺は帰ったことを伝えてくださいませんか？」

ツヴァイがユーフェミアに聞く

「分かりました」

ランスロットのほづをチラチラ見ながら言う

「（やっぱりスザクが気になるんだね）では、失礼します」
ツヴァイは急ぎ足で歩き出した

視点 変更

料理屋 EMIYA の裏口

「久しぶりだね。シロウさん」

ノックもせずに入る

「許可も無く入ってくるあたりが確かに久しいな、飯でも食べに来たのかね？」

畳の上で寝そべっていた白髪の子（以降シロウ）が座りなおす

「定休日にまで作らせようとは思わないよ。セイバーちゃんは？」
畳に座りながらゼブルが聞く

「買出しに行っている」

「一緒に行かなかったの？」
ゼブルがシロウに聞く

「私みたいな日本人がブリタニア人達の住む中心街に行けるものか」
シロウが苦笑する

「今は名譽ブリタニア人でしょう？それにシロウさんは日本人には見えないよ」

シロウの肌を見ながらゼブルが言う

「しかし不思議なものだな。聖杯戦争の後こんな魔術の無い世界に来るとは」

シロウが笑いながらお茶を飲む

「でも、その不思議のお陰でシロウさん達は結ばれた」
心から嬉しそうにゼブルが言う

「そうだな」

思い出すように天井を見上げる

「子供はまだ？楽しみに待ってるんだけど」
それを見たゼブルが聞く

「彼女は欲しがっているのだが、私はどうもそんな気になれなくて
ね」

お茶を再び飲みながら言う

「そうなんだ」

ゼブルはこればかりはどうしようもないと思いながら
「（セイバーちゃんをもっと積極的にさせればいいのか？）」
等と邪なことを考える

「君のほうはどうだ？未来は変えられそうか？」
シロウがゼブルに聞く

「どうかな、でも1人3役は疲れるんだよね。今だってナリタから電車で帰ってすぐに来たんだし」
ゼブルが言う

「む、君はあの鳥からそれを楽にする力を貰ったのでは無かったのかな？」

シロウが聞く

「ああ、アナザーカバ変わる自身の事？だってさ、自分じゃない自分が自分として行動しているっておかしくない？ドツペルゲンガーみたいでさ」

「早い段階で慣れたほうがいいと私は思うぞ？しかし、それが無くても瞬間移動が出来るのだからまだいいだろう」
ゼブルを見ながら言う

「瞬間移動？」

初めて聞くような単語に戸惑うゼブル

「何だ？君には無限次元空間製作があるじゃないか」
シロウが言う

「え？」

「私に君が教えてくれた事だぞ？」

「……あっ！思い出した！！そうだよその力を使えば楽に移動できるじゃん！！ありがとうシロウさん」

シロウの言葉をよく噛み締めてやっと気づく

「例には及ばない。そうそう、力で思い出したが私の無限の剣製はアンリミテッドフレッドワークス使っているかね？」
シロウが聞く

「重宝してるよ。今現在ナイトメアフレームってのを作ってる最中」
翠竜のことだ

「ナイトメアフレーム？あの人型の機械の事か？」
興味があるらしく少し興奮気味に言う

「そう、パーツを作って組み合わせる作業なんだけどそのパーツを具現化するのに凄い体力が必要でさ、先月からやってるのにまだ約8割しか具現化出来てないんだよね」
ゼブルがお茶を飲む

「そうか、それで話は変わるが君に頼まれていた件だが、微妙だ」

「その心は？」
首を傾げて聞く

「理由は三つある」

「三つも？」

「一つ目は場所。私達が食事や備品を運ぶ時に遠くに運ぶほど私達は暇ではない」

「それなら大丈夫、その壁でも入り口を設定出来るから」
ゼブルが壁に指を指して言う

「次に金だ。私達の収入はたかが知れている。金銭面では何も出来ないと言う事だ」

「ナイトオブラウンズの給料を舐めないでもらいたい」
この前のカルブ島での任務の報酬は1家族が数年は楽に暮らせるほどだった

「最後に安全面だ。君の空間に閉じ込めている人達が私達に危害を加えられては困ると言う事だ」

「それは分からないけど、一般人だから大丈夫だと思うけど、どう？」

「君は私達の恩人でもあるしな、仕方が無いが引き受けよう」
ため息を吐くが了承する

「じゃあ、そろそろ帰るよ」

ゼブルが立ち上がり言う

「セイバーを待たなくていいのかね？」

シロウが聞く

「会おうと思えば何時でも会えるしね、それともガラスの心が寂しさで砕けそう？」

シロウの顔を見て笑いながら言う

「む、言うようになったな」

シロウが顔をしかめながら言う

「はっはっは、じゃあまた近いうちに顔を出すよ」

ゼブルが笑いながら裏口の扉を開け出て行った

店を出たゼブルは

「シロウさん達と会って一年か」と呟く

回想

時刻は朝7時

場所は租界にあるフードロード

「ここかりヴァルの言っていた店は」

店の看板には『EMILYA』と書かれている

扉を開くと

「いらつしゃいませ」

金髪に美しく華奢な少女が入ってきたゼブルに言う

ゼブルがその少女と店の奥で調理している白髪の男を見て

「やっぱりか」

と嬉しそうに呟く

「え？何か？」

何を言っているのか理解が出来ずゼブルに聞く

「すみません、独り言なので気にしないで」

近くの席に座るゼブル

「はあ……では、ご注文は？」

お茶を置く

「朝食でお願いします」

メニューを見ながらゼブルが言う

「かしこまりました」

数分後

「お待たせしました」

少女がお盆にのせた料理をテーブルに置く

味噌汁のいい香りがする

「幾つか質問をしてもいいですか？」

ゼブルは笑顔で少女に聞く

「えっと……はい、何でしょう？」

困っているが周りを見て他にお客さんがあまりいない事を確認すると聞くことにしたようだ

「貴女と料理をしている人のお名前は？」

ゼブルが聞く

「私はセイバーです。そして彼はシロウと言います」
少女（以降セイバー）が言う

「そうですか。この店を始めてからどの位経ちますか？」

「まだ、2ヶ月ちょっとですね」

指で数えながら言う

「……失礼ですが2人のご関係は？」
ゼブルが聞く

「え？その…私達は ふ、夫婦です」
顔を真っ赤にさせセイバーが言う

「それはそれは。しかし、旦那さんはイレブンですね？」
予想外の事に驚いたゼブルだが質問を続ける

「いえ、彼はハーフなんです」

「なるほど」

それならあの肌の黒さにも納得がいく

その後も少し質問を続けると

「すみませーん！」

後ろから中年の男が声をかける

「はい、只今参ります！すみませんが失礼します」
ゼブルに頭を下げ中年の男のもとに向かった

「（ビンゴだね、しかし本当に結婚していたなんて）
そう考えると少し嬉しくなるゼブルであった

数分後

「ご馳走様でした。お勘定をお願いします」
料理をきれいに食べ終え席を立つ

「はい」

セイバーは他の席の後片付けをしているところだった

「美味しかったですよ。また来ますね」

「ありがとうございます」

笑顔で言う。やはり最愛の男の事を褒められると自分も嬉しくなる

みたいだ

「それと、この店は何時に閉まりますか？」
ゼブルがセイバーに聞く

「11時ですが」

「では、今日の11時30分にまた来ます。アーチャーにも伝えて下さい」
そう言うと扉を開け出て行く

「え？……はっ！待ちなさい！！」
少し考え何かに気づいたようにゼブルを追う

しかし
「いない！？……シロウに伝えなくては」
周りを見回し少し心配そうに店に戻っていく

その頃

【そろそろとく？】
ハイドがゼブルに聞く

店を出てすぐにハイドと入れ替りギアスを発動したのだ

【そうだな、人気の無いところで頼む】

そう言うと人気の無い路地裏に進む

【すたいるちえんじ・ぜぶる】

ハイドからゼブルに戻る

「さて、学園に戻るか」

そう言いゆっくりとした歩幅で歩きはじめる

時刻は朝7時50分

場所はアッシュフォード学園中庭

「（ん？あれはナナリーちゃんか）」

教室に向かう途中ナナリーを見つけた

「いってらっしゃいお嬢様ですって。居候のくせしてねえ？」

金髪の少女とその後ろには2人の少女

制服を見る限り同じ中等部のようだ

「エカテリーナさん達ですね？ご用が無いなら私授業があるので、失礼します」

ナナリーが進もうとすると

「ちょっとなんですの？その態度は！私はスフォルツァ家の長女なのよ？あなたなんてどうせどこかの貧乏貴族なんでしょう！？」
少女（以降エカテリーナ）がナナリーの車椅子を押さえて言う

「私の父はブリタニア皇帝ですって言うたらどうなるんだろうな」
等と考えてはいるが手は出さないゼブル

「これは本人の力でどうにかしないと、それにハッピーは何をしてるんだ？こう言う時にいなくちゃ駄目だろうに」

ちなみにそのハッピーはスヤスヤと睡眠中である

「あなたの貴きお家柄はわかりました。でも、そんなこと私には関係ありません……失礼します」

ナナリーが車椅子を進めようとする

「待ちなさいったら」

エカテリーナが車椅子を再び押さえたためナナリーが慣性の法則に逆らえず車椅子から落ちる

「全く、あれは駄目でしょ……!!」
とゼブルが助けようとした瞬間

何かがエカテリーナ達を周りを素早く動く

「貴きは家柄だけなのね、それじゃあただの低脳なガキのイジメ」
ナナリー達の後ろにツインテールの髪の少女がいた

「そのうえ、あらまあ、なんてハレンチなお嬢様なのかしら」
手にピンク色の布を持っている

それはエカテリーナ達のスカートであった

「「「きゃー!!」」」
それに気づき叫ぶ3人

「……わお」
思わず声が漏れる

「お、覚えてらっしゃい!」
頑張って上着でパンツを隠しているが長さが足りず丸見えのまま走

って行ってしまった

「ありがとうアリスちゃん。でもあの子達に何をしたんですか？」
地面に座り込んでいるナナリーがツインテールの少女（以降アリス）
に聞く

「ちょっとした手品で驚かしてやっただけ。さ、教室に行きましょう」
ナナリーを車椅子の乗せて、その車椅子を押しながら言う

それを見ていたゼブルは

「（何だあの子は？凄いスピードで俺の目でも追いつかなかつたな、
センスの目なら追いつくかな？あんな動きが出来るなんて異世界か
ら来たからなのか、それとも……待てよあの子の名前アリスと言っ
たか？それにあの外見という事は……まさか！）」
何かに気づいたらしく困惑するゼブル

「ゼブル！そんな所で何してんだ！？そろそろ授業始まるぞ！」
リヴァルが窓からゼブルに声をかける

「ああ、今行く！」
それに気づいたゼブルが走って行く

「（どう言う事だ？あの世界ではルルーシュさんは死んでいる事にな
っている。それにこの会話はもっと後に起こる筈だ

と言つ事は……この世界は混ざっているのか？」

放課後

時刻は午後5時30分

場所は生徒会のクラブハウスにある居間

「ナナリーちゃん、ちょっと良いかな？」

ゼブルが居間のダイニングテーブルにいたナナリーに声をかける

「はい、何でしょう？」

「今日の夜にハッピーを貸してくれないかな？」

ゼブルがナナリーに聞く

少し考え

「私は構いませんよ、元々ゼブルさんからお借りしていますし」

「ありがとうナナリーちゃん……あと、アリスちゃんって子知ってる？」

ゼブルがナナリーに聞く

「はい、私の親友です」
ナナリーが嬉しそうに言う

「そうなんだ」
それを見て頷くゼブル

「アリスちゃんがどうかしましたか？」
ナナリーが聞く

「うん、ちょっとね」

「そうですか」
何か隠し事をしているのに気づいたのか少し声色が低くなる

「まあ、俺としてはナナリーちゃんのほうが好みなんだけどね」
ナナリーの頭を撫でながら言う

「そ、そうなんですか？」
ナナリーが顔を赤くさせて言う

「勿論だよ。じゃあ、ハッピーの所に行ってくるね」
そう言いゼブルは居間から出て行った

ゼブルが出て行くとナナリーは自分の胸に手を当てながら
「（胸がまだドキドキします。でも、ゼブルさんにはガーベスさん
がいますから私は親友の妹としか思っていないんでしょうね）」

ナナリーの部屋

【ハッピー】

寝ているハッピーを優しく起こすように言う

【あら、どうかしたの？】

いつの間に部屋に来ていたゼブルを見てあまり驚かず聞く

【見つけた】

短く言う

【そう……いつ会いに行く？】

その意味を理解したハッピーが聞く

【今日の11時30分に待ち合わせ】

それはセイバーに言った時間でもある

【やっと3組目ね……分かった、ナナたんには言ってくれたの？】

【勿論。あと】
ゼブルが何かを言おうとして止まった

【どうかしたの？】
ハッピーが聞く

【いや、なんでも無い。時間通りに来いよ】

少し怪しんだがハッピーだが

【……了解】
言えない事があるのなら無理には聞かないほうが良いと思ったのだ
ろう

それを察したのか

【ありがとう】
と言い部屋から出て行ったゼブルであった

時刻は6時30分
場所は租界の大通り

「さて、あと5時間どうしようかな……久しぶりにゲーセンにでも
行くかな」

租界を歩いていると大きなゲームセンターが目に入った

ゲームセンター内は色々なゲームが置いてあり騒がしかった

「お、新しいのが出てるな。なになに機動 土ガンダ ！？著作権ギリギリだな。でも面白そうだ、暇つぶしだしいいか」
長い列の最後尾に並ぶゼブル

20分後

「結構待ったな、新しいゲームだから当然と言えば当然か」
そう言い筐体の前に座る

「お隣失礼」

隣に白衣の男が座ってきた

「よろしくお願いします」

「こちらこそ」

挨拶を交わしゲームスタート

このゲームは隣が味方で反対側の相手2人を倒す2対2のアクションゲーム

勿論勝ち続ければ交代は無し

「白衣と言うことは何かの研究を？」
ゼブルが聞く

勿論ゼブルは彼の正体も知っている

「うん、軍でちょっとね」
笑いながらレバーとボタンをうるさい位に速く動かしている

「そうなんですか、それにしても強いですね」
ゼブルも負けない位ガチャガチャが鳴っている

「君もね」

2人の周りだけ凄くうるさい

レバーなんて折れないか心配になる位ガチャガチャ鳴っている

「それより何を研究しているんですか？」
ゼブルが画面を見ながら男に聞く

「ナイトメアフレームを作ってるんだよ」
自慢げに男が言う

「へー、それは良いですね」
画面を見ながら相槌を打つゼブル

「でしょう？今オリジナルのナイトメアを作ってるんだけどさあ、他に何か新しいアイデアが無いかと思ってこのゲームをやってるんだけどいまいち何かに欠けるんだよねえ」

画面にWINの文字が出る

「大変ですね、俺も機械が好きだから何か手伝えるなら手伝えますよ？」

画面から目をそらし男に聞く

「そう？ならもし君がナイトメアを作るとしたらどんなのを作る？あと敬語は止めて欲しいなあ、軍を出てまで聞きたくないんだよねえ」

乱入者のマークを見ながらロイドが言う

「分かった、それでナイトメアって燃料はユグドラシルドライブってやつだよな？」

再びうるさい音が鳴り始めた

「うん、よく知ってるね」
男が頷きながら言う

「なら、その燃料を沢山入るようにして短時間で高出力の機体になればどう?」
ゼブルが聞くと

「流石だね、僕も同じ事を考えているんだよ。そこまでは良かったんだけど、装備をどうしようかと思ってね」
男が呟く

「装備か、やっぱり王道は剣と盾だよね」
再び画面にWINの文字が出ている

そこでポーズをしている自分の機体を見ながらゼブルが言う
ゼブルが乗っているのは一番シンプルかも知れない白色を基調とした機体

「剣は、MVSだけどまだ調整中だし。盾か、確かにあった方がいいよね」
男は考えながら敵機を切っている

男が乗っているのは普通より小さめの機体で金色になると影分身み

たいな事が出来るらしい

「で、今考えたんだけどさ」

ゼブルが男の機体を見ながら言う

「何だい？」

「ユグドラシルドライブの中にあるコアアルミナスってやつが高速回転することによってエネルギーが生まれるんでしょ？」

「正解、でもいぶん詳しいね」

男が驚いたように言う

「気にしない気にしない」

ゼブルが誤魔化すように言う

「それで？」

気になるらしくゼブルを急かす

「その高速回転で生まれたエネルギー場を使って攻撃を防ぐ盾にならないかな？」

ゼブルが言いながら敵機を1機爆発させる

「へ？」

それを聞いた男が不思議な声を出す

動かなくなった男の機体に敵が放った弾がテンポ良く当たる

「ちょっと！？やられてるよ！」

ゼブルが動かなくなった味方機を見て言う

「……」

男は腕を組んで考えている

考えている間に男の機体が耐久力がゼロになり爆発する

「聞いてますか？あつ向こうも動かないことに気づいたか」
頑張って1人で2人分をこなすゼブル

「君の名前はなんて言うんだい？」

男がゲームそっちのけでゼブルの名前を聞く

「ゼブルってそれよりまた狙われてる！」

ゼブルは言いながら敵に攻撃をする

「僕の名前はロイドって言うんだ。よろしくねえゼブル君」

男（以降ロイド）はゼブルを見ながら言う

「はいはい、よろしくロイド君。よっし！ふー危なかった」
何とか勝てたゼブルが制服の袖で汗を拭う

「この後暇？僕の所属してる軍の特別派遣嚮導技術部って所に行かないかい？是非とも今僕が作っているランスロットを君に見せたい」
自分の子を自慢するようにロイドが言う

「いいの？部外者に簡単に軍の機密を見せちゃって」
ゼブルが聞く

「一応僕伯爵だし、所属先では主任だから協力者って言えばそれでお終い」
ロイドが言う

「ふーん、まあ俺も暇だからいいよ、だけどキチンと負けたらね」
再び乱入者が来た

「やった！」
そう言い再びレバーを握るロイド

しかし結局32連勝と言う大記録を作り、アーケードをクリアして終わったのは9時頃だった

時刻は9時30分

場所はブリタニア軍基地内の特派専用ルーム

「これが僕のランスロットの完成図だよ」

椅子に座っているゼブルに設計図を見せるロイド

「かつこいいね」

それをペラペラと読む

本物とは形状が色々と違っている

「でしよう?」

嬉しそうにロイドが言う

「ロイドさん!その子は?」

青髪の女性がロイドに聞く

「ん?ゼブル君って言ってゲームセンターで会ったんだよ」
ロイドが言う

「そんな！一般人をこの部屋に入れて良いと思ってるんですか？」
青髪の女性が怪しいと言わんばかりの目つきでゼブルを見る

「彼が凄いアイデアを僕に教えてくれてね、それにナイトメアについてかなり知識が豊富だよ」

ロイドが言う

「しかし」

「やっぱり俺みたいな怪しいのは出てったほうがいいですよね？」
ゼブルが立ち上がりながら言う

「え？別に君が悪いわけじゃなくて」
女性が困ったように言う

「あゝあ残念だな。せつかく僕のランスロットがセシル君のせいで」
ロイドが嫌味たっぷりと言う

「そんな私は……分かりました。ごめんなさいね、あんな事を言うて、ランスロットの開発に力を貸してもらえる？」
女性（以降セシル）がゼブルに謝る

「俺としては嬉しいですけど、本当に良いんですか？」

ゼブルが女性に聞く

「ロイドさんがちゃんと責任を取ってくれますから」
ゼブルに笑顔を向ける

「あはあく元々そのつもりだったし」

「私の名前はセシル。よろしくね」
セシルが言う

「俺の名前はゼブルです」
ゼブルとセシルが握手する

「で、何かないかな？」
ロイドが興味深々に聞く

「このファクトスファイアって熱源を見つけるやつでしょ？」
ゼブルが説明書に指を指す

「うん、そうだよ」

「ならこのランスロットには頭じゃなくて胸部に2個つけたらどうかな？」

鉛筆で場所を丸くする

「ほほう、何故だい？」
ロイドは楽しそうに聞く

「範囲が広がる上、真正面での効果が約二倍になる、普通のグラス
ゴートかじゃあ出力が足りないけどこのランスロットなら大丈夫で
しょ？」

ゼブルが説明する

「凄い、何でそんな事が思いつくのかしら」
セシルが驚いたように言う

「（本物を知っているからです）あとスツラッシュハーケンは……」

時刻は11時20分
場所は租界のフードロード

少し前に開放されたゼブルは租界を歩きながらセシルの作ったミルク
クティー茶漬けの味を消すためにコーラを飲んでいる

「（独創的な料理と味だったな）」

吐き気を我慢しながら食べたあのお茶漬けの味は一生忘れないだろう

「でも、時間もいい感じだな」

店のすぐ近くでハッピーを待つ

すると

【お待たせ】

何処からとも無くハッピーが飛んできた

【俺も今来たところ】

【でも大丈夫なの？入った瞬間ズバア！とかになんないわよね？】
ハッピーが腕で首を刈られるジエスチャーする

【多分大丈夫だよ】

ゼブルは笑顔で言う

【ならいいけど】

【よし、入ろうか】

そう言い扉に手をかけ

「今晚は」

扉を勢いよく開ける

「っ！シロウ！」

セイバーが戸惑いながら椅子に座っている褐色の肌の男を見る

「君か？私の事をアーチャーと言ったのは」

男（以降シロウ）が鋭い目つきでゼブルに聞く

「そうです。俺の名前はゼブルでこの子の名前ハッピーです。あっ

！俺は貴方達のことを知っているので紹介は不要です」

シロウの向かいの椅子に座り簡単に自己紹介を済ませる

「ではゼブル、何故私達の事を知っているんですか？」

シロウの隣にセイバーが座る

「それは俺の用件を済ませてからにしましょう」

ゼブルが言う

「用件？」

シロウがゼブルを鋭い目つきを更に鋭くし聞く

「ええ、単刀直入に聞きますが、聖杯戦争のあったあの世界に戻りたいと思っていますか？」

ゼブルがその視線を送っているシロウに聞く

「は？」

「俺は貴方達を元の世界に戻すことが出来ます」

「……つまり元の世界に戻るか否かと言うことか？」
シロウが考え聞く

「ええ、因みに保留は出来ませんので悪しからず」
これは嘘だが短時間で真剣に考えてもらおうならこの方法が一番手っ取り早い

596

「……シロウ」
セイバーが心配そうにシロウを見る

「……」
目を瞑り無言で考えるシロウ

「俺だったらあんな殺し合いのシステムのある世界に戻ろうとは思
いませんね、今の貴方達は幸せに見える」
ゼブルが真剣な表情で言う

「シロウ……私は戻りたくないです」
セイバーがシロウの手を掴み言う

「……」

ゼブルは黙って見る

「私は今この幸せを離したくないです」
目から涙を零しながらセイバーが言う

「やれやれ残念ながら私も同意見だ」

シロウがセイバーの手を握り返しセイバーに優しく笑う

「じゃあ」

ゼブルがシロウの目を見つめる

「ああ、元の世界に戻る気は無い」

決意を新たに固めた優しい雰囲気の中で言う

「シロウ！」

セイバーは嬉しそうにシロウを見る

「よかった、これで2人のラブラブな生活が見れるよ」
ゼブルも心底嬉しそうに言う

【テツテター！ゼブルはシロウを幸せにした報酬として『無限の剣アンリミテッドブレイドワックス』を入手した】
製イクス』を入手した】

【テツテター！ゼブルはセイバーを幸せにした報酬として『勝利すカべき黄金の剣リバーン』を入手した】
ハッピーから一幸せの為に ハッピーオルティナティブ の報酬を受け取る

【勝利すカリバーンべき黄金の剣は無限の剣製アンリミテッドブレイドワックスに入れといたから】

【今更だけどここの能力ってさ、ようは元の世界に戻るかどうかを決めさせてそれを叶えれば良いだけじゃないか？】
ゼブルが聞く

【まあ、簡単に言っちゃえばそうなるわね】
ハッピーは頷きながら言う

【それになんで勝利すカリバーンべき黄金の剣なの？約束エクスカリバーされた勝利の剣だと思っただけだ】

【それは複数いれば必ず優劣が出ちゃうのよ】

【そう言うもんなの？】

【そう言うもんよ】

「聞こえていますかと聞いているのが聞こえませんか!?!?」
セイバーが大きな声でゼブルに聞く

「わぁ!つと耳元で大きな声を出さないでよ。俺を難聴にしたいの?」
急に耳に入った大音量に驚き耳に手を当てる

「確かに貴方は私達に害が無いように見受けられますが、貴方は何者ですかと聞いているんです」
セイバーが聞く

「俺もシロウさん達と同じで異世界から来た者だよ」
隠そうともせずゼブルが言う

「本当ですか!?!」
セイバーが驚きの声を上げる

「(何でいちいち大きな声で言うんだらう、シロウさんの鼓膜大丈夫かな)」
耳を押さえながらゼブルが思う

「やはりか」
シロウは考えていたのかセイバーとは違いあまり驚かずに言う

「それで俺はこのハッピーに頼まれてシロウさん達のような漂流者
って言うのかな？その人達を元の世界に戻すか、この世界で過ごす
か選ばせるのが俺の役目なんだよね」
ハッピーを見せて言う

「しかし、先程から随分口調が砕けていませんか？」
セイバーがゼブルに聞く

「細かい事は気にしないでよセイバーちゃん」
ゼブルが面白そうに言う

「ちゃん？今ちゃんと言いましたか？この騎士王に向かってちゃん
呼びとは」
顔を赤くして言う

「俺は親しくなる予定の女性は皆例外無くちゃん呼びで統一してる
んだよ」
ゼブルがその表情を面白そうに見る

「何で私が貴方と親しくなる予定なんですか！」
セイバーが机を叩きながら言う

「俺は君達の悲しい過去を知っているからね、幸せになってもらいたいんだよ」
ハンカチで涙を拭く真似をし言う

「そう言えばゼブル、君はどうやって私がアーチャーだと知ったんだ？」

シロウが聞く

「夢で君達の戦いを見ていたんだよ」
ゼブルがまた嘘をつく

「君達はエロゲームのキャラクター」等と言うと後が面倒だと思っただろう

「（因みに俺は未経験者だよ、格闘ゲームのほうで知って映画も見ました）」
これは誰に言っているのである？

「夢だと？」

シロウがお茶を飲みながら聞く

「そう、シロウさん視点で自分殺しの結末も見ましたし、衛宮士郎の視点でセイバーちゃんとのエッチイシーンも見せていただきました」

ゼブルはニヤニヤしながら2人を見ると

「ブウウウ！」

飲んでいたお茶をもの凄い勢いで放つシロウと

「な！？ゼブル、貴方という人は！！！」

顔を羞恥で真っ赤にしながら叫ぶセイバー

「はっはっは、気にしない気にしない」

その反応を笑いながらゼブルは言う

「出来るわけないでしょう！」

小柄なセイバーがゼブルの制服の胸座を掴みながら言う

「でもセイバーちゃんは今幸せでしょ？」

ゼブルは笑顔でセイバーを見る

「そう ですが」

困ったようにゼブルを離すセイバー

「少し俺から質問していいかな？」

再び席に座りゼブルが聞く

「何だ？」
落ち着いたらしくシロウが言う

「何でシロウさんはアーチャーと名乗っていないのにセイバーちゃん
はセイバーと名乗っているんだい？」
ゼブルが聞く

「それはこの世界がセイバーの時代とそっくりだからあえて本名は
避けた」
シロウが言う

「なるほど、ブリタニア自体もそうだし、ナイトオブブラウンスって
円卓の騎士達って意味だしね。納得、次に君達はちゃんと受肉して
いるのかい？」
頷きながら質問を続ける

「ああ」

「どうやって戸籍をやこの世界の金を？」
ゼブルの場合は全てVVに頼っている

「お偉い貴族様にちよつとした暗示だね」
シロウが口元を歪めて言う

「なるほど、という事は魔術は使えるのかい？」

「ああ、でも使う気は無い」
シロウがゼブルを見て言う

「賢明な判断だね。おっと！もうこんな時間か、俺は帰るね」
ガーベスも魔法を使ったのだからと思っただけ、やはりシロウ達も使えるらしい

「もうか？こちらはまだ聞きたい事があるのだがね」
シロウが立ち上がったゼブルを見て言う

「また近いうちに来るよ。あ、そうだ。その時には此処でバイトしてもいいかな？シロウさんの料理は美味いからね、俺も覚えたい」
ゼブルが思い出したように言う

「ふ、いいだろう。楽しみに待っているぞ」
シロウがゼブルに挑発的な笑いを浮かべる

「では、今夜はお楽しみに」
ゼブルはシロウとセイバーを交互に見て言う

シロウとセイバーは少し考え言っている意味を理解し真っ赤になる

「また貴方はそう言うことを!!」
セイバーが大声で言う

「おっと！良い夜を」
早口で言い急いで店から出て行く

店を出て数分後

【いいの？力の使い方を教わらなくて良かったの？】
ハッピーがゼブルに聞く

【まあ、最初は自分の力で覚えて時間が経てば普通に聞くつもりだから大丈夫】

【そう？なら良いけど】

【じゃあ、一足早くナナリーちゃんの所に行つてあげて】

【いいの？】

【別に俺はこのまま帰るから大丈夫だし、ナナリーちゃんがもしかしたら待ってるかも知れないからね】

【分かったわ、お先に失礼】

そう言いハッピーは飛んでいった

それを少しの間見つめて

「ふんふん ふっふん」

上機嫌のゼブルは鼻唄交じりに歩き出した

回想終了

「そう言えば、あの後補導されたな」

夜遅くに制服を着て歩いていたら仕方が無い

「聞いていますかと聞いているのが聞こえませんか!!?」
聞いた事のある大声がゼブルの耳元で発せられる

「ん?セイバーちゃんに……ガースちゃんも?」

振り向くとガースとセイバーが一緒にいる

『途中で偶然会ったんです』

「あまり驚かないのですね」

ガースとセイバーが言う

「……」

無言でセイバーを見るゼブル

「どうしたのですか？」

見られたセイバー困ったようにが聞く

「いや、シロウさんにも言ったけど早く子供をつくってくれないかなと思ってね」

その反応に笑いながら言う

「あ、貴方はまたそんな事を」

セイバー顔を赤くさせ今にもゼブルを襲いそうな勢いだ

「私もいずれ……」

ゼブルを見ながらガーベスが言う

「?どうかしたの??」

それに気づいたゼブルが聞く

「貴方は全く持って鈍感ですね。さて、私は帰ります」
セイバーがため息を吐きながら言う

「送ろうか？」

セイバーの言う意味を理解出来ないゼブルが聞く

「いえ、大丈夫です。そんなことよりちゃんとガーベスと一緒にいてあげるんですよ？ガーベスが最近

貴方と一緒にいる時間が少なくて寂しいと会ったび言っんです」

セイバーが言う

『ちよつと、セイバーさん』

恥ずかしそうにガーベスが言う

「そうなんだ。ごめんねガーベスちゃん」
ガーベスを背中から抱くゼブル

「今日ぐらいは一緒にいてあげてください。では」

「シロウさんによろしくね」

『さようなら』

2人が別れの挨拶をし見えなくなるまでその背中を見続ける

「でも、本当にごめんね」

ゼブルがガーベスに言う

『あつう、困らせてはいけないと思って我慢してたんですよ？』

ガーベスがゼブルに抱きつき上目遣いで聞く

それを見て

「（ははは、食べちゃいたいな）」
理性が少し吹っ飛んだゼブルであったが

『ゼブル様？』

それを見たガーベスが恐る恐る聞く

「おっと！ごめんね、でも今日はもうやる事も無いし一緒に何処かに行く？」

正気に戻ったゼブルはガーベスの頭を撫でながら聞く

『本当ですか？』

嬉しそうにガーベスが聞く

「勿論だよ。それで今から何処に行きたい？」
ゼブルがガーベスを撫でる

『私はゼブル様と一緒にいければ十分です』

それを見て

「そう？なら時間もあるし映画でも見ようか？」
ゼブルは無意識に笑顔になる

「はい」

ガーベスもまた笑顔になる

アンリミテッドブレイドワークス
無限の剣製 verゼブル

主に武器や兵器を作って保存したり出したり（具現化）する能力だが、ゼブルの場合は燃費が悪いのであまり短時間で大量に具現化は出来ない（精密な物や大きい物なら尚更遅い）。その上固有結界の展開も出来ない

簡単に説明すると武器や近代兵器そして単純な機械なら作れるが精密な物や大きい物になればなるほど時間がかかる
因みにシロウの場合はゼブルの数倍効率と性能が良い

カリバーン
勝利すべき黄金の剣
エクスカリバー
約束された勝利の剣

カリバーン（王じゃ無ければ抜けない剣）を抜いた（アーサー王
セイバー） 騎士道に反する事をしたので折れた かわりにエクス
カリバーを湖の妖精からもらった 以上

簡単に説明すると（ゼブルのカリバーンについて）不意打ちとか卑怯なことをすると折れてしまう凄く頑丈な剣で王の素質のある者以外使えない（この王の素質はギアス保持者も含まれる）

聖杯戦争

魔術師7名が英雄の霊（英霊）を使役して行なわれるバトルロワイヤル形式の戦争

シロウとセイバーも参加した

戦争なので死ぬ可能性は大

キャラ設定2 (前書き)

新しく登場したキャラの紹介をしたいと思います

キャラ設定2

オリキャラ

名前アイネ・ナハトム

好きなもの ガーベス ツヴァイ

嫌いなもの 弱い者イジメ

特技 不明

趣味 鍛錬

オレンジ色の髪の少女で男勝りな性格、口調も男っぽい（ガーベス曰く家庭の事情）

コーネリア親衛隊の副隊長になる程の実力を持ち尚且つコーネリアの秘書をしているが頭は悪いらしい

9歳の時にガーベスに会い同姓ながらも恋を抱く為ゼブルにはキツく当たっている

ラウンズに憧れており、ラウンズ候補であったツヴァイに最初は敵意剥き出しだったが、その実力に引かれ只ならぬ想いを持つようになる。そのためか口調が柔らかい上に事あるごとに甘えようとするスザクをイレブンと言う理由では毛嫌いしていないがツヴァイが大きく評価しているので嫉妬に近いものを抱いている
アーニヤとジノ、特にアーニヤとは仲がいいらしい

オリキャラ

名前アーリア・クルシェフスキー

ナイトオブトウエルブのモニカ・クルシェフスキーの妹でブリタニアの学生、登校中バツテル達悪漢貴族に襲われていたところをアイネとツヴァイに助けられる
一緒にいたおじい様はナイトオブワンであるビスマルクが敬語を使うほど偉い人らしい

オリキャラ

名前バツテル

アイネの攻撃（万全では無いが）をものともしなかったがツヴァイにあっさり負けた貴族の男
アイネ曰く顔がイノシシらしい

ノンオリキャラ

名前シロウ（本名衛宮士郎、登場作品 Fate/stay night）

好きなもの 家事全般

嫌いなもの 不明

特技 ガラクタいじり、家事全般

趣味 不明

Fateの世界から来た銀髪に褐色の肌の男

セイバーと早くに結ばれ今現在夫婦で料理屋『EMILYA』を営
ゼブルによってこの世界で過ごす決意を固めセイバーと共に平和に
過ごしている

ゼブルに会うたび子供を急かされている。その上毎晩セイバーから
の誘惑に耐えている（勿論ゼブルの策略）

ゼブルの師匠であるチャンとは意外と仲が良く、共に訓練しあつた
り酒を飲み会うほど

ノンオリキャラ

名前セイバー（本名アーサー・ペンドラゴン、登場作品Fate/
stay night）

好きなもの きめ細かい食事

嫌いなもの 大雑把な食事、装飾過多

特技 不明

趣味 不明

シロウと同じくFateの世界から来た金髪の美しく華奢な少女

料理屋『EMILYA』の看板娘でもあり彼女目当てで来る客も多い
がアタックしてしまうと「ごめんなさい」が待っているので気をつ
けよう

ゼブルに手ほどきを受け頑張つてシロウに子供が欲しいと誘惑をす
るが中々上手くいかない様子

アイネとは姉妹のように仲が良い

ノンオリキャラ

名前ライ（本名不明、登場作品コードギアス反逆のルルーシュLO
STCOLORS）

好きなもの 不明

嫌いなもの 不明

特技 不明

趣味 不明

記憶喪失中の少年

アッシュフォード学園に迷い込み、生徒会会長のミレイに保護される
お世話係になったカレンと親しくなり、カレンの推薦で黒の騎士団
に入団する

ギアス能力者でもある（本人は分かっていない）

ノンオリキャラ

名前アリス（本名不明、登場作品コードギアス ナイトメア・オブ・
ナナリー）

好きなもの 不明

嫌いなもの 不明

特技 不明
趣味 不明

ナナリーの親友でもあり特殊名譽外人部隊（この世界のイレギュラ
ーズはギアス能力者に関わらず色々な能力者や異端児がいる）に所
属している

ナナリーの正体を知っているがそれでも親友として共に過ごす
ギアス能力者だが細胞の移植ではなくcc、vvとは別の存在から
ギアスを受け取っている
イレギュラーズが使うナイトメアは普通のサザールランドである

ノンオリキャラ

名前エカテリーナ（本名エカテリーナ・スフォルツァ？、登場作品
コードギアス ナイトメア・オブ・ナナリー）

好きなもの 不明
嫌いなもの ナナリー？
特技 不明
趣味 不明

ナナリーをイジメていた最中にアリスにスカートを剥がされた少女

小さな番外編　ゼブルと主人公交代の危機？（前書き）

あまり深く考えずに見てくださると幸いです

小さな番外編　ゼブルと主人公交代の危機？

「初めまして、創神こと作者の山ブルです。以後お見知り置きを。さて今回私がこの本文に出てきたのには勿論理由が御座います。まあお気づきになっている方々も多いと存じ上げますが……ズバリ、主人公の交代です！では、ゲストの皆様をお呼びしましたのでご紹介します」

「では、左から。アニメ版の主人公ルルーシュ・ランペルージ！」

「よろしく頼む」ルル

「次にルルーシュを黒の主人公とするなら白の主人公は彼で決定、枢木スザク！」

「よろしく」スザ

「そしてゲーム版コードギアスのLOST COLORSの主人公ライ！」

「どうも」ライ

「更に、マンガ版ナイトメア・オブ・ナナリーでは主人公でもあるナナリー・ランペルーシとその騎士アリス」

「よろしくお願いします」ナナ

「何で私も？」アリ

「最後に本作の主人公のゼブルです」

「俺の時だけテンション低くない!？」ゼブ

「さて、ゲストも揃った事ですし早速始めましょうか」

「質問があるのですが？」ナナ

「早速ですね。はい、何でしょう?」

「主人公が変わる必要があるのでしょうか?今まで通りゼブルさん

で良いと思いますが」「ナナ

「だよね」「ゼブ

「いい質問ですね。理由としましてはゼブルの存在感が大きすぎるんですよ。ゼブルが主人公だと他のメインキャラの影が薄くなるんです」「山

「確かに僕の描写がアニメ版よりかなり薄くなってるとるしね、下手するとロイドさんより出てないんじゃないかな?」「スザ

「知るか!そんなの俺のせいじゃないだろ!」「ゼブ

「でも、ナナリーも主人公やりたいですよね?」「山

「え?まあ、やりたくないと言えば嘘になりますね」「ナナ

「考えてみてください。貴方達は今から下克上が可能なんですよ?」「山

「みんなそんな話に引っ掛かるわけ無いだろ?」「ゼブ

「いやそうでもありませんよ?」山

「みんな!ここは今まで出番の少なかつた僕が主人公なるべきだ!」
スザ

「ほら」山

「……」ゼブ

「待て!やはりナナリーに主人公をさせるのが一番得策だ!」アリ

「何故だい?」スザ

「このむさ苦しい男ばかりが主人公では花が無い。ナナリーのよう
な存在が必要なよ」アリ

「でも、ナナリーを戦場に出す訳にもいかない」ライ

「そうだナナリーを危険なめに遭わせる事は俺が許さない!」ルル

「それがあんた達シスコンの限界よ」アリ

「！！！」ライ、ルル

「あっちゃ〜」ゼブ

「あんた達が甘やかすせいで世界という大局にナナリーが追いつかないわ。だから新総督になったとき色々大変な目に遭うのよ」アリ

「しかし、ナナリーを主人公にすれば必然的にマークネモも出てくる」スザ

「まあ、そうだな」ゼブ

「因みにマークネモと言うのはナイトメア・オブ・ナナリーに出てくる異形のナイトメアで紅蓮は通常ナイトメアの1.6倍のゲインを持つがマークネモは通常ナイトメアの50倍以上のゲイン。つまり通常のナイトメアの50倍の出力が出せる事になるのです」山

「だが、ルルーシュがいるこの世界でナナリーがマークネモに乗って戦う理由が無い！」スザ

「!!」アリ

「確かに」ライ

「つまりナナリーは主人公になれない」スザ

「それ以前にナナリーがネモと初めて会うのはシンジユクゲットー
だろ？目が見えないナナリーが行ける訳が無いし、行けたとしても
もう時間は過ぎてる」ゼブ

「そう言えばそうですね。では、ナナリーの主人公化は無しで決定
します」山

「くっそ!……ごめんナナリー、力になれなくて」アリ

「構いませんよアリスちゃん」ナナ

「残り4名となりました」山

「後はスザクの主人公化は無理だろうな」ルル

「ルルーシュ。それは挑戦と受け取っていいのかな？」スザ

「聞けスザク。俺、ライ、そしてゼブル。俺達3人にはお前に無い共通点が3つある」ルル

「ああ、確かに……でも3つ？」ゼブ

「僕も2つしか分からないな」ライ

「それは一体!？」スザ

「黒の騎士団であると言ったことと、ギアス能力者であると言った事だ」ルル

「!?!」スザ

「あと1つは？」ゼブ

「最後の1つは……『ハーレム』!」

「『『ハーレム』?』」ゼブ、スザ、ライ

「この小説のキーワードに入っている単語だ」ルル

「因みにハーレムとはハレムと言い禁じられた場所の意です。色々
と意味は異なるのですが、この作品での意味は複数の女性が1人の
男性に愛やら恋やらの感情を持って接する状態の事を言います。更
にスペルはharemです」山

「しかし、それがどうして？」スザ

「気付かないかスザク？お前の事を好きと思っているのはユフィ以
外いないんだよ」ルル

「何だって!？」スザ

「「「「「ああ、確かに」「」「」「ゼブ、ライ、ナナ、アリ、山

「因みにルルーシュの言っている好きはLIKEでは無くLOVE
のほうです」山

「そんなの嘘だ！ルルーシュ君はまた僕に嘘をつくのか!？」スザ

「残念だがスザク、これは現実なんだよ」ルル

「証拠を教えて差し上げたほうが宜しいかと」山

「いいだろう。まず俺はアニメ版でシャリー、cc、カレン、神楽耶がいる」ルル

「自分で言ってるよこの人」ゼブ

「まあ、気にしない方針で」山

「次にライ。ライはゲーム版の女性キャラ全員と言っても過言ではない」ルル

「恋愛アドベンチャーゲームですからね」ナナ

「俗に言うギャルゲー」アリ

「くっ！」スザ

「最後にゼブルだが、ガーベス、アイネ等のオリジナル女性キャラは勿論。アーニヤやナナリーも入っている！」ルル

「お兄様。そんな大声で」ナナ

「ルルーシュさん。そんなに睨まいで欲しいな」ゼブ

「それに比べてスザク、お前はどうか？」ルル

「セツ、セシルさんがいるじゃないか！この作品の中なら間に合う！」スザ

「残念ですがセシルは後々ロイドとの甘酸っぱい話を書きたいと思っていますので 却下ですね」山

「くっそー！！」スザ

「スザクの主人公化も無しの方で」山

「残り3人ね」アリ

「でも、キーワードが入るならルルーシュさんも無しじゃない？」
ゼブ

「ほう？何故だ？」ルル

「確かに『主人公最強』って書いてあるな」ライ

「確かに軟弱なルルーシュに最強の名は重いね」スザ

「ふ、考えてもみる最強とはギアスの事なんだよ」ルル

「別に最強を除いても『異世界』があるよ？」ゼブ

「確かに僕とゼブルとアリスは本編から見たら異世界の存在だし」
ライ

「私達はシリーズものでしたら何処でも存在していますしね」ナナ

「ぐっ！」ルル

「では、ルルーシュの主人公化も無しで」山

「ライ……よく考えて見るんだ」ゼブ

「何だ？」ライ

「小説のタイトルは『コードギアス 起きたら異世界に来ていた者
ゼブル』だぞ？」

「ネーミングセンスが乏しいな」ルル

「本当だね」スザ

「ナナリーも思っつわよね？」アリ

「えっと 私もどうかと思います」ナナ

「ぐっはあ！！心に見えない傷が」山

「まあ良いとして。題名通り主人公は俺だ！」ゼブ

「くっ！そう来たか！」ライ

「まあ、小説情報編集を押せば編集は可能なんですけどね」山

「なんか言った？」ゼブ

「いえ、別に」山

「しかし、僕視点で書かないと読者が色々混乱する！」ライ

「そうですね、ゼブルの視点ばかりだと読者の方々は場面が分かり
難いでしょうからね」山

「しかし、俺視点で無くなればシロウさんとセイバーちゃんのラブ
ラブストーリーを読者に見せられない。それに師匠に至っては一生
謎キャラで終わってしまう」ゼブ

「それも困りますね。チャンには出て欲しいですし」山

「じゃあ、お2人が主人公でどうですか？」 ナナ

「「え？」」「ゼブ、ライ

「いい考えじゃないか、今まで通りゼブルがメインでカバーする所をライに頼む」ルル

「確かにそれなら俺はツヴァイに専念できるな」ゼブ

「僕とルルーシュみたいだね」スザ

「まあ、スザクの出番は増えないんですけどね」山

「何か言ったかい？」スザ

「いえ何でも。しかし、その意見は中々面白いですね。次回からそうしましょう」山

「よかった」ゼブ

「これからは宜しく」「ライ

「勿論」「ゼブ

「一件落着ですね」「ナナ

「やっと終わった」「アリ

「有意義な議論だったな」「ルル

「今回はお疲れ様でした。また議題があったらやりましょう」「山

小さな番外編 ゼブルと主人公交代の危機？（後書き）

「面白半分で下らない事をしてしまい申し訳御座いませんでした。しかしライにはサブ主人公として頑張って貰います（ゼブルに比べる）やはり少なくなるのですが」山

第二十六話 本編12 ゼブルとキョウトからの使者

PART 1

明けましておめでとうございます

今年も頑張って書いていきたいと思えます

第2会議室

コーネリアや新鋭隊上位メンバーにユーフェミア達と官僚達が早朝会議を行っていた

「知っているか？結果を伴わぬ者を無能と言うのだぞ？」

コーネリアが1人の男に言う

「ピンポンパンポン……皆様おはようございます。ナイトオブツィのツヴァイ・ドウです」

スピーカーからツヴァイの声が響く

「ツヴァイ殿？」

「何だこんな早朝から」

アイネやコーネリア達がツヴァイの放送に耳を向ける

「これより第2訓練場にて訓練をしたいのですが、広い所で1人でやるより少しでも多い人数でしたほうが楽しいと思いましたが、暇な方や運動不足だと思っただ方はぜひ参加してくださいと幸いです。尚所属は問いません名誉ブリタリア人の方々や貴族の皆様、研究員、皇族の方でも参加可能です。皆様の参加を快くお待ちしております。以上ツヴァイからでした」

スピーカーから声が消える

「……姫様」

ギルフォードがコーネリアを見る

「分かっているこれは私に対する挑戦だ！話し合いは終わりだ。ツヴァイめ待っているよ」

コーネリアが笑いながら部屋を出て行く

視点 変更

数十分後 第2訓練場

「結構集まっちゃいましたね。ざっと300人でしょうか？」
あたりを見回しながらツヴァイが呟く

「ツヴァイ！」

コーネリアとその他4名がツヴァイに近づく

それを見た兵士達がコーネリア達とツヴァイから離れる。綺麗な円形になった

「お待ちしておりましたよコーネリア皇女殿下。ユーフェミア様もご参加で？」

珍しく訓練場に来たユーフェミアに聞く

「いえ、私は見学です」

手を横に振りながら否定する

「いい判断ですね。これから先は軍にあまり関わらない貴方様には向かないでしょうから」

ツヴァイがそう言うとスピーカーを持ち上げる

「ではルール説明をします。所属別に3人以上5人以下のチームを作り、バトルロワイヤル式の尻尾取りゲームをします」
ツヴァイが言うと辺りからしゃべり声が聞こえる

内容は「何だそれ？」「尻尾？」「萌えの間違いだろ？」
などなど

「あの、尻尾取りゲームとは？」
アイネがツヴァイに聞く

「知らないんですか？タオルをズボン肌の間に入れて……こうすると尻尾に見えるじゃないですか」

自分の服に付けて見せるツヴァイ

「あ！本当だ」

驚いたようにアイネが言う

(そんなにマイナー?)

その反応に驚くツヴァイ

「この尻尾をを引き抜くゲームです。引き抜かれた人はそこで試合から強制退場、敵の尻尾を全部取ればそのチームの勝利。しかし武器は駄目ですが掴む殴る蹴る等は軍の訓練なのでありとします。自分の技術を最大限引き出してください」
ツヴァイが再びスピーカーに声を通す

「簡単そうですね」

ユーフェミアが言う

「その通りですね、簡単だからこそ腕が問われるのです」

「なるほど、でも人数が多いほうが有利なのは？尻尾も多いです
し」

横にいたアイネがツヴァイに聞く

「尻尾の数は同じにしますのでそこまで不利にはならないかと」
ツヴァイが言う

「そうですね」

「では所属ごとに分かれて余った方は此方に来てください」
ツヴァイがスピーカーから声を通し言う

十数分後

「73組出来ましたね、一試合約10組にしますと7試合ですか。
勝った7組で決勝戦にすれば良いですね」
頷きながらツヴァイが言う

「ツヴァイ殿は誰と一緒に参加するんですか？」
アイネはコーネリア達と同じなので少し残念そうに聞く

「俺は1人ですよ」
ツヴァイが言う

「大丈夫なんですか？」

アイネが安心したような不安そうな顔をする

「一応尻尾は2本ありますから」

左右の腰に付けた尻尾を見せながら言う

「でも5本じゃなくていいんですか？」

アイネが心配そうに言う

「大丈夫ですよ。おっと、そろそろ時間ですね。アイネ卿も頑張ってください」

ツヴァイが小走りでアイネから離れる

壇上の上に立っているコーネリアが

「皆よく聞け、この戦いに勝利したものは特別に一週間の休暇をやるぞー!!」

と大音量で言う

ワァー！！！！

ワァー！！！！

その言葉に凄い大声の歓声上がる

(総督も適用されるの?)

等と考えているツヴァイであった

時は移り数時間後

ワァー！！

ワァー！！

「さあ、凄い歓声が上がっています。司会進行は私兵士Aがお送りします」

司会者専用の椅子に座っている男（以降司会者）が言う

「では、決勝戦に勝ち上がってきた7組の紹介をします。まず第一試合のからはチーム2、ツヴァイ・ドウ卿です」

ワァー！！

「どつも」
軽く手を振るツヴァイ

「第二試合からはチームコーネリア隊で、親衛隊の隙の無い動きで敵を刺す勢いだ！」

「ワァー！！」

「勝利と休日を姫様に！」
ギルフォードが言い

「「おお！！」」
ダールトンとアイネが言う

「しかし、コーネリア様達は一週間もの休暇は流石に無理だと本国から報告がありましたので優勝しても賞品は無しの方角でお願いします」
司会者がコーネリアのチームを見て言う

4人の顔に不満の色が窺える

「やっぱり」

ツヴァイが言う

それを見たコーネリアが

「ツヴァイはいいのか？」

と聞く

「はい、ツヴァイ・ドウ卿はラウンズなので別だと聞いております
司会者が言う」

「それは良かったです」

ツヴァイがにやけながら言う

「さあ、気を取り直して行きましょう。第三試合からはイレブンの
意地チーム。地味ですが中々の精鋭揃いです！」

ワァー！

「頑張ります！」

「第四試合からはマッチョーズ。鍛え抜かれた鋼の肉体が相手の攻
撃にもビクともしない！」

ワァー！

「当たたり前よ」

「第五試合はイレギュラーズ。仮面で素顔を隠す謎のチームだ！」

「ワァー！」

「……」

「第六試合からはチーム特派。枢木スザク以外只立っているだけと言う事実、少しは困とかになったらどうですか？」

「ワァー！」

「だって痛い嫌だもん」

「第七試合からはチーム色気です。魅惑の色気で男共を誘惑する」

「ワァー……！！！！」

「うっふ〜ん」

「歓声の大きさが凄いですね。男は綺麗な女性に弱いものですからね」

ツヴァイが感嘆したように呟く

「ツヴァイ殿」

アイネが少し頬を膨らませてツヴァイの名を呼ぶ

「どうかしましたか？」

アイネに聞く

「……何でも無いです」

何か言おうとしたみたいだが言わないようだ

「決勝は以上の七組で行ないたいと思います」

ワァー……!!

「凄いですね」

ユーフェミアが白熱した会場に少し戸惑っている

「では、決勝戦の合図をユーフェミア皇女殿下にお願いします」
司会者がマイクを渡す

「え？いいのですか？」

マイクを受け取りながらも聞く

「はい」

「では、よー……い……ドン……！」
ユーフェミアがスタートの合図した

「さあ、始めました」

司会者も興奮気味に言う

「まずは弱そうな女共からだ！」

マッチョな男達が美女集団に襲いかかろうとする

「おーっと！マッチョーズがチーム色気にもう突進だ……！」
司会者が言う

「僕らは枢木スザクを討つ！」
若い男達がスザク達に向かう

「今度はイレブンの意地チームがチーム特派に向かった！」

「……………」

無言で見るツヴァイ

「そして動かない3チーム漁夫の利を狙うつもりか！」
ツヴァイのほかにもイレギュラーズとコーネリア隊も動かない

「ぐわあ！」

叫び声が聞こえた

「おっと！イレブンの意地チームが枢木スザクにコテンパンにやられてるぞ！残り2人」
5人中他の3人はすでに尻尾を取られている

一方違う所では

「はい、お終い」

手に尻尾を持った美女が言う

「ぬおー！いつの間に!?!」
マッチョの男達が驚いている

「凄いです。チーム色気がマッチョーズの尻尾を全員分抜き取っています」

司会者も驚いて言う

「あは」

美女のリーダー格の女が観客に向かって笑顔を振り撒く

ワアアアー!!!

「流石は美女勢揃いのチームですね。しかし何故酒瓶が? まあ武器では無いのですが、一応勤務中ですよ?」
ツヴァイが1人呟く

ザワザワ

客席がざわめき始めた

「ん? どうしたんでしょうか?」

司会者が見ると

「これは!!! なんと言う事でしょう! いつの間にかチームコーナーア隊がイレギュラーズにやられております!」
司会者が言う

残っているのはアイネだけだが

「くそ！」

守りきれず尻尾を取られる

「最後のナハトム卿も取られてしまいました。チームコーネリア隊
ここで脱落」
司会者が言う

「姫様」

ダールトンが申し訳なさそうに言う

「ダールトンの体を平然と投げたあの怪力と目に追えぬスピード、
これでは勝てぬさ」
あまり悔しくなさそうにコーネリアが言う

「特殊名誉外人部隊イレギュラーズでしたね。名前のとおり所属している隊員は全
員外国人で構成されており怪しげな魔術を使うと言う噂が流れてい
ますがあなたが間違ってはいなさそうですね」
ギルフォードがイレギュラーズを観察しながら言う

「ふ、ツヴァイはどうでるかな？」
コーネリアが面白そうに言う

「急展開を見せるが残り4チームとなりました」
司会者が言う

「……………」
イレギュラーズが美女達のほうを向き無言で近づく

「おっと！イレギュラーズがチーム色気に向かっていきます！」

「流石にこれ以上は無駄ね、楽しかったし此处でギブアップするわ」
尻尾を自ら引き抜く美女達

「未練も無くギブアップ宣言が出ました。残り3チームです」

「……………」
イレギュラーズの1人の金髪が構えるスザクの少し前で止まりスツ
と消える

「え？」
スザクの思考が一瞬凍った

「なんと！イレギュラーズの1人が消えました！！」
司会者が興奮と驚きで大声で言う

この言葉を聞く限り自分だけでないと実感する

「やっぱり、何処だ！？」

辺りを探すスザクだがそこには他のイレギュラーズとツヴァイしかない

「あ！いましたチーム特派の後ろです」

ロイド達の後ろにいた。そしてその手には尻尾を持っている

それに気付いたスザクが自分の尻尾を確認するが

「尻尾が！」

やはり無い

「あつれえ〜？」

「いつの間？」

ロイドとセシルも困惑している

「なんとということでしょう！チーム特派の尻尾を5本を全て持っています。と言う事は残りチーム2とイレギュラーズだけになりました」

「やはり貴方達が相手ですか」
ツヴァイはため息を吐き言う

「まるで知っていたような言い草ですね」
黒髪が聞く

「まあ、そうなりますね。えっとサンチア大尉でしたっけ？」
頭を傾げながら聞く

「何故私の事を!？」
黒髪（以降サンチア）が驚く

「貴方だけではありませんよ、怪力少女ダルク、地形限定の精密解析者ルクレティア、そしてザ・スピード・アリス」
1人1人を指差しながら言う

「あ、貴方は一体何者ですか!？」
サンチアが驚きを隠さず聞く

「只のしがないツヴァイ・ドウです」
口元を歪めながらツヴァイが言う

「アリス、ダルク今までとは違うぞ!！」

サンチアがツヴァイから距離を取りながら言う

「あたしの力なら関係ないよ！」

小麦色の肌の少女（以降ダルク）が言いながらツヴァイに向かう

「君は俺との相性は最悪ですね。攻撃、防御、回避よりも受け流す事に特化している俺にはね」

「うお！」

拳を放ったダルクの手首をツヴァイの手の平で素早く横に流す。ダルクは空振りしたようにバランスを崩し地面に倒れる

「しかし、受け流すも回避に入るような気がします。そう思いませんか？」

倒れているダルクに聞くツヴァイ

「えっと、何とも言えないかな？」

倒れた拍子に仮面が取れているダルクが苦笑いで答える

「そうですか」

残念そうに言うツヴァイ

「ダルク！でも、私のスピードなら」

金髪（以降アリス）がツヴァイに目に見えないほどのスピードで近づく

「残念ですが（スタイルチエンジン・センス）丸見えなんよ」

ギアスを発動させアリスに向かって腕を前にして突っ込むセンス

「嘘!？」

アリスはセンスの腕を避けきれず

「尻尾は1本だけなんか」

2本ある尻尾の内の1本を取る

「アリスのスピードに追いつくなんて」

大人しそうな少女（以降ルクレティア）が言う

「スピードに目が追いついていれば何とかなるんよ（スタイルチエンジン・ダイクン）」

只でさえ常人離れしているゼブルの肉体を更に師匠のチャンと共に鍛えに鍛えぬいた結果。普段はセーブしている身体的スピードはアリスのスピードにも引けを取らなかったが、そのアリスのスピードに目が追いつかなかったのだ。しかしセンスのギアスのお陰で追いつくようになったのである

「2人とも1回離れる！」
サンチアが言う

「貴方はちょっと寝ててくださいね」
ダイクンのギアスで殺気の塊をサンチアに放つ

「ひっ！！」
サンチアが倒れる

「サンチア！」
ルクレティアがサンチアに駆け寄る

「（スタイルチェンジ・ゼブル）気絶しただけです」
ツヴァイが言う

「一体どうやって」
ルクレティアがツヴァイを見る

「殺気に敏感な子なんですね、少し大きめに放つたらその有様に」
頭を軽く下げながらツヴァイが言う

「コイツ何か危険だ、棄権しよう」
アリスがツヴァイを見ながら言う

「でも」

ルクレティアが言う

「いいから」

アリスが自分の尻尾を抜く

「まあ、仕方ないかな」

続けてダルクも抜く

ルクティアも抜き尻尾を付けているのはツヴァイだけになった

658

「え、後半よく分かりませんが、優勝はチーム2のツヴァイ・ドウ卿でした。賞品は一週間の休暇です。皆さんこの勝者に拍手を浴びせようではありませんか！」

司会者の男がそう言い拍手をする

パチパチパチ

周りから大きな拍手が起こる

「えー、これにてツヴァイ・ドウ卿の訓練を終わります。皆様お疲れ様でした」

視点 変更

医務室にサンチアを運ぼうとしているイレギュラーズの面々の後を
ツヴァイが追う

「さて、君達ちよつと俺の部屋に来てくれませんか？」
ツヴァイが3人に聞く

「え？」

全員が振り向きツヴァイを怪しそうに見る

「その子が起きたら少し話をしたいので」
そう言い歩きだすツヴァイ

「どうする？サンチアがこんな状態だし」
ダルクがサンチアを担いだまま他の2人に聞く

「一応所属は違つけれど上の地位の人ですし、着いて行ったほうがルクレティアがそう言いツヴァイの後を追う」

視点 変更

ツヴァイの部屋

ツヴァイに待っているようにと言われ待機しているイレギュラーズのメンバー

「凄い部屋ね」

仮面を外しているアリスが辺りを見回しながら言う

高級なホテルのビッブルーム以上の広さと高級感があり綺麗に掃除はされているがあまり使われてはいないようだ

「でも、何で私達を？」

ダルクがアリスに聞く

「分かんないわよ、それよりサンチアは？」
アリスがルクレティアに聞く

「まだ起きないですね」
ルクレティアとサンチアも仮面を外している

「お待たせしました」
ツヴァイが扉を開き入ってくる

「んん」
サンチアが目を擦りながら起きる

「ちょうど起きたみたいですね」
サンチアの顔を見ながらツヴァイが言う

「貴方はツヴァイ・ドウ！」
目の前にいるツヴァイに驚きながらサンチアが言う

「はい、その通りです。紅茶でもどうぞ」
急須に入っている紅茶をカップに注ぎ全員の前に置く

「あ、ありがとうございます」
目の前に置かれた紅茶に戸惑いながら礼を言う

「それでお話と言うのは？」
アリスがツヴァイに聞く

「君達特殊名譽外人部隊はバトラー將軍直属の特殊部隊でした。しかしバトラー將軍が失脚した今の状況だといつ解体されるか分からない」

「……」
皆の顔が暗くなる

「そこで君達の部隊を俺直属の部隊に転属させたいのですが」
ツヴァイ全員の顔を見ながら言う

「え？」
サンチアがツヴァイを見る

「コーネリア様からは許可を取っています。あとは君達だけです」
ツヴァイが封筒に入った書類を幾つか机に置く

「……その誘いで貴方にどんな得が？」
サンチアが少し考え聞く

「君達みたいな可愛い女性が部下ならやる気が出るからです」
口元を歪めて言うツヴァイ

「嘘ですね」

ハッキリアリスが言う

「……バレちゃいましたか」

悪びれもせずツヴァイが言う

「え？嘘なの？」

ダルクだけが驚いたように言う

「そうですね、その前に1つ質問をしてもよろしいですか？」
ツヴァイが指を一本上げながら聞く

「何でしょう？」

怪しげにツヴァイを見ながらサンチアが聞く

「貴方達はギアス能力者ですか？」

「何故それを！？」

アリスが驚く

「俺は裏事情に詳しい者でしてね。まあバトラー將軍もその関係でこの部隊を作ったのでしようからね」
「そう言い紅茶を口に含む」

「……ギアス能力者は私とルクティアだけで、ダルクとサンチアは生まれた時から持っていた能力なのよ」
「アリスがルクレティアを見ながら言う」

「ほう、ギアスは誰から？」

（全員じゃないのか？）
「予想外の回答に少し驚く」

「それは名前は分かりませんが、大きな男の人でした」
「ルクレティアが思い出しながら言う」

（……え、大きな男？誰？ccでも、vvでもない？新種？）
「ツヴァイの頭が混乱する」

「あの」
「ルクレティアが呼ぶ」

「……」

しかし返事は無い

「あの！」

さつきより大きく言う

「ん？何でしょうか？」

気付いたツヴァイが聞く

「貴方もギアス能力者なんですか？」

ルクレティアが不安げに聞く

ルクレティアの問いに少し考え

「正確には俺の友達がですよ。それに俺は少し特別でしてね、例え
ばこれ」

手を皆が見えないように背中一回隠し、一瞬後皆の目の前にある
物を見せる

「剣？」

アリスが聞く

カリバーンである

「何処から出したんですか？」
サンチアが驚いたように聞く

「こんな風に空間に貯蔵庫を作りそこから貯蔵した物やら武器を取り出したり出来ます。マジックの元祖みたいなものですね」
カリバーン以外にもシロウが愛用している干将・莫耶かんしょう・ぼくやと言つ二本一対の夫婦剣、テフロン加工のフライパンにお玉も出した

「おおー！」

皆は本物のマジックを見てるように感動し拍手をする

それを見てツヴァイが手に持っている物を全て下に落とす
皆がそれに驚くが何時まで経っても床にぶつかる音が聞こえない

それが気になりダルクが床を見ると

「消えた！」

そこにカリバーンたちは無かった

「貯蔵庫に戻したんですよ、他にも殺気の調節をして任意の相手に強烈な殺気を放つて気絶させる事も出来ます」
サンチアを見ながら言う

「私に使ったやつですか？」

サンチアが少し嫌そうな顔をした

(思い出したくなかったのかな?)

「ええ、俺も貴方達と同じで目的は同属保護です。ですから俺を信じて欲しいのですけれど、こればかりはどうしようも無いですからね」

ソフアーによっかかりながら言う

「あたしは賛成だな。この兄ちゃんに任せれば色々と楽だ。それに楽しそうだ」

ダルクがニヤニヤとツヴァイを見る

「私も構いません。私達と同じ能力者であるなら尚更信用できます」

「私も同じだな、解体されるよりはいい」

「皆がいいのでしたら私も構いません」

他の3人も答える

「別に答えを急がなくてもいいのですよ?」
ツヴァイが念を押す

「構いません」

サンチアが言い他の皆も頷く

それを見て

「そうですね。では、ここにサインを」
書類と羽ペンを渡す

全員分の記入が終わり

「はい、ありがとうございます。では、俺の直屬部隊名は特殊名譽イレキユラースフアカルティース外人部隊から特別工作部隊に変更です。部隊長はサンチア、副部隊長はルクレティアに任せます」
ツヴァイが2人を見て言う

「はい」

「さて、君達は晴れて俺の直屬の部隊になりました。そこで俺からの注意事項を言います」
指を2本立てて言う

「まず、俺の許可無しでの能力の使用を禁止します。今日のように一般人に能力を軽々しく見せないようにしてください。本当に使わないと危ないと思ったのなら許可しますが、それでもできるだけ見られないようにしてください。勿論見られないからと言っての使いすぎも止めてください、何かあるか分からない世の中ですから。それと能力の他言も許しません。良いですか？」

一回全員が頷いたのを見て再び言い始める

「次に君達には勉学にも励んで貰います。つまり学校に通うという事です。君達にも青春を謳歌して欲しいですからね、軍人だという事は知られてしまうのは仕方が無いと思いますが所属は言わないで下さい、軍規に反する事なので。それと一応俺が君達の仮親となりますので三者面談や授業参観の時は俺に言うように」

「ラウンズが授業参観に行くなんて前代未聞ですよ？」
ルクレティアが聞く

「別にいいじゃないですか。それと、俺の事を呼ぶ時や口調は学校や軍の外では親として、軍内では上司として分けてください、この部屋とこのメンバーだけでしたら口調も砕いていいですから」

「パパでいいかな？」

「お、お父様」

「私はお父さんかな」

「じゃあ私は父上で」

それぞれがそれぞれの呼び方で言う

（しかし良いもんだね、この年で娘が出来るなんて中々無いよな。
しかも4人も）

その事に少し嬉しそうに笑うツヴァイ

「まだ、早いですがいいでしょう。さて、それで君達の行く学校ですが多分私立アッシュフォード学園になると思います。アリスもいることですし」

アリスを見て言う

「なっ、止めてよ！恥ずかしいじゃない！」

アリスが断固拒否の意向を示す

(いきなり口調砕けたな)

「いいじゃないですか。あと、俺は君達と一緒にいられる時間が少ないと思いますがもし困った事があればコレに用件を言ってください」

そう言い携帯電話のような物を見せる

「これは？」

「転送式録音機です。君達1人1人にこれを渡します。俺に何か話したいことがあるのならコレに……………」

使い方を説明し始める

説明を終え

「さて俺はコレをコーネリア皇女殿下にお渡ししたらちよっとした用があるので出かけます」

ツヴァイが書類を封筒に入れる

「用？」

ダルクが聞く

「はい、ちよつと偉い人に会いに行つて来ます」

（黒の騎士団のメンバーとしてだけどね）

「いつ戻つて来るのですか？」

ルクレティアが聞く

「そんなに堅苦しい言い方をしなくてもいいですよ。数日以内には一回は帰つてきます。それと後の事とは君に任せます」

ルクレティアに言う

「え？私ですか？サンチアのほうが良いと思いますが」
驚いたように言いサンチアを見る

「君達を分類分けすると指揮者はサンチアでダルクがムードメーカー、アリスは　まあ、それは良いとして「良くないわよ！」ルクレティアが纏め役。戦場ではサンチアに皆の事を一任しますが私生活では君にお願いします」

アリスが少し怒つたように言うが気にしないツヴァイ

「はい」

元気よくツヴァイに言う

「いい返事ですね。頼みましたよ」
ツヴァイが頭を撫でる

「ふえ！？」

ルクレティアが素っ頓狂な声を出す

「此処の部屋は君達が好きに使って構いません。合鍵は人数分ありますので遠慮をする必要は無いですが汚したらキッチンと綺麗にしましょう。では」
そう言い部屋から出て行った

数分後

「今何してる？」
ダルクがサンチアに聞く

「コーネリアの皇族室を出て男子トイレに入った……え？気配が消

えた？」
サンチアが驚く

「察知できないの？サンチアが？」
その事にアリスも驚く

「急に消えた。探しても見つからない」
必死で探すが見つからない

「何者なんでしょね。お父様は」
嬉しそうに微笑みながらルクレティアが言う

「本当にあれが父親になるの？」
アリスが聞く

「謎過ぎるよね」
ダルクが言う

「お父様」
ルクレティアが顔を赤くし惚けたように言う

「ちょっとルクレティア！何で赤くなってるのよ？」
それに気付いたアリスが聞く

「かつこよくて強くて優しくて謎めいた父親ができるなんて嬉しくて嬉しくて」

言いながら笑い、笑いながら泣き、泣きながら言う

「ちょ！何で笑いながら泣いてんのよ!?!」
それに気付いたアリスが困ったように聞く

「まあ分からなくもないかな、私達天涯孤独の身だったからね」
ダルクがうんうんと頷きながら言う

「それにしても本当に謎よね、あいつ」
アリスが言う

「お父様をあいつなんて言っちゃ駄目でしょう!」
急に泣き止んだルクレティアがアリスに少し怒ったように言う

「…………ルクレティア。あんたもしかして」
サンチアが目をパチクリさせて言う

「お父様の為にも私が頑張らないと…………皆今から部屋の掃除をするわよ!」

握り拳を固めて言う

「何で急に」

ダルクがダルそうに言う

「善は急げって言うでしょう？お父様の為にも私が頑張らないと
そう言い掃除用具を取りに行くルクレティア

「……あんな感情的な顔のルクレティア初めて見たな」
サンチアが言う

「やっぱり色々と溜め込んでたのかな？」
そう言い少し悲しそうになる

「その点はパパに感謝しなくちゃね」
ダルクがしみじみと言う

「しかし、本当にあれが父親になるの？」
アリスが胡散臭そうと言わんばかりに言う

「別にいいじゃん、パパがラウンズなんて凄いことだしね」
ダルクが体を伸ばしながら言う

「まあ、そうだな。しかし……」
「分かってる、少しは様子見ね」
サンチアとアリスが言う

ゼブルのギアス4人目

センス

一人称ミー

特徴：語尾がユルク「……ん〇」と付く

能力：視覚や聴覚などの五感（第六感は上がらず）や反射神経を大幅に上げる。しかし長時間の使用で脳に痛みを伴い、時間が経つ毎に痛みが激しくなり
最悪の場合脳がオーバーヒートし、脳死する可能性もある

発動条件：特になし

第二十七話

本編 12

ゼブルとキョウト

から

の

使者

PART 2

本編12と書いてありますが一切関係のない事に書き終わって気付きました

ライの口調難しすぎます

おかしな所が多いかも知れませんがご容赦ください

シンジユクゲッター

そこでライは夕日を見ながら黄昏ていた

そこに

「オマエか？ 戦闘隊長になったって言う新入りは？ 名前は確かライだっけか？」

マックスが話しかけてきた

「え？ あっ、はい」

初めてマックスを見たライが

（包帯で顔を隠している、火傷でもしたのか？）
と思う

「俺はマックスってんだ。よろしくな、口調ももつと砕け」
マックスが笑いながら言う

「分かった」

ライが不審そうに見る

「オマエ自分の記憶が無いらしいな？」
マックスが聞く

「……ああ」

(何だ？体の隅々まで見られているような感覚は)
ライがマックスの視線に戸惑う

「ならオマエは今のままが幸せかも知れねーな」
呟くように言う

「何のことだ？」

少し怒気の入った声で聞く

「思い出さずにいればその方が良いかも知れねえって事だ」
ライを真剣に見つめる

「記憶の事か？貴方が僕の何かを知っているとでも言うのか？」
その視線に答えるかのようにマックスを見つめる

「どうだろうな」
マックスが視線を外す

「おかしなことを言う」

「そうだな。忘れる。おっと、時間だ。じゃあな、また近いうちに会うだろうからな」

「そう言い何処かに向かって歩き始める」

「……」

（あの人は俺の何かを知っているのだろうか？）
物思いにふけっていると

「ライ、どうしたの？」

制服姿のカレンがいた

「カレン、マックスって人知っているか？」

カレンのほうを向き聞く

「ああ、マックスね。いつ会たの？」

頷きながらライの隣の瓦礫の上で座る

「少し前に。あの人は何者だ？」

ライが聞く

「元々は情報屋で偶然黒の騎士団結成前の私達と会ってそのまま黒の騎士団の幹部の1人になった」

「思い出すように話し始めるカレン」

「凄い人なのか？」

「ええ、情報の質と量にゼロが驚いてたわ。それに頭の回転も凄く速い上に河口湖の時には1人で潜入した程の力も持っている。ゼロが高く評価しているわ。でも神出鬼没なのが傷なのよね」
少し悔しそうに言うがカレン自身もマックスの事を認めているのであつさりと言う

「……」

ライが黙る

「マックスに何か言われたの？」
そんなライを気遣うカレン

「何でもないよ」
空を見上げながら言う

「本当に？」

「……ああ」

「そう、言いたくないのなら別に構わないけど」

「……」
少しの沈黙の時間が流れる

それを壊したのは

「あれ？カレンちゃんこんな所で何してるんだい？」
ゼブルが2人に近づくと

「え？ゼブル貴方こそどうして？（制服で助かった）」
カレンが驚いたように聞く

一歩間違えば黒の騎士団の制服で会う可能性もあるからだ。そうならばゼブルを生かしておく訳にはいなくなる

「俺は散歩の最中。お隣の君は見ない顔だけどカレンちゃんの彼氏？」

（このライはカレンちゃんルートか）

「ああ、ゼブルは知らなかったわね。彼はライ、記憶喪失者でミレイ会長に保護されてるの。記憶が戻るまでの間、仮生徒として学園での生活を送ることになってるのよ。そしてライ、彼がゼブル。私達と同じ生徒会のメンバーでガーベスの彼氏でもあるのよ」
カレンがそれぞれに説明をする

「（ガーベス？ああ、あの無口な子か）よろしくゼブル」
ガーベスの事を思い出しゼブルに挨拶をするライ

「此方こそよろしくライ。ここに来たのもそれが理由かい？」
握手をしながらゼブルが聞く

「ええ、色んな所を見て回りたいからね」
頷きながらカレンが答える

「そして恋心が芽生え2人は荒野を歩く」
笑いながらコンクリートの上に腰掛けるゼブル

「なっ、何言ってるのよ。私がお世話係の主任に選ばれて仕方なく」
取り乱して言うカレン

「噂は聞いているよ、ゲッターに現れたテロリストからカレン姫を救った騎士ライの伝説」
ポーズを決めながら言うゼブル

「まだその噂流れてるの!？」
「凄いな」

驚く2人

けっこう前の噂だからだ

「まあ、2人の時間を俺なんか邪魔しちゃ駄目だよな?じゃあ、俺はこれで失礼するよ」
そう言い立ち上がるゼブル

「え?ちよつと何言ってるのよ、私達別にそんな関係じゃ
カレンがゼブルに言うが」

「まだそうでもこれからは分からないでしょ?」
ゼブルが言う

「そつ、それは」
少し俯きながら言う

「(否定しない所がカレンちゃんらしいかね)まあ、君達の相性は
かなり良い。下手したら俺とガーベスちゃん以上かもね」
ゼブルが笑いながら言う

「(僕とは初対面の筈)どうしてだ?」
ライが聞く

「男の勘かな。とにかく俺は失礼するよ」
そう言い手を振りながら歩くゼブル

「変わってるな」

ライがその背中を見ながら言う

「ええ、でも嫌いじゃないでしょ？」
カレンが聞く

「ああ」

頷くながら言う

「あと、明後日にゼロがキョウトの偉い人に会いに行くんだけど一
緒に行ってくれないかって」
カレンがライを見ながら言う

「僕は別に構わない」
ライが言う

「そう、良かった」
そう言いながら黒の騎士団の基地に向かって歩き出す2人であった

翌日の放課後

「騒がしいな、どうかしたのか？」
生徒会室に入ったライが聞く

「あ、ライか、昨日ぶりだな」
ソファアに座っているゼブルが言う

「ゼブルか……あそこで騒いでるのは誰だ？」
ライが指を指しながら言う

「ああ、オレンジ色の髪の子がアイネちゃんって言ってスザクと同じで軍に所属しながら学校にも来てるんだよ。もう片方の子はナナリーちゃんの親友の姉妹のルクレティアちゃんだったって」
それぞれを説明する

ルクレティア、ダルク、サンチアは昨日のうちにツヴァイが手続きし、今日入学すると言う早業を成し遂げ、学校生活に早くも馴染んでいるのだ

「へー何で喧嘩なんかしてるんだ？」
ライがゼブルに聞く

喧嘩と言っても口喧嘩である

「俺も今来たばかりだからどうともね。ミレイ会長説明してくださいよ」

そうミレイに言つと

「あらライ、いつ来てたの？」

振り返ったミレイがライに気付き言つ

「今さっきです……それよりどうしたんですか？」

ライが聞く

「なんと言つか、男の取り合いかな？」

そう言い簡単に経緯を話すと

ナナリーとアリスがルクレティア、ダルク、サンチアを案内している途中生徒会室に寄つたら、アイネがミレイにツヴァイの事を話していた。それを聞いて向きになったルクレティアがツヴァイの娘になつた事を自慢し、それに最初は戸惑っていたアイネだが対抗しようとし始め。それから自分の方がツヴァイの奥さんに向いているだの何だの言い合いに発展したらしい

「という事はあの子達はナイトオブツアの娘に当たるんですか!？」

一緒に聞いていたリヴァルが驚く

「ええ、そうなるわね。養子みただけどね」
頷きながら言う

「で、あの2人はどっちがツヴァイ・ドウ卿に相応しいかで喧嘩中
ですか」

ライが見ながら言う

他の3人最初は止めようとしたらしいが諦めてナナリーと遊んでいる

「しかしツヴァイ・ドウ卿ってもてるんだな、羨ましい」
リヴァルが心底羨ましそうに言う

「リヴァルだってもてる部類だと思うぞ？気が利くし、話しかけや
すいし」

ゼブルが肩を優しく叩きながら言う

「でも、お前達みたくもててないぞ？」
リヴァルが落ち込むみながら言う

「時間の問題じゃないか？」

ライが言う

「人事みたいに言うなよな。てか否定しないのかよ!?!このナルシ
ーめ!」

リヴァルが半べそをかいてライを睨む

「まあ、ライにはカレンちゃんがいるからな」

入り口の近くにいたカレンを見ながらゼブルが言う

入ろうとしていたようだ

「ちょっとゼブル、またそんな事言って!
少し不機嫌になって入ってくる

「で、正直にどうなのよ?」
ミレイがライに聞く

「貴方からもハッキリ言ってよ」
カレンがライに言う

「ハッキリ?」

ライがカレンに聞く

「そう、ハッキリと」

カレンが頷きながら言う

「満更でもない」

真顔で言う

「ほほう、それはそれは」

ゼブルが笑いながら言う

「ちょっと何言ってるのよ!?!」

カレンが顔を赤くしながら言う

「カレンちゃんはどうかんだい?」

ゼブルがカレンに聞く

「え、わ 私は その…」

周りの視線に少し引き腰のカレン

「別に恥ずかしがる事は無いだろ?」

ルルーシュが言う

「ルルーシュさん大人だね」

ルルーシュの言葉に笑いながらゼブルが言う

「で、どうなのよ？」

ミレイがカレンに近づきながら言う

「ですから その…えっと…あ！そつだ！今日は用事がありますので失礼します」

棒読みで言うとかばんを持って何処かに行ってしまった

「見え透いた嘘だな」

ルルーシュがため息をつきながら言う

「ライ追いかけてやれよ」

リヴァルがニヤニヤしながら言う

「そつよ家まで送ってあげなさい」

ミレイも言う

「分かりました」

そつ言い立ち上がるライ

「ちよつと待った」

それを止めて自分のかばんをあさり始めるゼブル

「どうかしたか？」

ライがゼブルを見ながら言う

「コレ、カレンちゃんと一緒に行ったらどうだ？」

ゼブルがライに少し折れている紙を2枚渡す

「いいのか？」

ライが手に取り確認すると

それは映画のチケットだった

「俺の知り合いがくれた物だけど、俺とガーベスちゃんはもう試写会で見ちゃったから」

ゼブルが言う

「ありがとう」

チケットをポケットの中に入れるライ

「どういたしまして、じゃあ行って来い！」

ライの背中を押しゼブルが言う

「ああ」

そう言い走って出て行った

視点 変更

校門前

「カレン！」

カレンの後姿を見つけ叫ぶ

「何？」

カレンが笑顔で言うが目が笑っていない

「もしかして怒ってる？」

少しビビリながらライが聞く

「当たり前じゃない。ライがいきなりあんな事言うんだもの」

顔を赤くして恥ずかしそうに言うが少し嬉しさも入っているようだ

「ゴメン」

ライが頭をかきながら言う

「まあ、良いわ許してあげる」

そんなライにカレンが言う

「ならカレン、今から映画見に行かないか？」
ライが聞く

「え？何で急に」
驚いたように言う

「ゼブルからコレを貰ってな。よく見たら期限がそろそろなんだ」
ポケットからゼブルに貰ったチケットを見せながら言う

「へーゼブルがね。良いわ行きましょ」
カレンが映画館に向かって歩き出す

「ああ」
カレンの手を握るライ

「ライ!？」
そのことに驚き顔を赤くさせるカレン

「どうかしたか？」
ライが聞く

「なっ、何でも無いわ!」
「そう言い顔を赤くさせ早足で歩く
が
手は強く握ったままだ」

視点 変更 ゼブル

生徒会室

「ふふ、面白くなりそうだな」
少ししてゼブルが呟く

「どうしてだ?」
それを聞いたリヴァルが聞く

「実はけっこうエッチイ映画なんだよね。2人に気まずい雰囲気
流れるのが楽しみだな」
ゼブルが笑いながら言う

「お前悪魔だな」

リヴァルが冷やややかな視線を送る

「じゃあ試写会の話も嘘なの？」
ミレイが聞く

「あれは本当ですよ。エッチイシーンの時にガーベスちゃんがオロオロしながらも画面から絶対に目を逸らさない姿は可愛らしかったな」
思い出しながら微笑むゼブル

「制服で行ってたが大丈夫なのか？」
ルルーシュがゼブルに聞く

「一応年齢制限は15歳以上だから問題なし。しかし終わった後どうなるか楽しみだな」
ゼブルが笑いながら言う

その顔を見て
（（天使の面を被った悪魔だ））
3人が思うのであった

視点 変更 ライ

映画館内

開演前

「楽しみね」

カレンが言う

「この映画どんな内容なんだ？」
ライがカレンに聞く

「別に何だっつていいじゃない、只で見れるんだから」

「それもそうか」

開始から20分後

「（嘘！こんな過激なの！？未成年に見せていいの！？）」
カレンの顔が真っ赤になる

「（うわぁ、カレン顔が真っ赤だな）」

映画そっちのけでカレンの横顔をライがばれないように見る

35分後

「（そんな所まで！？流石にブリタニアは違うわね）」
口をパクパクしながら尚も見る

カレンは知らずの内にライの手を握っているのだが興奮し過ぎて自分では気付いてはいない

「（カレン、手汗が凄いな。そんなに興奮してるのか）」
ライはそれを面白そうに見る

60分後

「（まだ続くの！？）」
カレンが顔を振りながら思うが画面からは目を逸らさない

「（眠くなってきた）」
カレンが握っている手とは反対の手で目を擦りながらライが思う

75分後

「（キヤアアー！！あんなに激しく！？）
今まで以上に興奮しているカレン

「（zzzz）」

カレンの肩に頭を乗せて寝ているライ

勿論カレンは映画に夢中で気付かない

90分後

「この映画凄過ぎ」
終わったのに興奮が収まらないカレンが肩で呼吸しながら胸を押さえる

「（ん？終わったか、全然内容が分からなかったな）どうだった？
カレンの荒い息づかいでライが起きる

「凄かった」
カレンが呟く

「なら良かった。カレン凄く集中して見てたみたいだし」
ライが欠伸をしながら言う

「私の事見てたの！？変な顔してなかった？」
真っ赤な顔を手で押さえながら言う

「可愛かった。興奮するたびギュッギュッって握ってた手に力が入るんだ」
ライが言う

「！ななな、何言ってるのよ！？わ、私だって　その…ライに手を握られて…その…」
言葉が思うように出ない

「どうかしたのか？」
ライが聞く

「ライの馬鹿！！鈍感！朴念仁！」
カレンがライの耳元に大声で言う

「え？僕が何かした？」
耳を押さえながら言う

「本当に分からないの!？」
カレンが呆れたように言う

「ごめん」

理由が分からないライは謝る事しか出来ない

「はあくなんでもないわ。気にしないで」
カレンがため息を吐きながら言う

「そうか?なら甘いものでも食べに行くか」
ライが微笑む

「そうね、そうしましょうか」
カレンがライの手を掴みながら言う

「(ライの手を握っちゃった!しかも恋人握り!!)」
カレンの顔が赤くなる

「どうかしたか?顔が赤いぞ」
それに気付いたライが聞く

「なっ、何でも無いわよ!」

そう言いライを引っ張り歩き出すカレンであった

視点 変更 ゼブル

その頃数メートル先

「ふむ、結構効果あったんじゃない？手なんか繋いじゃって」
ミレイが面白そうに言う

「ですね。しかも恋人握り」
ゼブルも笑いながら見る

「しかしカレンも真っ赤になっちゃって。意外に初心なのね」
ミレイが言う

「ライが多分凄く鈍感だから、カレンちゃんから告白しないと駄目
ですね」
ゼブルも観察しながら言う

「何で俺まで」
ルルーシュがため息を吐きながら言う

「あら？ルルーシュは興味ないの？」
ミレイが聞く

「無いですよ」
ルルーシュが言う

「何でだよ？面白いのに」
リヴァルは面白そうに2人を見る

「リヴァルお前は悪ノリし過ぎだ」
そんなリヴァルにルルーシュが言う

「しかし此処からは2人の時間ね。邪魔しちゃ駄目よ」
ミレイが後ろを向き言う

「じゃあ、帰りますか？」
ゼブルが聞く

「今日は気分がいいし晩御飯は私の手料理をご馳走してあげましょ
う！」
ミレイが手を叩きながら言う

「おお！会長太っ腹！」
リヴァルがミレイに言う

「どうせ俺とゼブルは手伝わされるんですよね？」
ルルーシュがゼブルを見ながら言う

「勿論。そうだ！転入生の子達も呼びましょう」
ミレイが思いつき言う

「良いですね。ガーベスちゃんも誘うか」
ゼブルも言う

「転入生の子達が来るならナナリーも連れて来なくちゃいけないな
ルルーシュ？」
リヴァルがルルーシュに言う

「仕方がない、今晚だけだぞ」
ルルーシュもいつにもまして上機嫌だ

ナナリーに友達が出来ただけでもルルーシュには一大事なのだ

「よし、なら帰って支度するわよ」
そう言いミレイが歩き出した

第二十八話 本編12 ゼブルとキョウトからの使者

PART 3

どんどん短くなってきています

この現実にごう向き合いますよ

って考えたら前だったら3話で1話でしたし良いか

と思う今日この頃です

黒の騎士団アジトのゼロの部屋

ゼロがマックスを呼んで2人だけの秘密会議を行なっている

「実はキョウトが私に会いたいと言ってきてな」
ゼロが椅子に座りながら言う

「回りくどいのは終わりにして。俺に何をしろと？」
マックスがダルそうに言う

「話が早くて助かる。君には潜入仕事を頼みたい」

「他の連中にも秘密なのか？」
マックスが聞く

「ああ、必要な事は私がやるが念のため補佐が欲しい」
そう言いマックスに手を伸ばしながら言う

「（握って欲しいのか？俺でいいのか？ライのほうがいいと思っ
がな」
肩を竦めながら言う

「そんな事はないさ。君は使える人物だ」
そう言いアジトから外に歩き出すゼロ

その後、ゲッターに車が来てゼロはいとも簡単にその車に乗っていた連絡員を納得させ、その車で今日行なわれるキョウトの重鎮に謁見する場所。フジヤマプラントに少し早めに侵入した（因みにキョウトは別名NACと言われ表の顔はエリア11の経済団体。裏の顔はテロリスト達を支援する組織なのである）

「それにしてもよ、どうやって言いくるめてんだ？」
内部を見ながら言う

「なにをだ？」
白々しく言う

「ここまで俺等を案内した連中だよ。随分あっさりと入れてくれたもんだな」

歩いてきた道を見ながら言う

「あらかじめ話を通しておいたのさ。協力者はいたる所にいるからな」

「へー（なら、なんで秘密にするんだ？まあ、どうでも良いけど）」

「だが気を付ける。ここからは見られれば問答無用で銃殺されるぞ。少し脅すようにゼロが言う」

「で？俺はどうすりやいんだ？」
マックスが聞く

「私は謁見会場の警備をするナイトメアに乗り込むが、その為に警備システムの監視をやり過ぎさなくてはならない」
ゼロがフジヤマプラントの内部図と監視網が詳細に書かれた地図を渡す

「俺を囮にすんのか？」
それを見ながら聞く

「そういうことだ。君は監視の目を短時間だけでいいから引き付けてくれ」

マックスの地図に指を指し場所を教えるゼロ

「いいだろう、やってやんよ」

マックスが口元を歪めながら言う

「そうか、では始めよう。私が先行するから、君は私の合図を待て」
そう言い別行動を始めた

「仕方ないな。スタイルチェンジ・ハイド」

【きゅぴーん！ぎあすはつどう】

ポーズを取りながらギアスを発動させるハイド

【さっさと終わらせるぞ】

【いまのかがえたなかでいちばんじしんがあったのに】
ハイドがふてくされながら歩く

フジヤマプリントの監視室

【ついたよ？】

部屋を見ながらハイドが言う

【なら、ダイクンに変わって気絶させてくれ
ゼブルが言う】

【おれっちにいわないでよ
ハイドが困ったように言う】

【それもそうだな】

【すたいるちえんじ・だいくん】

【ばれない内にさっさと気絶させてくれ】
ハイドが消えてハイドのギアスも解かれている。つまり見られる可能性があるのでさっさと終わらしたいのだ

【仕方ないですね。ギアス発動】

「ぐあ！」

「うう！」

呻き声を上げ倒れる兵士達

【後は任せますね。スタイルチェンジ・ゼブル】

「ふー終わって暇だし散策でもするか。ばれたらハイドでやり過
そう」
そう言い歩き出すマックス

フジヤマプラントの廊下

「あら？貴方は？」

巫女と言う表現がピッタリな女の子が聞く

「アンタは確か皇神楽耶」
マックスが言う

「あら、私をご存知で？」

（以降神楽耶）が聞く

「俺はマックス。ゼロの部下だ」

「という事はゼロ様は私がここにいる事を知っていたのですね」
目を輝かせながら言う

「（知らないだろうな）ああ、旦那がよろしくと伝えてくれたって
よ」

嘘を言う

「そうですか！？うれしいです」
その嘘を信じ込み体をクネクネさせる神楽耶

「そうでした。紅蓮式式は如何です？アレを送らせたのは私なので
すよ？」
神楽耶が自慢げに言う

「ああ、うちのエースパイロットが大変有効に使って、ゼロも喜んでたぞ」
実際は見えていないのだが

「そうですか。でも残念ですね。出来れば謁見の間に立ち会って、
未来の妻としてゼロ様のお顔を拝見したかったです。まあ、貴
方に会えただけでも良かったですわ。私これでも黒の騎士団の大フ
アンなので」
神楽耶が嬉しそうに言う

「いい趣味を持っているな」
マックスが皮肉げに言う

「どういたしまして。黒の騎士団には期待を寄せているのですよ？
これからも一杯頑張ってください」
それが通じない神楽耶が笑顔で返す

すると

携帯に連絡が入ってきた

「こちらは済んだ。引き上げてくれ」
ゼロからだ

「了解」

「一騒ぎは覚悟していたが。随分スマートに済ませたようだな」
ゼロが言う

「俺を誰だと思ってるんだ？」
マックスが笑いながら言う

「ふむ、そうだな。ではしばらく通信は切る。上手く逃げろよ」
少し急いで言うゼロ

「分かった」

そう言うと向こうから切断した

「今のお声はゼロ様ですか？」
神楽耶が興味深々に聞く

「ああ、引き上げてくれたってよ」
携帯をしまいながら言う

「そうですね、楽しいひと時をありがとうございました。お気を付けて」
手を振りながら言い歩き出した

「じゃあな……ハイドのほうで安心できるな。スタイルチェンジ・ハイド」

マックスも手を振り、神楽耶が見えなくなるとハイドに入れ替った

フジヤマプラントの謁見の間

【ん？わらいごえがきこえるよ？】

【そうか。謁見の間に着いたのか】
知らぬ間に謁見の間に来ていたことに驚く

「くそ、見えねー」

玉城が顔を動かして見ようとするがカレンが遮る

「扇よ！」

笑い声の主が言う

「あ、はい」

急に呼ばれて驚く扇

「この者は偽り無きブリタニアの敵。素顔を晒せぬ訳も得心がいった。儂が保障しようゼロに付いて行け。情報に隠蔽や拠点探などは儂等も協力する」

男の声が聞こえる

「ありがとうございます！」

扇が言う

「感謝します桐原公」

体の向きを変えながら言う

「行くか修羅の道を」

老人（以降桐原）が顔隠しの布を取りゼロに言う

「それが、我が運命なら」

そう言い仮面を付けるゼロ

「(どうでも良いけど、ここからだ素颜丸見えだな)」
それを遠くから眺めるマックスであった

この後一緒にアジトに戻る一行だったが、ccの話になり少し気ま
ずくなるのだった

(まさかゼロが日本人じゃ無かったなんてな、正直驚いたが彼の力
リスマ性とブリタニアに対する怒りは本物だ。キョウトからの支援
も潤沢になるし困る事はあまりない。むしろ日本人以外の協力者も
増えるかも知れない。よっし！俺も頑張らないとな)

(相手が桐原公で良かった。もし違かったのならギアスの使用も考
えていたのだがな。それにしてもマックス、あいつが何の音沙汰も
無しに作戦通りになったのは偶然なのか？もしかしたら俺と同じ…
…いや、考えすぎだな)

(さて、今回も何とか片付いたな。次は何だっけ？……次マオじゃ
ん！やばいやばい！手打つとかないと俺の心覗かれたら計画台無し

じゃん！今すぐに探しに行かなくちゃー！！

第二十九話

本編 13

ゼブルとシャーリーと銃口

PART 1

長かった冬休みがもうすぐ終わってしまう

投稿の早さが段違いに遅くなる事を想像して

辛くなる今日この頃です

キョウトの謁見から数日後

黒の騎士団アジトのラウンジ

そのラウンジにあるソファーに座っているライ

そのライに

「ライ、少しいいか？」

ゼロが聞く

「何だ？」

「君に紹介したい女性がいてね」

そう言っているとゼロは自室にいる女性を連れてきた

「はあい」

キセルを吹かしながら来た女性。肌の色が褐色でインド地方の出身だと分かる

「元医療サイバネティック技術の権威として名を馳せていた。ラク

「シャータだ」
ゼロが紹介してくれた

「よろしく。さっそくだけど私からのプレゼントがあるのよ。付いてきなさい」

褐色の肌の女性（以降ラクシャータ）がそう言いながら歩き出した
少し歩き

崩壊した大きなビルの中にある大きなトラックの中に入る

「これは……」
目の前のあるナイトメアに魅入る

青い色の機体で左手には紅蓮と同じような感じになっている。後に四聖剣と呼ばれる4人が搭乗する機体の試作機である

「名前は月下。試作機だけど性能は無頼なんかより数段良いわ。腕には紅蓮と同じ輻射波動が撃てる甲冑型腕が付いているわ、簡易型だから威力は紅蓮に劣るけれどそれでも高威力よ」
ラクシャータが月下の武装説明をする

「コレを僕に？」
ラクシャータにライが聞く

「アンタの戦闘データを元に調節もしたのよ。紅蓮と同じぐらいピ
ーキーだからそれ相当の人間がいないと全力を發揮できないもの。
それに月下の量産に向けたデータも欲しいし」
ラクシャータがライを見ながら言う

「モルモットって所か？」
ライが苦笑しながら言う

「否定はしないわ。でも、それだけのものをお返しするわよ？この
月下だってそうだし。ギブアンドテイクってやつね」
ラクシャータがキセルを吹かしながら言う

「そうか」
その煙をはらいながら言う

「次に君の血を調べたい」
今まで何処にいたのか分からないがゼロが歩いてくる

手には注射機を持ってきている

「僕の血を？」
嫌そうな顔で言う

幾つになっても注射は怖いものだ

「正確にはDNAね、知らないだろうから教えるけどDNAって個人情報の山なのよ」

ラクシャータが笑顔で言う

「本当にやるのか？」

顔が少し引きつっている

「君の記憶のためだ」

多分仮面の中では笑っているのだろう。後ろのラクシャータも笑っている

「なるほど（絶対楽しんでるな）」

ライが覚悟を振り絞り腕を差し出した

この少し後叫び声が聞こえるが、そこは気にしないでいよう

翌日ライにカレンから連絡があった

シャリーの父親がナリタでの戦い（後にナリタ連山攻防戦と呼ばれる戦い）で土石流に巻き込まれて瀕死の重傷を負ったらしい

幸い命には別状は無かったが、頭を強く打ったらしく意識が戻らないとのことだ

視点 変更

租界中央病院廊下

「ごめん、シャリー」

カレンが呟くように言う

命令とはいえカレンが乗っていた紅蓮の輻射波動で起こした土石流によって怪我をしてしまったのだカレンの心の中に罪悪感が広がる

「え？何で謝るの？」

無理して笑顔を見繕う

皆がその笑顔の奥の悲しさに心を打たれる

「俺もごめん。俺さホテルジャックとかのテレビ見てて黒の騎士団をかつこいいとか言っちゃって。掲示板とかにも書き込みしたりして、とにかく無神経な事してごめん！」
リヴァルが頭を下げながら言う

「そんな事無いよ、実際にホテルジャックの時にゼロがいなければ私達も死んでた可能性もあったんだし」
そのリヴァルの慰めるシャーリー

「それにしたって卑怯だ！黒の騎士団は、ゼロのやり方は卑怯だ！自分で仕掛けるでもなく、只人の尻馬に乗って事態を掻き回しては審判者を気取って勝ち誇る。あれじゃあ何も変わらない間違ったやり方で得た結果なんて意味は無いのに」
スザクが殺意剥き出しで言う

（スザク、お前は……）
ライが心の中で思う

「考え方は千差万別、ゼロにはゼロの考えがあるんじゃないか？」
ゼブルがスザクを見ながら言う

「ゼブル、君はゼロの肩を持つのか？」
殺意の矛先をゼブルに変えそうな勢いで言う

「スザクもさ、その人の視線に立って見ないと見えない事情があるくらい解っているだろ？俺達だって今まで他人事のような話だったのに知り合いが、もしくは自分が犠牲者になって初めて気付くんだ」
ゼブルが静かに言う

急に世界が冷えたような、そんな感覚になる

「しっ、しかし！」
それに押されるスザクだが言い返そうとする

「はいはい、そこまでにしなさい。ここは病院よ？じゃあ、そろそろお暇しましょう。シャーリー……待ってるからね、いつもの生徒会室で」

「はい」
シャーリーが少し元気になったのか表情がほんの少し柔らかくなった

「ルルーシユ」
リヴァルが小声で言う

「リヴァル、行くぞ」
肩を掴みながらゼブルが言う

「どうしたんだよ？」
リヴァルが聞く

「2人つきりにさせてやれよ」
小声で言う

「……そうだな」
リヴァルが言う

その後、皆と別れたライとカレンがゲッターの廃墟のビルの中にいた

「ライ、私のせいなのかな？ シャーリーのお父さんにあんな目に遭わせたのは私のせいなのかな？ シャーリーをあんな悲しい顔にさせたのも私のせいなのかな？」
カレンが泣きながら密着しているライに聞く

「……」

ライはカレンを抱きしめながら無言で聞く

「私達正しいんだよね？私達のやり方で世界は変わるんだよね？」
カレンが少し体を離し上目遣いで聞く、その目からは涙が止まること無く流れる

「僕も同じ事を前ゼロに聞いた……変えられるってさ」
その視線を外し上を見ながら言う

「でも」

「ああ、犠牲が出る。兵士でないのに巻き込まれて死ぬ人が。だからこそ立ち止まる事が出来ない。例えどんな手段を使っても、卑怯と罵られようと勝つしかないんだ。その為には修羅になるべきだ、僕もカレンも、流した血を無駄にしないために更なる血を流さなくてはならないんだ」
カレンを見ながら言う。ライのその眼には決意に似た何かが映っている

「ライは強いんだね」

そんなライを見てカレンが言う

「でも、戻るなら今のうちだ。カレン」

「……私も進む。ライと一緒に」
涙が止まりカレンの目にも決意が生まれる

「そうか」

そう言いカレンの涙を指で拭き取る

「ごめんね、もう迷わないから」

その手に添えるようにカレンが握る

「仕方ないさ、僕だってショックを受けている……行こう、ゼロが待ってる」

「うん」

視点 変更

バイエリア

この後行なわれる作戦はナリタでの戦いで拠点を追われた日本開放戦線の片瀬が国外への脱出を計画しているという。キョウトを通じて黒の騎士団に援護の要請が出ていたのだが

「情報提供者、デイトハルトとか言ったな」
ゼロがデイトハルトに言う

「はい、お目にかかれて光栄です。ゼロ」
デイトハルトが言う

「コーネリアは海兵騎士団を投入し、解放戦線の片瀬少将の捕獲を目論んでいる……本当なのか？」

此处で言う海兵騎士団はポートマンの部隊の事だ

「はい、局では報道特番の中継に入っております」

このデイトハルトがコーネリア軍が動くと言う情報を黒の騎士団に提供したことにより作戦が大幅に変更された

「藤堂中佐は片瀬少将と合流できていない。つまり今の解放戦線に確たる武力は存在しない。逃亡資金である流体サクラナイトだけが頼り。なら我々はコーネリア隊を壊滅し、日本解放戦線の残存部隊を救出する」

「それでは」

デイトハルトが期待に満ちた眼差しでゼロを見る

「デイトハルト、君の入団を正式に認める」

ゼロが言う

「信じて良いのかよゼロ！ブリキ野郎の言う事だぞ！？」
玉城がゼロに反発する

「マックスが認める程の腕があるのなら黒の騎士団に有益だ。それ以上にマックスの推薦なら普通に入団されるよりずっと安心できる」
ゼロが玉城に言う

「あいつの何処に信憑性があるんだよ？」
玉城が言うと周りも無言で頷く。新米にいたっては誰だそれ？みたいな顔になっている

「マックスは今まで私の期待を裏切るような事を一度もしていない。それに今までだってブリタニア人の協力者はいた」
ゼロが言う

「（あのゼロがそんなに信用しているのか）」
ライが思う

「でもよ」
まだ駄々をこねるように言う

「もしデイトハルトに何かしらの問題があったならマックスに責任を問わせる……これでいいか？」
「仕方ないと言わんばかりにゼロが言う」

「ちっ！分かったよ」

「では、これより一時間後に作戦を開始する皆持ち場に付け！」
ゼロが大きい声で言い。言った後に何処かに言ってしまった

慌ただしく準備は開始される

ゼロの作戦はナイトメアごと高速船に乗込み、いつでも片瀬の乗るタンカーに接触出来る態勢を整えるというものだ

733

月下に乗り込もうとしたライと紅蓮に乗ろうとしているカレンの目が偶然合った

「カレン……頑張れよ」
ライが一言だけ言う

「ええ、貴方も頑張っ一緒に私達の進む道を切り開きましょう！」
その一言に笑顔になり紅蓮に乗り込む

「ああ」

眩くように言いライも月下に乗る

数十分後

戦闘が始まったようだ銃撃戦の音が聞こえる

「出撃！」

機体が入った小型の船を全速力で進める

ドツカアーン！！！！

「！？」

急な爆音に驚くが他の機体が邪魔で外の様子が分からない。その上
船は移動中で大きく船体が揺れている

「ライ、聞こえているか？」
扇から通信が入った

「ええ、一体何が？」
外の様子を聞くライ

「片瀬少々が積んでいたサクラダイトを使って自決したらしい」
軍人らしい最後だと付け加える

「作戦はどうなります？」

「ゼロはそのままコーネリアのいる本陣に突撃をかけるらしい。このまま続行で頼む」
扇がいい通信を切る

船が陸に上がりそのまま滑る
少しして船のハッチが開き

「パイロットが乗り込む前にナイトメアを海に叩き落せ！紅蓮式式は私について来い。他の者達は残存勢力を少しでも減らせ！」
ゼロが無頼を駆けながら言う

「了解」

ライの月下が近くのサザーランド3機に突進し至近距離での射撃を浴びせる

楽に撃破し次に装甲車に向かうライ

月下にとっては物の数ではなく数機を連続して撃破

「なに！」

レーダーに間近に迫った敵影が映っている、しかも2機

「サザーランドじゃない、グロースター！」

しかもマントを羽織っている。コーネリアの親衛隊だ

「ちっ！」

なんとか避け続けるがそれも時間の問題だ

「くう！この白兜が！」

ゼロの無頼もランスロットに一方的に押されている

「ゼロ！」

カレンの紅蓮はコーネリア機と交戦中で助けられない

「しまった！」

グロースター1機目の攻撃を避けたがバランスを崩してしまった。
そこに2機目がライの月下にランスを向け、突っ込んでくる

「ライ！避けて！！！」

それを見たカレンがライの名を叫ぶ

「（ここまでか！）」
と諦めかけた瞬間

月下に向かってくるグロースターのランスに何かが当たりランスが
壊れる

同じ瞬間にランスロットの目の前にも何かが刺さりランスロットは
止むを得ずゼロの乗る無頼から下がる

「何だ！？」

ランスロットに乗っていたスザクが驚く

「助かったのか？」
ゼロが呟く

「何だ？アレは」
ライが上を見るとそこには初めて見る緑色の機体がコンテナの上か
ら見下ろしていた

第三十話

本編 13

ゼブルとシャーリーと銃口

PART 2

ゼ

更新が遅くなってしまい申し訳ございませんでした

ツヴァイの部屋

皆と別れたゼブルはすぐツヴァイになったのである

「只今戻りました」

ツヴァイがドアを開け入る

「お帰りなさい、お父様」

ルクレティアが目を輝かせてツヴァイに抱きつく

「凄く綺麗になっていますね」

それを受け止め部屋を見回すツヴァイ

埃1つ、髪の毛1本も無いような。そこまで細かく注意をして掃除をした部屋である

「はい」

自信満々に言う

「やはりルクレティアに任せて正解でした」

頭を撫でながらツヴァイが心から思う

「えへへ」

嬉しそうに目を細めながら微笑む

「正解じゃないわよ！私達の送ったの聞いてなかったの？」

アリスが怒りながら言う

アリスが言っているのはツヴァイが全員に渡していた転送型の録音機の事である

「ああ、聞きそびれてました。それより、随分疲れていませんか？
見るとルクレティア以外の全員の目に隈ができています」

741

「当たり前じゃない！毎日寝る前に此処の掃除をさせるのよ？遅い
ときなんか寝るの午前4時よ！？疲れるに決まってるじゃない」
机をバシバシ叩きながら言う

「毎日頑張りました」

笑顔でルクレティアが言う

「……ルクレティア」

ツヴァイが困ったように言う

「はい」

元気良く返事をする

「俺の為にやってってくれるのは嬉しいですが、そのせいで他の人に迷惑をかけるのは嬉しくありません。分かりますね？」
ルクレティアに言う

「でも、その、私はお父様のために……」
オロオロしながら言う

「それにそんなに夜遅くまで頑張って掃除をしたら寝不足になります。寝不足は成長中の体と肌によくありませんよ？ルクレティアは可愛いのですしから大きくなったらもっと美人になります。それにとっても綺麗な肌をしているのに勿体無い。そして一番心配なのは君が頑張りすぎてそれが原因で病気にでもなったら俺は凄く悲しくなってしまうです。ですから程々にしましょう」
ツヴァイがルクレティアの頬を撫でながら言う

「お父様……はい！」
感激したように言う

「いい子ですね。さて、少し休んだらコーネリア様に挨拶をします」

頭を撫でソファアに座るツヴァイ

「お茶を淹れてきますね」

そう言い小走りで走っていくルクレティア

「ふう〜今の内に聞きますが他に何か困った事がありますか？」
他の3人に聞くツヴァイ

「パパ口ってが上手いね」

「女誑しですね」

「全くよね」

ダルクは笑顔で、サンチアは淡々と、アリスは少し軽蔑に近い視線で言う

「……急に何です」

視線の意図が分かっているツヴァイが聞く

「ルクレティアは別として。パパがコーネリア親衛隊のアイネって人を口説いてるって有名だよ？」

ダルクがニヤニヤとツヴァイを見ながら言う

「俺はそんなつもりは無いんですがね、俺にアイネ卿は勿体無いですし」

ツヴァイが首を振りながら言う

「そう？ラウンズで強いし、収入もいいし、優しいし」
アリスが聞く

「俺の優しさなんて紙のように薄いですよ」
ツヴァイが自虐的に言う

「例え薄くても私達みたく救われている人がいるのも事実です」
サンチアが言う

「そう言っていたら嬉しそうですね」
ツヴァイが苦笑した

視点 変更

総督室

大きく煌びやかな部屋でツヴァイの部屋と比べると値段と広さだけを見れば数倍以上もするであろう高級な部屋である

「失礼します」

ツヴァイが部屋の扉をゆっくり開け、入る

部屋にいるのはコーネリア1人だけだ

「ああ、来たか。待っていたぞ」

コーネリアは書類に通していた目をツヴァイに向ける

「……お話の前に、コーネリア様に1つだけ俺の未来予知である事が出ました」

人指し指を立てて言う

「ほう、何だ？」

コーネリアが興味津々で聞く

「遠くない未来に大きな絶望と悲しみを味わいます」
ツヴァイが言う

「そうか、しかし私はどんな事が起きても乗り越えてみせる」
笑いながらさも気にしないように言う

それを見て

「……そうですか、しかし心の片隅にでも留めて置いてください」

コーネリアを見つめながら言う

「ふむ、よかるう。それはいいとして次の任務は日本解放戦線の残存勢力の壊滅だ」

書類の束をツヴァイに投げる

それを取り見ながら

「これなら俺がいなくても出来ますよね？」
と言う

「何か用事でもあるのか？」

コーネリアがツヴァイに聞く

「別にそこまで大切でもないんですがちょっとやる事がありますね。それにこの程度なら俺は要らないでしょうから。あと特別工^{ファカル}作部隊も参加させないでください」
ツヴァイが言う

「何故だ？」

「俺がいるとき以外で戦場に出す気はありませんから」
ツヴァイが言う

自分の娘達が心配でしようがない過保護な親になっているツヴァイ

少し考えながら

「まあ、いいだろう。下がっていいぞ」と言うコーネリア

コーネリアもツヴァイの気持ちが少ないから分かるのである

その事を理解したツヴァイは

「イエス・ユア・ハインス」

頭を下げながら言い部屋を出て行った

視点 変更

ツヴァイの部屋

「さて、少し時間があるので一緒に食事にも行きましょうか」
ツヴァイが部屋でのんびりしている娘達に言う

「パパと一緒に？」

ダルクが不満大有りな顔で聞く

「何ですか？その嫌そうな顔は」
少し傷つく

「流石に有名なラウンズが少女4人を連れて食事なんて怪しい噂が流れるわよ？」
アリスも不満そうに言う

「俺はあまり気にしない方なので大丈夫です」
ツヴァイが首を振りながら言う

「ならいいけど、何処に行くの？」
ダルクが聞く

「俺の知人が経営しているお店です」
ツヴァイが言う

「お父様の知り合いですか？」
ルクレティアが驚いたように聞く

「ええ、俺の素顔を知る数少ない人のうちの一人です」
苦笑しながら言う

「本当ですか!?!」
サンチアが聞く

他の3人も驚いている

「ええ、では行きましょうか」
そう言い部屋を出て行くツヴァイ

視点 変更

料理屋 E M I Y A

「いらっしやませ」

セイバーが笑顔で言うが、少し見て気づいたのかオロオロしている

セイバーの他にもお客全員がツヴァイを見て驚く

「えっと、貴方は確か……」
セイバーがツヴァイに聞く

「ナイトオブツールのツヴァイ・ドウです。シロウさんはいらっしやいますか？」
名乗り終わると席に座る

シロウはツヴァイの正体がゼブルだと知っているが、セイバーには言っていないかったのだ

「はい、今調理のほうを」
セイバーが困ったように後ろを向くと

「私に何の用だね？」
セイバーの後ろからエプロン姿のシロウが来た

「紹介しますね。俺の娘達です」
ツヴァイが娘達をシロウに見せる

「ダルクです」
「ルクレティアです」
「アリスです」
「サンチアです」

全員頭を下げ挨拶をする

「驚いたな、あの子との子共か？俺によく言うからもしかしたらと思っていたが、いつ生んだんだ？しかも4つ子なのか？」
シロウが早口に聞いてくる

周りのざわめきも大きくなる

そしてあの子とのに反応した娘達
全員アイネを思い浮かべているのだが実際はガーベスである

特に

（ルクレティア、君は何でそんなに恐ろしい目つきをしているのですか？）

鋭い視線に少し体が震る

「落ち着きましょう。俺はツヴァイですよ？普通に考えたら養子ですよね？それにもしそうだとしたら、彼女は何歳で子供を生んでいるんですか？」

彼女彼女と言った時にルクレティアが反応する

サンチアが驚きを隠せない顔でルクレティアを見続け

「（ここまで揺れているルクレティアを見るのは初めてだな）」
と思っ

「……なるほど、取り乱してすまなかった」
呼吸が少し荒くなっているシロウ

「いいですよ。さて、では注文をしましょうか」

この後、他のお客さんと共に和気藹々な雰囲気です。食事をし、翌日の
ニュースでその事が取り上げられ店に客が増え売れ行きが大幅に上
がったのはまた別のお話

視点 変更

ベイエリア

大きな爆発の10秒後

「さて、爆発も見たし始めるか」
そう言い近くのコンテナの中に入るゼブル

「無限次元空間製作発動」
インフィニットソリッドメイクス

ゲート開通、異常なし

対象の移動開始

対象の到着まで後1分

対象の移動が完了しました

「しかし大きいのはやっぱり遅いな、でも無限の剣製から直接全部出したらもつと遅いし疲労で死ぬんだろうな。そう考えるとありがたいか」
アンリミテッドブレイドワークス
そう呟き出て来た物を見る

少し濃い若葉のような優しい緑色を主色にし、騎士のような優雅な風貌、ランスロットをモデルにしたので形もそれに似た物になってしまった

武装はスラッシュハーケンのみだが量が違う
普通のナイトメアと同じ胸部に加え、手の甲、足の甲、両肩、両腰、両外前腕の計12個スラッシュハーケンがある

そのスラッシュハーケンもランスロットのを参考にし強化型スラッシュハーケンで、ゼブルも一度使った事のあるスラッシュハーケンを手刀型にするメッサーモードと言うシステムも投入した

大きさにも違いがあり、手と足のスラッシュハーケン（小型で、両肩と両外前腕は中型に、腰と胸部のスラッシュハーケンは大型（普通サイズ）と、それぞれの役割に合った大きさになっている

機能等は他のナイトメアと同じにしてあるので修理等はその担当の人に任せられる

「初戦場だな。テストでは上手くいったし大丈夫だろう」
翠竜に乗り込み動作の確認をする

「よし準備万端……翠竜発進する！」
そう言うランドスピナーが回転し速い速度で走り始める

「異常なし。後はスラッシュハーケンだけか」
地面に腰のスラッシュハーケンを垂直に放ち確認する

地面のコンクリートに刺さり翠竜の体が持ち上がり数秒間浮き

近くのコンテナに着地し異常が無いのを確認する

「問題ない。さて……ん？」
見るとゼロが乗っているであろう無頼はランスロットに、ライが乗っているであろう月下は親衛隊のグロースターに、それぞれ狙われていて危機に瀕していた

それを見て

「やばいな、助けるか」

そう言い両腕のスラッシュハーケンを放つ

放たれたスラッシュハーケンはグロースターのランスとランスロットの目の前に刺さり。グロースターのランスを壊し、ランスロットを下がらせる

そして視線が一斉に向けられる

「えっと……あ、何で通信機取り付けなかったんだろ。まあ、助けたんだから大丈夫でしょ」

そう言い翠竜をコンテナの上から月下を狙っていたグロースター2機の目の前に飛び移る

「ランスロットはカレンちゃんに任せて新鋭隊の2人は俺がやるか」
肩のスラッシュハーケンをグロースターに向け放つ

「ぐあっ！」

親衛隊のグロースター2機を戦闘不能にさせる

「何？あのナイトメア」

カレンが翠竜を見ながら言う

「我が軍を狙っているのか？」

コーネリアが倒された2機のグロースターを見ながら言う

「つまり黒の騎士団の味方」

スザクが呟く

「ちっ、赤いヤツだけでも厄介なのに」

コーネリアが苛立ちげに言う

「僕を助けてくれた？」

「何だコイツは？」

ライとゼロは助けてくれた機体を見ながら言う

「しかしゼロだけでも！」

ランスロットがゼロの乗る無頼にMVSで斬りつける

「何！？ぐあああ！」

コックピットの脱出装置が自動的に作動するが、作動したときの体勢が悪かったのか地面に激突しながら進む

「ゼロ、これも1つの結果だ」

煙を上げている無頼のコックピットを見ながらスザクが言う

「ランスロット、後ろだ！」

コーネリアがスザクに言う

「ゼロは私が守る！ライはコーネリアを」

紅蓮の輻射波動を放ちながらランスロットに向かうカレン

「分かった」

ライはそう言いコーネリア機に向かう

それぞれの戦いを繰り広げている

「こっちはグロースターが増えて3対1か。親衛隊って何人いるんだろう？まあこの翠竜なら関係無いし、一機ずつ確実に落としますか」

実際は後ろにサザerlandもいるのだが気にしないように言うゼブル

「答える貴様は何者だ？」

真ん中のグロースターから拡声器で聞いてくる

「ん？アイネちゃんか？うん、どうしよつかな」

ゼブルが頭を掻きながら言う

通信機が無く拡声器も無いので話せないのである

「おい！僕の話の話を聞いているのか！？」
少し怒りを混ぜて言う

「聞いているけど答えられないんだよね。仕方無い」
そう言い一番近くのサザーランドにスラッシュハーケンを放つ

「やはり敵か！」
やっと気づいたアイネが他のグロースターと共に槍を向けて突進してくる

「やっと気づいたか。なら、ロックオン開始……完了。フルオープン！」
ボタンを押すと3機のグロースターに向けられていたスラッシュハーケンが一斉に襲い掛かる

「何！？」

3機とも驚いて避けようとするが後の祭り

「ぐわあっ！副隊長、離脱します」

「こちらにも離脱します」

アイネ以外の2機が戦闘不能になった。アイネも全ては避けきれず左足を貫けられており移動が出来なくなってしまった

「残りはアイネちゃんだけだけど、脚が動かないなら別に攻撃しなくていいよね」

倒れているグロースターを見て言う

「何だこの性能の差は？」

槍で立とうとするのが上手くいかない

周りを見ていたゼブルだが黒煙の中で戦っていた紅蓮とライがが後退しているのに気づき

「ん？撤退か？」

後を追いかける

「待て！」

アイネが叫ぶ

「待てと言われて待つ気は無いよ」
それを無視して追いかける

少し進むと

「ん？あれは」

道端に銃弾を受けて倒れている軍人のヴィレッタがいた

（何であんな所にいるんだ？原作だとテトラポッドだけ？コンクリートの塊の中にいたはずだけど）
などと考えたが

「まあ、キチンと置けばいいかな」

答えが分からずヴィレッタをテトラポットのある場所に見えるようにして置いておいた

「これでいいな。さて、追いつかなくなっちゃな」
そう言い翠竜で駆けるマックスであった

第三十話

本編13

ゼブルとシャーリーと銃口

PART2

ゼ

三十話目ですが、最初に比べて随分書きかたが変わったなとしみじみ思いました

後何話続くのでしょうか？

まあ、楽しく書いていきたいと思います

第三十一話

本編14

ゼブルとギアス

対 ギアス

ゼブル視点

(前書き)

遅くなって申し訳ございませんでした

原作とナイトメア・オブ・ナナリーと己の妄想を足した話になって
しまいました

絶対1度は混乱すると自信を持って言える作品です

気をつけて下さい

誤字脱字の報告お願いします

第三十一話 本編14 ゼブルとギアス 対 ギアス ゼブル視点

黒の騎士団ベイエリア内の秘密ナイトメア収納スペース

紅蓮達の後を追いアジトに着く

「到着。包帯巻かないと」
ゼブルがマックスに変装する

「お前は一体何者だ？」
紅蓮の中からカレンが聞く

カレンに紅蓮とライの月下が翠竜を挟んで構えている

他のメンバーも銃を構え翠竜を見つめる

「おいおい、随分と酷い歓迎じゃねーか」
コックピットが開き中からマックスが出てくる

「マックス!？」
玉城が驚いたように言う

他のメンバーも驚いている

紅蓮と月下も構えを解く

「これが話していた俺専用のナイトメアフレーム翠竜だ」
翠竜から降りながらマックスが近くにいる扇に言う

「さつきはありがとう、お陰で助かった」
月下から降りてきたライが言う

「気にすんな」

「ちょっといいかしら？」
ラクシャータがマックスに近づきながら聞く

「ん？何だ？」

「この機体、私も弄って良いのよね？」
新しい玩具でも見るかのように翠竜を見る

「別に構わなねーよ。通信機が付いてないから付けといてくれ。俺は少し急ぎの用があるからもう帰らせてもらっわ」
マックスは面倒くさそうに言う

「随分急いでいるな？どんな用事だ？」
扇が聞く

「内緒だ。オマエ等が気にする必要は無い。扇、旦那にはオマエから伝えてくれ」
マックス言う

「ああ、分かった」
頷きながら答える

「じゃあな」
そう言い早歩きで何処かに行ってしまった

視点 変更

ナリタ慰霊碑より510メートル離れた場所

慰霊碑が見える茂みに隠れている

【まだ来てないのか？】
ゼブルが聞く

【多分来てないと思うよ】
目をつぶっているピースが言う

【しかし便利なギアスだな。マオのギアスも流石に動物の思考には適用されないだろうからな】
1人で感心するゼブル

【！ 女の子が来たと思うよ？】
ピースが反応し聞く

【制服は着てるか？】

【着てないと思うし左目に眼帯を付けてると思う】
ピースがゼブルに言う

【確かにマオだな。それもザ・リフレインの方が
そう言い少し考える

【どうすると思ってる？】

【ハイドに代わって後はさっき言った通りに頼む】

【分かったと思うよ。スタイルチェンジ・ハイド】

【さっそく、ぎあすはつどつ】

ハイドはポーズを取りながらギアスを発動し歩きだす

【分かってると思うが捕まえたら即無限次元空間製作のボックス2インフィニットソリッドメイクスに入れるよ?】

【あれ?3じゃなかったっけ?】

【……28回目の説明をするぞ?1がもしもの時に必要な食料や備品が入っていて、2が人を入れるように改善した空間、3が無限アンリミテッドの剣製で出した武器を入れる武器入れ、4が念の為に作っておいてる大きな空間だ】
呆れたようにハイドに説明をする

【なるほど】

【だから2だぞ】

【わかった……もうすぐはんけい5000めーとるだよ】
止まり簡単なストレッチを始める

【一瞬で近づき気絶させボックス2に入れてくれ。あとは俺が全てやるから】

【りょうかい いちについて、よーい・どん!】
クラウチングスタートの構えから一気に走り出す

凄いスピードで少女に近づく

「！何か来る　そこか！　いない!?」
眼帯をしている少女（以降マオ）が何かに反応したらしく振り向く
が其処には何も見えない

「ごめんね」

ハイドがそう言い

みぞおちを殴る

「ぐはあ！」

マオは呼吸が上手く出来ずそのまま気絶する

「さてと、はこぼうかな」

マオを担ぐハイド

【……何で首にしなかったんだ？首のほう痛みは少ないだろ？】
ゼブルがハイドに聞く

「だって、おれっちはちからのちょうせつがへただからしんじやう
かもしれないでしょ？……じゃあ、いどうかいしー！」

渦のようなものに吸い込まれと思ったたら一瞬で小さな部屋に着いた
これはゼブルが作った空間の1つで、その生活用の空間も幾つか存
在し、今いるのは接客用のスペースである

他にはアパート風や高級マンション風、部室風等と様々な部屋を作

っている

「（……みぞおちでも下手すれば死ぬんだけどな）」
と思うゼブル

「ふー、よいしょっと。すたいるちえんじ・ぜぶる」
近くにあるソファーにマオを置きゼブルに変わる

「さて、始めるかな……ギアス発動、どんな事があっても俺をギアスの対象に出来なくなる」
マオにギアスをかける

（VVとの実験では上手くいったけど、さてどうなるかな）
仮面を付けツヴァイになりながら思う

意識が無い相手へのギアス、上手くいく保障あるが絶対では無い。
しかし失敗してもゼブルには他にも策があるので大丈夫である

数分すると

「ん……んん」

体を動かしながら薄く目を開けた

「起きましたか？」

それをみたツヴァイが聞く

「はっ！ここは？あなたは何者だ？」
周りを見ながらツヴァイに聞く

「ここは秘密の空間で、俺はツヴァイ・ドウと言います」
マオが寝ていた向かい側の椅子に腰掛けているツヴァイが答える

「 確か新任のナイトオブブラウンスとか言う」
ツヴァイをジロジロ見ながら言う

「ええ、その通りです。さて、俺は君に質問をしたいのですが
ccを探しに来たのですか？」
ツヴァイが聞く

「！ 何故その事を！？………え？僕のギアスが効かない？」
思考を探ろうとしたがギアスがツヴァイに反応して無いような感覚
になる

「（効いてたみたいだね）君のギアスは俺には効きません。素直に
質問に答えてくださいね」
少し安心したツヴァイがマオに聞く

「……そうだよ。ccを探してたの」
諦めた様に言う

「何故？」

「ギアスの暴走を止める方法が知りたいからね」
そう言い左目の眼帯を外しギアスの刻印を見せる

「それだけですか？」
ツヴァイが驚いたように聞く

「他に何かあるかな？」
再び眼帯をつけるマオ

「……（ccに未練は無いのか？）ギアスの暴走はccでも止めることは出来ません。しかし俺ならできるかもしれないんですがどうします？」
マオに聞く

「！ それは本当！？」
マオが興奮して立ち上がる

「ええ、しかしその為には幾つか俺の言うことを聞いてもらいます」

ツヴァイが言う

「暴走が治まるのなら何でもする。だから！」
必死でツヴァイに懇願するマオ

「分かりました。では、まず説明をします。俺が出来るのは君のギアスの暴走を無くすのではなく、自分の意思以外でのギアスの効果を無かった事にします。簡単に言えば暴走前の状態になりますね。しかしギアスは極力使わないで下さい。あまり使わなければ暴走が自然に治まるかもしれませんし、2度目は自信が無いので。あとさっき言いましたように俺の言うことを聞いてもらいます」
ツヴァイが長つたらしく説明をする

「今更けだけど何をすれば」
少し不安げな顔になるマオ

「君は俺の娘になってもらいます」
ツヴァイが口元を歪めて言う

「え？娘？僕が？」
混乱したようにマオが聞く

「ええ、君は俺の娘になって今まで出来なかった学業に励んで貰います。一応軍属ですが、まあ、大丈夫でしょう」

頷きながら話すツヴァイ

「それだけ？（暴走が無くなるし、憧れの勉強も出来るのは嬉しいけど何で僕なんかを？）」「マオが聞く

少し考え

「まあ、他にはcccやゼロに関しては誰にも秘密にしてもらおうべらいですね」「と言う

「何故僕がゼロの秘密を知っていると？」「再び驚いたようにマオがツヴァイに聞く

「秘密です」

「でもどうやって暴走を？」「マオが聞く

「俺のギアスを使います」

ツヴァイが仮面を取りマオにギアスの紋章を見せる

「やっぱり貴方もギアス能力者」

マオが驚きながら言う

「ええ、それに俺の娘達の中にもギアス能力者がいます……あつ、俺がギアスを持っている事は忘れさせませんので秘密にしてください」

ツヴァイが言う

「達？と言うことは他にも気づいた様に聞く」

「ええ、君と同じで何かしらの能力を持っている子達です」

「その中に僕を入れるの？」
マオが疑りの目で見ると

「はい。それで俺の話に乗りますか？」
ツヴァイが聞く

「……乗るよ」
覚悟を決めた目で言う

「了解しました。では、さっそくですが始めましょう。俺の顔はゼ口の情報と共に記憶から消させていただきます」

ツヴァイが言う

「分かったわ」

「では、始めましょう」

ツヴァイが立ち上がり瞳にギアスの紋章が浮かぶ

視点 変更

ブリタニア軍基地の近く

人気の少ない場所に2人はいた

「新しい自分の感想はどうですか？」
ツヴァイがマオに聞く

「最高ね、こんな静かな世界は久しぶり」
マオが心から嬉しそうに涙を流す

今まで止む事無く入り続けてきた苦痛が今は一切聞こえない

「なら、良かったです」

そんなマオの頭を撫でながらツヴァイが言う

「で、僕はこれからどうすればいいの？」

上目遣いでマオが聞く

「君の戸籍を確保したらずぐに学校に入り授業を受けて貰います。今は少しでも姉妹と仲良くしてください」

マオを見ながらツヴァイが言う

「では、あそこに向かってください。門に軍人がいる筈なので、この手紙を見せれば通してくれる筈です」

ツヴァイがマオに手紙を渡す

「じゃあ後でね、ダディ」

マオはその手紙を受け取りツヴァイに手を振る

「ええ、では」

ツヴァイはマオの後姿を少し見ると渦の中に消えていった

視点 変更

ナリタにある廃墟

ルルーシュにシャーリーが銃口を向けている

理由を簡単に説明すると

ナリタの事件でシャーリーがゼロに殺意を抱く ヴィレッタにルルーシュとゼロの関係を唆された 潔白を証明する為にルルーシュを尾行 ベイエリアでの戦闘に巻き込まれる ランスロットにボロボロにされていたコックピットに近づく 気絶しているゼロが乗っていることに気づく 近くにあったゼロが落としたであろう銃を拾いゼロに向ける ゼロの仮面が取れルルーシュがゼロだと分かる そこに現れたヴィレッタがルルーシュを連れて行くこととする 銃をヴィレッタに向け撃つ シャーリーはその場から銃を持ったまま逃げる その場から何とか逃げだしたヴィレッタはゼブルに拾われ、テトラポットにキチンと置かれる その数時間後シャーリーがルルーシュをナリタに呼ぶ その頃マオはツヴァイと話しているのでいい ツヴァイとマオの話が終わりに、マオを軍まで送った後ゼブルの姿に戻り、マオを探しているときに置いておいた指輪の力で一瞬でナリタに付く 人気の無いケーブルカーの駅にシャーリーがルルーシュを誘い込む それをゼブルが見つける 現在に至る

(結局こうなったか)
隠れてみているゼブルが思う

本来ならマオ(男)がシャーリーを言葉巧みに操るのだが、世界の修復作用なのか結果的に同じになってしまった

近くで同じ事をしている大きな男に気づき

「何を見ているんですか？」

と、声をかける

「ん？学生の少女が少年に拳銃を向けているラブストーリーかのかの？」
男は笑いながらもジツと見続けている

その男は顎髭がよく似合う大男で、身長はゼブルより十数以上センチ大きく体格もいい。髪の色漆黒で服装は作業着である

「趣味が悪いですね」
ゼブルが男に言う

「お互い様じゃろ？」
男が悪びれもせずと言う

「それもそうですね……俺の名前はゼブルと言います。貴方の名前は？」

ゼブルが名前を聞く

「我輩の名前はssと言っ」

視線をゼブルに向け、男（以降ss）が言っ

「！（大きな男、特徴的な名前、もしかしたら）……ルクレティアとアリス。この名前に聞き覚えはありますか？」
ゼブルが聞く

「……我輩がギアスを与えた者達だの。もしやお主もギアスに関わる者か？」
探るように言っ

「ええ、では貴方はコードの保持者ですか？」
ゼブルも隠さずに答え、そして聞く

「その通りだ。ついでにssは偽名での。本名を特別に教えてやるう。我輩は神聖ブリタニア帝国初代皇帝リカルド・ヴァン・ブリタニア1世である！」
自分から秘密をベラベラ喋っていく元皇帝陛下

声が大きくてルルーシュ達にバレるかと思ったが聞こえていないよ
うだ

「……（隠し事をしない人なのかな？）コードは誰から継承したんですか？」
ゼブルがssに聞く

「名は知らんが、田舎の小さい協会でシスターをやっていた女性からじゃ」
思い出すように目を上に上げて言う

「その女性からギアスを貰いギアスが増大した貴方にコードを押し付けた」
ssが全部を言い終わる前にゼブルが言う

「ほう、何故分かった？」
少し驚いたように言う

「しかし、いいんですか？俺なんかペラペラ喋って（しかしどう言うことだ？もしそれが本当の事だとしたらccは誰からコードを継承してんだ？）」
ゼブルがため息を吐きながら言う

「細かいことは気にするな」
ssが頭を掻きながら言う

「貴方のギアスを与える基準はなんですか？何故あの子達にギアスを？」

「我輩は力を欲する心強き弱者にしかギアスを与えない。それも自分の為でなく他の者の為に力を欲する者にしかの」

SSが笑顔で言う

「悪用を防ぐためにですか？」

ゼブルが聞く

「ああ、しかし暴走や己の欲望などで道を踏み外したならば我輩自ら殺す事になっている」

さつきとは違い真剣な顔でゼブルに言う

「なるほど、では何故彼女達に？」

「アリスは車椅子の生活をしている妹と共に戦場から速く抜け出す為に、ルクレティアは戦場から孤児院の皆と安全に逃げる為にそれぞれ力を欲した。だから与えた」

（アリスのスピードとルクレティアの地理解析能力はその為か。しかしアリスの妹はどうなったんだ？アリスのことなら妹の側にいるはずだが……そうか、護れなかったのか）

「話は変わりますが、不老不死の貴方はどんな生活をしているんですか？」

暗い気持ちを变えるためにゼブルがssに聞く

「普通にバイトをして金を稼いでまた違う所でバイトをして金を稼ぐの繰り返しだ。時代に乗り遅れない為に勉強もしているのだぞ？」

ssが自慢げに言う

「貴方は不老不死を止めたいとは思わないんですか？」
ゼブルが聞く

「我輩は不老不死の運命を正面から受け入れた。そして世界の動きを見守る事が我輩の使命だと思った。それに後悔も無い。正確にはあったと言ったほうがいいのかの、後悔はとうの昔にし尽くした」
少し悲しげな表情で言う

「……俺の仲間になりませんか？貴方の事を他のコード保持者に知られるのは危険だ」

vvなら研究に使う可能性もある

「ああ、子供にギアスを与え実験を繰り返している組織があると聞くな。しかし我輩は縛られるのは嫌いだ」

ssが不愉快そうに言う

やはりVVの事だろう

「貴方を縛る気はありませんよ。俺の目的は世界中にいる能力者の情報と必要ならば保護をすることなので、フラフラしてくれたほうがいいです」
ゼブルが首を振りながら言う

「なるほど、我輩を泳がしておいて自分はこのうのと情報を仕入れようと言う魂胆か」
ニヤリとゼブルを見る

「ええ、しかし貴方にも得があります。しかし此処では話すのはどうかと思うので移動しませんか？アリス達にも会いたいですよう？」

「しかし、あの2人はどうするのだ？」
SSがルルーシュ達を見ながら言う

結局と言うかやはりと言うか、シャーリーはルルーシュを撃てずに崩れるように地面に座り込み泣いている。それを優しく抱いているルルーシュ

「……彼らなら心配ないですよ」

ゼブルが言う

「（明日から他人ごっこかな？）
等と思う

「そうか」

ssがジッと見ながら言う

「では行きましょうか」

そう言いゼブルとssは歩き出した

視点 変更

ブリタニア軍基地内部

「しかし、お主があ有名なツヴァイ・ドウだとはな。不可能と言われてきた任務を遂行できたのはそれが理由か？」
ssがツヴァイを見ながら聞く

「ええ、その通りです」

「アリスやルクレティア達も兵士として使っているのか？」
SSが厳しい目で聞く

「彼女達は確かに俺の直属の部下ですが戦場には極力出さないようにしています。それに今は学業に専念させてあげないといけませんしね」

ツヴァイが言う

「それにしても、なんで我輩の顔を隠すのだ？」
バイクのヘルメットを被っているSS

ヘルメットのサイズが小さいので不便そうだ

「面倒事は困りますからね……只今戻りました」
ドアを開けて部屋に入るツヴァイとSS

「お帰りなさい、父上」
「お帰りダディ」

机で何かをしているサンチアとマオが入ってきたツヴァイに言う

辺りを見回し他には誰もいない事が分かると

「他の皆はどうしたんですか？」

と聞く

「夕食の買物に行きました。その間私はマオに少し文字の読み方を教えているんです」

そう言うとノートに書かれた単語を見せる

ちなみに内容は小学生レベル

「やっぱり難しいね」

それを頭を抱えながら必死で覚えようとするマオ

「俺はこれから応接室でお客さんとお話をするので静かにしてくださいね。それと俺に用がある時はノックをしてから入って来てください」

後ろでssが何か思ったようにマオを見ている

「分かりました」

「頼みましたよサンチア。マオも頑張ってくださいね。では行きましょうか」

サンチアの頭を軽く撫で、ssを連れて奥の部屋に入る

「どうしたの？」

マオが少し俯いているサンチアに聞く

少し顔を赤く染めながら

「撫でられるのも良いものだなと思ってな」
と小声で言う

ツヴァイの部屋の応接室

秀囲気的には小さめの社長室と言った感じに仕上がっており
掃除もキチンとされていた

「あの子達もか？」

SSが椅子に座りながらツヴァイに聞く

「ええ、髪の毛の短い子がマオと言いましたね、ギアスが暴走をしているのですが俺のギアスで何とか押さえつけている状態です。もう1人の髪の毛の長い子がサンチア、彼女はギアスとはまた別で生まれた時から持ちあわせているらしいです。実際に力を使うとき目にギアスの紋章が見えないので信じています」

ツヴァイも向かい側に座る

「暴走を押さえつけているだど？そんな事が出来るのか？」

SSが驚いたように聞く

SS達コードの保持者でも出来ないことなのである

「ええ、俺のギアスはパーソナリティーを自分好みに書き換える力
でしてね。それを応用した結果とマオのギアスの特性のお陰で暴走
を抑えることが出来たんです」

「その特性とは？」

SSが鼻息を荒くして聞く

「マオのギアスは人の思考を読み取る力です。マオの場合は特定の
有効範囲にいる全ての人間の思考が流れ込んでくるので暴走した時
はさぞかし苦しかったでしょうね」

頭の中に人の暗い部分だけが強制的に入ってくるので夜も満足に眠
る事も出来ないかったに違いない。

マオにとって毎日が生き地獄だっただろう

「その特性がどう関係してくるのだ？」

SSが不思議そうに聞く

「マオのギアスは暴走中でも他の人を困らせないのが救いでした。なので俺のギアスを使い強制的に入ってくる思考を感じさせなくしました」

「お主のギアスはそんな事が出来るのか？」
驚きながら聞く

「俺のギアスは考え方も変える事が出来るんですよ。で、俺がマオに植えつけたギアスの内容は、暴走時のギアスで流れ込んでくる思考を読み取れなくなれ。つです。お陰で今も暴走状態ではありませんが前と同じ通りギアスは使えます。まあ、強めに脅したんで緊急時以外は使おうとは思わないでしょう」

2回目は自信が無いのは事実なのでやはり乱用は避けて欲しい

「では、感覚を無くしたり五感の一部を使えなくする事も出来るのか？」
目を丸くして聞く

「ええ、多重人格を作ったりも出来ますし、逆に心の病気等で聞こえなくなったり聴覚を元に戻すことも出来ます。脳の考え方を変える事でこのような事が出来るんです」
ツヴァイが自慢げに言う

「お主の能力は随分と興味深いの」
しみじみと感心するss

「では、此処からは取引の話です。俺の直属の部下になってもらいます。そうすれば貴方は世界を旅して回る為に必要なお金とラウンズである俺の部下としてブリタニア国の傘下の国には無償で移動できるようになります。そして俺は貴方から情報を頂く……どうでしょう?」

「ずっと気になっておったんだが、何故そこまでして能力者を集める?」
探るような目でツヴァイを見る

「……俺はある人達を探してしましてね、その人達を見つけるためですよ」

「何故そのようなことを?」

「ある人からの頼みでしてね、能力を貰う代わりに帰りたいのに帰れない人達を帰らせると言うものでしてね、その人達は何かしらの能力を持つ確率が高いので能力者を集めているんです。まあ、中には帰らずに今の生活に幸せを見出せている人もいますがね」

ガ―ベスやチャン達である

「あの子達もそうなのか？」

ドアのほつを見ながらssが聞く

「彼女達は違いますね、もっと……なんて言うんですかね？異質？
な能力を持つ人達です」
自信が無いように言う

「異質？」

聞き返すss

「ええ、ある人は何も無いところから武器を無限に出したり、ある
人は子供のような外見をした1313歳の魔王だったり、色々いま
すね」

思い出すように言うツヴァイ

1人はシロウでもう1人は……

「ほつ、それは興味深いの」

顎の髭を撫でながら言う

「では、話は終わりで返事を聞かせてもらいましょうか」

ツヴァイがssをジツと見る

「イエスだ。お主を信じよう」
あつさりと自信満々に言う

「……そうですか、では、えっと 確か此処に……ありました。では、この書類にサインをお願いします」
引き出しから書類を捜しssにペンと共に置く

「ssでいいかの？」
ssがツヴァイに聞く

「それでは色々と心配なので……ソーシャル・ソサエティーでどうでしょう？」
かつこ良さだけで考えた結果
社会の社会と言う意味不明な名前が出来た

しかし
「ほう、中々良いセンスじゃのう。構わんぞ」
ssは気に入ったようだ

「これでいいか？」
書類をツヴァイに渡す

「はい、確かに。これで貴方は俺の部隊の隊員です。寝泊りは此処で済みますか？」

ツヴァイが封筒に書類を入れながら聞く

「いや、公園に寝るところがある、そっちの方が落ち着くのだ」
そう言い立ち上がる

因みにベンチである

それを理解し

「元皇帝とは思えませんね。それと分かっているとは思いますが俺の秘密は秘密にして下さいね」
ツヴァイも立ち上がる

「心配するな」

そう言いssがヘルメットを被り扉を開ける

アリス達が買い物から帰ってきていたらしくサンチアとルクレティアは調理で、アリスとダルクはマオの勉強を見ているがダルクもよく分かって無いらしいのでアリスが2人の勉強を見ている

「（子供は仲良くなるのが早いね）」
等と年寄りみたいに考えるツヴァイ

「あ！話は終わったの？」

ダルクがツヴァイ達に気づき声をかける

他の皆もツヴァイ達に近づくと

「ええ、お見送りに行ってきますね」

「早く帰ってきなさいよ」

「直ぐに戻ってきますよね？夕食の準備も出来ているんですよ」
アリスとルクレティアが言う

それを見たssが

「ふむ、大きくなったの」

咳くように言う

それが聞こえたルクレティアが

「何か言いましたか？」

と聞く

「何でも無い」

SSは首を横に振りながら言う

「? そうですか」

ルクレティアが不思議そうに言う

「行きましようか」

ツヴァイがSSに言う

「ああ」

そう言い2人は部屋から出て行った

2人が部屋を出て数分後

「どうしたの2人とも?」

何かを考えているアリスとルクレティアにダルクが聞く

「あのデカイの何処かで見たことがあるのよね」

「私も少し懐かしさを感じますね」

2人とも必死で考えるが結局分からなかった

「マオ、あんた思考が読めるんでしょ？後でお父さんの中覗いて見
てみてよ」

アリスが気づいたようにマオに言う

「残念ながら、ダディに僕のギアスは効かないの。その上僕はギア
スを乱用するわけにはいかないんだ

よ

ため息を吐きながら言う

ツヴァイから貰った特殊なコンタクトレンズでギアスの紋章は見え
なくなっているが、まだギアスの暴走自体は続いている。ツヴァイ
はギアスを使わなければその内治まると言っていたのでそれを信じ
使わないようにしているのだ

「何で？」

アリスが不思議そうに聞く

「……ギアスの暴走を体験すればそんな事聞けなくなるよ」
怒り交じりに言う

「え？そんなに辛いの？」
アリスが恐る恐る聞く

「地獄だったね、人の醜い部分だけが強制的に僕の頭に流れ込んでくるんだよ。止まる事無くな」
マオが思い出したくないように首を振りながら言う

「ですから、君達も乱用は避けて下さいね」
いきなり後ろからツヴァイがアリスとルクレティアの肩に手を乗せる

「いつの間に!?!」
驚いたアリスがその手をはらう

「お帰りなさいお父様」
ルクレティアはうつとりとその手に頬擦りする

「さて、では皆ももう挨拶は済んだかと思えますが新しく特別ファカルテ工
作部イス隊に入ることになりますマオです。皆さん仲良くしてあげてくだ
さいね」
ツヴァイがマオの側に寄り新入生を紹介するように言う

「そんなことよりさっきの人は誰です？」
サンチアが聞く

皆の視線がツヴァイに向けられる

「ファカルティーズ特別工作部隊に新しく入った人です。しかし彼には情報収集を担当していただくので実際に会う機会はあまり無いでしょうね」
ツヴァイが封筒を見せながら言う

「へー、あたし達と同じなの？」
ダルクが面白そうに聞く

「ええ。それから言い忘れていましたが、明日から数日間、下手したら数週間は用がありますので君達に会う事が出来ません。君達には俺がない間、任務は与えないようお願いしてありますので、この時間は勉強に専念してください」

「用って何ですか？そんなに時間のかかるものなんですか？」
ルクレティアがオロオロしながら聞く

「仕事ですよ。さて、俺は今から書類をコーネリア殿下に出したらそのまま出掛けます。ルクレティアとサンチア、後は君達に任せますね。食事をしたらすぐ寝るんですよ」

「前から思っていました、父上はいつも何処で寝泊りをしている

んですか？此処は使っていませんし」
サンチアが思い出したように聞く

この部屋には凄く大きなベッド1つでサンチア達皆はここで一緒に寝ているのである

「秘密です。では、行ってきますね。喧嘩せず仲良くしてくださいね」
「ね」
そう言い部屋から出て行くツヴァイであった

視点 変更

総督室

「失礼します」
入るとコーネリアの他にギルフォードがいた

「ドウ卿か」
部屋に入ってきたツヴァイにギルフォードが言う

「ギルフォード卿、俺のことは呼び捨てで良いですよ」
ツヴァイがギルフォードに言う

「いや、階級的には君が上なのだからキチンと言わなければなるまい」
真面目なギルフォードらしい考えだ

「他の兵士がいる場合はそうですが俺達だけなら別にいいのではないだろうか？それと、コーネリア皇女殿下。新しく俺の直屬部隊に入った人達の誓約書です」
封筒をコーネリアの前に置く

「……また、年端もいかぬ女子か？」
それを取り訝しげにツヴァイを見る

「（もしかしたら俺ってロリコンだと思われてるのか？まあ、仕方ないけど）半分正解ですね。2人の内1人はそうですがもう1人は男性です」

ツヴァイが気まずそうに言う

「ほう？男を入れるとは一体どう言う風の吹き回しだ？」
コーネリアがからかいの目でツヴァイを見る

「それより任務のほうの説明を……」
ツヴァイが話を逸らす

「（上手く逸らしたな）ああ、本国からお前宛の特別任務だ。中華連邦がエリア10を狙っている、その上エリア10の反ブリタニア勢力が中華連邦に協力しているらしい。お前の任務は敵勢力の壊滅だ」

コーネリアが書類をツヴァイに渡す

「了解しました。出発はいつですか？」
書類に軽く目を通しながら聞く

「少し急いでいてな、明日の朝早くに出てもらうぞ」
他の書類を見ながらコーネリアが言う

「分かりました。では、グロースター1機と小型の爆弾を多めに用意してください。それから娘達には秘密にしてくださいね？心配をかけたくありませんので」
ツヴァイが言う

「分かった。しかし試験のときといいお前は危険な仕事を回されやすいのか？」

コーネリアが呆れたように言う

「そうかもしれない。では、俺はこれで失礼します」
そう言い部屋を後にするツヴァイであった

第三十一話

本編14

ゼブルとギアス 対

ギアス

ゼブル視点

(後書き)

ゼブルのギアス5人目

ピース

一人称僕

特徴：語尾に「……と思うよ」と付く

能力：発動中動物達と会話ができる（植物や昆虫類、魚介類には出来ない）限界範囲は400メートル

1 体に絞ればその動物を自由に操れ五感を共有できる。限界範囲は1？

発動条件：近くに動物が必要

第三十二話 番外編？

ツヴァイとエリア10救出作戦(1) (前書き)

番外編に入りました

後1、2話は続くと思われませ

誤字脱字及び分かりにくい表現が多いと思いますので報告していただく^がと助かります

第三十二話 番外編？

ツヴァイとエリア10救出作戦（1）

エリア10に向かう飛行機の中

本国からエリア10内の敵対勢力の壊滅任務を任されたツヴァイ

「到着まで後少しですのでシートベルトの着用をお願いします」

「そうですか。しかし、何故アイネ卿までいるんですか？」

隣でシートベルトをしようとしているアイネに聞く

「ツヴァイ殿のお手伝いです」

ツヴァイに言う

「俺達はこれから戦場に行くんですよ？」

ツヴァイがシートベルトを着用する

「僕だって軍人です。それに若い内に見て回ったほうがいいとコーネリア様からのお言葉も頂いていますし、許可も頂いています」

ツヴァイにどうだと言わんばかりに言う

コーネリアから許可が出ているのではツヴァイも無下に断る訳にも

いかない

「そうですか」

ため息を吐きながら言う

「情報ですが、エリア10は深い木々が生い茂っている森林地帯です。なのでテロリスト達は少ない戦力で行うゲリラ戦を得意としています。その上我が軍の主力であるナイトメアが木々に妨げられ通常の数割程度しか活躍が見込まれません」
資料を読みながらチラチラツヴァイを見る

「以前はどうやって勝ったんですか？」

素朴な疑問を聞く

「森を焼き払ってナイトメアで攻撃をしたそうですが費用と反発意見が多かったのでこの作戦はもう出来ません」
アイネが残念そうに言う

「なるほど、グロースターは無駄でしたね」
ため息を吐きながら言う

「後気をつける事は、テロリスト達の他に中華連邦が傭兵を雇っているらしいです。それと今回の任務にはナイトオブトゥエルブのモニカ・クルシエフスキー卿も協力するとの事です」

アイネが言う

モニカは比較的接しやすい大人の女性なのでアイネも少し気楽に出来るらしい

ツヴァイとも妹のアーリアの件で比較的仲は良い方なのである

「それは良かった。1人では難しいでしょうからね
気分が少し楽になるツヴァイ

「しかし危険なのは変わりありません。我が軍の兵士を生け捕りにして何かの実験をしているようです」

怖いのかツヴァイの手を握っている

「まあ、何とかなるでしょう」
欠伸をしながら眠そうに言う

「随分余裕ですね」
アイネがツヴァイに言う

「俺に余裕なんてありませんよ（実験つてバイオ・ハードみたい
にゾンビが出てくるとかないよね？俺大の苦手なのに）」
余裕そうに言っているが実際は微妙だが体が震えているのだった

「（ホラーとか苦手なんだよね）」

視点 変更

エリア10のブリタニア軍滑走路

「お久しぶりです。クルシエフスキー卿
深々とお辞儀をするツヴァイ

「お久しぶりです」

ツヴァイの後ろで同じように頭を下げるアイネ

「あら？モニカで良いって言わなかったかしら？それにまた彼女同伴で来て大丈夫なの？」
モニカがクスリと笑いながら聞く

「最初の挨拶だけですよモニカ卿。アイネ卿は俺も心配なんですけれど聞いてくれないものですから」
ツヴァイがアイネを見ながら言う

「僕なら大丈夫です」

「そう、でも気をつけるのよ？何だか危ない雰囲気があるから
真剣な表情になる」

「危ない雰囲気ですか？」

アイネが不思議そうに聞く

「ええ、貴方も経験を積みれば分かるわよ」
再び笑顔になり言う

「頼りになりますね、モニカ卿は」
頷きながら言う

「貴方は感じないの？」
モニカが聞く

「鈍感なもので」
肩をすくめながら言う

「そう……話は変わるけれどアリアが貴方に会いたがっているわ
よ？」

モニカが思い出したようにツヴァイに言う

「俺にですか？何故？」

ツヴァイが聞く

「ちゃんとしたお礼が言いたいそうよ」

ツヴァイがブリタニア本国に来たときにモニカの妹であるアーリアが悪漢貴族に絡まれていたのをツヴァイが救ったと言う過去があるのだ

その後ツヴァイがラウンズになり、アーリアがツヴァイを気になり出したのを姉のモニカは知っているのだ

「それならアイネ卿にですよ。助けたのはアイネ卿なんですし。それに俺は堅苦しいのは苦手なんですよ。気持ち十分伝わりましたと伝えてくれますか？」

「本当に鈍感なのね」

モニカがため息を吐きながら言う

「？ さっき言ったではないですか」

意味が分からないように言う

「もう良いわ。さて作戦会議に行きましょうか」

ツヴァイに呆れたモニカが言う

「その前にお客さんが来ているようですよ？」
ツヴァイが呟く

「「え？」」

モニカとアイネが意味を理解できずに聞く

「出てきたらどうですか？」
銃を近くの木に構えて言う

「3、2「分かったわよ、出ればいいんでしょう？」……貴方は？」
カウントダウンの途中で赤毛の少女が出てきた

「私はサンって言うの。あんた達が遅いから迎えに来たのよ」
赤毛の少女（以降サン）が言う

「それは失礼しました」
銃をしまいながら言う

「しかし、よく分かりましたね」

「本当に、気配も無かったし」

「隠れるのは結構自信があったのに」

3人とも感心したように言う

「髪の毛が赤くなければ気づきませんでしたよ」
苦笑しながら言う

「ああ、この色は目立つからね」
自分の髪を訝しげに触る

「さあ、お待ちしているようなので行きましようか」
そう言いツヴァイ達は歩いた

視点 変更

エリア10のブリタニア軍仮基地の司令部

この部屋テントに3人が入り兵士の話を聞く

「今このエリア10は南側に我らブリタニア軍が、北側に中華連邦

とテロリスト共の共有基地があります。そして皆様もお分かり頂いている事と思いますがこの木々のせいでナイトメアが実力を発揮できません。もし「あの、ちょっといいですか？」　　なんでしょうかドウ卿？」

老兵士の話の途中でツヴァイが言う

「敵基地の詳細な資料はあるんですか？」
ツヴァイが聞く

潜入工作時に使うのが目的だ

「はい。我々ブリタニア側が作った施設をそのまま運用しているようですので」
老兵士が言う

「では、後ほどその資料を俺に見せてください」

「イエス・マイ・ロード……では、続きを」
老兵士が話を続ける

「敵基地の資料を見てどうするんですか？」
アイネがツヴァイに小声で聞く

「敵の情報は少しでもあったほうがいいですからね」

「なるほど」

アイネが頷きながら言う

数時間後

一旦解散をし明日の明けがた攻める事になったのだが

「失礼します」

ツヴァイがドアを開けて部屋に入る

「お待ちしております」

老兵士が座っていた椅子から立ち上がる

「頼んでおいたものは？」

ツヴァイが聞く

「此方です。説明しますと敵の拠点は2つです。手前の施設には敵の実行部隊がいます。奥が敵の本拠地と思われ、奥の旧ブリタニア軍施設。その内我々が持っている建物の詳細は奥の旧ブリタニア軍施設です。これがその奥の旧ブリタニア軍の施設図です」

指で地図の書いてある場所を指しながら説明をし、厚めの資料を渡す

「なら、俺は奥の施設に行きますね」
資料を軽く見ながら言う

「それは危険です！旧ブリタニア軍施設は難攻不落を目指して作られました。なので容易に入ることは出来ませんし、入ったとしても所々に設置してある重力センサーと赤外線感知システムにより例え透明人間でも見つかってしまいます」
老兵士は焦りながら言う

「それはそれは（例えが合ってて怖いな）では、何故テロリストの手に落ちたのですか？」
ふと、疑問を口に出す

「推測ですが高度なハッキング技術が使われたようでした。詳細は分かっておりません。何せ其処にいたブリタニア軍人の4分の3が行方不明ですから」

「そんなにですか？」
驚きを隠せない数字だ

「ええ、しかもそのブリタニア軍施設からいつも地獄の様な悲鳴が聞こえるんです。噂では人体実験を

行っているらしいです」

老兵士は顔の皺をさらに怒りで増やしながら言っ

「そうですねか……では、俺は今から手前の施設を奇襲してきます。情報があつたら教えますので待っていて下さい」
テントを出ようとするツヴァイ

「本当に行かれるんですか？」

困惑した表情で聞く

「危なかつたら帰ってきますので大丈夫ですよ」

老兵士を心配させないように言う

816

「……貴方に神の御加護があらん事を」
首にかけていた十字架のネックレスを手に持ち十字を書くように動かす

「それなら大丈夫です。女神とは友達ですから」
口元を歪めテントから出て行くツヴァイ

視点 変更

敵実行部隊基地

テントから出たツヴァイはのんびりと数分歩き目の前に着いた

「さて、念の為ギアスを使うのは止めておいて。武器は改造銃が2
丁と干将・莫耶^{かんしょう・ぼくや}だけでいいかな」

「さて、堂々と正面から行きますか」
扉を開けて中へ進むツヴァイ

（さつきから人が来ないなど言う事だ？）
入って数分経つが人の気配が全然ない

歩いていると少し大きめの空間にたどり着いた

そこには

「遅かったですね？ツヴァイ殿」

「敵は私達で片付けたわ」

アイネとモニカがいた

他にもいるにはいるのだが皆まとめて積まれている

「いったいどうして？」

困惑しながら聞く

「本当は私1人でやろうとしたんだけど、この子が付いて行くってしつこくてね」

アイネを見ながらモニカが言う

「ツヴァイ殿が悪いんですよ？最近はその子達ばかりと一緒にいて僕にはちつとも構ってくれなくて、何だか僕のことを避けているよ。うだし。だから頑張ってツヴァイ殿に認められたかったです！……そ

れにルクレティアはツヴァイ殿に一杯甘えられるって嬉しそうに言うし、僕だってツヴァイ殿に一杯甘えたいですし、ツヴァイ殿と一緒に戦いたいです！」

涙目で必死に言いツヴァイに抱きつくアイネ

それを

「（なるほど！俺に惚れてる訳ではなく、親のように慕っているだけなのか。良かった良かった）」

と考えるツヴァイ

「……あの子達って？」

ふと疑問に思ったモニカが聞く

「俺の娘達です。まあ、俺とは似ても似つかない可愛らしい娘達なんですよ」
うんうんと頷きながら言う

「！ 子供がいたの！？しかも達！？何人いるの？て、それより結婚してたの！？」
驚き慌てるモ二カ

「5人です。まあ養子ですし、俺は結婚はしてませんよ……まあ、似たようなのはいますかね」
ツヴァイが意味深なセリフを言う

「？」
理解出来ず何言ってるの？的な顔になるモ二カ

「え？4人ではありませんか？」
アイネがツヴァイに聞く

「つい先日、新しくマオと言う子が俺の娘になりました」夜分遅くに不法侵入及び暴行行為は如何なものかと思えますよ」て？……貴方は？」

ツヴァイが喋っている最中に近くの大きな画面に1人の男が映る

緑色の髪をした丸縁メガネの若い男性だ

「おっとこれは失礼しました。私は技術学者のミハエル・ラドグラーフと言います。今は中華連邦のお偉い様に雇われています。以後お見知りおきを」
深々と頭を下げる

「随分ご丁寧な挨拶ね、画面の前でなければ惚れてしまいそうよ」
モニカが少し睨む

「これはこれはナイトオブトゥエルブのモニカ・クルシェフスキー殿にそのような事を言われるとは嬉しい限りですね。しかし、今一番興味があるのはツヴァイ・ドウ卿。貴方なのですよ」

「俺ですか？」
困ったように聞く

「貴方が落としたカルブ島は私が考案した防衛設定のお陰で難航不落と言われていました。本来は数万人規模の兵を割かなければ攻略できない筈でしたが貴方はそれを一人で攻略してしまった！しかも犠牲を極端に減らしてですよ！？私の理解を大いに超越する貴方に私の心は惹かれた」
体をクネクネと動かし、息が荒くなる

「俺は男性に欲情する趣味はありませんよ？」
ツヴァイが気色悪そうに言う

「そして貴方がこの地区に派遣された時は私は神に感謝しました。
やっと貴方に挑める事を！そして貴方の事ですから1人で基地を破壊すると思いで実力を知るために監視カメラやら熱源カメラ等を設置しましたが、結局その貴女2人にこの施設を落されてしまいました」
落ち込んだように肩をすくめるミハエル

「俺の話聞いてますか？」
ツヴァイが聞く

「私はどうしても貴方の隠された秘密を解き明かしたい」
興奮気味に言う

「隠してるから秘密なんですよ」

はたから見ればコントのような雰囲気である

「其処で私は貴方に私のいる本拠地へ招待します！」
腕を広げながら言う

「……え？」

「来るのは貴方1人でもいいですし、その貴女2人を連れてきて貰っても構いません。しかしそれ以上の人を連れてくことはゆるしません。時間は明日の午前9です。基地の目の前に来てくだされば扉を開けて貴方達を誘導します。そして見事私の試練に合格しましたらご褒美が待っていますよ」
そう言つと画面の場所が変わり牢屋のような所に子供達にの姿があった

「！ あれは!？」

アイネが驚く

アイネだけでなくモニカも驚いている

子供の映像に驚いているのではなくその奥の映像に驚いているのだ人間が大きなフラスコのような物の中に入っているのだ。しかも中には液体が充満している

小さいのでそれ位しか分からないが、他にも……

「貴方が子供好きという情報は既に私の耳に入っています。この子供達は軍の施設にいたブリタニア軍人達の子です。ご褒美目指して頑張ってください」

画面が元に戻りミハエルが笑顔で言う

「命が惜しくないと言っているようなものですよ？」
ツヴァイが口元を歪めながら言う

「別に自分の命に興味はありませんよ。俺にとって戦争もゲームです。話が長くなってしまいましたね。では、明日を楽しみに待っていますよ」

そう言い終わると画面が消えた

「子供が人質ですか」
ツヴァイが困ったように言う

「貴方ロリコンだったの？」
モニカがツヴァイを怪しげに見る

「別に少女だけでなく少年も好きですよ？若々しさが染み出ていて見ると嬉しくなります」
実際に子供は好きなのだ

「ツヴァイ殿って何歳なんですか？」
アイネが突然聞いてきた

「アイネ卿と同じぐらいですね」
ツヴァイがアイネを見ながら言う

「え？そんなに若いんですか！？」

「私より年下！？」

2人とも驚くが特にモニカが驚いている

「（おっと、口が滑ったな）まあ、本当かどうか分かりませんが
ど」

嘘だと示唆するように言う

「嘘なんですか！？」

アイネが聞く

「さあ、どうでしょう。しかしモニカ卿の驚き落ち込んだ時の可愛らしい表情が見れたので良かったです」
ツヴァイはモニカを見ながら笑う

「ツヴァイ、貴方言う人は……」
体を怒りで震わせる

「そんなに気にする必要はないですよ。モニカ卿は俺から見ても十分美人ですから」
マジマジと見ながら言う

「なっ！何を言っているのよ!？」

急に言われた言葉に顔を赤くさせるモニカ

「え？美人ですと言ったんですけど」

ツヴァイが聞き返されたでもう一度言う

「そ そう？本当にそう思う？」

更に顔を赤くして言う

「ええ、もし俺がモニカ卿に告白されたら迷わずイエスと言うのでしようね」

うんうんと首を縦に振りながら言う

「そこまで」

顔を手で押さえながら恥ずかしそうに呟く

「ツヴァイ殿！もし僕が告白したらどうします!？」
嫉妬の炎を燃やしたアイネがツヴァイに聞く

「同じですよ。アイネ卿は可愛らしいですね。まあ、俺なんかに惚れる要素は無いですけどね」

アイネの頭を撫でながら言う

「そんな事無いですよ」
「アイネがもしもじと言う」

「……………人の目の前でイチャイチャと……………羨ましい」
「モニカが何かそわそわしながら2人を見る」

「どうかしましたか？」
「それに気づいたツヴァイが聞く」

「何でも無いわ！用は無いんだし此処から出るわよ！」
「大きな声で早口に言う」

「何だか怒ってませんか？」
「ツヴァイが恐る恐る聞く」

「気のせいよ！」
「更に大きな声で言う」

「なら良いのですが」
「何であんな風になったのか理解出来ず困惑するツヴァイであった」

視点 変更

ブリタニア軍仮基地

戻ってきた3人だが辺りが騒がしいのに気づく

「大変です！」

兵士の1人が駆け寄り大変そうに言う

「大変そうですね」

大変そうに大変だと伝える兵士にツヴァイが言う

「ふざけている場合じゃないです！サザンを含めた数人の子供達がいなくなってしまったのです」

慌てて現状を説明する兵士

「まあ、十中八九誘拐でしょうね」

ツヴァイがため息を吐きながら言う

「何でそんなに落ち着いていられるんですか!?!」

アイネがツヴァイに聞く

「多分彼の命令でしょう。なら人質に危害を加える可能性は無いと思いますよ」

ツヴァイが言う

「何故？」

「彼にメリットが無いからです。俺の機嫌を下手に刺激しようとは彼程頭の良い人は思わないでしょう」

これは勘だが根拠のある勘だ

「そうですか？僕は心配です」

オロオロしながら言う

「俺だって心配はしているんですよ？しかしここで無闇に敵に攻撃を仕掛けては向こうの思う壺ですからね。明日を待ちましよう。俺は明日に備えて寝ますので悪しからず」

そう言い用意されているテントに向かうツヴァイ

「あっ！ツヴァイ殿」

そのツヴァイをアイネが止める

「ん？何ですか？」
アイネのほうを向き聞く

「えっと…いえ、何でも無いです」
何かを言おうとしたようだが言わないようだ

「？ そうですね！ では、お休みなさい」
不審に思っが何かに気づき歩き出す

「お休みなさい」
その後姿に言う

「さて、私達も明日に備えましょ」
モニカがアイネに言う

「……はい（一緒に寝ようなんて不謹慎ですよね）」
後姿を少し見詰めモニカの後を付いて行く

視点 変更

ツヴァイのテントから100メートル離れた場所

「此処ならいいでしょう。出て来たらどうですか？」
ツヴァイが木々の生い茂る周囲に言う

「よく分かったな。ばれずにこの人数で此処まで来るのに苦労したぜ？お前を殺せばミハエルの旦那からたんまり報酬を頂けるんな、覚悟しろよ」

辺りから髭男が出てきて言う

他にも30人はいるだろう、全員鍛え上げられた肉体を誇示するかのように見せ付ける。武器はナイフや斧などで銃火器は持っていないようだ

「……質問しますが、ここの子供達を攫ったのは貴方達ですか？」
ツヴァイが髭男に聞く

「おおよ！ミハエルの旦那が報酬を弾んでくれてな、頭のイカレた奴かと思ったら結構いい奴だぜ」
髭男が笑いながら言う

「では、次の質問ですが。このまま俺に捕まるか、逃げるかどっちを選びますか？」
ツヴァイが仮面の奥から睨んで言う

「残念ながらもう一つあるぜ。お前が死ぬことだ！」
笑いながらツヴァイに持っていた斧を振るう

しかしそれを軽やかにかわして

「残念です。（スタイルチェンジ・ダイクン）寝てくださいね」
ダイクンのギアスが発動する

「ぐわっ！」

男達は全員気絶した

「スタイルチェンジ・ゼブル。さて、運びますか」
ツヴァイは気絶している男達を6人ずつ引きずりながら運んでいった

831

視点 変更

旧ブリタニア軍基地の内部

大きな画面に映る色々な専門用語とグラフを見ながらミハエルがコーヒーを飲んでいる

「傭兵部隊からの通信が途切れました」
近くにいた女性がミハエルに言う

「やはり失敗ですか」

自分の兵が捕まったのに気分が良さそうに笑いながら言う

「いいのですか？このような無駄な損害を出して」
女性が聞く

「損害？報酬は後で回収しますし、兵士は完成したアレを使うので
マイナスはありませんよ」

言いながら後ろにある何かを見て笑うミハエル

「アレが完成した今ならブリタニアを此処から追い出すのも簡単で
すね」

女性も一緒になってソレを見る

「そうとも言えませんよ。何せツヴァイ・ドウ卿がいますから」
面白そうに笑うミハエル

「彼を高く評価してるんですね？」
その表情を見た女性が聞く

「私の最高傑作であるカルブ島を落とす男ですからね。ふっふっ
ふ、明日が楽しみですよ」

笑いながら席を立つミハエル

「子供達の件は本当にいいのですか？」
女性がミハエルに聞く

「構いませんよ。全てが終わったら返してあげて下さい。ただし…
…生き残っていればの話ですがね」
ミハエルは笑いながら部屋を後にした

第三十三話 番外編？ ツヴァイとエリア10救出作戦（2）（前書き）

……何だか色々と崩れてしまいました

あまり深く突っ込まないで下さると幸いです

第三十三話 番外編？

ツヴァイとエリア10救出作戦（2）

旧ブリタニア軍基地前

約束の10分前に来た3人

「さて、本当に行くんですか？」

ツヴァイが後ろの2人に聞く

「勿論です。少しはお役に立ってます」

「私も伊達にラウンズやつてる訳じゃ無いのよ？」

2人とも自信満々に言う

「仕方ありませんね。では、行きましようか」

そう言いツヴァイを先頭に基地に入る

「お待ちしていましたよツヴァイ・ドウ卿！我が城にようこそ！」
入った瞬間ミハエルの甲高い声が聞こえる

「前置きはその辺にしましょう……内容は？」

ツヴァイだダルそうに言う

「貴方にはこれから3つの部屋で待ち受ける試練に勝って貰います。報酬は人質となった子供達です。しかし、ドウ卿以外のお2人にはドウ卿の心の援護だけして貰います」
ミハエルは微笑みながら言う

「どう言うことだ？」

アイネが眉間に皺を寄せている

「貴女がたは試練中は部屋の入り口より先には入ってはいけません。もし入ったならそれなりのペナルティーを受けることになります」

「ペナルティーね」

モニカが呟く

ペナルティーの内容が分からないなら何もしないほうが良い、下手に相手を有利にすることは避けるべきだ

「しかも今あなた達は全ブリタニア区域及び他のエリアで報道されています。もしかしたらシャルル皇帝陛下も見ているかもしれませんよ」

ミサエルがテレビの電源を入れるとツヴァイ達を上から映していた

「……………え？」

モニカが上を見上げるとカメラが屋根を這いながらツヴァイ達を映している

「凄いですね。其処まで高度なハッキング技術を持っているんですか？」

移動式カメラを見ながらツヴァイが聞く

「まあ、製作に半年程かかってしまいましたが何とか成功しました。このドラマの題名はツヴァイの最後です」
自慢げに言うミハエル

たった半年で世界の3分の1を占める大国のテレビ局にハッキングが出来るとはやはりミハエルは天才なのだろう

「じゃあ、アーニャやジノ、それからコーネリア様も見ているのか！？」

アイネが驚きながら聞く

「ええ、見ていればの話ですがね」

偶然テレビを見ていない可能性もある

「しかし子供に残酷な描写を見せるのはどうかと思いますよ？」
ツヴァイが教育上に良くないと言う

「それは親御さんが止めるでしょうから気にしない方針で
ミハエルも其処まで配慮していなく困ったように言う」

「これはエリア11にも流れているんですよ？」
ツヴァイが聞く

「ええ、このエリアとエリア18以外ならどのエリアにも流れてい
ますよ」

コーネリアに侵略されてからまだ日の浅いエリア18には其処まで
出来なかったようだ

するとツヴァイが
「アリス、サンチア、ダルク、ルクレティア、マオ、見ていますか？
見ているんですしたらテレビの電源を消してください。これは上司と
しての命令です。」

他の18歳未満の人もこれから血や臓器が飛び出す映像が流れるか
も知れませんが、逸早くテレビの電源を消すことをお勧めします。
つて言うより消しなさい。俺が笑いながら返り血を浴びている姿な
んで怖くて見れないですよね？

ですから早めに電源を消してください」
他にも長つたらしく説明をするツヴァイ

モニカが
「あなたも18歳未満よね？」
とアイネに聞く

「僕は軍人なのでノーカウントです」
胸を張りながら言う

「そんな事を言えば俺の娘達も軍人ですよ？」
説明を終えたツヴァイが聞く

「……細かいことは気にしない方針で行きましょう」
アイネがそそくさと言う

「さて、早速ですが1の試練の間まで其処の女性が誘導しますので
どうぞ我が城にお入り下さい」
ミハエルが椅子に座っている画面を持っているフードをした小柄な
女性が現れる

「……こちらです」
女性が軽く頭を下げた誘導する

数分後
「……着きました」
女性が扉の前のロックを開き扉が開く

大きな空間に男達がウヨウヨいる

「これはこれは、人相が悪そうな人たちですね」
ツヴァイが男達を見ながら言う

「さて、1の試練の間では屈強な男達と戦って貰います。総勢60人です。武器は持っていますが銃器類は持っていませんのでご安心を。ではドウ卿、お入り下さい」

「入ったら直ぐに始めてください」
ツヴァイが体を解しながら言う

「ツヴァイ殿」

「ツヴァイ」

アイネとモニカが心配そうに言う

しかし前日に30人の男達を一瞬で気絶させたツヴァイからしてみればそれ程脅威ではない

「お2人にはこれから俺の戦い方を見て貰います」
腰を曲げながら言う

「戦い方？」

アイネが聞く

「人を殺さない殺し合いです」

腰から白と黒の二本の剣を出した

それを見たモニカが

「双剣？」

と聞く

「ええ、かんしやう・まぐや干将・莫耶です。さて、そろそろ行きますか
そう言い部屋に足を踏み入れる

「入りましたね、ではスタートです！」
ミハエルが両足が入ったのを見て言う

「くくくおおおー！！」「くく」

男達が一斉にツヴァイに襲い掛かる

しかし

向かってきた男達の攻撃をかんしやう・まぐや干将・莫耶で次々と防いでいくツヴァイ

「（やっぱり一人一人は強いけれど纏まると弱いな）」
そして滑るように動き、相手の首や鳩尾を攻め次々と気絶させていく

十数分後

「……強い。あんなに強いなんて」
モニカが驚嘆の声を上げる

「ツヴァイ殿……」
アイネはツヴァイに只ならぬ感情を秘める

「……これで終わりですね」
息をゆっくり吐きながら言う

「流石です！私の目に狂いはなかった。殺さずに猛者60人を倒すとは！しかも衣服に乱れが全く無い！やはり貴方は私の想像を超える逸材だ！」
ミハエルが拍手しながらツヴァイを絶賛する

実際にツヴァイの服には皺が1つも無い

「（あのオレンジ吸血鬼だったら笑いながら殺すんだろうな）」
等と考える

「さあ！次のステージが貴方を待っていますよ？」

次の話が待ちきれない子供のように喜びながら言う

「全員気絶しているだけですか？」

ツヴァイの近くに来たアイネが聞く

「ええ、多少切り傷は付きましたが生きています」
偶然刃が当たってしまった時に出来た傷である

「貴方何処でこれ程の技術を？」

モニカが不思議そうに聞く

モニカは同じナイトオブブラウズ内でも此処まで強い者はナイトオブワンのビスマルク・ヴァルトシュタインしかいないだろうと思っている

「元傭兵に叩き込まれましたらこうなりました」

ツヴァイが武術の師匠であるチャンを思い出しながら苦笑する

「傭兵？」

モニカはたかが傭兵と思っているが幻界ファンジヨンと呼ばれる幻想世界で最強と言われた程の男である

「ええ、もしかしたらナイトオブワンより強いかもしれませんがね」
本当はビスマルクが100人いたところでチャンには勝てないのだが

「（師匠ってチート過ぎるんだよね、普通の状態でダルクよりパワーがあつてアリスより速いんだから。え？本気を出したら？シロウさんとセイバーちゃんと俺が組んでも逆リンチだね）」
等と考えているツヴァイ

「そんなにですか！？」
アイネが驚いたように聞く

「ええ、何回殺されそうになったことか」
思い出すだけで気分が悪くなった

最高記録で一日（数時間の訓練）で骨が6本折れるという偉業を成したのだ

「お話の途中申し訳ございませんが次の試練の間に着きました」
ずっと静かだった女性が呟くように言う

「次の試練の紹介です。この計16ある機関銃を全部壊してください。因みに20メートル以内の動く物体に反応して自動的に撃つてくれますのでご注意下さい」

ミハエルが映っている画面の半分が説明をする為の図になる

機関銃が円形に設置されている

「壊したらお終いですよね？」

ツヴァイがミハエルに聞く

「はい、その通りです」

「モニカ卿お願いがあるんですが最初の試練の間に戻って適当な武器3、4つ持ってきてくれませんか？理由は後々説明しますから」
ツヴァイがモニカに振り向き聞く

「はあく分かったわ、私達はそれぐらいしか出来ないからね」
そう言い来た道を戻り始めるモニカ

「では何時スタートしますか？」
ミハエルが聞く

「もういいですよ」
腰から改造の施された銃を両手に構え言う

「では、スタート！」

機関銃たちが動き出すが無標的がないので撃つことは無い

「入らないんですか？」
アイネがツヴァイに聞く

「別に此処から撃てば正面の機関銃は壊せますからね、無理に危険を冒す必要はありません」
腰を下げて低い姿勢から機関銃に向けて撃つ

1発で機関銃が粉々になる

これを8回繰り返し

「これで8つ片付きましたね」

「……ズルイ」
女性が呟く

「頭が良いと言って下さい」
ツヴァイが心外そうに言う

「これには私も驚きました。設計ミスですね。しかし反対側の8つはどうするんですか？」
ミハエルも困ったように聞く

「簡単ですよ、物体に反応するなら物体を囮にすればいいんですよ」
ツヴァイが当たり前のように言う

「囮？何をですか？」

理解が出来ないアイネがツヴァイに聞く

「持ってきたわよ」

モニカが抜き身の剣を4つ持ってきた

「ありがとうございますモニカ卿」

それを受け取る

「で、何に使うの？」

モニカが聞く

「自動の場合は近い物を狙うのが普通なんですよ。ですから」

部屋の反対側に全速力で走る。そこにターゲットを見つけた機関銃が
一斉に火を噴くがツヴァイには当たらず、走りながら持っていた
一本を上投げると、機関銃は剣をターゲットに変更し、剣は数秒
で粉々になる

「このように適当に的を作って置けば良いんですよ」

そう言いながらツヴァイは新しい的を投げ、機関銃がその的を狙っ

ている内に改造した銃で機関銃を撃つ

この作業を2回繰り返し

「全部壊しましたよ」

ツヴァイが言う

「今回はあまり面白みが少なかったですね、次が最後ですよ」

ミハエルが少し落ち込みながら言う

面白みがすくないと言っているが、分速800発、初速750M/Sの弾を避けると言う偉業に面白みが少ないと感じるのはツヴァイが難無くやってしまうだけで実際はありえないことなのである

「最後の間です」

女性が部屋のロックを開けると

「！ あれは!？」

「凄いことになっていますね」

「嘘、あれが人間？」

3人とも驚きを隠せないくらい驚いている

「最後の試練はこの改造人間達を倒してください」

ミハエルがニコニコ笑いながら言う

10体の改造人間は、それぞれ体に様々な金属部分植えつけられており、筋肉は異常なほど盛り上がっている

片腕が無い者がいれば足の代わりにキヤタピラが付いている者もいる
皮膚が無い者もいれば頭は1つなのに腕や足が2本ずつある者もいる
地獄いると錯覚してしまうほどここは地獄に見える

「（スタイルチェンジ・ダイクン……ギアス発動）」
ツヴァイがダイクンに変わりダイクンが1体に向けギアスを発動する

「（……効きませんね、スタイルチェンジ・ゼブル）困りましたね
（気絶しないということは、意識が無いのか）アイネ卿お願いがあります」
ツヴァイに戻るといつの間にかツヴァイの手を握っているアイネに
言う

「何ですか？」
アイネが涙目で声を震わせながら聞く

無理も無い、横のモニカでさえこの光景に震えているのだから

「これから俺がする事を決して見ないで下さい。あまり見せられる
ものではないですから」
ツヴァイがいつにもまして真剣に言う

ツヴァイ、いやゼブルは普通の人より沸点が極めて高くどんな事があっても怒らず冷静に判断が出来るのだが、今はミハエルへの怒りはドンドン上がっていく

「ツヴァイ殿」

アイネも何か言おうとしたが、何かを感じたのかツヴァイの言葉に従がい、後ろを向いた

「ありがとうございます」

ツヴァイはアイネの手を離し部屋に入る

「さて、ラストバトルスタートです!!」

ミハエルのテンション大きく上がり興奮気味に言う

「くをおおお!!」

その声を合図に改造人間達はツヴァイに襲い掛かる

「……」

避けながらツヴァイは考える

1体がツヴァイに殴りかかるが、ツヴァイは何無く避ける

改造人間はそのまま地面におもいつきり拳をぶつけると床が粉々に

なつた

「どうですか？この強さは！疲れも知らず限界も知らず全員通常の5〜7倍の腕力を誇り全てを薙ぎ倒す無敵の兵士達です！まあ弱点と言えば知能が極端に少なくなる事ですがね」
ミハエルが避け回っているツヴァイに説明をする

「可哀相ですが、貴方達は人間に戻ることは多分出来ません。ですからせめて安らかに眠ってください」
持っていた干将・莫耶かんしょう・ばくやを構え1体ずつ首を斬る

その光景にモニカは
「ツヴァイ」
悲しみの涙を流していた

「……終わりましたよ」
ツヴァイの殺戮劇は終わった

「流石ツヴァイ・ドウ卿！此処まで完膚なきまでに負けたのは生まれて初めてかもしれませぬね」
冷めたツヴァイとは逆にミハエルは顔を赤くさせ興奮しながら奥の扉から出てきた

「其処にいたんですか」

ツヴァイが力なく言う

返り血は一切浴びておらず、両手に持つ剣だけが赤く濡れている

「ええ、では約束通りご褒美をお渡ししましょう」
指を鳴らすとミハエルの後ろから何かが出てきた

「今度は何？」

十数人の子供達は怯えるような目つきで周りを見る

「あんたは!？」

サンがツヴァイに気づく

「助けに来ましたよ」

ツヴァイが言いながらゆっくり近付く

「あの人が君達を助けに来てくれたんですよ」
ミハエルも笑顔で子供達に言う

「うわあぁん!」

子供達が嬉し涙を流しながら一斉にツヴァイに駆け寄る

「美しいですね」

ミハエルは口元を邪悪に歪めて言う

子供達はツヴァイに飛び恐怖から開放されたと感じた

しかし

ツヴァイは子供達のある事に気づく

「？ この子の皮膚の下が膨らんでいる？この子も……まさか！？」
3人の子供達の体の膨らみからチツチと音がする

「そのまさかですよ！イツツ！シヨータイム！！」

ミハエルが手に持っていたスイッチを押すと

「くそっ！！」

爆発が起こる

「ツヴァイ殿！！」

アイネが泣きながら悲痛の叫びを上げる

「貴様あ！！」

モニカがミハエルを射殺さんとはかりに睨む

「ひゃっひゃっひゃ、言ったでしょう？ツヴァイの最後と、子供と一緒に死ねるのなら本望でしょう。それに」

豹変したミハエルの後ろからぞろぞろと改造人間達が現れる

「嘘！？まだこんなに」

モニカが恐怖に満ちた表情で言う

「80人はいますよ。それにさっきのは試作機でこれは他にも色々
と手を加えてある完成機です。ツヴ

アイ亡き後お前達に一体何が出来る？」

ミハエルが凶悪そうな笑い顔で言う

これがミハエルの本当の顔なのだろう

「ツヴァイ殿大丈夫ですか返事をしてください！」
煙がひどく見ることは出来ない

「無理に決まってるだろ、あの爆発では幾ら不死身と言っても」
ミハエルが笑いながら言うが

「はあはあ」

荒い呼吸が聞こえる

「ツヴァイ殿！？」

アイネがツヴァイに駆け寄る

「アイネ卿ですか」
今のツヴァイは服はボロボロで、仮面の左目部分壊れ露出しており、その虚ろな目でアイネを見ている

「ツヴァイ殿大丈夫ですか？」
見た目通りボロボロなのだが聞くアイネ

「馬鹿な！あの爆発から生きているだと!？」
ミハエルは驚きながらツヴァイの存在に驚く

「子供達は？」
弱弱しい声で聞く

アイネが子供達を見ると
「い、生きています、全員生きています！」
全員微かだが息をしている

「ツヴァイ、貴様一体どんな手品を使った！」
ミハエルが怒りで形相が変わる。此処まで計算通りにいかないのは人生で初めての事なのだろう

ツヴァイは爆発する瞬間に爆弾を無理やり体から取り出し、骸となった改造人間の下に入れたのだ。爆発の威力は一気に抑えられたがそれでも防ぎきれず、自分を盾にして子供達を救った

「アイネ卿、モニカ卿と一緒に子供達を連れて此処から出て下さい」

ツヴァイが近くにいるアイネに言う

「ツヴァイ殿はどうするんですか？」
アイネが心配そうに聞く

「俺は……彼を殺したら戻ります。彼は生かしてはいけない」
ミハエルを見ながら言う

「でも、向こうには改造されている人達がさっきより増えているんですよ！？それにそんな体じゃ」
アイネが涙目で言うが

「大丈夫です。お願いですから俺の言うことを聞いて下さい！」
ツヴァイが少し大きめの声で言う

「……行くわよ」
モニカがアイネの肩を掴みながら言う

「しかし！」
アイネがモニカに言う

「文句言わないの！この子達を救う方が優先よ！……さあ、お姉さん達と此処を出ましよう」

アイネに一喝すると子供達に優しく言う

「嫌だ、怖いよ」

泣き出す子供達

「死にたくないでしょ？なら生きるために逃げましょ」
モニカが子供達に力強く言う

子供達はモニカを見て、モニカは笑顔で答える。その後子供達が泣き止み立ち上がる

それを見たアイネが立ち上がり

「ツヴァイ殿絶対戻ってきて下さいね」

「勿論です」

ニコッと笑う

アイネは涙を拭いて

「さあ、僕に付いて来こい」

爆弾が仕込まれていた子供達を持ち上げ走っていく

その後をテトテトと付いて行く子供達

「……ツヴァイ」

モニカがツヴァイに近づく

「モニカ卿後の事は」

ツヴァイがモニカに言う

「絶対生きて戻ってきなさいよ」

ツヴァイを抱き寄せ一言言つとアイネの後を追いかけて行った

「さて、感動のお別れは出来ましたか？満身創痍の貴方一人に何が出来ますか見ものですな」

ミハエルが悪者特有の怪しい目つきで笑いながら言う

「ふう〜初めてかなこんなに殺意が芽生えたのは」

今まで座っているのがやっとに見えていたツヴァイがスツと立ち上がり体の故障部分を確認する

ツヴァイは怒っているのだがまだ完全ではない

「？何を言っているんだ？」

ミハエルがさつきと違う雰囲気 of ツヴァイに違和感を覚える

「俺さ、沸点が高い代わりに怒ると色々変わっちゃうんだよな」
体をボキボキ鳴らしながらストレッチを始める

「口調がいつもらしくないですよ？どうしました」
ツヴァイの放つ違和感を探るように聞く

「改造された人達ごめんな、八つ当たりに近いけど。殺して解はして
並べて揃えて晒して刻んで
炒めて千切って潰して引き伸ばして刺して抉くって？がして断じて割く
り貫いて壊して歪めて縊く
びくって曲げて転がして沈めて縛って犯して喰らって辱はずかしめて差し上
げてやるよ。ってセリフまんまパクっちまったぜ」
ツヴァイだった男はこのセリフで完全になった

白が黒くなるような感覚

明が暗になり、表が裏に変わるような感覚だ

「お前はツヴァイ・ドウか？」
ミハエルが恐怖に似た感覚を覚える

「言っただろ？俺はキレると色々変わるんだよ」
口元を歪めているがその目は鷹のように鋭い

「ひっ！お前らコイツを殺せ！早く！」
それに怯えたミハエルが改造人間達に命令をする

一斉に来た改造人間達をさっきとは違い^{なぶ}髑のように斬りつける

只では殺さず足で顔面をおもいつきり踏みつけ潰したり、心臓を握り潰したりしていて悲鳴と苦痛に歪む顔を楽しんでいる

「かつはっは、ストレス発散になるなこりゃ！」

笑いながら次々と屍の山を築いていく

「馬鹿な！完成機だぞ！？その上お前はそんなボロボロの体なのに何故！？」

ミハエルは恐怖で腰が抜け、立てなくなっていた

「お前に話す義理も義務も理由も必要もねーよ」
言いながらもどんどん山を高くする

そして最後の1体を無造作に山に乗せるとミハエルのほうを向く

「いい気になるなよ、こっちにはまだ最終兵器があるんだ」
ミハエルが大声で言う

「さっきの女じゃねーか」

さっきまで案内をしていた女性がミハエルに近づく

フードを外しており、可愛らしい顔が見えるがまるで生気が無い。年齢はゼブル達と同じくらいだろう

「彼女こそ最終兵器デウス・エクス・マキーナだ。最初の捕虜であるこの女に記憶の改竄と肉体改造をゆつくり重ねる事で最強の兵器となった。この薬を打ち込めば今後は使い物にならなくなるがお前を倒すのには事足りる」

注射器を男に見せるミハエル

すると男が

「お前馬鹿だろ？そんなの打ち込ませなけやいい話だ」と言い、銃を注射を持っているほうの腕に向け。そして撃つ

撃たれた腕ごと貫通し血が溢れている

持っていた注射器は地面に落ち、それを男が再び放った弾丸で壊れる

「そんな馬鹿な、卑怯すぎる！」
腕を押さえながら叫ぶミハエル

そのミハエルに

「お前が言っな」

と笑顔でミハエルの心臓を撃ち抜く

「ぐはあ！」

体が振るえ、そして息絶えた

「死んだな。さて、こいつは確か記憶が改竄されてんだよな？なら…… 1年前の人格になれ」

男は女性にゼブルのギアスを使った

女性はさっきまでとは違い目に生気を戻したが

「貴方は私をどうしますか？体は弄られ回され機械が埋め込まれて、記憶も曖昧なこの私を」

と力無く聞く

「そんだけ残ってりや十分だお前はこれから俺の部下だいいいな？」
男が勝手に決める

「何故？」

女性が首を傾げながら言う

「甘ちゃんな表なら同じことをする思ってな、お前の使い道は表が決めるだろ」

男が言う

「表とは？」

「俺のことです。久しぶりだからって派手にやってくれましたね、只でさえ死にそうなのに更に疲労で体がボロボロですよ。全く」
いつの間にか男からツヴァイに変わった

どうやらミハエルを殺したとことで怒りが収まったようだ

「どう言う「気にしないでですよ。それより俺の部下になりますか？別にノーでも殺しはしませんから」……良いんですか？」

「構いませんよ」

ツヴァイは笑顔で聞く

「よろしくお願いします」

頭をぺこりと下げる女性

「分かりました。さっきの俺の事は秘密にしてくださいね？」
ツヴァイが女性に言う

「はい」

「そういえば、貴方のお名前は？」
よたよた歩きながら聞く

疲労が溜まっているのだろう。それを見かねた女性が肩を貸す

「マキーナと呼ばれていました」
女性（以降マキーナ）が言う

デウス・エクス・マキナ 機械仕掛けの神と言う意味だ。つまり

「（少なくとも只の改造人間では無いでしょうね）そうですか。これからの貴女は自由です。今までの分の幸せと思えるものを作っていきましょね。マキーナ」
ツヴァイが言うと

「はい」

年頃の少女のような笑顔で返した

多分この笑顔は無意識で出来たもので、再びやれと言われても今はまだ出来ないだろう

「（これからゆっくりきっかけを探して元に戻していけばいい）」
とツヴァイが思う

旧ブリタニア基地前

「只今戻りました」

ツヴァイが基地から出てくる

サザールランドのアサルトライフルの銃口がツヴァイ達に向けられていた。最初は驚いたツヴァイ達だが周りから大きな歓声が沸いた

「ツヴァイ殿！？よくぞご無事で」

アイネが泣きながらツヴァイに抱きつく

「ぐっ！」

しかし疲労の溜まっているツヴァイには攻撃でしかない

「すみません！ツヴァイ殿大丈夫ですか？今すぐ救護班を呼んできますね」

慌てて離れ、ツヴァイの体を撫でるアイネ

「アイネ卿大丈夫ですから取り敢えず休めるところに」
アイネを落ち着かせるように言い、再びマキーナの肩を借りテントで横になるツヴァイ

「改めて見ると凄い傷ね。火傷、擦り傷、打撲。こんな傷でよくモニカも怪我を見て驚いた

そして身を挺して子供達を救った事や、満身創痍の体である数の敵に向かう姿勢を見せたツヴァイを見て妹やアイネがツヴァイに惚れた理由がモニカには分かった気がした

「モニカ卿ですか、アイネ卿や子供達を逃がしてくれてありがとうございます
ございました」

アイネの膝枕で体を休めているツヴァイが言う

上はアイネ、左右にはモニカとマキーナに挟まれているツヴァイを
世間の男達は妬ましいと思うかもしれないが、ツヴァイは今そんな
事考えられないほど疲労している

「気にしなくても良いのよ。それよりどうなったの？それからその
子は？」

モニカがマキーナを見ながら聞く

「まずミハエルと改造人間達は俺が全員殺しました。その後実験さ
れていた彼女に救われて出てきたんです」
ツヴァイはマキーナを見ながら言う

「この人はこれからどうするんですか？」
アイネがツヴァイに聞く

「俺の部下になりました。彼女にはもうすぐ出来るニルジヨワの孤
児院の先生をやって貰います」

「勝手に決めていいんですか？」
アイネが聞く

「一応俺が孤児院の園長ですから大丈夫ですから」
ツヴァイが言う

「本当に私なんかでいいんですか？」
マキーナは心配そうにツヴァイに聞く

「ええ、他にも此処にいる行く当てのない子供達も孤児院に入れてあげて下さい。俺は少し疲れましたので自室で寝かせて頂きます」
ツヴァイが立ち上がり言う

「それより治療を受けた方が良いでしょう」
アイネは少し残念そうな顔をする

「寝れば治りますから大丈夫です。では、後の事はモニカ卿お願いします」
モニカのほづを見て言う

「分かったわ、後の事は私が全部やるから貴方はゆっくり休みなさい」

「ありがとうございます。6時間は入らないで下さいね」
ツヴァイが言う

「お疲れ様でした。ツヴァイ殿」

「ごゆっくりお休みなさいませ」

アイネとマキーナがツヴァイに言う

「アイネ卿も無理はせず、マキーナはアイネ卿の言うことを聞くのですよ」

アイネとマキーナに言う

「はい」

その返事を聞きツヴァイはテントに戻っていった

ツヴァイのテント

「さて、治女神の首飾り置いてきちゃったからな。置手紙して日本に戻るか」

アイネ用とマキーナ用それからモニカと他のラウンズ用と皇帝用、ファカルティーズ用にコーネリア用をそれぞれ書き机の上に置いておく

「さて、インフィニットソリッドメイクス無限次元空間製作発動、リング1へ転送」

渦のようなものに吸い込まれ一瞬でアツシュフォード学園のゼブルの部屋に着いた

仮面を取って見るとほぼ半壊状態だった

「よく外れなかったな、これも神様の加護かな？」
感心しながら壊れている仮面を見るツヴァイ

「(さて、服と仮面は捨てて、アンリミットドブレイドワークス無限の剣製で新しいのを作るか。寝るのは無限次元空間製作のボックス2に予備の布団があったから其処で寝よう。明日には全快になつてるだろうから、久しぶりにガ―ベスちゃんやルルーシュさん達に会おう)」

明日を楽しみにゼブルは寝るのであった

第三十三話 番外編？ ツヴァイとエリア10救出作戦(2) (後書き)

男(本名不明)

ゼブルの中に元々いた別人格

普段は寝ているのだが何かしらのきっかけで現れることがある

マックスの口調と似ているのはこの《男》を基に作ったからである

第三十四話

番外編？

ツヴァイとエリア10救出作戦（その後）

（前書き

更新が遅くなってすみませんでした

お陰さまで学年末も終わり休みが増えると思うのでこの機に出来るだけ書きたいと思います

第三十四話

番外編？

ツヴァイとエリア10救出作戦（その後）

うるさい着信音で目が覚める

寝ぼけて一回転ぶが何とか歩いて数歩の着信地まで行く

「どっかしたのか？」

画面に映ったVVにゼブルが聞く

「君のことが心配になってね」

本当に心配していたのか目の下にクマが出来ている

「俺は至って普通だから。心配すんな」
体を動かしながらいう

「軍の上層部は失踪の事で色々大変みたいだよ」
欠伸をかみ殺しながら言う

「それは悪い事をしたな（まあ、成績は出しているから大丈夫だろう）」
「
頭を掻きながら苦笑する

「で、これからどうするんだい？」

「少しの間ツヴァイは休む。この前の戦闘の傷がまだ癒えてないもんでな」

ポンポンと自分の胸を叩きながら言う

「大丈夫なのかい？」

不安そうな顔で聞いてくるVV

「外傷は殆ど無いが内部の損傷が激しくてな、それに休むにはいい機会だ。これからは学校生活をエンジョイするよ。あ、復帰は2、3ヶ月かかるけどいいか？」

着替えながら聞く

「別に構わないよ。じゃあそろそろ寝るね、こっちは深夜だからさ目を擦りながらVVが言う

「悪かったな、今日ぐらいはゆっくり寝てくれ」

「うん、お休み」

そう言うつと画面が消えた

「VVにも迷惑かけてばかりだな　そろそろ行くか。おっと、アリバイ用の荷物も持って行かなくちゃな」

空間に穴が開き其処に手を入れ小さめの袋を2つ取り出す

「あれ？そういえば俺いつこの部屋に戻ってきたんだっけ？年かな、

記憶が無いや」
頭を抱えながら部屋を出て行く

視点 変更 ナナリー
アツシユフォード学園内

ルルーシユは何処かに、咲世子は買物に出ているのでナナリーは
1人アツシユフォード学園を散策していた

ゼブルから借りているハッピーは寝ていたようなのでそのままにし
て出てきた。これによりハッピーが目を覚ましナナリーがいない事
でパニックになっている事など知る由も無い

874

「（そろそろ戻りましょうか）」
少し肌寒さを覚えたので車椅子を動かそうとすると

聞き覚えのある足音が近づいてくる
「あ、ゼブルさんですか？」
目の前に止まった足音の主に聞く

「ん、久しぶりだねお散歩中かい？」

ナナリーに少し近づき言う

「はい、これから戻ろうと思っていましたけれど、それより今までどうなさっていたんですか？皆さんが心配していましたよ」
首を傾げながら聞く

「クマモトまでちょっとね。はい、お土産のいきなり団子」
持っていた袋の1つをナナリーに手渡す

「ありがとうございます。それより何をしにクマモトまで？」
袋を足の上に置く聞く

「注文していた衣類を持って来いって頼まれてね、ついでにタイプ
ーエンって言う麵料理セットも買ったんだけど。バイクで数日かけて
行ったのに運送が出来るって言われた時は落ち込んだな」
ため息を吐きながら言う

「そ、そうなんですか？えっと、その人とゼブルさんはどういった
ご関係なんですか？」
話をクマモトから逸らすように言う

「武術の兄弟子兼相談役で俺は相談を聞いている側。ナナリーちゃん
も聞いたことのある名前だと思うよ。ヒントはあるメンバーに所属
してるけど一番謎めいている人です。ナナリーちゃんも人脈を使え

「は会えるかな」

「うーん誰でしょうか。難しいですね」
真剣に考え始めるが分からないようだ

「俺はこれから生徒会室に行くけどナナリーちゃんも行く？」

「はい、お願いしていいですか？」
ナナリーが申し訳なさそうに言う

「了解しました。お嬢様」
そう言い車椅子の後ろ側に回り押し始める

視点 変更 ルルーシュ
生徒会室

ルルーシュ、リヴァル、ミレイの3人がそれぞれがそれぞれの事をしていた

「（ツヴァイの映像……あれは普通の人間が出来る動きを超えている。しかし映像を調べた結果CGは使われていなかった。只者で無いとは思っていたがこれ程厄介な奴がブリタニアに組してるとなる

とはな、その上俺のギアスも奴のヘルメットの前では無意味だろう」
「一度大きく頭を俯かせる

「（まあ、軍の内部の情報を調べた限りでは奴は行方を暗ませている。これはチャンスだが 奴は一体何者だ？俺のファンだと言いついて、逃がすという軍にあるまじき行動を行う。身元も性別も不明で謎の多い奴だが、いつもこのエリア内で行動している。何故だ？このエリアに留まる理由があるのか？あの娘達の為か？しかし養子に迎える前からこのエリアに留まっている………全く持って分からんな）
ため息を吐くルルーシュ

「どうしたんだルルーシュ？難しい顔して。俺の話聞いてんのか？」
向かい側で気になったリヴァルが聞く

「ああ、ちょっとな」
頭を上げリヴァルに言う

すると

「皆暇だね。休日にもいるなんて」
ゼブルがナナリーを押しながらドアを開けて入ってくる

「ゼブル！お前また何処かに行つてただらう？」
リヴァルが入ってきたゼブルにリアットをくらわせようとする

それをスツと避け

「クマモトにね、お土産はいきなりは団子」
勢いで倒れたリヴァルに袋を見せる

「ナナリーと一緒にだったのか？」
ルルーシュが聞く

「お兄様、何処かに行くって言っていますでしたっけ？」
ナナリーが驚いたように聞く

「ああ、一回租界の図書館に行っていてんだ。言うのを忘れてたな」
ルルーシュが申し訳無さそうに言う

「いてて、それよりお前昨日のテレビ見たか？」
立ち上がりながらリヴァルがゼブルに聞く

「テレビがどうかした？」

「ほら、アリス達の父親のナイトオブブラウンスのツヴァイ・ドウ卿
主演映画がハッキングされてブリタニア本国と各エリアに流された
話だよ」

リヴァルが興奮気味に言う

「今だってニュースになってるしね」

奥にいたミレイも話に乗り出した

「リヴァルさんあれは18歳以下は見てはいけないとドウ卿が言っていたじゃないですか」

近くにいたナナリーがリヴァルに言う

「細かい事は気にしない気にしない」

「……どんな内容だった？」

ゼブルが聞く

「総勢60人の傭兵集団vsドウ卿と機関銃vsドウ卿それから改造人間vsドウ卿、で最後は更に強化された改造人間vsドウ卿。どれもリアリティある映像だったな。アイネもいたけど出番少ないし、ドウ卿以外いらないだろう。それに爆発の後は何も聞こえなかったし途中で終わっちゃったけど楽しかったぞ。俺ドウ卿のファンになったな」

リヴァルが更に興奮して言う

「へー」

考えながら頷くゼブル

「？ 誰かが走って来ます」

ナナリーが近づく足音に気づき言う

すると

「はあはあ、やっぱりいた」

入り口からアリスが肩で息をしながら入ってきた

「あら、アリス達じゃない。ナナリーならここよ」
ナナリーの車椅子を運びながら言う

「ごめんナナリー、今用があるのはコイツよ」
ゼブルに指を指し言う

「リヴァルに？」
横にいるリヴァルに言うゼブル

「え、俺？」
満更でもないような顔で聞く

「違う！アンタに用は無いわよ。隣！」
スパツとアリスが言う

リヴァルが落ち込んだように椅子に座り込み。それを哀れそうに見るルルーシュとミレイ

「貴方と父上はどういった関係を？そして父上は何処にいるか知っ

「ていますか？」
後から来たサンチアがゼブルに聞く

「お父様からの置手紙で『困ったことがあったら同じ学校にいるゼブル・オウサルトと言う人に遠慮無く言ってください』と書いてあったんです」
後から続くようにルクレティアが言う

「（ゼブルはツヴァイと関係があるのか！？）」
静かにゼブルを見るルルーシュ

「あんだ達ドウ卿の居場所を知らないの？」
ミレイが聞く

「この置手紙を残して何処かに行っちゃって。パパ曰く『少しの間鍛え直すので探さないでください』って書いてあるんだよね」
ダルクが手紙をヒラヒラと見せながら言う

「鍛え直す？何で？昨日の映像見たけどあんなに強い人初めてみたぜ」
リヴァルが聞く

「それが原因だと思っただけだね」
アリスが言う

「アリスちゃんも見ていたんですか？」
ナナリーが聞く

「ごめんナナリー！やっぱり心配じゃない。お父さんは確かに強いけど戦場じゃ何があるか分からないし」
あたふたしながらナナリーに説明する

「！じゃあ、あの映像本物なの！？」
ミレイが驚く

ミレイだけでなくリヴァルも驚いている。アリスはしまったみたい
な顔をしている

「（やはりそうか、しかしあの映像が本当であればミハエルと言う男があれ程の改造技術を持っているとは。ラクシャータでもあそこまでの技術は無いだろう。いやあの技術があつたとしても黒の騎士団には必要無いな）」
ルルーシュはその話を静かに聴き続ける

「これは軍内でも極秘情報ですのでご内密に」
サンチアがアリスを軽く睨みながら言う

「で、ドウ卿と関係のある俺なら居場所を知っていると思ったのかい？」

今まで黙っていたゼブルが聞く

「知らないの？」

ミレイが聞く

「俺は知らないけれど知ってるかもしれない人は3人いるね」

台本を言うように黙々と言う

「！ 誰ですか？」

ルクレティアがゼブルを見つめる

「（ツヴァイの関係者か、知っておいて損は無いな。しかしゼブルの喋り方が何時もと違うか？いや、気のせいだろう）」

「（ゼブルさんの話し方が変わった？）」

鋭いルルーシュと聴覚が優れているナナリーは違和感に気づいたがそれを口には出さない

「まずツヴァイさんを鍛えた人は今中華連邦で名のある武術家を狩ってるから会うのはまあ無理だね。次に彼の行きつけの店『EMIYA』のシロウさん。最後にツヴァイさんと仲の良いイレブンのMさんだね」

ゼブルが言う

「……あんだ、お父さんとどんな関係？」
アリスが少し睨みをきかせて聞く

「私も気になるわね」

ミレイが言う

ミレイだけでなくこの部屋の全員が同じ気持ちだろう

「まず、俺を鍛えた人とツヴァイさんを鍛えた人が同じ人で今は中華連邦にいるチャンさん。ツヴァイさんは俺の兄弟子にあたるわけだね。次にツヴァイさんがよく行くお店で俺はバイトをしていた。以上」

何とも無いように言う

「これは深いわね」

ミレイが頭で関係図を作りながら言う

「え？じゃあさっき言っていたのはドウ卿の事だったんですか？」
ナナリーがゼブルに聞く

「正解……そうだ！君達にツヴァイさんからプレゼントがあるんだ
った。ちょっと待ってて」

ゼブルが何か気づいたらしく走って何処かに行ってしまった

「プレゼント？」

ミレイが首を傾げながら言う

「確か衣類と麵料理セットって言っていましたよ」
ナナリーがミレイに言う

「関連性が無いな」
ルルーシュが言う

「ドウ卿って謎だな」
リヴァルが頷きながら言う

数分後

「お待たせ。えっと、これがアリスちゃん、これがダルクちゃん
だな」

大きめの袋を5つ持って帰ってきて1つ1つそれぞれに渡す

「これは？」

サンチアがゼブルに聞く

「ツヴァイさんから君達へのプレゼントのドレス」
ゼブルが笑顔で言う

開けてみると赤、水色、黄緑、白、黒のドレスが出てくる。

キラキラと細かな宝石で描かれた模様が光を反射し眩い位光っている

「凄い」

「綺麗です」

それを見た全員が息を呑んだ

「これはクマモトにいる仕立ての名人にツヴァイさんが頼んでいたものなんだよ。君達に似合うように選んだらしいけど、どうだい？」
ゼブル4人に聞く

しかし目の見えないナナリー以外はドレスに夢中になって聞いていない

ゼブルは大きく手を広げ響く音で叩く

それで全員が我に戻った

「えっと、マオって子にもあるんだけど届けてくれない？」
サンチアに最後の1つを渡す

「はい。それよりMと言う人にはどうしたら会えますか？」
サンチアがドレスを綺麗に畳みながら聞く

「言っておいて何だけど多分聞いても誰も分からないと思うよ」
ゼブルが頭を掻きながら言う

「何故です？」
ルクレティアが聞く

「えっと その…ツヴァイさんの事なら徹底的に情報を遮断しているだろうから」
言葉を濁しながら言う

「でも、少しでも可能性があるのなら試すわよ」
アリス達がゼブルを見つめる

「……そう、でもごめんね。Mさんはゲットにいるって事しか知らないんだよね。もし行くんだったら包帯を顔に巻いている金髪の男の人だから」
ゼブルがいい

「分かりました。では失礼します」
そう言い出て行った

「（ん？包帯で顔を巻いている金髪のM……………！ マックスか！？）

「
ルルーシュがハッと気づく

「……………」

出て行ったアリス達の後ろ姿を悲しげに見つめるゼブル

「どうかしたの？」

ミレイが気づき聞く

「ちょっととしたした罪悪感ですね
ゼブルが呟く

「（……………少し話を聞いてみるか、必要とあらばギアスも）
ルルーシュは小さな決意を固める

視点 変更 ゼブル

料理屋『EMILYA』の裏口

「こんにちは」

扉を開けて入るゼブル

「少し話を聞かせてもらおうか」
何か考え事をしていたようだ

「その様子だとあの子達が来たようだね。俺の戦い映像は見た？」
ゼブルが飄々と言う

「ああ、最後は随分君らしくない戦い方だったな。そんな事よりこれからどうするつもりだ？」
いつもと変わらない渋い顔をしながら言う

「少しの間ツヴァイはお休みするよ」
畳の上に座り胡坐をかく

「そうか……あの子達はとうするんだ？」
シロウがゼブルを見ながら言う

「そこでシロウさんにお問い合わせがあるんだけど」
待ってましたとばかりにゼブルが言う

「何を言うのか大体は予想が付くが。何だ？」
ため息を吐きながら聞く

「あの子達を此処で住み込みで働かせくれないかな？シロウさんと一緒なら安心だし、それに軍以外の場所で働いてお金を稼ぐ方法もあるという事を知って欲しいからね」
ゼブルが勝手にお茶を入れて飲んだ

「遠回しにあの子達の世話を私達に押し付ける気だな？」

「どう？哀れな少年を救うと思ってさ」
シロウに聞く

「私は別に構わないがセイバーにも聞いてみない事にはどうとも言えんな。この事実を話したらどうだ？君がツヴァイをやっている事も含めて」

シロウが少し考えながら言う

「セイバーちゃん頭硬いからさ、未成年の癖に養子縁組なんて何考えているんですか！？等等の文句長ったらしく言われそうだからね。あと、あの子達には今日までは今まで通り軍で寝てもらっけれど明日には置き手紙でも用意しておくよ。セイバーちゃんには変装してよく店に通っている事をシロウさんが気づき、偶然町で出会って話を聞いたら良い奴でその正体がツヴァイだったでいいんじゃないかな」

お茶を飲みながら言う

「ふむ、それが妥当だろう」
頷きながら答える

「じゃ、そろそろ帰るね」
お茶を飲み終えゆっくり立つ

「君はいつも急だな」
シロウが再びため息を吐く

「何かと忙しい身でね。分かっていると思うけどセイバーちゃんに俺のことは秘密だよ」
靴を履きドアに手を当て出て行く

視点 変更 ロイド
ブリタニア軍内にある特派専用ルーム

「えっと、これは動力を」
1人で呟きながら機械を弄るロイド

「久しぶりだねロイド君」
後ろからゼブルが声をかける

「本当だね。今まで何処に？」

振り向き少し驚いたように聞く

「クマモトまでね。それよりロイド君、この機体は？」
ロイドが弄っていた機体を見ながら言う

外見はランスロットに近いが額には角が生えている。ランスロットの基本カラーは白と金だがこの機体は白と青である

「うん？これはねえランスロットの予備パーツや試作部品をサザーランドに組み合わせて製作したランスロット・クラブだよ。ナイトオブツリーのツヴァイ・ドウ卿の身体データに合わせて作ったんだけどその本人が行方不明らしいからね。他の人に乗らせる為に今から設定を変えるのは色々と不具合が生じちゃうし。それにこのまま他の人に乗らせると上手く動かさなくて壊れちゃうだけだし。もうパニック寸前！」
残念そうに叫ぶ

「じゃあ倉庫行き？」

「ドウ卿が戻るまではそうなるね」
ため息混じりに言う

「ふ〜ん。あつ！これはクマモトのお土産のいきなり団子ね」
お菓子をロイドに渡す

「あつは！ありがとう。昔みたいに君が軽食を作ってくれるなら僕は救われるんだけれどね」
ロイドだけでなく近くにいた作業員も頷く

「仕方ないよ、セシルちゃんは発想が独創的だから」
ゼブルが苦笑しながら言う

「物は言い様だね、それより何の用で来たんだい？」
探るような瞳でゼブルを見る

「ん？お土産を渡しに來ただけだよ。それに様子を見に來たけど少し疲れてない？」
少しやつれて見える

「そうかい？似合わない事したからかな」
苦笑混じりに言う

「なら本当のお土産はがお菓子の袋の中に入っているからそれ見て楽しんでよ。それじゃあ」

「？ じゃ〜ね……袋の中ねえ」
ゼブルが去るとロイドが袋を乱雑に破ると中から赤色の小さな封筒が出てきた

「これは」
中には紙に書かれた新しいナイトメア用の武装の原案が数種類入っていた

「ほほう　これは！」
その中の一つに釘付けになる

「『可変式アサルトライフル』か、流石だねえ。ゼブル君は」
そう言うとモニターが並んでいる場所に行きキーボードをもの凄い勢いで押す

「ロイドさん。彼女送ってきましたよ。何ですか？それ」
セシルがロイドに近づき紙を見る

「ん？ゼブル君がくれた参考資料だよ。このランスロット・クラブに導入しようと思うんだ」
セシルには一瞥もせず打ち込む

「相変わらず凄い想像力ですね」
その紙を受け取り少し呆れたように言う

「さて、今日は忙しくなるよ」
嬉しそうに言うロイドであった

視点 変更 ゼブル

その頃廊下を歩いているゼブル

「聞いたか？日本解放戦線の藤堂が捕まったらしいぞ」と聞こえたので横を歩きながら盗み聞きをするゼブル

「ああ、枢木玄武の墓の前で待ち伏せてたら引っ掛かったらしいぞ」若い兵士が笑いながら言う

「マジか！？ダッセエ！」

もう1人の若い兵士も声に出して笑う

「（そうか、その件もあったな。大丈夫だと思うけどやっぱり念には念を入れておくか。ってかガラ悪いなあの人達）」

視点 変更 アイネ

総督室

コーネリアとギルフォードが何かを話している

「コーネリア様。只今戻りました」
アイネが部屋に入りコーネリアに言う

よく眠れていないのか目の下にくまが出来、顔には疲れが溜まっているように見える

「その様子では本国にもいなかったようだな」
コーネリアがアイネの顔を見て悟ったように言う

「はい。ジノやアーニヤ、他のラウンズの皆様、ニルジヨワの人達も知らないとの事です」
アイネがコーネリアに『コーネリア皇女殿下様へ』と書かれた手紙を渡す

「全くこんな置手紙1つ残して消えるとは奴らしいと言えばらしいがな。父上やビスマルクからは何か聞いているか？」
それを軽く読みギルフォードに渡す

「別に気にするな事ではないのです」
アイネが答える

「何を考えておられるのだ父上は」
少し苛立ちを覚えるコーネリア

「映像の事は本国と全てのエリアで映画の撮影と報道させているが
気づく者は気づくだろうから時間の問題だな」
後ろにいたギルフォードがアイネに言う

「面倒ごとだけ残して消えたか、しかしなアイネよ。私は奴がいる
のはこのエリアだと思っぞ」
アイネを見ながらコーネリアが言う

「何故です？」
自信満々に言うコーネリアに聞く

「最初に会ったのはこのエリアで、そしてツヴァイはラウンズにな
ってもこのエリアに留まっていたのだからな、少なからずの理由が
あるのだろう。兄上に頼んで特派にもツヴァイ専用の機体を作らせ
たのだがな」
ため息を吐きながら言う

「特派で思い出しましたが本当に宜しいのですか？例の藤堂の処刑
を枢木スザクに任せて」
ギルフォードがコーネリアに耳打ちする

「構わん。それよりアイネ時間があるのなら今からイシカワに行か
ぬか？少しばかり不穏な動きが目立つのでな」
アイネを見つめ聞く

「……」

「バックは中華連邦でしょう。鋼體ガン・ルウも目撃されていますし、エリア10の事で仕掛けてきたのだと思います。しかしこれは北陸を閉廷する好機になります」
資料に目を通しながらギルフォードが言う

「此処にはダールトンを残していくが、どうする？」

少し考えるが

「行かせて下さい」

意思強く言う

その目に何かを感じたコーネリアが

「そうか。なら直ちに仕度せよ。時間は待ってくれないからな」
よく通る声で言う

「イエス・ユア・ハynes」

ピシッと敬礼をし早歩きで歩き出すアイネ

数分後

「（ツヴァイ殿は私が探し出す！）」
早歩きで歩いて部屋の前に着くと

扉の目の前に置いてある袋に気づく

拾い上げると中には手紙と何かが包まれて入っていた

「ん？コレは何だ？………！ ツヴァイ殿から！？」

手紙の後ろを見るとツヴァイよりと書かれていた

開いて中を見ると

『ハッピーバースデー』と小さく書かれていた

「 ツヴァイ殿私の誕生日を覚えていらしてたんですね」

ニルジヨワと一緒に行った時に色々聞かれその時に教えたのだ

少し手紙を眺め、包みの中が気になり開けてみると

「これは、ドレス？しかもこれほどの物を」

感動しながらそのドレスを見つめる

アリス達ファカルティーズと同じタイプのドレスでサイズはやや大きく色はアイネの髪と同じオレンジ色である

「ツヴァイ殿」

手紙をよく見ると

「ん？『P.S. 復帰は2、3ヶ月を予定してますので心配しないで下さい。それとこの前チラリと見えましたが黒い下着はまだ早いと思います。以上です』」

それを何度も見返し自分が口に出した言葉と書かれている字が同じ事を確認すると

「何でアイツと同じ事言っているんですか！ー！こっちは心配しているんですよ！？こんな無駄なことを書くぐらいなら他にも迷惑かけてすいませんでしたとか、どの位の怪我を負ったとか、今何処にいるかとかそういうのを教えてくださいよ！ツヴァイ殿の馬鹿！
！」
大声でツヴァイに文句を言うアイネであった

視点 変更 ゼブル
租界のとある通り

「ハツクシヨン！ふむ、誰か噂してるな（しかしクマモトの爺ちゃん確かに喜んでくれたけど金とり過ぎでしょ、五千万って。まあ、数カ月後払いだからその点を考えると得か、アイネちゃんは喜んでくれたかな。娘が増えたようでもいいけど、ガーベスちゃんには全然プレゼントしてないし、それ以前に最近が忙しくて会ってないしな。仕方ないそろそろ使うか、黒の騎士団も活発に動くだろうしな。しかしリスクを考えると（」
思考を働かせ色々考え事をするゼブル

『ゼブル様』
後ろからガーベスがゼブルの腕に抱きついてきた

「ガーベスちゃん」
久しぶりに見たガーベスの顔を見て少し疲れが取れたように感じる

ゼブル

『また内緒で学校を休んだりして、心配してたんですよ？』
ゼブルに言う

「……………」
それが微笑ましく思い無言で笑う

『どうかしましたか？』
その様子に少し戸惑いながら聞く

「いや、ちょっと疲れが溜まってたみたいだね」
少し遅れて答える

『大丈夫ですか？私が治しますか？』
心配になったガーベスが聞く

「心配ないよ。それより今から一緒にご飯食べない？美味しい麺料理セットが手に入ってね」
ゼブルが思いつき言う

『いいんですか？』
嬉しそうに言う

「じゃあ、行こうか」
うんうん頷きながら歩き出す

（全くいつもマックスは何故いないんだ！？ツヴァイの事も聞こう
と思っていたのだがな。まあ良い。今度会ったときにギアスを使え
ばそれですむ事だ。隠れた素顔も剥がしてやる）

（あゝもう！ゼブルとか言う人は使えないし、あの肌の黒い人も知
らないって言ってるし、金髪の包帯グルグルの人もいないし。ルク
レティアは不機嫌だし！パパ早く帰ってきてきて！！）

（久しぶりハッピーよ。ナナたんの事でゼブルに色々怒らるだろう
けど、まあ良いわ。それよりゼブルがアナザーカバ変わる自身を使ったようなの
で説明をしたいと思います）

ゼブルは分身『マックス』（命名ハッピー）を作ったけど分身『マ
ックス』はゼブルの分身と言うより『ゼブル自身』なので考え方、
癖、能力は全部同じで経験、記憶、等全てを共有します

しかしリスクが多く

リスク1：『存在』してしまつたので任意で消せなく、死なない限り消えない（死んだら砂粒のように消える）

リスク2：同じ『俺』であるため分身『マックス』が死んだ場合オリジナル『ゼブル』の寿命が半分になる（力の使用中の寿命の減るスピードは普通と変わらない）

リスク3：全てを共有している為痛みが1人に生じれば反対側にも生じる（しかし、痛みだけであつて傷は生じない）

リスク4：これが一番辛い。2人分の記憶が1人1人の頭に入つてくるので記憶がどうしても入りきれずパンクしてしまう。なので使う前に大幅に記憶の容量を空けておく必要がある。つまり記憶を消さなくてはならない。ゼブルの場合前の世界の記憶が半分以上消える事になる

以上

怖いでしょ？ゼブルはもう1人の自分がある事より記憶を消す事に戸惑っていたけどあんまり深く考えない子だからあっさり使っちゃつたみたいね。まあそんな所が好きでもあるんだけど。とにかくこれからは2人主人公がいるから面倒くさくなるけれど分身『マックス』は殆どマックスだけを担当するらしいから悪しからず（

「ここら辺の筈なんだがな」

「困りましたね」

「聞き込みをするか？」

「馬鹿なこと言うな」

シンプルな軍服に身を包んだ4人が地図を頼りに何かを探している

「おい、アンタ等が四聖剣か？」

不意に4人の後ろから声がかかる

4人とも一歩下がりそれぞれ隙の無い構えを取る

「お前は誰だ!？」

女性が聞く

「そう構えるな俺は黒の騎士団のメンバーだ。遅いからお迎えにあがったってやったんだ。付いて来い」

ダルそうに説明をする

「それはすまなかった」

一番高齢そうな男が言う

「藤堂が捕まったらしいな。大方救出を手伝えってところか？」
マックスが歩きながら聞く

「その通り。僕達四聖剣は藤堂さんあつての四聖剣だからね」
眼鏡の男が言う

「挨拶が遅れました。自分は千葉であります」

「卜部です」

「朝比奈と言います」

「仙波です」

それぞれがビシッと背筋を伸ばす

「ああ、俺はマックスだ。別に敬語じゃなくてもいいぞ」
歩きながら適当に挨拶をする

「それよりまだなんですか？結構歩いてると思います」
眼鏡の男（以降朝比奈）が聞く

「あと少しだ おっ、いた。扇！客だぞ！」
廃墟のビルの階段を下り少し離れた所で弁当を食べている扇に大声
で言う

「え？マックス！お前今まで何処にいたんだ？」
弁当を下に置きマックスに近づく

「俺は忙しいんだよ。それより四聖剣連れてきたぞ」
指で指しながら言う

「し、四聖剣!?!」
扇が畏まって頭を下げる

「解放戦線の藤堂がコイツ等を逃がすために囿になってブリタニア軍に捕まってるんだ。だから助けろって事だ。キョウトからの紹介状もあることだしな」
そう扇に説明し今下ってきた階段に向かうマックス

「おい!何処に行く?」
扇がマックスに聞く

「散歩だ。それと今回はちゃんとやるから心配すんな」
そう言い階段を上がって行く

マックスがいなくなったのを
「扇さん。彼は一体何なんですか?」
朝比奈が扇に聞く

「俺もあいつの事はよく分らないんですよ。神出鬼没でつかみ所の

無い奴で、ゼロと同じくらい謎で出来てるんですよ。まあ、有能な奴ですからゼロも信頼しているんですが　あ、此方でお待ち下さい。ゼロと連絡を取りますので」

視点 変更 ライ

ゲッターで適当に歩き回っていたマックス

適当に歩いていけばファカルティーズの面々と出会っ可能性があるからだ

しかしそのマックスを見つけたのは

「何してるんだ？」
後ろからライが声をかけてきた

「オマエか、ただの散歩だ。それより久しぶりだな。カレンと仲良くやってるか？」
近くの瓦礫に座りライを見る

「ああ」
素っ気無く答える

「そうか、今のうちに後悔出来ないくらいイチャイチャしとけ」
笑いながら言う

「セクハラですか？」

ライが若干引き気味に聞く

「未来に何が起こるかをオマエは分からないだろ？後悔は極力少
なくしとかないとな」

さっきとは打って変わって真面目な口調で言う

眼つきもライを試す様な眼だ

その眼に只ならぬ理由を感じたライは

「……肝に銘じておく」

そう呟き、再び歩いき始めた

「賢明だな」

そのライに一瞥もせず只呟くマックス

その呟きが聞こえたライは

「（あの人は一体何を知っているのだろうか）」
只ならぬマックスの存在に不安を覚える

ライはそのまま黒の騎士団のアジトのラウンジに入ろうとする

「例の彼、ライの事だけど」

ラクシャータが小声で言う

自分の名前が出てきたので動きを止める

「しかし調べた限りでは該当する系譜は確認できません、結果は本当なのですか？」

デイトハルトも小さい声で聞く

「キョウト六家の血液サンプルと比較したし間違いはないんだけどね」

「（どうやら、僕の血液検査の結果の事のようにだ）」

「なら黒の騎士団にとっては悪い事では無いだろう。日本の為という大義名分も立つだろう」

ゼロがデイトハルトに聞く

「私はそうは思いません。彼の存在が貴方のカリスマ性に傷を付けるかもしれない。美しい花を咲かすには余分な蕾は摘み取るべき

です」

ゼロに訴えかけるように言う

「よつは彼を排除しろと?」

ゼロがディートハルト言っている意味を理解し聞く

「ちょっと困るわよ。あの子は優秀なデータサンプルなのに勿体無いわ」

ラクシャータは反対の意向を示す

「(排除?大義名分?何の事だ?)」
混乱し始めたライ

「何してんの?」

後ろからカレンがライの背中を押し、そのまま一緒にラウンジに入った

ゼロは仮面で表情が分らないが他の2人にはそれぞれ動揺が顔に出ている

その気まずい雰囲気

「ラクシャータさんに紅蓮の事を質問をしようと思ってたけど、お邪魔でしたか?」

カレンは気まずそうに聞く

「あらら、もしかして聞いてた？」
ラクシャータがライに聞く

「何の事ですか？」
白々しく言う

「なら丁度良い、君の血液検査の結果が出た。君は日本人とブリタニア人のハーフだ」
ゼロから衝撃的な言葉が出てきた

「！」
ライは驚きで顔を引きつらせ

「やっぱり！」
カレンは喜びに満ちた顔でライを見る

「しかも名家の貴族よ」
ラクシャータがそれとなく言う

「ええ！？」
カレンは驚いてライの顔をマジマジと見る

「しかしどう辿ってもその系譜の該当者が見つかりません」

デイトハルトが首を横に振りながら言う

「でも、遺伝子情報は誤魔化せないわよ？キョウト六家の皇家と確実に親戚という結果が出るわ」
デイトハルトを見ながら言う

「……」

「ライが貴族の血筋」

無言のライと複雑な感情を抱くカレン

「何処でどう枝分かれしたのかは定かではないが、君はこの日本の古く尊い血筋を受け継いでいるのは存在だ。より一層君の活躍に期待する」

「ああ、分った」

1つ謎が減った気がした

「それとあなた何処かで身体弄られてるかもよ？調べた結果、薬物なんかで身体能力を強化した跡があるのよねえ。まあ、詳しくは分らないけどホントあなたの正体がきになるわ」
ラクシャータが面白そうにライを見る

「」

1つ謎が増えた気がした

視点 変更 マックス

当てる無い散歩を終えアジトに戻る

「おい、マックス。そろそろ時間だぞ」
扇が遠くから声をかける

近くまで来ると

「マックス」
ゼロがマックスを呼ぶ

「何だ？」

「は、……いや、今回君には陽動部隊を指揮して貰う」
何かしら別の事を言おうとしたようだが話さないらしい

「ああ、別に良いぜ。てか、俺一人で十分だ。他の機体は別の所に
回してくれ」
余裕だ、と付け足す

「分った。では、作戦内容は扇に聞いてくれ」

そう言い足早に何処かに行ってしまった

後ろを向き

「おい、ラクシャータ」

ラクシャータを翠竜の所に呼ぶ

「何かしら？」

キセルを吹かしながら聞く

「この前言ったの付けたか？」

翠竜を指差しながら聞く

「通信機ならとくに付けたわよ。それにしてもアンタさ、この機体どうしたの？こんな高スペックの機体私ですら製作に時間がかかるわよ？」

マックスを探るように見ながら聞く

「俺は秘密の多い男だからな、あまり気にすんな。機体は弄らせてやってんだからよ別にいいだろ？」

マックスがダルそうに言う

「それもそうね」

機体を弄れば満足だし、と呟く

藤堂救出作戦が開始された

マックスに伝えられた作戦はチヨウフ基地正面ゲートへと続く大通りでなるべく大きな騒ぎを起こすのが目的であった

マックスはとりあえず検問待ちの軍事関係のトラックを攻撃する

次々と爆発し炎上していく姿を見て

「さて、これで俺も人殺しだな。いや、カルブ島で既にそうか」
自嘲気味に呟く

するとゲートを守っているサザーランド3機のアサルトライフルが翠竜に向けて放たれる

「おっと、来たか」
それを腰のスラッシュハーケンで飛び避け、そのままゲートから引き離すように下がる

少しゲートから離れる頃には敵のサザーランドは5機に増えていた

「もういいだろう」

そう言うとスラッシュハーケンでの予測不能な動きで敵に一気に近づき

メッサーモードで相手の機体を切り刻み、体中のスラッシュハーケンで薙ぎ倒す

数秒で全機を倒し

「さて、終わったな」

近くの残骸を見ながら呟く

「マックス。後はゼロ達に任せてお前は撤退しろ」
扇から通信が来た

「あいよ（さて、ゼロ、カレン、ライ、藤堂、四聖剣の相手を超えろ）
ク1人じゃ無理だろうからな。おい『俺』、そろそろ来ないと危ないぞ」

翠竜を駆けながら基地に戻っていった

第三十六話 本編17 ゼブルと騎士 ゼブル視点(前書き)

意味不明文と

誤字脱字が大いに目立つと思います

ご報告願います

第三十六話

本編17

ゼブルと騎士

ゼブル視点

「おい、顔動かすなよルルーシュ」
リヴァルが注意する

「あ、ああ、悪い」
下に向いていた顔を上に少し上げる

「違う視線もつと下」
「こつか？」
「行き過ぎもつと上」
「こつ？」
これが数回繰り返され

「も〜表情がさつきと全然違うだろ。此処をこつして そつちを
こつ…で、こつで。よし！」
ルルーシュの体を動かす

微笑むルルーシュとなった

「こつええ〜！」「こつ」
クラスメイト達がリヴァルに向けて言う

「さつきと違う」

「憂い顔のほうが良いのに」
女子達がリヴァルに文句を言う

「何で？いいじゃん馬鹿っぽくて」
近くの女子にリヴァルが言う

「馬鹿って、お前人に何させてんだ」
そのリヴァルをルルーシュが蹴る

『今日って数学じゃありませんでした？』
隣で描いていたガーベスが聞く

「芸術週間だつてさ、ほらクロヴィス殿下の。それよりガーベスちゃん絵上手いね。写真みたい」
くつきりと輪郭を残して書き直しもほとんど無い

『そんなこと無いですよ』
テレテレと絵を隠すようにする

「やい、そのバカップル、イチヤイチャすんな」
リヴァルが急にゼブル達に近寄り不満を言う

「リヴァルも見てみるよ。ガーベスちゃん上手いぞ」

ガーベスの絵をリヴァルに見せる

「どれどれ、うお！神か!？」

リヴァルのオーバリアクションが炸裂した

「本当だ上手いね」

「凄いですね」

それに寄せられたシャーリーとニーナが後ろからガーベスの絵を見る

「2人の絵も見せてよ　えっと、シャーリーちゃんは（宇宙

人？）で、ニーナちゃんは（何でルルーシュさんの胸が大きいのか？）

なんと言うか2人とも凄いね」

2人の絵のセンスに悪い意味で驚くゼブル

「本当ね」

横からカレンが言う

その後ろにはライもいる

「ん？カレンちゃんとライの絵は？」

「ライは上手いわよ」

自信満々に言う

「へー、自分の事のように褒めるね」
棒読みでカレンに言う

「べ、別に本当に上手いだけで、それ以上のことは」
「ごよごよと言葉を濁す」

「で、ライは　へー本当だ。上手い」

席が遠かったのがガーベスの絵よりルルーシュが小さく描かれている

「ガーベスと同じくらい上手いけどガーベスと何かが違うね」
シャーリーが首を傾げながら言う

「何でしょうか」

『私も分りません』

「俺も」

ニーナ、ガーベス、リヴァルも首を傾げる

「答えは、ガーベスちゃんはルルーシュさんを人物として描いているけど、ライは風景として描いているんだよ」
ゼブルが絵を比べながら言う

「何でそんなの分るんだ？」

リヴァルが聞く

「ん？適当だよ。そう思ったただけだよ」
ゼブル自身其処まで絵には詳しくない

「適当ってお前」

リヴァルがため息を吐くが

「でも、そう言われればそんな気がするわね」

『本当ですね』

「確かにガーベスはルルーシュだけを描いてるけどライは周りの人や背景を書いているね」

「でも、普通は人だけじゃない？」

「うん、俺もそうだし」

ザワザワとライの絵とガーベスの絵を見比べる人が増えてきた

「ライは人物画より風景画のほうが得意そうだね。この絵だって分類としては風景画だろうし」

「そこもね　　そう言えばゼブルはどうなんだ？」

ライが思い出し聞く

「俺の絵は君たちとは別次元の物だ」

自信満々に言う

「何い〜！その自信は何だ。見せてみる！」
リヴァルがゼブルのノートを奪い取り見る

「うわあ〜可愛い」

「コレは確かに別次元だな」

シャーリーとリヴァルが頷きながら見る

「いいでしょ？4頭身のルル君だ」

頭が大きく手足が短いルルーシユを自慢げに見せる

「てか、デッサンの授業だろ？いいのがコレ」
リヴァルが聞く

「俺はこれしか描けないんだよね」

笑いながらルルーシユを見ると

「…………お前達は俺をどうしたいんだ」

数時間後

少し日が暮れてきた

【（ヤバイガーベスちゃんと話すぎたか）着いたらピースと換われ】

後悔しながら軍内を走り回っている

【りょうかい。すたいるちえんじ・ピース
ハイドが換わった場所はトイレの一室】

【ギアス発動だと思つよ】
ピースがギアスを発動させる

【範囲が決まってるのが弱みだな。軍内じゃネズミや鳥ぐらいしかないな】

ピースは400メートル内の動物と会話ができる。ゼブル達は動物達に目当てのものを聞き出そうとしている

【うーん、皆知らないと思つよ】

【ロイド君に聞いとけばよかったな】
愚痴を漏らす

【換わると思つよ。スタイルチェンジ・ハイド】

【こんかいはきりかえがはげしいね】

換わったハイドはすぐにギアスを発動させトイレから出る

【仕方ないだろ。ランスロット・クラブが見つからないんだから】
ゼブル達が探していたものはこの前ロイドに見せて貰ったツヴァイ
専用機

まだ特派にあると思ってたのだがもう倉庫に送られていたようだ

【ないとめあなんでしょ？なら、どこかのそこをさがしたほうが
いいんじゃないの？といれでちまちまやるよりいいとおもっよ】

【天才か！】
ゼブルが感動する

【 まあ、いこうか】
ばかなのかな？と内心で思うハイドであった

十数分後

ナイトメアの倉庫を見つけ中を探す

【あれじゃない？】

周りを見回し角が付いている機体を見つける

【お！本当にあつたな】
本物だと確認する

【なら、あとはがんばって。すたいるちえんじ・ぜぶる】
クラブに乗り込むとすぐにゼブルに戻る

「さて、やるか 操縦はランスロットと同じで武装はMVSでヴ
インセントと同じでランスにもなるのか それから・お、可変
式アサルトライフル採用したんだ。まあ元々コイツのだしな」
ポチポチとボタンを押しチェックを始める

「じゃあ、行くか。到着までは40分位かな……ランスロットクラ
ブ、発進」

倉庫の扉を派手に壊しランドスピナーで駆ける

十数分後

あと数キロの所で黒煙が上がっているのが見える

それに気づき

「あつちやく始まつちやてるね。急がないと」
ぼやきながらスピードを上げる

その頃

8対1で何とか攻撃を避けつつ少なからずの攻撃を加えるスザクしかし素人ならいざ知らず相手も一人一人が猛者たちである

一瞬の不意をつかれ紅蓮のスラッシュハーケンでヴァリスを落とすてしまう

「！」

それに気を取られている間にゼロの乗る無頼がランスロットに向けアサルトライフルを構え

「これで終わりだ！」
撃つ

普通なら此処で真打ちが颯爽と登場しピンチを回避するのだが

「やば！スザクやられそうじゃん！」

その真打ちはあと数十メートルの所にいて間に合わない

「何の！」

普通にブレイブルミナスで防ぐスザク

「なら、これで！」

その後ろからト部の乗る月下がランスロットを襲う

此処でやっと真打ちの登場である

ゼブルの乗っていたクラブのブレイブルミナスでその攻撃を防ぐ

「今度はセーフ」

危なかった、と呟く

「あの機体は？」

ランスロットの後ろを防いでくれたクラブの存在に動揺するスザク

「何でクラブが此処に？セシル君！」

ロイドの表情が硬くなる

「はい、総督府に置いてきたはずですが」

セシルも驚いている

「しかも動きを見る限り使いこなしている（ドウ卿用に作っているから他の人には乗れないはず　つまり）」
「ジツとクラブを見つめるロイド」

「枢木卿」

オープンチャンネルでクラブから声が発せられた

「は、はい！」

威圧的な声に少し臆するスザク

「半分は俺が引き受けるので残りの半分を頼みます」

そう言いMVS2本を棒と繋ぎ合せランスの形する

「貴方は一体？」

「只のしがない秘匿主義者ですよ。では、頼みましたよ」

そう言い近くにいたライの乗る月下に近づきランスを振るう

「スザク君今はクラブのパイロットを信じましょう」

セシルがスザクに言う

「いいんですか？」

誰か分からない人物をすぐ信用するほどスザクも甘くはない

「多分大丈夫だよ」

ロイドがいつものように飄々とした言い方で言う

「……分りました」

どうしていいか悩んだが上司の命令を聞くことにした

それに半分になるのならスザクに損は無い

「ちっ、四聖剣と藤堂は白カブトを、カレンとライは角付きを狙え」
動き出したクラブとランスロットにそれぞれ機体が向かってくる

「ぐ、しまった」

四聖剣の攻撃をかわしていたスザクだが建物に潜んでいた機体の不意打ちの突きがコックピットの上部に刺さった

「よく避けた！だが」

武人風な男（以降藤堂）が乗っている黒い月下の持っている剣を上
に上げていきコックピットの屋根の部分が切れる

切れたコックピットの上部が切れた事によりコックピットの中にい
るスザクの姿が全員に見える

「嘘！？スザク」

「！ スザク」

「スザク、何故だ。お前は其処にはいけないんだ」
カレン、ライ、ゼロの動きが止まる

「余所見は程々にしましょうね」

ランスと反対の腕に持っていたヴァリスを3機の足元に撃つ

それで3人ともクラブの存在を思いだす

「貴様！」

ゼロの無頼からスラッシュハーケンが放たれる

それを合図にしたようにライの月下とカレンの紅蓮がクラブに攻撃を始める

「お久しぶりですね。ゼロ」

オープンチャンネルでゼロに話し始める

「？ 誰だ！？」

久しぶりと言うセリフに反応したゼロ

「お忘れですか？ 貴方と愛人さんは俺と面識があるはずですよ？」
少し寂しそうに聞く

「その口調ソヴァイか！」

忌々しげに言う

「正解です。此処は引いてくれませんか？あなた方の計画である藤堂鏡志朗の解放は済んだではないですか。それだけでなくあの機体に枢木スザクが乗っている事を知っただけでも得ではありませんか？」

普通に喋っているがライとカレンの攻撃を避けたり、与えたりしながらの会話である

本来ならライとカレンの2対1では今のようには余裕に戦えないのだが2人の精神的なダメージが大き過ぎ戦いに集中出来ないのだ

「ちっ！」

カレンとライの動きの鈍さはゼロでも分るがゼロもショックで上手く頭が回らないのだ

「俺は前みたいに追いませんよ。それに早くしないと軍からの援軍がもうじき到着しますよ？」

クラブの首で上を指すとサザerlandを運んでいる空輸機が近づいて来る

「分った。ルート3を使い、直ちに撤収する！」

ゼロが声を上げて言う

「スザク君。これで君と私は敵同士だ。次からは手加減もしないしさせない！　また、会おう」

藤堂がコックピットを開きそう言つと月下から煙が出てきた

リーダーを妨害するチャフのスモークだ

「待て！」

追おうとしたスザクだが月下のハンドガンでランドスピナーを壊されてしまった

これでは追えないと悟ったスザクは黒の騎士団を諦め、助けてくれたクラブに近づくと

「いない!？」

コックピットが開いており中には誰もいなかった

スモークに紛れて消えたのだ

軍用の大型車がスザクの乗るランスロットの近くにきた

「スザク君、クラブの中に誰がいた？」

中からセシルがスザクに聞く

「すみません。逃げられました」

ランスロットのコックピットから謝るがロイドは見向きもせず車から降りクラブに乗り込む

「うん、えっと、通常稼働率98.5%か 間違いない、あの人だね」

頷きながら納得する

電源が入れっぱなしだったがそれが幸いして稼働率を見ることが出来た

「この事はコーネリア総督に伝えますか？」
セシルがロイドに聞く

「別にいいでしょ。姿を現さないのなら何かしらの理由があるだろうからね」

そう言い他に残りのエンジニアや使用した武器の使い方などを見ている

「そうですか？しかしどうやってクラブの情報を仕入れたのでしょうかね」

セシルが気になっていた事をロイドに聞く

「外部の人で知っているのはゼブル君だけだけど、彼がドウ卿なはずはないし。もしそうだとしても彼にはクラブが何処の倉庫に保管されている事を教えてないしね」

ロイドが呟くように言う

「では、内部の者が？」

「僕にもそこまでは分らないけれど、データは取れたし別にいいんじゃない？」

面倒臭そうに聞く

「不謹慎です！」

その態度が気に入らなかつたのかいつにも増して大きな声で言う

「じゃあどうすんのさ、一人一人尋問する？」
ため息を吐きながら面倒臭そうに聞く

「それは」

何も言えず口籠る

「なら深く考えるだけ無駄だよ。情報なんて閉鎖してるように感じるけど出る所からは出るからね」
そう言いながらクラブの状態を見る

「……」

何も言えなくなり黙ってしまふ

「ほら、さっさとやるよ。ランスロットはスザク君に乗ってもらつとしてクラブをどうやって入れるかな」
クラブから降り2機の機体を見つめながら考える

「はあ、分りました」

セシルもロイドに続き降りる

視点 変更 マックス

黒の騎士団のアジトの収容スペース

「ゼロ！何で下がった！？あのままいけば枢木スザクは殺せたのに」
千葉が無頼から降りてきたゼロに聞く

「此方の切り札のカレンとライが混乱していた。あのまま戦っても
無駄に被害を出すだけだ」
ゼロがカレンとライを見ながら言う

2人とも深刻な顔をしている

「援軍も来ていたしな」
藤堂が庇うように言う

これでは千葉でもきつく言う事が出来ない

「マックス。私の部屋に来てくれないか？話がしたい」
座っていたマックスにゼロが言う

「別に構わないぜ」

意図を少なからず理解したマックスが立ち上がりゼロの部屋に向か

った

ゼロの部屋

「私の問に答える！」

仮面の左目の部分がスライドし赤い鳥が映る瞳をマックスに向け言う

「う、ううう」

小さな悲鳴を上げながら俯いた

「？（どうしたんだ？）お前とツヴァイの関係は？」
マックスの行動に不審を感じたゼロだが構わず聞く

「秘密」

顔を上げ憎たらしい笑顔をゼロに向けるマックス

「何！？」

動揺で声が震える

「俺がそんな個人情報ペラペラ話すわけ無いだろ？旦那ももう少

し考えようぜ」「
何食わぬ顔で言う

「そんな…」
マックスに怯えるような声で弱弱しく言う

「どうかしたか？具合でも悪いのか？今日はもう遅いし俺はもう寝るぞ、旦那も早く寝ろよ」

そのまま部屋を出て行くマックス
入れ違うようにcccが入ってきた

「……」
椅子に座り込み頭を抱えるゼロ

「どうかしたのか？」
いつもと違う雰囲気思わずcccが聞く

「マックスにギアスが効かなかった」
仮面を取り冷や汗を拭うルルーシュ

「？ どう言うことだ？」
cccがいつもより真剣に聞いている

「考えられるとしたら、ギアスを一度かけた事があるという事だな」
ルルーシュが手を組み必死で考える

「だが、お前は覚えていない」

「ああ、つまり包帯を取っているときにかけたと言う事か……いつだ？」

必死で考えるが浮かばない

顔の細かな形が分らないので、調べようにも調べられない

「お前が無闇にギアスをかけるからだ」

ココがため息を吐きながら言う

「しかしこれでマックスから聞き込むのが困難になったな」
ルルーシュが困ったように言う

「お前はいちいち気にしすぎるんだ。少しは信じたらどうだ？」

「　　魔女のお前がそんな事を言うとはな」

そのセリフに驚いたルルーシュが苦笑しながら言う

ルルーシュの気分が少し落ち着いた

「そう、魔女は気まぐれなものさ」

ここはマックスの出て行った扉を見ている

何か気になることでもありそうだな、探るような目だった

アジトの廊下にて

「（危なかった、あと少しで呑まれる所だったな。でも、これでも
うるルーシュさんのギアスは俺に効かない）」
抑えていた緊張の糸が解け汗がドツと出てきた

包帯も汗で全体が変色してしまっている

「あら、どうしたの？ 凄い汗じゃない」

何処からとも無く井上がマックスに近づいてきた

「王の力に抗うのはそれだけキツイもんなんだよ」

風通しのいい外に出て呟くように言う

「？ どうかしたの？」

声小さくて聞こえなかったのか聞いてて意味が分らなかったのか

「気にすんな」

一回深呼吸をし普段通りに振舞う

「それよりカレンとライはどうした」
マックスが思い出したように聞く

「そうとうシヨックみたいね」
井上が指を指す

見るとその方向にライとカレンがいる

「シヨック中でもイチャイチャだな」
ため息を吐きながら言う

「あら、女心が分って無いのね。こついつつらい時は少しでも心を和らげる何かを欲するのよ」
井上が何故かマックスに寄り添いながら言う

「よく女心が分るな」
マックスが言う

「喧嘩売ってる？」
少し睨みながら聞く

「そこはノリツッコミを期待してたんだがな」
少し圧倒されてしまった

「あら、それはごめんなさい やっぱりあなたもショックなの？」
顔を笑顔に変えマックスに聞く

「オマエ等がショックを受けたのは知らなかっただからだろ？俺は知っていたしその事実を受け入れていたから別に問題無し、たとえ知らなくても俺とアイツはそこまで関係が無いからな」
欠伸をしながら言う

「知っていたら何で言わなかったの？」

「確証は無かったし軍のブロックも硬かったからな、そんな曖昧な情報を教える訳にはいかないだろ？」
俺の情報に偽りを入れる訳にはいかない、と言う

「ふん、そうなの。プライド高いのね」
そこまで興味も無さそうに言う

「オマエもいつもと違うな、慰めて欲しいのか？」
井上を少し見る

いつもと違う、と言ったものそこまで違いはないように見える

「あら？誘ってるの？イケメンだったら考えてあげるのになあ」
首を傾げながら包帯に手をかける

「向こうは終わったみたいだな」

その言葉を見無視し、手をはらいライ達を見る

「あら、本当ね」

残念そうに払われた手を撫でながら言う

「さて、寝るか」

再び欠伸をし用意されている自分の部屋へと向かう

「え〜？今から飲もうと思ったんだけど一緒に飲まない？」
後ろから井上が不満そうに言う

「俺はアルコールとニコチンが嫌いだ」

「以外ね」

意外そうに言う

「オマエも夜遅くまで酒飲んでると肌に悪いぞ」

「心配してくれるの？嬉しいわね。お姉さん惚れちゃいそう」
マックスを後ろから抱きつく

「女が無闇に男にくっ付くな。そして早く寝ろ」
鬱陶しそうに井上の腕を軽く叩く

「もう、お堅いわね」
むすくと顔を膨らませる

「おい、井上！藤堂救出の宴しようぜ！」
マックスが消えた反対側の通路から玉城が近づいてきた

すでに酔いが回っているようだ千鳥足で向かってくる

「遠慮するわ」
ため息を吐きながら誘いを断る

「何でだよ！つれねーな！」
酒をラッパ飲みしながら

「彼から見たら私と玉城って同類なのかしら」
嫌だわ、と少し嘆く

「あん？何だ？楽しく飲もうぜ！」
チンピラよろしく絡んでくる

「同じ男でもこころも違うのか」
ため息を吐きながら結局最後には飲む事になる井上だった

（カレンも僕も覚悟は決まった僕はカレンの為にも自分の為にもスザク、君を倒す！）

（何かルルーシユもスザクもゼブルもライも構ってくれないな。俺置いてけぼりなのかな。やば、考えてたら涙が出てきた）

（危なかったな。俺がクラブに乗っていかなかったらスザク死んでたんじゃないか？まあ、助かったから良かったけど。それより師匠からの手紙でセンジュと言つ木を生やす忍者を倒したらしいけど人違いだよな？棺みたいのが地面から表れその中に入れられて何処かにいったらしいけど穢土転 ないよな。うん、寝よう。明日は忙しそうだし）

今日はゼロが黒の騎士団の上位のメンバーを集め新たに編成された黒の騎士団の役職が発表される

「それでは、黒の騎士団再編成による新組織図を発表する。軍事の総責任者に藤堂鏡司郎」

能力や指揮の実力を考えれば妥当だろう。皆納得の表情を浮かべる

「情報全般、広報、諜報、障害の総責任者にディート・ハルトリー」

「このブリタニア人がか!？」

「しかもメディアの人間だぞ？」

藤堂とは逆に不満の声が上がる

「ゼロ。民族にこだわるつもりは無いがわざわざブリタニア人を起用する理由は？」

千葉がゼロに聞く

「必要なのは結果を出す能力だ。過去も人種も関係ない以上だ」
ゼロが押し切る形で決定する

「次に副指令は扇要」

「俺が？」

少し驚く扇

「まあ、いいんじゃないの？元々のリーダーはお前だし、新参者にはちょっとな」

杉山が言う

「技術開発担当にはラクシャータ」

「当然」

これも満場一致で誰からも不満は無い

「零番隊隊長紅月カレン」

ゼロがカレンのほうを向き言う

「零番隊？」

カレンが聞く

「零番隊は私の直轄となる。親衛隊と考えてくれればいい。そして、特殊零番隊隊長ライ。副隊長にはマックス」

「特殊零番隊？」

ライがカレンと同じように聞く

マックスもゼロを見つめる

「主には零番隊と同じだが君達には私から出された指示を主に独自行動で行ってもらおう。私が一番信用しているメンバーだ。今の所はライ、マックス、ccだけだがな」
最後は呟くように言う

その他の説明を終えるとディートハルトから提案が出た

「枢木スザクは恭順派にとってのリーダーになります。なので私は枢木スザクの暗殺を進言します」
ディートハルトが言う

「成る程な、今までは反ブリタニアのヤツ等には旦那がいたけど向こうにはそんなスターがいなかったからな」
今まで黙っていたマックスが言う

「主義主張では人は動きません。その象徴たる人物が出来てしまつては今では、もっとも確実に現実的な手段として暗殺があります」

「反対だ！そのような卑怯なやり方では日本人の支持は得られない。逆に協力者が減る可能性もある」

「それに、黒の騎士団は武器を持たない者は殺さない。暗殺だと武器を持っていないプライベートを狙うって事になるでしょう?」
藤堂と扇は猛反発する。他のメンバーもあまり快く思っていないようだ

「私は最もリスクの低い案を述べたままで、決めるのはゼロです」
「旦那、どうする?」
デイトハルトとマックスがゼロを見る

カレン、ライ、扇、藤堂、幹部全員もゼロを見る

「その事は少し考えさせてもらう。各自解散だ」
そう言い残しその場から離れる

扇も藤堂も出て行きマックスも出ようとする

「ゼロはどうすると思いますか?」
デイトハルトが聞く

「確かにヤツは厄介だ。だが、殺しちまったら恭順派がますますゼロを支持しなくなるんじゃないかねえか?」
マックスが聞く

「うっ!それは……」
言葉を濁すデイトハルト

「まあ、決めるのは旦那だ。それを俺等が只実行すればいいんだよ」
欠伸をしながら部屋

視点 変更 ゼブル
アッシュフォード学園内

「マジかよ」

「ありえねーだろこんなの」

「しかも少佐だってよ、イレブンが」

いつぞやのカメラ好きの先輩達が口々に不満を言う

「罵詈雑言。そっちでもそうなのかい？スザク」
テレビの画面のスザクを見ながらゼブルが呟く

「どうかしたのか？」

ゼブルがテレビに意味ありげな視線を送っているのに疑問を感じた
リヴァルが聞く

「何でも無いよ」

リヴァルのほうを向き言う

「？ それよりスザクの奴凄いやな。騎士だぜ！？」

視線を画面に戻すとスザクがユーフェミアに剣を差し出している

「全くだね。でも、もっと凄いのはユフィちゃんだけだね」

ユーフェミアを見ると淡々と儀式をこなしている

「何でだ？」

「……」

リヴァルの後ろで映像を見ているニーナも聞き耳を立てている

「エリアの人間を騎士にするなんて普通の皇族達ではやらないし、やろうともしない。まあ、実力と家柄で選ぶから当然なんだけどね。でもユフィちゃんはそのブリタニアの社会に真っ向から反抗する行為だ。前例を真似するのは簡単だけれど前例を作り出すのは難しい」
エリアの人間はブリタニア人から見れば差別の対象だ

現にニーナもイレブンを怖がるのは差別も少なからず入っての事だろう

「凄いなユーフェミア皇女殿下。そんな勇気があるとは」
感動したようにリヴァルが言う

「うん、本当に凄いな　　ちょっと出るね」

何かを思い出したように立ち上がり窓に近寄る

「え？どこに行くんだ？」

「すぐ戻るから気にしないで。さっきから此処から離れろって勘が言ってるね。それじゃ」

そう言つと窓から飛び降りる

「おいおい、此処3階だぞ！」

リヴァルの心配もむなしく普通に着地しそのまま歩いていった

リヴァルもよく見る光景なのだが中々慣れないものである

ゼブルが飛び降りて数十秒後

「ゼブル仕事よ！あら？いないの？」

ミレイが扉を乱暴に開けて入ってきた

「会長！ゼブルなら少し出てくると言っていましたよ」

ミレイに踊りながら近づくリヴァル

「そうなの？スザクの騎士任命パーティーをすることになったから、全員分の料理をお願いしようと思っただけだな」

まあ、いいか、と呟く

「ゼブルに何人分を作らせようとしているんスか？」
リヴァルが恐々聞く

「ん？50人分。ゼブル1人で出来るでしょ？」
さも当然のように言う

「いや、無理ですよ」
リヴァルがゼブルの守備本能にほとほと感心するリヴァルであった

生徒会室近くの小さな広場

ナナリーとハッピーがいる

【久しぶり】

ナナリーの近くの木の上にいたハッピーに言う

少し見つめ

【本物のほうね】
と呟く

【マックスにはマックスをしてもらってるって知ってるだろ】

【まあ、そうなんだけどね】

【今日はナナリーちゃんと一緒か】

【この前の長つたらしいお説教のお陰でね】
思い出すかのように上を見つめる

【ナナリーちゃんが心配なんだよ】

【私知ってるんだからね！ナナさんの親友を無理やり娘にしたとか、夜な夜なその子達とウハウハしてるって。このロリコンめ！いつも夜は興奮して眠れないじゃないの！】
急に興奮し、鼻息？を荒くし言う

【自分の妄想を人のせいにするな。

因みにロリコンは幼女・少女を性的欲望の対象（簡単に言えばエッチい事を想像する）もので、この幼女・少女は13歳以下の子達に對してだからナナリーちゃんはセーフ。

更に因みに精神医学ではペドフィリア、ペドファイルと言います。スペルは p e d o p h i l e です。それ以前に俺がペドフィリアだったらナイスバディーのガースちゃんといチャイチャヤしなと思っぞ】

誰に言っているのか分らないが長い説明をする

【どうでもいい知識をありがとうございました】
羽で拍手をする

【あと、不思議の国の○リスの作者も少女への愛情が強かったらしいです】

【その知識は何処から？】
呆れたように聞く

【ネットです。さて、ナナリーちゃんと話してるから少しの間好きにしていよ】
ナナリーを少し見つめハッピーに言う

【じゃあ、集会に行つて来るわね】

【集会？】

【私が作ったチーム諏華玄武瑠右栖の総集会】
どうやって着たのか分らないが特攻服を身に纏い背中の子を見せる

『天衣無縫』と書かれている

【スカイブルースねえ。随分なネーミングだな（それ以前にいつそんな組織と服を作ったんだ？そんなに暇は無いはずだが、それに天衣無縫の意味を知ってるのか？）】
色々疑問に思うがどうせ言い訳をするだろうからあえて問いたださない

【じゃあ、行つて来るわね】

と言いながら何処かに飛んでいった

【人に迷惑かけるなよ……………さて】
ハッピーが行くのを確認するとゼブルがナナリーに近づく

そして

「何か考え事かい？」

俯いているナナリーの耳元で言う

「ひゃっ！どなたですか!？」

急な事に驚いたナナリーがゼブルを殴る

「1、スザク、2、ライ、3「ゼブルさんでしたか」正解です。それよりどうしたの？かなり痛かったよ」
殴られた頬を撫でながらゼブルが聞く

「ごめんなさい。考え事をしていましたので
ナナリーが慌てて言う

「スザクの事？それともユフィちゃんの事？」
ナナリーの横にある椅子に座る

「 両方です」
俯きながら聞く

「だよね」
飄々と言う

「ゼブルさん。手を握ってくれますか」
少し手を上に上げる

「！　すごい冷たいね」
指先が特に冷たい外にいるのだから当然と言えば当然なのだが

「ゼブルさんは温かいですね。なんだか安心します」
両手でゼブルの手を握りながら言う

「　もし何か俺に言いたい事があつたら言つて大丈夫だよ。愚痴でも法螺でも恋愛相談でも悩みでも不安な事でも何でも俺に言つたら言つていいからね。溜め込むのはよくないからさ」
ナナリーの手の冷たさに早く離したいが握られているので離す事が出来ない

「本当に大丈夫ですから」
ゼブルの考えを察したのか手を離す

「ナナリーちゃんってさ嘘つくときに左手の小指が少し浮くんだよね」
「適切な法螺を吹く」

「え？そうなんですか？」

それを信じ込んだナナリーが左小指を動かし確かめる

「まあ、今は良いけど溜まったと思ったたら俺を呼んで全部出しちゃいな。俺にはその位しか出来ないからね」
「スツと立ち上がる」

「お帰りになるんですか？」
「少し寂しそうに聞く」

「多分ミレイ会長のことだからスザクのパーティーを開くと思うんだよね。だからそのお手伝いにね。ナナリーちゃんも来る？」
「腰を曲げながら言う」

「は、はい！」
「嬉しそうに返事をする」

「アリスちゃん達は来るかな？」
「ゼブルが車椅子を押しながら聞く」

「アリスちゃん達はドウ卿のお知り合いのお店にお世話になって
いるらしいですよ。ですからお店のお手伝いでこれないかもしれませ
んね」

少し残念そうに言う

「ああ、シロウさんの所だね」

ゼブルが思い出したように呟く

置手紙とシロウの協力のお陰で特別工作部隊フェアカルティーズのメンバーはシロウ夫婦が預かる事となった。話によると看板娘が増えた事により効率とお客さんの来店数が上がっているとの事。お客さんは日本人殆どだが時々貴族の人も来るらしい。

あまり差別をしない貴族の人は日本人のお客さんと仲良くしている
みたいだが、差別をする貴族も少なく無くよく喧嘩になる。

そこでゼブルがシロウに特別工作部隊フェアカルティーズの世話のお礼としてシロウの店をツヴァイが買いオーナーとなった。これでナイトオブツアのツヴァイ・ドウのお店として人気上がるだけでなく、営業に支障を
与える人はツヴァイの地位をシロウが行使し出て行けと言えるよう
になった。流石にラウンズ相手に文句を言える貴族はそうはいない。
この方法を使用してからというもの喧嘩や騒ぎが大きく減ったらしい

しかし、姿を消していたツヴァイが只の定食屋に現れた事が災いし、
イシカワから帰ってきたアイネが執拗に聞きに来るはめになるのだ
がそれはまた別の話

生徒会専用クラブハウス

すぐ近くにいた2人だが移動してしまったので遅くなってしまった

「遅い！時間が無いんだからさっさとする」

ミレイがテーブルクロスをテーブルに乗せながらゼブルに言う

「私は何をすればいいですか？」
ナナリーがゼブルに聞く

「ナナリーちゃんはミレイ会長を手伝って。料理のほうは難しいからね」
全部ゼブルが着ける

「すみません」
申し訳無さそうに言う

「気にしない気にしない。会長お願いしますよ」
そう言い調理室に向かう

「分ったわ。じゃあナナリー、これを持っててね」
ミレイがナナリーにテーブルクロスを持たせる

数十秒後

「ゼブル！こっち手伝って！」

「はい」

更に数十秒後

「ゼブル、この後どうするんだ？」

「今行く」

その数十秒後

「きゃっ！熱っ！」

「火傷したら袖をめくらずそのまますぐに冷水で冷やして」

またまた数十秒後

「入れるのはこれかな？」

「シャーリーちゃん違う！それは塩で、入れるのは小麦粉」

ゼブルはあちこち移動しながら教え、手伝い回っている

「ゼブルさん大変ですね」

耳が凄く良いナナリーには数メートル先の声も聞き取れるのでゼブルの状況も分かる

『どうしてゼブル様は私のところにきてくれないのでしょうか』
『ガーベスがしょんぼりとドレッシングを作っている』

『（そう言えば最近は特に一緒に何処かに行ったりしていませんし、話す時間も去年に比べてめっきり少なくなりましたし。もしかして私に飽きたとか？）』
「どんだんマイナスに思考が働くガーベス」

「忙しいから声をかけてこない人は見てられないんだよ」
その隣で何かの炒め物をしているシャーリー

『それにしてもナナリーさんの所に行き過ぎです』
ゼブルを見ながら頬を膨らます

「ナナちゃんは遠慮しがちだし、目の事あるから心配なんだよ」
「よっ、とフライパンを動かし中の具を宙に浮かせる」

『それはそうですが』
少しばかり落ち込むガーベス

すると
「2人ともどう？」
ゼブルが近づき聞く

「うん、こっちは大丈夫だよ」
『だっ、大丈夫です』
ガーベスは少し緊張気味に言う

「ゼブル何か焦げてる!!」

「じゃ、頑張つて」

リヴァルが大声で呼びゼブルが早口で言いすぐさま向かう

『やっぱり私と目を合わせてくれませんでした! やっぱり嫌われて
いるんでしょうか!?!』

涙ぐみながらシャーリーに訴える

「そう? 偶然じゃない?」

ガーベスの取り乱したガーベスに驚きながら聞く

『そんな事ありません! 前だったら「偉いね」って言って頭を撫で
てくれましたし、2週間に1回はキスしてくれましたし、放課後は
よく一緒にお買い物に行ったり、休日にはゼブル様にずっと甘えて
ました。それが最近では本当に無いんですよ!?!』
必死で説明をする

「へ〜(この2人のノロケ話は何故か聞いてるだけで疲れるのよね)

2人のラブラブっぷりな話にため息を吐くシャーリー

『他にも.....』

この終わること無いノロケ話をずっと聞き続け気分が悪くなるシャ
ーリーだった

約一時間後にパーティーがもようされた

集まった皆がスザクに近づき自分の事を話したり、逆にスザクの話
を聞いたりしている

少し前まで只のイレブンとして邪険にされていたスザクだが騎士と
なっただけでこの扱いだ

「（本人が一番分っているんだろうな）騎士就任おめでとう。スザ
ク」

ゼブルがスザクに近づき言う

「ありがとう。それより少し疲れてないかい？」
スザクがゼブルの顔を見ながら聞く

「ちょっと忙しくてね、お！ルルーシュさんも来たね」
スザクの後ろからルルーシュが近づいていた

「悪い遅くなった」
ルルーシュが近づくと

「とんでもない。来てくれただけで嬉しいよ」
スザクは本当に嬉そうに言う

その後リヴァルも含めて少し雑談をしていると

「残念でした。また仕事が増えたねスザク君」
ロイドがニーナと共に入ってきた

「誰？」

ルルーシュがスザクに聞く

「うちの上司」

少し恥ずかしそうに言う

「ロイドさん、どうして」
ミレイが2人に近づき聞く

「あれ？ミレイちゃん知ってる人？」
ニーナが聞く

「婚約者だもん」

ロイドが言う

「「「ええええ!!」「」」
パーティー会場で声上がる

「で、いいんだよね？」
ロイドがミレイに聞く

「は、はあ」

「言っちゃった」
スザクが頭を掻きながら言う

「知ってたのか？」
ルルーシュが聞く

「うん」
スザクが頷く

「わあああ!!」
リヴァルが声を上げながら倒れた

「哀れだな」

「本気だったんだ」
ルルーシュとニーナが言う

「ミレイ会長、ロイド君は止めた方がいい」
ゼブルが近づきミレイに言う

「何で？それより何でロイドさんの事知ってるの？」
ミレイがロイドとゼブルを交互に見ながら聞く

「僕の部署の協力者なんだよ」
ロイドがミレイに言う

「えっ！そんなの？」
ミレイが驚きながらゼブルに聞く

考えれば生徒会の内の3人と深い関係がある人なんてそういるものではない

「まあ、俺は意見を言うだけだけどね。それよりロイド君はオススメできないよ。ロイドさん甲斐性なしだもん」
ゼブルが笑いながら言う

「酷いね、婚約者の前でそう言う事を言っちゃだめでしょ」

ロイドでは文句を言っているが其処まで気にしてはいないようだ

「あの、ロイドさん。もしかして軍務ですか？」
スザクがロイドに聞く

「そ、大事なお客さんが船で来るからお出迎えをね」

「じゃあ、パーティーはお終いか」
リヴァルが起き上がり残念そうに言う

「あつ！ごめん」
スザクが集まった全員に謝る

「仕方ないさ、後片付けは俺達がするから大丈夫だ。行って来い」
ゼブルがスザクの肩を叩き言う

「スザク君時間が無いよ」
ロイドがスザクを急かす

「本当にごめん」
一回頭を下げロイドに付いて行く

パーティーが終了し生徒会メンバー以外はそれぞれ帰ってしまった
そのメンバーもライ、カレンは元々いなく、ルルーシュも用事とか
で何処かに行ってしまった

「結構余ったわね」

残った料理を見てミレイが呟く

「ゼブルさん、どうするんですか？」
ナナリーがゼブルに聞く

「……そうだ。ちょっと待ってて」
そう言い外に出るゼブル

【ハッピー、飯が余ったから舎弟全羽連れて来ていいぞ】

【そう？じゃあ、今から行くから数分後に着くと思うわ】
少し遠くにいるのか返信が遅い

【分った】

「よし、全部外に出して」
交信が終わり部屋に戻ったゼブル

「外に？何で？」

シャーリーが聞きながら料理を外に運ぶ

「ちょっと変わったお客さん達だからね」

ゼブルが言いながら運ぶ

理由は分らないがとりあえず運ぶ面々

「出し終わったぞ」

リヴァルが最後の1皿を運びさす

「？何か聞こえませんか？」

ナナリーが首を上下左右に向けながら耳を傾ける

「聞こえないけど、どんな音？」

ミレイがナナリーに聞く

「流石ナナリーちゃんは耳が良いね。ちょうど来たみたい」
ゼブルが空を見ながら言う

他の全員も空を見つめると

空に黒い線が出来ており、その線が近づいてくる

「何だあれ？」

リヴァルが驚きながら聞く

「え？鳥!？」

シャーリーが姿を確認する

大きさ、色、種類共にバラバラの鳥がゼブル達のいるベランダに降り立つ

「凄い、何匹いるの？」

ニーナがミレイの後ろに隠れながら聞く

【お待たせ、総勢200羽よ】
ハッピーが前に立つ

【足りるかな】
鳥の多さに流石のゼブルも驚く

【まあ、大丈夫じゃない】

【じゃあ、全員が室内に入ったら食べさせていいよ】

【了解】

「皆部屋に戻ろうか」

そう言いながらナナリーに近づくと

「ゼブル何なのこれ？」

ミレイが聞く

「ハッピーの舎弟達で200羽いるんだって」

ゼブルがナナリーを片手で抱き上げ反対の手で車椅子を持ち上げ部屋に入る

ベランダと室内の高さが激しいのでこうするしかナナリーは移動出来ないのだ

『むっ』

それを知っていてもガーベスはナナリーにゼブルを取られているように羨ましいやら不安やらで複雑になる

全員が室内に入ったことを確認するとハッピーがなにやら羽で合図をする

その合図で200羽の鳥が一斉にお皿に乗った料理を啄ばむ

「スゴっ！」

その迫力のある光景にシャーリーが少し下がる

「みるみる減っていくわね」
ミレイが面白そうに見つめる

鳥達は数分で全て食べ終わる

【皆がお礼をしたって】
綺麗に並んだ鳥達の前に立ち言う

【結構義理堅いなだね】
鳥達を見ながら言う

【私の舎弟だもの】
自慢げに言う

【なら、ナナリーちゃんの護衛を頼める？ハッピーがよくさぼるか
らさ】
皮肉げに言う

【じゃあ、私のお役目は終わり？】
ニヤリと鳥とは思えない笑顔を浮かべる

【ハッピーはそのまま他の鳥達は予備で、遠くから見守ってもら
うよ。日替わりで10羽ずつなら苦にならないだろうかな。メン
バーはハッピーに任せるから】

【分ったわ。じゃあ、解散させるわね】

ハッピーが再び羽で合図を送ると鳥達が次々と飛んでいった

ハッピーはそのままナナリーの腕に止まり羽を休める

「いや〜爽快だったな」

リヴァルが興奮気味に言う

「さて、そろそろ片付けしましょうか」

ミレイも興奮しているがキツチリ行動に移している

「じゃあ、咲世子ちゃん。ナナリーちゃんの事よろしく」
後ろを向き咲世子に言うゼブル

「うお！咲世子さん！？いつの間に」

リヴァルが驚き幽霊でも見たかのような反応をする

「よくお分りになりましたね」

ゼブルが気づいた事に驚いているが無表情な咲世子が聞く

「え？普通に窓に反射して見えたけど」

ゼブルが言う

実際にそうなのだから仕方が無い

「そうですね、ではナナリー様行きましょう」

一度頭を下げナナリーの車椅子の後ろに立ちハンドルを握る

「はい、では、皆さん失礼します」

ナナリーが頭を下げそのまま何処かに行く

「じゃあ、片付けするか」

ゼブルが皿を持つ

「ゼブルはもう沢山働いてくれたからガーベスと一緒にもう引き上げなさい」

ミレイがゼブルとガーベスを見ながら言う

『！...！』

「良いんですか？」

ゼブルが聞く

「うん、まだ午後になったばかりだし何処かに行くなりしなさい」

『ゼブル様！行きましょ』

ガーベスがミレイにお辞儀しながらゼブルの腕を引っ張る

「そう？じゃあ、お先に失礼します」

ゼブルが引っ張られながら部屋を出て行く

「これでガーベスがスッキリするでしょう」

ミレイが皿を持ちながら言う

「悶々してましたからね」

シャーリーも続く

「いいな、ゼブルの奴」

愚痴を言いながらも続くリヴァル

ガーベスに引っ張られ租界に来た2人

「そんなにくっ付くと、歩き難いよ」

密着しているガーベスに言う

はたから見ればベタベタしているバカップルだ。まあ、実際にそうなのだが

「我慢してください。それより、これからどうしますか？」
只引っ張っただけなので計画性ゼロである

「じゃあ、映画でも行こうか」
以外に映画好きなゼブルである

「えっと、あの その エッチなのは駄目ですよ？」
顔を赤くしながら言う

前見た映画の事を思い出したのだろう

「今度の映画は人気は無いらしいけど推理物だから大丈夫だと思うよ」
常時持ち歩いている映画のパンフレットを見ながら言う

「そうですか？なら、行きましょう」
ガーベスも映画が嫌いではないので少し期待している

「（ふっふ、今度はどんな可愛らしい反応をしてくれるのかな）」
ゼブルが悪魔の様な笑いを一瞬浮かべ、何事も無かった様に歩き出す

その映画の監督はこの前ゼブルとガーベス、ライとカレンが観た過

激な内容で有名な映画監督と同じであった

つまり

「（そう、ガーベスちゃんと少し距離を取ったのも独占欲の強いガーベスちゃんのリボルテージを溜めさせるため、そして案の定相当溜まっていたのかずつと潰されそうな程体にくっ付けている。お陰で体に大きな胸があたるので健全な男子生徒の俺には苦痛なんだけど。兎に角！これでほんの少しのリボルテージを減げ、最後にこの過激な映画で興奮を急上昇させる！そして！！　放置プレイをしたらどうなるのか試してみましよう。まあ、この後は結果を見ないことにはどうしようもないのでお待ち下さい。

次回ゼブルと神の島です。お楽しみに！！」

「ユーフェミアが本国からの貴族を出迎えにあの島にやつてくる。騎士である枢木サクも共にいる筈だ。それに戦略拠点では無いため敵戦力も限られている。これはチャンスだ！作戦の目的は枢木サク及びランスロットの捕獲。戦場で勝って、堂々と捕虜にする」
ライとカレンが安堵の表情を見せる

すぐに作戦準備に取り掛かるために潜水艦で式根島へと向かった

「藤堂と四聖剣のデータも反映したから、以前より使いやすくなっている筈よ」

ライの月下の前でラクシャータがキセルを吹かす

「そうか」

「あと分っていると思うけどゲフィオンディスターバーの効果範囲に踏み込まないように」

ラクシャータの後ろにある装置をキセルで叩きながら言う

ゲフィオンディスターバー

ラクシャータ作のジャミング装置で、ナイトメアの動力源を磁場で無効化させるだけでなく、ステルス機能も含まれているためトラップとしては理想的な物だ

今回の作戦はゼロが自ら囮になりスザクの乗るランスロットごとゲ
フィオンディスターバーで捕獲するというもの

「（僕の任務はその設置の護衛か）」
地図を確認しながら思う

「オマエは設置だってな」
マックスがライに近づく

「　　あなたは？」
ライが一步離れて聞く

ライはどうしてもマックスを信用出来ないのだ

「俺は空港襲撃のほうだ。それより良かったな、知り合いを殺さず
に済みそうで」
マックスが笑いながら言う

「嫌味か？」
ライの形のいい眉が少し寄る

「違う、忠告だ。今回のオマエは忙しいだろうからな。気をつける

よ

「そう言い翠竜に向かうマックス

「忙しい？僕が？」

何を言っているんだ、と呟き月下に乗り込む

式根島にはすんなり上陸でき、作戦が開始された

零番隊から四番隊までが藤堂の指揮で動き守備隊を攪乱させ、マックスは他の施設を壊していく

そしてゼロの思惑通りランスロットが現れる

「全員散れ！後は私がやる」

ゼロの乗る無頼がランスロットに接近し誘い込む

少し鬼ごっこを続けると

畏の場所に入った無頼が急に速度を緩めたのでランスロットが無頼の行く先をスラッシュハーケンで妨害し、そのまま無頼に一気に近づきMVSを構える

その瞬間

「捕まえた」

ラクシャーターがボタンを押し仕掛けておいたゲフィオンディスターバーが発動する

「動かない？ どうして？」

突然停止したランスロットに驚きを隠せないスザク

「話がしたい、出てきてくれないか。出てこないのなら四方からの銃撃を受けることになるぞ」
ゼロが無頼の中から言う

待機していた五番隊とライが周囲を囲み、藤堂達空港襲撃部隊も集まってくる

「本当に捕まってるな」

マックスが面白そうに言う

「流石ラクシャーターさん」

カレンも嬉しそうに言う

ゼロとスザクがナイトメアから降りる

スザクは何も持っておらず、ゼロは銃をスザクに向けている

2人は何かを話始めた

長く感じる短い時間

しかしそれに水を差す存在がいた

「結構ヤバイな」

リーダーを見つめるマックス

「はあ！？何言ってるんだお前全然こっちの有利じゃねーか」

玉城がマックスの発言の意味を理解出来ず文句を言う

その数秒後

「ミサイル多数接近中！」

井上の声が響く

「何だと！？」

藤堂が上を向く

全員の目が上を見ている隙にスザクがゼロの銃を奪いゼロの首元に

当て、そのままランスロットに入りこむ

「なるほど。枢木スザクごとミサイルで旦那を殺す気が」
マックスが誰に言うでもなく呟く

「何でお前はそんなに落ち着いてんだよ！」
玉城がマックスに怒鳴る

「ゼロ!!」

カレンが紅蓮に乗ったままゼロ達に近づく

ゲフィオンディスターバの効果で紅蓮が止まる
「しまった!!」

「カレン!!」

「馬鹿だな。アイツ」
ライとマックスが言う

どんどんミサイルが近づいてくる

「スザクにゼロを足止めをさせその隙にミサイルで僕達共々吹き飛ばす作戦か!!」

ライが怒りに歪んだ顔でミサイルを見る

「さっき俺が言ったじゃねーかよ」

「弾幕を張れ！撃ち尽くしても構わん！」
藤堂の指示で他の機体も射撃を始める

ライモハンドガンで撃つ

「貴様もやらんか！」
千葉がマックスに怒りながら言う

「無茶言うな。俺の機体に銃器は一切無いんだよ。スラッシュユハー
ケンじゃ焼け石に水だ。作るのにいくらかかっているとやってんだよ」
少しの間ミサイルの迎撃に夢中になっていると遠くから巨大な空中
艦が近づいてくる

「おいおい！何だよありゃ！？」
玉城が驚いて騒ぐ

他のメンバーは騒ぎはしないが驚いている
空中で止まれる戦艦なんて誰もが初めて見るのだから当然といえば
当然である

藤堂達はその空中艦に攻撃を続けるも、何かシールドらしきもので防がれる

「アヴァロンか、デケエな　！　感心してる場合じゃない。ガウ
エインもいるんだ。おい！全員此処から離れろ！！」
感心していたマックスだが思い出して大声で叫ぶ

視点 変更 ゼロ

「このままでは本当に死ぬぞ！」
ゼロが必死でスザクを説得をする

「ルールを破るよりいい！」
しかし強情なスザクには効かない

「この分からずや！！」
ゼロの仮面の左目の部分が動き、左目が露出する

「生きる！」
ギアスが発動する

空中艦（以降アヴァロン）のハッチが開き禍々しい赤黒い光が豪雨
のように降り注ぐ

視点 変更 ライ

爆風で砂塵が舞う

「カレン！ゼロ！」

叫ぶが急にライの頭に頭痛が走る

「うっ！頭が！」

あまりの痛さに頭を抱える

その頭痛の奥に何かの映像が映る

女性だ。ライの良く知る人物

「母……上……？」

小さな声で呟く

もう1人いる。小さな手だ。この小さな手はライの大切な大切な……

次の瞬間、あたりは炎に包まれていた

全てが真っ赤に染まり、大地には人の血で川となっている

「（今のは何だ！？僕は何を！？）」
頭の痛みが引き現実に意識が戻る

「おい、聞いてんのか？撤退だぞ」
マックスがライに言う

「カレンとゼロは！？」
周りを見ながらライが聞く

他のナイトメアたちはゲフィオンディスターバーや紅蓮の回収をしている

「不明だ。しかし我々は全滅するわけにはいかん！今は撤退するぞ」
藤堂がそつ全員に言う

「くっ！無事でいてくれ」
ライは悔しくなりながら撤退する

視点 変更 マックス

潜水艦による撤収作業は成功したものの。艦内ではこれからの作戦方針で意見が割れていた

一旦アジトに戻り部隊の再編成をするべきと言つ藤堂
犠牲覚悟でゼロの救出を訴えるディートハルト

2人が言い合っていると

「仕方ない教えてやろう。あいつは生きているぞ」
cccが話に割り込む

「（あいつは、か。つまりカレンは分からないと）」

「願望を聞いているのでは無「確定情報だ。私には分かる」」
藤堂の言葉を遮りcccが言う

「予言者かお前は。そんな事よりナイトメアの練習しとけって言っ
ただろ。このドアホ！」
玉城がそんなcccの態度が気に食わないのか突っかかる

「オマエは人のこと言えねーだろ。何で安全な今日もやられるんだ
よ」
マックスが玉城を見ながら言う

「うっせ！黙ってる！」
マックスに近づき大声で言う

「だが、cccが言うように旦那は生きていると仮定したとしても、式根島にはいないぞ」「頭を掻きながら言う

「何言ってるんだ？」

玉城が危ないものでも見るかのような目で見る

「なるほどな、あの空中艦も式根島から移動したみたいだ」
少して再び独り言のように呟く

「お前もイカレちまったか？」
本当に危なく思ったのか少しマックスから離れる

「旦那とカレンは式根島にはいない。それだけでなく枢木スザクとユーフエミアも見つかっていないらしいぞ」
マックスが再び呟く

「どうやって情報を？」
デイトハルトが興味深そうに聞く

「人間より確かな情報だ。兎に角、明日の正午まで旦那達を待つ、来なかつたらそのまま藤堂の案に従って一旦戻る。どうだ？」
扇、藤堂、デイトハルトに聞く

「いいんじゃないか」

「良からう」

「仕方ありませんね」

3人とも納得しこの案が決定された

視点 変更 ライ

ライは月下のコックピットに座っていた

「(カレン)」

どうしてもカレンのことがライの頭から離れない

「心配か？」

急にcccが話しかける

「」

「ゼロとカレンの居場所なら知っているぞ」
ライの近くに座る

「そんな情報は聞いていないが」
不審そうにcccを見る

「私には分かる。それより式根島で何か感じたか？」

「!？」

ライが身構える

「」

cccが何かを感じたらしく考える

少しの沈黙が流れ

「2人とも生きているのか？」

ライが聞く

「ああ、神根島にいる」

式根島から其処まで離れていない無人島
腰を上げcccを見る

「信じるようだな。助けに行くか？」

「行きたいさ　だが、どうやって」

「ポートマンを捕獲してあるらしいからな」
cccが思い出したように言う

「分かった行ってくる（ブリタニアの水陸両用のナイトメア。もし

かしたらブリタニアの警戒網を突破できるかもしれない」

「そうか、まあ頑張れ」

そう言つと興味無さそうに去っていく

「（神根島。式根島と雰囲気は似ている）」

何とか警戒網を突破しポートマンを岩場に隠し、密林へと入る

「（しかし、何故ゼロとカレンは式根島で無く神根島にいるんだ？）

「
疑問は残るがこの言葉を信じて探すライ

しばらくすると物音が聞こえる。ブリタニア軍が集合しているようだ

「
慎重に接近すると兵士だけでなくナイトメアも見える。更に奥には
アヴァロンもある

「（あの洞窟を調査しているようだな）」
警備の死角をつきながら洞窟へと潜入する

奥に進むと大きな広場に出た。ブリタニア軍の兵士と見たことの無いナイトメアが見える

普通のナイトメアより巨大な黒い機体だ

その近くには白い服に包まれている貴族らしい男がいる。その横顔は、黒の騎士団で見た要人リストに乗っていた

「シュナイゼル・エル・ブリタニア？何故此処に？」

驚きで思わず声が出てしまった

口を塞いだが後の祭り

「？」

その声に周囲の兵士が反応する

「貴様は！」

太り気味の将軍がライを驚きながら見る

「知っている者か？」

太り気味の将軍（以降バトラー）に白い服に包まれた男（以降シュナイゼル）が聞く

「お下がり下さい。我が君」

バトラーは不自然なほど慌てふためきながら言う

「（あいつは僕の事を知っている！？ならば、聞きたい事は山程ある）」

ライが近づこうとする

「確保だ、確保しろ！」

バトラーが指示し兵士達がライに駆け寄る

「僕に構うな！」

目にギアス能力者特有の赤い鳥が羽ばたく

そう、ライもギアス能力者であり、能力はルルーシュと同じ絶対尊守のギアスだが、ルルーシュが視覚によって与えるのに対しライの場合は聴覚から命令を与えることが出来る

兵士達はしばらくすると何事も無かったように元の配置に戻る

「（僕の意味とは別に発動した？）」

ライが戸惑いながらもチャンスと思いバトラーに近づくと

その矢先に突然天井が崩れ落ちる、板のような天井の上には4つの人影

「！？」

ライは驚いた

カレンとゼロ、スザクとユーフェミアだった

「カレン！無事だったのか！？」
大声でカレンを呼ぶ

「ライ！？何で此処に？」

「ライだと！？」

カレンとゼロも驚く

「ゼロ！そのナイトメアを！」

ライがゼロに黒いナイトメアに指を指す

「これはありがたい。無人の上に起動もしているとは」
ゼロが乗り込む

「取り返すのだ！ガウエインをゼロ如きに取りられてなるものか！」
黒い機体（以降ガウエイン）を見ながらバトラーが言う

しかし兵士達は今だ落ちている瓦礫から皇族2人を守るのに忙しく、
ゼロ達を静止する余裕が無い

「乗って！」

ガウエインが姿勢を低くし肩に乗っていたカレンが腕を伸ばしてライを引き上げる

「助けに来てくれてありがとう」

カレンが言う

「礼は此処を脱出してからだ。ゼロ、出口にナイトメアが」

ライの言うとおり出口にサザードが集まっている

「吹き飛ばすぞ」

ゼロの言葉とともに左右の胸部のハッチが開きそこから赤黒い光が集まっていく

「これは」

式根島で放たれたあの光の正体はこの機体の装備だった

しかし辺りに拡散して上手く当たらない

「ちっ！武器は未完成か」

ゼロが毒づく

「うわ！」

光によって吹き飛ばされた瓦礫がライに当たりはじき飛ばした

「ライ！？ゼロ！ライが！！」

「何だと！？」

カレンの声でゼロはライが落ちたことに気づく

「戻るな！」

ライはとっさに叫ぶ

「ライ！！」

カレンの叫びが聞こえるがあっという間に離れていく

落ちてくる瓦礫とともに洞窟内に叩きつけられる。その痛みでライの意識が遠のいた

「（カレン 無事で）」

「うっ、うっ」

呻き声が聞こえる

どの位時間が過ぎただろう。瓦礫の中に埋もれているライが思う

奇跡的に瓦礫の隙間にライはいた。息を殺し耳を澄ませると何も音

が無いのを確認する

「ふう」

ゆっくり隙間から抜け出し、体の調子確かめる。かすり傷や打撲等の小さな傷はあるが大きな傷は見られず脳も強く打ってはいないようだ

「さて」

ライは立ち上がり周りを見るとすっかりもぬけの殻となっていた。あるのは壊れたサザーランド一機のみ

どうやらシュナイゼル達は撤収したようだ

「神殿なのか？」

周りをよく見ると石柱が多くあり。それを見ると文字だか紋様なのか分からないものが彫られていた。他にも壁や床にも同じようなものが彫られている

すると足が自然に一番奥にある石碑のような場所に進む

「？」

疑問に思いながらも足を止めようとはしない

石碑につくと足が止まり今度は腕が自然に動き石碑に触れる

「!?!」

電気が体に走ったような感覚がライに襲い掛かる。式根島での感覚に似ているが激しい頭痛は無い

黒い髪の女性がライに微笑む

「（そうだ、あれは僕の母上。日本の皇族だった母）」

今度は原っぱの中にある小さな王宮が見える

「（昔、そこまで大きくなかったブリタニアに嫁いだ母。そして僕と妹を生んだ）」

今度は王冠を被った自分の姿

「（そうだ。僕は母と妹のために王となったんだ。暴力を使って望むものを全て手に入れ。ギアスという力を使って邪魔な者を全て排除した）」

そして、式根島で見た真つ赤な光景。目を赤く光らせているライだけが立っている

「（皆が皆去って行く。全てが消えて行く。守りたかったものが。全てを犠牲に手に入れたものが。消えていく）」

「（それから、それから）」

今度はさっきの光景とは一変し真つ白な世界にいた。

「（お主は頑張った。もう寝る）」
顔は良く見えないが大柄の男がライの前に立っている

「（ほら、さっさと寝んか）」

まぶたが閉じていく

「（知っている。僕はこの声を知っている。僕に）」

再び目を開けると石碑が見える

「（僕の母は確かに日本人で、父はブリタニアの皇帝だった）」
顔を上に上げ呆然と口を開けっ放しで考える

「（だが、今のブリタニアとは全然違う。頭の中で記憶と現実がぶつかり合ってるんだ）」

「（僕を目覚めさせたのは誰だ？　！　バトラーか！あいつが知識を植え付け、薬物投与を。思い出した。僕はこの時代の人間じゃない。僕の居場所は此処にはない。ありえないと信じたい。だが）」

長い時間立ち尽くし気がついたら空が茜色に染まっていた

「迷っても仕方ない。やるか」

ライは壊れたサザーランドに近づく

通信機能は生きていたのが幸いし黒の騎士団にだけに通じる信号を送る

程なくして黒の騎士団から返信があった

ライはゆっくり歩き出す

浅瀬につくとボートが近づいてくる

「ライ！」

カレンがボートから降り、ライの胸に飛び込んだ

「カレン」

力が入らないライはそのまま倒れる

「よかった……よかったよ」
涙ぐんだ声で何度も呟く

「そっちこそ無事でよかった」
カレンの頬に手をそえる

「もう！勝手に単独で捜索に出たんですってね！結果的に良かった

けど、皆どれだけ心配したと思ってるの？」
カレンがライを突き放して起き上がる

「ごめん。君が心配だった」

「本当にもう」

「ごめん」

ライはカレンを見て一気に疲れが出たのかスヤスヤと眠り始める

「ちよつと？ライ？死んじゃ駄目！！」

ライが死んだと勘違いし再び泣き出すカレン

「落ち着け、寝てるだけだ」

後ろからマックスが声をかける

カレンと共にボートに乗っていたのだ

「え？そうなの？」

恥ずかしさで顔を真っ赤にさせる

「ラブラブするのは後でしろ。今は運ぶぞ」

そう言いライの服の襟を掴み引きずりながらボートに運ぶ

「ちよつと！そんなに雑に扱わないでよ！」

カレンがマックスに言う

「大丈夫だ。コイツはこんなじゃ起きねーよ」
止まる事無く歩き続ける

「でも、疲れてるんだから優しくしてあげなさいよ」

「それはオマエの役目だろ」
ため息を吐きながら言う

「それは」
再び顔を赤くさせる

「それよりオマエはどうすんだ？ 枢木スザクに正体を知られたんだ
ろ？」
ライを乱暴にボートの乗せる

「それでも確認の為に学校に行くわ」
微笑みながらライの髪を撫でる

「そうか、まあ気をつけろよ」

「（ここは、アッシュフォード学園？くっ、全身がダルイくて動けない）」
動かそうにも体が言うことをきかない

少し体を動かそうとしたが諦めて上を見つめる

「（神根島の遺跡で僕は一部だが確かに記憶が戻った。……僕はブリタニアの皇帝だった。ブリタニアを倒さんとする黒の騎士団にいる僕が、僕はどうしたら良い？僕の居場所はここでいいのか？）」「不安が不安を呼ぶ

ノックが鳴った

「どうぞ」

ライが顔を動かさずに言う

「気分はどう？」

カレンが心配そうの聞く

「ああ、なんとかな」

首だけ動かしてカレンを見ると少し疲れているようだ

「全く大変だったのよ？ここ2日の経緯を言い訳するのも大変だったし」

横にあった椅子に座る

「世話をかけたな」

「いいのよ。それよりゆっくり休んでね」
子供を諭す母親のように優しく言う

「そうも言ってもらえないだろ？」

「大丈夫よ。せっかく無事だったのに無理をして欲しくないのよ。
皆がそう思っているわ。勿論、その
私もね」
顔を赤くさせ言う

「ありがとう。今回はお言葉に甘えさせて貰うよ」

その後数分の間雑談を交わし
「じゃあ、私行くね。お大事に」
そう言い部屋から出て行く

カレンが去った扉を見て
「（過去は確かに存在する。だが、今僕はここにいる。ともに
戦い。そして守りたい人もいる。僕の居場所はここだ。ここなんだ
！）」

視点 変更 ゼブル

「ライは無事のようにだな」
盗み聞きをしていたゼブルが言う

「まさか！密室で2人は愛を育んだの！？」
野次馬ミレイが妄想を爆発させる

「エロイ事言うとかーベスちゃんが反応しますから言わないで下さい。さつきから俺の肺を圧迫して呼吸だつてままなら無いんですから。これ以上絞められたら窒息死します」
ゼブルが言うようにガーベスが背中から力一杯抱き付いているので呼吸がままなっていない

『ゼブル様のせいですよ！？あんなエッチな映画を私に見せた後急に冷たくするんですから。本気で嫌われたかと思いました』
ウルウルと涙を流しながら更に力を入れる

「ほらほら、何泣かしてんのよ」
ミレイが茶化すように言う

「人事みたいに言わないでくださいよ。昨日以降ほとんど俺から離れないし、泣き虫になっちゃったし」
ため息を吐きながらいう

昨日の映画の後、予定通り少し無視したら急に路上で大泣きし、困ったゼブルは何とか泣き止まずと今度は離れたくないとずっと抱き付いた。

離そうとすると泣き出すので昨日はガーベスが寝るまで付き添い、寝たのを確認すると部屋を出たのだがそれが災いした。

朝早くガーベスが起きると部屋にゼブルがいない事に再び不安を感じて大泣きした。困ったシャーリーがゼブルを連れてくるとすすり泣きながらずっとくっついて今に至る

つまり朝から今までずっと抱きついて離れないのだ

「俺がガーベスちゃんを捨てるわけ無いでしょ」
苦笑いを浮かべながら言う

『ゼブル様』
嬉しいのか少し力を弱める

「まあ、ライも少し疲れてるみたいだからまた日を改めましょうか」
ミレイが言う

「ガーベスちゃん。俺トイレ行きたい」
ガーベスにゼブルが言う

『なら、早く行きましょう』
ゼブルを押しながら言う

「トイレの前で待つの？」
ゼブルが聞く

『？ 中は駄目なんですか？』
まるで今まで普通に入っていたかのような反応を示す

「」
「」
その反応に固まる2人

「ガーベスちゃん。TPOを守ってよ」
再びため息を吐きながら言う

『でも』
また涙目になるガーベス

「少しの間だからガマンして」

説得に15分程費やしたが何とか聞いて貰えた

『ゼブル様はやっぱり私に飽きてしまったんでしょうか？』
寂しさを紛らわせる為にミレイにくっ付いているガーベス

しかし目には涙を溜めている

「そんなこと無いわよ。本当に嫌いならあんなに優しくしないわよ
(もし私なら少しイラツときてるしね。他の子から見てもゼブルは
ガーベスを甘やかし過ぎね)」
ミレイが思う

『ですが』

「さつきから文句ばかり言ってるけど、あんたはゼブルが嫌いな
の？」

真剣な目つきでガーベスに聞く

『そんなことはありません！私はゼブル様が』
ガーベスも涙を払い真面目な顔で言う

「なら、なんで信じてあげないの？」
ガーベスを見ながらビシツと言う

『！それは』
言葉を濁す

「ガーベスがゼブルに対して何かをガマンしてたのは知っていたし、それが弾けちゃってゼブルに対して執着するのは分かるけど。ゼブルだって24時間ずっとあんたと一緒にはいられないのよ？誰にも言えない秘密もあるだろうし、ガーベスの知らない人間関係だって築いているだろうし」

ミレイがゆっくりりめで優しく言う

『（ミレイさん、私が我慢していることを知っていたんですか）』

ミレイの言うことを一つ一つ噛み締める

「ゼブルに愛されたかったら、そう言うのも含めてゼブルのことを考えなさい」

『はい』
俯いたまま答える

「でも、ガーベスのそんな積極的な所にゼブルも惚れてるのかもしれないから、たまになら我侂を言うのも必要よ」
俯いていたガーベスの顔を上げさせウインクをする

『はい!』
スツキリさせた顔でミレイを見る

「ん?どうかしたの?」
急いで出てきたゼブルがガーベスの晴れた表情を見て驚く

「何でも無いわよ、ね?」
『はい』

「ガーベスちゃんくっ付かなくて大丈夫なの?」
ゼブルが聞く

『ゼブル様が嫌がりますから』
少し悲しそうに笑いながら言う

その反応にゼブルがまた驚き
「激しいくのは困るけど、普通にくっ付く位なら構わないよ」

『良いんですか?』
キョトンとした顔でゼブルに聞く

「うん。勿論だよ(急にこなくなると寂しいもんだね)」
しみじみ感じる

『ゼブル様（凄い。やっぱりミレイさんの言う通りです）
ミレイを見るとゼブルに見えないようにピースをしている』

「程ほどにね、締め付けないように優しくだよ」
念を押しながら距離を縮める

『はい！』
と言いながら思いっきり強く飛びつく

「ぐはあ！」
ガーベスの頭がゼブルの腹に強く当たりそのまま後ろの倒れる

「（いやあ、若いつていいわね）」
その光景をほのぼのと見つめるミレイ

視点 変更 少し離れた場所にあるテレビ

「緊急速報をお伝えします。キユウシユウブロックのフクオカ基地
が襲撃を受けているとのこと。敵戦艦には日本の国旗が掲げられ…

⋮

学園生徒会室

生徒会メンバーは学園祭の準備に追われていた

「こんなに頑張ってる準備してるのに やっぱり中止かな学園祭」
シャーリーが少し残念そうに言う

「今それどころじゃないでしょ。戦争だよ？間に亡命政権を挟んで
いるだけで、これは中華連邦との戦争だって」
リヴァルが紙に何かを書きながら言う

「鋭いね、俺とロイド君もそうだと思ってるけど。まあ、あのコー
ネリア皇女殿下が負けるとはどうも思えないねえ」
体の隅々から闘気が出ている気がするもんね、とゼブルが言う

勿論比喩的なもので、ゼブルの師匠のチャンと比べれば無いに等しい
それを思い出したゼブルの体がふるりと震える

「（ 思い出したくなかったな ）」

「そつだ今日は後科学庁によってロイド先生の所にいかない」と
思い出したようにニーナが言う

「何で？」

「欲しいものがあって。頼んだらくれるってロイド先生が嬉しそうに言う」

「あんの女たらし！」

恨めしげにリヴァルが言う

「どっちかと言うと異性ってものを感知する感覚がないんだけどね
ロイド君は。多分ニーナちゃんの研究に興味を持ったからだね」
ゼブルが呟く

「それにしてもそのロイドって人とゼブルが関係あるとはね」
シャーリーが頷きながら言う

考えればスザクの上司でミレイの婚約者でゼブルの友達兼協力対象
でニーナの研究を評価してリヴァルからは嫉妬の対象である

「共通点ゼロだよな」

リヴァルも頷きながら言う

「まあ、俺も其処までマニアックなことは分からないんだけどお手
伝い程度だし」

実際ゼブルがしている事と言えば助言や少しばかりのロイドとセシルの手伝い、間食作り、武器の創作案の提供だ。本人は其処まで感じてはいないが周りの人間からすればありがたい事の上無かった。特に間食作りにおいては

「ハイハイ、さっさと作業を続ける」

ペースが遅くなった事をミレイが気づき少し大きな声で言う

「んなこと言っても5人分やってんだよ？」

ミレイにリヴァルが悪態をつく

「俺が3人分やってるでしょうが
ゼブルが言う」

「スザクは軍隊、カレンは病院、ガーベスは実家、ルルーシュは雲隠れ、ライは体が弱ってるし。あーあ、何か変わっちまったよな色々」

再び紙に目を戻し今度はその紙を切り始めた

「（あれは私が書いたものなの？どうして私は忘れているの？ナナちゃんのお兄さんのルルーシュがゼロだと言うことを）」
シャーリーが外を見ながら回想に入る

「シャーリーちゃんどうかしたの？」

その回想に邪魔するゼブル

「え！？何でも無いよ」

急に聞かれたので困惑するシャーリー

「そう？なら、いいけど。（確かこの時点でルルーシュさんがゼロだと思いつている筈だけどどうか？証拠の手紙は俺が前もつてに処分しておいたけどもしも他にもあつてそれが世界の修正力に従つてシャーリーちゃんが見つけて見る可能性もあるな　まあ、ほつといても大丈夫か）」

気にしないという結論が出たので再びゼブルは作業を始める

「それより何でガーベスに付いて行かなかったの？」

ミレイがゼブルに聞く

今ガーベスの両親は仕事でこのエリア11の近くのエリア5で2日間滞在をするらしい。なのでガーベスはエリア5に向かい久しぶりに両親に会いに行くという

「家族水入らずを邪魔する気は無いですからね」

そう言いミレイを見る

ゼブルとミレイはガーベスが養子として向かい入れられた事を知っている

ゼブルとオウサルト家が同じであるようにガーベスとミロツト家は血の繋がりが無い。

更に当時のガーベスは今にも死にそうな浮浪者の様な少女だったが、ミロツト夫妻はそんな何処の誰とも知らないガーベスを我が子のように可愛がった。

そんな夫妻をガーベスは心から感謝しており、尊敬しており、愛している

そして久々に会うのだから自分の様な邪魔者がいてはいけないと感じ遠慮したのだ

「でも、ガーベスは家族に紹介させたいんじゃないの？」
シャーリーが聞く

「何で？」

確かに言ったが自分に気を使いつたのだとゼブルは思っている

「何でって将来の事とかさ」

今度はリヴァルが顔をニヤニヤさせながら言う

ゼブルがガーベスにプロポーズしたことを此処にいる全員が知っているのだ

「駆け落ちって憧れてるんだけど駄目かな？」

少し真面目な口調で言う

「馬鹿。そんなことよりあんたの家族には言ってるの?」
ミレイがゼブルの頭を軽く小突く

「（そう言えばあの老夫婦と会話なんて数回しかしてないけどな）
俺の家は其処まで仲が好くないですからね」
ゼブルが言う

感謝して無いわけではないが逆に感謝をするほどの事をやって貰って
いない。ゼブルの場合vvの方に何百倍と感謝している

「そうなのか？俺の仲間だ！」
リヴァルが嬉しそうに言う

リヴァルも父親と仲が悪いのだ

「まあ、俺の場合は色々複雑でね（そういえば老夫婦の養子の俺の
養子のアリスちゃん達って老夫婦とは孫子関係？もし俺とガーベス
ちゃんが結婚したら老夫婦とミロット夫婦はどう言う関係だ？それ
以前にガーベスちゃんとアリスちゃん達との関係は親子になるの？
でも、その前に俺がツヴァイだとばれなくちゃだめだよな。ばらす
か？いつ？ どうしたもんかな）」
くだらない事を必死で考えるゼブルであった

視点 変更 マックス

黒の騎士団アジト

「フクオカ基地を占拠した中心人物の1人沢崎明は中華連邦に亡命しておりましたが、ゼロの活動による昨今の内情不安につけ込んできたとの線が有効です。なお黒の騎士団が関与しているかは不明です」

テレビのアナウンサーが言う

「関係無いってんだよ」

玉城が画面に向かって言う

「キョウトは何と?」

ゼロがデイトハルトに聞く

「知らなかったようです。サクラダイトの採掘権だけを一方的に通告してきたと」

「旦那はどうする?」

ゼロの隣にいたマックスが聞く

「全員をミーティングルームに集めてくれ」

仮面のせいで表情が見えないが少し考え事をしているようだ

1時間後

ミーティングルーム

「ゼロ。集まったぞ」

扇がゼロに言う

「で、沢崎はどうすんだ？」

玉城が聞く

「沢崎とは合流しない。あれは独立では無く傀儡政府だ。中華連邦のな」

「別にいいけどさ、それってブリタニアの行動も無視するの？」
朝比奈が聞く

「ゼロ、組織としての方針を明確にしておかないと」
ディートハルトがゼロに聞く

「そうだな、沢崎の件を置いておくにしても当面の目的ぐらいは」
トウキョウに独立国を作る」「
扇の言葉を遮る

「独立!？」

「国をか!？」

その場にいる全員がゼロの言葉にざわめく

無理も無い

「なるほど、やはり貴方は」

デイトハルトに至っては神を見るかのような目でゼロを見ている

「待つてくれ!いくら黒の騎士団が大きくなったと言えど敵は世界の3分の1以上を占める大国。俺達だけでそんなこと
扇がゼロに言う」

「では聞こう!お前たちは誰かが動くのを待つているのか?他の誰かがブリタニアを倒すのを待つているのか?誰かが自分の代わりにやってくれる。待つていればいつかはチャンスが来る?甘えるな!自らが動かない限りそんないつかは絶対に来ない!」
ゼロの迫力ある声で全員が口を瞑ってしまふ

話はそれで終わり団員はそれぞれ散りゼロとマックス、ラクシャータとデイトハルトだけとなった

少し時間が経ち

「ラクシャータちよつと来い。旦那もな」
マックスが2人を呼ぶ

「俺が持ってきた翠竜の新武装を見せたいんだ。そろそろついてい
るはずだかな」

近づいてきた2人を誘い込むように歩き出す

「新武装？」

「へー、面白そうね」

「旦那には他にも用があつてな」
意味深な笑みを浮かべる

「用？」

「まあ、着いて来い」
手招きをし再び歩き出す

「これか？」
ゼロが聞く

そこには広げられた大きな黒い布の様なものとその布の様なものと
同じ大きさの機械が置いてある

「翠竜の新武装の1つはマントだ。コーネリア新鋭隊のマントを真

似して作ったんだ。名前はステルスマント。ゲファイターバーのステルス機能をこのマントに埋め込む事で、このマントを纏っているナイトメアはステルス機能を持っている事になる」

よく見るとフード付きのマントだ

「どうやってステルスを付けれたの？」
ラクシャータが感心したように言う

「ガウエインに入れられて何でマントには入れられないと思ったんだ？まあ、エナジーファイラーからの供給で作動するから、長時間の使用は難しいがな」

「そう、コレは？」
隣にある機会を見ながら聞く

「ああ、小ダイって言ってナイトメアを運ぶもんだ。ブリタニア軍のとは違い小型で立ち乗り式だから移動しながら攻撃も出来る。あの棒を握ってコントロールするから紅蓮は無理だな。只でさえ操縦が難しいがな」

「どうやって、これ程の物を？」
ゼロがマックスに聞く

「企業秘密だ。マントは他の機体に纏わせても効果が少ないから翠竜専用だな。それにこの小ダイは運転がとてつもなく難しくてな今すぐだとしたら俺しか出来ないだろう」
自信満々に言う

本来無限の剣製アンリミテッドブレイドワークスを使えば簡単に翠竜に直接付けられるのだがそんな事をすれば疑われるのは目に見えている

小ダイに至っては翠竜とくっ付けることで格好よさも敏捷性も上がるが同じ理由で出来ない

因みに小ダイの基はドダイ改

「量産は出来ないのか？」

マックスが企業秘密を使うということは絶対に言わない事だとゼロは知っているのもそれ以外に聞く

「ほれ」

分厚い資料をラクシャータに渡す

「難しいけど出来なくは無いわね」
ペラペラっと見て余裕そうに言う

「で、他の用とは？」

ゼロが思い出した様に聞く

「旦那の事だからブリタニア軍に協力するんだろ？俺はその手伝いをしようと思ってるな」

マックスが悪人の様な笑みを浮かべる

「何故だ？」

「旦那の目的は黒の騎士団が今回参加したという事実を世界に広める事だろ？まあ、表立っての報道はされねえと思うが噂は流れる。俺等の立場を全世界に流すいい機会になる」

「危険だぞ？私にはガウエインがあるが君にはゼロがマックスに聞く」

「俺にだってこの新武装があれば大丈夫だ。それに向こうに俺の協力者がいるからソイツが助けてくれる」
マックスが自信満々に言う

「……その協力者は信用していいのか？」

「当たり前じゃないと俺が行くわけねーだろ？」
舐めてんのか？といわんばかりの顔で言う

「分かった。いいだろう」

「そう来ると思ったぜ、その協力者から聞いたブリタニアの軍の動きだが、枢木スザクの乗るランスロットで本陣をかく乱し、その内に本隊が別の場所から攻める。だってよ。この作戦なら陽動が失敗しようが本隊が動きやすいことには変わり無いからな」
ゼロに今作戦での配置資料を見せる

「（それが本当ならこの策シュナイゼルか）」
資料を見ながらゼロが思う

「俺は協力者のいる本陣のアシスト担当するから、旦那は枢木スザクのいる陽動のほうを頼めるか？」
指で指しながら聞く

「分かった」

視点 変更 ロイド

アヴァロン

スザクがランスロットエアキャヴァルリーで陽動を始めてから数十分後

スザクのランスロットのフロートユニットが壊されたと報告を受けると

「このアヴァロンを基地に「無理！無理！無理！全方位シールドじゃないんだからこっちが落とされちゃうよ！」「」

セシルが言つとロイドが頭を掻きながら言つ

「スザク君エナジーを通信と戦闘だけに絞つて ！ ロイドさん！大変です！」

セシルが再びロイドを呼ぶ

「今度は何！？」

ロイドがもう止めて、と言わんばかりの顔をしている

「総督府に置いてきたクラブがコーネリア皇女殿下の部隊に紛れ込んでいます」

「あの人が再び来てくれたのは嬉しいけど今はそれどころじゃないよ。ほつとこう」

そう言いスザクのランスロットに視線を戻した

視点 変更 アイネ

本陣で行動していたアイネだが戦闘に集中しているせいで前に出すぎてしまい中国製ナイトメア鋼體ガン・ルウに囲まれていた

「くそっ！」

何とか攻撃を避け続けるが

「アイネ！後ろだ！」

コーネリアが叫ぶ

鋼體ガン・ルゥの一機がアイネの乗るグロースターに銃口を向ける

「しまった！！ え？」

予想と反して衝撃が来なかったことに驚く

見るとアイネを狙っていた鋼體ガン・ルゥと他の鋼體が爆発する

「久しぶりだな、嬢ちゃん。しかし、今は危なっかしいもんだな」
声の方向を見ると近くの建物の屋根に黒いマントを羽織った翠竜と
フロントユニットと呼ばれるナイトメア専用の飛行装置を装備した
ランスロット・クラブが可変アサルトライフルを構えている

クラブがアイネを救ったようだ

「お前は！その機体に乗っているという事は、あの時もか！？」
ハッ！と翠竜に乗っているのがマックスだと分かる

「正解だ。おっと待った待った。命の恩人に銃口を向けるなよ、今
回は協力に来たんだよ」

瞬時にブリタニア軍のナイトメアが翠竜とクラブに銃口を向ける

翠竜は手を上げ、クラブはピクリとも動かない

「協力だと？」

コーネリアが聞く

「おう、今だって旦那と枢木スザクが共同戦線を張ってるしな頃だろうさ 結構派手にやってんな」

そう言っている途中にマックス達とは反対側の場所で爆発音が響く

「ゼロと枢木がか？」

ギルフォードが窺いの目でマックスの乗る翠竜を見る

「面白いよな。今まで睨み合ってたブリタニア軍の日本人騎士とブリタニアを恨む黒の騎士団の総帥が協力してるんだぜ？そんなこんなで、俺はこれからコイツと一緒に攻めるのを手伝うが何か文句あったか？」

周りのナイトメアを見ながら言う

一方クラブは黙々と鋼體をヴァリスで撃ち続けている

「信用しろと？」

コーネリアが訝しげに聞く

「今回の任務に俺がオマエ等に危害を加えるのは含まれて無いからな。それに信用したら後で良い事教えてやるぜ？」

コーネリア機の近くに飛び降りる

翠竜にブリタニア軍のナイトメアが囲むが気にせずコーネリア機に近づく

「ほう、良い事だと？」

コーネリアは動かさず面白そうに聞く

「コーネリア様信じてはなりません！不意を突いてくるかもしれませんが！」

そのコーネリアとマックスに入り込むようにアイネのグロースターが動く

「心外だな。俺は善良なんだぜ？」

ため息を吐きながら言う

「信じられるか！それに向こうのナイトメアはスザクを救った機体だろ？何でお前の側にいるんだ！」

アイネがクラブのことを聞く

クラブもゆっくり降りてきた

「ああ、俺が今コイツに雇われてるからだよ。安心しろコイツはオマエ等側の人間だ。オマエ等に危害を与えようものなら俺がコイツにボコられるのがオチだ」
クラブを見ながら言う

「コーネリア様、どうしますか？信用は出来ませんが」
専用通信でマックス達に聞こえないように言う

「いいだろう、お前には人質の件もあるからな」
コーネリアはオープンチャンネルで言う

「人質達は生きてる事に喜んでたか？」
懐かしむように聞く

「では、コーネリア様こいつが人質達を救った」
アイネが聞く

「ああ、それに利用出来るのならするに限る。ただしアイネ、お前は後ろに付いていつでも倒せるようにしておく」

わざとオープンチャンネルでマックスに聞こえるように言う

「了解です」

アイネもわざとらしく言う

「まあ、いいだろ。おっと、待たせちまったな。今から相手してやるぜー！」
マックスは笑いながら鋼體ガン・ルウに向かっていく

それから数十分は翠竜とクラブの独断場となった

翠竜はスラッシュハーケンを存分に使いこなし、前衛での止まることの無い不規則な動きと攻撃で敵をかく乱させ

クラブはその翠竜で生まれた隙をMVRメザイ・ハイブレーション・ランスで突き、翠竜の取りこぼした敵に止めを刺す

この2機の呼吸は完璧に近かった。例え四聖剣でも此処まで完璧に近い連携は出来ないだろう

何故なら、乗っているのが同じ人間だからだ。例えば兄弟や双子、長い付き合いの人間などが脅威的なコンビネーションが取れるのは相方のことをよく理解しており、その相方のやりやすいように双方が動く事で双方とも最大限の力を引き出せるからだ

なら、同じ人間ならどうだろう？

どんな誰よりも殆どの人間が自分を理解しているようにゼブルも例外ではない。これほど素晴らしい相方はそうはいない

その証明として、この場所にいる全てのブリタリア軍の兵士と少数の敵が2人の動きに見とれている

「蒼い鬼と碧の死神が舞踏会にいる
誰かが呟いた

的を得ていると言わんばかりに周りも口々に呟く、まるでダンスパーティーにいるような感覚に陥る
それほど優雅で美しく、爆発音ですら音楽の一部だと錯覚してしまうほど

「これほどの腕とはな。ゼロが送ってきたのにも納得が行く」
コーネリアも目を離さず見る

「綺麗」

アイネにいたっては知らずのうち涙を流している

「大体終わったか。そんじゃ引き上げるか、って、動きが速いな、オリジナルのヤツ」

後ろを見るとクラブがフロートユニットで何処かに飛んで行く

周りには隙間が無いほど埋められている壊れた鋼體がある

「おい！あいつはどこに行く気だ!？」

アイネが近づきながら聞く

「クラブを返しに行ったんだよ。俺の役目も終わったからな帰るぜ」
そう言うと小ダイの置いてあるほうに近づこうとすると

「帰らせると思っているのか？」

アイネのグロースターが翠竜の目の前に立つ

それを合図にしたように回りをブリタニア軍のナイトメアが囲む

「オマエ馬鹿か？無駄だって分かるだろ」

マックスがダルそうに言う

「うるさい！」

マックスのセリフが癪に障ったようだ

「おい、コーネリア。どうする？俺の邪魔をして増やさなくていい被害を出す上に沢崎を逃がすか？それともこのまま俺を逃がして無駄な被害を出さずに沢崎を捕まえるか」
アイネでは駄目だと思ったマックスがコーネリアに聞く

「……」

少し黙る

「コーネリア様」

アイネが心配そうに見る

「目障りだ。今すぐ消えろ」

背を向け言う

「協力してやったのにその言い方はなんだよ。そうそう、良い事の一つ目ツヴァイのヤツから伝言だ」
アイネのほづを見ながら言う

「ツヴァイ殿から!？」

アイネが顔を明るくさせる

「ぶっちゃけるとあのクラブに乗ってたんだぜ？だから枢木スザク

を助けたりオマエ達を助けたりしたんだ」
マックスが面白そうに言う

それを聞いた周囲がざわめく

コーネリアやギルフォードも同じく驚いている

「！嘘を付くな、乗ってたらなんで僕達に言わないんだ！」
アイネは困惑しながら大声で言う

「今はまだ治療を終えて無いから会えないんだとよ。俺が旦那のほうじゃなくてこっちの手伝いしたのもアイツからの依頼だ」

「依頼？」

「まあ、そんな事はどうでもいいんだ。プレゼントは気に入ってくれたかだってよ」
マックスが聞く

「お、お前に言う必要は無いだろ！」
顔を赤くさせながら言う

「それもそうだな。で、そのプレゼントの中身の事だが、「書き忘れましたがアイネ卿は黒が似合わない訳では無いですから悪しから

ず」だつてよ」

周りからは「黒?」「何のことだ?」等など聞こえる

だがアイネは顔を赤くさせ

「ツヴァイ殿だ!そんなどうでもいい事を言うのは絶対ツヴァイ殿だ!」

頭を抱えながら悶える

「1つだけ教えて貰おう。ツヴァイとお前の関係は?」

コーネリアがマックスに聞く

「依頼人と引受人だ。俺の仕事内容は主に利害一致時のみの戦場介入、他には分かる程度の情報提供だ。俺がツヴァイに協力してるのはヤツは人種差別しないからな」

差別しないからな、を強調して言う

「だが、君は黒の騎士団だろ。ゼロがお前を雇っているのか?」

今度はギルフォードが聞く

「旦那は依頼云々関係なく面白いから付いてるんだよ。まあ、オマエ等が俺を雇いたいと言っても断るけどな。さて、俺は帰るが二つ目の良い事だ。ツヴァイは思いのほか早く復帰できるそうだな? 良い知らせだつただろ?じゃあな」

そう言い小ダイの所まで駆けて行き。小ダイと共に飛んでいった

「あいつは一体何者なんだ？」

コーネリアが呟くように言う

「不明ですが、少し彼に似ていますね」

ギルフォードも少し考えるように言う

「類は友を呼ぶと言うやつか。（しかし、あいつの言うことが本当なら案外近くにいたのだな）」
苦笑しながら思う

「我々はこのまま攻め込むぞ！」

コーネリアが先頭を疾走する

「（ツヴァイ殿の馬鹿！　　さてよ、今までツヴァイ殿がああ青いナイトメアに乗っていたと言うことはツヴァイ殿の匂いがあの機体に残っているかも！急がなくては！！）」

その後アイネは何か弾けたようにグロースターでマックス達と同じぐらいの量の敵を倒し勲章を貰うことになる

この数時間後無事に沢崎は捕まり翌日のニュースはゼロの思惑通り黒の騎士団の参加は報道されなかったが、マックスの動きによって

ブリタニア軍内では尾ひれのついた噂は絶えず、果てにはツヴァイは黒の騎士団のメンバーでは無いかとの噂も流れ出す程。コーネリアが沈静させた為其処まで大きな噂にはならなかった

（スザクが無事で嬉しいです。私のお手伝いもしてくれと言ってくれましたし。私にはお姉さまやシュナイゼルお兄様みたいな力はありません。それでも私は私の大好きな人たちの笑顔が見たいから、ルルーシュやナナリー、そしてスザク。皆が住みやすく笑顔の溢れる世界を作る。絶対に）

（沢崎を潰した以上次の行動は迅速になさねばならない。ナナリーの居場所を最優先で構築させる。そのためにも世界の楔となるべき国を造る時が来ればコーネリアとシュナイゼル2人纏めて）

（上手く行ったみたいだな。変わる自身は痛みはリアルタイムだけど記憶は夜の12時ジャストに襲ってくるからどうなっているか心配したけどいい具合にすんでよかった。記憶もリアルタイムに出来なかな？ハッピーに聞いてみるか。まあ、明々後日は学園祭だし、黒の騎士団もそこまで急いで何かをする訳でも無いし、気楽にやりますか。それより新聞の表紙を飾るなんてアイネちゃん凄いな。やっぱり才能のある子なんだな。下手したら俺以上か？おっと失礼しました。

次回ゼブルと学園祭宣言！乞うご期待！

第四十話

本編 2 1

ゼブルと学園祭宣言！

ゼブル視点（前

紅様

武藤遙矢様

ご感想ありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます

皆さんのご感想が何よりの楽しみです

では第四十話をどうぞ

第四十話 本編21 ゼブルと学園祭宣言！ ゼブル視点

「皆さんお待ちせしました。これよりトウキョウ租界で一番オーブンなアツシユフォード学園の学園祭を始めますスタートの合図はこの一声から」

ミレイの掛け声と共に打ち上げ花火が舞う

「では、にゃー」

ナナリーの可愛らしい声が響く

「オオオオオー!!!」

男たちが興奮の叫びを上げる

「盛り上がるのは良いけどさ、ナナリーちゃんは恥ずかしくないのかな？聞いているこつちが恥ずかしいよ」

頭を掻きながら売店の状況を見るゼブル

「ゼブル！ちよつと味見てくれよ、タダでいいからさ」

ある売店の男Aがゼブルを引っ張る

「うーん、美味しいけど普通のブリタニア風の肉巻きパンだよね？焼いた生地に炙った塩味のハムだけを挟んだ。イレブンのとは違って味があっさりし過ぎで味にインパクトが無いし、これは本国でもありふれてるから買ってまで食べようとは思わないね」

ゼブルが食べながら言う

ホットプレートで薄く焼いたパンに薄い塩味の肉だけを挟んで食べるというもの

「ど、どうすればいい？これで売り上げを伸ばさないとアッシュフォード美女写真集が手に入らないんだ！」
売店の男たちが涙目で聞く

「ああ、リヴァルが作ったアレ？」
ため息を吐く

リヴァルが作ったアッシュフォード学園の女子たちの写真集で、映っているのが美人ばかりと言う男にはとても喜ばしい物である。ただし値段が張るので普通では買えない

「どうしても見たいんだよ。あの写真集は男のロマンなんだ」
いまだ涙目で語る

「まあ、いいかガースちゃんのは抜き取ったし」
頷きながら言う

事前にリヴァルを脅して抜いといたのだ

「そうなのか！？俺ファンなのに」

男Bが残念そうに言う

「はっはっは、手だしたら遠慮なくボコすからね」
笑いながら近くにあった木を凹むほど殴る

「じよ、冗談だよ。そんなことよりどうすればいい？」
冷や汗を拭いながら聞く

「そうだね、子連れの人も多いし、種に味付けをして無いんだっ
ら逆に甘くするかな」
屋台に入り材料を確認する

「でも、肉とか味は付いてるし捨てる訳にはいかないぞ？」
男Cが聞く

「大丈夫。確かワッフル店が中止になったからジャムが余ってる筈
だ。ジャム貰ってきて、何でもいいから多めに」

「？ あ、ああ」

男Aが分からないまま言った

数分後、男Aが色々なジャムを持って帰ってきた

「で、生地をクレープより少し厚めに作って炙ったハムと各自好きなジャムを塗って食べてごらん」
肉をパンの上に乗っけ食べるよう促す

「塩味のハムに甘いジャムなんて」

「ちよつと邪道じゃないか？」

男ABCが恐る恐る食べるの

「おお！美味しい美味しい。売れるよコレ」

「本当だ」

男ABCが食べてるのを他の店の人達が生唾を飲みながら見ている

「手に入ったら見せてやるからな」

男Aが手を振りながら言う

「楽しみに待ってるよ」

既に見ているゼブルには不要なのだが

「ゼブルこつちも手伝ってくれ」

「こつちもお願いできる？」

他の店からゼブルを呼ぶ声が広がる

「ごめん仕事があるんだ。暇になったら行くよ」

そう言い走って逃げる

本当だったらゼブルはガーベスと一緒に学園祭を楽しむ筈だったが、アイネがどうしても言うので仕事を大幅にアイネに押し付けその代わりにガーベスと一緒に回らせるという約束をした。ゼブルとガーベスは去年も回っているのでゼブル自身は其処まで後悔はしていないが、後ほどガーベスに乙女の純情を踏みにじったと凄く怒られる羽目になる

視点 変更 ライ

ライとカレンは講堂で行われているディベートを見ている

「こんな所にいたんだ。ちょうど探してたんだよね」
ゼブルがライとカレンに近づく

「実行委員の仕事？」
カレンが聞く

「そう思ってたけどやっぱりいいでしょ。せつかくのデートを邪魔しちゃう悪いし」
ニヤニヤしながら2人を見る

「べ、別に私たちは」
カレンが顔を赤くさせて必死で言い訳をしようとしている

「気にしない気にしない。本当にピンチになったら呼び出すからそれまでは2人でゆっくりしているといい」
カレンは嬉しそうにライを見る

「すまない」

ライはゼブルを見て言う

「いって。その代わりちゃんと仲良くするんだよ」
手を振りながら何処かに行った

ライの回想

「ゼロ」

ゼロの部屋に入るライ

「どうした、何か話があるのか？」
机に向かっていたゼロが背もたれを回して聞く

「実は 記憶が戻った」

勇気を出しライがゼロに言う

「ほっ」

仮面で分からないが声だけ聞くと面白そうだと言わんばかりに言う

「神根島の遺跡に触れたときにだ」

「あの遺跡にか」

ゼロも何か心当たりがあるように言う

「正直信じてもらえる自信は無い。僕自身が信じられない、いや信じたくないような、そんな話だ」
自信が無さそうに言う

「ぜひ話してくれ。他ならぬ君の事だ。私は信じよう」
ゼロにライは思い出したこと全て話した。過去の人間と言うことも、ギアスのことも

「ギアス!？」

ゼロが驚いたように聞く

「ああ、他人を僕の意思に強制的に従わせる力。この力をギアスと呼ぶらしい」

「ほう、自分から打ち明けるとわな」
いつからいたのかcccがライに言う

「ccc?」

「お前は知っていたと言うのか?」
ゼロがcccに聞く

「まあな。お前もこんな服を着てたと思うのだがな」
自分の拘束着を見せながら言う

「バトラーの」
ライは少し思い出したようだ

「それよりccc。彼の過去のブリタニアについての話はどうなんだ?」
「ありえない事は無い。ギアスを得た代償はどんな形で現れるかはその者しだいだからな」
2人の会話でゼロもギアスについての知識をcccから得ていたとライは考える

「ふう　ライよく話してくれた。今後その力黒の騎士団の為に活かしてくれ」
ゼロはライの話に少し驚いたようだが、そんなライの話を否定せずに受け入れた

「!　ああ任せてくれ!」
生き生きとした顔で言う

こうしてライは自分の事を信じてくれたゼロと進んで行くことを決意する

まあ、この学園祭とは一切関係は無いが

視点 変更 ゼブル

「学園祭って面白いですね」

人間モグラ叩きをしながらセシルが言う

「なあ、狙い撃ちされてるのロイドさんに似てないか」

ロイドの部下Aが聞く

確かに眼鏡がかかっている上に、顔つきも何処と無く似ている

「溜まってるんですね」

ゼブルが言う

「やっぱり彼女一人に任せるのは酷だったんだよ」

「君が戻ってきてくれたら半分ぐらいは楽になるんだろうな」

部下ABがゼブルを見ながら言う

「学生つて以外に忙しいんですよ。1年生ならまだ余裕がありましたけど2年生と3年生は多忙なんですよ　ん？」
話しているゼブルが袖に違和感を感じる

「ゼブルさん」

ナナリーがゼブルの袖を引っ張っているのだ

「あれ？すいません俺はこれで　で、ナナリーちゃんどうしたの？」

部下達に挨拶をして、少し離れた場所でいつもと雰囲気が違うナナリーに戸惑いながら聞く

「ほら、お嬢様」

咲世子がナナリーの耳元で言う

「き、今日はお一人なんですか？」
ナナリーが聞く

何故かいつもよりぎこちない顔も心なしか赤い

「うん、実行委員の仕事があるからね。それよりナナリーちゃん達は何処にいくとかあるの？」

ゼブルがナナリーの目線にあわせるためにしゃがむ

「いえ、ただ回っているだけです」

「アリスちゃん達は一緒じゃないの？」

「午前中はお店のお手伝いをするらしくて、来るのは午後からになるらしいです」

少し残念そうに言う

シロウの店は多めに繁盛しているわりに人手が少ないのだ

「へー、！ ちょっとごめんなさい。つて、あれ？ユフィちゃん？」
ナナリーの車椅子に当たりそうになった女性を手で押さえるが良く見るとその女性はユーフェミアだ

1054

「あなたはゼブル？それにナナリー！？」
ゼブルとナナリーを見て驚く

「えっ？まさかその声はユフィお姉さま？」
ナナリーがよく聞こうと耳を傾ける

「嬉しいまさかナナリーに会えるなんて」
車椅子に座っているナナリーに涙を流しながら抱きつく

死んだと思っていた腹違いの妹が目の前にいるのだ。誰も責めはしないだろう

ただ

「感動の再開中悪いけど、ここじゃ人目がつくからゆっくり話せる場所に移動しようか」

周りの人達が何事だ？と見ているのでユフィを立たせて移動する

後ろに付いてくる人を良く見ると護衛の女性と男性のようだ

生徒会のクラブハウス

「じゃあ、俺は仕事があるから2人で仲良くね」

紅茶を2人の前に置きエプロンを置く

「行ってしまっんですか？」

ナナリーが寂しそうに聞く

「だって久しぶりのユフィちゃんとの時間を俺なんか邪魔しちゃ悪いでしょ。それとナナリーちゃん。俺が君達兄弟の秘密を知っていることはユフィちゃんには内緒にしてくれないかな？」

ナナリーに小声で聞く

「構いませんが」

よく分からなそうに言う

「ありがとね、じゃあ俺はこれで」
ナナリーの頭を少し撫でて部屋を出る

「お気をつけてくださいね」
ユフィが笑顔でゼブルを送った

扉を開けると

「
「
「
……」

コーネリアの護衛の2人と咲世子が扉の前で火花が見せそうなほど
睨み合っている

「えーと、俺はこれで失礼しますね」
気まずい雰囲気から早く出たいがため小走りで駆けていく

視点 変更 ライ

「きゃっ!」
カレンが足を滑らせ

「どろじつお！」

ライの袖を無意識に引っ張りライもバランスを崩す

「
」

カレンの上にライが乗りかかった形になる

「えーっと、ライ、その状況って」

カレンがオロオロしながら聞く

「あっ！ごめん今退くから」

ライは口では言うが動かない

「ライ、どうしたの？」

カレンがライの顔を見る

「ごめんカレン。僕はもう」

ライの息を荒くしながら言う

「駄目よ！私達まだ学生なのよ？ね？」

カレンが必死で説得をする

「そうだね。でも僕には止められないんだ」
そう言うとカレンに抱きつくライ

「ライ」

カレンの目から涙が零れる

「どうしても嫌なら止めるけど」

それ見たライがカレンの腕を握っている力を緩める

「ううん、ライが私を求めてくれて嬉しい」

涙目ながら懸命に笑顔を見せる

「カレン」

「ライ」

2人はその後

「ちょっとちょっと！妄想ストップ！！」

カレンが顔を髪と同じくらい真っ赤にさせゼブルに大声で言う

「え〜これからがいい所のなのに」

ゼブルが耳を押さえながら不満げに言う

「何で声に出すのよ。恥ずかしいじゃない！」

周りを指差して言う

何故だが人々がゼブルの周りを囲むように聞いている

「ライがカレンちゃんをまるで野獣の如く襲おうとしてたのが悪い」
ゼブルがライを見ながら聞く

「誤解だ。カレンが足を滑らせて」
ライも慌てる

「カレンちゃんがその気だったらライもしちゃうんだろっな。うん、絶対するな。でも、ライ。やるからには責任を持たないと駄目だよ。もし無責任な行動をした場合俺が干切っちゃうから。そうだ、子供の名前はなんだろう？カレンとライでカライ？辛いみたいでやだな。ラカン？おじさんぽくて駄目」
1人で黙々と妄想するゼブル

「そうじゃなくて何か用があるんじゃないのか？」
ライがゼブルの肩を叩きながら聞く

「おっと、忘れる所だった。カレンちゃん、もうすぐピザ焼くから会長が来てっさ」
我に戻ったゼブルが言う

「あ！そうだった。ライ、行かなくちゃいけないから」

「僕も行くよ」

「ありがとう」

2人で仲良く歩いていった

「手繋いで歩かないのか」

本当に2人でいる時間は今しか無

いのにな　　あゝあ、俺も学園祭が終わったらガーベスちゃんと
イチャイチャしよ」

少し悲しげに呟くが、すぐに元に戻り鼻歌混じりに歩き出す

視点　変更　マックス？

ガニメデと呼ばれるナイトメアで大型のピザをスザクが作っている

その頃ルルーシュ、ナナリーと話していたユーフェミアだが風に帽
子を攫われて

「え？ユーフェミア様!？」

シャーリーが大声で言う

「ユーフェミア様って?」

「あれか?」

「本当だユーフェミア様だ!」

超大型ピザ作りを見ていた客がユーフェミアがいると知るとピザそ
つちのけで雪崩のようにユーフェミアに近づく

バンバン!と銃声が聞こえる

「いい加減にしないさい!何をやっているんですか!?!相手は副総督
にして第三皇女殿下ですよ!」

セシルと先ほどゼブルと話していた部下2人がユーフェミアを囲む
ように護る

「協力感謝します。って、きゃっ！」

咲世子と睨めっこをしていた2人も合流するが

「HIテレビです。一言だけでもお願いします！」

このアナウンサーを始まりとし、他の人達も我先にと詰め掛ける

「こ、これはちょっと」

四方から寄って来る人の波でギュウギュウ詰めにされる

「すみません。すみません」

謝り続けるユーフェミア

「どっこいせ！」

掛け声と共に詰め寄った人達の頭を踏み進みユーフェミアを攫う

「皇女殿下!？」

セシルが呼ぶが相変わらずの詰め物状態だ

「誰だ!あいつは?ユーフェミア様を連れて行ったぞ」

ユーフェミアを抱え近くの木の枝に上がった男を見ながら誰かが言った

「かっかっか、ユーフェミアは頂いたぞ！」
顔に包帯を巻いたマックスだった

「あなたはあの時の」
マックスの顔を見て思い出した

「皇女殿下様は人気者だな」
再びかっかっかと笑いながら上から様子を見る

皆何が何だか分からず只啞然とする

「お前は！何で此処に！？」
近くにいたのかアイネがマックス達のいる木に近づく

「おう、嬢ちゃん。少し前ぶりだが相変わらず元気そうだな。そう
そうニユース見たけど驚いちまったよ。凄かったな」
褒めながらケラケラと笑う

「あゝ！思い出した！あの人はホテルジャックの時の人ですよ！」
シャーリーがミレイに言う

「本当だ」
2人の命の恩人でもある人だ

「全員離れる！あいつは黒の騎士団のメンバーだ」
アイネが銃を構えて大声で言う

「黒の騎士団！？」

その場にいた一般人はマックス達から少し距離をとる

「マックス！？何で此処にいんの！？」

「カレン！落ち着け。何か意図があるのかも知れない」

マックスのもとに行こうとしているカレンをライが押さえる

「（マックスだと！？あいつ一体何を考えている）」
身を隠しているルルーシュがマックスを見ながら思う

「おいおい、銃を向けるなよ。黒の騎士団は正義の味方だぜ？特にこの俺マックス程の正義感の強い男はいないぞ。なあ、ユーフェミア」
ア

抱いたままのユーフェミアに聞く

「えっと、そうですね？」

悪い人ではない、逆にユーフェミアの中でのマックスの評価は高いほうではあるが、黒の騎士団であるがため曖昧に言ってしまった

「何で疑問形なんだよ」

その事にわざとらしく残念そうに言う

「すみません」

苦笑いを浮かべ謝罪する

すると

「ユーフェミア様を離せ！」

ガニメデに乗っているスザクがマックス達に近づくと

「分かった。じゃあ行くぞ」

ユーフェミアを片手で支え

「へ？何処に？」

お約束を言うスザク

「いくぞ」

まるでボールを投げるようなフォームを取り

「え？嘘だろ？嘘に決まってるよな？」

アイネが表情を強張らせる

「受け取れ！！」

大きく振りかぶり投げた

「きゃああ!!」

「ユファイ!!」

ユーフェミアは緩やかな弧を描きスザクが胸で受け取る

「ナイスキャッチ」

マックスが拍手をしながら言う

「「皇女殿下を投げた!?!」」

周りの野次馬たちも絶叫する

皇女を投げ飛ばしたのだ。刑に処すれば死罪は免れないだろう

「かっかっか。スリルあつただろ?」

マックスが計算どおりと言わんばかりに笑う

「貴様皇女殿下にあんな事をして只で済むと思うなよ」
アイネが人指し指に力を入れる

「ええ、凄く興奮しましたわ」

ところがユーフェミアは自分の胸を押さえながら笑顔で言う

「ユーフェミア様も答えないで下さい!」

「そんな事よりマスコミに言うことがあるんだろ？」
カメラマンを指差しながら聞く

「え？」

カメラマンが俺？と周りを見る

「シュナイゼルに認めてもらったアレだよ」

「！ 何故そのことを！？そのことは私とシュナイゼルお兄様しか知らないはずです」

今までに無い驚きの表情を見せると同時に目の前の得体の知れない人物に少なからずの恐怖心を覚える

すると勢い良くマックスのいる木に近付こうとする5つの人影

「あんたね！金髪で包帯グルグルでイニシャルにMがある男って」

アリス達特別工作部隊フェアルティースが獲物を見つけた肉食動物のような目でマックスを睨む

「あれはアリスか？」

アイネが銃を下げる

「やべ、こりゃ逃げるが勝ちだな」

木から飛び降りる

「灯台下暗しってやつねこんな近くにいたなんて、私から逃げられることは不可能と思いなさい！」

アリスがギアスを発動させようとした瞬間

「オマエ等ツヴァイとの約束破るのか？確か力を人前で使うこと禁止してた筈だぞ」

「え？何でしつてんの？」

ダルクがあれ？みたいな顔をしながら聞く

「そんな事より力なしで俺を捕まえてみる。本気で手加減してやるよ」

人差し指をクイクイと曲げて挑発し、何処かに逃げる

「待ちなさい！」

それをアリス達は追いかける

バンバン！バンバン！

「おい！オマエ等銃は禁止だ！危ねーだろ！撃つなって言ってる！！うお！？」

マックスが大声で喚くが銃声は止まない

その場にいた全員が呆然と見つめるが

「えつとユーフェミア様あの男が言っていたように私たちに何か伝える事があるんですか？」
アナウンサーの女性がユーフェミアに聞く

「では、この映像をエリア全域に繋いでください」
ユーフェミアが今までと違い真剣な表情で言う

「繋がっていますよ」
カメラマンが言う

つまりマックスの行動も全域に流れたことになる

「神聖ブリタニア帝国エリア11の副総督ユーフェミアです。今日この場をお借りし皆様にお伝えしたいことがあります。私ユーフェミア・リ・ブリタニアはフジサン周辺に行政特区日本を設立することを此処に宣言します！」
周りから大きなざわめきが生まれる

「日本を認める？ブリタニアが？」
すぐ近くで聞いていたスザクが聞き返すように呟く

「イレブンは日本人という名前を取り戻す事が出来ます。イレブンへの規制並びにブリタニア人の特権は特区日本には存在しません。ブリタニア人にもイレブンにも平等の世界なのです」
嬉しそうにユーフェミアが言う

この後、ゼロも行政特区に加えようと演説をする。

学園祭はユーフェミアの出現で混乱したが何とか無事に終了した。

生徒会メンバーは片付けに追われていたが

視点 変更 ライ

ライがクラブハウスの裏手に行く

「やあ、ライ」

スザクがライが近づいてきたことを察して言う

「何故僕とカレンの事を黙っているんだ？」

カレンとライは神根島でスザクに見つかっているのだ

スザクはライが瓦礫に巻き込まれて死んだと思っていた

「軍規違反なのは分かってる。だけど、此処では戦いでなく説得を
したい」

清々しい笑顔で言う

「それが、君の道か」

「ああ、君やカレンからしたら甘い考えなのかな？ だけど諦めたく

ないんだ。そつだ！君も特区日本に参加しないか？君達黒の騎士団が合流すれば戦いを終わらせることが出来るんだ！」
特区日本を語るスザクの顔はまるで覚せい剤を打ったような妖艶な顔で言う

それを見て

「なら、君は君の信じた道を行け」
対照的にライはいつものように表情を崩さない

「
ライ」

「僕も僕の信じる道を進む。その過程で君と僕が交わるときが来たら、その時は喜んで君に手を貸そう」
そつ言うとライは何処かに行った

「そつか、その時がくるのを楽しみに待っているよ」
独り言のようにスザクは呟いた

（スザク、君は何を信じてそんなに笑える？その笑顔は僕にも一握りの希望を抱かせる。その時がもしくればと思ってしまう。いや来るのかもしれない。その時が。なら、僕は
）

（行政特区日本。協力すれば武力を取り上げられ、反対すれば民衆

を敵に回す。黒の騎士団はここで潰れる。ユーフェミア！無邪気に善意をばら撒く第三皇女。俺とナナリーにとってお前の存在はもはや罪だ)

(危なかったな、危うくマックスがアリスちゃん達に殺される所だった。とにかく特区日本か、今のうちに工作して置かないとな。ユフィちゃんを救う方法は考えた。下手したら更にスザクが狂うことになるかも知れないけど、まあ、死ぬよりいいかな

次回ゼブルと血染めのユフィ。お楽しみには言えないよね。これだけは)

第四十一話

本編22、23

ゼブルとブラック
リベリオン

前編(前書き

最後の4話は一気に前編後編に分けて書きます

Eric様

んんん(・・)様

ご感想ありがとうございます

お礼が遅れて本当に申し訳ございませんでした

「はつきり言うけど行政特区日本には参加しないで欲しいんだ」
ゼブルが言う

「何故だ？セイバーは参加したがってるんだがな」
明らかに不満気な声で聞く

「失敗すると知っているからだよ。だから特別ファカルティーズ工作部隊を本国に送ったんだ」

ゼブルが言うように今特別ファカルティーズ工作部隊はツヴァイからの（手紙による）命令でブリタニア本国のニルジョワの孤児院の手伝いをさせている
行政特区日本の発表から1日後に命令を出し、更にその1日後に本国へと向かった

「どついうことだ？」
ますます理解できないようだ

ただでさえゼブルはシロウに対しても隠し事が多い。それに相談も無しにいきなり、特別ファカルティーズ工作部隊を本国に戻したこと。不審がるのは当然といえる

その事に感ずいたゼブルが

「シロウさんだけには話しておくね。実は……………」
既に起こった全ての事とこれから起こる全ての事をシロウに話した

「何だと！それは本当か！？」

シロウの顔から血の気が引いている

「2人なら逃げられるかもしれないけど念のため参加は控えて欲しいんだ」

「そのほうが懸命だな。だが、君はこの事を知っているのなら止めないのか？君の社会的地位なら防げるはずだ」

シロウが言っているのはツヴァイの事だ

「それが、今回の事を防いじゃいけないんだよ。防ぐとこの世界の未来が平和から離れてしまう。本当は止めたいんだけど、9を救うためには1を捨てないといけないんだよ。つらいけどね」
ゼブルが苦笑いをする

ゼブルとしては止めたいのだが本当の平和を作る為にはこの国だけを救っては意味が無い。終わりまでは本作通りに進めないといけない

「（その後のゼロレクイエムは俺が……）まあ、ユフィちゃんは見捨てないから大丈夫。そこは考えてあるんだ。多分上手くいく。うん上手くいかせなくちゃいけないんだ」

手に持っている小型の箱を弄びながら言う

「そうか、私は君を信じよう」

「ありがとう。それからシロウさん達はこの騒動が終わったら俺の分身と共にブリタニアに行かない？俺がニルジヨワの町長さんをお願いしたツヴァイ・ドウの研究所『アクエリオン』がもうすぐ出来るからそこで料理長として働いて欲しいんだよね。この日本は少しの間日本人には居づらい環境になっちゃうからさ」

ニルジヨワで建設中の研究施設『アクエリオン』。ナイトメアの製作から物理学、生物学の研究に至るまで才能のある者を募集し研究に掛かる費用を全て提供し、そこで生まれた技術や発見は研究所が所有するというシステム

ブリタニアは全てにおいて貴族やそうでない者に分けられる。入学、就職、他にも事あるごとに家柄が問われる。研究員達も例外なく、貴族達には潤沢な資金やコネが多いが平民やナンバーズには無いに等しい。しかしツヴァイが作る研究所にはその枷がない。貴族で無い者でも実力があれば認められる。その千載一遇のチャンスに応募者が殺到しているという

「嬉しい話だな。だが、セイバーがどう言うか」

ふむ、と言い頭を掻く

「（やっぱり自分よりセイバーちゃんの考えを尊重するんだね）セイバーちゃんには俺が後で直接謝るし、もし向こうが嫌だったらこの店を取っておくからこの店に戻るといい」

「分かった。しかし何から何まで君には世話になるな」

「お互い様だよ、じゃあ、俺は仕込みに行くから」
言つと立ち上がり、椅子にかけてあった制服の上着を着る

「 気をつけたまえ。何が起こるか分からないからな」
その後姿を見ながらシロウが忠告をする

「うん、じゃあ行ってくるね」
そつ言い扉を開け明るい外に出て行った

「 さて、ユフィちゃんは殺さず世間には死んだと思わせるにはこれしかないかな」
手に持っていたのは流体サクラダイトを主に使った爆弾

「 上手くいきますように さて、マックスを使うか」
一度空を見上げ

視点 変更 マックス

行政特区日本の開会式が始まる数時間前

「これから私はガウエインでユーフェミアに会いに行く。特殊零番隊の君達は私と同行して欲しい」
ゼロがガウエインの前でライ達に言う

「分かった」

「了解」

ライとマックスは反論せず素直に答える

「万が一に備えて、私達も配置に付いてるけど気をつけてね」
カレンが心配そうな表情でライの手を握る

「ああ、カレンも気をつけて」

ライもカレンの手を握り返す

「人前でイチャイチャしやがって」
マックスがライ達を見ながら言う

「あら、羨ましいの？私でよければいつでもいいわよ？」
いつの間にかマックスの隣に井上がいた

「止めとけ、俺が相手だと苦労しかないぞ」
頭を掻きながら言う

「女は相手が世話焼きが多いのよ？カレンもそうだし」
マックスにじわじわと上目遣いで近付いてくる

「あと、数年経っても同じ考えなら考えてやるよ」
ため息を吐きながら井上にデコピンをする

「そう？楽しみに待ってるわ」
マックスに弾かれたおでこを手で覆い痛かったのか涙目で言う

「（ヤバイな、くだらない事言っちゃまったか？まあ、俺の役目は後
一年後には無くなってるし大丈夫か。死んだらノーカンって事）」

視点 変更 ライ

行政特区日本の開催会場

20万人以上の日本人が会場を埋め尽くし、入らない人は外で待っ
ている有様

会場のVIP席には桐原もいる

「ユーフェミア様。お時間です」

ユーフェミアの隣で座っていたダールトンが言う

「はい」

ゆっくり席を立ち空席の一席を見つめる

「（ルルーシュ）」

ゼロが座る筈の席だ

マイクの近くに立ち話を始めようとする

「ゼロだ」

「ゼロが現れたぞ」

あちこちからざわめきが生まれる

上を見るとガウエインの肩にゼロが乗っている。ちなみにライとマックスはコックピットの中にccと共にいる

「ようこそゼロ。行政特区日本へ！」

ユーフェミアは空に浮いているガウエインに近づくと

「ユーフェミア・リ・ブリタニア。折り入ってお話したいことがあ

ります」

ガウエインの上から見下ろす形で言う

「構いませんわ」

この承諾をユーフェミアは笑顔で受け、ゼロとユーフェミアは2人だけでG-1ベースへと入っていった

マックスとライはガウエインから降り、ccはガウエインのコックピットにいる

マックスは

「おい、暇だから話そうぜ」

とユーフェミアの護衛の女性と話している

「君も来たのか」

スザクがライに話かける

「ああ」

「ゼロとユーフェミア様、2人にもし何かあった時には真剣な顔で言う」

「分かっている。その時は手加減はいらないし、しない」
ライも言う

「うん、だけど、もしかしたら、と僕は思ってるよ。今僕達は同じ道を歩んでいるかもしれないってことだよ」
だが、スザクの顔がさっきと打って変わり笑顔になる

「お互の道が交わるか、今がその時と？」
ライは変わらない顔で聞く

「うん、もしそうならば僕達はすぐに握手することになるね」

「そうだといいな」

「え？何故ゼロなんかと一緒に？」
スザクが急に振り向き、後ろのガウエインを見つめる

「スザク、どうかしたのか？」
ライがスザクに聞く

「間接接触と神根島の件がきっかけになったか、それともあいつが？だとしたら」
ガウエインの中にいたccが出てきた

その状況をチラリとマックスが見る

「（この場面は確かスザクがccの存在を感じ取っている時だ。ルルーシュさんもそうだし確かナナリーちゃんもそうだったな。待てよ？いつだかアリスちゃんもcc緑色の髪の女の人がどうか言っていたな。だとしたらこの4人に共通するのは いや、いくら混ざっているとは言ってもこの世界に存在するはずは無いか、現にccとルルーシュさんは1つじゃない。考え過ぎだな）」
考えを否定しながらも気になるのかチラチラと見る

「やっぱり」

スザクがccを見ながら言う

「1つだけ答えるお前は、ぐっ！まさか……こんな早くに？」
ccがスザクに近寄ったと思ったなら左目を抑えながら地面にうつろくまる

「どうした？うわっ！」

スザクが起こそうとしてccの肩に触れると今度はスザクが頭を抱え倒れる

「おいスザク、cc」

更にライが2人を助けようと触れた瞬間

「（これは神根島の時と同じ！）」
ライも強い刺激で意識がぐらつく

「（僕はブリタニアの皇子だった。だが、東方の小国から嫁いできた女の息子である事を理由に僕と妹は他の親族からは忌み嫌われていた。自分はいい。だが母や妹がづらい目に遭うのは我慢できない。何より、2人を護れない自分が情けなかった。そんなある日僕はとある人物からギアスを手に入れた。僕はギアスを使いあつという間に皇帝になった。これで母と妹は平和で静かに生活が過ごせる）」
母と妹と仲良く話している自分が白黒の映画のように目の前で動いている

「（だが、それは一瞬の様に短い時間だった。僕はギアスを使い過ぎてしまったのだ）」
映像が燃える

「（隣国からの侵略をきっかけで不安定だったギアスが暴走した。その結果兵士も国民も、老人から子供に至るまで、そして大事な大事な僕の母と妹まで、僕は全てを失った。そんな僕の前に彼が再び現れた）」
神根島で見た血まみれの光景は戦争の光景だった。よく見ると足元にはライの母と妹が血まみれで倒れている。そしてそのすぐ近くで泣き崩れる自分^{ライ}

遺跡の様な所で

「お主は頑張った。もう寝ろ」

黒髪の大男がライに言う

「（貴方は、SSはどうして僕に）
声を出そうとするが出ない」

「ほら、さっさと寝んか」

SSがライの目元を手で暗くするがSSの手は温かい

「（どうして僕にギアスを与えたんだ？）
そしてライは眠りに付いた」

「（思い出した。これが僕の記憶。ギアスに振り回された僕の愚かな記憶）」
ハッと意識が戻る

見ると仰向けに倒れていたようだ。真っ青な空が見える

「（僕は神根島に似た別の遺跡で長い長い時間を眠っていた。その僕を見つけ出したのはあのバトラーだ。そして研究所で様々な調査と実験を繰り返され、日本の研究所でccに出会った。ギアスの力を取り戻したのもその時で。そして脱走し、アッシュフォードで助けられた）」
ライは全てを思い出した

「おい、ユーフェミアが来たぞ」

マックスが何でも無いようにライ達を蹴る

他の2人も意識を取り戻す

時間はそこまで経っていないようだ

ユーフェミアが笑顔で走ってくる

「日本人は、皆殺しです」

と言いながら目の前の日本人を持っていたニードルガンで心臓部を撃つ

「きゃああ!!」

隣の女性が叫ぶ

「な!?!」

「ユファイ、何を?」

ライとスザクが固まる

「日本人は皆殺しですね。あっ!貴方もでしたね」

今度はスザクのほうを向き同じように笑顔でスザクに撃つ

「ぐっ!ユファイ?」

スザクの腕に当たったらしく腕から血を流している

「スザク！」

「スザク君！！」

「何？何？何なのコレ？」

ライ、セシル、ロイドが混乱する

「ロイドさん。スザク君を！！」

スザク脇の下に首を入れ運ぶ

「う、うん」

ロイドもスザクの反対側に入り運ぶ

「あら？外れてしまいましたね。次はちゃんと当てなくては」
スザクの背中に銃口を向ける

「一体どうなされたのですか？お止め下さいこんな事は、うー！？」
ダールトンがユーフェミアを止めようとするが

ユーフェミアがダールトンの腹部を躊躇無く撃つ

「將軍！」

兵士が近付く

「ごめんなさい。でも日本人を殺さないといけないの。さあ、ブリタニアの皆さん。日本人を皆殺しに！」
ユーフェミアの言葉通り虐殺が始まった

「ちっ！逃げるぞライ！」
マックスがライの腕を引き走る

「しかし」
ユーフェミアを見ながら言う

「言うこと聞け。cc、お前は旦那を頼む！」
走りながらccに言う

「わ、分かった」
ccはヨロヨロと立ち上がりガウエインのコックピットに入る

「どうしたの!？」
カレンが通信で聞く

「ユーフェミアが乱心した！旦那の指示を待ってる」
ライを一番近くの部隊に置いておいたライの月下の近くに投げる

「マックス。何処に行くんだ!？」
ライが綺麗に受身を取る

「野暮用だ!すぐに戻る!」
凄腕で走っていった

数分後

「黒の騎士団総員に告げる。ユーフェミアは敵となった行政特区日本は我々を誘き寄せる卑劣な罠だったのだ!!ナイトメア部隊は式典会場に突入せよ!ブリタニア軍を壊滅し日本人を救い出すのだ!
!急げ!絶対にユーフェミアを殺せ!!」

視点 変更 ロイド

アヴァロン内

「行かなくちゃ、ユフィを止め」
スザクが腹部を押さえながらランスロットに近付く

「そんな怪我じゃ無理よ」
セシルがスザクを引き止める

「でも、ユフィを探さないといけないんです」
セシルを払いランスロットに乗り込み外へ出て行った

「ありやりや、行っちゃった」

ロイドがアヴァロンから状況を見ながら言う

「おかしいと思いませんか？」

セシルが服についた埃を払う

「おかしいどころか、異常だね。あのユーフェミア様がこんな事をするなんて」

発艦したランスロットを見ながらロイドが呟く

視点 変更 ゼロ

開催会場の日本人を殺し終えたユーフェミアは、会場の外の日本人を次々に殺していたが、その目の前にガウエインが降りてきた

ユーフェミアが手に持っていたマシンガンでガウエインから降りてきたゼロを撃とうとするが

「あら、日本人かと思っちゃいました。ねえ、考えたんだけど一緒に行政特区日本の宣言を あれ？日本？」

ゼロだと分かると銃口を下げる

「ああ、出来ればそうしたかった　君と共に」
ユーフェミアに銃を向け

「さようならユファイ。多分初恋だった」
人差し指に力を入れた

「え？ルルーシュ、何で？」
腹部からゆっくり血が流れる

その頃
「ユファイ」
スザクは上空からユーフェミアが撃たれた事に気づかずにいない。
只その場にいた事にスザクが安堵の表情を浮かべる

【よし！作戦通りにいくぞ、俺！スタイルチェンジ・ハイド。ぎあ
すはつどう】
近くのビルに隠れていたゼブルがハイドに変わる

【煙幕発射】
同じく違うビルに隠れていた分身マックスがボタンを押し

「何だこれは!？」

ゼロが足元から出る煙に驚く

ユーフェミアの周りから真っ白い煙が上がる

「おい！離れるぞ！」

ココがゼロをガウエインの手のひらに乗せる

【目標からの離脱確認】

マックスが見る

【いんふいにつとそりつどめいくすをてんかい。よし！いいよ、やつてー！】

ハイドがすぐさま撃たれて今にも倒れそうなユーフェミアに近付き服を剥ぎ取りながら周りにサクラダイト爆弾を置く

【爆発させるぞー！！】

マックスがボタンを押す

【いんふいにつとそりつどめいくすのぼっくす2にいどつ】
爆発一瞬前に渦が2人を包む

ドッカーン！！

激しい音が響き、爆風が放たれる

「爆発した？」

「cccが爆発した方向を見ながら言う」

「あの威力、サクラダイトか。残ったのは血の付いた服だけか（確かに銃は当たった。ユフィ、これで）」

「ゼロが風に流れてきた血まみれのユーフェミアが着ていた服の切れ端を掴む」

「そんなユフィが　　うわあああああああ！！！！！！」

「スザクが頭を抱え絶叫する」

「ロイドさん！ランスロットの強制帰還システムを！早く！！」
その光景を見ていたセシルがロイドに言う

「分かってるよ」

「ロイドが激しくボタンを操作する」

「ユフィイイイ！！！！」

「涙でぐしゃぐしゃになった顔で叫ぶ」

「いどころか千里よう。すたいるちえんじ・ぜぶる！よし。次は治女神の首飾りを付けて、見真似見様で作った全て遠き理想郷アヴァロンこれで癒せなければ、急いでガーベスちゃんに頼むか」
気絶しているユーフェミアを急いでベットに乗せ、治女神の首飾りと青と金色の剣（以降全て遠き理想郷）の鞘を置く

少しすると

「うづ、うづん」

瞼を開き周りを見る

「良かった。ユフィちゃん大丈夫？」

ゼブルが安堵のため息を吐くする

「あら？ゼブル、貴方が何故ここに？」

ゆっくり体を起こす

「ユフィちゃん。実は俺は日本人なんだ」

ゼブルがユーフェミアから少し離れて言う

「そうなんですか？」

ユーフェミアは少し驚いたように聞き返すが殺しには来ない

「そうだよ（全て遠き理想郷のお陰でギアスの呪いも消えたか）
そう知るとユーフェミアに近付く

「それよりここはどこです？行政特区日本はどうなったんですか？私記憶が曖昧で」

ユーフェミアが苦笑しながら言う

「 ユフィちゃん。行政特区日本は失敗したよ」
静かに分かりやすく結論だけをユーフェミアに言う

「な、何を言っているんですか？そんなはず。だって皆さん喜んでいました」

理解が出来ずに冗談ですよね？と言わんばかりの顔で聞く

「落ち着いて。そしてこれを見て」

近くのパソコンの動画を見せる

ユーフェミアが血まみれで日本人を殺す映像が流れる

「嘘、わ、私がこんなことを？」

虐殺の場面を見て体を震わせながら涙目で聞く

「落ち着いて聞いて欲しいんだけど。まず、君は何も悪くない。そしてこれからユフィちゃんをここで監禁する。時間は1年程。多少の変動はするけど大体1年だ」
人差し指を立てながら言う

「1年も?」

困惑の表情で聞く

「その後は君をコーエリア皇女殿下にお返しするよ。おっと、紹介しよう。ここで君の世話をするプリニー隊だ」
ゼブルが言つと

「ういっす」

3匹?の羽の生えた出来損ないのペンギンの人形（以降プリニー）
が現れる

「ペンギンさんが喋った!?!」

コーフェミアは驚きと興奮で目を輝かせる

1313歳の小さな魔王を幸せハッピーオルティナティブの為に元の世界に戻した事により
手に入れた家来。ゼブルも超低賃金で働かせているが低労働の為プ
リニー側からは文句は言われない（前の主人が超超低賃金で超超重
労働をさせていた為逆に喜んでいる始末）

しかし、取り扱いには十分注意してください

「姉さん。後はよろしくお願いしますね」

他のプリニーとは色の違うプリニーに言う

「任せときな。あんた、困った事があつたら遠慮せずに聞きな」
赤いプリニー（以降姉御肌のプリニー）が言う

「辛いかもしれないけど我慢してね、俺は数日間来れないけれど、その数日後に俺が来たら聞きたいこと言うてね、何でも答えてあげるから」

そう言うつと違う部屋の扉を開ける

「ゼブル。貴方は一体何者ですか？」

ユーフェミアが恐る恐る聞く

「只のしがない学生つてのは嘘でそれも今度教えるよ。じゃあ、俺は行くね」

そう言うつと別の部屋に移動し自分の寮へと無限次元空間製作で移動する
インフィニットソリッドメイクス

視点 変更 スザク

アヴァロン内

病室から出てアヴァロンでユーフェミアが使っていた部屋に入る

「ユフィ。何で君が　これはユフィの手帳？
ベットの上面にあった黒い手帳を見つける」

中をペラペラと読むと

「『行政特区が成功すれば、今まで虐げられていた日本人の皆さん
だけでなくナナリー達も喜んでくれる。絶対に成功させなくちゃ』
……どういうことだ？ユフィは虐殺を望んではいなかった？じゃあ、
何であんなことを？（そう言えばあのユフィは様子が変わった）」
矛盾に戸惑うスザク

「教えてあげようか？」

長長髪の少年がスザクに近付く

「へ？子供どうしてアヴァロンに？」

「初めましてだね枢木スザク。僕はvv」
vvがスザクに近付く

「vv？」

スザクがvvに聞き返す

「そんな事より、これからゼロの力を教えてあげるよ。人の意思を
捻じ曲げる力の正体をね」

視点 変更 ゼブル

アッシュフォード学園

「（今頃VVがスザクに接触してる筈だ。俺はアッシュフォードに戻り、マックスは黒の騎士団として行動してもらおう。不穏分子であるライには前線に出てもらおう。

待てよ？シャルルはライをどうするつもりだ？ルルーシュさんを使つてCCを誘き出すようにライでSSを？いや考えすぎか」

「黒の騎士団の接近によりゲッターの治安が悪化しています。市民の皆さんは政府の通告が出るまで家から出ないようにお願いします」
テレビのアナウンサーが喋っている

「ここも戦場になるのでしょうか」

ナナリーがハッピーを撫でながら暗い声で言う

戦争を経験しているのナナリーにはつらいのだろう

「まさか、コーネリア総督の正規軍がいるんだぜ？無い無い」
リヴァルが苦笑いしながら言う

「それよりルルーシュさんとライはまだ帰ってこないの？危ないよね。はい、紅茶」

ゼブルが紅茶を注ぎながら聞く

「ありがとうございます。お兄様とは連絡が取れなくて、再び暗い声に戻る」

「ルルーシユさんなら何かあっても口がうまいから大丈夫だよ」
ナナリーの頭を撫でながら安心させようとする

「ルルーシユ」
シャーリーが呟く

「なあ、いい加減ルルって呼べよ。仲直りしてさ」
リヴアルがうんざりそうに言う

「ルル？私そう呼んでたの？」
シャーリーがリヴアルに聞く

「またそんなこと言って」

「ルル、ルル」
反復しながら呟く

「てか、ニーナちゃんと会長とガーベスちゃんは何処行ったの？いつの間に消えてさ」

周りを見ながら心配そうに言う

「ニーナを探しに行ったよ。すぐ戻ってくるって。クッキーあった
だろ？食おうぜ」

リヴァルがわざと大声で言う

「そうだね。（こつこついうときはリヴァルと会長はつまいよね）」
缶に入っているクッキーを運びながら言う

【ゼブル、これからどうするの？】

ハッピーがゼブルに聞く

【ハッピーはシロウさん達を護ってくれる？】

【ナナたんは？】

頭を上げてナナリーを見る

【心配するのは分かるけど、大丈夫だよ】

【分かったわ】

「きゃー！」

ナナリーの手元から飛び立ち窓から出て行った

「ゼブル、ハッピーが飛んで行ったわよ」
丁度入ってきたミレイが窓を見ながら言う

後ろにはガーベスもいるがニーナはいない

「大丈夫ですよ　ん？」
グラグラと微弱な揺れが起こる

しかし静まるどころかどんどん大きくなる

「じ、地震？」
電灯が消えたり点いたりを繰り返している

「随分大きいね（始まったか。俺もこれからは大忙しだな）」
ゼブルは立ったままゲッターを見つめる。見えるわけでは無いが只
眺めている

「長い夜になりそうだな（次回ゼブルとブラックリベリオン　後編）」

第四十二話

本編 24

25

ゼブルとブラック

リペリオン

後編

(前書き)

今更ながら不安定更新で申し訳ございません

第四十二話

本編 24 / 25

ゼブルとブラック リベリオン

後編

「これで、全部のテレビ局が」
テレビのアナウンサーが何処かに連れて行かれ画面には黒の騎士団のマークが映る

扉が開き

「手上げて後ろを向け！この学校は俺たち黒の騎士団が貰った」
玉城が銃をリヴァル達に向ける

「じゅ、銃を下ろせよ」

リヴァルが腕を広げ皆を庇おうとする

「ああ？何言ってるんだこの状況で」

「俺が皆を護る！」

決心したように玉城を睨む

「ああ、そうかい！」

銃を振り上げ、下ろそうとした瞬間

「暴力を受けて喜ぶのはマゾな人だけだよ」

今までいなかったゼブルがいつの間にか玉城の後ろに現れ銃を掴んでいる

「ゼブル！」

『ゼブル様』

救世主が現れたかの様に喜ぶメンバー

「形勢逆転」

玉城から銃を奪い首元に銃口を当てる

「ちょ！たんま！」

玉城が慌てて手を挙げる

「こいつ！」

他の団員がゼブルに銃口を向け人差し指に力を入れようとす

「止める！！手荒な真似はするなと言った筈だ」

ゼロが覇気のある声で止める

「違ーよ。こいつが」

玉城が涙目と言う

「先に手を出したのはオマエだろ？勝手なことするからそうなるん

だよ。おい、ソイツを放してくんねーか？」
マックスがゼブルをニヤリと見る

「……仕方ないか。どうぞ」
ゼブルも苦笑しながら玉城を放し銃を玉城に返す

「ちっ！」
銃を奪うように取る

『貴方はホテルで私達を助けてくれた人』
「そしてユーフェミア様を投げた人」
何気に有名になっているマックスを見る

「ん？見られてたか？そりゃあ、恥ずかしいな。それより此処に司令部を置くから大人しくしてくれ」
さして恥ずかしくがっていない表情で言う

「（何もアツシュフォードでなくても）」
ゼロの後ろにいたカレンが顔を俯かせる

「拒否権は無いのよ？」

「君たちの身の安全は保障しよう（ナナリー、戦いが終わるまで此処は黒の騎士団に護らせる。だから）」

仮面越しにナナリーを見る

「そんなこと信じられるかよ。戦争してるんだろ？俺達ブリタニアと」

「リヴァル。お願い言つとおりにして」
カレンがマスクを取り素顔を見せる

「え？」

「ああ」

「カレン」

『カレンさん』

ゼブル以外の全員が驚愕の表情を浮かべる

「そっか 約束してくれる？私達だけじゃ無く学園の生徒全員に手を出さないって」
ミレイが何かを悟ったように頷く

「男子寮も女子寮も外には出られないようにしたから大丈夫だと思
う」

「ゼロ。ランスロットが！」

扇が生徒会室に駆け込んできた

「やはり来たか」

「コイツ等の見張りは俺がしておく、旦那達はアイツを頼むぜ」
マックスが近くにあった椅子に座る

「（マックスなら大丈夫だな）分かった。後は頼んだぞ」
カレンや玉城を連れ部屋から出ていく

ゼロ達が部屋を出て数分後

「ニーナ。まだガニメデの倉庫にいるのかしら」
外の様子を見ている

「それより、カレンでしょ。あゝあどうなるんだらう俺達」
頭を掻きながら半ばパニックに陥っている

「大丈夫よ。黒の騎士団は。いえゼロは絶対に私達に危害を加えないから」
真面目な顔で呟くように言う

「何で言い切れるんだよ」
ため息を吐きながら自分達を見張っているマックスを見ると

「ラクダ」

「ダイヤモンド」

「ド、ですと　　ドリア」

『え、アリ』

「アリだとリス」

「スケート」

「ト　　トリ？」

『お2人が早いですね。えっと　　』

ゼブル、マックス、ナナリー、ガーベスの順

「何でしりとりしてんだよ!？」

リヴァルがのんきな3人（テロリストを含まず）に大声で聞く

「他になにやんの？トランプもチェス盤もないし。それに無駄な抵抗はするもんじゃ無いよ」
ゼブルが肩を竦めながら言う

「無駄って、お前が本気出したらテロリストでも10人ぐらい倒せるんじゃないのか？」

小声で言いながらチラッとマックスを見る

「俺が頑張ったってこの人には勝てないのさ。それにゼロが安全を保障してくれたんだから信じて終わるまでのんびりしようよ　　さ
て、新しく紅茶を入れるけど飲む人いる？」

ゆっくり腰を上げキッチンへと向かう

「俺は牛乳2と紅茶8、砂糖は小さじ8分の1杯で【って、本人同士だから言わなくても分かるってのにな】」
椅子に深く腰掛け直す

「了解【確かにそうだ。って、口調がマックスになってるんだね。分かりやすくいいけど】」
慣れた手つきでカップに紅茶を注ぐ

「ぬるめにだぞ【そう言えば昔の俺達も口が悪かったな】」
言いながら思い出すように斜め上を見つめる

「はいはい【確かに 成長するんだよ。でも、VVには口調を変えないな。これも友情のなせる技かな】」
親友の顔を思い出しながら紅茶を注ぎ続ける

「あつ、分かりました！お2人は声がそっくりなんですよ。足音も聞き間違ってしまうほど似ています」
ナナリーが難問がやっと解けたような嬉しそうな顔で言う

「そう言えばそうだな」
リヴァルや他の生徒会メンバーも頷く

「自分と似ているヤツは世界中に3人はいるって言うしな、そんな感じだろうな【コイツの聴覚なめてたな】」
マックスが笑いながら言う

「（普段は見えない古傷の位置まで同じ。これは偶然なのでしょうか？）」
「ガーベスがジーっとゼブルとマックス見ながら考える」

少しずつ穏やかな雰囲気になるが

「卑怯者!!」
スザクが大音量で叫ぶ

その声を聞いた生徒会メンバーが窓を見るとガウエインの指先がゼブル達のいる部屋に向けられている

「おい、あの黒いナイトメアってニュースで出ていたやつじゃないのか？」
リヴァルが恐る恐る聞く

「旦那のガウエインと枢木スザクのランスロットか」
椅子をまたぐように座り2機を見つめる

「そんなゼロが此処を狙うなんて。嘘、嘘よ！だってそんなことしたら」

ナナリーを見つめながら言う

「上手くいけば俺等全員死ねるな」

ゼブルの用意した紅茶を啜りながら呟く

「何であんたはそんなに余裕なんだよ!？」

リヴァルがマックスを見ながら聞く

「心配すんな。ソイツが言うようにあれは旦那のブラフだ。枢木スザクを焦らせる為のな」

マックスはニヤニヤと笑いながら様子を見守る

視点 変更 スザク

「(くっ！懐に飛び込んでハーケンを)ゼロ!!」
フロートユニットで一気に突っ込むが

「……………」

ガウエインからハドロン砲が発射された

しかし、上手く避け1回地面に着陸し、再び飛ばうとしたが

急に動きが止まる

「しまった。これは」

良く見ると円形に設置された緑色の光がランスロットを包んでいる

「やっぱり引っかけたか」

マックスがランスロットを見つめながら言う

『何で止まったんですか？』

ガーベスが動かないランスロットを見てマックスに聞く

他のメンバーもマックスを見つめる

「あの緑色の光を発している機械がゲフィオンディスターバ、電磁波で動力を止めちゃう装置だ。つまり強制的に電源を切られるって事だ」

そのことを察したマックスが説明する

「うふふふ、やっぱりこれの対策を取っている時間は無かったよね。約束通り弄らせて貰うわよ」

ラクシャータが木の陰から愉快そうに笑う

「ゼロ！お前は最後まで人を騙して！裏切って！！」
ランスロットの中からスザクが怒りを露にした声で叫ぶ

「ふん、偽善なる遊びに付き合っている暇は無い。さらばだ枢木スザク」

ガウエインが急上昇し飛び去って行った

「くっそお！！」

視点 変更 マックス

「このままじゃスザクまで？」

ランスロットの周りを囲んでいる黒の騎士団の面々を見ながら言っが

外の騒がしさに気づいた。どうやら誰かを探しているようだ

「何かあったのかしら？」

異様な騒がしさにミレイ達も気づいたようだ

「今のうちです。スザクさんを助けてあげてください。ここで今一番頼りになるのは皆さんなんです」

「うん。行くっ」

ナナリーの言葉に頷きミレイが立ち上がる

「そう言うのは俺に聞こえないように言えよ」
「すぐ近くの椅子に座っていたマックスがミレイたちを馬鹿にしたよ
うな目で見る」

「そつだ、この人がいたんだ」
あつちやくと言わんばかりに自分の頭を叩く

「別に見逃してもいいが条件がある。その女はここに残して行け。
少しばかり用があるんでな」
ナナリーを指差しながら言う

「 皆さんを見逃してくれるのなら私は一向に構いません」
迷いの無い口調でマックスに言う

「 いい度胸だな。おい、オマエ等はさつさと行け。別にコイツにエ
ロイ事する訳じゃねーし、コイツには危害を一切加えないから心配
すんな」

さつさと出て行けよと言わんばかりのダルそうな視線を送る

「 ここはナナリーちゃんに任せよう、あの人は絶対にナナリー
ちゃんに危害を加えないよ【後の事は作戦通りに頼むよ】」
ゼブルが踵を返し外に向かって押すように進む

「やっと行ったか」
やれやれだなと呟きながらナナリーを見る

「それで、私は何をすれば宜しいのですか？」
その視線に気づいたナナリーが聞く

「そうだな（残しておく為の言い訳だったんだが　　そうだ！）簡
単だ。『ルウ君』って言ってみる。呼ぶ感じでな」
少し考えまるで名案を考えたような笑顔で言う

「え？」「いいから。演劇をやる感じで心を込めて」わ、分かりまし
た　　ル、ルウ君」
言われたように呼ぶ感じで言うと

「おお！感動すんな、喋り方も本物そっくりだ（まあ、本物だけど
な）」
拍手をしながら感動している

「あの、ルウ君と言う人は？」
マックスに聞く

「気にすんな（次機会があったら『レントン』って言わせるか）さ
て、俺は出るがオマエは此処にいる。一番安全だからな」
椅子から立ち上がる

「貴方はどちらに？」

遠ざかっていく足音に反応して聞く

「皇女殿下には言わないとこに行くんだよ」
ニヤリとナナリーを見る

「な、何故その事を！？私を1人だけ残したのは誘拐か何かをする
ためですか？」
マックスの近づく足音に反応してナナリーが車椅子を動かしマック
スから離れる

「別に何にもしねーよ。それとオマエの事を知っているのは俺
が情報関係な人間だからだよ。じゃあな」
ナナリーの頭に手をポンつと置き一回撫でるとすぐ手を離し再び離
れる

「（！）？ この感触は（貴方はいったい何ですか？）」

「面白いな、誰でなく何と聞いてきたか。まあ、教えてやんよ。俺
は黒の騎士団特殊零番隊副隊長のマックスだ。覚えとけよ」
そう言い部屋から出て行った

「（あの手の感触は　まさかゼブルさん？）」

「……………」

マックスが出て行った扉とは違う扉からVVが入ってきた

「あら？もしかしてCCさん？」

足音を聞いたナナリーが聞く

「違うよ。ナナリー、僕は君を迎えに来たんだよ」

視点　変更　ツヴァイ

「準備はいいかい？セシル君」

モニターに移るパイロットスーツを着たセシルに聞く

「はい、大丈夫です」

「じゃあ、目的地に着くまで待機しててね」
そう言い通信モニターを閉じた

「お久しぶりですね。ロイド伯爵」
後ろから声をかける

アヴァロン搭乗していた軍関係者たちが急に現れた男に驚く

「いつ乗り込んだんですか？」
振り向きいつも通りの飄々とした態度で聞く

「少し前にです。クラブを借りに来ました」

「（少し前って、アヴァロンは数時間ずっと浮いてるんだけどねえ）
元々貴方専用に作っていますからご自由にどうぞ。それにもう2回
も無断で使ってるじゃ無いですか　って、仮面変えたんですね」
あまり深く聞かずにクラブのキーをツヴァイに渡すが、見覚えの無
い仮面が変わったことに驚く

前の青い仮面ではなく、某赤い彗星を思い出させる角？がある白い
仮面

「似合いますか？」
嬉しそうに聞く

「（……）それより僕と面を向かって話していると言うことは、復
帰したと思っただけいいんですよね？」
質問には答えず視線を戦場に戻す

「はい、アイネ卿やコーネリア様に迷惑をかけ過ぎました。この戦

争は俺が終わらせませす」
灰色のマントを翻し収納庫に向かう

政庁のアリエスの離宮風な屋上

「（凄いことになってるな。で、あれがダールトン機か、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏） コーネリア様」
クラブから降り、一回ダールトンが乗っていたのであろう大破した機体に頭を下げるとコーネリアに近づく

「ツヴァイか？」

朦朧とした意識で目の前のツヴァイに気づく

「はい、思いのほか遅くなって申し訳ございませんでした。しかし、よく分かりましたね。仮面を変えましたから分からないと思っっていました」

顔に付いた血や埃を手に持っていたハンカチで拭き取る

「丁度お前に言いたい事があった」

ツヴァイの手を握るが、弱っているのか力が全然入っていない

「お話は後ほどお聞きしますので今は喋らないで下さい。傷に障り

ます 応急手当しますので衣服を脱がしますね。あっ、別に卑猥な事はしませんので安心してください」
ゆっくり服を脱がしていく

「ふっ、いいのか？」

ニヤリとツヴァイを見ながら聞く

「え？」

「いや、そんな事よりお前の未来予知を信じておけば良かった。今になって私はもの凄い後悔している。信じていればユフィは」
ツヴァイを見つめながら泣きそうな顔を必死で押さえて言う

「大丈夫ですよ（死んでないけどな） そうだ、俺と賭けをしませんか？」

ニヤツと笑いコーネリアを見る

「賭けだと？」

「これも俺の未来予知ですが、昨今の悲しみを流すほどの嬉し涙を流しながら笑っているコーネリア様の姿が見えました。貴女が言うように俺を信じてくれるのなら絶対に後悔はさせませんよ」

「もし後悔したらどうする？」

ギロっとツヴァイを睨む

この悲しみを流すほどの幸福などありえないと思っているのだろう

「俺を好きにして構いません」
自信満々に言う

「ほ、本気なのか？」
何故だか嬉しそうに聞く

「はい。俺は終わり良ければすべて良しを信条としていましてね。
その終わりがこの世界の場合、俺の見立てど約1年後なのです」

「何を言っているのかは分らんが。お前の言いたい事は分かった。
お前を信じて後1年は生きてみよう。お前に軍の指揮権を預ける。
ギルフォード達を助けてやってくれ、その時にくれぐれも私の
負傷は伏せるのだぞ。ギルフォードやアイネ、兵士達が混乱してしま
う。それと 枢木を呼んでくれるか？話がしたい」

「イエス・ユア・ハイネス」
コーネリアを横に寝かせ、応急処置時に拝借した皇族用携帯電話で
スザクに電話をかける

「玉城さん。こいつ等どうしますか？他の学生達と一緒に寮か体育館に」

黒の騎士団の兵士が生徒会メンバーに銃を押し付けながら玉城に聞く

「どうやって出てきたんだ？おい、マックスはどうした？」

玉城がゼブルたちに聞く

「もうやられてる頃かもね」

ゼブルが苦笑しながら言う

「？」

ミレイ達はゼブルが何を言っているのかは理解できないような顔をしている

「はぁ？誰にだよ？」

玉城もゼブルを怪しむように見る

「ツヴァ「止める！」」

最後まで言う前にスザクがランスロットのコックピットから出てくる

「何だ。ブリキの為なら外に出るってか？」

ゼブルの言葉はスザクの声で打ち消されたらしく玉城は何事も無かったようにスザクを見る

「あらら（これだからKYは困る。これから意味深なセリフを言うとしたのに）」

危機感も無くため息を吐く

「欲しいのはその白兜だけだ。裏切り者は此処で死んでおけ」
玉城がスザクに銃口を向ける

「こんばんわあ〜」

すつとんきょうな声が空から響く

上を見るとライトで下を照らすアヴァロンが真上に現れ、そのアヴァロンからフロートユニットが装備されらサザーランドが飛んできた

「退け！一先ず退くんだ！！」

パニックになつた兵士達がその場から離れる

「まさか、あのプリン伯爵が前線に出るなんて」

ランスロットの近くにいたラクシャータがアヴァロンを見上げる

「（ラクシャータやっぱり君なのか）」

アヴァロンからラクシャータを見る

「今よ！」

ミレイが今のうちにと走りだした

「待て！」

玉城が銃口をミレイたちに向けるが

目の前にフローとユニットが付いたサザールランドが降りてきて玉城が放った銃弾をブレイズルミナスで防ぐ

「サザールランドエアか、パイロットはセシルちゃんかな？」

走りながらゼブルが独り言を呟く

アヴァロンからデフィオンディスターバに向けマシンガンが放たれ
「戻った」

ゲフィオンディスターバが壊れた事によりランスロットが再び稼働を始める

「スザク君ファイラーカバーを開けてエネルギーを交換するわ」

映りだしたモニターからパイロットスーツを着たセシルが言う

「はい。でも、どうしてセシルさんまで」

言われるままにファイラーカバーを開け新しいエネルギーファイラーが入り、見る見るエネルギーが補給されていく

「どうしてですか？ロイドさん」

「取り返しに来ただけだよ。色々よね」

「アヴァロンの中心部から物資搬入用の大型エレベーターが降りてきた

「落ち着いて！大丈夫だから下級生から順番に」

「下で待機していた学生達が次々に乗り込んでいく

「この皆をお願いします。自分はゼロを追います」
「今までの笑顔が嘘のように再び目を鋭くする」

「分かってるよ。婚約者や友達もいるからねえ　さて、学生さん
達の搭乗完了までだよ。頑張ってね」

「どンドン遠ざかっていくスザクを視線から外し、セシルの乗るサザ
ーランド・エアを見る」

「分かっています。え？何であそこから熱源反応が」
「近くの池の下から何かが出てきた」

「あれは、ガニメデ？　ニーナ！」
「ガニメデにはニーナが乗っていた」

「いけない！砲撃中止、黒の騎士団もストップ！」

ロイドが本気で焦りながら言う

「はぁ？」

「一時休戦だ。そいつを撃っちゃいけない」

ゼブルでさえも見たことの無い無い程慌てるロイド

「皆言う通りにおし、撃つんじゃないわよ」

ラクシャータがロイドの反応を見て本気である事を理解する

「彼女の理論通りなら、このトウキョウ租界そのものが死滅するかも」

ロイドが一回深呼吸をし、呟くように言う

「んな馬鹿なこと、信じなさいよ！サクラナイトまで使ってるんだから」な！？」

玉城が何かを言おうとしたがラクシャータの言葉で事の大きさに気づいた

「ゼロはどこ？私がゼロを！！」

平常心のかけらも無い目で絶叫しながらボタンを押そうとする

しかし

「ごめんね」

後ろからゼブルが現れ、ニーナの手からスイッチを素早く奪い首にチヨップをする

「きゃっ！ あ、ああ」

ニーナは気絶しそのままガニメデの座席に倒れる

「あ、ガニメデは下に戻しますんで続きをどうぞ」

頭を下げながらガニメデを倉庫に戻そうとするゼブルであった

視点 変更 ツヴァイ

スザクに連絡をしコーネリアから離れ戦線に上から現れたツヴァイが「全軍に告ぎます。コーネリア様から一時的ですが全軍の指揮権をお借りしています。皆さんはこの俺、ナイトオブツアのツヴァイ・ドウの命令にしたがってもらいます」

わざと黒の騎士団にも知らせる為にオープンチャンネルで語る

「ツヴァイ殿！？ やつと やつと帰って来てくれた」

「ドウ卿が出てきたか、これでこの戦争も」

アイネとギルフォードも安堵の表情を浮かべる

「ドウ卿が来たぞ!!」

「これで余裕だ!!」

「イレブンを蹴散らせ!!」

兵士達の士気が大きく上がる

「くっ!このままでは」

逆に黒の騎士団はリーダー不在の上新しい脅威の登場に引き気味になっっていた

「初めまして黒の騎士団の皆さん。単刀直入ですがゼロは帰ってきませんよ」

藤堂の乗る黒い月下の前に着地するクラブ

「何を言っている?」

「断言しましょう。何日待ってもゼロは帰ってきません!もう諦めて投降して下さい。ゼロ無き貴方達にこの戦争での勝ち目はありません。援軍もあと数時間で到着しますしね」

「君の言うとおりでも私は最後の最後まで抵抗しよう」

「気が合いますね。僕も一緒にしましょう」

藤堂の近くにいたのであるつライが藤堂の月下の横に並ぶ

「いいでしょう。全軍攻撃を続行。ただし俺の前の2機には手を出さないで下さい。では！」

藤堂の月下がクラブに猛スピードで近付く
しかしクラブは上に避けヴァリスを撃ち込む

「やらせはしない」

そのヴァリスをライの月下の輻射波動で止める

「やはり、一筋縄ではいきませんね」

上から見下ろしながら呟く

「ですが、俺も諦める気は無いんですよ」
再びヴァリスを構え、放とうとする

「ツヴァイ殿！僕もお手伝いさせてください」
後方よりアイネの乗ったグロースターが駆けつけクラブの横に立つ

「気持ちは嬉しいですが危険ですので離れてください」

「嫌です！この前はツヴァイ殿だけに任せて僕は何も出来ませんでした。でも、今は僕もやるんです！」
通信モニター越しに、涙目で必死で語る

「しかしですね えーっと その はあ、分かりました。ただし、十分に気をつけて下さい。相手はギルフォード卿レベルの強さです。少しの油断が命取りになります」
今にも泣きだしそんな顔で見つめられたツヴァイは根負けし、認めた

「分かっています」
すぐにいつものように気丈な笑顔に変わる

「では、アイネ卿は黒いほうをお願いします。俺は青いほうをやりますので、それと危なくなったら無理はしないで下さい」

「分かりました」
ランスを藤堂に構える

「お待たせしました」
ライの月下のほうを向く

「ああ、僕もカレンとゼロの為に負けられないんだ」

月下に付いている簡易型輻射波動機構、甲壱型腕を前に構える

「俺も俺の目指すものの為に負けられません」
ツヴァイもMVSを構える

先制したのはライ

右手に付いていたハンドガンで牽制をする

それをブレイズルミナスで防ぎヴァリスを放つが

月下は前に避け、そのままクラブに近付くがクラブは上に逃げる

それを読んでいた月下はスラッシュハーケンを使い近くのビルに一気に上り、輻射波動をビルに当て三角飛びの要領でクラブに迫り一廻転刃刀 かいてんやいばとう をクラブに振り下ろす

しかし、クラブはすぐに左腕のMVSで防ぐ

が、月下が一瞬の隙を突き反対の甲壱型腕でフロートユニットを掴み
「これで！」
輻射波動を当てる

「くっ！」
だが、クラブは右手にヴァリスを構え甲壱型腕を肘の位置から撃ち抜き、そのまま右腕で月下を横に薙ぎ払い距離を取る

現在の被害

ツヴァイ クラブ

フロートユニット使用不能

ライ 月下

甲冑型腕使用不能

「これで飛べないな」

「しかし此方も厄介な左腕を壊せました」

両者とも戦闘中だというのに笑顔を浮かべる

「だが！」

「無駄です」

月下の胸元から発射されたスラッシュハーケンをブレイズルミナスで防ぎ、戻される前にMVSで斬る

「な!？」

常人離れした動きに驚く

「幾ら貴方の腕が良くても左腕が無いその機体はさほど脅威ではありません。そして」

一気に月下へと近付きMVSを振り下ろす

それを迴転刃刀で防ぐが反対の腕に持っていたヴァリスで残っていた右腕を打ち抜き、すぐに左腕のMVSで右足を斬る

「くっ！僕は！」

必死で動かそうとするが片足では動かしようも無い

「さて　！？　誰だ！」

ライに近付こうとしたツヴァイだが、殺気を感じ取り無意識に何処から飛んできた飛来物を避ける

ツヴァイとライが飛来物が放たれた方向を見ると

「何だあのナイトメアは、パイロットが露出している？」

ライが驚愕の表情で見る。そのぐらい異形な姿をしている

普通は人型だが、目の前の機体は異形な形をしていた。今ジェレミアが乗っているであろうジークフリートと同じナイトギガフォートレスと呼ばれる非人型機体だが、大きな砲筒を左右に装備しておりパイロットの頭部には機体と繋がっているコードが見える

そのパイロットは黒い服に筋骨隆々として体が浮かび、顔はマスクをしているので見えない

「（！？　そんな馬鹿な　あのナイトメア。いや、あのナイトギガフォートレスはナイトオブラウンズの機体。そんなものまでこの世界には存在しているのか！）」

「僕を助けてくれたのか？」

謎のパイロットを見ながらライが呟く

「……………」

謎の機体の右銃口がライの半壊の月下に向けられ

「なっ！」

月下にコックピットの真下の部分に当たり脱出機能が作動しライの乗ったコックピットが謎のパイロットのほうに放出される

それをパイロットが片腕で受け止め、担ぐ

「（俺だけでなくライも狙っているのか？ってどんだけ馬鹿力なんだよ）貴方はどなたかは知りませんがそのコックピットにいる人は黒の騎士団に所属している人です。此方に渡してください。さもないと俺がお相手しますよ？」

クラブがヴァリスを構える

少しツヴァイを見つめ

「……………」

何事も無かったかのように去って行った

「待て！（速い。フロートユニットのないこの機体じゃ無理だな仕方ない、譲ちゃんを助けるか）」

くるりと踵を返しアイネの元へ向かおうとするが

「ツヴァイ殿！此方は終わりました」

片腕が無くなったグロースターがランスを上げて近付いてくる

「へ？倒せたんですか？1人で？（藤堂鏡志朗を？）」
後ろを見るとほぼ大破した黒い月下が見える

「疑っているんですか？」
頬を膨らませる

「そんな事は無いですよ。驚いただけです（戦歴がまるで違う藤堂に勝ったと言うことは、この子の実力は）」
「アイネを見つめる

「えっと、ツヴァイ殿も倒したんですか？」
見つめられていることに気づいたのか少し顔を赤くし恥ずかしそうに
聞く

「ええ、しかし大破してしまいましたのでパイロットの生死は
分かりませんが」
煙を上げているボロボロの機体を指で示す。ナイツオブ라운ズの
事は伏せるようだ

「未来ある若者が死に古き者が生き残るとは」
コックピットから何とか出てきた藤堂が嘆くように呟く

「さて、投降者は第1大隊のもとに集めてください。抵抗があるのなら止むを得ないですが攻撃をして構いませんが不要の攻撃を行った場合は覚悟してくださいね。あと、グラストンナイツはAグループとBグループの半分に分けてください。アイネ卿はAグループと第2大隊と共にメディア地区に、ギルフォード卿はBグループと第3大隊を引き連れ学園地区に向かってください。第4大隊から第7大隊は俺と共に残った正面戦力を叩きます。第8大隊から第10大隊は引き続き政庁の防衛に当たってください。勝利は目前です。あと少し頑張りましょう」
的確に指示を出す

「「「「イエス・マイ・ロード!!」「」「」
兵士達も素早く行動を始める

「（ラウンズってマイロードなのか？）」

数時間後、後にブラックリベリオンと呼ばれる事になる第一次トウキョウ決戦は黒の騎士団の敗北で終わる

「（これから少しの間は平和だな）」
やり遂げた満足感で一杯のゼブルだが後に想定外の2つの出来事が
起こるとは予想もしていなかった

第四十二話

本編 24

25

ゼブルとブラック

リベリオン

後編

(後書き)

前期本編終了です!!

次回はその後です

第四十三話　ゼブルとブラック　リベリオン　その後（前書き）

更新が思いのほかかなり遅くなってしまいました

また新しいキャラクターが登場！

明日からテストと言つのに自分は一体

第四十三話　ゼブルとブラック　リベリオン　その後

ゼブルの誤算の1つ、シャルルのギアスの強制力

常人ならざる精神力を持つゼブルだったが他の生徒達同様シャルルのギアスに屈し記憶を書き換えられてしまった

そして、書き換えられたせいでギアスの存在、ルルーシュがゼロだと言う事も忘れていた

ギアスをかけられた翌日

ゼブルが目を覚まし少しの間天井を見つめ

「朝か」

と、そのまま洗面台に向かうと鏡に紙が貼ってあった

紙には『かがみでじぶんのめをみながらもどれといえ』と書かれていた

「（一体何なんだ？しかもひらがなって）元に戻れ」
疑心暗鬼になりながらもダルそうに書かれたとおり言う

「ぐっ！これは？」

激しい頭痛が襲ってくる

ゼロの事、ナナリーの事、vvの事、ギアスの事
シャルルに換えられていた記憶が一気に蘇ってくると共に

「しまった！！ ハイド、ティグ、マジック、センス、ダイクン、
コンフ、誰でもいい返事をしてくれ！ クソ！」
自分の犯した罪に気づき悪態をつきながら座禅を組む

『元に戻れ』はゼブルがかけたギアスを元に戻すキーワードでゼブルの口から発しなくては意味が無く、ゼブルはギアスの発動時のみ有効と思っていたようだが実際は発動しなくても口から発してしまえばゼブルのギアスはどんなに重ねがけをしても一気に消えてしまう。

ギアスをかけていたマオには意識的に言わないようにしていたキーワードだが、シャルルによって換えられた記憶のせいでギアスの存在も忘れていたゼブルはそのキーワードの存在も忘れていた

『元に戻れ』の効果は作った人格を一気に消すだけでなく、ゼロがかけたギアスとシャルルのギアス効果も消したが

「誰もいないのか！？何でギアスが無くても元に戻るんだ？くそっ
！俺のミスだ！俺の、俺の、俺のせいだ！！」
頭を抱えながら叫ぶ

すると

「【よう、表。いや、俺と言ったほうがいいか？】」
唐突に体の中から声がした

鏡を見ると口元を歪めているゼブルが映る

「【！？ 何で話が出るようになったんだ？5年近く前から聞こえなかったはずなのに】」

前の世界からいたゼブルの別の人格はギアスによって作られた訳ではないので影響を一切受けていなかった

「【前の世界じゃお前が成長するにつれて干渉が出来なくなっただけ。この世界に来たら多少は干渉しやすくなったんだが、お前が変な同居人を作るからまたまた出難くなって困ってたら今度はその居候たちが一気に消えたからまた出れるようになったって訳だ】」
ゼブルの心情とは正反対の嬉しそうな声が響く

「【……】」

「【俺はあいつ等消えたから悲しんでいるのか？それとも力が無くなったから悲しんでいるのか？】」
無言のゼブルに別人格が声を少しだけ低くする

「【能力なんて俺のギアスだけで十分だ】」
瘡に障ったのか眉を寄せる

「【冗談だ。俺の中に俺はいたんだから全部知ってる　今の気持ちもな】」

今度は意を酌んだように優しく言う

「【あいつ等は俺であり、親友であり、協力者であり、家族だった。昔はお前がいたけど、どんどん声が聞こえなくなって最後のほうは俺一人だけ。だから、嬉しかった】」

「【……】」

「【虚しいな。前まではうるさい位あいつ等の存在感を感じていたのに、今は空っぽだ】」

「【俺はこれからどうする？大幅に力が無くなってこれからも上手くいくと思ってるのか？】」
鏡越しにゼブルを見つめなる

「【さつきも言ったけど元々は俺一人でやる予定だった。前よりはやり難いと思うけどやってやるさ】」
ゆっくり俯いていた顔を上げる

「【大きくなったもんだな。十年位前なんて何かあるたびに泣きながら俺にブツブツ文句を言ってたのにな】」
かっはっはと笑いながら語る

「【今泣き言を言っている場合じゃない。あいつ等の為にも俺は進み続けなくちゃいけない】」

「【合格だ。少しばかり俺の力を使うか】」
ニヤリとゼブルを見る

「【力?】」

「【この世界なら多少だが使えるはずだ。体を貸せ】やるぞ」
ゼブルの体に乗っ取った別人格が両手を広げると体が光に包まれる

数秒で光は治まった

「【何だ?少しだがあいつ等の存在を感じる】」
体に戻ったゼブルが胸に手を当てる

「【こんなのだけで疲れるとは、俺も弱くなつたもんだな。俺の力であいつ等の存在を微弱ながら世界に肯定させた。つまりほんの少しの欠片程度だがあいつ等は俺の中で生きているって事だ。俺だっ
て感じただろ?まあ、ほんの僅かだから会話も不可能だけどな】」
ふう〜と息を吐き説明を始める

「【十分!あいつ等が例え欠片でも俺の中で存在しているんだ。こ

れほど頼もしい事は無い】」「
急に笑顔になり目からは涙が零れる

「【それだけじゃないようだな】」

「【え？！ぐっ！目が！！】」
今度は目に激痛を伴う

「【我慢しろ】」

「【はあはあ、どうなったんだ？】」
数分で痛みが引いたので別人格に聞く

「【居候達が俺にプレゼントだそうだ】」

「【まさか】」
鏡を見ると

目には鳥の様な紋章が浮かんでいる
「【ああ、ギアスだったかな？その力を俺に預けておくだとよ】」
それも両目に

「【はっはっは、預けておくか、なら早く返したいな。ユフィちゃんに会いに行くか】よし！」
元気を取り戻したゼブルが活き活きした顔で部屋を出る

「（ ） 立ち直ったか、本当に昔から世話がやける。はあ、何の因果で俺は俺に取り込まれたんだ。

まあ、命の恩人と言えはそうだが、恩は数百倍以上で返してるしな。それにしても、あのハッピーとか言う神は何考えてんだ？

確かに比較的上位の神みたいだが、神の冒した罪は神が償うのが普通だろう。

しかも世界の渦の番人で渦が暴走したとか、俺は暴走を止めるのに自分を犠牲したんだぜ？流石に俺の残した自動修復作用のお陰で暴走は自然に直るだろうから飛ばされた人間を元の世界に戻すぐらい自分でしろよ。これだから若い奴らは困る（ ）」

インフィニットリッドメイクス
無限次元空間製作ボックス2 特設ユーフェミアルーム

何故か和風に作った部屋でユーフェミアはプリニーと話をしている

「お待たせユフィちゃん」

「ゼブル」

ユーフェミアが振り向く

「遅くなってごめんね。質問があるなら何でも聞いていいから、お茶お願いしていい？」

座布団に座りユーフェミアの隣にいた

「了解ッス」

一回敬礼をしトコトコと走っていく

「まず、何故私を世間から隔離するんですか？」

「今は死んだって事にしていたほうが今後の展開が楽だからね」
落ちていた剣玉を拾い大きいほうの窪みに上手く乗せる

「今後？」

「うん、君にはブリタニアの皇帝になってもらう」
細く伸びている棒に玉の下に空いている穴に刺す

「！？ 私がですか？」

心底驚いたように聞く

「うん、君には民衆を率いる才能があるからね」

「それならお姉さまやシュナイゼルお兄様のほうが向いていますわ」

「お待たせしましたッス」

湯気が立っている日本茶の入った湯のみを2つちやぶ台に置く

「ありがとう。そんなことは無いよ。これからの世界に彼等の様な

大を成す為に小を切り捨てる事を考える人達より、大を成す時も小を捨てない心がある人のほうが良い。そうしたら君かナナリーちゃんなんだけどナナリーちゃんはまだ早いからね。熱っ！」
説明しながらお茶を飲んだので手元が狂って多めに口に入ってしまった

「し、しかしお父様は？」

「ルルーシユさんに殺されるよ」

笑顔のまま言う

「ルルーシユに!？」

大きな声で反応するがルルーシユの怒りを知っているからなのか唇をかみ締めている

「うーん仕方ないね。これから起こる事を全部話すよ、だけど約束してくる?この秘密を他の人に口外しない事ともし俺の言う通りにこの世界が動いたら、君にはさっきも言ったけど皇帝になって世界を平

和にしてもらおう。どう?」

「私は いえ、教えてください。私は知らねばならないのです」
真剣な表情でゼブルを見つめる

「いいのかい?皇帝になるんだよ?覚悟も無いのに安請け合いされ

るのは困るんだけどね」

ゼブルの口調は変わらないが、目つきを鋭くしてユーフェミアに聞く

「プリニーさん達から貴方が私の命の恩人だと聞きました。本来なら無い命。私が皇帝になる事で救われる人がいるのであれば私は皇帝になります！」

更に意思を強くした様にハッキリ、力強く言う

「うん、いい目だね。君になら任せられる……じゃあ、そうだね俺の正体から教えようか。マックスやツヴァイの事もね」

視点 変更 ツヴァイ(マックス)

帝都ペンドラゴンのペンドラゴン皇宮内の廊下

「(仕事多すぎだろ)」
よろよろ歩きながら思う

エリア11の復興が大方終わったので、ツヴァイは本国に戻されてすぐに溜まった仕事の片付けに追われていた。数か月分の仕事を一気にやらされているのだから仕方が無いといえば仕方が無い

「おっ！ツヴァイ。フラフラしてるけど大丈夫か？」

ジノが後ろから近付きツヴァイの背中を叩きながら陽気に聞く

「仕事がこんなに溜まっているとは驚きの極みですね」
「少しだけ露出が増えた顔を見ると心なしかやつれているように見える感じる」

「ツヴァイの溜まった仕事だけじゃなく、長期の無断休暇の罰として俺たちの一ヶ月分の仕事を変わるだけでお咎め無しだぜ？軽いほうだろ？」

ジノが羨ましそうに言う

「そう言われればそんな気がしませんね。 ここですか」

「しかし、ラウンズ全員集合とは今度はどんな内容かな」
大きな門の前に2人が着くと、兵士達が一回敬礼し扉をゆっくりと開く

「これでヴァルトシュタイン卿以外は全員揃ったか」
中にはビスマルク以外のラウンズが揃っていた

「ツヴァイ 大丈夫？」

アーニヤがゆっくりツヴァイに近付く

「あまり大丈夫じゃありませんが、今まで休んでいたツケが回ってきただけですよ」

「その仮面。相変わらずいい趣味をしているな」
ノエットがツヴァイの新しくなった仮面を見ながら言う

「おお！分かりますか、この仮面の凄さが。実はこの仮面には知られざる逸話があるんですよ」
すると一気に元気を取り戻したように嬉々として語るうとする

「逸話？」

「面白そうだな」

アーニヤとジノが身の乗り出すように聞く

「この仮面は別の世界で赤い彗星と言われた男がつけていた仮面なんですよ」

「赤い彗星？」

聞きなれない単語に他のラウンズも反応を示し始める

「はい。ではヴァルトシュタイン卿が来るまでお話ししましょう。その世界のことと、この仮面を付けた男とそのライバルである白い流星と呼ばれる男のお話です」
力を入れて放し始めようとしたが

「残念だがもう来てしまったよ」

後ろからビスマルクが来てあえなく終了

「聞いたかったのに」

アーニヤが本当に残念そうに呟く

「またの機会にお話して差し上げますよ」
アーニヤの頭を優しく撫でる

「さっそくだがお前達に集まって貰ったのは理由がある。新しいラウンズを紹介したい」
ビスマルクが腰に手を当てる

「俺が来てからまだ半年も経っていませんのに」
後輩が来るので

「しかもだ、この前はツヴァイ1人だったが今回は………3人だ」
そう言う

ツヴァイ達が入ってきた扉とは別の扉から

「ナイトオブセブンに任命されました。枢木スザクです」

「ナイトオブファイブになりました。アイネ・ナハトムです」

「ナイトオブイレブンになった。ライアー・ファ・ブリタリアです」
ラウンズの証であるマントを羽織ったスザクとアイネ、そしてライ
が現れる

これには流石のツヴァイも驚いた

「（何故ライが此処に？いや理由は分かる。シャルルのギアスカ、隣にいる枢木スザクも気になってるようだが、譲ちゃんは何も感じてはいない？そうか、これもシャルルのギアスカ）こんなに早く俺に追いつくとは驚きですね」

考えながらもまずアイネに近付く

「貴方がいない間も僕は一生懸命貴方を追い続け、今がその結果です」

普段ツヴァイに見せる年頃の少女の目ではなく、戦士のような鋭い目つきで言う

「流石です。俺のアイネ卿ですね」

握手を求め

「はい！……へ？俺の？今のはまさか（告白ですか！？）
勢い良く手を握ったが、ツヴァイの言った台詞をゆっくり考えると嬉しさと羞恥心で顔を真っ赤にさせる

「そして枢木卿、貴方とは面と向かったの会話は初めてですね
そんなアイネから離れて今度はスザクに近付く

「やはりあの機体に乗っていたんですか？」

スザクが言っているのは黒の騎士団が藤堂救出作戦をした時だ

「ええ、まだ全快にはなっていませんでしたので正体を晒せませんでしたかね」

「……ありがとうございます。貴方がいなければ自分は死んでいたはずですよ」

深々と頭を下げる

「それでもなかったかもしれないですよ？」
小声で呟く

「は？」

「いえ、何でも」

「……」

「お初にお目にかかります殿下」
今度はライのもとへ行く

「ドウ卿。皇族とは言え僕は新参者です。それに堅苦しいのも苦手ですので気軽にライと呼んで下さい」
丁寧な口調と態度でツヴァイに接する

「なら、俺の事も呼び捨てで構いません。それに敬語も無しで」

「そうか。これからよろしくツヴァイ」
ライが握手を求める

「こちらこそ」

「挨拶は済んだようだな。では今日は解散だ。正式な発表は数日後になるだろう。今のうちに仲を深めるといい」
そう言い早足で出て行ってしまった

ツヴァイはこの後知るのだが
ビスマルクがツヴァイの仕事を変わりに引き受けたのだ

「俺はこれで失礼しますよ。仲良しごっこは好きじゃないんでね」
「では、俺も」
ルキアーノが先に出て、ツヴァイも出ようとする

「ツヴァイ殿もですか？」
ツヴァイを見つめながら上目遣いで聞く

アーニヤも同じようにジーっと見る

「今までサボっていた分の仕事をしなくてはなりませんし、孤児院にも行きたいですから。そろそろシロウさん達も近日中に来るんですけど、お迎えに行かなくてはいけませんね。等等、俺は多忙なんです。俺は普段ニルジヨワの研究所、アクエリオンにいますので会お

うと思えばすぐに会えるじゃないですか」「
ツヴァイが憂鬱そうに言う

「ツヴァイ、俺とスザクも行っていいよな？」

「ジノ、重いよ」

スザクの上に覆い被さりながら聞く

「（仲良くなるの早えな）構います」「ジノは駄目」「
ツヴァイが答える前にアーニヤが答える

「何でだよ」

「だから、重いつて」

更に前乗りになってアーニヤに講義する

「ジノ先輩も皆さんもいつでも歓迎しますよ。では、俺はこれで
そう言つと部屋から出て行った

視点 変更 ゼブル

トウキョウ租界

復旧し始めているのが目に見え、一日たっただけでも見違えるように綺麗になっている

代理総督を務めたギルフォードの迅速な行動のお陰だろう

その町を歩きながら

「（やつぱり口口とヴィレッタちゃんはあるのか、それにシャーリーちゃんも元に戻ってルルーシユさんとイチヤイチャしてる。カレシちゃんとcccちゃんには多少の支援をすることで、マックスにはツヴァイをR2までやって貰う。で、俺はガーベスちゃんとイチヤイチャする）うん、完璧」

楽しそうに呟くと

「久しぶりだな。少年」

青い服を来た長身の男がゼブルの背後に立つ

「いつ、そしてどうやって帰ってきたんですか？師匠」

冷や汗を掻きながらゆっくりと後ろを振り向く

「3日前に上海から泳いで、昨日カゴシマだったかな？そこに着いて、そこから走って帰ってきた」

長身の男（以降チャン）がタバコに火をつける

「（上海から此処まで3日で移動するとか……それにしても流石風水師ってところかな？方角を的確に理解しているから迷う事無く正確に泳いでこれたのか） 後ろの方は？（もしかするとともしかしないで欲しいけど）」

三つ編みに中国の拳法家がよく着る服を包んだ男をチラッと見る

「僕は東方不敗、マスター・アジア！こやつとは中国で会って戦ったんじゃが決着がつかなくてな、その後何かと馬が合って今は一緒に行動しておる」

三つ編みの男（以降東方不敗）

「（うわあ、またチートキャラが出てきたよ。しかも師匠と引き分けるとか）」
心の中でため息をつく

「聞けば私達と同じで別の世界から来たと言う。私が君の事を話したら1度戦ってみたいと言ってたな」

「（ナイトメアの何倍もする大きさのモバイルスーツを生身で壊す人と）いや！いや！俺は師匠より全然弱いじゃないですか。無理ですよ」

想像しただけで顔を真っ青にする

「僕の弟子は僕を超えたぞ？僕等がお主を鍛えればいいだけのこと」
ニヤリとゼブルを見据える

「え？」

ゼブルの顔から一気に血の気が引いていく

「ふむ、名案だな。中人ちゆうじん以上は以て上じやうを語かたぐ可べし。お前にはその才能がある。私が簡単に鍛えただけでも常人のそれとは一線を画する

ほどだ。私達で更に鍛えればお前は私達すら凌駕するやもしれん」
チャンも頷く

「善は急げじゃ。明日から籠るぞ。準備をしておけ」

「はあ、分かりました（まあ、いいか。俺も鍛えたいと思ってたし。うん、ポジティブにいこう）」

（ニルジヨワとは自然と人が共存している良い町だな。彼との約束通りこのアクエリオンと言う施設で炊夫をしているが、この施設には差別や偏見を持った者がいない。前の店では日本人と言うだけで汚れた物を見るような目で見られる事も少なくなかったがこの施設いや、この町全体にはそれが全く無い。セイバーも喜んでいるようだし、彼にはいつも助けて貰ってばかりだから、私にはこの程度しか出来ないが恩返しはさせて貰うぞ）

（ライ、雰囲気も学園にいたときとは圧倒的に違っている。君も皇帝陛下にギアスを　しかし、ライの腕は確かなものだ。頭脳戦はもとより、ナイトメア戦でも下手をしたら僕よりも強い。敵だったなら脅威だったが味方なら凄く頼もしい。でも、君はカレンの事も忘れられているのかい？君と一緒に戦場を廻り、君が命をかけてでも護ろうとした女性を　）

（明日からは地獄の特訓か ガーベスちゃんには内緒にしちゃったけど、まあ一ヶ月後は殆ど一緒にいてあげれるから我慢してください

さて、

次回ゼブルと魔神 が 目覚める 日。約一年後か、長いけれど気長に待とうか）

第四十四話 次本編 1 2 ゼブルと魔神 が 目覚める 日 (前書き)

大幅に端折りましたが

R2 開始です

第四十四話 次本編 1 / 2 ゼブルと魔神 が 目覚める 日

ブラックリベリオンから1年後

エリア11は完全に復興したと言っても過言ではないほど回復したが、日本人は再びイレブンと言う名になりブリタニアの隷属となった。さらにカラレス新総督による弾圧と圧政の強化で名誉ブリタニア人ですら奴隷同然の扱いを受けていた。

日本人は待っていた。救世主が再び現れる事を

数日前

黒の騎士団の幹部達が収容されている牢獄

下位の団員達は処刑されたが、この牢獄の中の幹部達はツヴァイの計らいで処刑を何とか免れていた。

「くっ、ゼロさえいれば」

地面に投げられた玉城が半泣きになって呟く

囚人服は両腕は縛られているので芋虫のように這って進む

「言うな。裏切り者の事は」

違う部屋に入れられている千葉が天井を見ながら言う

「ゼロは裏切ってなんかいいえよ！」

「何か事情があつたんだろう」

2人の会話を聞きながら扇が呟く

「事情？最終決戦で指揮官がいなくなる理由なんて
苛立ち気に皮肉を込める

「止める！いずれにしろゼロは死んだのだ（ライ君も）
正座を組んでいた藤堂が言う

「死んだ？」

「オマエは何勘違いしてんだ？」

藤堂が入っている牢獄の前でいつからいたのか胡坐を組んでいる

「マックス！」

藤堂とは反対に入れられていた杉山が立ち上がり鉄格子に寄る

マックスの容姿は一年前とほとんど同じだが、1年前と違い赤い？
字型のサングラスを付けている

「おっと、声は抑えろ。監視にバレるだろ」
杉山の口元に人差し指を立てる

「お前、今まで何を？」

「ツヴァイにボコられてな、お陰でいまだ復活出来ねえんだよ」
パーカーを捲り上げると、大きな×印の傷が出来ていた

実際は2人の師匠との修行で負った傷だが、何故か治女神の首飾り
でも治らなかつたので言い訳代わりに見せ付けた

「今更何の用で来た？見たところ私達を助ける気はないのだろ
う？」

藤堂が再び目を瞑る

「ああ、もうちょっと待ってくれ、オマエ等を助けるのは旦那の仕
事だからな」
ニヤリと笑う

「ゼロは生きているのか！？」
玉城が顔を輝かせて聞く

「ああ、正確には生き返るだな。カレンとcc、そしてト部のお陰でな」

「ト部　よく生きていてくれた」

「それと、オマエ等はそこから出た後に衝撃的な事を知るんだがまあ、今はいいか」
一人で頷きながら外に繋がる扉に向かう

「おい！何処に行くんだよ!?!」

「もうすぐ見回りが来るだろうからな。そうそう、吉田と井上」
扉の近くにいた2人を交互に見る

「何かしら?」

「良い意味で計算外だが、どうだ？生きてるって良いだろ？もっと良いことがもうすぐ起きる。楽しみに待ってる」
そう言い扉を開け出て行った

視点 変更 ゼブル

平和な学校で今、ルルーシュとヴィレッタの追いかけっこが繰り広

げられていた

「リヴァル頼んだぞ」

リヴァルに黒髪のカツラを投げる

「おう、これ鍵な」

それを受け取り、リヴァルもサイドカーの鍵をルルーシュに投げる

「助かる。行くぞ、ロロ」

ロロの手を握り走り出す

「待ってよ兄さん」

と、ロロでは言いつているが引つ張られてはおらず横に並んで走っている

「（ルルーシュさん、相変わらず遅いね）」

ルルーシュ達を見ながらリヴァルをゆっくりと追う

「ルルーシュ！」

ヴィレッタが2階から飛び下り、外にいたリヴァルの上に着る

「おつえ！？」

不意の衝撃に驚きながらヴィレッタに潰される

「ふふ、これで」

「殺す気ですか？」

カツラを取りながらリヴァルがヴィレッタを見る

「リヴァル？いつの間に」

本物のルルーシュを探そうとして顔を上げると

「生徒は見た。女性体育教師の過激すぎる補習授業」
ゼブルが笑いながら校門を指差す

ヴィレッタが見たのは

「リヴァル、借りてくぞ」

サイドカーの助手席でルルーシュが手を振る姿だった

「ルルったらまた」

窓からその様子を眺めていたシャーリーが呟く

「相変わらずですね」

その隣にいたガーベスも窓の外を覗く

「少しは真人間になって欲しい位よ。それにしても随分喋れるようになったね」

目線を窓からガーベスに移す

「ゼブル様のお陰です。お父様やお母様にも喜んで頂けました」

1年前まで当たり前のように持っていたスケッチブックを所持しておらず、普通に言葉でのコミュニケーションしている

「あのブラックリベリオンの後に変わったことがあるとしたらガーベスが喋れるようになっただけじゃないかな？ルルは相変わらずサボってるし、ゼブルも気づけば旅に出てるし、リヴァルも会長も相変わらずで。ああ、でも、スザク君とアイネが何だか凄く偉くなったんだっけ？それと口口と仲がよかったアリスちゃん達も自主退学しちゃったんだ」

ファカルティーズ
アリス達特別工作部隊はブラックリベリオンの少し前にツヴァイの命令で本国に戻され、そのまま自主退学をした。スザク、アイネは共にラウンズになって以降学校は休学中。ライは

そして話に出てこなかったニーナは腕を買われシュナイゼルの研究チーム、インヴォーグのチーフとして新型爆弾の研究をしている

「そう考えれば色々ありましたね。私とゼブル様の関係もお父様やお母様に認めていただきましたし、それから」

目を輝かせて語り始める

「（あっちゃ、地雷踏んじゃった）」

「他にもですね」

屋上

ヴィレッタの鉄拳制裁から逃げているうちに何故か屋上に着いていた

「ルルーシユさんいつまで補習をサボれると思う？」
手に持っていた紙パックのジュースをリヴァルに投げる

「はあはあ、1週間は硬いな」
肩で息をしながらそれを受け取りストローを刺す

「意外に今日だったりしてね」
ゼブルはてんで疲れてもいないようで、同じようにストローを紙パ
ックに刺す

「ルルーシユに限って、ブハア！これ野菜ジュースじゃなかよ！」
口から緑色の液体が零れる

「正確には青汁ね。何か最近野菜不足みたいだね」
「何でもないかの様に飲み続ける」

「一言言ってくれよ！？おい、ゼブル見るよ！ビルが！」
リヴァルが租界のほうに指を差す

「うわあ、バベルタワーだっけ？凄い事になってるね」
と、言いながらも青汁を飲み続ける

エリア11の内で一番高いビル、バベルタワーの上に飛行船が停泊しており、屋根を壊したのか灰色の煙が上がっている

「テロリストか？」

「多分そうなんだろうね。怖い怖い　ん、今度はピンクか」
見ると飛行船から濃いピンク色の煙が出されている

すると周りを飛んでいた飛行機が攻撃を受けたのか急に煙を上げて墜落していった

「お前随分悠長だな」

「テロリストで一番力があつたのは黒の騎士団だったけど、そのリーダーたるゼロがいなくて、部下たちも殆ど捕まってるんじゃないし、どつしよつもないでしょ」

ゼブルが飲み終わった紙パックを握り潰す

「あら？何してんの？こんな所で」

ミレイが後ろから声をかけてきた

その横にはシャーリーとガーベスもいる

「あのビルを見て下さいよ。って何かシャーリーちゃんやつれてない？」

「だ、大丈夫（ノロケ話を聞くって以外につらい。会長が来てくれなかったら）って、バベルタワーが！」

「あれは何かしら？」

ミレイが空を見つめると小さい飛行機のようなものが何十機も飛んでいる

「あれは、ナイトメアを運ぶ小型飛行機ですね、それもあんなに大量になんて（さあ、見せて貰うよ。ルルーシュさん）」

視点 変更 ルルーシュ

バベルタワーで賭けチェスをやっていたルルーシュだが、黒の騎士

団の残党の起こしたテロのせいでロ口と離れてしまった。
その後逃げようとしたルルーシュを機密情報局きみつじょうほうきぎやくと呼ばれる皇帝直属のCC捕縛を目的とした組織に殺されそうになった所CCが庇い、ルルーシュの記憶を取り戻させた。
記憶が戻ったルルーシュは、機密情報局の人間をギアスで殺し、管制室で指揮をとっていた

「良くやったQ1、次は21階へ向かえ。P4は階段を封鎖。R5は左30度。N1、そこから50メートル天井に向けて正射」
ルルーシュの計算通りに敵がどんどん減っていく

「ふっふふ、そろそろカラレス総督の出番かな？」
敵残存勢力を見ながら呟く

「順調そうね」

「カレン？21階に行けと」

「2人つきりになれたみたいね」
銃をルルーシュに向ける

「神根島でゼロを見捨てた君が何の真似だ？」
カレンの目を見つめながら聞く

「ルルーシュ。貴方はずっと私を騙していた」

「ゼロが本当は君のクラスメイトだったことか？それともギアスの

力のことが？」

「両方よ　あなたは私にもギアスを使ったの？」

「何を言っているんだ。君の心は君自身のものだ。ゼロへの忠誠もマックスの強さに対する憧れも、そしてライへの想いも全て」
ゆっくりカレンに歩み寄る

「動かないで！」
銃を持つ手に力を入れる

「カレン、誇りに思っている。君が決めたんだ。君が選んだんだ。
この私を」
カレンが持っている銃を下ろす

「……」

「信じられないか？ライは私の正体やギアスのことも全てを知った
上で私についてきてくれた」
カレンの目を見つめる

「ライが？　でも、ライは扇さん達と一緒にブリタニア軍に捕らえ
られて」
目に涙を浮かべ、視線を逸らす

「？　そうか、君は知らないのか」
ルルーシュはカレンを哀れむ様な眼差しで見る

「え？」

「（いや、今言ってしまうと士気が下がる恐れがある）ところで、いつまでその格好でいる気だ？」
話を逸らす為にカレンの胸元を見る

「み、見ないでよ！この変態！！」
慌てて胸元を隠す

「ゼロに向かってその言い方は、今のはルルーシュに言ったのよ！」
はいはい？　どうした？」
cccからの通信が入った

「ブリタニアの援軍が来たぞ」
敷地内のマップを見るとcccの言う通り敵のナイトメアが次々と地下から入ってきている

「上からもこんなに沢山」
周辺マップにも敵増援大隊が迫っていた

「やっとカラレス総督が出てきたか、脱出は難しい。ゆえに、私の

勝ちだ」

その後1機の新型ナイトメア、ヴィンセントの登場でト部や多くの団員を失ったがルルーシユの宣言通りになった。

バベルタワーと道路を繋ぐ唯一の道を塞いでいたカラレス総督が乗るG-1ベースを、仕込んでおいた爆弾で半壊させたバベルタワーの上半部分でその道ごと潰した。

さらにそのバベルタワーの上半部分の内部を通り、近くにある中華連邦の総領事館にいる中華連邦の政治を仕切っている大宦官だいかんがんの1人である高亥ガオ・ハイにギアスをかけ総領事館に逃げ込むことに成功した。

そして

「私は、ゼロ」

エリア11内の全テレビ放送局にゼロの姿が映る

「日本人よ。私は帰ってきた」

「聞けブリタニアよ！剋目かつめくせよ！力ある全ての者達よ！」

「私は悲しい…」

「戦争と差別、間違っただま垂れ流される悲劇と喜劇。世界は何一つ変わらなかった」

「だから私は復活せねばならなかった」

「強き者が弱き者を虐げ続ける限り、私は抗い続ける！まずは愚かなるカラレス総督にたった今、天誅を下した！」

「私は戦う。間違った正義を行使する全ての者達と！ゆえに、私はここに合衆国日本の建国を再び宣言する！！」

視点 変更 ゼブル

アッシュフォード内の第2体育館

「（さて、また忙しくなるね）あれ？ルルーシュさん帰ってきてたんだ。体操着つてことは補習？」

「ああ、ヴィレッタ先生を待っているんだ
体操着姿のルルーシュが答える

「（何でこんなに短パンが似合わないんだろ）それとテレビ見た？
ゼロが復活したんだってさ」
素朴な疑問を心に留め、携帯電話のテレビ機能で演説中のゼロを見せる

「ああ、本物が偽者か。それよりそれを貸してくれないか？ちょっと電話がしたいんだ」

「いいよ、ヴィレッタちゃんもまだ来ないみたいだしね。代わりにボール借りるね」

携帯を渡し、代わりにルルーシュが持っていたバスケットボールを取り

「シュート」

スリーポイントラインからボールを放るが

「惜しいな」

見当はずれな所に飛んでいった

「ゼブル、ロロが聞きたい事があるらしい」

「俺に？ もしもし」

携帯電話を受け取り、耳に当てる

「今どこにいるんですか？」

静かな声で聞く

「ルルーシュさんと一緒に学校の第2体育館だよ。そっちは？」

「学校ですか？（ルルーシュは中華連邦の総領事館にいるはずじゃ）
僕はまだ租界にいます」

「そうなんだ。おつ、ヴィレッタちゃんも来たよ。かわるね」
ヴィレッタに携帯電話を渡す

「ロロ、ルルーシユはこれから補習だ。お前も早く戻って来い」

「（本当にルルーシユは学園に？）はい、分かりました」
電話を切る

「電話は終わったかな？少年」

ロロの目の前の長身長髪の青年（以降^{シンク}星刻）が聞く

中華連邦総領事館の前で電話をしていたロロは

「終わったみたいです。色々と」

そう呟くと後ろにあるヴィンセントに乗り込み、政庁へと駆けた

「ゼブル。ルルーシユの補習を始めるから出て行け」
ゼブルに携帯電話を投げる

「ヴィレッタちゃんが冷たい。まあ、いいや。ルルーシユさん（色々と）頑張ってるね」

（敵の中枢は監視データの送信先、ここまではいい。問題はナナリーだ。

皆からナナリーに関する記憶を奪ったのは学校にナナリーが現れないと知っているから、つまりブリタニア皇帝がナナリーを握っている可能性が高い。相手は実の子供ですら道具として使う男だ。

俺の記憶も、俺がゼロに戻ったと知らされたらナナリーが危ない。下手には動けない。欺くんだ。俺を監視している連中を　その内の1人、ヴィレッタ・ヌウ、かつて俺がギアスをかけた軍属の女。つまりギアスはもう使えない。

ならば存在しないはずの弟、まずはこいつから優しく攻略してあげよう）

（総督殺害と逃走ルートの確保を同時に実現するなんて、こんな知力、大胆さ、やっぱりルルーシュがゼロなのね。

ト部さんや他の仲間を多く失ったけれど、ルルーシュ、いや、ゼロがいれば捕らえられている扇さんや藤堂さん達も救えるはず、それにライも　ライ、やっと会えるよ。やっと）

（勘だけどライとアイネちゃん2人はスザク達と一緒にくるはず。でも、マーリンとゲライントは俺が発案してアクエリオンで開発した機体だから弱点も知ってるから大丈夫か。

それにこっちは切り札がある。藤堂の四聖剣ならぬマックスの参さん体たい人いちじん。ライとアイネちゃんが加わった事によって開いた戦力差も

参体吉人とマックスで埋まる。うん、完璧。

問題はあの子の衝動をどの位押さえ込ませるかだな。あの変態吸血鬼とは違ってあの子の場合真性だからね

第四十五話 次本編3 ゼブルと囚われの学園

生徒会クラブハウス内

私服を着たルルーシュが出かける為に玄関に向かって

「デートだってね」

ゼブルがドアの前でいつもの様に笑みを絶やさず見つめる

「ヴィレッタ先生の誕生日プレゼントと一緒に買っただけだ」
扉に手を触れる

「それもデートに入るんだよ。いつだったか言ってたよ、ルルとケ
ーブルカーに乗ってみたいな。ってね」
ルルーシュを静かに見つめる

「……………（俺がギアスをかけた場所か）」
表情は変えないが握り拳を固めている

「何をするのもルルーシュさんの勝手だけれど、それで彼女が悲し
ませるのは駄目だよ」
ゼブルがルルーシュに近付く

「分かついる（俺だつてちゃんと分かっている。俺のせいで、シャーリーは記憶を　いつまでもこのままじゃいけない。全てが終わつたらきつと君を）」
握り拳を緩める

「覚悟は決まつたかな？彼女を救えるのはルルーシュさんだけ。會長でも俺でもリヴァルでも無く、ルルーシュさんだけ」
そう言いルルーシュが開けようとした扉を代わりに開ける

「お前はまるで何でも知っているような言い方だな」
ふっ、と笑みを浮かべる

「買いかぶり過ぎだよ。俺は只のハッピーエンド至上主義者。だから恋愛にも鋭いのさ」
即席の決めポーズをとる

「ありがとう。お陰で決心がついた」
そう言つと再び歩き出した

「いつてらっしやい」
ゼブルはその後姿を優しく見送つた

時間を遡り、なかの扉ゼロが復活した日

帝都ペンドラゴンの1室にゼロの演説を全ラウンズが集まって聴いている

「（何だ？この胸のざわめきは）」
ゼロを見た時に起こった奇妙な緊張感にライは胸元を押さえる

「おやおや、いきなりやってくれるね。イレブンの王様は、なあ？
スザク」
面白そうにスザクに聞く

「……………」
ジノの問いに答えず無言で画面のゼロを見つめる

「なあ、死んだんだろ？ゼロは。じゃあ、偽者か？」
無言だったのをさほど気にしていないようにスザクの肩に腕を置く

「……………」

「本物ですよ。ジノ先輩」

無言のスザクの代わりにツヴァイが答える

「ツヴァイには分かるの？」

ツヴァイの隣の椅子に腰掛けていたアーニヤが聞く

「ええ、多分ギルフォード卿も俺と同じで本物だと分かっているでしょうね。それにしても」

少し考えこむ

「ツヴァイ殿？」

「ヴァルトシュタイン卿。EUとの戦いも重要ですが、エリア11にも早めに我々のうちの何人が送ったほうがいいでしょう」

後ろに立っていたビスマルクを仮面越しに見つめる

「考えてお」

「ありがとうございます。それにしても相変わらずゼロの仮面はカッコーいいですね」

「」

今まで静かだったライがドアのほうへ向かう

「ライ、どこに行くんだ？」

「何だか気分が悪くなった。外で風に当たってくる
それだけを言うと早歩きで部屋を出て行った」

「追わなくてよろしいのですか？エルンスト卿
ツヴァイがライを見ていたドロテアに聞く」

「何故私に振る？」

ライを見つめていたドロテアが不意を突かれ、ビクッと反応する

「殿下の事を気にかけている様でしたのでね
ニヤッと口元を歪める」

「なっ！？」

黒い頬が赤くなる

「殿下はもてますからね。この前だってギネヴィア第一皇女からア
ブローチを受けていたようですし」
「自分の事のように嬉しそうに言う」

「（自分の事には疎いくせに）」

「（馬鹿）」

「（鈍感な人ほど他人の事になると鋭いので本当なのね）」

アイネ、アーニヤ、モニカが深いため息をつく

「（無意識とはいえ罪作りな奴だな）」

それを見たビスマルクがその光景を苦笑する

「それよりゼロってどんな奴なんだ？」

ジノがツヴァイに聞く

「そうですね、護ると決めたものを護る為ならどんな汚い手も平気で使い、そして例えどんなに強大な相手にでも向かおうとする。そのくせ身内には非常になりきれない。そんな優しい人なんですよ」

「よく知ってるんだな」

「ええ、一度お会いしたことがありますから」

「へー え？」

周りの空気が張り詰めた

「！？ ドウ卿、それは本当ですか？ 事実なら、貴方はテロリストを見逃した事になるんですよ」

スザクが怒気を帯びた顔つきでツヴァイを見る

「俺の場合は黒の騎士団成立前ですし、向こうは仮面をつけていませんでしたので本人かどうかも当時は不明でした」
手を振り、頑張って言い訳をするツヴァイ

「……」

いまだ納得できないような顔でツヴァイを見つめる

「それにしても面倒ですね。黒の騎士団が復活する事になると必然的に彼も復活するのでしょうかね」
わざとらしく話を逸らす

「彼？」

いつの間にかツヴァイの椅子の肘掛に寄り掛かっているアーニヤが聞く

「黒の騎士団特殊零番隊副隊長である、マックスと言う男です」

「あの男がですか!？」
アイネが忌々しそうに聞く

「誰だ？」
スザクとアイネ以外のラウンズは誰だ?と言うような顔でツヴァイを見る

「ツヴァイ殿と同じぐらい強い顔に包帯グルグル巻いた口が悪い男

だ」
ツヴァイの代わりにアイネが思い出したくないように言う

「彼と最初に会ったのは俺がエリア10で傷を癒している時にです。彼は現れてすぐ元日本解放戦線の藤堂の処刑を黒の騎士団が阻止すると俺に教え、下手をすると枢木スザクが殺されるかもしれないから助けてやれ。と俺に言いました。理由は分かりませんが、枢木卿は間接的と言えどマックスに命を救われたということですから」

スザクをチラリと見る

「……」

スザクは無言でツヴァイを見つめ、続きを聞こうとする

「次にキュウシュウ戦役。枢木卿がゼロと協力し解決した事件ですね。アイネ卿はご存知の通り俺はマックスと共同戦線を張り共に戦いました」

「あの時ツヴァイ殿は一言も喋らなかったじゃないですか。ですが圧倒的でした」
うんうんと頷く

「アイネ卿のほうこそ、俺たち2人分を1人で倒したじゃないませんか。」

話を戻しましょう、最後にブラックリベリオン。事実だけを話すとマックスから見逃して欲しいと提案があり、1つだけ条件を出して

それを受けました」

「条件？」

「ゼロが再び現れるまで黒の騎士団と接触をしないと云うものです」

「何故そのような事を？」

「俺の未来予知では枢木卿がどこかの洞窟でゼロに向かって銃を放っている映像が見えました。ですからその様な条件を出しました」
スザクを見ると

「……」

ただ頷くだけだ

「何で戦わなかったの？」

アーニヤがいつの間にツヴァイの後ろに回り首に腕を巻いている

「先輩、危険ですので仮面には絶対に触れないで下さいよ。」「大丈夫だから理由」そうですね。戦わなかった理由は単純に俺ではマックスには勝てないからです。彼はヴァルトシュタイン卿と同じくらい強いんですよ」

「ナイトオブワンと同じ腕だと」

ドロテアがビスマルクを見ながら呟く

「彼は圧倒的に強い。ですので俺はその提案を受けました」

「なら、何でブラックリベリオンに参加しなかったんだ？ヴァルトシュタイン卿と同じ腕なら楽に制圧出来ただろう？」

ジノがふと思つた事をツヴァイに聞く

「彼曰く、まだ早い。との事です。意味は俺も分かりませんが、彼はゼロが復活することを知っていたのかも知れませんね」

「失礼します。枢木卿、お時間です」
兵士が頭を深く下げ部屋に入ってきた

「分かった」
短く言つと兵士へ向かう

「お手伝いしますよ」
ツヴァイも立ち上がりスザクの後ろに立つ

「ありがとうございます」
素直に礼を言い、再び歩き出す

「じゃあ、俺も」

ジノも続こうとするが

「僕とドウ卿だけで十分だよ。今回はイタリア州軍とドイツ州軍の連合軍だけだから」
スザクがやんわり断った

「左翼ドイツ州軍が攻勢に移りました」

「右翼のイタリア州軍にはよく持ち堪えている」

「今夜のボルドーは勝利の美酒となりそうですね」
司令官らしい男が下品な笑みを浮かべる

EUの主力ナイトメアであるパンツァー・フンメルと呼ばれる機体とブリタニアの新たな主力機であるグロースターが戦闘をしていた。緩やかな崖の上と言う地の利を生かして次々にグロースターを破壊していく

「ドイツ州軍直上より未確認1！」
突然オペレーターが叫ぶ

敵陣のど真ん中にスザクの乗るランスロット・コンクエスターが降り立つ

「ランスロット！」

「ブリタニアの白き死神」

周りにいた機体がランスロットから距離を取り始めた

「降伏してください。武器を捨てた者を自分は討ちません」
オープンチャンネルで最終忠告を行う

「舐めるなあ！敵はたった1機だぞ討ち取れ！」

司令官がそう言うつと距離を離していたナイトメアが次々とランスロットへと向かう

「うああ！」

突然1機のパンツァー・フンメルのコックピットが機体から離れる

「おい、何逃げてんだよ！」

隣の機体に乗っているパイロットが文句を言う

「違う、勝手に！」

他のパイロットのコックピットも機体から離れる

次々と機体とコックピットが離れていく

「イタリア州軍の兵士達が離脱していきます」
司令室にいる男が言う

「ランスロットのいるドイツ州軍ではなく、イタリア州軍だと？
機はずつ離れると言う事は何か理由があるはずだ。探せ！」
司令官が不安そうな表情を浮かべる

「特定できました。敵戦艦からの射撃により強制的に脱出させられているもようです！」
オペレーターが敵戦艦を映し出す

すると緑と黄緑、黒色が混ざった迷彩色をした機体が何かを撃っている

「長距離射撃でこれほどの精密さだと！？　ブリタニアの暗殺者。
ツヴァイ・ドウ、噂は真だったのか」
忌々しげに唸る

「ブリタニア軍が攻勢に移りました。左翼のイタリア州軍にいたってはナイトオブツァー出現以降、敵機を1機も撃破出来ない状態です
！！」

「馬鹿な！ たった一機で戦況をひっくり返したと言うのか！？」

「ふー、スコープ機能とAIのお陰でクラブに比べて随分楽になりました。いい仕事しますねアーリア所長は、このフローレンスなら百発百中全てを貫く。」

まあ、戯言ですけれどね」

特派のロイドからアクエリオンの1日自由見学券20枚と引き換えに手に入れたランスロット・クラブ。

それをアクエリオンのナイトメア開発部によって改造したツヴァイ・ドウ専用機。

主装備はクラブの変アサルトライフルを参考にし、アサルトライフルの代わりにハドロン砲を細くし、威力と貫通性、スピードを上げたハドロンライフルを装備

さらに、学習し、命中率を上げていくAI、つまり人工知能をナイトメアに世界で初めて導入する事に成功した。

コックピット内にはハドロンライフルと連動している模型ライフル銃があり模型のスコープ部分はハドロンライフルのスコープと繋がっている。

ガウエインの流れを汲んでいるため機体全長とコックピットは大型。他にもMVS、スラッシュハーケン、フロートユニット等を装備している

「助かります」

スザクも勢いに乗り次々と敵を倒していく

その数時間後、圧倒的な差で敵部隊を壊滅、EU攻略に多大な貢献をするのであった

再び帝都ペンドラゴン

「フローレンスのハドロンライフルの命中率は93.2%。結果をアリア所長に伝えなくては」
戦闘データを見ながら廊下を歩く

「任務ご苦労だったな」
ビスマルクが横に並ぶ

「とんでもない。ほとんど枢木卿の力ですよ」
手を振り、否定する

帝国最強の騎士であるナイトオブワンと国内外に色々な意味で有名なナイトオブツーと言う周りから見れば異彩なツートップである

「謙遜は止せ。それよりお前が提案したエリア11にラウンズを派遣する件だが、枢木がどうしても行きたいと言ってな」

「ゼロと枢木卿はライバルですからね」

ゼロとスザクがライバルという事は広く知れ渡っている事なので例え他の人間が聞いていてもそこまで驚かないだろう

「そこまでは良かった。だが、ジノやアーニヤ、アイネにライアーも行きたいと言っているんだ。アイネはギルフォード卿の手伝いをしたいと言っているのは分かるが、ジノとアーニヤは遊び感覚。ライアーに至ってはよく分らんがどうしてもだそうだ」

管理職特有の小さなため息を吐く

「お気持ちお察しします（ライの場合は帰省本能だな）しかし、ラウンス5人が1つのエリアに固まると何かと不便では？」
もっともらしい意見を言う

「いや、それは別にいい。お前が言っていたマックスという男がいる限り安心は出来んからな。問題は纏める存在がいない事だ」

「そう言えばそうですね。殿下は少し孤高な面があたりですし、指揮の腕に関してもゼロのように奇抜な策を取る相手は苦手でしょう」

「そこで、お前もエリア11に行け。皇帝陛下からの許可は下りている」

命令だぞ。といわんばかりに言う

「何故俺なんですか？マックスには会いたくないんですがね」
心底困ったように聞く

「お前はあの5人と仲がいいからな。他に手が空いているのはルキアーノだが奴の協調性は壊滅的。それにエリア11に何かと思いいれがあるのだろう？」

命令だぞ。といわんばかりに言う

「えっと、ですね 分かりました」

ビスマルクに詰め寄られ、やむなく諦める

「助かる。枢木は明後日にも出るそうだ。お前の場合ラウンズ以外の仕事もあるからな、一段落したらすぐに行ってくれ」

「イエス・マイ・ロード」

「それと1つ聞きたいのだが、あの5人の中でお前が一番強いと思うのは誰だ？」

急に真剣な目つきで聞く

「ナイトメア戦ですよ？多少の差異はありますが間違いなくアイネ卿が一番強いです」

その視線を受けツヴァイも真剣に答える

「ほう、枢木かライアーかと思っていたんだがな。根拠は？」

「この前ナイトメア戦でのシュミレーションで被弾率を見た結果、ジノ先輩は43%、アーニヤ先輩は54%、殿下が35%、枢木卿が32%、そしてアイネ卿が12%。

一般兵50人の平均被弾率は100%。ですからアーニヤ先輩も決して低くは無いです。ですが、アイネ卿は他を圧倒する数値です。ちなみに俺は27%でした」

いつの間にかツヴァイの手には分厚い資料が握られていた

「反射神経が凄いのか？それとも勘か？」

ツヴァイのマジシャンぶりに慣れているせいか、別段驚きもせずその資料をツヴァイから受け取り眺める

その資料にはスザク、ライ、アイネ、アーニヤ、ジノの特徴や短所、癖などが事細かに書かれている

「両方です。彼女の反射神経は並みの2倍以上、そして他人の気配や殺気にも人一倍敏感です。つまり戦場での被弾率は更に少なくなるでしょう」

「ほう」

「ですが、初めて会ったときは普通程度でした。俺が休んでいた数

ヶ月で鍛えたものだと思います」

「並大抵の努力ではあるまいな」

「ええ、努力をし、諦めず、そして類まれな才能も持ち合わせている。彼女は天才ですよ。1、2年もすればブラットリー卿すら超えます。いや、もう超えているかもしれないね」
うんうん、と頷きながら高評価を示す

「ふふ、では、その1年後にはその頃には私達よりも強くなっているのかな？」

ビスマルクも面白そうに聞く

「それは無いですね。彼女の長所である回避と言う行為は反応が速過ぎて思考が追いつきません。まさに反射ですね。ですから戦っているうちにどこに避けるかが分かっています」

「なるほど。だが」

ビスマルクの顔が険しくなる

「ええ、もし彼女の驚異的な回避行為に思考が追いつくのなら
誰も彼女に勝てません」

ルルーシュと分かれて数時間後
トウキョウ租界

「聞こえるかゼロ！明日の15時より国家反逆罪を犯した特一級犯罪者256名の処刑を行う。ゼロよ！貴様が部下の命を惜しむならこの私と正々堂々勝負せよ」

ギルフォードがカメラ視線で堂々と言う

拘束されている第一級犯罪者を映しているカメラの映像には扇に玉城、藤堂に卜部以外の四聖剣等の幹部をメインに映す

「250人か、思いのほか処刑された人数は少なかったんだね」
ギルフォードの演説を見ながら呟く

「……………」

その後ろを驚色の天然パーマの少年が歩く

「念のために言うけど、殺しちゃ駄目だよ。これからお世話になるんだから。それから君は一応俺の部下って事だから悪しからず。ちなみに君のチーム名は参体^{さんたいいちじん}人って名前だけどどう？」
振り返り少年に言う

「……………」

なおも無言

「やっぱり溜まってるんだね。でも安心していいよ。ナイトメアの操縦技術なら君はこの世界で上位には必ず入ると思うけれど、生身なら師匠たちのほうが数百倍が強い」
ゼブルが再び前を向くと

「楽しめそうだな」

少年が心から嬉しそうに笑う

少年の後ろにいる同じ髪の色をした初老の男と長身でロングヘアの女性も同じように笑っている

「それは十全・　ここだ。この手紙を出せば入れてくれるから」
少年に折っただけの紙を渡す

目の前には新しい木造建築の建物が造られている最中だった

「分かった。それと俺がその師匠たちを殺しても文句は言うなよ？」
3人が一緒にニヒルな笑みを浮かべ建物に入っていった

「さて、　？　非常ベル？　ああ、始まったんだね。作戦名は『
口口を墮とせ』かな？　頑張ってるルルーシュさん」

第四十六話 次本編4 ゼブルと逆襲の処刑台

中華連邦総領事館前

黒の騎士団の処刑が行われようとしている

「かつて黒の騎士団を名乗り、エリア11を混乱させたテロリストの処刑が今まさに行われようとしています。部下の処刑に果たしてゼロは現れるのでしょうか？」

ヘリコプターに乗ったアナウンサーが説明をしている

「ゼロ様」

「藤堂將軍」

周りには日本人、いや、イレブンが悲痛な面持ちで見つめる

「ゼロは我々を裏切ったのだ。助けに来るはずがない」
千葉が殺される準備万端と言わんばかりの態度で言う

「絶対に来る。あいつが本物のゼロなら、生きていたのなら奇跡を起こしにやってくるんだ！」

それに対して玉城は諦めが悪く大声で騒ぐ

「奇跡。か」

「さあ、いよいよ刑の執行時間です。黒の騎士団の残党に正義の捌きが下されます」

「イレブン達よ。お前たちが信じたゼロは現れなかった。全てはまやかし。奴は私の求める正々堂々の勝負から逃げたのだ。構え」
ギルフォードの合図で周りを囲んでいたサザーランドのコックピットに付いている内蔵式対人機銃を扇たちに向ける

「違うな、間違っているぞギルフォード」
何処からかゼロの声が響く

「来てくれた。でも」
「私達は手が出せない。どうする、たった一人で」
総領事館にいるカレンとcccは見ることにしか出来ない

「なるほど、後ろに回ったか！ゼロ！」
ギルフォードが振り返ると

「ギルフォードよ、貴行が処刑しようとしているのはテロリストではない。我が合衆国軍、黒の騎士団の兵士だ」
処刑地の入り口付近に無頼のコックピットを開いたまま現れる

「ゼロが？」

「どうして」

「本物なのか？」

全員が半信半疑の表情で見つめる

「当たり前だろ。ゼロオ！」

例外として玉城は嬉涙と鼻水を流しながらゼロの名を叫ぶ

上空にて

「1人です。ゼロは1人です」「どうなると思う？」「いつのまに!?!?」
ヘリコプターの中でマックスアナウンサーに聞く

「ああ、紹介が遅れたな。俺は黒の騎士団のマックスだ。別に危害は加えねえから安心しろ」
軽く手を振りアナウンサーを安心させる

「は、はあ」

アナウンサーがパイロットにどうしようか目で聞くと

「私はナーオスと言います。彼女から聞きましたが、私を助けてくれた方ですね？」

運転を続けながらマックスに聞く

「ナーオス？ああ、ホテルジャックの時に落とされた奴の1人か」
日本解放戦線の草壁が起こしたホテルジャック事件。ゼロが黒の騎士団の存在を世界に広げる要因にもなったこの事件でマックスはゼロの意思とは別に見せしめとしてホテルから落とされた人々を助けていた。
ついでに言うと実際助けいたのはマックスではなくプリニー達だったが。

「はい、貴方には感謝しています。貴方のお陰で私は彼女と結婚出来たんです」
パイロットは嬉しそうに語る

「おめでたいな。いつ式をあげたんだ？」
マックスも面白そうに聞く

「先々月です。貴方にはいつかお礼をしたいと思っていたんですよ」
「なら、お礼代わりに終わるまでここにいさせてくれねえか？何にもしねえからよ」

「勿論です」
笑顔で答える

「って言う事だ。何か分からないことや聞きたい事があつたら気軽に聞けよ」

体を回しアナウンサーのほうを向く

「は、はい」

どうしていいのかわからず困った反応を見せる

視点 変更 ゼロ

「お久しぶりです、ギルフォード卿。出てきて昔話でもいかがですか？」

体をコックピットから出したまま処刑地に入る

「せっかくのお誘いだが遠慮しておこう。過去の因縁にはナイトメアでお答えしたいが？」

「ふん、君らしいな。ではルールを決めよう」
コックピットに入り込み仮面を取る

「ルール？」

「決闘のルールだよ。決着は一对一でつけるべきだ」

「いいだろう、他のものには手を出させない」

「武器は1つだけ」

「よかろう 私の武器はこれだ！」

手に持っていたアサルトライフルとコックピットに付いているMV
Sを外し大型ランスを無頼に向ける

「では、私はその武器を貸して頂こう」

無頼が警察用のナイトメアであるナイトポリスが持っていた大きな
盾を指差した

「何？（暴徒鎮圧用のシールドを何故？勝てないと分かって自決で
もする気か？）」

ギルフォードが驚きの表情を浮かべる

上空にて

「えっと、何故あれを選んだか分かりますか？」

アナウンサーが遠慮気に聞く

「旦那がギルフォードに1対1で勝てるわけないからな。何か仕掛
けがあつてのことだろうよ」
自信満々に答える

「質問しよう、ギルフォード卿。正義で倒せない悪がいる場合君はどうする？ 悪に手を染めてまで悪を倒すか、それとも己が正義を貫き悪に屈するを良しするか？」
ゼロが聞く

「我が正義は姫様のために」
その質問に揺さ振れずにランスを前に向けたままランドスピナーで無頼に向かう

「なるほど、私なら悪となって巨悪を討つ！」
ゼロがそういつた瞬間

地面が大きく揺れた

「これは!？」
ギルフォードが周りを見ると地面が大きく上に上がり、次にながった地面がどンドン斜めっていき、ナイトメアが滑り落ちていく

上空にて

「ブリタニア兵が中華連邦の総領事館に流れ込んでいます！これはどうなっているんですか!？」

アナウンサーがさつきと打って変わり興奮気味に聞く

「えっとだな、ブラックリベリオンと同じで租界の地震対策の階層構図を逆手に取った作戦だ。まあ、内部に関係者がいないと出来な
いんだけどな」

逆にマックスは若干引き気味に説明をする

滑り落ちていつているブリタニア軍のナイトメアが次々と地面に勢
い良く打ち付けられ大破していく

「黒の騎士団よ。敵は我が領内に落ちた！ブリタニア軍を壊滅し、
同胞を救い出せ！」

ゼロはシールドをサーフィンボードのように乗り、滑っていく

「自在戦闘装甲機部隊は私に続け！扇さん達の救出が最優先だ」
カレンが乗る紅蓮が先頭を取りその後ろから数機の無頼が追う

「急げ！ブリタニアが体勢を整える前に全員解放するんだ！」
団員が次々に救出され総領事館に逃げていく

「ヴィンセントが突入しました！」
誰かが大声で叫んだ

「（来たか、来てしまったのか、ロロ）」
「（ルルーシュ、僕に未来をくれるって約束したのに）」
逃げようとするルルーシュの無頼を追うロロのヴィンセント

上空にて

「あのゼロを追いかけている黄色いナイトメアは？」

「ブリタニアの新型ナイトメアで名前はヴィンセント。グロースターに変わる次期主力ナイトメア候補だ。出力はグロースターの長ったらしい説明を始める」

「パターンデルタ確認」
呟きとともに大型のキャノン砲が発射された

「（しまった！僕のギアスは物理現象は止められない。このスピードじゃ直撃だ！こんな所で）」
ロロの顔に絶望の色が映る

しかし、何故か無頼がヴィンセントを庇い、右腕が大破した上その反動で機体が倒れた

「敵である僕を、何故!？」

「お前が弟だから、植えつけられた記憶だとしてもお前と過ごしたあの時間に嘘は無かった」

ルルーシュが優しい笑みを浮かべながら言う

「弟、僕が?でも、僕は」

ロロが困惑しながらルルーシュをどうするか必死で考えをめぐらせる

上空にて

「マントを羽織ったナイトメアが発射した弾がゼロのナイトメアに当たりましたが、私にはゼロがあのだナイトメアを護ったように見えましたがどうでしょう?」

「マントを羽織っている機体に乗っているのはグラストンナイツ。ダールトンの養子で小さい頃から鍛え上げられたエリート達だ。味方を撃つとは考えられねえ。考えられるとしたらって、ギルフォードが何か仕掛けん」

処刑地を見ながらマックスが呟く

「ゼロ、ここで因縁を絶とう。私の一撃で、この正義の鉄槌で！」
斜めった地面にスラッシュハーケンを撃ち付けた状態で難を逃れた
ギルフォードが大型ランスをゼロの無頼目掛けて投擲するが

ヴィンセントがそれを掴む

「何？どう言いつもりかキンメル卿！？まさかゼロの仲間か！？」
ヴィンセントに乗っているのがロロと知らずに聞く

「違う僕は、ルルーシュが死ぬと任務が。僕は任務のために、でも、
兄さんが」
パニックになっている頭で考えようとしているが余計に混乱する

「最初からブリタニアに安らぎは無かった。お前の居場所はここに
ある」
ルルーシュが優しい口調で言う

「あ、ああ」

「（ふん、堕ちたな。
パターンデルタ、ゼロの機体がある動きをとった時に追っているナ
イトメアを背後から撃たせる。その後、ゼロが脱出したら相手のナ
イトメアを完全に破壊。脱出しない場合はその場で待機。
グラストンナイツの1人にかけてギアスのお陰で予定通りになった。
ナナリーの居場所を奪った偽者のお前は俺が散々使い回して、ボロ

雑巾のように捨ててやる」
もの凄い悪人フェイスで口口を見つめる

「そこまでだ。ブリタニアの諸君。これ以上は武力介入とみなす。
引き上げたまえ」
星刻の声が響いた

「くっ！撤退だー！！」
ギルフォードが忌々しげに言う

上空にて
「やはり失敗したか」
マックスが立ち上がる

機体が大きく揺れた

「あの、急に立ち上がると危ないですよ」
壁にアナウンサーが壁に捕まりながら言う

「悪かったな。さて、ナーオスだったか？もしオマエが今回の件で
クビになったらこれの通りにしろ。助けてやるからよ」
マックスがポケットの中から紙とペンを取り出し、何かを書き、そ
れを運転席の横に置く

「ありがとうございます。それより何処で降ろしますか？」
運転手がマックスに聞く

「いや、ここでいい。そんじゃあ、また会えたら会おうぜ」
そう言つと階段を一段下りるような感覚で落ちる

「落ちた!?!」

アナウンサーが下を見るとマックスの姿は無かった

視点 変更 ゼロ

中華連邦に逃げ延びた団員達が歓喜の声を上げていた

「ゼロだ!」

誰かが叫んだ

みんながゼロを見ると

「待て待て! 助けて貰ったことに関しては例を言つ。だが、お前の裏切りがなければ私達は捕まっていけない」
千葉が周りを黙らせ、その後ゼロを睨む

「一言あつてもいいんじゃない？」

「ゼロ、何があつたんだ？」

朝比奈と扇が聞く

「全てはブリタニアに勝つためだ」

「ああ　それで？」

「それだけだ」

「他にないの？いい訳とか謝罪とか」

朝比奈が少し不機嫌そうに聞く

周りもざわつき始める

しかし

「止める！」

藤堂の一声であたりは静まった

「ゼロ、勝つための手を打とうとしたんだな？」

藤堂がゼロに近づく

「私は常に結果を目指す」

ゼロは微動だにせず返す

「分かった。作戦内容は伏せねばならない時もある。今は彼の力が

「必要だ！私は彼以上の才覚を知らない」
ゼロの横に並び指示の意思を表す

「俺もそうだ。みんなゼロを信じよう！ブリタニアと戦争するなんて中華連邦だって無理だ。俺たちは他の殖民エリアの希望なんだ。独立戦争に勝つためにも俺たちのリーダーはゼロしかない！！」
扇も藤堂とは反対隣に立ち呼びかける

「そうだ！」

玉城も賛同し、結果全員がゼロを指示する歓声が響く

「お楽しみ所悪いな」

その歓声を貫くような透き通る声が発せられる

「マックス！！」

誰かが屋根を指差しながら叫ぶ

「生きていたのか？」

ゼロがマックスを見つめる

「ああ、久しぶりだな旦那。それよりコイツ等に何か言わなくちゃいけないことがあるんじゃないか？」

静かな表情でゼロを見つめる

「
」
ゼロは仮面で表情が見えないがピクツと体が止まる

「しかたねえな、代わりに俺が言ってやるよ。 ブラックリベリ
オンの後ブリタニア皇帝直属の騎士達、ナイトオブブラウンズに新し
く3人が加わってな。1人が枢木スザク」
指を3つ立て、その内1つを曲げる

「スザク君が？」

「ああ、そしてもう1人がコーネリア隊の副隊長を務めていたアイ
ネ・ナハトム」
更にもう1本指を曲げる

「（あのアイネが）」
カレンが学生時代を思い出すように俯く

「そして、最後の1人がライアー・ファン・ブリタニアだ」
最後の指を曲げる

「誰だ？名前からしてブリキの皇族だろうけど」
玉城を初めゼロ以外が知らないようだ

「そうだな。元黒の騎士団特殊零番隊隊長のライと言えば分かるな？」

「!?!?」

マックスに発言で団員全員が固まった

「嘘　ライが？嘘だよ。ゼロ」

カレンが引き攣った顔でゼロを見ると

「……」

無言で頷く

「……（と、言うことはツヴァイ・ドウは彼をあえて殺さなかったのか？それとも殺したと思っていたが生きていたという事か？）」「
黒の騎士団内で唯一最後にライと話をした藤堂が考える

「おいおい何言ってるんだよ。ライは確かにブリキの血が入ってるけどよ。確かにこっち側の人間だぞ!?!?」

玉城が信じられないと反論をする

「ところがどっこい、生きてんだよ。しかも敵のお偉いさんとしてな。これが証拠だ」

マックスが紙をバラ撒く

紙は写真でラウンズの服を着たライが他のラウンズと共に写っている

「じゃあ、下手したらライと戦う事になるかもしれないのか？」
扇もまだ信じられないと言う表情で聞く

「多分だが、アイツは俺等の事を覚えてはいないみたいだからな。
記憶が戻った衝撃で記憶喪失中の記憶がなくなる事もあるらしいからな。じゃなきゃ敵に味方をするはずがない」

「ライが敵」

カレンは今にも泣きそうな顔で写真に写るライを見る

「そこでだ旦那。ライがもし俺等の戦場に現れたのなら、俺が相手をする。カレンじゃ躊躇ためらいが生じるからな。そしてそれを見逃すらいじゃねえ」

「そうだな。カレン、これは命令だ。いいな？」
ゼロがカレンの見る

「……………はい」
今にも消えてしまいそうな弱弱しい声で答える

「さて、俺は帰るぞ。次来る時は新戦力も持ってくるから楽しみに

してろ」
スツと立ち上がり有無を言わず暗闇に消えた

総領事館内のゼロの部屋で2人は話し合っていた

「マックス。相変わらず読めない男だな。だが、奴が生きていたならこちらの戦力は大丈夫だ」

チエスの駒を弄りながらルルーシュが呟く

「珍しいな、お前が人を高く買っているなんて」

ここはソファーに横になっている

「それより答える。ライは俺と同じようにあの男のギアスにかけるれたんだな？」

ルルーシュが鋭い目つきでここを見る

「多分な」

「そうか（　　）ライまでも貴様の毒牙にかけるとは！許しはしないぞ皇帝め！ー！（　　）」

（ライ、ライ、会いたいよ。ライのために頑張ってきたのにこんな事ないよ。ライの声が聞きたい。ライの笑顔が見たい。ライの隣にいたい。ライと手を繋ぎたい。ライのぬくもりを感じたい。私は私のやり方で貴方を救ってみせる。絶対に！）

（くそっ！あのゼロとか言う男を見てから胸が締め付けられているように痛い。それに最近寝るたびに赤い髪の女？が僕の名前を呼んでいる。胸が痛む。何だこの胸の痛みは？何で涙が流れる？僕は一体どうしてしまったんだ！？）

（ライの奴寝不足か？顔色がすこぶる悪い。俺も結局日本へ行くがオリジナルといつ誰が誰をするか決めないと。それに最近知ったが全てのギアスの効果が一段階上がってるんだよな。例えばピースのギアスだと前は1体だったのが2体一緒に操れるようになった。何かと便利になったが俺自身がギアスに吞まれないようにしないと。

とにかく、次回ゼブルとナイト オブ ラウンズ。よろしくな）

第四十七話 次本編5 ゼブルとナイト オブ ラウンズ

「本日からこのアッシュフォード学園に復学する事になりました
枢木スザクです。よろしくおねがいます」

「同じく復学する事になったアイネ・ナハトムだ」
2人は教壇の前に並び挨拶をする

制服姿のスザクとアイネだ

「枢木スザクってゼロを捕まえた？」

「白き死神が学校に？」

「あれがナイトオブセブン様」

「でも、イレブンだし」

「隣も凄いぞ。ブリタニアの破壊神、アイネ・ナハトムだ」

「破壊神？」

「そう、彼女が通ったあとは灰しか残らないとか」

「マジか？でも、美人じゃね？」

「ああ、俺も思った」

相手が相手なだけに小声で話し始める

「はい！静かにする」

ヴィレッタが手を叩き周りが静まるのを待つと

「枢木卿はとナハトム卿はエリア11配属に伴い復学する事となった。席はとりあえず枢木卿はルルーシュの隣に、ナハトム卿はゼブルの隣に」
ルルーシュとゼブルを指差す

「はい」

「くっ、ガーベスの隣がよかったのに」
片や素直に、片や小声で文句を言いながら近付く

「（皇帝陛下が書き換えた記憶は3つ。ナナリーのこと、ゼロに関する記憶、そしてルルーシュがブリタニアの王子だった事。つまり今の僕達は）」
スザクがルルーシュを見つめる

「久しぶりだな。スザク、それにアイネ」
ルルーシュは平然を装い握手を求め

「懐かしいよ。ルルーシュ」
スザクは笑顔で受け入れる

「（そう、俺たちはただの友達。それ以上もそれ以下もないただの友達）」

「（そう、僕たちはただの友達。それ以上もそれ以下もないただの友達）」

互いに笑顔の裏で偽りあう

「しっかし、2人とも出世したよな」
スザクの背中に後ろから抱きつく

「ふっ、当然だ。それより、会いたかったぞガーベス！」
アイネもガーベスに飛びつく

「私ですよ」
ガーベスも嬉しそうに言う

「何と！？喋れるようになったんだな。天使の様に透き通る声だな。
ますます僕はガーベスの虜だ」
更に力を入れて抱きつく

「全部ゼブル様のお陰です」
圧迫感に笑顔を引き攣らせるも、それでも嬉しそうにアイネを受け
入れる

「ゼブル！貴様ガーベスに訓練と称してよからぬ事をしてはいない
だろうな？」
ガーベスの言葉で思い出したようにゼブルとガーベスを離そうと2
人の間に入る

「多分ね」

ニコニコと笑顔で答える

「多分とは何だ！まさかABCのCまでやったのか？そんなんだろ！？」

アイネがゼブルの胸倉を掴み持ち上げ、前後左右に振る

「例えが古いし、そこまでいつてないよ」
大きく揺らされながらも笑顔で答える

「（失敗だったなスザク。ルルーシュと言う名前だけでここに来た。つまりゼロの正体が俺であることを事を知っているからこそその行動。やはりあの男に協力しているのだな。しかし、こちらに幸いしたのはギルフォードと同じでアイネも機情との繋がりが薄い所だな。あとはロクが下手なミスさえ無ければ完璧だ）」
ルルーシュは心の中でほくそ笑みながらその光景を見つめる

「静かに！そろそろ授業を始めるぞ」

視点 変更 ルルーシュ

午前中の授業が終わり、昼食

ミレイも加わり校庭で食事と会話を楽しんでいる

「それでね、私達以外はみんな帰っちゃったのよ。先生もよ？」

「本国にか？」

「ああ、だから、ここでアイネとスザクを知っているのは俺たちだけだ。なあ、ロロ？」

隣にいるロロに笑顔で聞く

「う、うん」

ロロはぎこちなく答える

「そうか、だから知らない顔が増えていたのか」

アイネは頷きながらストローでジュースを吸い上げる

「（嘘やハツタリが苦手なアイネがロロを気にしていないところを見るとやはりアイネもあの男のギアスの犠牲に　　）
ルルーシュがアイネを見つめる

「なあ、ゼロの顔を見たんだろ？どんな奴だった？」

リヴァルが隣にいるスザクの肩に腕を回し顔を近づける

「実は女の子？クロヴィス殿下って噂もあるわね。それとも何処かの国の王子さまとか？」

反対の隣にいたミレイもスザクに近付く

「ああ、えつと、それは」
スザクが頬を掻きながら少し困ったように言葉を詰まらせる

「良いだろ？それぐらい」
ルルーシュもなんともしない表情で聞く

「無駄だ。この僕にも教えてくれないんだ」
アイネがムスツとしながら答える

「ごめん、言えないんだ。軍の機密でね」
申し訳なさそうに頭をかく

「ふーん、じゃあさ、アイネちゃんとスザクってどっちが強いの？」
ゼブルが代わりにと2人を見ながら聞く

「そんなに違わないよ。ラウンズ内で差はあまりないからね。でも、
やっぱりナイトオブワン、ヴァルトシュタイン卿が一番かな？」
スザクが首をかしげ考えながら言う

「確かにあの方は強い。しかし、ツヴァイ殿も負けてはいないぞ！
なんせあの方は」
アイネも力強く語りだそうとする

「うん、この前も僕とアイネ対ドウ卿で戦っただけけど、惨敗だった」

アイネが長ったらしく言おうとした内容をスザクが簡潔に説明する

「（そうだった、スザクは昔から異常すぎるほど空気が読なかったな）」

「（思い出した、スザク君は異常すぎるほど空気が読なかったわね）」

「（そういえば、スザク君は異常すぎるほど空気が読ないんだよね）」

「（相変わらず、スザクは異常すぎるほど空気が読ないんだよね）」
ルルーシュ、ミレイ、シャーリー、ゼブルが同じ事を思う

「同じラウンズなのに2対1で負けたんですか!？」

「マジかよ!？」

例外的にガーベスとリヴァルが興味津々な顔持ちで聞く

「ツヴァイ殿は危なかったと言っていたが僕達は疲れ果てて地面に倒れてるのに対してツヴァイ殿は呼吸すら乱さなかったんだぞ？僕達を褒めてくれるのはいいが、謙遜し過ぎなんだ」

アイネがスザクを睨みながら説明を足していく

「それよりさ、そこで盗み聞きをしているのは誰かな？」

リヴァルの後ろにある木の上を見つめる

全員そこを見つめると枝が大きく揺れた

「良く気づいたな」

木から下りてきたのはライだった

「（ライ！？ マックスの予想は当たってしまったか）
ルルーシュの目が一瞬鋭くなる」

「気配は消していても存在感が強すぎるんだよね。だからバレバレ
ゼブルは気にせず普通に喋る」

「ライ、まさか黒の騎士団が？」
スザクが立ち上がり今にも走り出しそうな勢いで聞く

「違う。カルフォルニアにいるツヴァイから連絡があつてな、ジノ
とアーニヤがそろそろ着くらしいから迎えに行ってくれたそうだ。
2人に連絡をしようとしたのだが通じなくてな、わざわざ来たんだ」
ライがため息をつきながら2人を見る

「貴方はもしや、ナイトオブイレブンのライアー・ファン・ブリタ
ニア殿下ですか！？」

リヴァルが鼻息を荒くしてライに近付く

「あの皇族でラウンズの！？」

リヴァルだけでなくシャーリーもライに近付く

「ああ、そうだが。それより
ライがゼブルを見る

「俺が何か？」
ジューズを飲む手を止める

「私とどこかで会ったことはないか？」
ライがゼブルをなおも見続ける

「さあ？君みたい有名な名人なら覚えていると思うけれどね」
わざとらしく肩を竦める

「そうだな　くっ、（何だ私は彼だけでなくここも知っているのか？　いや、そんな筈は無い。そんなことは無いはずなのに、くそ！気持ちが悪い）すまないスザク、それにアイネ。私は先に行っているぞ」
吐き気と頭痛、めまいがライを襲う

「どうかしたのか？」
急に体を丸めたライにアイネが聞く

「何だか急に気分が」
誰の目からもわかるほど脂汗をかいている

「無理はよくない。アイネ、先にライと一緒に行ってくれないか？
僕はルルーシュとちょっと話がしたいから。ルルーシュ、ちょっといいかな？」

ルルーシュは頷き、ひとけの無い所体育館の裏に行った

「何だ？こんな所で」
周りを見ながらルルーシュが聞く

「話したい事があって。僕はナイトオブワンになるつもりだ。ナイトオブワンの特権に好きなエリアを1つもらえると云うものがある。僕はこのエリアを、日本をもらうつもりだ」
急に真剣な目で話し始める

「……」

「僕は大切な友達とかけがえのない女性を失った。これ以上誰も失わない為に僕は力を入れる。だから、もう日本人にゼ口は必要ないんだ」

まるでゼロと話しているようにスザクが言う

「ふーん、間接統治か？保護領を目指して？」
多少感心したそぶりを見せる

「答えはこの人に、今週赴任されるエリア11の新総督だ」
ポケットの中かから携帯電話を取り出し耳に当てる

「おいおい、只の学生が総督と？」

「枢木です。はい、今代わります」
スザクがルルーシュに近付き携帯電話を渡す

「困るんだけどな。そんな偉い人なんかと「もしもし、お兄様？」
な!？」

電話を受け取りスザクに背を向け耳に当てると、声の主はなんとナナリーの声だった。これには流石のルルーシュも表情を強張らせる
唯一救いだっただのがスザクに背を向けている事だった。お陰で驚いている顔を見られずに済んだのだから

「お兄様のなのでしょう？私です。ナナリーです！総督としてそちらに。
あの、聞こえていますか？お兄様？」

ナナリーは懸命に呼びかけるがルルーシュはいまだショックで指一本動かさない

「（本当に記憶が戻っていないならナナリーの事は分からないはず。さあ、ルルーシュ答えを出して貰おう）」
後ろからスザクがルルーシュを見つめる

「（スザク、やってくれたな!）」
ルルーシュは首を動かさずに目だけ動かしスザクを睨む

「あの、お兄様ではないのですか?」

「（駄目だナナリーには嘘はつけない、俺は、俺は　　□□?）」
チラリと後ろを向くとスザクの3mほど後ろに□□が立っている

□□が指を5本立て、それをルルーシュに見せるとギアスを発動させる

□□のギアスは範囲に入った対象の体感時間を止めることが出来る。そのため行動・思考も停止する

つまり、今何をしてもしスザクにはバレずに済む

「良くやった。そのまま頼む」

「時間制限を忘れないで」

□□の5本の指は止められる時間。つまり5秒だけルルーシュには

兄としてナナリーと話せる猶予がある

「聞いてくれナナリー」

ロロの制限時間を見ながら声を発する

「お兄様！？やっぱり」

ロロの設けた時間が刻々と減っていく

「今は他人のふりをしなくてはならない。「え？」必要なんだ。俺に話を合わせて欲しい。必ず迎えに行く、必ず。だから、それまで、それまで　愛している、ナナリー！」

最後の言葉を言い終わった瞬間、ロロのギアスの制限時間が切れる

その証拠のスザクは一回瞬きをする

「　あの、人違いではないかと。はい、ただの学生ですし」
ルルーシュはいつも通りの喋り方で話す

「（前までのルルーシュがナナリーにそんな態度が取れるはずが無い。やはり記憶は戻っていないのか？）」
スザクはその光景に疑問を浮かべながら見つめる

ロロはバレないように静かに去っていった

「皇女殿下とお話できて嬉しい限りです。では、スザクに戻しますね。じゃあ、俺は先にみんなの所に戻ってるぞ」
スザクに電話を返し、小声で言うと早歩きで去った

視点 変更 ナナリー

「ごめんナナリー。誤解させるような形になって」
スザクはルルーシュが見えなくなるまで見つめナナリーに謝罪する

「いえ、雰囲気か似ていたので驚いてしまって。あの、では、エリアー1でお会いしましょう」
慣れない手つきで電話を切り、ひざの上に置く

「……」

「終わったの？」
ゆっくりとナナリーに近付く

「アリスちゃん」

ツヴァイの娘の1人であり、ナナリーがアッシュフォード学園にいた頃からの親友

「どうだった？」

ナナリーの後ろに回り、車椅子によりかかる

「人違いだったみたい」

表情を変えず笑顔で言う

「ふーん、そう。それより、何か悲しい事でもあった？」

アリスも表情を変えずについてごとのように聞く

「な、何で？」

ナナリーがピクツと反応する

アリスは車椅子に背中を預けているので見えはしなかったがどう反応したのかは分かったようだ

「雰囲気で分かるのよ」

よっ、と車椅子に預けた体を起こす

「……」

「私はナナリーの騎士。だからあの男に言えないことがあったとしても私には隠さずに言っていんだからね」

そのままナナリーの目の前にしゃがみ手を握る

そう、アリスはナナリーの選任騎士となった。

ブラックリベリオンのすぐ後に皇族に復帰したナナリーと涙の再開をする。そしてナナリーからの提案で騎士となった。

しかしスザクとは違い選任式は大体的にはせず、ツヴァイと特別工ファカル作部隊ディース、それと第一皇子であるオデュッセウスを含めた数人の皇族でのみで行われた

その証拠にアリスの胸には騎士勲章がつけられている

「ありがとう、でも、大丈夫だから」

「そ、分かった。でも、無理はしないでね」

懸命に隠そうとする姿を見て、アリスも何か悟ったように立ち上がる

「本当にありがとう」

「気にしない、気にしない。じゃあ、飲み物でも貰ってくるね」

アリスは扉へ向かった

「（スザクさんは嘘をついているのかしら？お兄様だって

御2人の間に何が？）」

アリスが出て行ったのを足音で確認すると悲しそう表情で考えはじめる

視点 変更 アリス

「全く、親友の私にも言えないことってなんなのよ」
アリスがため息を吐きながら自動販売機の前に立つ

「心配ですか？」
横にいるツヴァイがコーヒーを飲みながら聞く

ちなみに飲んでいるのはブラックコーヒー。大人の男を表現中

「当たり前じゃない。あの子自分の中に押し込めちゃう所があるから尚更」
ツヴァイから小銭を貰い2人分のジュースを買う

「いいじゃないですか、押し込めて押し込めて、それで限界が来たのならアリス、君が受け止めるんです。例え罵倒を浴びせられても、例えけなされても、受け止めてあげなさい。それが親友と言うものですから」
自称かつこいいセリフと共にアリスを仮面越しにアリスを見つめる

「流石お父さんは人生の先輩ね。言うことがサンチアとは違う

わ
「
アリスも感動したようにツヴァイを見上げる

「褒めても何も出ませんよ。さて、俺たちは浮遊航空艦に乗れませ
んのでジェット機で早くにでもエリア11に行きましょう」

コーヒーの缶を近くのゴミ箱でなく遠くのゴミ箱に投げ入れる

「え！乗れないの！？私一応ナナリーの騎士よ？」

不満だと言わんばかりにツヴァイに寄る

「アブソン将軍が必要ないと言いますので」

「あんたそれでもナイトオブブラウズなの！？階級だけみたら將軍
より上でしょ！？何か言ってやればいいじゃない！」

すると

「侮ってはなりません。幾ら不利な状況であろうとゼロの事です。
必ず何か仕掛けてきます」

ギルフォードが目の前の中年（以降アブソン）に言う

「弱気だな。それでも帝国の先槍と呼ばれた男か？大丈夫だ。ナナ
リー総督には私がついている。貴行の出番などない」
アブソンがギルフォードの意見を堂々と否定する

「噂をすれば何とやらですね。ギルフォード卿と話しているのがアブソン將軍ですよ」

遠くで見ているツヴァイがアリスに言う

「うわっ、面倒くさそうな上に小物くさそうなおっさんね」

アルスは苦手なタイプだ。と言わんばかりの表情とリアクションをとる

「こんにちはあ〜」

ツヴァイ達とは別の通路からロイドがハイテンションでギルフォードたちの前に現れる

「ロイド伯爵」

アブソンの後ろにいた兵士が奇妙なものを見るような目で見つめる

「いやあ、皇帝ちゃんの直屬になったからさ、色々忙しくて」

「不敬であろう！皇帝陛下に対して」

アブソンがロイドを睨む

「も、もうしわけありません。ロイドさん」

後ろにいたセシルがロイドに注意を促す

「ん？何かまずかった？」
何でセシルが怒り気味なのか理解が出来ていない

「相変わらずですね」
ツヴァイがロイド達に近付く

「ナイトオブツ、ツヴァイ・ドウ卿！」
兵士達が感激そうな表情を浮かべる

「これはまたお久しぶりですねえ。噂は聞いていますよ」
ロイドはツヴァイであるともいつも通りの喋り方で話す

「貴方から頂いたクラブのお陰です。それよりアブソン將軍、娘のアリスがどうしてもナナリー新総督と一緒に良いと申しているんですが」
軽くロイドに頭を下げ、アブソンに体を向ける

「幾らナナリー総督の騎士であろうと我が船内で子供がウロチョロされては困ります」
不愉快そうにアリスを見る

「こんな小娘がナナリー新総督の騎士なのか？」
グラストンナイツの1人（以降デヴィッド）が驚いたようにアリスを見る

「そうよ。小娘だけどなにか文句でもあんの？」
ムツとアリスがその1人を睨む

「腕は一流ですよ。俺の自慢の娘です」
うんうん、と頷きながらアリスの頭を撫でる

「そ、そんなことより、何であんたに騎士である私が命令を聞かなくちゃいけないのよ。私は騎士であると同時にお父さんの部下でもあるのよ？」

照れ隠しにツヴァイの腕を払いアブソンに詰め寄る

「ドウ卿が何と言おうがあ船は私が預かっているんだ。私に指揮権がある」

アブソンは偉そうな姿勢を崩さない

「頭が固いおっさんね。私が言いたいののはね」
「私に向かっておっさんなどと、この小娘は」
今にも殴り合いが始まりそうな勢いだ

「そこまでにしましょうアリス」
2人が喧嘩になる前にツヴァイが止める

「アブソン將軍。貴方はアリスやギルフォード卿を必要ないと言った。貴方が彼等に乗せなかったことで皇女殿下に被害が及ぶような事があったのなら俺が貴方を容赦しません。良いですね？」
ツヴァイが殺気を込めた言葉でアブソンに聞く

その殺気は周りにも感じる程大きく、ロイドですら黙ってしまっほど

「も、勿論です。ま、まあ、そんなことは万が一にも無いでしょうけれど」

冷や汗を流しながらもその強気な姿勢を崩さないのは流石といえよう

「分かりました。アリス、アブソン將軍を信じましょう」

「分かったわよ」

「それでは、俺たちはこれで
そう言つとギルフォードの体すれすれに横切る

「？」

「くっ、不愉快だ！行くぞ！」

アブソンは後ろの兵士にそう言つと早足で去っていった

ギルフォード達も用意された部屋へ戻ろうとする

「あれがナイトオブツィー、ツヴァイ・ドウ卿ですか？」
ツヴァイの後姿を見ながらデヴィッドが聞く

「ああ、私もあれほどの殺気を感じたのは久しぶりだな。思えば黒の騎士団の藤堂も同じように殺気に満ちていたがそれと同じくらいだ」

「しかし、自分は信じられませんか。あんな小娘がギルフォード卿と同じ騎士とは」

「そう言うな。ドウ卿の娘で ああ、あの子はその時の子か。すっかり忘れていた」

ギルフォードが老いたな、と頭をかく

「知っていらつしやるのですか？」

デヴィッドが驚いたように聞く

「ああ、彼女は元々は特殊名譽外人部隊イレギュラーズと言つてバトラー將軍直属の部隊だったのだがバトラー將軍がシンジク事変での責任で失脚後ドウ卿が引き取ったんだ。部隊員は全員少女だが不思議な力を持ち、1人はダールトン將軍を軽々と持ち上げる怪力を持ち、1人は目で追えないスピードで動いたり人間離れしていた。あの子はその目で追えないスピードで駆けていた子だ」

「バトラー将軍は化け物でも作っていたんですかね？」

「そう言うな。それより」

ポケットの中から小さく畳まれた紙を取り出した

「その紙は何です？」

デヴィットが開いていく紙を見る

「ドウ卿がすれ違うときに私のポケットの中に入れていった。簡単に訳すと何かよからぬことが起きそ

うだからロイド博士のアヴァロンに同乗してほしいとのことだ」
紙を軽く見回しながら言う

「つまり、ギルフォード卿に新総督の護衛を頼んだんですか？」

「ああ、ロイド博士とも話についてはいるんだろう」

「しかし、いつ書いたのでしょうか？私は全然気づかなかったのですが」

「それが未来予知のツヴァイと呼ばれる由縁だろう。こうなる事を予測していたのだよ。しかも新型のナイトメアを用意している所を見るとかなり前にだ。それだけでなく君の名前も載っている」

ギルフォードがデヴィッドに紙を見せる

確かにデヴィットと書かれている

「本当にドウ卿が人間だと思えなくなってきました。(そして俺の名前はデヴィットではなくデヴィッドだ。やっぱり普通の人間か)」

ありえないと言う表情で紙に書かれた内容を見るが、名前の間違いを見つけるとそんな気も無くなってしまった

「確かに、ドウ卿は人間ではないのかもな」
ギルフォードも苦笑で答えた

第四十七話 次本編5 ゼブルとナイト オブ ラウンズ (後書き)

テスト一週間前なのに一体

と、

どこかで同じような事を書いた気が

赤点を取らないように頑張ります

第四十八話 次本編6 ゼブルと太平洋 奇襲 作戦 (前書き)

新機体5機参戦!!

第四十八話 次本編6 ゼブルと太平洋 奇襲 作戦

「待ちに待ったお披露目だ」
並ぶ4機の機体を見る

翠竜と同じように無限の剣製アムリミチトブレイドワークスで作った機体たち

前回より数が4倍に増えたが時間と人数が増えたので比較的楽に出
来た

「これが俺の機体か？」
少年が嬉しそうに聞く

やはり後ろの2人も同じように笑う

「近距離、遠距離、補助に特化したヴィンセント達だ。あっ、これ
からはサーズって呼ぶからな」
少年達（以降サーズ）を指差しながら言う

「で、こっちの濃い緑色の機体はお前のか？」

「ああ、飛翠竜だ。かつこいいだろ？」
翠竜の面影がある機体を撫でながら嬉しそうに聞く

「どこかで見ることがあるな」
サーズが首を傾げる

「ああ、ナイトオブスリー専用機のトリスタンを真似たからな。だが、あのハゲ頭が気に入らなくて翠竜の頭をそのまま流用した上に一角獣の如き白くて長い角を取り付けた」

翠竜のデコの部分に顔より長い白色の一本角が目立つ

「バランスが悪くないか？」
大きすぎる角の感想を言う

「かつこいいからいいんだよ。それにこの角は飾りだけでなくアンテナの役割もしててな、名前はブレードアンテナ。しかもこの角は二つに割れてV字の角にする事も出来るんだぜ？まあ、受信率が少し悪くなるけどな」
マックスが飛翠竜に乗り込みボタンをポチッと押すと、マックスが言うように白い角が2つに割れV字型で金色の角になった

「何の意味があるんだ？」
性能が良くなると思いきや悪くなるだけに効果に疑問を持つ

「あれだ、よく怒った主人公なる本気モードってやつだよ」

「どうでもいいがそれより？」
ため息を吐きながら聞く

「もう少しだ。それより今日はオマエとこの機体たちの紹介だけだ。
無用な殺しはするなよ」

飛翠竜をパンパン、と叩きながら言う

「早くていつ殺せる？」

「物騒な事を笑顔で聞くな。そうだな　早くて1、2週間後だな」
指を折り考える

「なら、構わない」

「じゃあ、1時間後に出るぞ」

視点 変更 スザク

黒の騎士団を受け渡すように頼みに来たスザク達来日ラウンズ

「いない？黒の騎士団が！？」

中華連邦の総領事館前を背に立っているシンクーに聞く

「ああ、私達も先ほど確認した所だ。情報は共有しよう。これで我が国にはブリタニアに対しての敵意は無いと分かっていたただけかな？」

資料を一番前にいるスザクに渡す

「ゼロも一緒にか？（この男の武術の心得を極めた者が放つ特有の匂いがするな。ツヴァイやヴァルトシュタイン卿と同じだ。秘書と聞いていたが侮れないな）」

質問を出しながらもシンクラーの事を事細やかに見る

「そのようだ。ナイトメアごとなくなっている。地下の階層から立ち去ったようだ」

ライの視線には気づいているがあえて気にしないようにしている

「何処へ？」

「さあ、そこまでは」

「スザク、奴らの狙いは新総督なんじゃないか？」
ライがスザクに聞く

「まさか、ナナリーを！？」

スザクがしまったと顔に汗を浮かべる

「やられたな　ん？（電話か？）」「
ライがポケットから携帯電話を取り出し耳に当てる

「しかし、ツヴァイ殿とご一緒なんだから大丈夫なんじゃないか？」
アイネが焦るスザクを落ち着かせようと云う

「ああ、そう言えば」
スザクが落ち着きを少しずつ取り戻す

「確かにツヴァイがいれば大丈夫だろ」
うんうん、とジノやアーニヤも頷く

「それがさつきツヴァイから連絡があつてな。別移動らしい」
ライが持っていた携帯電話をポケットに入れる

「はあ！？　何で？」

「よく分からないが、ツヴァイ曰く追い出されたとのことだ」
予想外の事に流石のライも困った顔をする

「急ごう！」
スザクが走り出した

「（やれやれ、あの少年は中々厄介そうだな。だが、天子様の邪魔になるのであれば殺すだけ）」

視点 変更 ゼロ

中華連邦総領事館を出た黒の騎士団はそのままナナリーが乗る重アヴァロンと言われるブリタニア軍の大型浮遊航空艦を目指す

「黒の騎士団!?」
モニターに小型飛行機から伸びるロープに乗り進む黒の騎士団のナイトメアに気づく

「作戦目的はナナリー新総督を捕虜にすることだ。いかなる事があろうとも絶対に傷をつけるな。いいな?絶対にだ!」
無頼のコックピットにいるゼロが言う

「了解!」

すると重アヴァロンから飛行機が飛び立ち機関銃が放たれ1機に当

たる

「はっ、素人め、陸戦兵器を空に上げても な!?!」
ナイトメアを運んでいた小型飛行機から煙幕が噴出される

「サーフェイス・フレアを張られても問題は無い! 困んで叩け!」
アブソンが大声で言う

サーフェイスフレアは敵機のレーダーを一時的に無効にするスモーク。藤堂救出に使ったチャフのスモークと同じ

「よし、全ナイトメア敵航空艦へ乗り移れ」
ゼロがそう言うのと小型飛行機からナイトメアが次々に落ち、重アヴアロントとそれを護衛する軽アヴアロンに乗り移る

「まさか、この上に? 急いで航空戦力を呼び戻せ!」
ナイトメアが乗り込んだことに気づき航空戦力を戻そうとするが

「何だ!?!」
スモークの中で大規模な爆発が起こる

「スモーク内で何かが爆発したもよう。航空戦力が全滅です!」

「（愚かな指揮官だな、航空戦力をスモークに集中する事ぐらい既に読んでいた）私は先に内部へ入る。他の者も終わり次第ナナリー総督を探し出せ」
内心指揮官の無能さに笑いながらナイトメアから降りる

視点変更ギルフォード

「航空戦力もお終いみたいだね」
軽アヴァロンから重アヴァロンに移った朝比奈が呟く

すると、どこからか撃たれた銃弾がグラスゴーに当たる

「トウキョウからの援軍？しかしトウキョウからにしては早すぎる。どういうことだ？」
それを見た千葉が聞く

「いや、方角としては逆の後方からだ。それにフロートユニット？」
画面に映った銀色と紫色の機体を見る

「ドウ卿が考えられていた通りになったな」
銀色と紫色の機体（以降ヴィンセント）に乗っているギルフォードがツヴァイから渡された紙を見ながら言う

「空が飛べ無かったって！」
千葉と朝比奈の月下とグラスゴーがヴィンセントに向けてハンドガンを放つ

「反応は悪くない。しかし機体特性は！」
それを軽やかに避け、グラスゴーの首をはねる。そしてヒットアンドアウエーのようにすぐに空へ逃げる

「くっ、このままでは」

視点 変更 ゼロ

艦内を歩き回ったゼロはようやくナナリーのいる場所にたどり着いた
場所は花々や木々が植えてある大きな庭の様な雰囲気でもある

入り口から真っ直ぐのところにはナナリーはいた

「（ナナリー、やっと会えた。やっと）」
ゆっくりナナリーに近づく

「そこにいるのはゼロなのですね？」
震える体を必死に堪える

「初めましてナナリー新総督。私と一緒に来てもらいますよ」
ナナリーから数メートル離れたところでナナリーに話し掛ける

「貴方は間違っていると思うのです」

「間違っているのはブリタニアだ。皇帝は強さこそ絶対だと考えている。君もそれに賛同すると?」

ゼロは言い返すようにナナリーに聞く

「それは」

その考えの被害者でもあるナナリーには何も言い返せず言葉が止まる

「君は利用されているだけだ。だから」

「目も足も不自由な私なら皆の同情を引ける?違います。私は自ら望んだのです」

ゼロの言葉を遮りナナリーが言う

「な、何だと」

仮面の中で表情が一気に崩れる

「お願いです。ゼロ今からでも遅くはありません。やり直せる筈です。私と一緒に」

ナナリーが手を差し出す

視点 変更 ジノ

急いで総督府に戻ったジノ達は急いでそれぞれの機体に戻り重アヴアロンへと向かった。ジノのトリスタンはフォートレスモードと呼ばれる飛行機形態が可能な為他のメンバーより早くに着いた

「やっと着いたか」

ジノが乗るナイトメア、トリスタンがメギドハーケンと呼ばれる長方形の青いスラッシュハーケンを近くのグラスゴーに放つ

「ぐわあ！」

そのグラスゴーは腹部を貫かれ大破する

「さあ、お仕置きタイムだ」

フォートレスモードのトリスタン（以降トリスタンverF）に乗っているジノが笑顔で言う

「おかしな戦闘機だね」

月下に乗る朝比奈がトリスタンverFに向かってハンドガンを放つ

「おっと」

それを避け、トリスタンはナイトメア形態（以降トリスタンver K）になる

「！ ナイトメア？ぐあつ！すいません後は」

トリスタンver Kの鎌のようなMVSで腰の部分を斬られ、自動的にコックピットが機体から離れる

「残る敵は5機となりました」

「ナイトオブワウンズまで、このままでは私の評価が！ どうした！？」

アブソンが体を震わすがすぐに異常警報がなる

「右翼護衛艦操舵不能！このままでは本艦に衝突します！」
制御が出来なくなっている軽アヴァロンが重アヴァロンに向かって落ちる

だが、当たる寸前に赤黒い大幅な光が軽アヴァロンを貫き、軽アヴァロンは大爆発をする

「ふっ、相変わらずモルドレットのやる事は派手だな」
ジノが遅れて来たアーニヤの乗るモルドレットを見て呟く

アーニヤが乗るモルドレットはハドロン砲4つ分の威力があるシュタルクハドロンを撃つたのだ

「アーニヤ、それはもう使うな。新総督に当たってら大変だ」
アーニヤと共に来たライが言う

「守ったのに」
残念そうな表情で言う

「ツヴァイ殿から頂いたこのゲイラントならやれる！」
同じくアーニヤと共に来たアイネがオレンジ色の機体（以降ゲイラント）で重アヴァロンへ向かう

視点 変更 藤堂

「ゼロはどこに？」
重アヴァロン内を月下で駆ける仙波が聞く

「電波障害の影響で連絡が取れん。後方の千葉と紅月と合流し、艦内探索を拡大だ」
同じく地図を見ながら月下を駆ける藤堂が言う

「しかしこの艦は墜落しかけています。時間が！」
無い、と言おうとした仙波だがコックピットを長い刀で貫かれている
灰色の機体で太刀と言っていていいほどの幅が短く、長いMVSを持っている

「仙波！」
振り向くが藤堂だが

「弱いもの虐めは好まないが仕方が無い。この物干し竿で楽にしてやる」
その太刀のようなMVS（以降物干し竿）で月下のコックピットを斬る

「こんな所で！」
仙波の乗る月下が爆発をする

「仙波！！」
藤堂が仙波の仇を打とうとするが

「藤堂陸戦兵器での奇襲とはお前らしからぬ戦だな」
ギルフォードが乗るヴィンセントが横からMVSのランスで月下の腕ごと切り

「くっ、艦内奥へ」
片腕の月下で艦内へ逃げる

視点 変更 スザク

小型の飛行機でロイドのいるアヴァロンに着くと走ってランスロットに向かう

「待ちくたびれちゃったよ。はい、ランスロットのキーだよ」

ランスロットのすぐ近くでスザクを待っていたロイドがランスロットのキーを渡す

「ありがとうございます。（ゼロはナナリーを奪いに来た。しかし、機情からの報告は無い。敵はゼロか？それともルルーシュか？）」
コックピットに入りキーを挿す

「準備出来たわ」
セシルが画面に映る

「枢木スザク。ランスロット・コンクエスター、発艦します！」
アヴァロンからランスロットが飛び出しフオートユニットが開く

「カレン僕はナナリーを救わなくちゃいけない。今更許しは請わないよ」

右肩に折りたたまれた砲身が伸びヴァリスと合体させ、それをカレンの乗る紅蓮に向ける

「隠れる紅月！艦内に入れば」

千葉がランスロットの出した武器を見て危険を感じたのかカレンに艦内に入るように言う

「でも、皆が」

カレンがオロオロしていると

「ハドロンプラスター発射」

赤黒い光が凄まじい速さで真っ直ぐ紅蓮に向かう

「紅蓮の腕が！」

輻射波動では防ぎきれず右腕が大破、その爆発の勢いで機体によるめき重アヴァロンから落ちる

「脱出が出来ないのか？整備不良がこんな時に」

コックピットが機体から離れないのを見て千葉が呟く

「隠れんぼは終わりだ！」

アイネのゲイラントが持っている茶色いハンマーで千葉の月下に襲い掛かる

ハンマーと言ってもその形状は球体でなく、日本の大工がよく使う丸い部分と尖っている部分がある金槌のようなハンマーだ

その先の尖っている部分を月下に当てようとする

「くっ！」

最初の一撃は避けれたが

「吹っ飛べ！」

反対側の丸い部分に付けられていたブースターが火を噴き、さっきとは比べられないほどのスピードで月下の下半身ごと飛ばす

「くっ、ここまでか」

何とかコックピットが機体から離れ九死に一生を得る

視点 変更 カレン

整備不良のせいで脱出出来ずに海に向かって落ちる紅蓮

「やっぱり駄目なの？ごめんね、紅蓮（ライ、最後にあなたの顔が）
」
涙を流しながらライの事を思い出す

「あら、ベストポジションじゃない」
急に紅蓮のモニターにラクシャータが映る

「え？ラクシャータさん？」
カレンも驚く

「お待たせ、黒の騎士団特製の飛翔滑走翼よ。教本の予習はちゃんとやってた」
相変わらずキセルを吹かしながら話す

「はい、大丈夫です」

「じゃあ本番いつてみよう。基本誘導はこっちでやるから心配はいらないわよ」

「三番垂直発射間開放、紅蓮二式本体との接続信号確認」

紅蓮が落ちる先には潜水艦が浮いている。その潜水艦のハッチが開く

「舞い上がりな、飛翔滑走翼！」
ラクシャータが言うと赤い飛行機のような物が飛び立つ

「続けて、徹甲砲撃右腕部！」
今度はミサイルのような物が紅蓮に向かって飛ぶ

紅蓮に近付くとそのミサイルの外部分は取れ、輻射波動機構と形状は同じだが発展、強化された新しい右腕、徹甲砲撃右腕部が現れる

「右腕部連結速度まで減速中、転送ニューロン0.5から0.8MP。衝撃コントロール始動を確認、飛翔滑走翼とともに連結出来ます」

「連結！」
カレンが言うと手甲砲撃右腕部と飛翔滑走翼が紅蓮と繋がる

「（カレン、ルルーシュを頼む）」
潜水艦の中カレンを見守るcc

「新しい紅蓮、行くわよ！」
新しくなった紅蓮、紅蓮可翔式が急速上昇をする

「すまん紅月君、ゼロを」

ギルフォードにやられた藤堂が申し訳無さそうにカレンに言う

「分かっています」

「ほう、黒の騎士団もフロートを？」

ギルフォードが感心したように呟く

「この紅蓮が通用しなかったらお終いね。でも、やるしかないから撃つわよ」

右手を前に構えそのまま輻射波動砲弾を放つ

「え、遠距離でだと？くっ！」
攻撃距離の長さに驚きくらってしまったが、何とか脱出する事に成功した

輻射波動砲弾、零距离でしか放てなかった輻射波動とは違いロングレンジを可能にした紅蓮の新しい武器

「スザク、お前は総督を」
ライがスザクに言う

「皆油断するな。相手はジェレミア卿に勝った事もあるパイロットだ」

ライの言うことを素直に聞き忠告をする

「あのオレンジにかよ？」

ジノは驚きながらもトリスタンverFに換え紅蓮に向かう

「この！」

輻射波動砲弾を撃つが避け、トリスタンverFはメギドハーケンを放つが同じく避けられる

「おいおい、ラウンス並みの腕前かよ？」

困ったように呟く

「でも、これで」

アーニヤも紅蓮に向けてシュタルクハドロンを放つ

「紅蓮を舐めるな！」

それを綺麗に避けモルドレッドにライダーキックを当てる

「アーニヤから離れる！」

ハンマーを振り回しモルドレッドから紅蓮を離そうとする

「動きが遅いのよ」

ハンマーの攻撃を避け距離を取る

「行くぞ、マーリン」

離れた紅蓮にライが乗る灰色の機体（以降マーリン）

「くっ！流石に4対1じゃ。ゼロを救わなくちゃいけないのに」
カレンが焦る

視点 変更 ロイド

重アヴァロンの後ろの後ろからのんびりと観戦をしているロイド

「このままいけば敵のエースも倒せそうだね」
ロイドが嬉しそうに言う

「！ 高速で所属不明のナイトメアが接近中！」
周囲のマップを見ていたセシルが『Unknown』と書かれた矢
印を見つける

「何処から？」

「エリア11からです。それにこのスピードはヴァインベルグ卿の
トリスタント同じ速度です！」
セシルが驚いた表情でロイドを見ると

「ナイトメアでその速さと言っ事は可変ナイトメアってこと?」
「でも、そんな技術が向こうにもあるとはね」
ロイドは画面の映っている『Unknown』を見る

「更にその後方からナイトメア3、こちらは識別確認できました
! ヴインセントです!」

『Unknown』の後ろを『Vincent』が追っ

「(ヴインセントはまだ大量生産はされていないはず、それなのに
3機も?いくらラクシャータでも無理だ)」

「どっ言っ事でしょうか?」

「こっちが聞きたいぐらいだよ」
ため息混じり言っ

視点 変更 マックス

「殺気!」

アイネがハツとして機体を上昇させると赤い何かが凄い勢いで通り
過ぎていった

その後すぐに緑色の機体が通り過ぎる

「トリスタン!？」

姿を見たアイネがジノのトリスタンverKを見る

「いや、色と頭部の形状が違う。それにさっき放ったのはメギドハ
ーケンじゃなくMVSだ」

トリスタンverKからトリスタンverFのような機体を見てい
たジノが言う

「おいおい、4対1は卑怯じゃねえか？」

ナイトメア形態になった飛翠竜（以降飛翠竜verK）が紅蓮を護
るように前に出る

「その口調、マックスか！」

アイネが眉間に皺を寄せる

「大正解だ。ちなみに後ろのは俺の部下の参体傭人だ。四聖剣みた
いなチーム名だぞ。名前はサーズだ」

後ろからゆっくり3機のヴァインセントが近付いてくる

「そのヴァインセントも普通じゃないな（大きな剣を持っているのは
近接、太い銃口を腰につけているのが射撃、盾を持っているのは防

「御か？」

「ライが軽く分析する」

「3機のヴェインセントに追加装備を施した機体。順にブレイド、シヨット、アシストだ」

「どうやってそんな追加装甲を？それにヴェインセント自体だって普通に売っていたわけではないのだろう？」

「教えるつもりは無えよ。聞きたかったら力づくで聞いてみる！」
「スツと腕をマーリンとトリスタンverkに向け腕に取り付いている
ロングメーサーバイブレーションソッド
たLMVSを放つ」

「いきなりかよ！」

「ジノとライは不意をつかれたが距離があったので避けることが出来た」

「嬢ちゃんとライは俺が相手してやんよ。サーズはトリスタントとモルドレッドを頼む。カレン、オマエは枢木スザクだ」
「すぐに放ったLMVSをワイヤーで回収しライとアイネに仕掛ける」

「わ、分かった」

「久しぶりの戦場だな。血が見えないのが残念だが楽しませてもらう」

「2人はそれぞれの相手に向かった」

「お前がマックスか？ツヴァイが言う通りなら2対1だとしても手」

加減をする気は無い」
ライが物干し竿を構える

「それでこそのおマエだ。俺は手加減するがオマエ等は遠慮すんなよ」

マックスが不敵の笑みでライを見る

「生意気を」

ライがマックスに攻める

視点 変更 ジノ

アーニヤのモルドレッドと協力をし3機のヴィンセントと戦っている

1275

「（何だ？この異様に息の合った連携は？）
サイズと交戦中のジノが率直に思った感想

1機に集中すると他の機体からの闇討ちに遭い、全機に注意を払うと上手く作戦が練れない

「（厄介だな。だが、アーニヤがいるのが幸いしたな。アーニヤを狙っている機体にこちらが闇討ちをすれば良いだけの事）」
すぐに作戦を変える

「これで取った！」

アーニヤに切りかかろうとしていた赤紫のヴィンセント（以降ブレイズ）に向かってメギドハーケンを放つ

しかし、真後ろから攻撃だったがまるで見えていたかのように避ける

「避けた？見えてなかったはずだぜ」

流石のジノも額に汗を浮かべる

「中々やるな。だが、俺には勝てない。3つの視覚を持つ俺に死角は無い！」

青緑色のヴィンセント（以降シヨット）が腰に装備していた太い銃口から赤黒い光が一直線に突き進む

「あぶねっ！」

ジノは必死で避けたが、微かに機体の表面が焦げている

「ランスロットと同じハドロンプラスター！？」

それを遠くで見っていたスザクが驚愕の表情で見る

「余所見をするな！」

カレンが輻射波動砲弾を放つ

「くっ、このままではナナリーが」

それを避けヴァリスで牽制をする

視点 変更 マックス

「ハンマーを適当に振り回してるだけじゃ当たらねえぞ。キチンと尖ってる所を上手く使え。ちなみにそのハンマーは船手玄能。主にホツカイドウなんかで使われてるぞ。玄能つてのは普通尖っている部分のない金槌の事を言うんだが船手玄能は何故か尖っている部分があるんだよな。ホツカイドウ以外にもトット「無駄なうんちくをグダグダ長つたらしく説明するな！」おいおい、心に余裕が無いのか？駄目だぜそんなんじや」

ゲイラントの攻撃をヒョイヒョイかわしながら時々LMVSで攻撃もする

「それからライも動きが荒いぞ。考え事か？それに煙玉も有効に使え。無駄玉は良くないぞ。その刀の細さにも理由があるんだろ？ちやんと使えよ」

不意を狙ったライの攻撃も軽く避け同じく助言をする

「くっ、知ったようなことを（確かにあの赤いナイトメアを見てから何かが僕を邪魔している。何なんだ）」

紅蓮が気になるのかチラチラと覗く

視点 変更 スザク

「くらえ！」

紅蓮の輻射波動砲弾をランスロットに近距離で放つ

「そんな、ユグドラシルドライブのパワーも上がっているはずなのに」
それを防御したランスロットだが少し押されている

「スザク君、総督の現在位置が分かったわ。メインブリッチ近くのカーデンススペース。でも墜落まであと47秒！」
地図と時間を表示する

「必ず助けます！」

目を離れた際に紅蓮が距離を取りスラッシュハーケンを放つ

「しまった」
ランスロットの頭部をかすったがそのまま身をひるがえ返しナナリーが乗っている重アヴァロンに向かう

「（退いた？）」
スザクを追おうとしたが

「カレン、今はゼロを」

CCが通信する

「分かってるけどどこに!？」

視点 変更 マックス

「やばいな、カレン！サーズと代われ、そしてサーズは俺の代わりにコイツ等を頼む」

それを見たいマックスがランスロットの後を追う

「分かった」

「(さて、間に合うかな) コアルミナスコーンみたいにはいかないだろうが輻射障壁発動 って、フォートレスモードで突っ込んだほうがもつと早いな」

胸部から輻射波動と同じ効果のある輻射障壁発生装置を使い壁を壊そうとするが、考えると飛翠竜の装甲はverF時に敵に向かって特攻を仕掛ける事を想定して強固に作られている。それを思い出し、飛翠竜verFになり壁に突っ込んでいった

「(あ、居場所が何処だか知らなかった。どうしよう)」

壁を突き破りながら困ったように頭を掻く

視点 変更 ゼロ

ナナリーの出された腕を見ながら必死に考えを巡らしていた

「（どうすればいい？ゼロの正体を明かすわけにはいかない。しかし強引に連れて行くのはナナリーの意思を捻じ曲げることに）」
時間が無いのは分かっているが動くに動けない

「ナナリー！」

すると、ランスロットが壁を突き破って来た

「スザク！ ナナリー、逃げるぞ俺と」

ゼロが走ってナナリーに近付くと

「スザクさん！！」

スザクの名を叫ぶ

「（違う！そいつは俺を皇帝に売り払った！）」
風圧で体が浮きナナリーに近づけない

「怖かったかい？ごめん、もう大丈夫だから」
ランスロットの手でナナリーを車椅子ごと優しく掴むとルミナスコ
ーンを展開し再び飛ぶ

「（ナナリーが、スザクと）」

「（ゼロ、今は）」

すれ違いざまに2人は仮面越しと機械越しに互いを見る

ランスロットはそのまま再び壁を突き破った

すると、反対側の壁が壊れ

「お、見つけた」

マックスが飛翠竜verKになり空中に浮いているゼロに近付く

「ナナリー！！！！」

ゼロは断末魔の叫びとも言える声で叫ぶ

「キャッチ成功（ナナリーちゃんには届かなかったようだね）」
ゼロを上手く捕まえランスロットの手に乗っているナナリーを見な
がら思う

「ゼロは？」

カレンが近付く

「安心しろ、気を失っているだけだ。オマエ達もさっさと退け、これ以上の戦いに意味はない」
ライとアイネを見る

ジノとアーニヤは脱出したスザクとナナリーを見つけそのまま護衛する為について行った

「ゼロを見逃せて言うのか」
アイネがマックスを睨みハンマーを構えるが

「アイネ、今は総督が心配だ。それに5対2では不利だ。ツヴァイと合流してからでも遅くは無い」
ライがアイネに言いマックス達に背を向ける

「仕方ない」
アイネも背を向けスザク達の後を追う

「うっ、ナナリー」
ゼロが唸る

「旦那はオマエ預ける。サーズ、オマエは黒の騎士団と合流しろ。そして俺は数日だけ姿を隠す」
ゼロを紅蓮に渡しフォートレスモードになる

「何でよ?」

「秘密だ。心配すんな別に逃げようって訳じゃねえ。じゃあ、旦那は任せたぞ」

そう言つとエリア11に向かって飛んでいった

第四十八話 次本編6 ゼブルと太平洋 奇襲 作戦 (後書き)

今回はオリジナルナイトメアの紹介と本編には出てこなかったナイトメアの説明を載せるか普通に本編をするかで迷っています

多分紹介を載せると思います

オリジナルナイトメア 非原作ナイトメア 紹介(前書き)

オリジナルと原作以外で出てきたナイトメアの紹介です

オリジナルナイトメア 非原作ナイトメア 紹介

機体名 ランスロット・クラブ

機体原作 コードギアス 反逆のルルーシュ LOST COLO
RS (ゲーム)

パイロット ツヴァイ(ゼブル)

製造 特派

全長 4.45m

外見

カラーリングは青と白、翠竜と同じくランスロットに似ているが額にはカブトムシのような角が伸びている。

武装

メーザーバイブレーションソード

MVS x 2

繋げる事でランスタイプになる。本機で試作として取り入れヴ
インセントには完全導
入された。

可変式アサルトライフル x 1

可変式で射程距離が大幅に上がる狙撃モードに変更可能。通常

の狙撃モード時は

常にファクトスファイアを展開して感度を上げなければならず
エネルギー消費が通

常の約1.5倍使うが、パイロットのツヴァイ・ドウはこの事を
知らずに使ってい

たので消費エネルギーが少なく長時間の行動を可能にした。

強化版スラッシュハーケン×4

ランスロットと同じで両腰、手の甲に装備されている。

特殊装備

ブレイズルミナス

サクラダイトにより発生したエネルギー場で物理攻撃を防ぐシ
ールド。武器としてそ

のままぶつける事も可能。

備考

ツヴァイ専用機として作られたがそのツヴァイ・ドウ本人が行方不
明だったので倉庫送りにされていた。しかし藤堂救出作戦でスザク
のランスロットを助け、そのときの戦闘データからツヴァイ・ドウ
本人が乗っていたことに気が付いたロイドがさり気なく強化（フロ
ートユニット等）を施し全く同じ場所に置いた。

キュウシュウ戦役ではマックスの乗る翠竜と共闘し、多くの鋼體を
倒した。
ガン・ルウ

ブラックリベリオンでは黒の騎士団とブリタニア軍の全面対決に遅れながらも参戦。フロートユニットを壊されたがライの月下を半壊させ、ブリタニア軍を勝利へと導いた。

その後はアクエリオンで大幅な強化、変化を繰り返しフローレンスへと昇華された。

機体名 月下（先行試作機）

機体原作 コードギアス 反逆のルルーシュ LOST COLO
RS（ゲーム）

パイロット ライ

製造 ラクシャータ

全長 4.49 m

外見

カラーリングは青色、左腕に紅蓮式式と同じ輻射波動の簡易型である甲冑型腕を装備している。

武装

廻転刃刀×1

刃の部分がチェーンソーのように回転して切り裂く。

輻射波動機構（甲吉型腕）×1

簡易型で威力は紅蓮に劣るもののそれでも通常のナイトメアなら一撃で破壊できる。

ハンドガン×1

月下と同じ。

スラッシュユハーケン
飛燕爪牙×1

右胸部に装備されているがブリタニア製のスラッシュユハーケンとは違い使用時以

外は露出していない。

特殊装備

チャフスモーク

チャフ性能のあるスモークを噴出する。

備考

ラクシャータ作の月下の試作機。出力傾向がピーキーな為ライ以外のパイロットではほとんど扱えず、ライの常人離れた戦闘力に合わせて設定されているので総合性能は紅蓮にも引けを取らなかった。

ブラックリベリオンまでライの良き相棒として活躍したがツヴァイのクラブで戦闘不能になり、その後に出てきた謎の機体の攻撃で完全に修復不能に追い込まれた。

機体名 翠竜すいりゅう

機体原作 オリジナル

製造 ゼブル

パイロット マックス（ゼブル）

全長 4.58 m

外見

カラーリングは若葉のような黄緑色。全身にスラッシュハーケンを装備している。

武装

強化版スラッシュハーケン×12

場所 胸部、手の甲、足の甲、両腰、両肩、両外前腕の各2つ。
手の甲、足の甲のスラッシュハーケンを手刀型、足刀型にする
メッサーモードが

可能。

スラッシュハーケンでの移動では不規則な動きが出来、本機の被弾率が極端に低

かったのはこの為。他にもスラッシュハーケンのワイヤーは切

れ味もよく、切断
にも使う事も可能。

特殊装備

ステルスマント

ステルス機能（レーダーによる探知を困難にする機能）が付いている黒いマント。

小ダイ

立ち乗り式のナイトメア運送機。翠竜の中からの操縦なので細かい操作が必要になるが慣れれば片腕で飛行も出来、小ダイに乗ったままでの攻撃も可能。

備考

インフィニットリッドメイクス
無限次元空間製作によって作られたマックス専用機。

武装はスラッシュハーケンのみだがそのスラッシュハーケンでの不規則な動きで一度も戦闘では負け知らずで傷を負うことすらほとんど無かった。

追加装備のステルスマントと小ダイは本人曰く「気がついたらなくなっていた」とのこと。

戦闘描写は少なかったが黒の騎士団に大いに貢献した機体。

機体名 飛翠竜

機体原作 オリジナル

パイロット マックス（ゼブル）

製造 ゼブル

全長 5.73 m

外見

カラーリングは濃緑。トリストタンに酷使した体だが首から上は翠竜のをそのまま使っている、更に額には一角獣のような細長い角、ブレードアンテナが付いている。

武装

ロングメザールレーザーショソード

LMS x 2

通常の1.7倍の大きさのMVS。スラッシュハーケンのように射出可能。

アサルトライフル x 1

作ったわけではなくただ単にサザールランドから奪いそのまま使用。

特殊装備

輻射障壁発生装置

輻射波動を利用したシールドを展開する装置。腹部に装備している。

ブレードアンテナ

細長い角の様な形をした超高度な受信用アンテナ。その気になれば敵の通信も受

信可能。2つに割れてV字の角にすることも出来るが性能面ではかなり悪く

なる。本気になった時のみ使用するらしい。

備考

翠竜の発展機。フォートレスモード（飛行機形態）に変形可能。フォートレスモードではスピードを生かした攻撃で翻弄し、ナイトメアモードでは圧倒的な腕で圧倒させる。

フォートレスモードでの特攻を視野に入れて作った為装甲も通常のナイトメアより強固になっている。

翠竜とは違い本機にはスラッシュハーケンが一切装備されていない。

アクエリオン製作のナイトオブブラウズ専用機

日々新しい技術が生まれると言われているアクエリオン、そこで造られたナイトメアは一癖も二癖もあるが機能面ではどれも高性能であることには変わらない。

機体名 フローレンス

機体原作 オリジナル

パイロット ツヴァイ・ドウ（ゼブル）

製造 アクエリオン

全長 6.81m

外見

カラーリングは緑と黄緑と黒色を混ぜた迷彩色。本機最大の武器であるハドロンライフルはコックピットの右側に装備されている。

武装

ハドロンライフル×1

ハドロン砲を細く圧縮する事により威力と貫通力、そしてスピードを大幅に上げる事に成功した。連射は出来ず数十秒のリロード時間が必要となる。コックピ

ットにあるライフルの模型と連動しているため本物をライフルを撃つ感覚で撃て

る。

MVS x 1

近接戦闘用。コックピット左側に付けられている。

スラッシュハーケン x 2

腰に2つ。

特殊装備

人工知能（AI）『エルベントス』

アクエリオン産のナイトメア用の人工知能。ナイトメアに初めて導入することに

成功したがパイロットの動きや癖を事細やかに設定しなくてはいけない事と精密

機械の為大きな振動や急な動きに非常に弱く量産の予定は無い。

しかし、学習を

重ねた『エルベントス』は自動的に攻撃を避けたりもしてくれる。

ブレイズルミナス

左腕に装備。

備考

ランスロット・クラブを基にアクエリオンで大幅な強化、変化を繰り返し生まれたナイトオブツィ、ツヴァイ・ドウ専用機。

可変式アサルトライフルを参考にしたハドランライフルは連動したライフルの模型をコックピットに入れることで命中率の大幅な上昇を実現した。更にA I、『エルベントス』と導入した事で更に命中率が上がった。

反面『エルベントス』は大きな振動や急な動きには対処できず近距離では第6世代相当のナイトメアと同等以下になってしまう（無理をさせ過ぎるとオーバーヒートしてしまいデータが吹っ飛ぶ可能性もある）。

機体名 マーリン

機体原作 オリジナル

パイロット ライアー・ファン・ブリタニア

製造 アクエリオン

全長 5.24 m

外見

カラーリングは灰色。腰には細長い太刀型MVS『物干し』が装備されている。胸には手裏剣型MVS『風魔手裏剣』が発射できる。装置が組み込まれている。

武装

太刀型MVS『物干し竿』×1

通常のMVSの1.5倍の長さで幅は半分ほど。ライの腕と合わさることで相手

に攻撃に隙を与えない連撃を与える。

使い捨て手裏剣型MVS『風魔手裏剣』×30

手裏剣の形をしたMVS。サクラダイトを使用している為高威力の上、任意に爆

発させる事が可能で爆発するとレーダーをかく乱させる煙幕が噴出する。

特殊装備

ブレイズルミナス

左腕に装備。

広範囲索敵レーダー

広範囲のナイトメアを見つけることの出来るレーダー。ステルス機能のついた機

体でも通常のナイトメアの数倍の距離で見える。

備考

アクエリオンで作られたナイトオブイレブン、ライアー・ファン・ブリタニア専用機。風魔手裏剣の煙幕で見失っている所を物干し竿で斬るのがマーリンの戦い方。マーリンは指揮官機でもある為広範囲の索敵が可能なレーダーを内蔵している。このレーダーのお陰で

マーリンは煙幕の影響を受けずに敵を切ることが可能。アクエリオンの製のラウンズ専用ナイトメアはほとんどが大型（約6m）約7、6m）なのに対し、マーリンの全長は5メートル程。機敏な動きを可能にするために大型は避けたのこと。

機体名ゲイラント

機体原作 オリジナル

パイロット アイネ・ナハトム

製造 アクエリオン

全長 6.97m

外見

カラーリングはオレンジ。大きな金槌型ハンマーを装備している

武装

金槌型ハンマー『イクスプロージョン』×1

ナイトメアでは珍しい打撃系の武器。左右の頭部は形状が異なり一点集中型で細

く尖った部分と全体攻撃が可能な広く平べったい部分があり、平べったい部分に

は小型のブースターが5つ付いている。尖った部分での攻撃時にブースターの追

加スピードで高威力の一撃を放つ事が出来る。(低出力のブレイズルミナスを貫通するほど)

スラッシュハーケン×10

ガウエイン同様指先がスラッシュハーケンとなっている。

特殊装備

ブレイブルミナス

右腕に装備。

備考

フローレンス、マーリンと共に作られたナイトオブファイブ、アイネ・ナハトム専用機。一撃必殺の威力を持つ『イクスプロージョン』とアイネの驚異的な回避能力を合わせることで大型の機体にも関わらず被弾率の少なさと撃破数の多さではラウンズ内でも上位に入っている。

ゼブル製作のヴィンセントシリーズ

無限次元空間製作で作られた通常のヴィンセントに追加装甲及び
インフィニットソリッドメイクス

追加武装を加えた機体。追加装甲と追加武装は任意でパージすることも可能。

ブレイズが近距離で敵を混乱させ、シヨットが遠距離からブレイズを狙う機体を打ち落とし、アシストが遠距離での戦闘を苦手とするブレイズと近距離での戦闘を苦手とするシヨットを守るために動き回る。

驚異的な連携プレーで敵を翻弄する

機体名ヴィンセント・ブレイド

機体原作 オリジナル

パイロット サーズ（メインの少年）

製造 ゼブル

全長 4.44 m

外見

カラーリングは赤紫。メサーバイフレクションフレーム通常のヴィンセントの腰に2本のMVBと左手が鞘になっている蛇腹剣シヤハバクケンが追加装備されている。軽量化の為追加装甲は無い。

武装

メザールハイブレーションブーメラン

MVB x 2

両腰に1個ずつ装備されているMVSで出来たブーメラン。内部に受信機があり

放つても自動で腰に戻ってくる。

蛇腹剣^{じゃばらけん} x 1

外見は普通のMVSだがよく見るとV字状の刃をいくつも連ね内部にワイヤーが

入っている。内部のワイヤーを緩ませると剣はバラバラになり刃が付いた鞭にな

る。剣としての切れ味と鞭としての中距離攻撃性能を兼ね備えた。近中距離武器。

特殊装備

ブレイズルミナス

左腕に装備。

備考

近接特化のヴィンセント。MVBで牽制し、一気に近付き蛇腹剣で斬りつける。1対1の戦闘では圧倒的優位に立つことが出来る。

機体名ヴィンセント・ショット

機体原作 オリジナル

パイロット サーズ（ハゲ頭の男）

製造 ゼブル

全長 4・52 m

外見

カラーリングは青緑。右腰にハドロンブラスター、両肩には大型バルカン砲、両足にはミサイルポッドを追加装備。大幅な追加装甲が施され鈍重になっているが装甲による防御力は3機の中で随一。

武装

ハドロンブラスター×1

ランスロット・コンクエスターに装備されているのは違い折りたたみ式ではな

く常に銃口は前を向いている。エネルギーの消費が激しく本体とは別にハドロン

ブラスター内にもエナジーファイラーを入れる場所がある。

大型バルカン砲×2

6連式で並みのナイトメアなら数発で撃破出来る。

ミサイルポッド×2

4連式の高威力ミサイル。比較的大きいので威力も高い。

備考

大火力の遠距特化のヴァインセント。鈍重な為近接戦闘では大きく不利に回ってしまいが遠距離での戦闘なら他を圧倒する破壊力をみせつける。

機体名ヴァインセント・アシスト

機体原作 オリジナル

パイロット サーズ（長髪の女）

製造 ゼブル

全長 4.44 m

外見

カラーリングは黄色。大きな盾を右手に装備しており、腰には各2つずつの自動可変軌道MVSハーケンを装備している。

武装

自動可変軌道型MVSハーケン×4

腰に各2つずつ装備されている小型のMVS。範囲内の敵になら脳で指令を行な

いオールレンジ攻撃をすることが可能（範囲は半径10メートル

ル)。ブレイドと

同じく軽量化の為に追加装甲は無し。

大門ハドロン砲内臓シールド×1

ハドロン砲を内蔵した大型の盾。普段はブレイブルミナスを展開して攻撃を防い

でいるがハドロン砲を撃つときのみ解除する。大きさは本機の4分の3（ヴイン

セントの全高は4，44メートル、つまりシールドの大きさは3，33メートル

ル）もあり、ブレイズルミナスを全開にすればシュタルクハドロンも防ぐほど。

メザールハイブレーションランス

MVL×1

三つ又の槍。長めに作られており主に牽制用。

備考

補助用特化のヴインセント。遠中近での戦闘では器用貧乏に活躍出来る。普段は主にブレイドとショットの間をウロウロと護衛する。1機では戦おうとはしない。

ナイトギガフォートレス

重装甲と重武装が施されている非人型の大型強襲用兵器

機体名 ？？？

機体原作 コードギアス ナイトメア・オブ・ナナリー (マンガ)

パイロット 不明

製造 不明

全長 ？．？？m

外見

カラーリングは白。ナイトギガフォートレスに酷使した非人型の機体。

武装

？？？砲×2

ライの月下を破壊した砲撃を放った。

大型スラッシュユハーケン？×2

鋭い円錐型のスラッシュユハーケン、下部？に装備されている。

備考

ブラックリベリオンでツヴァイとライとの戦闘に現れ、ライをコッ

クピットごと担ぎ何処かに消え去った。その後ライが記憶を換えられラウンズとして現れた所を見るとシャルルと何かしらの繋がりがあるらしいが詳しい事は不明。

第四十九話 次本編7 ゼブルと棄てられた 仮面

「ナナリー!!」

いつもの様に車椅子に乗ったナナリーを見て飛びつく

「アリスちゃん」

ナナリーも嬉しそうに受け入れる

「大丈夫? 怪我は無い? 切り傷? 擦り傷? 擦り傷? 擦り傷? 靴擦

れ? 打ち身? 打撲? 挫いた? 霜焼け? 火傷? 凍傷?

脱臼? 骨折?

ナナリーの体に傷が無いか全身をくまなく調べる

「本当に大丈夫だから落ち着いて。ね?」

ナナリーも少し困った顔で落ち着かせようとする

「ナナリー総督の言う通りですよ」

そんなアリスの後襟を掴み軽々と持ち上げる

「何よ!? もとはと言えばあのデコ助の言うことに従ったお父さんのせいでしょ?」

腕を振り回しているが長さが短くツヴァイには当たらない

「故人に悪口はいただけませんね。ですが、確かに俺の判断ミスも大いにありました。お久しぶりですナナリー総督、ナイトオブツールのツヴァイ・ドウです。この度は俺の判断ミスで多大なご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます」

アリスを離すとナナリーの目の前で肩膝をつき頭を下げる

「お気になさらないでください。スザクさんや他の皆さんのお陰で私は無事でしたし」

「おっ、ツヴァイいつ来てたんだ？」

トリスタンから降りてきたジノがツヴァイに近づく

「先輩たちとは入れ違いだったみたいです。フローレンスもまだ本国にいますので応援にも行けずやむを得ず待機していたんです」

「へー、そろよりツヴァイの隣にいるの誰だ？」

ジノが隣にいるアリスを面白そうに見る

「ああ、紹介が遅れましたね。ナナリー総督の騎士であり俺の娘であるアリスです。これから何かと接する機会が多いと思いますのでどうか仲良くしてあげてください」

アリスの頭に手をポンつと置く

「小さいんだな」

「小さい」

ジノとアーニヤがアリスを見ながら言う

「小さいって何よ！確かにあんたはデカイからそう見えるけど、そ
つちのあんたは私より小さいじゃない！」

アリスがアーニヤを指差す

「私のほうが大きい」

「小さい！」

「大きい」

「小さい！」

子供のように言い争う2人

「アリス、総督もお疲れでしょうから休ませてあげてください。明日は忙しいでしょうから尚更です」

ツヴァイがそんな2人の間に入りアリスをナナリーのほうへ押す

「分かったわ。じゃあ、行こうかナナリー」

アリスは車椅子のハンドルを握る

「はい、では、私たちはこれで」

ナナリーは軽く会釈をし、アリスはアーニヤに向かって舌を出す

そのまま護衛の後をついて行く

「そう言えば殿下達はどちらに？」

ナナリー達が少し離れるとツヴァイがいない3人のことをジノに聞く

「スザクは戦闘で頭を強く打つたらしくて精密検査、アイネは負傷したギルフォード卿の見舞いに、そしてライは散歩に行ったらしい」

「そうですか。ってどうかしたんですかアーニヤ先輩？」

気づくとアーニヤがツヴァイの足にくっ付いている

「暇」

アーニヤが一言だけ言うと顔を足に擦り付ける

「そうなんですか？それなら一緒に租界にでも行きますか？案内程度なら出来ますよ」

気にしない様子でアーニヤに提案する

「いいなそれ、俺も行っていいか？」

ジノもツヴァイに覆いかぶさる形で聞く

「ジノは駄目」

アーニヤが首だけを上にあげジノを見る

「アーニヤ先輩、意地悪はいけませんよ。ジノ先輩も一緒に行きましよう」

アーニヤの頭を軽く撫でる

「よっしやー！」

「むー」

「あの、そろそろ離れてくれませんか」と動けないんですが」

視点 変更 ナナリー

翌日

新総督就任挨拶

政庁内にある広い講堂でナナリーは貴族たちの前で挨拶をしようとしている

もちろんテレビでの中継も行われている

右隣にはアリスとスザク、左隣にはナナリーの補佐とお目付け役を務める眼鏡をかけた女性（以降ローマイヤ）が並んでいる

「皆さん始めまして。私は先日亡くなられたカラレス公爵の代わりにこの度エリア11の総督に任じられましたブリタニア皇位継承第87位ナナリー・ヴィ・ブリタニアです。私は見ることも歩くことも出来ません。ですから、皆様から力をお借りすることが多々あると思えますがどうかよろしくお願いします。そうそうではあります皆さんに協力して貰いたいことがあります」

点文字で書かれた台本を読んでいるが急に指を止める

「私は行政特区日本を再建したいと考えています」

「（ナナリー？）」

アリスとスザクは驚いたようにナナリーを見つめる

「馬鹿な」

「口にするだけでも憚られるものを」

「何を考えているんだ」

その場にいた貴族たちは皆非難するような視線で見る

「（あの様子を見る限りスザクと騎士の少女にも伝えていなかったのか？確かに特区日本は当時の故ユーフェミア副総督が考えた理想的な政策だ。だが、その第一回行政特区日本は失敗し、ユーフェミア副総督を信じていたイレブンの心には大きな傷ができ、それは未だ癒えていない。それを理解できていないとは思いたくは無いがとにかく無謀だ。それに黒の騎士団が復活した今、黒の騎士団支持派と名誉ブリタニア人はまず来ないだろう）」

ライはナナリーを見つめる

「特区日本ではブリタニア人とナンバーズは平等に扱われイレブンは日本人という名を取り戻せませす。かつて特区日本では不幸な行き違いがありましたが目指す所は間違っていないと思います。黒の騎士団の皆さんもどうかこの特区日本に参加してください。互いに過ちを認め合えばきっとやり直せる。私はそう信じております」

挨拶が終わり自部屋に戻ろうとする

「驚いたわ。まさか行政特区日本を再建する気だったなんてね。でも、何で相談してくれなかったの？」

アリスは緊張が解けたのか息をゆっくり吐く

「ごめんね。でも、これだけは何としてもやりたかった。ユフィ姉さまの為にも。アリスちゃん、私間違っただけよ？」

ナナリーの車椅子のハンドルを握っているアリスの手の上に自分の手を置く

「うん、ナナリーの行動は間違っただけよ。他の人が何と言おうと私は正しいと信じてる」
その手を優しく握る

「ありがとう」

視点 変更 ルルーシュ

ナナリーの姿を見て、ルルーシュはゼロの存在に疑問になっていた

「（俺は今までナナリーのためにやってきたと言うのに）」
学校の校庭にあるベンチに座り真っ赤に染まっている空を眺める

「兄さん」

後ろからロロが声をかける

「ロロ、そう言えばお前は俺の監視役だったな。忘れていたよ」
ルルーシュがゆっくり立ち上がりロロを見る

「いいじゃない忘れてしまえば、つらいだけだよ。ゼロも黒の騎士団もナナリーも「違う！ナナリーは！」「違うないよ。ナナリーのためにもなる。ゼロが消えればエリアー1も平和になるよ。兄さんもただの学生に戻って平和に過ごせばいい」
ロロが優しい言葉を巧みに使いルルーシュを追い詰める

「しかし」
ルルーシュが後退る

「何がいけないの？幸せを望むことが。誰も傷つけない、今だったら全てを無かったことにできる。大丈夫、僕だけはどこにも行かないよ。兄さんとずっと一緒に」
その距離を口口が更に縮める

「俺は？」
何かを言おうとしたルルーシュは急に光った暗い空を見上げる

大きな花火が学園の校舎上空に上がっている

「これは花火？いったい誰が？。まさか！」
ルルーシュが何かに気づいたらしく全速力で校舎へ入っていく

「やっと来たか」
「お帰り。ルル」
「ルルーシュもやるうよ。文化祭で余ったやつだけど」
「今ならもれなくロケット花火を横に並べてロケットランチャー花火もやるよ」
リヴァル、シャーリー、ミレイ、ゼブルが走ってきたルルーシュを笑顔で向かい入れる

「どうして？修学旅行は？」
ルルーシュが恐る恐る聞く

そう、本当なら3年生は今日からヒョウゴへ修学旅行に行っているはずなのだ

「俺たちだけで行っちゃったら君泣くでしょ？」
花火に火を点けながら言う

「旅行なんてのはね、どこに行くかじゃなくて誰と行くかが大切なのよ」

「会長は2度目ですもんね」
シャーリーがミレイを笑いを堪えながら見る

「何よ、留年して悪かったですね」
ミレイも気にしている事なので少し不機嫌になる

「ガールズちゃんも体を壊しちゃってね（まあ、俺が最近忙しかつたから、構って欲しいだけだろうけど）。それにアイネちゃんやスザクもいないんだったら行かなくてもいいかなってね」

「それは」
ゼブルのポケットから少し見えている折り紙で折った鶴を見つける

「ん？ああ、これ？願い事が叶うって言うから試しに作ってみたんだ。誰に教わったのか思い出せないんだけどね」
笑いながらルルーシュにその折り鶴を渡す

「（ナナリーの事を忘れているのにナナリーが教えた事を覚えている）何を願ったんだ？」
折り鶴を受け取るとゼブルに聞く

「もう叶ったのかな。みんなで一緒に花火をしたいなって」

「皆？」

「アイネにスザク、ガーベスにカレン、ルルーシュとロロも」
リヴァルが言うが1人忘れてる

「（それにナナリーちゃんにライもだね。ん？誰かを忘れてる？まあ、いいか）」

ゼブルもマイナー眼鏡っ子の事をすっかり忘れてる

そんなほのぼのとした光景を見て

「（そう言えば昔ナナリーとスザクと一緒に幸せに形があるとしたらそれはどんな姿だろう？って話をしたな。それはスザクが言っていたようにガラスのようなものかもしれない。透明で普段は気づかない。だけれどそこに存在している。その証拠にちょっと見る角度

を変えるだけでガラスは光を映し出す。例え偽りの記憶で汚されようとも透明なガラス色ですっと、ずっと。そうだ、俺はもう」

「ルルーシユさん？」

「何泣いてんだよ」

いつの間にかルルーシユの目からは一筋の涙が雫となって落ちる

「え？」

ルルーシユも気づいてはいなかった様だ

「私たちの友情に感激って？かわいいところもあるじゃない」

ミレイが笑いながらルルーシユの頭を強引に撫でる

「違いますよ。そんなわけ無いじゃないですか」

みんなに背を向け涙を拭く

「みんな、またここで花火を上げよう。絶対、絶対もう一度、みんなで（そう、俺の戦いはもうナナリーのためだけじゃない！）」

黒の騎士団と思える団体が乗ったとの情報を受けたライが戦艦の大部隊を指揮している

「こちらはブリタニア軍である。貴船の所属、航路は申告と違っている。直ちに停船せよ。これより強行臨検を行う。10分待つ。それまでに全乗組員は武装を解除し甲板上に並べ」
ライがマイクを離し椅子に座る

「ありがとう、ライ」

隣に座っていたスザクがライに声をかける

「何故私なんだ？今回の作戦の責任者はスザクだろうか？」
ライが不思議そうに聞く

「ちょっとだけ理由があつてね（これで向こうに揺さぶりをかけることが出来た筈。カレン、すまないが僕にも余裕が無いんだ）
タンカーにいるであろうカレンに心の中で謝る

「さて、これからどうするつもりだ？」

スザクの思惑を知らないライは気にするのを止める

「指揮は君が取ってくれ、だがもしもの時の決定は僕がする」

「分かった」

視点 変更 カレン

張りぼてタンカー内にある黒の騎士団の潜水艦で

「今の声って」

扇が呟く

「ライ君だな」

近くにいた藤堂が目を瞑る

「やっぱり敵になっちまったんだな」

玉城を始めとする全員が知っていたとは言えやはり悲しくなる

「（誰だ？）」

サーズを除いて

「少しは考えて言いなさいよ。カレンが一番つらいのよ」
玉城の耳元で井上が言う

「そつだよな」

玉城もカレンを見つめる

「（ライ）」

泣きそうになるが必死に涙を抑えよる

「（カレン）」

CCもカレンを優しく見守る

「そろそろ時間だ。各員配置につけ！」

暗い気持ちを払うかのように藤堂は大声で言う

視点 変更 ライ

「時間だな。攻撃開始」

時間を確認すると命令を出す

命令後すぐに戦艦から砲撃が放たれた

砲撃が放たれて数秒後タンカーが大爆発する

「（タンカーの爆発が強すぎる。攻撃が当たったわけではなくソナーを無効にするためにわざと自爆させたか）海中に逃れようとするはずだ。ポートマン？でポイントシータを中心に包囲網を展開。全艦^アスロックASROC発射！」

次々と命令を出し黒の騎士団を攻める

ASROCとはAntiSubmarineRocket（ア
ンチ サブマリン ロケット）の略で水上艦艇での対潜水艦攻撃用
の爆雷の事

「ライアー殿下、ドウ卿からの通信です。繋ぎますか？」

オペレータの1人がツヴァイからの通信に気づきライーたちに聞く

「ツヴァイが？。繋いでみてくれ」

不振に思ったライーが取り合えず繋がせる

大きなモニターにツヴァイの姿が映る。場所はどつやら自室のようだ

「殿下に枢木卿、単刀直入ですが今すぐ撤退してください」

そこまで慌ててはいないがいつもより少し早口で言う

「何かあつたんですか!？」
スザクが真剣な表情で聞く

「いえ、俺の未来予知で不吉なものが見えたので」

「何が見えたんだ?」

「よくは見えませんでしたけどとにかく不吉でしたね。まあ、俺の予知が絶対に当たるわけではありませんが退く事を強くオススメします」

「ツヴァイ、聞きたいことがあるんだが」
ライが真剣な面持ちになる

「何でしょ」「お父さん大変! ナナリーが指を切っちゃって血が出る!」血ですか?」
ツヴァイがライから聞こうとしたがアリスが閉まっている扉を蹴り開ける。パニックに陥っている様だ

「紙で指がピツて切れて血が流れてて、このままじゃナナリーが死んじゃう!」

目に涙を浮かべツヴァイの体を前後に振る

「まずは落ち着いてください。アリスは先にナナリー総督のところ

に行ってください。1人じゃ何かと不安ですからね。俺もすぐに行きますから」

アリスの視線に体をかがめる

「絶対だからね！私の速さより早くだからね！」
そう言うと凄まじい速さで駆ける

「（勝手にギアスを使ったな）と言うわけですのすいませんが俺はこれで」

フー、っと息を吐き頭を1回下げ画面を切断する

「ツヴァイも大変だな。どうする？退くか？」
モニターから目を離す

「いや、ここまで追い詰めたんだ退くわけにはいかない。攻撃を続行せよ。自分は上空から監視する」
スザクはそのまま立ち上がり倉庫に置いてあるランスロットに乗りに行った

「ライアー殿下、ドウ卿の忠告はよろしかったのですか？」
艦長らしき男がライイに聞く

「今作戦の責任者はスザクだからな。私は従うだけだ（だが、確かにツヴァイの予知も気になる。注意はしておくか）」

視点 変更 藤堂

「艦内各部に浸水」

ASROCの雨で潜水艦は次々と浸水していく

「破損箇所のあるブロックを閉鎖。今は耐えるんだ（しかし、このままでは。ゼロはまだか）」

藤堂は堂々と立っているが内心は焦っていた

「でも」

カレンが言ったとたん艦内が大きく揺れた

「Q1聞こえるか？Q1」

艦内に声が響く

「この声はゼロ！」

「間に合った」

団員の顔には安心感が浮き出ている

「ダウントリム50度。ポイント14に向け急潜行しろ。ポイン

トL14到着後ポイントL15に向け旋回30度。旋回終了後魚雷全弾発射。時限信管にて40秒だ」

「そんなところに敵はいないぞ？」
扇がレーダーを見ながら言う

「信じてやればいいじゃないか」
今まで無口だったサーズが言う

「幹部の話に新人が口を挟むな」
玉城がサーズに突つかかる

「頭の悪い幹部様の変わりに意見を述べただけだ」
玉城から視線を外したため息を吐く

「その方の言うとおりですわ。信じるより他に手がありますか？」
玉城がサーズに何か言おうとしたが神楽耶が前に出て来た

「（やるしかないようだな）信管設定後全弾発射」
その様子を見て藤堂は頷く

「魚雷発射を確認。敵位置捕捉しました」
オペレーターがモニターに黒の騎士団の潜水艦を映し出す

「（何故今になって攻撃を行った？もし私が同じ立場だったならばを潜めてやり過ごす。現に今までの彼らがその例だ。なのに何故我が軍がない方向に魚雷を？）すまないが一帯の海図を見せてくれ」
黒の騎士団の不可思議な行動にライが疑う

「はい、こちらになります」
モニターに周辺の海図を映す

「（黒の騎士団はL15に向け魚雷を放った。L15には　！？まさか）」

指で魚雷の動きを再現すると何かに気づいたらしく思いっきり机を叩く

「ど、どうなされました？」
艦長を含めた全員がライを見る

「全艦L13まで全速力で前進せよ！」
マイクの電源を入れ大声で他の艦にも伝える

「しかし、枢木卿の指示では」

「全責任は私が取る！全艦L13まで前進。攻撃を中止し今すぐ移動しろ！死にたくなければ急げ！」

ライが更に大きな声で言う

「コッコイ、イエス・ユア・ハイネス」「」「」

他の艦の艦長がライの言葉のとおりL13に向け全速力で前進する

「（やってくれたな。ゼロ！）」
椅子に座り眉間に皺を寄せる

視点 変更 全視点

「アンカー固定後各員衝撃に備えよ」
ゼロの指示通りアンカーで潜水艦を固定すると

地面に埋まっていた魚雷が爆発し、地面から大量の空気と泡が力強く回りに広がった

「枢木卿、泡が！ うわあああ！！」
「浮力が！」

水中にいたポートマン？が空気で操縦不能になり戦艦から発射された爆雷に当たると

ライたちの乗る戦艦と他半数は無事だったが残りの半数の潜水艦が操舵不能で横倒れになっている

「何だこの泡は？」

「スザクどうなっている！」

援軍としてやってきたジノとアイネが状況を把握出来ずにいる

「分からないんだ。ライが命令を出してくれなかったら全滅してたかも知れない。ライ、あの泡の正体は何だ？そして何で分かった？スザクが混乱しながらもライに聞く

「ツヴァイの不吉な予知を聞いて警戒していなかったら私も沈んでいたさ。この泡の正体はメタンハイドレード。黒の騎士団はL15にメタンハイドレード採掘現場がある事を知って魚雷を放ったのだろう（だが、本当にツヴァイの予知がなければ私も今頃　　）」

沈没している戦艦を見つめる

「ライ、今は」

「分かっている。残っている部隊は生存者を見つけるぞ」
ライが残っている戦艦とポートマン？に指示を出す

「ライー殿下、ゼロに奪われたヴィンセントが接近してきます！」
オペレーターの1人が接近する機影を見つる

「おいおい、ゼロもいるぞ」

ジノがヴィンセントの手のひらに乗っているゼロを見つける

「これがお前の答えなのか！」

ランスロットがヴァリスを構える

「撃つな！撃てば君命に逆らうことになるぞ。私はナナリー総督の申し出を受けよう。そう、特区日本だよ」
ヴィンセントの手の上で立ち上がる

「そんな」

「降伏するって事か？」

「馬鹿な！」

「……」

黒の騎士団の団員達が驚愕の表情を浮かべる

「本気か？」

ランスロットの腕が下がる

「ゼロが命ずる。黒の騎士団は特区日本に参加せよ！」

（記憶を換えられたアイネをナナリーに接触させるわけにはいかない。ライの場合は全体的に変わっているから気づかないはずだし、ナナリーの騎士のアリスもどうやらライとの接点は皆無の様で一安心だ。問題はゼロが行政特区日本で何をするかだ。もしゼロがルルーシユなら、僕は ）

（ライアーお兄様は本当にライさんとそっくりでした。でも、雰囲気少し違いましたし、本当にライさんなら私のことを覚えているはずですからやはり人違いなのでしょう。そう言えばドウ卿とゼブルさん、それに黒の騎士団のマックスさんはまったく同じ人のよう感じます。皆さん違うような雰囲気を感じていらっしやりますが中心はまったく同じ、強い意思と優しさを持っています。ユフィ姉さま、姉さまの悲願だった行政特区を必ず成功させます。お兄様、お母様、どうか私の事を見ていてください）

（さて、ツヴァイをやっていたマックスが帰ってきたから俺はゼブルとツヴァイを両立してマックスにはマックスをやってもらおう。それにしても行政特区日本か、ユフィちゃんに教えてあげるか、喜ぶだろうね。今日はやる事が多いから話せるのは明日かな？ ガーベスちゃんのところにも行ってあげないと。俺って多忙だな

次回ゼブルと百万のキセキ お楽しみに）

第五十話 次本編 8 ゼブルと百万のキセキ

小さな個室。

そこには5人のラウンズとその他3人が画面を見つめている。

「つながるみたい」

ロイドがそう言うと画面にゼロが映る

「ほう、ナイトオブラウンズが5人も。しかし、ドウ卿と総督の姿がないようだ」

ゼロが周りを見回す

「これは事務レベルの話だ。それにドウ卿は忙しい身だからな」
スザクが堂々とゼロに言う

「（本当はスザクがツヴァイに言わなかったただけの様だが。スザクはツヴァイが嫌いなのか？）」
ツヴァイに対してのスザクの態度にライを始めとする全員が疑問を持つ

「で、黒の騎士団の意見は纏まったのか？」

「こちらには百万人を動員することが出来る」

「百万人!？」

数の多さにセシルとアイネが声を出して驚く

「（日本独立を掲げイレブン達から絶対の支持を受けているゼロだと考えれば当然といえば当然か）」

ライは冷静に考える

「ただし条件がある。私を見逃して欲しい。とは言え君達にも事情があるだろう。ゼロを国外追放処分にするのはどうだろうか？」

「黒の騎士団はどうするつもりだ!？」

スザクが座っていた席から立ち上がる

「捨てる気だろう。自分の命だけを守って」

「エリア特法12条第8項。そちらを適用すれば総督の権限内で国外追放処分は執行可能です」

ローマイヤがスザク達のほうへ向き眼鏡をかけ直し

「ミスローマイヤ、ゼロを見逃せと言っんですか？」
スザクが眉間に皺を寄せる

「法的解釈を述べたまでです」

「（言わなくいいものをペラペラと言うとは）」
ライがため息を吐く

「どうだろう？式典で発表してもいい。君たちにとっても悪い話ではないだろう？」

「たしかに悪くない。トップが逃げたとなれば黒の騎士団は空中分解するだろうしな」

「仕方ない。ゼロは国外追放処分だ」
スザクは敢えてゼロの誘いに乗る

「ツヴァイ殿にも聞いたほうがいいんじゃないか？あの方なら何かいいアイデアがあるかも知れないぞ？」
アイネがスザクに聞く

「ツヴァイも多分同じ意見だと思うぞ。ゼロが消えればこのエリアの脅威は無くなったと言っていていいからな。勿論俺もスザクの意見には賛成だな」

ジノがスザクの肩に手を回す

「寛大な処置に感謝する。では、式典で会おう」
通信が切れる

「では、私は仕事に戻らせていただきます」
ローマイヤは何事も無かったかのように部屋を出て行く

「ライ、僕の意見は間違っていると思うかい？」
結局一言も喋らなかつたライにスザクが聞く

「いや、このエリアのことを考えるとスザクの決定は正解だ。だが」

「旦那が何を考えているのか、だろ？」
通信が切れたいたはずの画面にマックスが映っている

「マックス！」
一同例外なく驚く

「こいつがか？」
ジノがマックスを指差す

「黒の騎士団特殊零番隊副隊長のマックスだ。って、ツヴァイと小さい総督はいないのか？まあ、そのほうが都合はいいがな」

「お前はゼロの考えを知っているのか？ゼロはお前たちを裏切ようとしているんだぞ？」

スザクが挑むような目つきでマックスを見つめる

「別に旦那さえ生きていればどうにでもなるからなら。それに旦那が黒の騎士団を解散したら俺は昔みたいに情報屋をやるだけだ。ここだけの話だが俺は日本解放にあまり興味は無い。興味があるのは旦那だけだ。だから旦那が面白くなかったら黒の騎士団から離れる」

「案外冷めてるんだね」

ロイドがマックスを面白そうに見つめる

「オマエ等だって愛着の持っている正義のヒーローが本当はゲス野郎だったらどうする？ 蔑むか？ 貶すか？ 俺はただ見放すだけだ。何もいう気は無い。まあ、旦那がそんな奴だとは思っていないけどな」

「で、お前は何のようさで通信してきたんだ？」
アイネが舌が回るマックスに冷静に聞く

「おっと、忘れてたぜ。ラウンスに就任したオマエ等3人を祝いな。まあ、枢木スザクは予測してただけに準備は出来ていたんだが譲ちゃんとライは超予想外だったもんでなあまりいいのは用意できなかったが我慢してくれ」

横に置いてあった袋を自分の膝の上に置いた

「初対面なのに随分馴れ馴れしいな」
ライがマックスを見つめる

「そうだな。じゃあ、これからはライアー陛下様と呼んでやるよ」
マックスは別段気を悪くせずニヤニヤしながらライを見る

「？ 僕は皇帝じゃないぞ？」
陛下と言う単語に不信感を抱く

「今はな。おいおい、そんなに睨むなよ枢木スザク。オマエが気にしていることは出来るだけ避けてやるから安心しろ。(って言うても、オマエはライが1世紀以上前のブリタニアの皇帝だったって事を知らないだろうけどな)」

「(この男はライが記憶を換えられていると知っているのか？いや、そんな筈は無い。だが)」
スザクは不敵なマックスを射殺さんとはかりに見つめる

「それよりオマエ等3人には俺から就任祝いをやるうってんだ。こういう時はありがたく貰っておけ。タダだしな」
そう言うのと近くの白い袋を取り出した

「まずは嬢ちゃん。オマエはハンマーの使い方が下手だったから俺が書いた『サルでも出来るハンマー上達法』をやる。これで勉強で

もしろ」

薄めの本の表紙にはアイネの顔が貼ってあるサルがゲイラントに装備されている金槌型ハンマー『イクスプロージョン』を持って写っている

「ハツハツハ、サルだつてさ！」

それを見たジノが腹を抱えて笑う

「笑うな！」

アイネが顔を赤くしながらジノを睨む

「こんな表紙だが中はちゃんとしてるんだぜ？まあ、見てからのお楽しみだな」

ペラペラと本の中を少し見せる

「！ 今のはギリ・モーガンじゃなかったか！？」
今まで腹を抱えて笑っていたジノがハツと気づいた

「誰？」

ロイドやセシルは知らないようだ

「現ナイトオブワンのビスマルク・ヴァルトシュタイン卿の師匠であり百年に一人の天才と謳われた方だ。歴代最年少でナイトオブワンになるはずだったが寸前で自主引退。その後数年はヴァルトシュ

タイン卿を始めとする当時の若くて優秀な軍人に指導をし、更に十数年後に放浪の旅に出て今は生死不明の大先輩」
ジノが興奮した顔で言う

「よく分かったな。あのジジイ辺鄙な場所に住んでてな探すのに苦労したんだぜ。オマエ等なら分かるだろうがあのジジイが俺に教えてくれやがったもの全てがこの中にあるって事だ。まあ、ハンマーの使い方だけだな」

「おいおい、そんな高名な人の秘技が書いてある本なんて市場に出たら大変なことになるぞ」

「そんなすごい物を何故僕に？」
嬉しいような不安なような表情でマックスに聞く

「何だかんだで嬢ちゃんとは付き合いが長いからな。で、次に枢木スザク。オマエにはこれだ」
その本を横に投げ置き、白い袋から今度は白い便箋を取り出す

「手紙？」

「ああ、この名前読めるか？」
レンズの部分に近づける

「!?!? それはユフィの!」

『ユーフェミア・リ・ブリタニアから親愛なる枢木スザクへ』と書かれている

「そう、ユーフェミアがオマエに書いた手紙だ」
マックスがニヤニヤと困惑しているスザクを見つめる

「偽物だね」
ロイドがつまらなさそうに言う

「残念だが本物だ。字を見ればオマエには分かるだろ？」
マックスが自信満々に聞く

「見た限りでは本物だ」
スザクは字を見つめ、一呼吸を置いて言う

「しかもブラックリベリオンが失敗し、自分が死ぬと分かって書いた手紙だ。ちゃんと読んでやれよ」
同じく手紙を横に置く

「どうやってそんなものを？」
アイネがスザクをチラリと見て聞く

「俺とユーフェミアは何かと縁があっつてな。今はそうとしか言えな

いから我慢しろ」
マックスも笑みを消し少し真面目な顔で言う

「（やはり、この男は恐ろしい。何がってこの底知れなさが恐ろしい）」

ライがマックスの秘密の多さと質に少なからずの恐怖心を抱く

「そして陛下様にはオマエには俺が書いた『新説！ひとりぼっちの王子様』だ。思いのほか多くて4冊分になっちまった」
分厚い本が4つセットでビニールに包まれている

「それって」

アイネが首をかしげる

「樞木スザクは以外は知っているとと思うがブリタニアの有名な童話だ。異国の母を持つ王子腹違いの兄弟に苛められたりと色々あって結局はひとりぼっちになる話を俺が改造した話だ。ちゃんと話になつてるし、著作権も大丈夫だから安心しろ」

「そんなものを何故ライに？」

「確かに他の2つの品に比べると見劣りするな」

アイネとジノが聞く

「そんな物って言うてるがよ。1つ聞くぞ？ひとりぼっちの王子様

の作者をオマエ等は知っているのか？」
マックスがため息混じりで聞く

「そう言えば、作者までは知りませんね」

「俺もだ」

皆が首を横に振る

「教えてやるが原作名は『孤独なる皇子』。作者は初代ブリタニア皇帝、リカルド・ヴァン・ブリタニアだ。本当はもつとドロドロした話だったんが大幅に加筆修正された結果が『ひとりぼっちの王子様』だ」

「！ 初代皇帝陛下がお書きになったのか！？」
全員が息を呑む

そして1つの疑問が生まれる。

ブリタニア貴族であるジノやアイネ、アーニヤやロイドがその秘密を知らないのに何故このマックスは知っているのか。

「ああ、驚いただろ？だが、おかしい事もある」
本や手紙を袋の中に戻しながら言う

「おかしいこと？」

「初代皇帝リカルドが即位したのは皇暦1813年。死んだとされ
たてんのが1826年。だが、話が書かれたのは1889年だ」
明らかに不自然な時間差

「じゃあ、書いたのは違う奴なんじゃないのか？」
もっともな質問を出す

「オマエは馬鹿か？違うヤツが書いたんなら別に隠す必要は無いだ
ろ。そこから先は少しばかり複雑だからジブンで考えろ。そしてラ
イ、さっきのがヒントだ。そして答えはこの中だ」
してやったりな顔でライを指差す

「？」

ライは意味が分からず困ったような顔がする

「とにかく譲ちゃんにはハンマーの使い方の本。枢木スザクにはユ
ーフェミアの手紙。哀れな陛下様には俺の書いた本だ。楽しみに待
ってるよ」

その表情に少し残念そうにし、さっさと通信を切る

「何なんだろうね。あの人」

行政特区の会場には溢れんばかりの人で埋まっている

「こちらはシズオカゲットー行政特区日本予定地です。まもなく始まる式典に立ち会おうと大勢のイレブンが集まっております。百万人を超えているため身元確認などは式典後となりますが同時にこの動員数がイレブンにとってゼロの言葉が重い事を感じさせます」
ナレーターが小型飛行機の中から状況を説明する

「しかし、そのゼロはイレブンを裏切りようとしている」
ジノがトリスタンに乗り込む

「だが、暴動が起きまないか？」
ゲイラントの中でアイネが聞く

「ライがその時は肅清の大義名分が立つから大丈夫だ、だってさ。
あつ、ただしこちらからは先に手を出すなよ」

「分かった。それよりツヴァイ殿はどうしたんだ？姿がお見えにならないようだ」

「少し用事があると言っていたがすぐに来るらしい。俺たちは上空警護だし探せばいい」
そう言つとverfに換え空へ飛ぶ

「（全くこんなときに何故いないんですか！ コーネリア様見てい

らっしゃいますか？ユーフェミア様の悲願が今叶おうとしています。私に出来ることはこの式典を成功させること。ユーフェミア様、腹違いとは言え貴女の妹であるナナリー様に加護をお与えください」

視点 変更 ライ

行政特区が始まる前にナナリーが会場の一番前で演説をしている。

右隣にはスザクとアリス、左隣にはローマイヤと更に数メートル先にはライが立っている。

「日本人の皆さん。行政特区日本へようこそ。たくさん集まっています。ただきとても嬉しく思います。新しい歴史のためにどうか力を貸してください」

ナナリーが前に立っているマイクに声を通す

「それでは式典に入る前に私たちがゼロと交わした確認事項を伝えます。カラレス前総督の殺人など指導者の責任は許し難い。よって、エリア特法12項第8項に従い。ゼロだけは国外追放処分とする」
ローマイヤがナナリーのマイクを取り説明を始める

「ありがとう、ブリタニアの諸君。寛大なる処置痛み入る」
ナナリーを映していたモニターにゼロが映る

「来てくれたのですか？」

目が見えないナナリーは首を振りどこにいるか確かめようとする

「（さあ、どうする？暴動なら不穏分子を片付けるいい機会だ）
ヴィンセントに乗ったギルフォードが参加者を上空から見つめる

「姿を現せゼロ！自分が責任を持って君を国外に追放してやる！
スザクがナナリーの前に立ち周りを見る

「人の手はかりない。それより、枢木スザク君に聞きたい事がある。
日本人とは民族とは何だ？言語か？土地か？宗教か？血のつながり
か？ 君はどう思う？」

「それは 心だ！」

答えはすぐに出た

「私もそう思う。自覚、規範、矜持。つまり、文化の根底となる心
さえあれば住む場所が異なるうとそれは日本人なのだ」

「それとお前だけが逃げる事とどう言う関係が」
「（時間だ）」

変装した黒の騎士団のメンバーが持っていたバックから煙が吹き出る

「何が起こったんです?」
煙の噴出する音に気づく

「ちょっとヤバそうだから避難するわよ」
アリスが車椅子のハンドルを握り早足で奥へと避難する

「（流石にツヴァイの娘だけあって行動が早いな）アーニヤ、念のためナナリー総督と騎士の少女と共に行ってくれ」
ライは落ち着き払った様子でアーニヤに言う

「分かった」
アーニヤも早足で後を追う

「仕方ない。全軍鎮圧準備にかかれ!」
ギルフォードが命令を出す

「イエス・マイ・ロード」
サザールランドの内蔵式対人機銃の銃口が下を向く

「待て!まだ相手は手を出してはいない」
それを見たスザクが大声で止めに入る

「（確かに。これもゼロの作戦かもしれない。だが、こうなっては

ゼロが直接出てこなければ」
スザクの後ろで状況を見つめるライ

煙が晴れローマイヤの前にゼロが立っていた

「おや、会場内に最初からいたのですか　な!？」
正確にはローマイヤの前にゼロ達が立っていた

「ゼロが!」

全ての参加者がゼロの仮面と服装で並んでいる

「この手があつたか!」

ゲイラントに乗っていたアイネが驚愕の表情で下にいるゼロ達を見る

「全てのゼロよ! ナナリー総督のご命令だ! 国外追放処分を受け入れよ! どこであるかと心さえあれば我等は日本人だ! さあ、新天地を目指せ!」

「ゼロの皆さん。新天地へ行きましょう!」

「皆で国外追放されようぜ! なんとって俺等はゼロなんだからよ!」

「そつだ、国外追放だ!」

黒の騎士団員であろうゼロが口々に周りのゼロ達に言う

「うるたえてはいけません! 百万人を移動させる手段なんて「公安管理室から報告です」公安?」

ローマイヤがゼロ達に言いかけるが途中で来た軍人の1人がローマイヤに耳打ちをする

「あれは！ 中華連邦が申請していた解氷船！」
周りに器具を纏った大きな氷がゆっくり近づいてくる

「申請者は式典開始前にこちらを離れたため確認に時間がかかってしまいました」

「（あのシンクローとか言う男か。ただ者ではないと思っていたがここまでとはな）」
それを遠くで聞いていたライがフーッと息を吐く

「あれに乗るのか？」
「でも、氷だよ？溶けちゃうんじゃない？」
数人のゼロが不安そうに言い合う

「大丈夫よ。周りの器具がばっちり氷をガードしているから」
ラクシャータと思われるゼロが他のゼロ達に説明をする

「一先ずゼロだ！本物のゼロを探せ！」

「しかし、本物といわれなくても」

ゼロばかりの場所からゼロを探せとは難易度の高すぎる命令に困惑する

「枢木卿、百万の労働力を失くすのでしたら見せしめとしてローマイヤが腰から銃を取り出す」

「待つてください！ゼロ！皆に仮面を外すよう命令しろ！このままだとまた大勢死ぬ！」
スザクが大声で訴えるが画面のゼロは微動だにしない

「無駄ですよ枢木卿。正体を誰も知らない以上このモニターに映るゼロは何の意味も無っていないんですよ」
ゼロの1人が壇上の上ってきた

「ゼロ！」

ローマイヤが上がってきたゼロに銃を向ける

「面白い事をしますね。地面にあらかじめゼロのコスチュームを埋めておきスモークの噴出時に一斉に着替えるですか」
それを気にせず、マントについた埃や土を払う

「お前は、ツヴァイか？」

ライがローマイヤの前に立ち銃を下げさせる

「正解ですよ、っと。ゼロの服装は記念に頂きますね」
物凄い勢いで回転し、一瞬でいつものラウンズの服装と角付きの仮面になる

「いつからいたんだ？」

「誰かさん達が某黒い仮面のリーダーとの秘密話を俺に教えてくれなかったあたりですかね？」
スザクを見て微笑む

「（最初からか）」

「枢木スザク！これは反乱だ！攻撃命令を」
ギルフォードが攻撃命令を待つ

「違う。これは戦う以外の方法で」
1人のゼロが弱弱しく講義する

「（ゼロを見逃すという事は許せとこののか？お前ごと百万人を）」
「（黒の騎士団がいなくなればエリア11は平和になる。ナナリーの手を汚すこともなくなる）」

「（だが、これは卑怯な騙まし討ちだ）」

「（命令しろ。ゼロを見逃せと）」

「（命令するんだ。ゼロを討てと）」

双方無言だが明らかに会話を交わしているように感じる

「死になさい。ゼロ」

判断を下そうとしないスザクを一瞥しローマイヤが近くのをゼロに向かつて銃を向ける

「（！ そうだ！ ユフィもナナリーの許そうとしていた！ 僕も！）
スザクが決意を固めローマイヤを止めようとする

「お止めなさい、ローマイヤ女子。ゼロの皆さん！ 不穏分子である
貴方たちはこのエリアから出て行ってもらいます」
しかし、ツヴァイが先に動き銃を奪い取る

「ドウ卿！ 何を言っているんですか！？」

「ゼロは国外追放処分です。約束を破れば他のエリアの人達も俺たちブリタニアを信じてくれなくなりませう。それに国策に賛同できぬ人間を残してどうなさるおつもりですか？」

「この百万人はブリタニアを侮蔑したのですよ？」

「その様な不穏分子だからこそなおさら追放すべきなのでは？」
やれやれと肩を竦める

ゼロ達が歓声を上げ歩き出す

「！これは？」

スザクの目の前に大きな箱が投げられる

その箱の上には

「『枢木スザク。オマエが行動する前にツヴァイの奴が行動したのはオマエの風当たりを弱くさせるためだ。あとで礼でも言っておくれよ。まあ、残った名誉達を導かせるためだと思っけどな。せいぜい頑張りな。Byマックス』」
と書かれている

「やはりな」

それを見たライは頷きローマイヤに連れさらわれているツヴァイの見る

「ライも気づいていたのか？」

スザクもツヴァイが救ってくれたと気が付いていたらしい

「ああ、スザクがミスローマイヤを止めようとするのを見て先に動いていた（瞬きすれば見逃してしまいそうなほど早くだがな）」

「スザクが止めたらエリアの人間だからと言われるのが落ちだからか」

ゲイラントから降りていたアイネがスザクを見ながら言う

「（結局僕は何も出来なかった）」

「これからの事だが。さつきシュナイゼル兄様から連絡があつてな。このエリアを離れることになった」
ライがスザク達に言う

「次はどこなんだ？」

視点 変更 ゼブル

数時間後、アッシュフォード学園のゼブルの部屋

「中華連邦だよ」

コツテリ絞られたのか少しぐったりしている

全てが終わると無限次元空間製作で部屋に着きVVと画面越しに話を始めた。
インフィニットソリッドメイクス

「ふーん、大変そうだね。他の人を護るのに忙しそうだけど僕のこととはいつになったら護ってくれるんだい？」
皮肉を笑顔で言う

「逆にピンチの時間が無いじゃないか。それに、念のため保険としてハッピーもいるだろ？」

vvの肩に乗っているハッピーを指差す

「この鳥は何の保険になるんだい？」

目だけ動かしハッピーを見る

「（舐めんじやないわよ！）」

バタバタと羽を動かし講義する

「vvに何かあったらリアルタイムでハッピーが俺に教えてくれる。そしてハッピーは目印としての役目もあってな。ハッピーがvvと一緒にいる限り俺はvvを見失わないってことだ」

「便利なものだね」

ピンっとハッピーを指で弾く

「（乙女の柔肌に何すんのよ！）」

お返しとばかりにvvの頭をくちばしで突く

「で、学校のほうはどうなんだい？」
あまり気にせずに続ける

「ん？楽しんでるぞ。そろそろ学園に今ラウンズが2人いて、その内の1人がツヴァイ・ドウの時の俺には好意的なんだがゼブル・オウサルトの時の俺には敵しく当たるんだよ。これが何だが面白くな」
「にやけながら嬉しそうに言う」

「ふーん、それよりさ。次はいつ帰ってくるんだ？」
表情を変えないが少し不機嫌そうに聞く

「せっかく中華連邦に行くからそのついでにどうかと考えているんだがな」

「それは止めたほうがいいよ。他の人間にバレると色々面倒だからね」

VVは首を横に振る

「そうか？じゃあ、またの機会に行くな」

「うん、楽しみに待ってるよ。あっ、そろそろ。1つ面白いことを教えてあげるよ」

気を良くしたのかVVが口早に言い出す

「何だ？」

「僕が不老不死のコードを持っているのは知ってるよね？このコードって符号や法則なんて意味のcodeって書くんだけど、実は紐や

電線って意味のCordも含まれているんだよ」
前から準備していたのか2つの単語が書かれた白い紙を見せる

「……」

少し考える

「僕は神といわれる存在と繋がれてるってこと」
それを見たvvが微笑む

「まあ、よくわかんないが名前は符号だよな」
考えるのを諦める

「コードを受け継いで最初に誰かにギアスを与えた瞬間から脳に新しい名前が浮かぶんだよ」

「そつえば、いつになったら本名を覚えてくれるんだよ」
思い出したとばかりにゼブルがvvに聞く

「いつかね」

「またそれか」

「そつちはもう遅いんでしょ？そろそろ寝なよ。いつも送ってくれている活動報告で大体のことは分かるしね」

話を変え通信を切ろうとする

「そうか、ありがとな」

軽く手を上げる

「うん、じゃあ、また」

「ああ、（うまく話をそらしたな。そう言えば俺の口調ってVV限定で悪くなるな。何なんでだろな）」

第五十一話 次本編9 10 ゼブルと朱禁城の花嫁強奪計画(前書き)

3話分を2話にしました。

第五十一話 次本編9 / 10 ゼブルと朱禁城 の 花嫁強奪計画

中華連邦、世界最大の人口を誇る連邦制国家。

国家の象徴である天子が幼いため、国政を仕切っているのは実質大だい宦官かんがんと呼ばれる官僚の頂点で、それ故大宦官を歯止めする人間がいなかった為大宦官が専横を極めていく。それに従う少数の支配層のみが裕福を得、その他大勢の人民は重税で苦しめられていた。

日本を脱出した黒の騎士団が向かったのはこの中華連邦である。

大宦官は日本人のために黄海に浮かぶ潮力発電用の人工島、蓬莱島を貸し与えた。

しかし、この蓬莱島に到着してすぐに黒の騎士団にはまた新たな危機が迫っていた。

「何？政略結婚だと！？」
ゼロが机を叩く

「皇コンツェルを通して式の招待状が届いたのですけれど、新婦はこの中華連邦の象徴である天子様。私を友人として招きたいと」
神楽耶が招待状をゼロに渡す

「新郎はブリタニアの第一皇子オデュッセウス・ウ・ブリタニア。次期皇帝の最有力候補でもあるな」
マックスは斑鳩いかるがのモニターに写真を写す

「（最悪のケースだ。この手を打たれる前に天子を抑えるつもりだった。あの凡庸な男が いや、この後ろにいるのは貴方ですか。シユナイゼル・エル・ブリタニア）」
ゼロが忌々しげに腹違いの兄の顔を思い浮かべる

「何心配してんだよ？俺達はブリタニアと関係ないだろ？国外追放されたんだからさ」
玉城の発言に幹部たちが頭を悩ます

「あの、罪が許されたわけではないんですが」
「それに政略結婚ですし」
「中華連邦が私たちを攻撃してくる可能性だって」
蓬萊島で入団を希望し、新しく黒の騎士団に入った3人の女性オペレーターが口々に言う

「じゃあ何だ？黒の騎士団は結婚の結納品代わりか？」

「あら、上手いですね」
「使えない才能に満ち満ちているな」
これは集まっている幹部たち満場一致で同じく思う

「暢気のんきこいてる場合か！大ピンチなんだぞ！」
玉城がさっきまでの緩みきった顔から真面目な顔になる

「だから、それを今話し合ってるんだよ」
温厚な扇も苛立っている

「オマエもう喋るな」
マックスの厳しい一言

「何！」

「しかし、ブリタニアでは珍しい温厚な男だと思っていたが南並みのロリコンだったとは」
椅子に浅く腰掛け机の上に足を置く

「へ？南さんってそうなんですか」
隣に座っていた眼鏡をかけた新入オペレーター（以降日向）が意外そうに聞く

「知らなかったのか？いないから言うが小さい総督の演説のときに顔赤くしてたぜ」
ちなみに南は今、子供たち（女の子）と楽しく遊んでいる

「あ、それ他の団員も噂していました」

髪に3色団子みたいなものが付いている新入オペレーター（以降水無瀬）も頷く

「まあ、流したのも俺だけだな」

「（ギアスも視野に入れるべきか。だが、南がナナリーと会う機会は皆無。いや、ナナリーがそのような目で見られていることが問題であって）」

仮面の中では眉間に皺を寄せ本気で考える

「よく見てるんだな」

杉山が関心したように言う

「情報はそういう所から出てくるときがあるからな。特に千葉なんかは分かりやすいな。現に朝比奈はもう気づいているっぽいかな」

視線を藤堂に向ける

「？」

「あらら」

「貴様！」

藤堂は視線の意味に気づかず、朝比奈は面白そうに眺め、千葉は持っていたお玉でマックス攻撃する

「マックスさんはいらっしやいますか？」

扉が開き一般の女性が入ってきた

「んじゃ、俺は用事があるからこれで」

その開いた扉の前で一回敬礼すると走って逃げる

「待て！ くっ！逃げ足が速い」

千葉が見るともう見えないうところへ言っていた

「マックスはどこに？」

置いていかれた女性に扇が聞く

「炊事当番を手伝ってくれているんです。すごくお手なんで助かっているんですよ」

「意外だな」

藤堂も驚く

「他にも子供たちと嫌々言っていますですが遊んでくれますし、困ったことがあったときには面倒そうにですがマックスさんから手伝ってくれたり あ、すみません。私はこれで
頭を下げ、戻っていく

「家庭的なのね」

井上が感心したように言う

「何だかマックスさんのイメージが崩れてきました」
ロールヘアな新入人才ペレーター（以降双葉）がもやもやと頭の上で
マックスを思い浮かべる

「私は南さんの好感度が崩れました」
日向が大きなため息を吐く

視点 変更 ツヴァイ

中華連邦の首都洛陽らくやうの中心にある朱禁城と呼ばれる天子の居城内の
迎賓館で祝賀会が行われている。

祝賀会の参加者は主にブリタニアの貴族と中華連邦の富裕層と支配
層の中でも上位の人間だけ

そして、館の真ん中には太く長い絨毯があり、その絨毯の先には6
人が使っても十分な大きさのテーブルがあり、そこには温厚ぬくほそうな
男（以降オデュッセウス）と小さな白髪はくはつの少女（以降天子）の2人
が座っている。

優しく微笑むオデュッセウスとは対照的に天子は今にも泣きそうな
顔を必死で抑えている。

そして、この祝賀会にはツヴァイを始めとするエリア11にいたラウンズもいた。

黒の騎士団が中華連邦内にいる事を考慮し、全員で来ていた。

「え、ドレスですか？」
アイネが困ったように聞き返す

「俺が誕生日プレゼントにお渡ししたものです。実は気に入っていませんでしたか？」
アイネがまだラウンズになる前に誕生日プレゼントとして渡したオレンジ色のドレスの事を言っている

ちなみに1着1千万以上。

「そんな事ないです！すごく嬉しかったです。僕には似合わないかと」
手を大きく振る

「俺のセンスが悪いと？まあ、初めてアーニヤ先輩と会ったときにも言われましたが」
落ち込むふりをする

「違います！その、僕みたいなおしとやかとは無縁な人間にあの服は素晴らしすぎると言うか何というか。それに今回はラウンズとして来ているわけでした」

「残念ですね。ドレスを着たアイネ卿を見てみたいのですが
まじまじとアイネを見つめる

「そ、そうですか？その、それほど気になるのでしたら、あの、いつか2人つきりの時にでも。いえ、他の人に見せるのはちょっと抵抗がありました」

嬉しさと恥ずかしさが入り混じった表情もツヴァイに向ける

「それはそれは、楽しみに待ちましょう」
アイネに隠れてしてやつたりな笑顔をする

「神聖ブリタニア宰相シュナイゼル第2皇子様ご入来！」

白い衣装を着たシュナイゼル、その隣にはピンク色のドレスを着たニーナが一緒に歩いてくる

ニーナは眼鏡を外し化粧をしているので学園内での暗い雰囲気はな

い。

「（ニーナ？ゴメン、なんかすっかり忘れてた気がする）」
ロイドの婚約者として一緒に参加していたミレイがニーナを見て、
少し頭を下げる

「あの子誰？」

「シュナイゼル殿下のお抱えの研究チームのチーフじゃない？」

「身の程も知らずに」

周囲から陰口が洩れる

「しつかり、ユフィはもつと堂々としていたよ」
シュナイゼルが堂々とするよう促す

「はい」

ニーナもシュナイゼルの真似をする

すると2人の前に

「お久しぶりです。皇帝陛下からこの地ではシュナイゼル殿下の指
揮下に入るようにと」

ジノを含めた6人が道の真ん中で方膝をつき、左腕を前に、右腕を
後ろにしブリタニア特有のポーズを取る

「聞いているよ。ラウンズが4人もいるとは頼もしいね」

ジノ達を見て驚嘆したように言う

「4人？」

スザクが聞き返す

「言っていないませんでしたね。俺とライアー殿下は別系統なんです。ライアー殿下は俺の指揮下に入っているんですが俺はシュナイゼル殿下の指揮下には入っていないんです。つまり独自で動く権限を頂いたと言う事です」

ツヴァイが横を向きジノ達に説明をする

「ツヴァイとライだけ？」

アーニヤがライとツヴァイを見る

「理由は俺たちも聞かされていません（まあ、ライのギアスに対する保険としてだろうけどね）。ですが、一応シュナイゼル殿下の指揮下に入れさせていただく事にはなっています。もしもの時は独自に動きますが、そのとき以外はシュナイゼル殿下の手足となりましよう」

「それは嬉しいがここは祝いの場だ。もっと楽しんでくれないと」

「それもそうですね。失礼しました」

そう言い6人共に立ち上がる

その後はニーナはスザクとアイネと少し世間話をする、ミレイに気づき話をするためベランダに出る。

「皇コンツェルン代表。皇神楽様ご到着！」

「（神楽耶？ 何！？）」
気になる単語を耳にしたスザクが後ろをむくと

神楽耶と共に来たのはカレンとマックス、そしてゼロ

「ゼロ！堂々と」

薄ピンク色の髪をしたニューハーフ（以降カノン）がゼロに気づく

すると周りから

「誰が招いたんだ？」

「テロリストなど」

と洩れる

「紅蓮のパイロットもいるじゃないか。で、隣がマックスか」

「（カレン）」

スザクとアイネが少し悲しそうにカレンを見る

「（！ 私の夢に出てきて私を呼びかける女か！？）」
ライがカレンを呆然と見つめる

「衛兵！」

大宦官の1人が大声で叫ぶ

ゼロやマックスの周囲を槍を持った男たち囲む

「おいおい、招待されてたんじゃないのか？」

マックスが面倒そうに神楽耶に聞く

「おかしいですわね。招待状に書かれている人数制限は確かに4人
までですのに」

招待状を確認しながら答える

「いや、明らかにゼロのせいでしょう」

その2人を見かねたカレンが言う

「^{いさか}争いは止めませんか？せっかくの祝いの席ですし」
いつの間にか近づいていたツヴァイが衛兵の1人の肩に手を置く

「しかし」

衛兵がどうしていいのかわからず小柄な大宦官（以降小さい大宦官）
のほつを見る

「ドウ卿の言うとおりですよ。しかし皇さん、明日の婚姻の儀ではゼロの同伴はご遠慮願えますか？」
それに追い討ちをかけるかのようにシュナイゼルが近づく

「それは致し方ありませんね」
止むを得ず了承する

「宰相閣下が仰るのなら。退け！」
小さい大宦官が手を振ると衛兵たちが槍を一回立て小走りで行って

「（シュナイゼル。目の前に姿を晒したな。ふん、流石に警戒したか）」
ゼロが左目の露出させようとしたがスザクがシュナイゼルの前に出て来たので寸前で止める

その瞬間

物凄いスピードでマックスツヴァイが動いた。

マックスはツヴァイとスザクの首元にサバイバルナイフと靴のつま先に仕込んでいた仕込みナイフの切っ先をシュナイゼルの首元に向け。

ツヴァイはゼロとマックスに銃を向ける。

「「!!!」」

ゼロとスザクは冷や汗をかく

周りにいたカレンや神楽耶、アイネを始めとするラウンズの面々も一瞬のことで何が何だか分からず、数秒呆然と見つめる。

「急に何をするんですか？」

先に口を開いたのはツヴァイ

「いや、今のは絶対枢木スザクが悪いだろ？旦那を一度捕まえた男がこんな至近距離にきたら体が動いちまう」

スザクをチラリと見てすぐにツヴァイに視線を戻す

「それもそうですね。枢木卿、それにシュナイゼル殿下とゼロも1歩下がってもらえますか？」

「ふむ」

「仕方ないか」

「……」

3人はスツと1歩下がる

それを見た2人は得物をそれぞれの体から離す。

「す、す、みませんが　そ、その危険物を回収させていたただた
けませんか？」

衛兵の1人が震えながらマックスとツヴァイに近づく

「おっと、これは失礼しました。後ほど返していただけるんですよ？」

「も、勿論です」

首もすごい勢いで上下に振る

「それでしたら。どうぞ」

衛兵が持っている箱の中に銃を入れる

「ほらよ」

マックスも持っていたサバイバル2本と靴に仕込んでいた仕込みナイフを外し同じように箱に入れる

「えっと、これだけですか？」

他にもあるのではないのかと疑うように聞く

「俺が持参した武器はこれだけだ。その気になればテーブルクロスも武器になるから大丈夫だ」
シッシツと手を振る

「（別に大丈夫じゃないんですが）」
涙目の衛兵はそのまま早足で去る

「枢木さん、いとこの私を覚えておいでですか？」
神楽耶がゼロより1歩前が出る

「当たり前だろ」

「キョウト六家の生き残りは私たち2人だけになりましたね」

「（そうでもないかな）」
マックスがライを見る

ライはブリタニア皇族とキョウト六家の皇家のハーフである。

神楽耶を除くゼロやカレン、それとラクシャータも知っている。

「桐原さん達はテロの支援者だった。死罪は免れない」

「お忘れですか？昔ゼロ様が貴方を救ったことを。その恩人も死罪
になさるおつもり？」

ゼロとは違う意味合いでよく滑る舌でスザクを翻弄する

「それとこれとは」

「残念ですわ。言の葉だけで人を殺せたらよろしいのに」
スザクも何か言い返そうとするがその隙さえ与えない

「シュナイゼル殿下、ひとつチエスでもいかがですか？私が勝つたら枢木卿とライアー殿下を頂きたい。神楽耶様に差し上げますよ（スザクさえいなければここにいる全員にギアスをかけられる。それにライを一先ずこちらに置いておけばあの男のギアスを解除出来る方法を見つけることが出来るかもしれない。そうすれば自然にこちら側に戻ってくれるはず）」

神楽耶が止まるのを確認するとゼロがシュナイゼルに提案する

「まあ、最高のプレゼントですわ（それにしても懐かしいですわね。遊び相手のいなかった当時重宝していましたから）」

ニヤリとスザクを見る

「！（まさか、昔の様に僕を）」

スザクはその視線の意図に気づき一瞬体がビクツと動く

「では、私が勝ったらその仮面とその包帯を巻いた彼を貰おうか」

マックスをチラリと見る

「いいでしょう」

「即答かよ。って、アンタは何で俺を選ぶ？こっちのほうが体つきもいいし楽しめますぜ？」

ガラの悪いチンピラの如く言う

「ちょっと何言ってるのよ!？」

「……」

ライがそれを見て眉間に皺を寄せる

「どうかしたのか？」

アイネが普段と違うライに心配そうに聞く

「何でもない」

口ではそう言っているが更に深く皺が寄る

「あれが紅蓮のパイロットだろ?好みだな」

ジノがカレンを見ながら呟く

「……」

ジノを射殺そうな勢いで睨む

「本当にどうしたんだ？」

ジノはその視線に気づかなかったがアイネが気づいた

「何でもない(何なんだこのイライラは!)」

さっきより苛立った様子で言う

「君の事はコーネリアとユーフェミアから聞いていてね。ずっと興味があったんだよ」

「俺にそういう趣味は無いぞ？」

変態好きで有名な男が変態じゃないはずがない。と結論付けた

「はっはっは！やっぱり君は面白い。楽しい余興になりそうだから面白そうに笑う」

視点 変更 ゼロ

シュナイゼルとゼロのチェス対決は大宦官達が念のためにと別室で行われていた。

前半はシュナイゼルが押していたがジワジワとゼロが追い上げる。

「どうです？これ以上は進めないでしょう」

ゼロが黒のキングを白のキングの2マス前に置く

「このままでは、スリーフォールドレピティションとなる」

スリーフォールドレピティション。

盤上で3回同じ局面になること。自分の番でそれを指摘すると引き分けになる。

「私も本意ではないが引き分けかな？」
ゼロが深く腰掛け直す

「いや、白のキングを甘く見てはいけないな」
シュナイゼルが白のキングを持ち上げ

「まさか！（そんなことをすれば）」

「チェックメイト」
黒のキングの前に白のキングを置いた

「それでは、ゼロが駒を進めればシュナイゼルのキングが取られてしまっ」

「わざと負けるつもりですか!？」

「問題はゼロだ」
周りはゼロがどうするかに関心が寄る

「何ですか？これは（この誘いを乗るといっことは屈服すると言っ意味だ。許してはいけない、こんな屈辱を受けることはくっ!」
ゼロは自分のキングを斜め後ろに下げる

「皇帝陛下なら迷わず取っただろうね。君がどう言う人間か少し分かった気がするよ」
すると近くにあったボーンを動かす

「（シュナイゼル、貴方はそうやって見下して！）」
ゼロが震える手でルークを動かす

戦況はどんどんシュナイゼルが有利になっていく

「ゲームはお終いだ」
いつの間にか近づいてきたマックスがチェス盤を踏み壊す

「何を!？」
シュナイゼルの横にいたライ達がシュナイゼルを後ろへ下がらせ、自分たちが盾のようにマックスの前に立つ

「……………」
ツヴァイを除いて

「ボードが壊れちゃ再戦は出来ない。シュナイゼル、オマエも一回ルール違反したんだから別にいいだろ？」
ラウンズ達から下がる素振りを一切見せず相変わらず不敵な笑みでシュナイゼルに聞く

「あれも作戦の内だが？」
シュナイゼルも悪びれもしない

「作戦であろうとルールは守れ。それを許したら俺はワイプ機能がある駒を作るぞ」

「どうだ、すごいだろ！と言わんばかりの顔で指を差す

「はっはっは！それでは勝てないな」

シュナイゼルはマックスのメチャクチャな理屈が気に入ったのか大笑いする

「だろ？」

これで終わりかと思いきや

「ゼロ！ユーフェミア様の敵！」
いつの間にか戻ってきたニーナが装飾された果物ナイフを持ちゼロに向ける

「な！？（ニーナ？）」

ゼロは椅子から立ち上がり数歩下がる

ゼロ達が来る前にミレイとベランダに行っていたので、ニーナとミレイがいる事を知らなかった。

「野蛮だな。おい」

「あんたが言うのか？」

ジノがマックスを見ながら言う

「俺は一応紳士なんだぜ？って信じてねえな。証拠を見せてやるよ
つと」

机に敷いてある白いテーブルクロスを一気に引き抜く

芸かと思つた人々はマックスに拍手を送る。

「何をする気だ？」

ライが構える

「さつき言つただろ？テーブルクロスでも武器に出来るんだよ。おいおい、別に女を傷つける趣味は無えから心配すんな」
拍手を送ってくれている人々に手を振り、引き抜いた白いテーブルクロスをビリビリと破きどんどん長くする

「いいんですか？」

アイネがツヴァイに聞く

「大丈夫ですよ。それよりこれからが面白いはずですよ。見逃さずにツヴァイがアイネにマックスを見るように言う」

視点 変更 マックス

「止めるんだ！」
スザクがニーナの腕を掴む

「何で邪魔するの！スザクはユーフェミア様の騎士だったんでしょ！？」
自分を捕まえているスザクに涙目で必死で抵抗する

「（そうだ、僕は）」
スザクの思考が一瞬止まるが

「何言いくるめられてんだよ。オマエはユーフェミアの手紙を読んだんだろ？何て書かれてたんだ？」
一本の長い布となったテーブルクロスを引きずりながらゼロの前に立つ

「（そうだった。ユフィは、例えどんな事があっても恨むなど、復讐が復讐を生むと書いてあった。全てを許せと。しかし）」
スザクは答えをまだ出せないようだ

「ユーフェミアの騎士なら分かるだろ？アイツは「テロリストがユーフェミア様を語るな！」」

マックスが何か言おうとしたがスザクの手を逃れたニーナがマックスにナイフを振り回す

「おいおい、物騒なもの振り回すんじゃないよ
クルクル回りながら避ける」

「うるさい！退かないと本当に斬るわよ！？」
一回止まり震える手でナイフを構える

「やれるもんならやってみる。どうした？まあ、そんなんプルプル震えてる腕じゃユーフェミアが腹を抱えて笑うだろうけどな」
マックスがニヤニヤとニーナを笑いながら言う

「うわああ！！！」
ユーフェミアの名前で馬鹿にされたのが悔しいのかナイフを真っ直ぐ向けたまま走り出す

「よー」
ニーナの足にマックスが足を引っ掛ける

「ぎゃっー」

転びそうになるがマックスが素早くテーブルクロスで体を縛り、近くの壁の飾りに引っ掛ける

「（流派東方不敗で教わった布での戦い方を更に俺流に改造して作った技）題名は人間芋虫つてところか？反省も込めてそこで笑われる」

手足を拘束されて吊るされているその姿はまさに芋虫のようである
周りから押し殺した笑い声が漏れる

「（すごい技だな。最初に手首を後ろで拘束し、その拘束した手首を更に腰に巻きつける。そして今度は足首、膝を拘束する。それをあんな一瞬でやるとは）」
ライはマックスの動きをしっかりと見て感心する

「（師匠なんてガーベスちゃんから貰った手編みマフラーで鉄筋コンクリートを真っ二つにしてたな）」
ツヴァイはその事を思い出すと凄過ぎる師匠たちの異常さのため息を吐く

「おい、シュナイゼル。部下の管理がなっちゃいないな」
マックスは技の出来に感心するとシュナイゼルのほうを見る

「ゼロにマックス、すまなかったね。しかし、余興はここまでとしよう。それと確認するが明日の参列はご遠慮願いたい、無論君もね」

シュナイゼルが威圧的な眼差しで2人を見る

「んじゃあ、俺は別ルートで帰るから悪しからず」

視点 変更 星刻

その翌日。

予定通り婚姻の儀が朱禁城内の教会で行われている。

誓いの言葉を言う場面で大きな音をたて、扉が開く。

その扉には星刻とその他4人の中華連邦軍が並んでいる。

「我は問う。天の心、地の叫び、人の心。何を持ってこの婚姻を中華連邦の意思とするか!？」
腰に差していた剣を抜く

「まさか、クーデターか！」
ライが立ち上がる

「血迷ったか星刻！」
太った大宦官（以降豚っばい大宦官）が立ち上がる

「黙れ！全ての人民を代表し、我はこの婚姻に意義を唱える！」
剣を構え天子の下へ走っていく

「取り押さえる！」

槍を持った衛兵が星刻に向かう

次々と星刻が衛兵を切り倒していく

「下がってください神楽耶様」

上で見ていたカレンが神楽耶を下がらせる

「よしつと」

急に現れたマックスが掛け声と共に飛び降りる

「え？マックス？作戦じゃゼロと一緒にだったはず」

「ツヴァイ殿！お得意の射撃で奴等を」

アイネが急な展開にオロオロしながらツヴァイを急かす

「それが、昨日の件でマルディーニ伯爵に厳しく言われてしまいま
してね。持ってきていないんですよ」

カノンにオネエ口調でしつかり叱られたのである

「今はそれよりも殿下たちの安全が最優先だ」
ライが素早くシュナイゼルの元へ向かう

「不忠なり！天子様を己が物にしようとは！」
衛兵の1人が星刻に言い放つ

「（確かに可笑しなものだ。飢えた民を救おうと願いつつも私は天子様のことを考えている。そしてこの行動が天子様のお心添っているかどうかは分からない）」
星刻の動きを止まる

「おいおい、何止まってんだよ？」
マックスが星刻に近づいてくる敵を倒す

「貴様は」
星刻が振り向き、マックスに剣を向ける

「オマエは何でこのクーデターを起こそうと思ったんだ？天子の為だろ？なら、止まる必要はねえだろ？」
ピシッと星刻を指差す

「（そうだ、天子様は6年前のことを覚えていないかもしれない。それでも私は命を救っていた代わりには永続調和の契りを交わしたのだ。私は心に誓って）天子様に外の世界を！！」

近づいてきた衛兵を次々と切り倒していく

「星刻！」

天子が親指と小指を立てた手を大きく振る

「（覚えておられた）我が心に迷い無し！」
晴れ晴れとした表情で天子のもとへ向かう

「（待て？マックスは当初ここには来ていなかったはず。なのに何故ここにいる？クーデターの手助けをするためか？それも考えられ
ないが）」

ライが天子のほうを見ると

「感謝する星刻。君のお陰で私も動きやすかった」
ゼロが天子の後ろに現れていた

「（やはり！）」

ライがしまった、と舌打ちをする

「ゼロ、それはどう言う意味だ？」
星刻が足を出そうとするが

「動くな！」

天子の頭に銃を向ける

「黒の騎士団にはエリア11での借しがあるはずだが？」
星刻は表情を変えずに聞く

「だからこの婚礼を壊してやる。君たちが望んだ通り。ただし、花嫁はこの私が貰い受ける」
更に銃口を押し付ける

「星刻！」

天子は涙目で星刻の名を叫ぶ

「天子様！くつ、この外道が！！」
何も出来ない星刻は罵倒するしかない

「おや？そうかい？フフフフ、フハハハハハハ！」
ゼロがそれを嘲笑あざわらう

「うわ、悪党の笑い方だな」
衛兵を適当に倒していたマックスが若干引き気味に言う

「貴様も知っっているの行動か！」
剣の切っ先をマックスに首に向ける

「俺に怒んなよ。俺は自由に暴れる許可を貰っただけだ細かい作戦なんかは聞いてなかった」
降参とばかりに手を上げてる

すると、屋根から黒いナイトメアが降りてきた

「ナイトメアまで用意していたのか？」
星刻が現れたナイトメアに驚く

「スタコラサツサ」
マックスはその隙に効果音を口で言いながらどこかに走っていく

「まさか斬月ざんげつの初仕事が花嫁強奪の手伝いとはな」
黒い機体（以降残月）の中にいる藤堂が少し遺憾そうに呟く

「藤堂。シュナイゼルを」

「分かった。もう来たのか」
藤堂の残月が上から伸びてきたシュラツシュハーケンを対ナイトメア戦闘用日本刀（以降制動刀）でそれを防ぐ

「殿下は渡さない！」
上空からランスロットが接近する

「スザク君、君の相手には私になる」
藤堂も上空に上がる

「ゼロ、こちらは予定通りです」
青くカラーリングした機体（以降あかつき）に乗った千葉が大きなコンテナを運んできた

「よし、サードフェイズに移行する」
そのコンテナの中には紅蓮可翔式が入っている

「マックスは？」
カレンが神楽耶を抱きかかえたまま走ってきた

「我々とは別行動を取る。と言っても何をするか私も知らないがな」
コンテナの中にあつた椅子に深く腰掛ける

「いいんですか？」

「彼は既に十分な仕事をしてくれた。それにいつも私の期待以上の成果を上げている。今回も何か仕掛けているのかも知れない」

「ゼロ様にそこまで心寄せをいただけるなんて」

揺ぎ無い信頼に神楽耶が羨む

「（既に？）」

引つかかる単語を心に留め紅蓮に乗り込む

すぐにコンテナの中に入る。

千葉の乗る暁がゼロ達を積んだコンテナを運び、紅蓮に乗ったカレ
ンはその護衛を行っている。

「ごめんなさい、天子様。このような乱暴なやり方で天子様の夢を
叶えることにはなるうとは」

神楽耶がコンテナの中で天子の前で頭を下げる

「え？貴女も覚えていてくれたのですね」

天子はさっきまでの悲しそうな顔から多少明るくなる

「（天子の相手は神楽耶に任せるか。しかし、マックスが用意した
地図は正確だな。追撃部隊はシェンチョン溪谷で朝比奈を含めた伏
兵で殲滅できる。殲滅後は斑鳩にいる扇達と合流し、蓬莱島に向か
うだけだ）」
ゼロはほくそ笑む

このまま上手く行くと疑わなかったがその数十分後に黒の騎士団最

大の危機が迫っているとは今はまだ知らない。

「次回に続く！」

第五十二話 次本編10 / 11 ゼブルと星刻 想いの力(前書き)

詰め込み過ぎて飛んでいるところが多々あると思いますがご考慮して下さると幸いです

第五十二話

次本編10 / 11 ゼブルと星刻 想いの力

アヴァロン内

婚姻の儀が失敗し、ラウンズやシュナイゼル達はアヴァロン内で休憩をしていた

「オデュッセウス殿下は？」

「落ち着かれたようで休んでおられる」
せつかくの婚姻が壊され少なからずショックを受けているらしい

「では、ランスロットのユニット交換が済み次第天子様を」
スザクが意気込む

藤堂が乗る残月との戦闘でランスロットのユニットを破壊されたのである。

「これ以上の軍事介入は中華連邦の要請が必要よ」
カノンがやんわりと止める

「しかし」枢木卿、すぐに大宦官から要請がきますでしょうから、今は待ちましょう」それは予知ですか？」

「いえ、予想ですよ」

ツヴァイがシュナイゼルを見る

「ふむ、そうだね。どっち道、我々は何も出来ない。ここは待機しよう」

シュナイゼルも頷く

「ツヴァイの仮面には予知できる力が宿ってるの？」
アーニヤがツヴァイの仮面を撮りながら聞く

「いえ、別に関係ありませんが、何故？」
アーニヤの突然の質問に困惑する

「じゃあ、なんで仮面を付けてるの？」
何故か気になりだしたようだ

「言いませんでしたっけ？俺の正体を知る人を守るためですよ。そして偽るためです。俺の正体を知られると俺の友人に迷惑がかかりますのでね」
コンコンと仮面を叩く

「友人？守る？迷惑？」
アーニヤを含めたラウンズ全員とシュナイゼルとロイド達も面白そうに聞く

「本当に言いませんでしたっけ？俺の親友は皇帝陛下と独自の繋がりがあるようでしてね。そのコネで試験を受け今にいたると言うわけです。俺の素顔はその友人と皇帝陛下、その他数名しか知らないでしょう。勿論俺の娘たちにも晒したことはありません」
自慢げに言う

「ツヴァイ殿と一番長くいる僕だって知らないんだ。でも、昔は2人だけと言っていませんでした？」

アイネが不満そうにツヴァイを見ながら言う

「俺にも色々あるんですよ。まあ、時間の問題ですよ。気長に待ってください」

うんうん、と勝手に終わらせる

「失礼します。大宦官より黒の騎士団エースを捕縛したとの報告が入りました。更に多少の被害を受けたものの黒の騎士団を追い込むことに成功。黒の騎士団は天帝八十八陵てんていはちじゅうはちりょうに立て籠もるとの事で、黒の騎士団エースを献上する代わりに援軍を頼みたいと」

天帝八十八陵とは中華連邦に存在した歴代の天子を祭るための陵墓のこと。

「なるほどね」

「殿下、ここは聞いて損はないと思いますよ」

ロイドが手をすり合わせながら進言する

「紅蓮が欲しいだけですよね？」
ツヴァイが苦笑する

「あは、ばれちゃいました？ラクシャータの機体なら心置きなく弄れるますからね」
悪びれもせずに笑顔で言う

「うん、構わないよ。中華連邦に恩を売っておきたいし、黒の騎士団のエースがこちらの手にいれば、多少だがゼロより一手先を付ける。カノン、大宦官に言っておいてくれないか？」
シュナイゼルがカノンにそう言うと

「畏まりました」
頷きどこかに行く

「すみませんが私とツヴァイは少し失礼します」
ライがシュナイゼルに一礼し、その場を去る

「急にどうしたんですか？」
ライの後を急いで追う

「ツヴァイ、私は今のところお前の指揮下にいるが、私としては今

回は出たくない」

ライが心底嫌そうに言う

「主君を売り払うような下劣な人間と一緒に戦いたくないと？」
ツヴァイもライの内心を言い当てる

「ツヴァイも同じだろう？大宦官は今の天子を捨て新しい天子を祭り上げるつもりだ。更に不穏分子である黎星刻も私たちラウンズに排除するよう頼むだろう。それに黒の騎士団が天帝八十八陵に逃げ込んだのは攻撃しづらいと考えたからだろうがああ俗物的な奴等は気にせず攻撃するだろう。先人の文化を捨て、保身と欲で動く人間と共に戦う気にはなれない」

「俺だってそうですよ。ですが、今回の俺たちの目的は先日言いましたようにあくまで黒の騎士団のエースパイロット2人の撃破及び確保です。紅蓮のパイロットは黎星刻が捕らえましたので、次はマックスです。マックスだけを狙いマックスを倒せたら俺達は下がる。それで我慢してくれませんか？」

「一応私はツヴァイの指揮下にいるからな。従うさ」
ライはそれでも少し不満そうに答える

「ありがとうございます」

視点 変更 カレン

星刻シエンフーの乗る神虎と接戦を繰り広げたが、エナジ - 切れで神虎に捕獲され、中華連邦の捕虜として拘束されていた

その後、ブリタニア軍に引き渡され、今に至る

「君が紅蓮のパイロットの紅月カレンか？」

ツヴァイと分かれたライが拘束されているカレンの前に立つ

「（ライ！）」

カレンが目を見開く

何か言おうとするが口枷のせいで言葉が出ない。

「すまないがそれを外すことは出来ない。私自身君の声を聞きたいのだがな」

拘束され横になっているカレンの体を起こす

「（ライがこんなに近くに）」

起こされるときにライの顔が間近に迫る

こんな状況下でも顔が少しずつ赤くなる

「君は私の何だ？」

顔を離さずそのままカレンに聞く

「！」

声が出せたのなら、え？と言っているだろう

「いつも私の夢に赤い髪の女が現れる。それが君かどうかは分からない。しかし、私の本能とも言える部分がそれが君だと囁いている」
超至近距離でカレンの目を見つめる

「（ライの夢の中に私が？記憶がないのにライの本能が私を覚えているの？）」

カレンが今にも涙を零しそうになる

「教えてくれ！君は僕の何だ！？何故こうも僕は君に「殿下いますか？そろそろ出撃ですよ。ってお話中ですか？失礼しました。先にいきますね」すまなかった。また来る。その時は君と会話したい」

それを見たライが感情的にカレンに聞こうとするが、ツヴァイが邪魔をしてしまう。一呼吸置いてライは、ツヴァイの後を追う

「（ライ、雰囲気や記憶が変わっても心は変わらないんだね。私は待ってるから。絶対、私を思い出してくれるまでずっと待ってるから）」

カレンはライの後ろ姿を見つめ、決心を固める

視点 変更 ツヴァイ

「すみませんね。邪魔してしまったみたいで
本当に申し訳なさそうに頭を下げる

「いや、話せなかったが多少の収穫はあった。それで、私はどう動
けばいい？私を呼んだということは決まったのだろうか？」
ライは普段と同じように振舞う

「そうですね (ライの一人称が一瞬だが僕になっていた。これ
は戻る予兆か？シャーリーちゃんもきっかけがあったからこそルル
ーシュさんのギアスが解けた。だが、片目で暴走中のルルーシュさ
んと両目で制御出来ているシャルル・ジ・ブリタニアのギアスでは
熟練度が違う。だけど、この2人の力、そう、愛の力があれば破れ
るかもしれないな)殿下」
歩みを止めライを見つめる

「何だ？」

ツヴァイと同じように歩みを止める

「頑張りましょうね」

視点 変更 ゼロ

黒の騎士団は大宦官たちの追撃を避け、何とか天帝八十八陵に逃げこんだ。

天帝八十八陵は元は聖山と呼ばれる大山で、山の一部が元々割り貫いてあり、斑鳩がギリギリ入るスペースがあった。

しかし、前の戦闘でカレンを奪われ、量産型暁も何機か破壊されてしまった。

その上、今回は中華連邦だけでなくアヴァロン内にあるラウンズを含めた全戦力も参加する。

だが、黒の騎士団に幸いしたのは、中華連邦は星刻がいらなくなつたのか神虎と星刻の部下たちが乗る鋼體ガン・ルウを攻撃している。

つまり、やりかた次第では星刻と共同戦線を張れるのだ。

「どうすんだよ！援軍も来ないのに立て籠もるなんて」
玉城が落ち着きなく動き回る

「落ち着け、こちらには天子様がいる。むこうだって下手に手出しは出来ないは！」

扇が言い終わる前に大きな振動が斑鳩を襲う

「ここを爆撃している？」

水無瀬がリーダーを見る

上空を敵の航空戦力が次々と通過していく。

「そうだ、中華連邦はこの天帝八十八陵ごと我等を押し潰す気だ。つまり、天子を捨てた。(しかし、どうする？藤堂達を出すか?)」

「待たせたな」

マックスが飛翠竜verFで接近する

「マックス！今まで何処に!？」

「ちよつと細工をしにな。先に暴れてるから藤堂やサーズも早く出て来い」

アサルトライフルで鋼體を撃ち落す

「よし！マックスが来たのなら一手先に出せる。藤堂たちを出せ」

攻撃を止めさせようとする星刻だが、天子を天帝八十八陵ごと埋葬すると聞かされ

「貴様等は天子様を何だと思っている!？」

攻撃を止めない大宦官たちに星刻が青い機体（以降神虎）で向かう

「君がクーデターの首謀者かい？」

神虎を邪魔するようにトリスタンverKがメギドハーケンを放つ

「ブリタニアは下がっている!これは我が国の問題だ!」
それを巨大中国刀で防ぐ

「国際的には向こうが国の代表だからさ」
メギドハーケンを回収し、距離を取る

「敵は撃つ!」

少し遠くでモルドレッドが神虎にシユタルクハドロンを撃とうとするが、飛翠竜verFが放ったLMVSに気づきブレイズルミナスで防ぐ

「よう、優男。協力してやるよ」

弾かれたLMVSを回収し、飛翠竜verFから飛翠竜verKに切り替える

「今回ばかりは仕方ないか」
星刻はマックスにモルドレッドを任せると自分はトリスタンに向かう

視点 変更 ツヴァイ

「ジノとアーニヤはすでに戦闘中、ライとアイネも発艦した。ドウ卿もそろそろ攻撃を始めてくれるかな？」
アヴァロンの甲板上で構えているフローレンスを見る

「始めていますが、さっきからどうも当たらないんですね」
そう言いながらもハドロンライフルを量産型暁に向けて、撃つ

「ドウ卿！貴方が当てているのは味方機ですよ！？」
しかし、すぐ近くの量産型ヴィンセント（以降ヴィンセント・ウオード）に当たっている

「え？ なるほど、そういうことですが。 すみませんがどうやら今回の俺は無能だけでなく有害のようです」
フローレンス内でピコピコと機体の異常を探し、見つける

「説明を貰えるかな？」
シュナイゼルの眉間に少しだが皺が寄る

「俺のナイトメア、フローレンスには人工知能のエルベントスが組み込まれているのはご存知ですね？そのエルベントスが黒の騎士団を味方と認識して、ブリタニア軍のナイトメアを敵と認識しているんです。つまり黒の騎士団のナイトメアに向かって狙撃するとエルベントスが味方として認識していますので近くにいる敵と認識している対象に瞬時に銃口を向けます。ですから俺が黒の騎士団のナイトメアに向かって撃っているつもりでもそれが味方に当たってしまうようなようです。しかも、黎星刻が乗っているであろうあの青い機体も味方と認識しています」

長々と説明し、ため息を吐く

「何故そのようなことに？」

シュナイゼルの隣にいたカノンがツヴァイに聞く

「多分誰かがデータを書き換えたのでしょね。昨日は正常に作動していましたので 今日、それも7、8時間前です」

「その時間帯フローレンスはアヴァロンに待機していたはずですよ。考え違いでは？」

今度はセシルが聞く

「そうでもないんだなこれがよ」

アヴァロンのモニターにマックスの顔が映る

「このアヴァロンにハッキング!?」
ニーナが引き攣った顔で驚く

先日の恨みを引きずっているのだろう。

「君がやったのかい？」

シュナイゼルは少し困ったように聞く

「かっかっか、皇族が3人もいる割には随分と警備が緩いな。その眼鏡白衣にも挨拶したんだぜ？」

ロイドを見る

「あれ？」

ロイドが頭に手を当て思い出そうとする

「まあ、これでツヴァイを無力化にするのは成功した。後は俺の独壇場だ」

笑いながら通信を切る

「そういうことですので俺はアヴァロンに帰投しますので、殿下は引き続きマックスとの戦闘をお願いします」
マーリンに通信を行う

「藤堂は枢木スザクとやっているのか。んじゃ、ライと嬢ちゃんはその相手はまた俺がやってやんよ」
LMVSを構える

「やれるものならな！」

「アイネか、助かる」

視点 変更 サーズ

「第二次空爆部隊が接近中！このまま攻撃されたら斑鳩も持ちません」

水無瀬がレーダーを見る

「一番近くにいる航空戦力は？」
扇が日向に寄る

「サーズさん達3人です！」
日向が確認すると斑鳩のすぐ近くに3つの機影が映る

「よし！すぐに攻撃するよう伝えてくれ」

「で、俺はあの部隊の殲滅か。俺が前で暴れて、俺は後ろで撃ちま

くつて、俺は斑鳩の防衛で大丈夫だな」
1人で頷くと動き出した

ブレイドが前でMVBを投げながらワイヤーを伸ばした蛇腹剣（以降鞭状態）で斬りまくり、
シヨットがハドロンプラスターとミサイルを撃ち、
アシストがブレイドとシヨットが取りこぼした相手の攻撃と空爆部隊が斑鳩に放った攻撃を防ぐ。

「やはり、血が見えないのが何とも残念だな。まあ、衝動は抑えられるから別にいいんだがな。誰か心躍る相手はいないものか」

視点 変更 星刻

「こんな戦いもう止めて！」
天子がむき出しになった甲板に出て、必死に訴える

「天子様！ ぐわあ！」
星刻が気づくが

「余所見なんかするから」
トリスタンverKが神虎の飛翔滑走翼の方翼を壊す

「天子が出てきたか。撃て」
太った大宦官が支持を出す

ガン・ルウ
鋼體の銃口が天子に向けられる

「天子様！」
方翼でよろよろと天子を護るために向かう

「まだ無視するのかい？」
神虎に向かつて止めのメギドハーケンを放とうとするが

「空中戦力は大分片付いたからな。代わりは俺がする」
ブレイドがトリスタンに向けMVBを放つ

「いいね、この間の仕返しもしたいと思ってたんだよ。今回は1人
なのかい？」
それを避け周りに他のヴェインセントがないのを確認する

「俺は じゃなかった。ストロングは斑鳩の露出した甲板を護りに、ハゲはザコ共の相手を継続中。丁度俺は空いていた。それに俺もお前とは決着をつけたいと思っていたからな」
そう言い蛇腹剣を構える

ストロングとはヴィンセント・アシストに乗っている長髪の女、ハゲとはヴィンセント・ショットに乗っているハゲ頭の男の事。

「一応名乗るが黒の騎士団員、サーズ・天魔だ」

名前の由来はそれぞれ

ストレートでロングヘアー ストロング

ハゲ頭 ハゲ

天然パーマ 天魔

となっている。無論考えたのはマックス

「サーズが名前つても誰を呼んでるか分からねえだろ？」
との事

「私はナイトオブスリー、ジノ・ヴァインベルグだ。覚えておくといい」

ジノも鎌のようなMVS（以降ハーケン型MVS）を構える

「挨拶はお互い済んだ。行くぞ！」

サーズ（以降天魔）が言うとブレイドが一気に距離を詰め、MVS状態に直した蛇腹剣を振るう

「いらっしやい！」

対するトリスタンverKはハーケン型MVSで向かう

MVS同士がぶつかり火花が散る。

「はっはっはっは！！！」

2人はまるで子供のようになり、殺し合いを始める

視点 変更 マックス

「（アイツ本気出してるのか？珍しいな）」

ゲイラントとマーリンの攻撃を避けながらブレイドとトリスタンの
戦闘を見る

「そんじゃ、俺もそろそろ本気を出してやるよ。飛翠竜Gモード！」
叫ぶと、ブレイドアンテナが2つに割れる

「角が2つに割れた？」

アイネがビクッと警戒を強くする

「説明。この状態になった飛翠竜は通信傍受性が大幅に落ちるがパイロットが本気だと分かりやすくなるのである」

「無駄じゃないか？」
2人とも首を傾げる

「それは俺に勝つてから言え」
そう言うと

いきなりトップスピードでゲイラントの背後を取る

「んな!?!」
急に後ろに回れ対処出来なかったのかゲイラントの足が膝から切られる

「Gが異常にかかっちゃまうからな、飛翠竜のスピードは今まで抑えてたんだぜ？ちなみにGつてのは重力加速度を1としたときの加速度の単位のこと言う。更にちなむとこのGモードつてのはGravityのGって意味だ。まあ、他の意味もあるんだが、どうせ知らないしいいか。んじゃ、俺の本気をほんの少し見せてやるよ」

視点 変更 星刻

斑鳩甲板上で固まる天子を護るために体に多大な負担をかけ、最大スピードで天子に近づき、フーチ型スラッシュハーケンを後ろで高速回転させ天子を護る。

「星刻！星刻！」

天子が神虎の中にいる星刻の名を呼ぶ

「天子様！（私には救えないのか、護れないのか）誰でもいい！天子様を救ってくれ！」

次々に損傷を受けて、とうとう限界に達したのか片方のフーチン型スラッシュハーケンの回転が止まる

「最後だ。楽にしてやれ」

大宦官が乗っている竜胆ロンドンと呼ばれるピラミッド型の戦艦の主砲から砲撃が放たれる

「分かった。その願い私が聞き入れよう」
黒い何かが神虎の前に現れ、砲撃を防ぐ

視点 変更 ゼロ

「何？」

天子が突然起こった現象に目を丸くする

「中華連邦並びにブリタニアの諸君に問う。まだこの私と、ゼロと戦うつもりだろうか？」

爆発で起こった煙が晴れと、黒い機体からゼロの声が響く

「ゼロが自ら最前線に？（それにあれは新型か？）」「
藤堂と戦っていたスザクがチラリと黒い機体を見る

「恐れるな！全機あの黒いナイトメアに向け発射！」
次々と砲撃が放たれる

「ほう、それが大宦官としての答えか」
ゼロがコックピット内のキーボードを素早く押すと黒い機体の前で
生まれるピンク色のシールドに止められる

「あれがガウエインに代わる旦那の新しいナイトメア、その名も屋
気楼んまきう。そしてあのピンク色のシールドはガウエインから流用したド
ルイドシステムを用いた世界最高峰の防御力を持つ全方向防御のエ
ネルギーシールド。その名も絶対守護領域。まあ、攻撃もすごいが
な」
マックスが遠くで見ながらライたちに説明をする

黒い機体（以降屋気楼）が絶対守護領域を解くと胸部が開き、何か
の物体が発射され、次にそれを追うようにビームが放たれる。

その2つがぶつかるとビームがいくつにも割れ、乱反射しながら前
進し、それに当たった鋼體ガン・ルウは次々と爆発する。

「厄介」

モルドレットはそれを真正面から受けるが威力が高いのか、機体が

踏ん張りきれず後ろに下がる

「あれの名前は拡散構造相転移砲。先に飛ばしたプリズム型に固めた液体金属を押すようにビームを放つとあれだけの乱反射が起こる。長距離かつ広範囲の敵を殲滅するのに便利だ」
再び説明を始める

「（何故このタイミングでゼロが出てきた？）
ライがゼロの乗っている屋気楼を見る

「哀れだな星刻。同国人に裏切られたった1人の女も救えないとは。だからこれで分かったはず。君が組むべき相手は私しかいないと」
ゼロはボロボロになった神虎を見下ろす

「だからと言って部下になる気はない」

「当たり前だ。君は国を率いる器だ。救わねばならない。天子も、貴公も、弱者たる中華連邦全てを」
屋気楼が握手をするかのように手を出す

「そのナイトメアでこの戦局を覆せると？」
破損が多いせいかゆっくり神虎が立つ

「いや、戦局を左右するのは戦術でなく戦略だ」

ニヤリと大宦官がいる竜胆のほうに機体を向ける

「緊急入電！上海、北京、ビルマ、ジャカルタ、イスラマバードを含む16箇所以上で同時多発的に暴動が発生しています」

セシルが中華連邦の地図を出す

ポチポチと赤い印が次々と浮かぶ。

「こんな偶然が？」

ニーナの疑問はもつともだ

「ゼロと大宦官の通信記録が流されていたようです」

「出せるかい？」

セシルが頷く

映像は神虎が天子を砲撃から護る映像が流れる

「主君を売ると言うのか！」
ゼロの声が響く

「天子などただのシステム。替りなどいくらでもいる」
天子が爆風を受け泣きながら戦いを止めようとする姿がアップで映る

「残された人民はどうなる!？」

「果汁を搾り取った果実を捨てて何が悪い？」

「それに虫のように幾らでも湧いてくる」

「その度に搾り取ればいいだけのこと」

そして大宦官が気味の悪い笑顔と砲撃のシーンが流れる

「天子様の映像で大宦官の悪人ぶりが凄いですね。殿下、もう帰ってきてくださって結構です」

映像のクオリティーに感心しながらマイクを取りライに言う

「いいのか？」

マックスと交戦中のライが聞く

「大宦官の薄汚さが中華連邦全域に洩れました。マックスが本気を出しているようですが、こちらが引けば追撃はしてこないでしょう。アーニヤ先輩を回収しながら帰投してください」

「回収？アーニヤはまだ交戦中だぞ？」

ライがモルドレッドを見るとピンクと青い暁と交戦している

「もうすぐ黒の騎士団にフロートを壊されます。お早く」
ツヴァイが急かす

「！ 本当にやられた。こちらマーリン、モルドレッドを回収する」
ライがマックスから離れモルドレッドに向かう

それを見たマックスが

「嬢ちゃんもそろそろ撤収したらどうだ？機体もボロボロじゃねーか」

と聞き、角を元の一本角に戻す

「うるさいー！」

口ではそう言っているがゲイラントは大小様々な切り傷を負っている。

ライとアイネでの戦闘でこれ程なのに1対1での戦闘結果は目に見えている。

「ん？地上部隊が出てきたか」

天帝八十八陵から次々と暁が出てくる

「愚かな。ここで地上部隊を出すとは」

「ここで空爆をすればこちらの勝ちです」

副官達がシュナイゼルのほうを向き命令を待つ

「いや、ドウ卿の言うとおり撤退する。国とは領土でも体制でもない。人だよ。民衆の支持を失くした大宦官に中華連邦を代表し、我

「が国に入る資格は無い」

「撤退したか（兄上、貴方ならそう思うと思っていた） 星刻！お前の恨みを晴らして来い！」
「厩気楼内でシュナイゼルに

「言われるまでもない！」
星刻はよろよろと飛ぶ神虎で竜胆に向かう

数分後、竜胆は爆発した。

カレンと紅蓮がブリタニアに渡されたことを知るはそのすぐ後になる。

斑鳩甲板

「嬉しいのに涙が止まらなくて」
天子が星刻の胸のなかで泣く

「これからも御守りします。ずっと」
それを両腕で優しく包む

それを見ていた黒の騎士団の面々だが

「婚姻が無効になった以上、日本人の誰かと結婚していただくのが上策かと」

デイトハルトがゼロに耳打ちする

「（分かりやす過ぎるが妥当な手だな。玉城あたりにでも）」

「なりません！政治で恋を語るものではありません！」
聞こえた神楽耶がデイトハルトに詰め寄る

「しかし、神楽耶様。我々は戦争をしているのですから
デイトハルトが神楽耶を宥める

「いいんじゃないの？人間守るべき何かがあって本当に強くなれるんだしな。旦那は無いのか？誰かのためにいつも以上の力が出るとかよ」

マックスがゼロを見る

「（そうか、俺もナナリーのために世界を造り替えようと思って）
ゼロがハツとする

「意外だな。お前がそんなことを言うとは」
千葉が驚いたようにマックスを見る

他のメンバーも目を見開いている。

「俺のキャラじゃねえことは分かってる。まあ、決めるのは旦那だしな」

マックスが再びゼロを見ると他の皆もゼロの判決を待つ

「（そうだ、想いには世界を変えられるほどの力がある）天子よ！
貴女の未来はあなた自身の物だ。貴女が決め、悔いのないように行
動せよ！」

ゼロが天子に手を伸ばす

「ゼロ」

星刻の手が剣から離れる

「流石ゼロ様」

神楽耶は嬉しそうにディートハルトにどう？と顔で聞く

「しかし、力関係をハッキリしなければ」
ディートハルトは諦めることが出来ない

「力の源は心だ。大宦官達に対し決起した人々も、私たち黒の騎士
団も心の力で戦ってきた」

「ああ、ああ、そうだな。そうだよな！」

扇が心底嬉しそうに頷く

「ゼロ、君という人間が少しだけ分かった気がする」
星刻がゼロに握手を求め

「進むべき道は険しい、だからこそ明日と言う道は我等にある」
ゼロはその握手を受け入れる

（カレンの事もあるから一先ずエリア11に戻るか、中華連邦の反対勢力もあるが星刻や藤堂の敵ではない。それに星刻の心の力がどれだけのものか見てみたいしな。これで本来の目的であるギアス教団に集中できる。ギアスの使い手を生み出し研究している組織。その教団を抑えればギアスの面でも皇帝を上回る。問題は中華連邦内にあるのは確実だが、ロロもcccも詳しい場所を知らないことだ。だが、どんなに隠しても物資の流通、電力の供給、通信記録等の痕跡は必ずあるはず。cccはここに残り教団の情報が入り次第伝えさせるよう言っておいたから大丈夫だろう。
残る問題は咲世子だ。俺に変装して今はルルーシュを演じてはいるが、咲世子は確かに有能だが天然が入っているからどうも心配だ。
まあ、エリア11に着けば全て分かるか）

（あのサーズ・天魔とか言う男、面白いな。久しぶりに本気を出してしまった。まあ、明日からはツヴァイのコネでエリア11にある

庶民の学校に通うことになるが、それもそれで面白そうだ。明日が
楽しみだ)

(シユナイゼル・エル・ブリタニアは本国に戻って、俺達はエリア
11に戻るか。久しぶりにガーベスちゃんに会える。さて、どんな
風に甘やかすかな。そう言えばシロウさん達はどんなんだろ？例の
計画のためにはそろそろ完成してもらわないと困るんだけどな、何
たってそれぞれの専門作業員を世界中から何百人と集めて作ってい
る大作業だからね。急ピッチだけれど材料費はシロウさんの能力で
ただに近いし、力仕事はダルクちゃんが岩盤の調査はルクレティア
ちゃんも協力してくれる。まあ、本当のこと言っちゃうとやらせた
くないけど緊急だしね。何たって、この計画が成功すれば何千万人
という人が助かるんだ。まあ、正確には何千万人が『助かる環境を
作る』だけだね。さて、どうなるかな)

第五十二話 次本編10 / 11 ゼブルと星刻 想いの力(後書き)

ジノとサーズのライバルフラグ確立

書いてる途中でそうになりましたがかなり続くと思案中です

第五十三話

次本編 12 ゼブルとラブ アタック！

「……………」

生徒会室の前で中等部の制服を着たアーニヤが携帯電話を弄っている

「ここは生徒会室前だけどどうかしたのかな？」

そこに手荷物でいっぱいゼブルが通る

「私を知らない？」

アーニヤが驚いたようにゼブルに聞く

ナイトオブブラウズは帝国最強の騎士であるため下手な皇族より有名である。

「どこかで会ったっけ？でも、中等部の子だよね？生徒会に何か用があるのかい？」

「アーニヤ」

「ん？アーニヤちゃんって言うの？俺は高等部3年生のゼブル・オウサルト。よろしくね」

ゼブルも名前を教え、握手を求める

「よろしく」

「アーニヤ、どうしたんだ？って、お客さんか？」
さらに生徒会室からジノも出てきた

「君は？」

「俺を知らないのか？」

アーニヤと同じ反応を取る

「有名人なの？」

「いや、社会的立場を無視してもらうつもりだから丁度いい。俺はジノ・ヴァインベルグ、高等部の1年生だ」
少し偉そうだが嫌味な感じは無い

「俺はゼブル・オウサルト、生徒会の一員で3年生ね。よろしく」
アーニヤと同じで、握手を求める

「よろしく、先輩」

ジノも笑顔で握手を受けた

「ゼブル！どこ行ってたんだよ！？」

ゼブルが生徒会室に入ると中にいたリヴァルとシャーリーが近づく

「今回はオキナワにね。お土産はちんすこつって言うお菓子とオキナワソバだよ」
紙袋から取り出す

「会長が大変だったんだぞ！」

「中華連邦にロイド君と行ったんじゃないかったですっけ？」
お土産を机の上に置く

「そこでクーデターに遭ったり、黒の騎士団との戦闘もあったんだって」

「大変だね。あとでロイド君の所に行こうかな。それよりガーベスちゃんは？」

周りを見て他のメンバーがいないことに気付く

「置手紙だけ残したことをスネてるぞ」

リヴァルがゼブルの書いた置手紙をゼブルに渡す

置紙には、少し旅に出ます。と書かれている。

「せっかくプレゼントもあるのにな。まあ、これは2人きりの時でいいか」

小さい箱を袋から取り出しポケットに入れる

「ロイド博士を知ってるのか？」
ジノが驚いたように聞く

「友達だよ。それより、君は偉い人みただけど社会的立場は無視するんでしょ？それなら俺は君の先輩に当たるわけだから敬語を使いなさい」

「はい、先輩！」

ジノはふざけているのか敬礼までする

「よろしい、お茶でも飲むかい？さんぴん茶って呼ばれるジャスミン茶みたいなお茶も買ってきたんだ」

視点 変更 ルルーシュ

屋気楼のフォートレスモードで中華連邦からエリア11に戻ってきたルルーシュはアッシュフォード学園内にある図書室の隠しエレベーターで下った先にある機密情報局きみつじょうほうの司令室にいた。

機密情報局とは、皇帝シャルルによって作られたcccの捕獲が目的の皇帝直属の組織。

局員はヴィレッタとロロの他に数名だが、その数名はアッシュフォード学園で教師に成り済ましている。

記憶を失ったルルーシユの監視を行い、ccがルルーシユと接触する機会を窺っていたが、記憶が戻ったルルーシユはロロと一度ギアスをかけたヴィレッタ以外の全局員に「自分とロロに関する全てのイレギュラーを見逃せ」と言うギアスをかけた。

そしてロロはルルーシユに籠絡され、ヴィレッタは扇との関係でルルーシユに脅されて部下となっている。

つまり、この司令室を含めた機密情報局の全てはルルーシユの物と言っても過言ではないのだ。

「ここ数日の詳細です」

咲世子がモニターに1時間毎の内容が書かれている

咲世子はルルーシユがゼロとして中華連邦に行っている間、スザクに疑われないようにやり過ごすため、ルルーシユに変装をしてにいた。

「ナイトオブブラウズが生徒会メンバーになったのか？他には！

これは何だ？俺がシャーリーと？」

後ろにいる咲世子に振り向く

「はい、キスをさせて頂きました」

何事も無いかのように言う

「ええ!?!」

ロロが声を出して驚く

「あの、いけませんでしたか?この司令室が知られる可能性があります
ましたし、ルルーシュ様のキャラクターでしたら」

「違う、間違っているぞ」

ルルーシュが頭に手を当てる

「咲世子!影武者なのにいい顔し過ぎだっ」

「いや、それ以外は良くやってくれている」
ルルーシュも落ち着きながら咲世子を庇う

「兄さん、咲世子が昔からの付き合いだからって、正確にはアッシ
ユフォード家に」知っています!ナナリーのお世話係だったんです
よね?」

ロロと咲世子が何やら言い争う

「(ナイトオブブラウズの際は後回しだな)」

近くで見ているヴィレッタがジノとアーニャの個人情報録を見なが
ら思う

「ルルーシユ様、明日のスケジュールですが」
携帯型メモ帳をルルーシユに渡す

「明日？」

それを受け取る

「咲世子がデートを安請合いしてるんだよ。全くそれでもくノ一で
すか？」

口口が椅子に座りソケットを弄りだす

「正確にはSPです。篠崎流37代目の」

咲世子が丁寧に説明する

「咲世子！こゝこのスケジュールはいつたい」

分刻みのスケジュールでその内容のほとんどがデートである

「睡眠を3時間として108名の女性と約束させていただきました。
キャンセル待ちが14件、デートは6ヶ月待ちです」

「咲世子、次から全部断れ」
力なく答える

視点 変更 ゼブル

咲世子とロロが言い争っている頃、ゼブルはジノとアーニヤの2人に学園を案内していた。

「で、ここが第一体育館ね」
ゼブルが扉を開ける

「意外と広いんだな」
ジノが感心したように呟く

「そうだ！君たち2人ともスザクと同じぐらい強いんでしょう？なら、少し腕を見せてくれないかな？ラウンズの腕前ってやつ。せつかく俺達以外誰もいないんだしさ」
ゼブルが突然閃いたように2人に言う

「こっちは別に構わないですけど、先輩は俺たちのことを甘く見てないですか？」

「そんなこと無いよ。俺もこう見えて結構やれるもんなんだよ？ルールは簡単、お互いの腰につけたタオルを取るだけ」
ゼブルは右腰にタオルを引っ掛ける

「面白そうだな」

「タオル」

2人もゼブルと同じように右腰にタオルを引っ掛ける

「んじゃ、始めようか。スタートの合図はそっちでお願い」

「ドン」

アーニヤが何の前触れもなしにいきなり言う

「まずはジノ君」

しかし、ゼブルはそれを待っていたかのようにジノのタオルを狙う

「速っ！」

ジノが腕で防ごうとするが速過ぎて追いつかない

「とおっ」

ジノに近づく前にアーニヤが飛び蹴りをゼブルに当てる

「おっと、小柄なのに力は強いんだね」

それをギリギリで防御し後ろに下がる

「サンキュー、アーニヤ。それにしても速いっすね」

アーニヤにお礼を言い、離れたゼブルを見る

「ナイトオブブラウズに褒めてもらえるとは、嬉しいね」
ゼブルはゆっくり柔軟を始める

「いや、本気でスカウトしたい位ですよ」
ジノも目をゼブルから逸らさないようにする

「雑談になるけど、俺に武術を覚えてくれた2人の師匠がいてね。その2人の戦闘スタイルには共通点があった、それは他のものから力を借りるってことなんだ。それは天然自然だったり、龍穴と呼ばれるエネルギーを放出する場所から『気』と呼ばれるエネルギーを貰ったりね。俺はその2つを効率よく一緒に使うことが出来るようになった」
喋りながらもどんどん柔軟を終えていく

「？」

「さっきから何言ってるんすか？」
アーニヤとジノにはゼブルの言っていることが理解が出来ない

「おっと、長くなったね。じゃあ、終わらせるために今度は君たちから来るといい」
ゆっくり構える

「了解」

「行きますよ！」

2人が一気に距離を縮める

「技名、風穴への瞬き」

ゼブルが呟く

そして、向かってくるジノとアーニヤを目に見えない速さで抜く。

「え？」

「マジかよ！」

2人が振り向くと

「俺の勝ちだね」

ゼブルがタオルを2枚見せる

「凄いな先輩！ もう1回！」

「まだ、本気出してない」

2人はゼブルの動きに驚きと対抗心を燃やし、再戦を要求する

「じゃあ、次は校庭を案内してあげるから、サッカー部に行こう。そこで再戦だ」

タオルを持ったまま校庭に向かう

「ラウンズに負けは無い！行くぞアーニヤ！」

「おー」

ジノとアーニヤもその後を追う

それから1時間後

「で、結局サッカー部とアーチエリー部とバスケット部とテニス部に行
ったと？」

リヴアルが呆れた口調で聞く

「惨敗」

アーニヤが落ち込み、椅子の上で膝を抱える

「今更だけど俺等ほとんどルール知らないし」
ジノが不満そうな顔でゼブルを見る

「そうだろうと思ってルールを言わなかったんだよ」

「ずるい」

アーニヤも蔑むような目つきで見る

「作戦勝ちと言ってほしいな。これでも手加減はしたんだよ？」
ゼブルが勝ち誇った顔で2人を見る

「てい」

その顔が気に入らなかったのかアーニヤが椅子から降りてゼブルのわき腹を殴る

「君さ、自分が馬鹿力キャラってこと自覚してる!？」

本当に痛かったのかゼブルが涙目でアーニヤの頬をギュ〜と強く引っ張る

「あむむむむむ、あちよー」

アーニヤも少し怒りを込めて回し蹴りを放つ

「それにさ、バスケットサッカーの時も注意したけどパンツ見えそうだよ。気をつけないと」

それを避け、アーニヤの目線に合わせるようにしゃがみ、スカートを指差す

「気にしない」

恥ずかしいのか顔を赤くする

「女の子なんだから恥じらいを持たなくちゃ駄目だよ」

アーニヤの頭を軽く撫でる

「 うん」
顔を俯けているが嬉しそうに目を細める

「そっだ！賭けチエスって知ってるか？」
リヴァルが急に閃く

「なるほど、ラウンズは戦況を早く理解するために頭が柔らかくな
くちゃいけないしね。いい訓練になるよ」
ゼブルも頷く

「何だその面白そうなやつ？」
ジノも興味津々そうに聞く

「大人の裏社会ってやつだよ。でも、念のためルルーシュさんも連
れて行こう。どこにいるかな？」

視点 変更 ルルーシュ

咲世子のハードスケジュールを何とか終わらせていったが

「遅い！」

クラブハウス前でシャーリーが仁王立ちで待つ

「すまない、シャーリー。今度説明する時間を用意するから
コソコソと茂みを進む

次の相手はシャーリーなのだが、時間の都合上飛ばしたほうがいい
とルルーシュは判断したのだ。

「ルルーシュ先輩！」

影から急にジノが現れる

「うお！ 何だ!？」

驚いて尻餅をつく

「チェスに行きましょうよ。お金賭ける裏社会のやつ」

「賭けチェスの話をしたらぜひ行きたいってさ」

「俺たちだけじゃ不安だからさ、ルルーシュさんも一緒に連れて行
こうって」

ジノの後ろからリヴァルとゼブルも現れる

「リヴァル、それにゼブルもか」

2人を恨むように見る

「ルルーシユ様!!」「ルルーシユ様!!」
黄色い声と共に多くの女子が寄ってくる

「もう勘弁してください!」
ルルーシユが急に走り出す

「あつ、逃げた!」
女子の1人が言う

「人聞きの悪いことを言わないで!俺はこのあとレイトショーに、
これが間に合わなければ次のデートが… うあああ!!」
断末魔の如き叫び声が響く

「咲世子のやつ、体力の無い兄さんに無茶させ過ぎだよ。それもデ
ートばかり!これじゃ人格破綻者だよ」
ロロはそれを窓から傍観する

「誰だ?突き飛ばさなくなつて シャーリー」
前からの衝撃で再び尻餅をつく

「今度はどなたとお約束かしら?」
無表情で聞く

「それは」

「賭け事だけでなく女遊びまで」

ルルーシュの情けなさに涙を浮かべる

「待ってくれ、だから　　そうだ！これ、きちんと話せなかったからお詫びというか」

笑顔で小さい服の様なものを見せる

「お詫び？あのことを物で片付けようって言うの！？」
ルルーシュから小さい服のようなものを奪い取る

「誤解だ！俺はただ謝りたくて」
必死で弁解をしようとするが

「謝るですって！？」
更に怒りを買ってしまった

「（いけない、何か間違えたらしいが、どうすれば？）」
必死に頭を回転させる

「ルルーック！！」

突然、生徒会クラブハウスのエントランスにミレイが現れる

「決めたわ、私の卒業イベント！名づけて、キューピットの口！」
何故か私服でハート型の帽子を被りっている

「卒業ってこんな時期にか？」
今まで傍観していたジノ達がミレイを見る

「私の場合留年してるからさ、足りない単位さえ取っちゃえば卒業なの」

「へー、ここってそう言うシステムなんだ」
感心したように頷く

「会長、本当に卒業しちゃうんですか？俺たちと一緒にだっていいじゃん」
リヴァルが悲しそうに聞く

「あのさ、ミレイ」呼び捨て！？「そのキューピットの口って何やんだ？」

ジノがミレイを呼び捨てたのにリヴァルが反応する

「当日全校生徒にこの帽子を被ってもらいます。男子はこの青色ね。で、相手の帽子を奪って被ると」
最初に被っていたピンク色の帽子を取り、横に置いてあった青い帽

子を被る

「と?」

「生徒会長命令でその2人は強制的に恋人同士です!」
「どう?と笑顔で聞く」

「「「「ええ!?!?」」」」

視点 変更 ゼブル

ミレイの卒業イベントの発表から2時間後、ゼブルは学園内の木々が生い茂る場所を散歩していた。

「さっきから俺の後ろを追いかけている人は誰ですか?」
歩いていたゼブルが急に立ち止まる

「よく分かったわね」
後ろから女の子の音が響く

「達人特有の気配の消し方だね。まあ、俺には無駄ですけど」
くるりと後ろを見る

「やっぱり、あなたは普通と違うみたいね」
木の陰から現れたのは

「アーニヤちゃん？」

何故かラウンズの服を着たアーニヤだった

「半分正解よ。でも、私はアーニヤ・アールストレイムじゃないの」
いつもの無表情とは違い笑顔で答える

「謎々かい？俺は苦手なんだけどね」
心底困ったように頭を掻く

「この子が珍しく人に対して面白い感情を抱いているからね。その対象がどんな子なのか挨拶に来たのよ。あなた以外にもう1人似たような感情で接してたんだけど、彼にはどちらかと言えばお父さんとしての愛を求めていたのね。知ってる？この子があなたに接するときの心拍数って全速力で走った後と同じぐらいなのよ。それを表情に出さないこの子には私も感服するわ」
笑顔でゼブルに近づく

「なるほど、貴女はアーニヤちゃんとは別の人格で、普段はアーニヤちゃんの中で見ていると?」
ゼブルがヘラヘラした笑顔から真顔になる

「まあ、そんな感じね。でも、よくこんな短期間で分かったわね? それにそんな顔も出来るんだ。好みよ」
アーニヤ（以降別人格のアーニヤ）が顔に手を当て、いやんと身体をクネらせる

「目的は?」
表情を変えずに聞く

「ひみつ」
満面の笑みで答える

「で、貴女が俺をストーキングしてた理由は話に來ただけですか?」
ゼブルも諦め口調で聞く

「まあ、それもあるけど 味見もね」
笑顔の別人格のアーニヤがいきなりゼブルに蹴りを繰り出す

「急に攻撃するとは」
ゼブルがギリギリで避ける

すると、後ろの木がへし折れる。

「へー、今のを避けるんだ。私もあなたに興味が沸いたわ」
再び笑みを浮かべ攻撃を続ける

次々と木々が折れていく。

「近所と環境は大迷惑ですよ」
激しい攻撃をギリギリで受け流す

「この動き、ただの学生じゃないわね？」
別人格のアーニヤも笑みが消える

「ただの学生ですよ。　普段はですがね」
ジノとアーニヤから取ったタオルと自分のタオルを繋げる

そして、その繋げたタオルを使いアーニヤの足を縛る

「な!?!」
急に巻かれたことでバランスを崩す

「アーニヤちゃんに返してあげてください」
後ろに回り、首に手刀当て気絶させる

数分後

「うう」

アーニヤの意識が戻る

「大丈夫？」

ゼブルは木に寄りかかってアーニヤの体が冷えないように抱きかかえている

「ここはどこ!？」

怖そつに周りを見る

目が覚めて別の場所にいたら怖くなるの当然だろう。

「学園内だよ」

さっきまでの真剣な顔からいつもと同じへラへラした顔に戻る

「また、記憶が無い」

悲しそつに俯く

「立てるかい？」

先に立ち上がり、アーニヤに手を差し出す

「……………」

静かに首を横に振る

「そう　じゃあ、よつと！」

背中と膝の後ろに手をあて持ち上げる

所謂、いわゆるお姫様抱っこと言うものである

「!?!」

急なことに驚き、顔を真っ赤にさせながらゼブルを見る

「アーニヤちゃんさ、本当に困ってることがあるなら相談に乗るよ。
だからさ、溜め込みすぎないでね」

ゼブルも優しくアーニヤの目を見つめる

「　　ありがとう、本当に」

顔をゼブルの胸に埋める

すると、ゼブルの服が少しずつ湿っていく。

「どづいたしまして」

視点 変更 ルルーシュ

イベント当日の朝、ルルーシュたち4人は司令室で作戦会議をしていた。

「キューピットの日、今日のイベントで女たちとの関係を一気に清算する」

画面に映る女達を見る

「そして、兄さんは自由の身となる」
「口も隣で頷く」

「ああ、幸いこのイベントは教師も参加可能だ「え？」ヴィレッタに俺の帽子を取ってもらおう」
「ヴィレッタに悪寒が走る」

「それは、おかしいな誤解を招くだろう？この件は咲世子が責任を取るべきだ」
困ったヴィレッタは矛先を咲世子に向ける

「申し訳ありません。私はイベント途中でルルーシュ様の影武者を」

「変な女に捕まらないためにも必要です」

ロロも真剣な顔でヴィレッタを見る

「だったら、シャーリーでいいだろう！」

シャーリーの画像がモニターに映る

「確かにそれもひとつの選択肢ですが」

チラリとルルーシュを見る

「あれは相当お前に惚れているぞ。お前を護るために私を撃つたこともある」

「だから、もう巻き込みたくないんだ。 作戦は、時間いっぱい

まで逃げヴィレッタが俺の帽子を取る。これで行こう」

視点 変更 ロロ

「皆さん、今日が最後の生徒会長、ミレイ・アッシュフォードです！
！間も無く私の卒業イベントであるキューピットの日を開始します。
あ、ターゲットから最低2メートルは離れていてね」
ミレイがルールなどを再確認する

「では、最後にひと言　　3年D組ルルーシュ・ランペルージ
の帽子を私の所に持って来た部は部費を十倍にします!」
一呼吸置き、超早口で言う

「何!?!」

「ルルの!?!」

「あれま」

「最後まで悪ふざけを!」

全員が驚く

「ルルーシュを見つけ出せ!」

「多少傷つけても構わんから捕まえる!」

と、意気込む多くの部員が3・Dに集まるうとしている

「それでは、スタート!」

ミレイが近くのボタンを押すと花火が上がる

「ルル!」

先に動いたシャーリーだが、急に足が止まる

よく見れば校内にいる全員が止まっている。

「流石にこれだけの人を止めるのはきついな」

近くのロッカーから口口が出てきてルルーシュをロッカーに入れる

「動き出せ」

ルルーシュを入れるとギアスをオフにする

「私が！」

ルルーシュに抱きつこうとしたクラスメイトAが壁に顔面を強打する

「え？ルルが消えた？」

シャーリーは寸前で止まり、さっきまでいたはずのルルーシュがいないことに気付く

「悪いな、ロロ」

小声でロロに言う

「ううん、大丈夫だよ」

「（ロロのギアスカ、抗えない分ルルーシュさんのギアスより厄介だね）さて、ガーベスちゃんから逃げるのも一興だね。うん、やってみよう」

ガーベスがすぐ来るであろうと予測し、移動を始める

視点 変更 ルルーシュ

ロロのお陰で何を逃れたルルーシュは図書室にいた。

外では

「こつちまで追いで！」

ジノが手を振り

「……ジノ様！」「……」

その後を数人の女子が追う

「なるほど、本当にジノは遊びに来ただけのようだな。アーニャはよく分からないが問題はないだろう。ナイトオブ라운ズの件はクリア」

ルルーシュは隠しエレベーターに向かう

「入れ替わりはここでいい」

隠しエレベーターの中にはルルーシュに扮した咲世子（以降ルル子）がいた

「わかりました」

もう1人のルル子が頷くと隠しエレベーターから出て行った

数分後

「こちらラグビー部、ルルーシュを発見！」

「よし！アツシユフオード学園全部活メンバーに通達！男子寮と中庭を中心に包囲網を敷きなさい！」

報告を受けたミレイは他の生徒たちに放送で指示を送る

「部費は我等のものだ！」

ラグビー部がルルーシュに向かって飛び掛るが

「去らば！」

ラグビー部員達の頭を踏みながら大きくジャンプする

「はぁ？咲世子、変な掛け声は止める。俺の人格が疑われる」
司令室で見ていたルルーシュがルル子に注意する

「申し訳ありません。おもわず」
ルル子が木陰で謝る

「それと裏門には行くな。馬術部が待機しているからな」
学園の地図を見る

「分かりました」
ルル子は頷くと動き出した

「校舎を迂回して第二体育館に移動。正面には、敵軍である科学部がいるはずだ」

科学部はロケット花火を横に向け次々と発射されるが

「むん！」

クルクル飛びながら避ける

「（この様子なら僕の援護は必要ないな）」

陰ながらルル子を見ていたロロが頷く

「（どう考えてもやり過ぎだが咲世子は天然だから指示を出しても無駄だ。仕方ない、次から体育の授業はあいつに）」

諦めが入ったルルーシュはため息を吐きながら咲世子を見守る

「会長の命令ならルルーシュを、親友を売ります。って、そんなのありかよ！？」

バイクで校内を探すりヴアルの上空には

「あり」

アーニヤがモルドレッドに乗って上空から誰かを探す

その頃政庁ではモルドレッドの無断発進で黒の騎士団が現れたと勘違いして軍が動くこととなる。

視点 変更 ゼブル

適当にプラプラしていたゼブルだが

「ゼブル様！」

ガーベスが声をかける

「じゃあ、帽子を」

ゼブルがガーベスの帽子取ろうとすると

「ガーベスの帽子は僕のものだ！」

大きな声と共にアイネがガーベスに飛び掛る

「いつの間に!?!」

「貰った！」

アイネがガーベスの帽子を取ろうとするが

「きゃっ！」

ガーベスが頭を下げ避ける

「何で避けるんだ!？」
不意なことに受身を取れずに床を滑る

「すみません、アイネさんの形相が怖くて」
ガーベスが申し訳なさそうに苦笑いを浮かべる

「俺の勝ちだね」
ゼブルがガーベスの帽子をスツと取る

「まだだ、まだ終わらんよ!」
今度はゼブルに飛び掛る

「俺の帽子を？」
ガーベスの帽子を防いだが、アイネはゼブルの帽子を取った

「これで、お前の帽子がガーベスの頭上に乗ることはなくなった」
どうだ?としてやったりな顔で聞く

「何だつて!　　って、俺のことが好きみたいに思われるよ?」
ゼブルは冷静に聞く

「せ、背に腹は変えられん」
少し顔を赤く染める

「アイネちゃん、そこまで本気なのか。仕方ない、この手を使うことになるとは」

ポケットの中から何かのスイッチを出し、そのボタンを押す

「何!?!」

アイネが持っているゼブルの帽子が2つに割れる

「「帽子が2つに!?!」」

ガーベスとアイネが驚く

「お遊びで作った仕掛けだけど、まさか使うとはね。半分でもガーベスちゃんに被って欲しいからね」

落ちた半分をガーベスの頭に乗せる

「嬉しいです」

「アイネちゃんも俺の帽子を持つてるし、アイネちゃんの帽子も貰っとくね」

落としていたアイネの帽子を拾い、ガーベスの帽子の上から被る

「ま、待て、それでは誤解されるぞ?」

アイネがオロオロしながら聞く

「別にいいんじゃない？学生はそういうのも楽しまないよね」
ポカーンとしているアイネを置いて歩き出す

「浮気は許しませんよ？」

その後をトコトコガーベスが追う

「そんな大層なもんじゃないでしょ。あ、でも、会長命令で強制的
カップルなんだっけ？じゃあ、アイネちゃんも俺の恋人扱い？」

「二股ですか？」

ジロリとゼブルを見る

「駄目？」

「いえ、英雄色を好むと言いますし、私を正室にしてくださいって一
番愛してくださいさるのなら構わないのですが。って、アイネさんは確
かドウ卿に思いを寄せていると聞きましたが」
ハッと気付いてゼブルに聞く

「だから困ってるんだよね。どうしようかな、本当に」
小声で呟く

「今何と？」

呟いた声が聞こえたのかガ―ベスが聞く

「ん？ひとり言だよ。それよりルルーシュさんがどうなったのか見に行こうか」

周りを見ながらルルーシュを探す

「（ゼブル様は時々本当に謎めいていますが、そこもステキです！）」
その後姿をうつつと見つめる

さらにその後ろで

「（不覚だ！嬉しくなってしまった。僕はツヴァイ殿一筋なんだ。そうだ、錯覚だ。確かにあいつは強いし、顔はかっこいい部類に入るだろうがツヴァイ殿はもっと強いし、それにかっこいいはずだ。何たって僕が認めた人だからな。うん）」
うんうんと1人でひたすら頷き続ける

すると

「ゼブル、帽子頂戴」

ゼブルの目の前にモルドレッドが現れ、アーニヤがモルドレッドから降りてきた

「え？帽子は半分にして2人にあげちゃったよ」
ガ―ベスとアイネを指差す

「むー」

2人を見て頬を膨らませる

「ごめんね。3等分にすればよかったな」

「なら」

アーニヤが帽子をゼブルに渡す

「いいの?」

ゼブルがそれを受け取る

「うん」

顔を赤くしながら頷く

「ありがとう」

アーニヤの頭を優しく撫でる

「うん」

アーニヤもゼブルの腕に抱きつく

「アールストレイム卿！何故ゼブル様に抱きついてるんですか！？」

ゼブルの後ろにいたガーベスがアーニヤに寄る

「恋人同士だから」
無表情に戻りゼブルから離れようとしな

「な！しかし、私のほうがずっと前からゼブル様の恋人です。キスもしたんですよ」
「ガーベスもアーニヤに対抗するかのよう

に反対側のゼブルの腕に抱きつく
「むむ、この後するからいい」
「一瞬ひるんだが負けじと更に抱きつく腕に力を入れる」

「私はそれより沢山します」

「（キスをすること自体はいいんだ）」
会話の面白さに笑みを浮かべる

「それよりもっとする」
「それよりもっととします！」
「それよりもさらにする」
「その数倍します！」
「そのまた3倍する」
「どんどん量が増えていく」

「（俺の意思は？）」

そんなこんなでイベント終了

ルルーシュはやはり最後にはシャーリーの帽子を取った。

本人曰く身体が勝手に動いたらしい。

「結局そうだったか」

「当たり前前のところに落ち着いちゃってさ」
そんな2人を大勢の人が囲う

「ルルーシュ、やっと分かったみたいね」
ミレイが2人の前に出る

「まさかこの為に？」

「あんた達もどかしいんだもん。ノロノロしてたら青春が終わっちゃうぞ」

元々この企画はじれったい2人をくっ付ける為に考えたイベントだったのだ

「会長！」「卒業おめでとついでいますー！」

上空からランスロットが降りてくる

「何でランスロットで来たの？」

「アーニヤがモルドレッドで出て行ったから黒の騎士団かと思ってね」

全員がゼブルの近くににいるアーニヤを見る

「なる」

反省の色はまるでなし

「って、ゼブル帽子多すぎじゃね？」

青い帽子のままのリヴァルが不満そうに聞く

「何か勢いでね」

ゼブルがバランスよく3つの帽子を指で回す

「とにかく、これでモラトリウムとか色々終了！」

こうしてミレイ最後のイベントは終わり。ミレイは皆に別れを告げアッシュフォード学園を卒業した

数日後、テレビの画面にミレイが映る

「生徒会長からお天気お姉さんって
リヴァルが呟く

「貴族なのに」
アーニヤが右にいるゼブルに寄っかかる

「中途半端に落ち着くのが嫌なんだってさ」

「婚約まで解消しなくてもよかったと思いますが」
ガ―ベスもアーニヤに負けじと、隣にいるゼブルにくっ付く

「シヨックだろうな、ロイド博士」

「（意外にセシルちゃんが積極的になったりしてね）」
ゼブルが微笑む

その日の夜

シャーリーが租界を歩いていると

「思い出した。私のお父さんに怪我をさせたゼロは
ルルーシュ

「？」

急に全てのことを思い出し、手に持っていた傘が落ちる

「シャーリーちゃん、どうかしたの？」

偶然通ったゼブルがそれを拾う

「ゼ、ブル？」

身体を震わせるながらゼブルを見る

「どうかしたの？」

心配そうな顔でシャーリーを見る

「本当に大丈夫だから」

「（そうか、どこかにいるんだ。ジェレミア・ゴッドバルト）
周りを見回すがどこにいるかまでは分からない」

「」

シャーリーはカタカタと身体を震わせる

「（君はルルーシュさんの光でなくてはならない。故に君は死なせない。危険な賭けだけだね）」
その姿を見て、ゼブルは覚悟を決める

第五十三話 次本編12 ゼブルとラブ アタック！（後書き）

色々フラグが確立しました。

やらなきゃいいのに

第五十四話 次本編13 ゼブルと過去からの刺客（前書き）

パソコンがウイルスにやられたみたいですが。

症状はフォルダやネット、動画が開けません（画像は開けます）。

ご感想を送ってくださった皆様には返信をお返しできず、どうもすみません。

原因はp c s p e e d m a x i m z e rと言つものらしいです。

皆さんもウイルスにはお気をつけください。

（次の投稿は少し空きがあると思います）

第五十四話 次本編13 ゼブルと過去からの刺客

「次は苗と肥料か、結構量があるね。烈風山でくればよかった」
背負っているリュックにはいっぱい園芸用の土、両手には植木鉢とスコップなど計30キロ相当

生徒会主催で行われた屋上にガーデニング

「お持ちしますよ」

「私も」

2人がゼブルの手から荷物を取ろうとする

「女の子に力仕事をさせないのが俺のモットーだよ。これぐらいなら全然大丈夫」

笑顔で2人から離れる

「無理はよくない」

それでもアーニヤはしつこくゼブルの手に自分の手を当てる

「そこまで言うてくれるなら じゃあ、手に右手に持ってるコレをお願いしていい？」

「オーケー」

「私もお持ちします」

プラスチック製の植木鉢をゼブルの手から取る

ゼブルが持っている荷物の中で一番軽い。

「心配してくれてありがとう」

空いた手でアーニヤの頭を撫でる

「うん」

顔を真っ赤にする

「……」

ガーベスがアーニヤを羨ましそうに見る

「もちろんガーベスちゃんもね」

それに気づいてガーベスの頭も撫でる

「はい！」

「きゃああ！」

「テロリストだ！」

建物のあらゆる所から白煙が吹き出ている

「！ ゼブル」

「ゼブル様！」

2人がゼブルを見ると

「何でここにいるんだ？」
ゼブルは驚いたように建物の中を見ている

「ゼブル様？」

「ああ、ごめん　ん、丁度いいね。これに荷物を入れて　よし
！」

近くあつた大きなビニールシートの中に持っていた荷物を入れる

「何をしてるんですか？」

と、言いながら2人も同じように荷物を入れる

「荷物を持つてると逃げられないでしょ？荷物はここに隠して行くよ。
アーニヤちゃん、すぐにスザクが来るだろうから一緒に現場の指揮
をしてね。ガーベスちゃんはアーニヤちゃんといれば大丈夫だから
一緒にここから離れるんだ」
体を軽くほぐす

「ゼブルは？」

心配そうに袖を掴む

「俺は気になることがあるから。それじゃ、また後で」
袖を握っている手を優しく離し、建物の中へ駆ける

「追わなくていいの？」

アーニヤがガーベスを見る

「ゼブル様が真剣な表情でああ言ったら従うのが一番です。無視すると後が大変ですよ？」

ガーベスは微動だにせず、ゼブルの後姿を見つめる

「大変？」

「罰として1週間以上甘えさせてくれませんでした。寂しさに何度泣きそうになったか」

恐怖に体を震わせる

「！ それは大変」

アーニヤも同じように体を振るわせる

「ですから、私たちは指示に従いましょう」
笑顔でアーニヤのほうを向く

「ラジヤ」

いつも通りの様子で答える

ゼブルが向かった建物の中に

「ターゲットはどこにいるの？そいつを殺せばいいんでしょ？」

「ルルーシユだろ？それを追いかけてたジエレミアも見失った。索敵の出来る奴を連れて来ればよかったな」

男女2人が周りを見回しながら誰かを探していた

「なるほど、そういうことか」

追いついたゼブルがその2人に近づくと

「ゼブル・？・プレイエント！？」

2人がゼブルを見て驚く

ゼブルはギアスを複数持っている唯一無二の人間。故に嚮団の人間ならほとんどが知っているのだ。

「今はゼブル・オウサルトね。それより、君たち独断で来たね？ジエレミア・ゴットバルトを派遣したのは確かにV・V。だろうけど、確信も無いのにシャルル皇帝に似ているルルーシユさんを殺すとは思えない。嚮団内の地位向上のためか。さっさと退きなさい。今なら俺のギアスの餌食にならずに済むよ？」

軽く目を伏せる

「いくらあなたでも！」

女の左目にギアスの紋章が浮かぶ

「やっぱり、君たちもギアス能力者か」
「やれやれと別段警戒せずに肩を竦める」

「そう、私のギアスは私の体から発せられるフェロモンを嗅いだ相手を金縛りにする！そして、風下にいるあなたはもう私のギアスにかかっています」

「本当だ。体が動かないや。だから、その君は鼻栓してるんだね」
「笑いながら体の不自由さを楽しむ」

「そして、俺のギアスは目を合わせた相手の心臓を強制的に停止させる」

女の隣にいた男の目にもギアスの紋章が浮かぶ

「ぐあー！」

さっきまで余裕そうだったゼブルが苦悶の表情を浮かべる

「つらいだろ？心臓だけが止まるのは」
「男が満足そうにゼブルを見る」

「ぐがああー！！」

ゼブルが口から血を吐き、体が倒れる

「ふん、死んだか」

「嚮主V・Vにはルルーシュに殺されたと言っておきましょう。そのルルーシュを私たちが殺したとなれば嚮団内の地位も更に上がるはず」

女もニヤリと笑みを浮かべる

「全く、俺の人気は随分低いなだね。知ってたけど、
絶命したはずのゼブルが起き上がる

うつ伏せに倒れていたゼブルだが、ゆっくり体が垂直に起き上がる。

「！！？」

その異様な光景に2人は絶句する

「まあ、君達みたいな野心家にはV・Vのために死んでもらうよ。
忠告も聞かないんだからなお更だ」

口元に付いている血を服の袖で拭き取る

「どうなってるの!？」

女が男のほうを見る

「俺のギアスで確実に絶命したはず、お前のギアスも死んだから解

「けたんだろ!?」
男も女に大声で聞く

「君たちさ、俺のギアスを全部知ってるの? いや、知らないんだろ
うね」

ゼブルの体が見る見る崩れていく

「ひっ!体が歪んでる!?!」

「これが俺の8つあるギアスの1つ、名前はマジック。能力は俺が
ギアスと言う単語を発した瞬間に、範囲内の人間に幻覚を見せるこ
とができる」

建物の形がどんどん歪み四方八方全てが黒く塗りつぶされる

「幻覚だと! (さっき目を伏せているときか)」
困惑しながら周りを見る

「ただし、リアリティー現実味はすごいよ。現に君たちは俺のギアスにかかった
事すらを認識できなかつたでしょ? その上、本物だと思ってしまう
たら最後、俺のギアスの効果は五感全てにまで影響する」
ゼブルが指をパチッと弾くと

「腕が!腕が!」

女の両腕が肘ひじからスパッと斬れる

勿論その部分から大量に血が流れる。

「幻覚だ！信じるな！！」

男が必死で女の顔を叩く

「ちなみに、五感全てに影響するってことは、俺が君たちの五感全てを握っているに等しい。目を覚まそうと顔を叩いても俺がそう意識しない限り意味が無いよ」

ゼブルは笑顔でその光景を見る

「痛い、痛いよ」

女が泣きながら男に縋る

「そろそろ君もお休み」

ゼブルが再び指を弾くと

「ががが！？」

今度は男が舌が勝手に引き抜け、両腕と両足の間接を逆に曲がる

「もういいね」

ゼブルが最後に指を弾き、ギアスを解くと

男と女は五体満足で白目をむいて気絶している。

「虐め過ぎたかな？それじゃあ　永遠にお休み」
服に仕込ませていた冷たいナイフで無慈悲に男と女の首筋を搔つ捌いた

「　俺って、いつからこんな冷酷になったんだろ。それより、シヤーリーちゃんか。急いで着替えなきゃ」

視点　変更　ルルーシュ

刺客としてやってきたジェレミアはルルーシュの行動原理を知り、ルルーシュを主君として忠節を尽くすことを誓った。

ルルーシュもジェレミアを受け入れた。

そして、ジェレミアと別れ、出口に急いでたルルーシュは途中で、腹部を撃たれて倒れていたシヤーリーを見つけた。

「誰がこんなことを？」
シヤーリーの腹部を見つめる

ドクドクと、血が止まること無く流れる。

「ルル？よかった、最後がルルで。私ね、記憶が戻ってすごく怖かったの」

瞑っていた目を開きゆっくり喋りだす

「（記憶が戻っていただと？）今、医者を呼ぶ！」
ルルーシユはポケットから携帯電話を取り出すが

「世界中が私を見張ってる感じで怖かった。ルルはこんな世界で、1人で戦ってたんだね。だから、私は、私だけはルルの本当になつてあげたかった」
それを遮るようにルルーシユの手を握る

「シャーリー」
ルルーシユも携帯電話を置き、その手を握り返す

「私、ルルが好き。お父さんを巻き込んだと知っても、嫌いにはなれなかった。ルルが全て忘れさせてくれたのに、またルルを好きになった。記憶を弄られても、また」
シャーリーの目が一瞬閉じそうになった

「駄目だ！死ぬな！シャーリー！！」
それを見たルルーシユが、ギアスを発動させる

「何度生まれ変わっても、きっと、またルルを好きになる。これっ

て運命なんだよね？」

しかし、シャーリーの腹部からまだ血が流れる

「死ぬなシャーリー！死ぬな！死ぬな！
何度もギアスを発動させるが

「だから、いいよね？生まれ変わっても、またルルを好きになつても。何度も、何度も　好きに。ルルは　私のこと　好き　かな？」

シャーリーに効果は無い。それどころかどんどん弱っていく

「好きだ！愛してるシャーリー！だから、だから死ぬな！死なないでくれ！！君に死なれたら俺は、俺は！」
涙を流しながら必死に懇願する

「嬉しい」

シャーリーも涙を流しながら笑顔でルルーシュを見る

すると、

「そこにいるのは誰ですか？」

近くの階段からツヴァイが昇ってくる

「ツヴァイ・ドウ？助けてくれ！シャーリーが、シャーリーが！！！」
一瞬迷ったがツヴァイに助けを求める

「……」
シャーリーの手を握る力がどんどん弱くなっていく

「テロリストに撃たれたんですか。呼吸はギリギリしてますね。すぐ止血をし、俺が病院に運びます。上着を借してください」
ルルーシュから衣服を剥ぎ取り傷口に巻く

「シャーリー」
ルルーシュは見ることにしか出来ない自分の弱さを恨んだ

「止血は完了です。貴方は下に行って軍の保護を受けてください。彼女は俺が病院に直接運びますので」
シャーリーを抱きかかえ窓から飛び降りる

「……」
ツヴァイが去ってもルルーシュは数秒間動けなかった

「危なかったね、兄さん。シャーリーは記憶が戻っていたんだ」
隠れて見ていたロロが、ツヴァイが完全に消えたことを確認し、ルルーシュに近づく

「そうか、お前がシャーリーを？」

ゆらりと立ち上がる

「うん、兄さんの敵は僕が排除しなきゃ」

「ロロ。よくやってくれた。お前がいなかったら俺の秘密が皆にバレるところだった」
表情を変えてロロを褒める

「だって、もう兄さんだけの秘密じゃないもんね」
ロロは嬉しそうにルルーシュを見る

「そうだな。じゃあ、ギアス嚮団をぶっ壊しに行くか」
いきなり壊滅宣言を言い放つ

「え？」

「黒の騎士団で奇襲をかけて、ギアスの源を殲滅する」

「駄目だよ。嚮団にはまだギアスの使い手が」
ロロがルルーシュを止めようとするが

「逃げているだけじゃ明日は来ない。それに、俺たちが幸せになるためだ」

ロロの目を見つめる

「僕達が？」

少し怯むひるがロロモルルーシュの目を見つめる

「そつだ、VVはお前も疑っている。だから、ジェレミアを送ってきたんだ。幸いジェレミアは俺たちの味方だ。奴とお前の情報を合わせれば居場所は分かる」

「分かった。信じるよ兄さん」

ロロは笑顔で答える

「ああ、だが、まずはシャーリーの様子を確認するぞ。もし、俺がゼロだと知っていたとしてもロロは手を出すな。俺のギアスで忘れさせるからな（このボロ雑巾は最高の死に方で殺してやる！）」

視点 変更 シャーリー

ツヴァイが全速力で病院に走り、病院でシャーリーは手術を受け一命を取り留めた。

「ロロは？」

ベッドの上で目を覚ましたシャーリーが辺りを見回す

「病院です。大量に出血していましたが何とか間に合いましたね。申し遅れました。俺はツヴァイ・ドウと申します。枢木卿やアイネ卿の同僚です」

横にいたツヴァイが簡単に挨拶をする

「どうも（そうか、助かったんだ）」

軽く会釈をしてポーッと天井を見つめる

「さて、他の人と面会なされる前に聞いておくことがあります。君はゼロの正体を思い出してしまっただがために撃たれた。このことに間違いはありませんね？」

ツヴァイが体を前に寄せる

「何でその事を？（それより、この人がアイネの言っていたツヴァイ・ドウ？間近で見ると胡散臭い）」

「ゼロの正体はルルーシュ・ランペルージ。現総督のナナリー・ヴィ・ブリタニアの兄にして、元第17位皇位継承者ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。その他にもヴィレッタちゃんが軍人であることとライのこと、そしてナナリーちゃんのことも思い出したね？」

「あなたは一体。？ ヴィレッタちゃん？ナナリーちゃん？」

ツヴァイの言葉に首を傾げる

「正解。いやあ、最初に教えるのがシャーリーちゃんだと俺も想定外だけど。まあ、いいか」
ツヴァイの仮面を外す

「ゼブル!? いたた!」

目を見開いて仮面を取ったゼブルを見るが

大声を出したがために腹に激痛が走る。

「そう、ナイトオブツ、ツヴァイ・ドウの正体はアッシュフォード学園生徒会副会長、ゼブル・オウサルトだったんだよ。驚いた?」
取った仮面を人差し指で器用に回す

「何でルルがゼロだって知ってるの? ライ君やナナちゃんのこともゼブルは覚えてるの? それにヴィレッタ先生も」
聞きたいことがあり過ぎてパニックに陥る

「今説明すると混乱するから止めよう。これから、君にルルーシユさんがしたと同じことをする」
ゆっくり立ち上がり、シャーリーに近づくと

「え? それって」

「そう、ルルーシユさんのことを忘れさせる。俺のギアスでね」

目にギアスの紋章を浮かべる

「いやよ！何でまたルルを忘れるなくちゃいけないの！？私はルルに」

シャーリーが目を手を当てて見ないようにする

「君がルルーシュさんがゼロだと知っていることがロロにバレたから君は撃たれたんだ。同じことを繰り返すつもりかい？例えルルーシュさんが説得したとしてもロロには無意味だろうしね。また、ルルーシュさんに失う苦しみを味あわせたいの？」

強引にギアスをかけよとはせず、説得を続ける

「……」

「君はルルーシュさんを全て許した上で、ルルーシュさんの支えになることを決めた。まあ、ロロに撃たれたけど、ルルーシュさんにもその意を伝えることも出来た。そして、ルルーシュさんも君の想いを受け入れた。それに記憶を消すと言ってもルルーシュさんとは違い一時的だから大丈夫。全てが終わったら、君はもう一度ルルーシュさんに告白するといい。それに今の君がルルーシュさんの記憶がないと分かればロロも君に危害は加えないだろう」

「ルルはどう思うかな？」

手をゆっくり目から離す

「そりゃ、自分を好きだと言ってくれた人が自分を忘れてるんだからシヨックだろうけど、より強く覚悟を固めるだろうね。ゼロとして、世界のため」

「やっぱり、私ってルルが大好きなんだな。ルルのためって言われたら断れないもん。うん、いいよ」

シャーリーが笑顔でゼブルに答える

「いいね、シャーリーちゃんのそんな一途なところが好きだよ。それじゃあ、始めるね（他にも念のため色々設定を追加しておくか。ルル・シュさん、シャーリーちゃんとココちゃんどっちを選ぶんだ？迷う姿が眼に浮かぶな。楽しみ楽しみ）」

視点 変更 ルル・シュ

事件から翌日、生徒会メンバーでシャーリーのところへお見舞いに行った。

「シャーリー！」

「大丈夫ですか！？」

「お見舞いだよ」

皆が次々とシャーリーの病室に入る

「心配しすぎだよ。テロリストの流れ弾に当たっただけでシャーリーが少し恥ずかしそうに皆を迎える」

「何言ってるんだよ！腹に当たって流血したんだろ？皆で心配してたんだぜ？なあ、ルルーシュ」

リヴァルが気を利かせてルルーシュを前に押す

「シャーリー」

心から嬉しそうな顔でシャーリーを見るが

「？ 貴方は誰ですか？」

シャーリーが首を傾げてルルーシュを見る

「！」

ルルーシュだけでなく周りの全員も驚いた

「おいおい、何を言ってるんだよ。ルルーシュは心配してリヴァルが再び前に出るが」

「ルルーシュさんって言うんですか？リヴァルの友達？私、シャーリーよろしくね」

ルルーシュに笑顔で挨拶する

「シャーリー、本当に俺を覚えていないのか？」
震える声で聞く

「だって、初対面ですよ？ 私たち」
困ったように聞き返す

「……」
全員がシャーリーとルルーシュを見る

「ふああ、皆ごめんね。何だか凄く眠いから寝かせてくれる？」
シャーリーが欠伸をかみ殺し、ウトウトと目を擦る

「皆さん、こちらに」

シャーリーの専門医と思われる男が病室の扉を開けて手招きをする

相談室に医者に向かい側の椅子に全員が座る。

医者の目の前にはルルーシュで、その両脇をミレイとゼブルが挟んでいる。

「どう言うことですか！？」
ルルーシュが医者に寄る

「考えられるのは記憶障害ですね。あることを強く考え過ぎてその部分だけ欠落したのかもしれませんが。それだけでなく、1日のほとんどもを寝ないと身体が持たない状態になっています。ご覧の通り脳には異常はありません」

脳のレントゲン図を見せるが

素人のゼブルたちには分からない。

「寝たきりってことですか？老人とかがよくなるって言う」

ミレイが医者聞く

「そうです。このままでは筋肉が低下し、あまりよろしくない状態になるおそれもあります」

医者が頷く

「精神的な問題かもしれないね」

ゼブルが呟く

「精神的？」

「人間は寝ている間に活動中に経験したことを反復する。つまり、寝ることで欠落した部分を必死で思い出そうとしているのかもしれない。まあ、あくまで俺の考えですがね。先生は医者としての立場から俺の意見をどう考えますか？」

ゼブルが医者ほづを見て、聞く

「確かに、君が彼女にとってそれ程の存在ならば有り得ない」
「ことではないですね」

医者もゼブルの考えに頷き、ルルーシュを見る

「でも、その記憶障害って治るんですよ？」
「恐る恐るガーベスが聞く」

「わかりません。一生治らなかったと言っ例もあります」
「医者もつらそうに答える」

「そんな」
「ほとんど全員が息を呑む」

「つらいとは思いますが自然に戻る事を待つしかありませんね。ゆ
っくり治していきましょう」
「医者は皆を安心させるために笑顔で言うが」

「……………」

ゼブルたちはルルーシュと別れ病院を後にした。

ルルーシュはシャーリーの病室に入る。

しかし、幸か不幸かシャーリーは寝ていた。

ルルーシュは近くの椅子に腰掛け

「シャーリー、俺も君が好きだったのかもしれない。君の暖かさに何度も安心した。君の明るさに何度も救われた。君の笑顔に何度も勇気を貰った。君はギアスに振り回された。俺が再び君に近寄れば君はまたギアスに振り回されるだろ。だから、シャーリー　君とはこれでお別れだ」

そっとシャーリーに口づけをする

「君を振り回したギアスは、同じ悲劇を繰り返さないためにも俺が根絶やしにする。俺に出来る贖罪はこれだかだ。さようなら、シャーリー、来世こそ俺は君を　」

（あのルルーシュって言う人は何だろう？何だか懐かしい気がする。向こうも私のことを知ってるみたいだし、ミレイさんやリヴァル、他の皆も私があの人のことを知らないことに驚いてたな。何でだろ？　んん、眠くなってきた。まあ、私の思い過ごしかな？うん、そうだよな。寝よ寝よ）

（シャーリーが記憶を失っていることに関しては嘘は無かった。兄

さんも心なしかホツとしている。それより、嚮団から来た屈強のギア使い2人が僕達がいた駅と同じ駅で死んでいた。誰が殺したんだ？あそこにいたのは僕と兄さん、ジエレミアにシャーリーだけだったはず。ジエレミアなら確かにギアスキャンセラーがあるから可能だ。犯人はジエレミアか？だけど、どうにもしつくり来ない。一体どうなっているんだ？)

(ルルーシュさんはこれからギアス嚮団本拠地を攻撃するはずだ。今回ばかりは本気で死なせたくないから、ガーベスちゃんの力を借りないとね。次に、問題はS・Sだ。コードはC・CとV・V、S・Sの3人が持っている。この3人でなければ使えないのだとしたら、S・Sを隠すか？とにかく、V・Vを助けてからだ。V・V、お前を絶対に死なせはしない。やっと、俺はお前に恩を返せるんだ)

番外編 ゼブルと神ゼブル（前書き）

結局原因不明のバグにより買い替えが決定、親戚からパソコンを売ってもらいました（右クリックからワードまで全て英語なので大変です）。

2万円ですが、ちょっと損した気分です。

では、番外編をどうぞ

番外編 ゼブルと神ゼブル

昔昔、世界が生まれる前、何も無い空間に大きな木の種があった。

その種はゆっくりゆっくり大きくなり、そして大きな大きな世界樹になった。

しかし、世界樹には友達がいなかった。

世界樹は寂しかった。そこで樹は自分の一部から新しい2つの生命、アダムとイブを作った。

アダムとイブは世界樹の友として生きましたが、人と同じ寿命であった2人はすぐに老いた。

しかし、死の間際に2人は新たに9つの生命を生んだ。9つの生命はそれぞれ、火、水、土、金、木、空、雷、光、闇を司る源王神と呼ばれ、彼等が世界で最初の神となった。

源王神はそれぞれ世界樹のために大地を生み、海を生み、大気を生み、火を生み、鉱石を生み、電気を生む、草花を生み、閃光を生み、暗闇をいう生んだ。

それでも世界樹は寂しかった。

困った源王神は世界樹のために力を合わせ更に24つの生命を作った。それが24王神と呼ばれる神たちだった。そして、9源王神と

24王神は力を合わせて世界樹のためにもうひとつの世界を作った。

そして、その新しい世界で生命は生まれていき、育っていった。

それを見て嬉しがった世界樹は神々と共に次々と新しい世界を作っていた。

だが、当時の神々は作った世界に干渉は出来なかった。ただ眺めるだけしか出来ないのだ。

そして、世界樹は他の世界の成長を飽きることなく見つめ続けた。

世界樹を満足させ、暇になった神々は名前と役職を作り繁栄を築きました。

神々が作った世界は色んな世界がある。

恐竜と呼ばれている生物が弱肉強食を行っている世界

勇者と呼ばれている生物が魔王と呼ばれる悪い生物から世界を守るため戦う世界

等など多くの世界があるが

何故かほとんどの世界に人間と呼ばれる種族が存在していた。

人間がいない世界も確かにあるが、それでも10分の9以上の世界には良かれ悪かれ人間と言う生物が存在していた。

そのことに疑問を覚えた24王神の1人が、他の神に秘密で世界を渡ることの出来る世界の渦と言うゲートを作った。

そこでその神は色々調査をしたが、人類は世界樹が作った最初の生命、アダムとイブと同じ型の生物であることを掴んだ。

しかし、それだけでなく誰かが世界に細工をしていることも分かった。

神がその誰かを探し回ってすぐ、世界の渦は原因不明の暴走が起きた。

世界は混沌に包まれ、いくつかの世界は崩壊に陥りそうになったが世界の渦を作った神が渦の内部から渦に干渉し世界の渦を元に戻しました。

しかし、神は神々の世界に戻ることなく、死亡扱いになった。

そして、その神が作った世界の渦に他の神々が興味を持ち、頻繁に使うようになった。

神々は世界の渦を使い、人間にその存在を認識させ、更に人間との間に子を作ったりもした。

しかし、多くの世界の内数世界に科学と言われる存在が流れると神々は何故かその世界に存在することが出来ず、その世界にいた神達は消滅していった。

しかし、科学が発展した世界にいるのに消滅しない神もいた。

その数人の神々とその子孫達は消滅しないことがに他の神々は目を
つけ、世界の渦の守り手と呼ばれる役職を与えた。

守り手の仕事は科学が発展しそうな世界のチエックと暴走が起こっ
たときの対処。子々孫々に渡って行われた職務である。

これで神々は安心して世界を回れるようになった。

しかし、神々は消滅した神々のことで怖くなりそこまで他の世界に
干渉しなくなった。

そして、数百年後には、世界の渦の守り手以外の神は完全に干渉し
なくなった。

そして世界の渦を作った神は一命を取り留めていたが今にも死にそ
うだった。

しかし、神は空間と時空を超え、生まれたばかりの人間の赤子の中
に入って何を逃れいた。

その赤子がいる世界には科学が存在する世界だが、赤子の中にいた
からなのかその神は消滅せずに済んだ。

神は赤子の中で傷を癒す内に、赤子は成長し少年になった。

何かと世話が焼ける少年に神は、弱っている力で微弱ながらも手が
を貸したり、話相手になりながら少年の成長を中で見守った。

しかし、この少年の感情が大きく揺れた時、神は体を自由に使えることが分かった。

感情の波が収まれば自然に元に戻る上、この状態でも消滅することは無かった。

だが、少年が大きくなるにつれ神は干渉が出来なくなっていった。

少年が13歳になった時には神は出て来れなくなった。

そして、神が少年の中で一切干渉出来なくなつてから数年、少年が世界の渦で他の世界に飛ばされてしまった。

そこは少年の知る世界だった。科学が発達している世界ではあるが、何故か前の世界とは違い神は少しずつ干渉できるようになった。

しかし、少年が神とは別の人格を7つも作ったため神は更に奥に追いやられてしまった。

そして、少年の中にいる神とは別の神が少年に接触し、その神が与えた力を回復した力を使い数十倍に上げた。

少年はどんどん世界の未来を変えていった。

神はそれを見つめる、少年が間違いを起こさない限り

少年が青年になり、老人になり、死人になるまでずっと見つめるだろう。

それが、神の願いでもあった。

これからも神は少年を見つめるだろう。永遠に

【これは大ヒットするだろ】

【 ヒットするわけないと思うけどね。それよりハッピーと同じ神だったとは】

【神にも色々いるからな。だが、確かにあの鳥とは同郷だな。まあ、見たところ俺の数兆年後のやつだが】

【神って寿命は無いんだ。羨ましい】

【あの女も言ってただろ？一応は寿命はある。源王のジジイ共は50億年ぐらいで俺は約40億年ってところだな】

【 十分長いと思うけど】

【人間からみたらそりゃあ長いけどな】

【ハッピーは知ってんの？てか、なんて呼ばれたい？ゼブルだと被るじゃ】

【まず、あの鳥は俺に気づいていない。次にゼブルは元々俺の名前だ。それでも、言うなら裏人格だからリバーズでいいだろう。それにしても俺の作った渦を守ってるとは面白い因縁だな】

【で、リバーズは他の神々のいる世界に戻りたいとか思わないの？】

【帰っても別段やることはないしな。それに人間を増やそうと意図した神ももう死んでるだろうからなおさらだ】

【昔の神ってことはやっぱり力も強いの？】

【あの鳥が俺に与えた力は本当はもっとしょぼっちいもんだが、俺の力を俺が上乘せして今の力になってるんだ。それにあの鳥は神々の加護って言ってたがそれは俺個人の力だ。俺はあの鳥の数十倍の力があるからな】

【運動神経の向上なんかもリバーズの力？】

【ああ、凄いだろ？】

【惚れちゃいそうだ】

【キモいぞ】

【うるさい】

【まあ、これから俺は俺の体に住むことになるからな。よろしくな、俺】

第五十五話 次本編14 ゼブルとギアス 狩り (前書き)

注意！今回はかなりオリジナル設定が多いです。

まあ、前から多かったんですが今回は特に多いのでご注意ください

第五十五話 次本編14 ゼブルとギアス 狩り

ルルーシュはシャリーリの復讐のために零番隊とジェレミア、ロロを率いてギアス嚮団の殲滅に向かった。

非戦闘集団である嚮団には戦力はなく順調に進んでいた。

しかし、V・Vがジークフリードに乗り込み黒の騎士団に反撃を始める。

V・Vも順調に零番隊の戦力を減らしていたが、数日前に潜入していたコーネリアがジークフリードの弱点を突き、V・Vは逃げるように嚮団内の大きな扉の前に向かっていった。

「元のポイントに戻っていたのかV・V…！」
後を追っていたルルーシュが塵気楼の中から叫ぶ

「ふふ」

V・Vが薄く笑みを浮かべる

すると、大きな扉から不気味な白い光のようなものが塵気楼を包み込む

「しまった！これは神根島と同じ」

気づくのが遅かったのか塵気楼ごと光は扉の中へと戻っていく

「やれやれ、傷が深いか」

それを見届けたV・Vは自身の体を見てため息をつく

「助けに来たぞ。V・V。」

ツヴァイの服装を身にまとったゼブルがVVの前に立つ

「ゼブル？どうしてここに？」

目の前のゼブルを驚いたように見上げる

「虫の知らせってやつだな。（そんで、実際に来てみたらこのざまか）それにしてもやばいな、すぐに治すぞ」

ゼブルがV・Vの怪我を見て治そうと寄るがと

「無駄だよ」

V・Vが手を上げゼブルを止める

「何言ってるんだ？コードが無くなったって治療をすれば治るだろ？」

【おい、何故かは知らないがこいつ魂がないぞ】

男（以降リバーズ）が中からゼブルに言う

「魂が無い？」

思わず声が出た

「よく分かったね」

V・V・Vが感心した様にゼブルを見る

【瀕死の怪我でも魂があれば何とかなるが、魂が無いやつを俺の女も治せねえはずだ。もちろん俺もな】

「何で魂が無いんだ？」

ゼブルがV・V・Vのほうを見る

「前に言っただろ？僕はCの世界と繋がってるって。それってつまり、僕はCの世界と繋がるコードがあるから不老不死だったんだ」

「？ 不老不死のコードだから当たり前だろ？」

ゼブルにはV・V・Vの言っていることが理解できない

「そうだね。残りの時間で僕が調べて分かったことを教えてあげよう」

体を起こし近くの瓦礫に寄りかかる

「Cの世界は知ってるよね？人の記憶と意思が現在過去を問わず集まっている場所。そして、そのCの世界は元は1人の人間だったんだ」

「人間？この世界が」
ゼブルが目を丸くする

「そう、今から2016年前だね。1人の人間が生まれた日から西暦が始まり、その1813年後に皇暦が始まった」

皇暦は初代ブリタニア皇帝リカルドが皇帝に即位した年から始まった。

そして

「西暦が始まったのはJesus Christ。つまりイエス・キリストが生まれた日だったな」
ゼブルが思い出したように呟く

「そう、神の子と言われたイエスは裏切り者のせいで処刑された。しかし、死んだイエスの骸の中からは2人の赤子がいたんだ」

「男の腹の中に子供がいたのか？」

ゼブルが何を想像したのか気持ち悪そうに口元に手を当てる

「ううん。聖書なんかでは男とされているけれど、現実ではイエスは女性なんだよ。しかも、処女だったらしい。で、イエスの中に赤子は男女1人ずつ、それを見つけたイエスの信者が2人をアダムとイブと名づけ育てた」

【……】
リバーズがゼブルの中で話を聞く

「そして死んだキリストは、この世界とつながった別の世界となつて記憶と意思を集め始めた。この扉の向こうでね」
V・Vが扉を見て言った

そこにある扉の前はゼブルとV・Vが最初にあつた場所でもある。

「何故？」

ゼブルも軽く見た後、視線をV・Vに戻す

「さあ、そこまでは。そして、その世界を僕たちの祖先はこの世界と呼んだ」

「なるほど、この世界つてのはキリストの世界つて意味なのか」
ゼブルが納得したように頷く

「うん、話を戻すね。さっき言ったキリストの子達は大きく育つたけれどある一定まで成長するとそれ以降は成長しなくなった。それだけでなく、瀕死の怪我を負っても時間が経てば自然に治った。つまり2人は生まれながらにしてコードを持っていたんだ」

「世界最初のコード保持者か」

「そしてそれから千数百年後、初代ブリタニア皇帝リカルドはイブからコードを押し付けられ、その更に数百年後に、アダムからコードを受け継いだW・W・と呼ばれる男から僕はコードを受け継いだ」

すると、ゼブルの視界が変わる。

そこには少し若いS・S・と黒い修道着を来た女性がいる

「田舎の教会でリカルドにギアスを与えたイブ」

「リカルドそのギアスを使い数々の難局を乗り越え、皇帝となった」

「ギアスは暴走することがなかったが一定以上のギアスを持っていたりカルドにシスターはコードを押し付け、リカルドはS・S・となった」

次にV・V・と長身の男（以降W・W・）、それに子供の頃のシャルル・ジ・ブリタニアらしき人物が現れる

「僕らとシャルルはこのW・W・からギアスを貰い、数年後に一定以上のギアスを得た僕が無限地獄から抜け出したかったW・W・からコードを受け継いだ」

V・V・が言い終わると元の嚮団に戻る

「（S・Sの正体も知っていたのか）C・Cは何なんだ？」

「C・Cのことも知ってるんだ。彼女はね、他の世界から来たコード保持者なんだよ」

「他の世界？」

ピクッとゼブルが反応した

「君とは違ってこの世界とほとんど同じ平行世界パラレルワールドだね。C・CはリカルドことS・Sと同じくイブからコードを押し付けられ、僕が生まれる百数年前にこの世界に何故か来てしまった。本来ならS・Sのコードを使って嘘のない世界を作るつもりだったんだけど、探そうとしても見つからず断念しようとした時に異世界から来たC・Cの存在を知り接触。そして、僕とシャルルを含めた3人と共に嘘の無い世界を作ることを誓った」

「（初めてV・Vと会ったときに言っていた前例はC・Cの事だったのか）」

「僕はCの世界とコード保持者が繋がっていることに目をつけた。Cの世界にコードを使って干渉し、イエスに嘘の無い世界を作らせようとしていた。けど、シャルルはそれとは別の方法を考えた。それは、キリストを殺し、代わりに自身がCの世界になって嘘の無い世界を作る。けど、コードは2つ以上必要ということで僕のコードも取られちゃった」

自虐的な笑みを浮かべる

「何でお前からコードを奪ったんだ？お前は唯一無二の兄弟だろ？」

「僕がシャルルに嘘をついたからだよ。嘘のない世界を作るのに嘘つきはいららないでしょ？」

「俺も意識的にも無意識的にも嘘をついている。しかし、それが人間が人間である以上捨てることの出来ない業だ」

「僕も今更だけど気づいたよ。知らぬうちにシャルルに嘘をついていたんだ。人間はどうやってても嘘をついてしまう生物なんだね。でも、それって悪いことばかりじゃないんだよね。誰かのために嘘をついたり、誰かを救うために嘘をついたりさ。ぐっ！」

体に走った激痛に額に皺を寄せる

「V・V・！？」

ゼブルがV・V・に近づき背中を支える

「そろそろ限界みたい。こんな事頼める立場じゃないけど僕の変わりにシャルルを止めてくれるかい？」

息を荒げる

「何言ってるんだ！俺はお前を護るためにここに来たんだ！」

そう言つと急いで全て遠き理想郷を出し、アウトロンV・V・の上に置く

「無駄だよ。僕たちコード保持者はコードを受け継ぐと同時に自身の魂はcの世界に取られ代わりに擬似的な魂をcの世界から借りる。その擬似的魂が不老不死の効果がある魂なんだ。でも、この擬似魂はコードが他に移ると自動的に消滅する。つまり君が言ったように僕には魂が無いんだ。魂を作るとは神でない不可能だ。それに僕は生き過ぎたのかもしれない」

【何とかならないのか! ?】

ゼブルがその神であるリバーズに聞く

【無理だな。俺とあの鳥の力をフルに使っても魂までは作れない。俺の作った別人格を戻せたのは魂があったからだ。それに魂の無い状態でここまで長く喋れたのが異常なぐらいだ】

「そんな」

顔から血の気が失せる

「でも、嬉しいな僕の最後を君が看取ってくれるなんて」
ゼブルの右手をV・Vが握る

「う、うう」

ゼブルの瞳から涙が零れる

「ほら、泣かないで。それで、僕が死んだらどこか静かな場所に埋めてくれないか？僕にピッタリな薄暗い場所に。そして、生まれ変わるなら、今度は女の子がいいかな？」
ゼブルの頬に血に染まった手を当てる

「V・V・」

涙を流すのを我慢しようとするが余計に流れてくる

「最後に 言うね 僕 名前を 僕の名前は」
最後の力を振り絞ってゼブルに自身の本当の名前を教える

「V・V・！ V・V・！ くっそおおお！！」

響団内全域に響くほどの悲痛な叫びを上げる

ニルジヨワにある孤児院

「お兄ちゃん是谁？」
「何を持つてるの？」

孤児院の子供たちがゼブルが持っている白い袋を興味深々に見つめる

「お姉ちゃんを呼んでくれるかな？」
いつもの笑顔で子供の一人に言う

「お姉ちゃんって、マキお姉ちゃん？」

「そうだね。お願いできる？」

「仕方ないわね。行きましょう」
サンが友達らしき女の子とともに孤児院内に走っていく

「（あの子も最初は両親が死んで悲しんでいたのに、あんなに元気になったのか）」
サンの後ろ姿を虚ろな目で見つめる

数分後

「お待たせしました。この孤児院の責任者のデウス・エクス・マキ
ーナと申します。私に何か御用ですか？」
エプロン姿のマキーナがゼブルの前に立つ

「俺が誰か分かるかい？」

「（認識開始）！ まさか
ゼブルを細かく見つめ、気づく

「子供たちを建物の中に入れて、カーテンを閉めてくれない？少し
ここでやりたいことがあるからさ」

「 畏まりました」
少し考えたが、一礼するとすぐに子供たちを建物中へと入れる

すると、ポツポツと雨が降り出した。

数分かけて孤児院の敷地内にある広場の隅にV・V・を埋めその上
に墓石を立てた。

そこには『シュバルク・ジ・ブリタニア此処に永眠す』と書かれて
いる。

シュバルクとはV・V・の皇族名。

V・V・を含む昔の皇族たちは本名とは別に皇族としての名前を持
っていた。

シュバルクはその皇族名で本名はまた別なのだが、ゼブルはここに
それを記す気はなく、自分の胸にだけ、残すことを決めた。

「ここなら少しうるさいだろうけど、明るいし、子供たちもいるから寂しくないだろ？、俺も来れる日は出来るだけ来る」
その墓の前に座り傘も差さずに雨に打たれる

「ご主人様、お体を冷やしてしまいます。どうか敷地内に入ってください」

傘を差したマークスがゼブルの横に立つ

「君は子供たちの所にいるんだ。何かあったらどうするつもりだい？」
振り向かず聞く

「あの子たちにはルクレティア様やサンチア様がいます。それに、侵入者はご主人様が作った防衛システムが容赦なく襲います。外部からの攻撃の成功率は2、3%ですのでここに来ました」

「それでもだよ」

「何をお埋めになったのか大体は予想出来ませんが、何故ここにお甲いになったのですか？」
墓石の前にしゃがみ手を合わせる

「寂しくないようにだよ。本人は薄暗くて静かなところを望んでただけだよ」

ゼブルが愁いを帯びた表情で言う

「久しぶりだな」

急に後ろから巨漢な男が声をかける

「！（気配が分からなかった？）」

「S・S・か」

マキーナは隠していた武器を持ち警戒心を見せるがゼブルが止める

「我輩が送ったあのガキは元気か？血の気が多いからな
いつものような明るい笑顔でゼブルを見る

「別の俺の部下として働いてるよ」

「それは結構なことだ。しかし、こんな所に仏さんを埋めるとは
シュバルク・ジ・ブリタニア。現皇帝シャルル・ジ・ブリタニア
の兄だったな。かなり前に死んだはずだが」

S・S・が墓標を見る

「コード保持者だったんだよ」

「そのコード保持者が死んだということは」

S・S・が真面目な顔をしてゼブルに聞く

「弟が奪った」

「なるほどな。それにしてもつくづく我輩の一族はギアスとの関係が続くもんだ」

S・S がうんざりそうにため息をつく

「（確かに。S・S、ライ、V・V、シャルル・ジブリタリア、マリアンヌ・ヴィ・ブリタリア、ルルーシュさん。何か原因でもあるのか？）」

「（コード？ギアス？確認不能）」

話している内容を理解できないマークスがどうしようかと迷う

「S・Sは少しの間この施設に居てくれ。本当ならアクエリオンのほいが安全だけど、あそこの地下に作っているものを知られてはいけない。それに、ここならシャルル・ジ・ブリタリアが刺客を送り込んできてもマキーナがいる限り大丈夫」

「長旅の疲れを取るには丁度いい。お主の言うとおりでしょう」

S・Sは肩を回すと、ボキボキッと鈍い音が鳴る

「俺はこれからいつものように戻る。もちろん、君も俺の正体はまだ秘密にしてもらいたい」

ゼブルは立ち上がりマークスを見る

「分かりました。では、S・S・様はこちらに」

「うむ、お主も風邪を風邪をひかぬようにな」

2人は軽く挨拶をし、孤児院内へと向かった

「（V・V・俺はお前を救えなかった。約束をしたのに護れなかった。だが、お前との誓約はどんなことがあっても護ってみせる。そして、お前の形見でもあるギアスはお前も望んでいた平和な未来のために使わせもらう。俺の瞳の中で俺の行く道を見守ってくれ）
ゼブルもV・V・の墓の前で覚悟を硬くし、その場を去る」

「あやつは行ったか。墓を荒らすつもりはないが念のため　ふむ、まだいけるか？あの少年の落としものだが、使ってみる価値はある　それにしても真っ黒じゃのう、それに??まあ、いい。速く済ませねば　これでいいだろう。あやつには恩があるからこれで生き返ればそれも返せる。さて、院に戻って寝るか」

第五十六話 次本編16 ゼブルと超合集国 決議 第17號(前書き)

15話のCの世界は飛ばします

「よし！ブリタニアのこの動きは皇帝が不在だということ。あの時、向こうの世界に置き去りになったようだな。あいつが言ったことは気になるが、今はナナリーの安全を喜ぶべきか」
ルルーシュが笑みを浮かべる

屋気楼ごと扉に取り込まれたルルーシュはシャルルがV・Vのコードを所持していることを知った。

そのシャルルにはギアスはもちろん、持っていた銃も効かず絶望していたところにC・Cが現れる。

不老不死のコードを持つシャルルからルルーシュを救うため、C・Cはルルーシュを自分の精神世界へ送り、シャルルにコードを渡そうとする。

しかし、C・Cの精神世界でC・Cの過去と願いを知ったルルーシュがC・Cを説得。

C・Cはその説得でシャルルから離れ、2人は扉から出ることが出来た。

その時にシャルルは脱出出来なかったらしい。

「あの、私は何をすれば？」
今まで静かだったC・Cが恐る恐るルルーシュに聞く

「そうだな、服を裏返しにして歌いながら片足で踊ってもらおうか」
シャルルが消えたことに上機嫌なルルーシュが答える

「はい、ご主人様」

その言葉にC・Cは臆することなく服を脱ごうとする

「ま、待て、冗談だ！」

ルルーシュがハツとしてC・Cを止めようとする

「ごめんなさい！だから、痛いことをしないで」

急に地べたに座り込み、頭を腕で覆いビクビクしながら必死で誤る

「（完全にギアスに関わる前の奴隷の少女に戻っている）安心しろ、俺は君に酷いことはしない。約束だ」

笑顔でC・Cを見る

「」

その笑顔に少し安心したのかC・Cは無言で頷く

C・Cは扉から出た後何故か記憶が無くなっていた。

「（全く、どうしたもののか）ん？何だジェレミア？」「
困っている所にジェレミアから通信が入る

「ルルーシュ様、少しお話が」

ルルーシュがジェレミアに呼ばれ部屋に入るとそこには拘束された
コーネリアがいた。

響団殲滅の時にジェレミアが他の団員に隠して部屋まで運んでいた
のだ。

「ルルーシュ、お前はその呪われた力で何を求める？」
拘束をされているにもかかわらずコーネリアは普段と同じような態
度でルルーシュに聞く

「姉上。俺はただ妹を、ナナリーを助けたいだけなんですよ」

すでにゼロの正体がルルーシュであることと、ギアスを所持してい
ることをコーネリアは知っている。

そのためルルーシュは素顔でコーネリアに接する

「何を今更」

ルルーシヨの態度が気に入らないのか睨みつける

「どう思つかは姉上次第です。ジェレミア、少し手伝ってもらおう」とがある。来てくれ」

仮面を付けて部屋から出る

「イエス・ユア・マジエステイ」

コーネリアに一礼してから部屋を出、鍵を閉める

「 やつと行ったか」

天井裏からマックスが部屋に入る

「貴様は！」

コーネリアが顔を上げてマックスを見る

「馬鹿ヤロウ、静かにしろ。旦那に聞かれたらどうすんだよ」

コーネリアの頭に軽いチョップを当てる

「貴様、私にそのようなことをして 覚悟は出来ているんだろうな？」

屈辱だと言わんばかりの表情でマックスを睨む

「拘束されてるくせに何言ってるんだよ。それよりいいもんやるよ」
ポケットから何やら小さい箱を取り出し、コーネリアの胸元へ入れる

「どこを触っている！」

コーネリアが更にものすごい形相で睨みながら上半身を激しく動かす

「直接は触ってねえだろ？それと、拘束は左腕に仕込んでる刃物を使えば大丈夫だろ？それは扉を破壊する時にでも使え」
ため息を吐きつつ左腕を見る

表面上は見えないがコーネリアの服の前腕の内部には隠し刃が仕込まれている。

「！ 何故分かった!?!」

驚いたようにコーネリアがマックスを見る

「うるせえってんだよ。それと勘違いすんなよ？俺がオマエを助けるのは、オマエが死にじまったら悲しむ奴がいるからだ。時は金なり、ソイツの青春を一年以上も貰っちゃったんだ。このぐらいはしなくちゃいけねえだろ」

もう一度軽くチョップを当て、うんうんと1人で頷く

「？ 何を言っているんだ？」

「まあ、オマエは分からなくて当然だ。じゃあな、分かっていると

は思うが俺が脱走の片棒を担いだことは言つなよ。色々面倒だからよ」
手を振りながら来たときと同じ天井裏から部屋を出る

「（何を考えているんだ？私を逃す手助けをするとは。いや、それよりあいつはゼロガルルーシュだと言う事を知っている様子だった。いや、あいつは情報収集が異常なまでに上手いと聞いたことがある。もっと分からないのは何故逃がす手を貸す？私が死んだら悲しむ人間？いったい誰だ？本当に何者なんだ）」
マックスの去った部屋で1人で黙々と考えに耽る

視点 変更 ツヴァイ

ナナリーはカレンの収容されている牢にいた。

しかし、カレンは囚人とは思えない衣服に身を包んでおり、牢獄らしくない透明なガラスケースのような物の中にある椅子に座っている。

ナナリーとカレンは雑談を楽しんでいたが

「おお、話には聞いていたが、こんなお嬢ちゃんが黒の騎士団のエンジニアとわね」
ルキアーノが面白そうにカレンを見る

黒の騎士団が攻め込むとしたらエリア11しかないと考えたシュナイゼルは、ビスマルクとルキアーノを連れてエリア11につきさきほど到着した。

ルキアーノは黒の騎士団のエースが捕まっていると聞いて興味本位で見に来たのだ。

「ここに入る許可は出してはいないはずですが？ブラットリー卿」
ナナリーが機嫌を悪くしたのか不機嫌そうにルキアーノに聞く

「これは失礼を」
心にも無いことを言う

「（ルキアーノ？）そう、あなたがブリタニアの吸血鬼さん」
名前を聞いてカレンが思い出したように呟く

「ここが戦場なら、あなたの血も吸えたのにな。残念だよ」
本当に残念そうな表情でカレンのほうへ歩み寄る

「で、私は本国送りってことかしら？」

「いやあ、人質としてここにいてもらう。人質に必要なものは何だ？そう、命だ。命さえあればその体に何があるうとも「プライドは

無いのか？ブラットリー卿、武器を持たない女性を相手に「おやあ？」
ナイフを取り出したルキアーノが言い終わる前にライがナナリーを
通り過ぎルキアーノに近づく

「（ライ！？）」

カレンはこんな状況で無ければ喜んでいただろう

「甘いすな。皇族の皆さんは」

ナナリーとライを見てため息を吐く

「プライドと誇り無き騎士はただの殺戮者だ。いや、君の場合は骸
を漁るハイエナ以下だな」

ライはいつもより険しい表情でルキアーノを見る

「いくら皇族であろうともそれ以上の侮辱は」

ルキアーノも眉間に皺を寄せて、隠していた刃物を持つ

「短気はいけませんよ。ブラットリー卿」

ルキアーノの背後にツヴァイが現れる

「お前は！」

驚きのあまりルキアーノは持っていたナイフを振り向きながら刺そ
うとする

「武器をしまいなさい。俺に勝てないことは貴方は身をもって知っているはずでは？」

それを素早く奪い、壁に投げつける

「ちっ！　だが、アンタ雰囲気が変わったな。誰かを殺すことを目的としているな？」

ルキアーノが打って変わって嬉しそうにツヴァイを見る

「……」

ツヴァイは無言のまま

「ふん、戦場では背後に気をつけるんだな」

吐き捨てるように言つとルキアーノはその場から去る

「ツヴァイさん」

ナナリーが心配そうにツヴァイに近づく

「俺はもう大丈夫です。アリス、ギルフォード卿がナナリー総督を探していましたので連れて行ってください。それから殿下も、ロイド博士が探していましたからすぐにも行ったほうがいいですよ」「ライと近くの柱に隠れていたアリスに言う」

「分かった」

ライはカレンを一瞥してから出て行き

「（何で私がいることが分かったのかしら）ナナリー、行く」
アリスはそそくさとナナリーの車椅子のハンドルを握り早足で出て行く

「で、私に何の用かしら？ブリタニアの暗殺者さんが置いてある椅子に乱暴に座り足を組む」

「1つだけ質問します。貴女は何故シユタットヘルト侯爵に反発するのですか？俺は何かと接する機会が多いので分かりますが、あの人は頑固ながら尊敬できる人間です」
ツヴァイが地べたに座り込む

これは、ツヴァイとして接したゼブルの気持ちでもある。

ナイトオブラウンズになった当初、家柄を重んじる貴族達は、仮面で素性を隠すツヴァイをあまりよく思っていなかった。

しかし、カレンの父親は違い、ツヴァイに積極的に接して協力を惜しまなかった。

そして、ツヴァイが気に入ったのか他の貴族達にツヴァイを紹介したり、パーティー等にも真っ先に呼ぶなどもしていた。

おかげで、最初はこころよく思っていなかった貴族達もツヴァイに

心を開き始める。

ゼブルはそんな人として尊敬しているカレンの父に、何故カレンは反発するのかをずっと知りたがっていたのだ。

「アンタはあの男の何を知ってるの！？あの男は私達をただの石ころとしか思っていないわよ！」

カレンは握りこぶしを震わせながらガラス越しのツヴァイに近づく

「本気でそう思っているんですか？」

ツヴァイはカレンを見上げる形で聞く

「え？」

「だってそうでしょう？ただの石ころである貴女達を自分の元に置いて何のメリットがありますか？生活費から貴女の学費、奥さんの入院費、その他諸々は誰の出費だと思っっているんです？ただの石ころにそこまでするとは思いませんがねえ」

ツヴァイは静かにカレンを見つめる

「！！」

カレンも心のどこかで同じことを思っていたらしく、やっぱり言うような表情になる

「貴女は賢い人です。分かっていたんでしょ？自分達は愛されていることを」

「うっ、嘘よ！だって、お母さんはリフレインに手を出すほど追い詰められて」

しかし、プライドが許さないのかカレンが必死に否定しようとする

「ああ、そうでした、貴女は多分知りませんよね？ブラックリベリオンの後、あの方は一度お見舞いにこのエリアに来ていたんですよ？」

思い出したようにツヴァイが手をたたく

「あの人が？」

この事実には本当に驚いたようだ

「それだけではありません。貴女がテロリストだと知られてからと
いつものシュタットフェルト侯爵の風当たりは大変悪い。それでも、
親権は決して手放していないんですよ？」

「……………」

今度こそ返す言葉が無いのか言葉を詰まらせる

「考える時間はまだありますからね。ゆっくり考えることです」
そう言つとツヴァイも部屋を出る

「（ライ、お兄ちゃん、私はどうすればいいのかな？教えて欲しいよ）」

視点 変更 ゼロ

ツヴァイとカレンの会話から数十分後。

宝来島で超合衆国に参加した47カ国の代表全員が合衆国憲章への批准を終えた。

超合衆国とは、合衆国日本と合衆国中華を中心とした連合国家構想の国。

元中華連邦と他の国々を有することで、ブリタニアに匹敵する国力を持つ唯一の国となる。

「最後に合衆国憲章第17条。『合衆国憲章を批准した国家は、固有の軍事力を永久に放棄する』。その上で、各合衆国の安全保障についてはどの国家にも属さない戦闘集団、黒の騎士団と契約します。合衆国日本代表にして超合衆国最高評議会議長となった神楽耶が前に出て説明をする

「契約受諾した。我等黒の騎士団は超合衆国より資金や人員を提供してもらおう。その代わりに我等は全ての合衆国を守る盾となり、外

敵を征する剣となる」
藤堂や星刻、マックスを初めとする黒の騎士団員が斑鳩の甲板上に集まっている

国ごとに編成された軍では連携を欠き烏合の衆となりやすい。

しかし、この憲法17条でそれを解消できるほか、黒の騎士団の存在理由にもなる。

ちなみにマックスは独立型零番隊隊長で部下はサーズのみ。

この、独立型零番隊は最高責任者であるゼロの命令とは関係なく、隊長であるマックスの判断で戦闘を行える唯一の部隊。

これはゼロに対する抑止力の役割もなっている。

ゼロが暴走したと判断したとき、各合衆国代表達が審査をし、3分の2以上の決定により独立零番隊隊長は一時的に黒の騎士団の最高責任者となり、前任者を処分する。

処分後は新しい責任者が決まるまでの間、責任者となり続け、新しい責任者が決まった場合独立型零番隊隊長に戻るという仕組み。

そして、零番隊には他にもカレンを隊長する通常型零番隊と、ゼロがライが帰ってきたときの為に作った変則型零番隊がある。もちろんライのためだけに作られたので現状では隊員はいない。

「それぞれの国が武力を持つのは争乱の元。超合衆国では最高評議会の議決によつてのみ軍事力を行使します」
神楽耶の横にいた合衆国中華代表の天子が一生懸命読み終える

「では、私から最初の動議を　我が合衆国日本の国土が他国によつて蹂躪され、不当な占領をうけ続けています。黒の騎士団の派遣を要請したいと考えます。賛成の方はご起立ください」
批准した国家の代表者たちのほうを向く

代表達は1人の例外もなく立ち上がる。

「賛成多数、よつて超合衆国決議第壹號として、黒の騎士団に日本解放を要請します！」
斑鳩のほうに向き直る

「いいでしょう。超合衆国決議第壹號、進軍目標は　日本！」
日本のある方角に指を差す

周りから大きな歓声上がる

「我々の日本を必ず取り戻す！」
「カレンも待つてるよ！必ず助けてやるからよ！」
藤堂と酔っ払い気味の玉城を初めとする団員達も士気が上がる

そんなやってやるぞ！的な空気に包まれているところに

「ゼロよ、それでわしを出し抜いたつもりか？」

宝来島にある大きな画面にシャルルが映る

「（馬鹿な！生きていた！？）」

ゼロが驚き後ずさる

「だが、それも悪くない。三極の一つであるEUは死に体。つまり、貴様の考えた小賢しい憲章が世界をブリタニアとそうでないものに色分けする。単純、それゆえに明解。畢竟、この戦いを制した側が、世界を手に入れるということ」

さっきまで歓声を上げていたとは思えないほどの静けさになる

「いいだろう、挑んで来いゼロ。全てを手に入れるか、全てを失うか。戦いとは元来そういうものだ。オールハイルウブリターニアアア！！」

シャルルの最後の声と共に画面と連動しているスピーカからブリタニアのコールが起る

「日本万歳！」

藤堂も負けじと腹から声を出す

「日本万歳！！！！」

他の騎士団も声を張り上げる

「「「「オールハイルブリタニア！オールハイルブリタニア！」」」」

「「「「日本万歳！！」」」」

止むことのないこの声が開戦の狼煙となる。

（あの男が生きていた！こんなことならナナリーを強引にでも救出すべきだった。しかし、それはあまりにも危険すぎる。明日 枢木神社でスザクと会う。スザクにはもうゼロの正体が俺であると言う事を話した。俺は信じるしかない。俺にはそれしかナナリーを救えないのだから）

（何故だが最近頭痛が異様に激しい、私の中から違う私が這い出てこようとしているような感覚だ。あの黒の騎士団のエースに接する度に強くなってくる。ルキアーノが彼女に危害を加えようとしたときに、私は無意識に怒っていた。いったい何なんだ！）

（明日は忙しいだろうな。何かツヴァイのほうは周りからの疑心暗鬼感が凄いし、何かもう嫌だ。　　って、泣き言は言わなとV・Vの墓前で約束したたる！それに、もう少しの辛抱だ。俺よ頑張り！

そんなこんなで次回、ゼブルと土の味 お楽しみに！

（ あれ？何で僕は生きてるんだ？死んだはずなのに ）

第五十七話 次本編17 ゼブルと土の味(前書き)

少し遅れてしまい申し訳ありませんでした

では、本編をどうぞ

第五十七話 次本編17 ゼブルと土の味

「悪い、遅れちゃった」

各隊長たちが集まっている会議室に欠伸をかみ殺しながらマックスが入る

「君と部下の3人は藤堂達と同じ奇襲部隊だと思っていたが」
中央の席にいた星刻が少し意外そうにマックスを見る

「向こうは藤堂と四聖剣、それにジエレミアもいる。そんだけいれ
ば十分だろ。それにキュウシュウ、チュウカ地方は一番大事な戦場
だ。もし、敵が守りきれれば他の皇族軍とラウンズが全ての合衆国領
に雪崩れ込む。しかし、逆に俺達が日本を開放すれば、全ての植民
地エリアが立ち上がるだろう」

「そう、この戦闘は天王山と言っても過言ではない」
星刻も頷く

「つまり、その戦闘にただの指揮官と兵を置くような馬鹿をシュナ
イゼルはしない。ビスマルクを含むナイトオブラウンズが出てくる
はずだ」

言いながら空いている席に乱暴に座る

「やはり、君は侮れないな。戦力が増えることはいいことだが、今

回は私の命令に従ってもらうことになるぞ?」
基本的な地位では星刻が高いので当たり前と言えば当たり前だ

「ああ、別に俺は構わなえが、もしもの時は好きにやらせてもらう」

「いいだろう。では、作戦を」
マックスを含む

作戦会議が終って数分後

「失礼します」
神楽耶がマックスに部屋に入る

「な!?!」
マックスは驚いたように神楽耶を見る

今のマックスは包帯と金色の髪の毛の鬘を取っており、素顔の状態で神楽耶の前にいるのだ。

「あら?部屋を間違えましたか?ここはマックスさんの部屋だと思
ったのですが、あら?その包帯と鬘は　もしかして、貴方がマッ
クスさん?」

最初は別の団員かと思った神楽耶だが、キョロキョロと周りを見回し、包帯と鬘を見つけ、目の前の少年がマックスだという考えにいたる

「いい年した女が無断で男の部屋に入るのはどうかとも思うぞ？それと分かってると思うが他言は許さないからな」
ため息を吐きながら諦めながら近くの椅子に座る

「別に構いませんよ。それより火傷を負っていらっしやるわけでもないようですのに何故包帯を？それに鬘も」
神楽耶は鬘を触りながら聞く

「情報屋って言うのは自分の持っている情報を出来るだけ秘密にするもんだ。それだけで価値があるからな」
神楽耶の触っている鬘を奪い取り自分の髪の上にかぶせる

「そうなんですか」
少し残念そうに手放す

「そうなんだよ。それで、俺に何のようだ？」
今度は包帯を顔と鬘の上から巻き始める

「ゼロ様の居場所をご存じ無いのかと思ひまして」
急に笑顔になりマックスに寄る

「旦那は斑鳩じゃなかったか？」
それを椅子で遮りながら答える

「あら、そう言えばそう仰っていたかもしれませんね。ありがとうございます」
「ございます」
「そう言つと部屋から出て行く」

「（見られちゃったか。まあ、いいか。アイツは何だかんだで約束を守るタイプだろうから大丈夫か）」

視点 変更 星刻

作戦が開始された。

東チユウカ開戦と呼ばれるタケシマの上空ではすでに戦闘が始まっている。

「敵は我策に嵌った。シコクに上陸部隊を取り付かせる」
神虎にいながらも次々と戦況を読み、指示する

「星刻様、フクオカに異常な突破力のナイトメアが現れました」
大竜胆タイロンドンと言われる超大型のピラミッド型の戦艦にいるオペレーター
が星刻に伝える

「その付近にいるマックスを向かわせる。インディラ隊もマックス
の援護に付ける」
通信しながらも次々とブリタニア軍のナイトメアを破壊する

視点 変更 マックス

「足りないな。この程度の生贄では」
ルキアーノが乗るナイトメア、パーシヴァルは次々と黒の騎士団の
ナイトメアを壊していく

「オマエが、少しは骨のありそうなヤツってのは」
飛翠竜verFでルキアーノが乗るパーシバルに近づき、素早く飛
翠竜verKに変わる

「そういう貴様も食べ応えがありそうだな」
ルキアーノが薄気味悪い笑顔でマックスを見る

すると、右腕に装備されている4つのクローが回転すると、ブレイ
ズルミナスで形成されたドリルになる。

「今日はバンバン技を使うと決めていたんだ。せいぜい楽しませてくれよ」

マックスも笑みを浮かべLMVSを構える

「マックス隊長、我々はどうすれば？」
インディラ隊のメンバーが困ったように聞く

どうやら隊長であるインディラはルキアーノにやられてしまったらしい。

「コイツは俺一人でやる。オマエ等は他の隊の援護に行け」
その方向に体を曲げ払うかのように手を振る

「了解！」「」

何故かホッとしたようにマックスから離れていく

2人の戦闘に居合わせたくはないようだ。

「余所見をするとは余裕だな！」
マックスがパーシヴァルに体を戻そうとした瞬間にドリルで突こうとする

「そう死に急ごうとするな。ちゃんと殺してやるから」

それをLMVSの腹で受け止め、再び不敵な笑みを浮かべる

数分後

「オラオラ！その程度かよ」

LMVSで止むことなく攻撃を続ける

それをルキアーノは盾で守るばかりだ。

一度太もものハドロン砲を撃ったが、アツサリと避けられ

一度右腕のドリルで突こうとするが、すぐにLMVSで弾かれ

一度スラツシュハーケンを放ったが、輻射障壁で防がれた上、ワイヤー部分を切られ

一度シールドに内蔵されているミサイルを発射させたが、全てを一瞬で切られた後、シールドも少し切られた。

「（不味い。少しずつだがシールドの防御力が下がってきている。

ちっ、胸糞悪い話だが腕は向こうのほうが上か　ん？）」

マックスの強さに困っていたルキアーノだが、何かを見つけると急に飛翠竜に背を向ける

「テメエ、どこ行く気だ？」

その背後目掛けてアサルトライフルを放つ

「ヴァルキリ工隊は私と変わってこの男の相手をしる」

それを盾で防ぎながら近くにいたルキアーノの部下であるグラウサム・ヴァルキリ工隊にマックスを任せ、そのままどこかへ向かって飛んでいく

「コッコイエスマイロード」「」「」

4機のピンク色のヴィンセントが飛翠竜を囲む

パイロットは皆、年の若い女性と言つるルキアーノの悪趣味極まりない組織である（だが、ツヴァイの特別工作部隊ファカルティーズは隊員の6分の5が10代の少女達なのでどっこいどっこいだが）。

「ちっ、女と子供には手加減をする俺の弱点をつきやがったな。早くコイツ等を戦闘不能にさせて追わねえと」
少し焦りながらも喋っているうちに2機を戦闘不能にする

「ブラットリー卿、お止めください！」
軽アヴァロンにいるブリタニア兵が叫ぶ

「そこまで被弾している以上、後は沈むだけだろう？なら、このルキアーノが有効活用してやるよ。一気に決める！」
マックスから逃げ延びたルキアーノは味方の戦艦を大竜胆にぶつけようとする

「味方の艦艇を武器にするとは 砲撃しつつ全速力で後退しろ！」
近くにいた星刻が大竜胆のオペレーターに大声で伝える

「駄目です！間に合いません！」
怯えた声が帰ってくる

「（あの中には天子様も！）くそっ！」
急いで大竜胆へと向かう

「どこへ行く気かな？」
しかし、それを遮るようにビスマルクが乗るギャラハットが正面に立ち、エクスカリバーで刺そうとする

「ちっ！」
それを右腕のフーチ型スラッシュユハーケンで受け流し左手に持っていた巨大中国刀でカウンターを仕掛ける

「ほう？良き使い手だ」

だが、ギヤラハットもそれを右腕のブレイズルミナスで防ぎエクスカリバーを真横に振る

「……………」

その刀身が神虎に当たるギリギリ前にアシストがシールドで防ぐ

「助かった。それに、この位置取りなら！」

反動で少し飛ばされたが、そのまま軽アヴァロンに向け天愕霸王荷電粒子重砲を放つ

軽アヴァロンの右翼の付け根にあたり爆発する。

「なるほど、我が剣撃を自ら受け、次の手に繋がったか。星刻という男、麒麟児との噂は真のようだ。だが」

星刻を称えるビスマルクだが攻撃を受けたアヴァロンを見る

「まだ、壊れないのか!？」

見ると右半分は大破しているが左半分が半壊のまま落ちてくる

「ちっ、ハゲ！打ち落とせ！」

遅れて到着したマックスが近くにいたハゲに言う

「……………」

軽アヴァロンの真正面に立つとショットの全武装が火を吹く

残った半分を大爆発を起こし壊れたが、破片が大竜胆へ降り注ぐ

「そこ！」

ブレイドはその破片を蛇腹剣で更に砕く

「見事な連携プレーだな。(?) さっきの機体はどこに?」
「ビスマルクが消えた飛翠竜を探す」

「いくぜ、鳳凰天駆ほうおうてんく(炎は無し)！」
上空から左右のLMVSを構え急降下する

「上からか！だが、避けられる」
急降下する飛翠竜を見てギリギリのところまで避ける

「からの、閃空衝裂破せんくうしょうれつぱ！」
飛翠竜は避けらるとすぐに急停止し、横に数回転しながらLMVS
ギヤラハットを切りつけようとする

「むー！」
ビスマルクもエクスカリバーと両腕のブレイズルミナスを展開しながら後ろに避ける

「ちつ、不意打ったのにかすり傷程度か。おい、星刻、コイツは俺が貰う。お前はあの変態を頼む。サーズはシマネにでも行ってる」
ほぼ被害なしのギヤラハットに不満そうに表情を浮かべるが、すぐに近くにいる星刻とサーズに言う

「仕方ない。雑魚を狩るか」

「分かった。十分に気をつける」

2人は頷き離れていく

「貴公がマックスか？聞いているぞ、我が師匠、ギリ・モーガンと面識があるらしいな？」
星刻達がいなくなっただけからビスマルクは口を開いた

「ああ、アイツの全ての技を習いそして全てを覚えた唯一の男だ」
マックスはビスマルクを挑発するように言う

「私の目の前でそれを言うか」
その挑発に挑発だと知りながら眉間に皺が寄る

「今オマエにやった技はジジイが前世の記憶を持つ戦士達から教わった技らしい」

「前世の記憶を持つ戦士だと？」

ビスマルクが眉唾物を見るかのように見る

「ああ、ソイツ等から全ての技と術を見て、覚え、それを俺に教えた。って一言で言ってるが全てを一通り使いこなすのに数ヶ月かかっちゃった。そう考えると見て全てを完璧に使いこなせるようになったジジイは確かに天才　いや、異才だな」
長々と説明を続ける

「（やはり、我が師は幾時を経ても誇れる師だな）」
マックスの話の真偽はともかく、自身の師を目の前の男に評価されたことにビスマルクは嬉しそうに頷く

「オマエに会ったら必ず伝えてくれたってよ」

「　報告は感謝する。しかし、ここは戦場だ。兄弟弟子であろうとも情けや手加減はしない」
やっとエクスカリバーを構える

「そうでなくちゃこっちが困る。本気で殺しに来い。俺も本気で手加減してやるからよ」
マックスもLMVSを構える

「行くぞ！」
「来い！」

両者の距離が一気に縮まった

先に動いたのはマックス

「虎牙破斬！」こがはみん

右手のLMVSで切り上げてから、すぐに左腕の剣で切り下ろす

「ふん！」

それを大剣で器用に防ぐ

「まだまだ、魔人剣・双牙まじんけん そつが（剣を放つだけ）！」
今度はLMVSを左右同時に放つ

「馬鹿め！懐ががら空きだぞ！！！」

それを左右に素早く避け、そのまま武器のない飛翠竜に迫る

「やべー！」

失態に気づき、とっさに後ろに下がって避けようとするが

「遅い！」

エクスカリバーを振り下ろす

「ちっ！」

胸に輻射波動障壁を展開する

「ふむ、とつさに護ったか。だが」

エクスカリバーに耐え切れず胸元の部分数センチほど切れる

「何とか防げたが、この分じゃもう障壁は張れねえな」

内部で確認をする

「中々やるがその程度か」

ビスマルクは心底残念そうに飛翠竜を見る

「おいおい、何勘違いしてるんだ？俺は最初から本気で手加減してやるって言ったのを忘れたのか？」

ダメージを受けたのに余裕の笑みを絶やさない

「今のは本気ではなかったと？」

その様子にビスマルクはいぶかしむ

「この飛翠竜は秘密たつぷりの機体だな。LMVS、モードラージブレード」

2つのLMVSがくっつく

MVS特有の赤色に黒が混じる

「それは大剣？」

元々長いLMVSが繋がり一本の大剣になった

「名前は緋鷹^{ひたか}だ。大剣の扱い方はジジイと俺の知り合いの騎士王に習ってな。だが、今はまだオマエのほう为上だ」

「なら、何故双剣を止めた？双剣のほうがまだ互角に戦えよう？」

「別に双剣でもよかつたんだが、こっちのほうが面白そうだからだ。いくぜ？剛招来^{こうしょうらい}（気分の問題）！」
そう言つと角を2つに割れる

「（角が割れた？しかし、性能には）」

角が割れたことに驚いたが飛翠竜から目を離さずに見つめる

「マックスだけにマックススピード！」

呼び動作なしで一気にギヤラハットに近づく

「（スピードが上がっている！？）」

驚くがすぐに剣を構える

「弧月閃^{こげつせん}！」

緋鷹を月を描くような軌道で振り上げる

「スピードが上がっても大振りでは意味がない。から空きだぞ？」
ビスマルクはそれを余裕でかわし、そのまま、またから空きになっ
た飛翠竜の懐を狙ってエクスカリバーを構える

「空けたんだよ。オマエが俺の懐を狙ってくるのは分かっているから
な」

マックスはニヤリと笑みを浮かべる

「何!？」

畏だったと気づいた頃には遅かった

「くらえ!獅子戦吼ししせんこう(獅子は無し)!!」

剣を素早く捨て、ギヤラハットの懐に入り拳を突き出して吹き飛ばす

「この程度なら」

数メートルでやっと思まる

「勝手に終わったと思ってるんじゃないよ!!」

マックスはその飛ばされたギヤラハットのすぐ近くにいた

「(いつの間に剣を!)」

捨てていた緋鷹をいつの間にか持っていることに気づいた

「これで決める。天を統べる覇者の証！魔王灼滅刃まおうしゃくめつじん！！」
剣を大きく振り下ろした後素早く振り上げる

「何だと！」

急いで防御のためにブレイズルミナスを展開するが、一度目は何とか耐えたが、振り上げるさいの攻撃でブレイズルミナスを展開している右腕ごと切り落とされる

更にその後、突きを繰り出すがその突きは剣で軌道を変えることによつて胴を少し掠らせる程度で済んだ

「まだまだ！」

素早く機体を回し、再びギヤラハットに突撃をかけようとする

「くっ！だが、エクスカリバーなら」

失った右腕の変わりに左手でエクスカリバーを盾のように構える

「くらえ！」

緋鷹を構え飛翠竜の最高速度で突進する

緋鷹とエクスカリバーがぶつかった瞬間、空が揺れたような錯覚に陥るほど強い衝撃が走った

「うお!？」

反動で飛翠竜がエクスカリバーに衝突した

「くっ！」

すぐさま2人は距離を取る

「何と！エクスカリバーにひびが!？」

エクスカリバーを見ると緋鷹と接した部分に大きなひびが入っていた

「いいじゃねえか。こっちは壊れちまったぞ」

緋鷹を持ち上げビスマルクにも見せる

緋鷹はエクスカリバーとは違いボロボロと形が崩れ、切っ先が潰れている。

「（だが、向こうは両腕が無事だ。それに対して左手一本では足止め程度にしかならないだろう）」

エクスカリバーを再び構えようとするが

「お互い残りエナジーはほとんどない。補給後に再戦でどうだ？」
マックスがビスマルクに補給を提案する

「 そうだな。次こそは必ず貴公を討ってみせる」

状況が不利だと分かっている上、確かにエナジーが底を突いている

ためビスマルクもその提案に受ける

「楽しみに待ってやるよ。んじゃあ、またな」
飛翠竜verFになりすぐに移動を始める

「（麒麟児、^{リー・シンク}黎星刻かと思っていたが黒の騎士団内の最強の戦士は彼のような。次こそはその首を必ず頂く！）」
飛翠竜を少し目で追うが、すぐに見えなくなる

ビスマルクと戦闘を終えて数分後

「その程度か！？」
ルキアーノはドリルでの突きを休むことなく続ける

「（さっきのビスマルクの攻撃はアシストが助けてくれたが、それでも腕の一部がショートしたみたいだな）」
不自由な腕を庇いながらなんとか守る

「俺の体を皆に貸すぞ。ここからいなくなれ」
上空から棒読みで言いながら飛翠竜verFでパーシヴァルに突撃

する

パーシヴァルは腹部を潰される。

「何だと！？奪われる！私の命がああ！！」

突然のことに混乱しながらも自分の命がないことに気づき声を上げる

「メタナイトがナイトメアに乗ってんじゃねえよ」

爆発したパーシヴァルを見ながらマックスが呟く

「お陰で助かった。しかし、どうしたんだ？ボロボロじゃないか。

それにビスマルクは？」

星刻がボロボロになった飛翠竜を見ながら聞く

「アイツは右腕を失って帰還している。まあ、俺もLMVSと輻射波動障壁を壊されたから引き分けだな。オマエもどつか故障してるんだろ？俺も戻って補給すつから掴まれ」

半壊のLMVSを垂らす

「助かる」

それを神虎が掴むと、飛翠竜は大竜胆に向け飛ぶ

その数分ほど前

「こつちも雑魚は片付いた。そろそろ本格的に壊すか」
マックスから離れたサーズはシマネを攻めていた

以外に手薄だったため、サーズだけでブリタニア軍をほとんど倒しシマネ沿岸の浜に着陸していた。

「こんな所にいたのか？探したぞ」
すると上空から1機のナイトメアが現れる

「お前はジノ・ヴァインベルグ」
その機体はトリスタンverFだった

「覚えてくれているとは嬉しいね。こつちは君と戦いたくて夜も満
足に寝れないほどだ」
一度止まり、トリスタンverKに変わる

「俺もお前を殺したくてうずうずしてた所だ」
ブレイドが蛇腹剣を構える

「マックスの部下の3人か」

「この前のお返し」
後から来たライとアーニヤもジノの横に並ぶ

「ナイトオブラウンズが3人もか、これは何とも心を踊らせてくれる」

シヨットとアシストもそれぞれの武器を構える

「ライもアーニヤも気を付ける。どうやらこの3人は普通とは違うようだからな」

ジノが真剣な目でヴィンセントを見る

「覚えておこう」

「ドン」

ライは素直に頷くがアーニヤは容赦無くシュタルクハドロンを放つ

「……」

アシストがシールドを全開させてそれを防ぐ

「あれを防ぐのか」

ライは感心した様子でアシストを見る

「不意打ちか、それもいいだろう。雑魚ばかりではやはり駄目だな。強者との心躍る殺し合いじゃなければ」

ニヤリと笑いブレイドで突っ込む

それを見たジノがハーケン型MVSで交戦。

シヨットはモルドレッドと、アシストはマーリンと

それぞれ戦闘が始まった。

「（厄介だな。1対1での戦闘力も侮れない上に、いつ他のヴィンセントが攻撃するのかが心配で1人に集中出来ない）」

「（それだけなら向こうも同じだが、何故か死角からの攻撃を見えているかの様に避ける）」

「（何で？まるで後ろにも目があるみたい）」

「（向こうもそろそろ俺に死角がないと分かってきたようだな。俺は普通に戦えるが、向こうは3人いる俺の動きを細かく見続けなければいけない。その緊迫感にいつかぶつりと集中力を切ってしまう。その時が俺の勝機）」

「（だが、ナイトメアの性能面ではこちら側が上だ。それがどのくらい響いてくれるか）」

視点 変更 マックス

大竜胆内のパイロット休憩スペース

「奇襲部隊が動いたらしいな」
星刻が烏龍茶飲みながら戦況を確認する

地図に浮かんだ斑鳩を含む航空艦隊がトウキョウ租界へ向かっている

「ああ、俺等は奇襲でパニックになったブリタニア軍の戦力を少しでも減らせばいい」
対してマックスは日本茶を飲んでいる

「ゼロの元へ行かなくていいのか？」
地図に写った斑鳩を指差しながら聞く

「しつげえな。俺はここで満足だからそれでいいんだよ。それに俺が向こう行ったらビスマルクはどうすんだよ？」
しつこい星刻に多少苛立ちながら聞く

「私が相手をするさ、腕は予備の部品で直るらしい。向こうは腕が一本ないのだろう？それなら何とかなるだろう」

「どうやらビスマルクと再戦したいだけらしい」

「でもな、今から行っただって　ん？サーズじゃねえか」
3機のヴァインセントが大竜胆の補給スペースに降りた

「補給しに来た」
ヴァインセントから降りた天魔は少し疲れているらしく顔が青い

「ショットが随分やられてるな。どうかしたのか？」
サーズが乗っていたヴァインセントを見ながら聞く

「ラウンズ3人を相手にするのが難しかったただけだ。あいつら俺だけ狙いやがって俺は無視状態。俺は俺を守るために何かと動いたが守りきれずだ」
俺ばかりで分かりにくい

「まあ、アシストはともかくブレイドは遠距離武器はブーメランだけだからな。先にショットを落としてからブレイドとアシストを狙うのは戦術的には正解だ。（考えたのはライだな）」
マックスは少し笑みを浮かべる

「で、俺はどうすればいい？」
天魔がツヴァイの横に座る

「やっぱしもう少し戦力を減らすぞ。ハゲはここで待機。俺は再出撃後、ビスマルクを主に他のラウンズを狙う。星刻は俺が出た後時間を見計らって出る。ハゲ以外は星刻の言うことを聞け」
そう言つと反論も聞かず飛翠竜に乗り込む

「んじゃ、お先」

予備のMVSを装備し、再び戦火の絶えない空へと飛んだ

（ルルーシュ、クロヴィスの時から何かおかしいと思っていた。しかし、理解したよ。ギアス、確かに恐ろしい力だがお陰で納得も得心もいった。私の手の中には全てのカードがそろった。これからが私の反撃だ）

（スザク、よくも裏切ってくれたな！俺を嘲笑い、踏みつけ、見下した。この戦争はかならず勝ってみせる！良いだろう向かってくるがいい。破壊してやる。絶望を見せ付けてやる！最後に笑うのは俺だ！）

（結局私って何のために本国に帰らされたんだっけ？そんなことよりナナリーが大変だったのに騎士である私は何で子供達と遊んでるのよ！？）

お父さんの馬鹿野郎おお！！（）

(どうやらここは棺の中みたいだ。ゼブルがちゃんと埋葬してくれ
たんだね。　　上でお父さんの馬鹿野郎って声がうるさいのが気に
なる。お墓では静かにするものだとか教わらなかったのか、父親の顔
が見てみたいものだね。それよりも、どうやってここから出ればい
いんだらう？困ったな)

第五十八話 次本編18 ゼブルと第二次 東京 決戦（前書き）

（理由はないですが）凄く急いで書いたので少し誤字脱字が目立つ
かもしれないので悪しからず。

ルルーシュは枢木神社でスザクにナナリーを救うように助けを頼んだが、途中でシュナイゼルが手配していた兵に捕まってしまう。

しかし、ルルーシュの護送中にギルフォードのかけたギアスが発動し、ギルフォードと共にトウキョウ租界へと向かっていた。

「心配するな。租界構造の修正は済んでいる。以前のようにゼロがここを壊すことは不可能だ」
指揮官と思われる男が他のサザーランドに言う

「ゼロが現れました」
部下らしき男が指揮官に言う

見ると、屋気楼とヴィンセントが近づいてくる。

「来たか、狙撃用意に入れ。ヴィンセントも狙撃して構わない」
指揮官の乗るグロースターがロケットランチャーを構えると他のサザーランドも構える

全ナイトメアがロックオンをする。

「俺が疎開で何の目的も無く学生をやっていたと思うなよ。トウキョウ租界、今貴様を止めてやる！」

ルルーシュが笑みを浮かべながら手に持っていたスイッチを押すとトウキョウ租界中走る列車の屋根の部分が開きゲフィオンディスターバーが作動する

「何？ エナジーファイラーが止まった！？ ゲフィオンディスターバーか！」
狙っていた全ての機体が動か

ナイトメアだけでなく、トウキョウ租界全体の電気が消える。

「よし、条件はクリアされた。あとはもうじき来る藤堂たちが来るのを待つだけか」
ルルーシュは勝利の笑みを浮かべ、ルルーシュを狙っていたナイトメアを構造相転移砲で破壊した

視点 変更 ツヴァイ

アイネに呼ばれたツヴァイはアイネの部屋をノックする

「あの、すぐに入ってください」

扉から顔だけ出してツヴァイに入るよう言っ

「？ そう言われるのでしたら　　！」
言われるがままに部屋に入ると

「ど、どうでしょう？ ツヴァイ殿が見てみたいと言ってたので着て
みたんですが」
顔を赤くし、ツヴァイを見る

ツヴァイが送ったドレスを着ていた。

「（いや、どうでしょうって、これ似合い過ぎでしょ。写真を見た
だけでここまでのものを作るクマモトの爺ちゃんすごいな。ガ―
ベスちゃんの分も買っておいてよかった）」
ジツとアイネを見て、時折頷く

「やっぱり、似合いませんか？」
目に涙を溜めて聞く

「いやいや！ すごく綺麗ですよ！」
手を目で追えないほど早く振りその言葉を否定する

「本当ですか！？」
今度は嬉しそうに上目遣いで聞く

「これなら、どんな男もアイネ卿に惚れますよ。俺が保証しますよ」
うんうんと頷く

「なら」

急にツヴァイの背中に抱きつく

「え？何を？（む、胸が当たってる）」
動くと尚更胸が強く当たるので困ったように顔を赤くさせる

「僕はツヴァイ殿が好きです」
アイネは更に力を込める

「……………（え？何？もしかして告白？）」
急なことに驚く

「強くて優しくくて、そして暖かくて、近くにいるだけで心が楽になります」
顔も背中に乗せるように当てる

「アイネ卿（やばい、心拍音聞こえてないよね？大丈夫だよな？）」
心臓が爆発しそうなほど動いている

「これが独り善がりだということとは分かっています。それでも、僕はこの思いをツヴァイ殿に伝えたかったんです」
ツヴァイの背中でアイネが震える

「（アイネちゃんは強気だけど下手したら男の俺よりかっこいいし、美人だからね。それにこんな女の子らしくされちゃあギャップに萌える。でもねえ、俺からしたら嬉しいけど」
後半から声が出ていることに気づかず続ける

「え？」

それが聞こえたアイネはツヴァイの声に耳を濟ませる

「そういえばロイド君たちのところには何もしてなかったな。リヴアルと会長は何かもつどうでもいいか、問題はライとカレンちゃんだよ」

アイネのことをそっちのけで、他人の恋愛事情をブツブツと続ける

「なあ、ゼブル？」

自然を装ってツヴァイに正面から聞く

「ん？何？」

これまた自然に答える

「……」
「……」

「え？」

「（しまったあああ！！）」
体が強張り、冷や汗がドバドバと流れる

「やっぱりそうなのか」
アイネはため息を吐く

「チガいますよ。俺ハ「もういい」　あまり驚いてないね」
片言で話そうとするがアイネが止める。諦めたゼブルも仮面を取る

「可能性として考えていた。僕がツヴァイ・ドウとどこかに行くた
びにお前も旅をしているのは幾らなんでもおかし過ぎる」
近くにあった椅子に座る

「なるほど、確かにそうだったね。お土産で誤魔化せると思ったん
だけどね」
アハハと頭を搔く

「それに、待つのが基本的に苦手だろ？落ち着きの無いところと暇
のつぶし方が同じことも気になっていた」

アイネが指を差しながら指摘する

ちなみに暇のつぶし方は歌を口ずさんだり、他の人と話したり等。

「声とかは考えてたんだけど仕草とかはあまり気にしてなかったな」
ナナリー対策のための変え声技術をゼブルは持っているが、仕草までには気が回らなかつたらしい

「じゃあ、今度はゼブルに聞きたい。僕は その どうだ？」
椅子から立ち上がり、ドレス姿のゼブルを見せる

やはり恥ずかしいのか顔が赤い。

「十分可愛いよ。なんて言うのかな？そのドレスは普通のアイネちゃん
の元気のいい雰囲気とのほうが似合ってる気がする」
心からの一言だった

「そうか、なら、いいんだ」

アイネが少し寂しそうな表情で返すと

急に部屋の電気が消える

「ん？停電かな？」

ゼブルはポケットの中から懐中電灯を取り出す

「黒の騎士団の奇襲と思われませう。各自の持ち場について迎撃を開始してください。繰り返します」

施設中に放送が響くと辺りから足音と声が大きくなる

「じゃあ、先に行ってますね。アイネ卿は着替えてから来てください」

仮面を被り懐中電灯を置いて扉から出る

「はい」

その後姿を見送るとアイネはそそくさと着替え始める

「告白の返事はこの戦闘が終わったからね」

小さい声で呟くと早足で歩く

視点 変更 ルルーシュ

ルルーシュがゲフィオンディスターバーを作動させてから数分後。

藤堂や斑鳩の乗組員を含めた黒の騎士団が租界に到着した。

「黒の騎士団に告げる。ゲフィオンディスターバによってトウキョウ租界のライフライン、通信網、そして第五世代以前のナイトメアは機能を停止した。敵の戦力は半減している。各主要施設を叩き、トウキョウ租界の戦闘継続能力を奪い取れ！シュナイゼル率いる主力部隊が到着するまでが勝負となる。防衛線を敷きつつ、ブリタニア政庁を孤立させる。ナナリー総督を押さえれば我軍の勝利だ！」

「兄さん、僕達も作戦を始めるね」
ブリタニア軍の軍服に身を包んだロロと数人の団員が政庁内に入っていく

「咲世子のチームが先行している。合流後、ナナリーとカレンを頼む」

「任せてよ。それじゃあ、切るね」
通信を切る

「（これで、ナナリーの件はクリアされた）藤堂、朝比奈と千葉に政庁の制空権を押さえさせる」
ロロとの通信を切ると次は藤堂と通信をする

「了解！」

「（問題は敵軍の第六世代以降のナイトメアだが）
やはり来たか」
敵識別のナイトメアが迫ってくる

「聞こえてるか、ゼロ？戦闘を停止しろ。こちらには重戦術級の弾頭を搭載している。使用されれば被害は甚大だ。その前に」
ゼロを説得しようとするスザクだが

「誰がお前なんかを信じるか。ジェレミア！」

「イエス・ユア・マジエスティ！」
下に隠れていたジェレミアの乗るサザーランド・ジーク（以降サザーランド）がランスロットに体当たりをする

「ジェレミア卿ですか！？」
ブレイズルミナスで防ぐ

「枢木スザク。君には借りがある、情もある、引け目もある。しかし、この場は忠義が勝る！」
電磁ユニットと呼ばれる装置で超近距離の敵に電撃を浴びさせる

「ジークフリートの」
それを素早く避ける

「受けよ！忠義の嵐！」
サザーランド」の背中のみ사일포ッドから次々とミ사일が発射される

「くっ」

スザクはブレイズルミナスで防ぐ

近くのビルに数発当たりビルが倒壊する。

「何故私はブリタニア軍を敵にしている？」
呆然と戦場を見回す

自分が加勢しているのは敵であるはずの黒の騎士団。そして、攻撃をしているのは自軍であるはずのブリタニア軍。

「ギルフォード、ジェレミアに加勢し、枢木スザクを討て」
ルルーシュは首元に手をかざしながら言う

「しかし、姫様。枢木は」
ギアスにかかっているギルフォードにはルルーシュをコーネリアと認識している

つまり、ルルーシュの言葉はコーネリアの言葉だと思い込んでいるのだ。

「説明している暇はない。緊急時だ。私を信じてくれるかい？」

「イエス・ユア・ハインス」

頷くと気持ちを切り替える

スザクに近づくと

「枢木、互いに主君を持つ身、悪く思うな！」

MVSをランスタ입にし、ランスロットに攻める

「ぐっ」

ヴィンセントに集中し過ぎたために、サザーランド」の電磁ユニットによって捕まる

「よし、作戦通り。ここでスザクを始末すればナナリーを取り戻す
障害は」

屋気楼のハドロショットで止めをさそうとするが

「スザクを放せ！」

アイネの乗るゲイラントが現れサザーランド」に向けイクスプロードで殴りかかる

「むっ！」

何とかそれを避けるが、その拍子にランスロットを放してしまった

「アイネ、すまない。それと気をつける、敵にジェレミア卿とギル
フォード卿がいる」

スザクは2機から距離を取る

「ジェレミア卿にギルフォード卿？オレンジの疑惑が本当だったとしても何故ギルフォード卿まで？」

困惑した表情でギルフォードの乗るヴィンセントを見る

「オレンジ？それは我が忠誠の名前」

「アイネ！お前も主君に反旗を翻すか！！」

「サザーランド」は大型リニアキャノンを、ヴィンセントはアサルトライフルをゲイラントに向けて撃つ

「主君？何を言っているのです！そいつこそブリタニアの敵！ダールトン將軍の仇！」

ギルフォードを敵と認識し、アイネも攻撃を始める

視点 変更 ツヴァイ

先に出撃していたツヴァイはチマチマとゲフィオンディスターバーを破壊していた。

「こちらツヴァイ・ドウ。イケブクロのディスターバーの破壊が終了しました。これで、第五世代以前のナイトメアも戦線に復帰できません。政庁の防衛システムも回復しますので、戦力的には逆転したかと」

アヴァロンにいるシュナイゼルに通信を入れる

「助かったよドウ卿。これでこちらが一手先に動けるか」
シュナイゼルは満足そうに頷く

「では、俺は残っているナイトメアの殲滅に向かいます」
アヴァロンとの通信を切る

「(さて、適当に時間を潰すか)」

視点 変更 カレン

カレンは牢の中で黒の騎士団として戦うことが出来ない自分を恨んでいた。

そこに

「ご無事で何よりです」

カレンの牢の前に忍者の服に身を包んだ咲世子が現れる

「咲世子さん！紅蓮はどこにあるか分かりますか？」
咲世子が鍵を開けるとすぐにそこから出る

「すぐ近くに。ミレイ様の元婚約者が首謀者だと思いましたが、一応取り扱い説明書もありましたので」
取り扱い説明書と一緒に新しいパイロットスーツをカレンに渡す

「なんか色々違うけど、今は我俣を言ってる猶予はないわよね（基本システムが同じなのが幸いね）」
すぐに着替え紅蓮の所へ向かうと色々違った紅蓮になっていることに気づくが、気にせずコックピットに乗り込む

「紅蓮出撃後、私たちは本来の作戦に戻ります」

「はい、総督をお願いします。紅蓮聖天八極式、発進！」
紅蓮から赤い翼が生える

その翼が紅蓮を包み壁を突き抜ける。

「あの機体は紅月だったのか？しかし、なんて性能だ」
目で追いきれないほどのスピードを出しながら敵機を倒していく紅蓮を見て千葉が呟く

ギルフォードと離れたアイネは1人で戦況を見ていた塵気楼を見つ
ける。

「ユーフェミア様とダールトン將軍の仇！」
イクスプロードを大きく振り上げる

「アイネか!？」
急に現れたアイネのゲイラントに驚きながらも絶対守護領域を展開
する

「そら!そら!そら!そら!」
イクスプロードのブースターを全開にしての容赦ない攻撃を続ける

最初は防げていたが、パワーに押されはじめる。

「くっ、このままではいくら絶対守護領域でも」
そのことをルルーシュも気づくが、攻撃が早すぎて逃げる余裕がない

ドンドン小さくなる絶対守護領域。

「これで終わりだ!」
止めと言わんばかりに大きく振り下ろす

「やらせない！」

イクスプロードに当たる前に何かが蜃気楼を押し、イクスプロードはそのまま空を切る

「何だ？助かったのか」

ルルーシュが驚き、自分を救った相手を見る

「親衛隊隊長紅月カレン、只今をもって戦線に復帰します」

そこには左右合わせて8枚の赤い羽を広げた紅蓮がいた

姿も可翔式の面影を残しつつもかなり大幅に変わっており儼つくなっている

「カレン、お前はやはりそちら側に付くのか？」

アイネは悲しそうに聞く

「ごめんさい。私はやっぱりカレン・シュタットフェルトより紅月カレンを選ぶわ」

「人が選んだ道を僕は文句をつける気はない。だが、ナイトオブファイブとして、黒の騎士団のエースを全力で倒す。ただそれだけだ。だからカレン、お前も全力で来い！」

イクスプロードを紅蓮に構える

「ありがとう、アイネ。お礼にこの新しい紅蓮聖天八極式の力を見

せてあげる」

カレンが言つと輻射波動腕部の前腕部分がゲイラントに向かって伸びる

「（こんなに伸びるのか！？ だが）」
それを素早く躲し、紅蓮に向かう

「まだまだ！」

すると通り過ぎた前腕部が再びゲイラントのほうへ向きロングレンジタイプの輻射波動砲弾を放つ

「（何か来る！）」
カレンの攻撃を勘で察し、ゲイラントを上昇させる

しかし、少し遅かったのかロングレンジタイプの輻射波動弾はゲイラントの右足に当たる

「へー、よく分かったわね」

カレンは感心したようにアイネに言う

「ふん、僕を侮り過ぎだ」

「なら、これならどう？」

輻射波動砲弾を円盤型に集束させ、それをゲイラントに投げつける

「（防ぎきれない。なら）これでどうだ！」
右腕のブレイズルミナスで防ぐが、防ぎきれないと分かると右腕を犠牲にし残っている左腕でイクスプロードを振る

「通じないよ」
輻射波動でそれを防ぐ

「いや、これで間合いは詰まった。その腕さえ無くなれば僕の勝ちだ！」
すぐにイクスプロードを捨て、左指先のスラッシュハーケンを輻射波動腕部に向けて放つ

しかし、エナジーウィングで紅蓮を包むように護り、スラッシュハーケンは碎ける。

「何 だと」
イクスプロードはそのまま落ちる

スラッシュハーケンも碎けたため、ゲイラントにもう武装はない。

「命までは取らないわ。さようなら」
紅蓮のスラッシュハーケンでゲイラントのフロートユニットを壊し、ゼロの元へ戻って行った

残されたゲイラントは近くのビルに不時着する。

「惨敗か。だが、悪くない」

負けたというのに清々しい表情で紅蓮が行った方向を見つめた

視点 変更 藤堂

千葉、朝比奈とは別に次々とブリタニアのナイトメアを斬り続ける。

「藤堂さん、零番隊の木下副隊長の証言データを送ります」

朝比奈が藤堂にデータを送る

「何だ！こんな時に？」

サザーランド・エアを斬りながら聞く

「聞いてもらえれば分かります。やはりゼロは信用できません」

「何だと？」

朝比奈の真剣な目に藤堂が気づく

「僕はこれから政庁に入り口を捕縛します」

「待て、今はそんなことをしている暇は無いはずだ。すぐに千葉とともに制空権を」

朝比奈が通信を切ろうとする前に

「 すいません。今回だけはその命令に背きます」
そう言うと一方的に通信を切る

「 待て朝比奈！朝比奈！くそっ！」
悪態もつきながらも次々と敵ナイトメアの数を減らしていく

視点 変更 ツヴァイ

ゲイラントとの戦闘を終えたカレンは敵ナイトメアを破壊しながら
ゼロの元に戻る。

「 よくやった、カレン。後は政庁に戻りナナリーを！」
政庁に向かおうとするが

「 そうはさせない」
スザクのランスロットが紅蓮にと蜃気楼に近づくと

「 枢木スザク！行かせるわけには貴様をいかない。 な！？」
そのスザクを後ろから追いかけるギルフォードのヴィンセントだが、
何故かランスを持っていて腕が急に爆発する

「邪魔はさせませんよ。ギルフォード卿」
遠くのビルからフローレンスがハドロンライフルを構えている

「ツヴァイか！」

それを見つけたギルフォードが標的をスザクからツヴァイに変える

「やはり、紅月を選んだのですね？」

ツヴァイが近づこうとするギルフォードに牽制するためにハドロンライフルを撃ちながらカレンに聞く

「正確にはまだ迷ってる。でも、ここには私の帰りを待っていてくれる人たちがいる。私はその人たちの為に戦いたい。例えそれで父に迷惑がかかるとしても」

俯くも力強い瞳でツヴァイを見る

「それが貴女の答えですか。枢木卿、黒の騎士団のエースとの決着を残してくださいね。覚悟の籠った彼女と私は戦いたい」
言いながらヴィンセントの右足を撃ち抜く

「だってさ、スザク」

何故か笑顔でスザクに聞く

「お言葉ですが、そんな余裕が許される相手では無さそうです」
MVSを抜き、構える

視点 変更 スザク

「ゼロ様！総督を発見しました！ロク様はナイトメアを鹵獲した後、こちらの護衛につくとのことですが」
咲世子から通信が入る

「そうか、よくやった！これで勝利条件は揃った！カレンは一気にスザクを討て！そうすれば邪魔者はいなくなる！」
ルルーシュは安堵の笑みを浮かべる

「分かりました！」
ゲイラントに使ったのと同じ円盤型に集束した輻射波動砲弾をランスロットに放つ

それを避け切れなかったためランスロットのヴァリスが壊れる

「マシンポテンシャルが違い過ぎる」
その性能の違いに驚愕の表情を浮かべる

その後も、圧倒的な性能差で右腕と左足を失う。

「さようなら、スザク」

止めと言わんばかりに近距離で輻射波動砲弾を撃とうとする

「撃つてよフレイヤを！貴方も助かるのに」
アヴァロン内にいるニーナが必死で訴える

「（それだけは駄目だ。例えここで死ぬことになったとしても。そうだ、これが償いなんだ。受け入れるしかない。ここで俺は）」
死を受け入れようとするスザクだが

『生きる！！』

神根島でかけられた生きると言うギアスが発動する

「俺は俺は生きる！！」
すぐに紅蓮から離れ、背中に装備していたフレイヤが装填されているピストル型のランチャーの銃口を紅蓮に向けると、フレイヤの発射スイッチを押す

すると、ランチャーからフレイヤが発射される。

「え？」

それを避けたカレンだが、数メートル先で急に止まったのに気づく

「これは、フレイヤか？退け！全軍後退！フレイヤから少しでも離れる！」

グラストンナイツの1人がブリタニア軍に後退を伝える

「（何故ブリタニア軍は後退を？） 我が軍も下がるぞ！朝比奈聞こえてるか？政庁から出る。朝比奈！ちっ、何故反応しない。斑鳩も全速力で後退しろ！」
怪しい光を放っているフレイヤを見て退いているブリタニア軍を見て危険だと悟った藤堂も同じように退避を言い渡す

「まさか、あれがスザクの言っていた。はっ、ナナリイイー！」
急いで政庁に向かおうとするが

「お逃げください。姫様！」
ギルフォードがヴィンセントで体当たりをし、厩気楼をフレイヤから離そうと後ろへと押す

「離せ！あそこにはナナリーが！！！」
腕を伸ばして抵抗しようとするが

「姫様は生きなくてはなりません！ナナリー様とユーフェミア様の

「ためにもー!!」
ギルフォードの叫びは途中で途絶えてしまう

視点 変更 アイネ

数分前

「これがフレイヤか？動いてくれゲイラント！このままでは（え、押されてる？いったい誰が？）」
紅蓮に壊されて動かないゲイラントが急に空中に浮いた

後ろを見るとフローレンスがゲイラントを押していた。

「ツヴァイ殿？」
アイネがツヴァイに通信を送ると

「もう、いいよ。ツヴァイ・ドウはここまでみたい」
ツヴァイの仮面を外したゼブルが映る

「な、何を言ってるんだ？」
いつものゼブルだが、何故かアイネにはいつもと違うように見えた

「ナイトオブツァー、ツヴァイ・ドゥはここで終わりってこと
なおも笑顔のままアイネを見る

「お前が死んだらガーベスはどうなる！」
そんなあっさりした態度に本気で怒る

「そうだね。俺は本国で長旅中ってことにしてくれる？」
少し悩むように首を傾げる

「ふざけるな！お前が死んだらガーベスだけじゃない。リヴァルや
ルルーシュ、ジノやアーニヤ、それに僕だって！」
アイネは我慢が出来ず目から涙が零れる

「俺もねアイネちゃんのこと好きだよ」

「え？」

急にさっきの告白の答えを言われ驚く

「普通のツンツンした所とか、その普段とは違い過ぎるほどツヴァイ・ドゥに接するときのいじらしい態度とかね。多分ガーベスちゃんがいなかったらあの告白は即答でイエスだったね。まあ、もう一度言われてもイエスだろうけど。

でも、ガーベスちゃんもそうだけど俺なんかには惚れるのはよくない。アイネちゃんも美人なんだからもっといい人に会えるさ。って、もう時間切れかな？それじゃあ、運があればまた会」

言い終わる前にフレイヤの光がフローレンスごと包み通信が切れる

「嘘だろ？ゼブル、ゼブル！！」

必死でゼブルの名前を呼ぶが

返事は返ってこなかった。

視点 変更 ルルーシュ

「ロロ、ナナリーと話をさせてくれないか？」

ロロと通信を繋ぐ

「兄さん」

哀れむような声で聞く

「咲世子に繋がらなくってさ」

普段通りの口調でロロに言う

「あの、兄さん。間に合わなかったんだよ。ナナリーは死んだんだ

「死んだんだよ！」

必死にルルーシュに現実を伝えようとするが

「嘘を吐くな！　なあ、口口。ほんの少しでもいいんだ。ナナリ

」と話をさせてくれ」

ルルーシュの瞳には何も映ってはいなかった

第五十九話 次本編19 ゼブルと裏切り（前書き）

もうじきテストです。

それでも書いていますが

現実逃避と言いません。

では、本編をどうぞ

第五十九話 次本編19 ゼブルと裏切り

「トウキョウ租界で巨大な爆発を確認しました。シュナイゼル殿下から報告を受けていたフレイヤ弾頭だと思われませんが、よろしいのですか？この神根島に留まって」
モニカが座っているシャルルに聞く

「よい、シュナイゼルに全て任せよう（まさか、ここのシステムを使うことになるのは、ラグナレクの接続。これで、古い世界は消え新しい世界が想像される）」
シャルルは右手の平にあるギアスの紋章を見て、笑みを浮かべる

視点 変更 藤堂

「この兵器をもう一度使われたら黒の騎士団は壊滅する」
フレイヤの威力に藤堂も恐れを抱く

「藤堂、私だ」
藤堂にゼロから通信が入る

「全軍をトウキョウ租界に降下させる。ナナリーを探すんだ」
ゼロが静かに言う

「待て！朝比奈がやられた。犠牲も多い。今は！」
後退するべきだと、藤堂が言おうとするが

「黙れ！ナナリーを探すんだ！全軍でナナリーを探し出すんだ！！」
ゼロが急に大声を上げる

「（このゼロは）。全軍に告げる。マクハリまで後退し戦線を立て直す。至急交代せよ！」
ゼロが冷静でないと判断した藤堂は兵に撤退命令を送る

「藤堂！ナナリーを探せと言っているだろう！ちっ、カレン聞こえるか！？ロロ！ジェレミア！ナナリーは必ず生きている！探せ！！早く探すんぐあっ！」
そんなゼロの乗る風呂敷をジェレミアのサザーランドJの大型スラッシュハーケンで挟む

「兄さんが無事なら」
「またの機会はある」
そのまま、マクハリへと後退する

「離せ！ナナリィー！！」

視点 変更 デイトハルト

時同じくして

「そこまでだ、逃亡者よ。（コーネリア？抜け出したのはヴィレッタかと思ったが）」
デイトハルトがその場にいたコーネリアに銃を向ける

デイトハルトは扇とヴィレッタが繋がっていることを知り、ゼロの邪魔をさせないために人質としてヴィレッタを監禁していたのだ。

「（ちっ、あの爆弾の音ではれたのか？）久しいな。節操無き報道者が」

コーネリアは余裕の笑みでデイトハルトを見る

「（ゼロの仕業か？皇女殿下を捕虜にか？もうすこし私を信じてくれてもいいものを）」

持っていた銃口を下に向けコーネリアの足を狙う

引き金に力を入れようとすると

「当方はブリタニアの外交特使である。繰り返す、当方はブリタニアの外交特使である。交戦の意思はない」

小型の飛行機が甲板に着艦し、その中から数人のブリタニア軍人とシュナイゼルが現れる

その近くにモルドレットも着艦する。

「馬鹿な！敵の真っ只中に自ら乗り込んでくるとは」

「（ルルーシュ、君はここで終わりだ）」

視点 変更 星刻

「一時停戦とはどういうことだ？ブリタニアの思惑は？何故ビスマルクは兵を下げる！？」

大竜胆の中にいる星刻がオペレーターに聞く

大竜胆と他の部隊がエリア11に近づいても相手はまったく手を出さず、逆に引いている状態だった。

「理由は確認中ですが交戦の意思は無いようです。それと、トウキヨウでも一時停戦したと」

「ゼロの指示か？」

「すみません、そこまでは。新しい情報が入って参りましたらご報

「告します」
「そういい通信を切る」

「俺が斑鳩に行って旦那に直接聞いてくる。ついでにラクシャータに飛翠竜を見て貰う」
「近くで聞いていたマックスが椅子から立ち上がる」

「それが妥当か。頼むぞ。私は後ほど天子様と皇代表を連れて斑鳩に向かう」
「星刻も頷く」

「ああ、念のためにハゲとストロングはここで待機。天魔は俺と共に斑鳩へ行くぞ」

視点 変更 藤堂

シュナイゼルのことで集まったディートハルト、藤堂、千葉、ラクシャータ。

「ゼロは出ませんか。仕方ない、シュナイゼルの会談はゼロ抜きで行いましょう」
「電話の受話器を置き、部屋にいる他のメンバーを見て言う」

「デートハルト、何故シュナイゼルたちを捕らえなかった？護衛はラウンズとは言えたった一機だったのだろうか？」
千葉がデートハルトに聞く

「彼の専用機にはフレイヤ弾頭が詰まっています」

「フレイヤ？」

初めて聞いた単語に千葉と藤堂は頭に疑問符を浮かべる

「トウキョウ租界で大爆発を起こした爆弾です。爆発させられればゼロや私達諸共無事では済まない」

「シュナイゼルの目的は分からないが、我等だけでも話してみるしかないだろう」

藤堂は他のメンバーを見回す

「私パス。戻ってきた紅蓮ともうすぐつく飛翠竜の調整をしなくちゃいけないから」
ラクシャータはキセルを弄ぶ

「では、交渉は私、千葉、デートハルト、それからマックスに駄目だ。見当たらねえよ扇の奴。つつうわけで俺も参加するぜ」

「

「お待たせしました」

会議室の扉が開き会談参加メンバーが入る

「悪いな。お前らにやられた負傷兵の世話で遅れちまった」
玉城は皮肉全開で言う

「……（何故この男がいるんだ）」「……」
マックスを除く3人が不満そうに顔を歪める

「ゼロとは先日の勝負がまだついていませんでしたからね」
前に置いてあるチャス盤を見て呟く

「ゼロは参りません。お話の内容を確認します」

「でしょうね、出てこれるはずがない。彼は本来人に相談するタイプの人間じゃありません。1人で抱え込み人を遠ざけるはず。それでも貴方よりは彼のことを知っているつもりなんですよ?」
笑みを浮かべてディートハルトを見る

「何?」

その言葉にディートハルトは眉間にしわを寄せる

「ゼロは、私やこのコーネリアの弟です。神聖ブリタニア帝国元第一王子ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。私がもつとも愛し恐れた男です」

「……」

マックスは黙ってシュナイゼルを見る

「馬鹿な」

「ゼロがブリタニアの王子だって？」

他の4人は信じられないと言う顔をする

「そのような戯言で我等を混乱させようとは。我々はゼロを、系譜でなく起こした奇跡によってみとめているのですから」
最初は驚いたデイトハルトだがすぐさま苦笑を浮かべる

「しかし、その奇跡が偽りだとしたらどうでしょう？ゼロには特別な力、ギアスがあります。人に命令を強制させる力です。強力な催眠術と考えていただければ」
その言葉を遮るようにシュナイゼルが言う

「奇跡の種がその力だと？」

「さつきから気になっていたんだがよ。皇子とかギアスとかの証拠を見せてからにしてくんねえか？」

ようやくマックスが口を開く

「そうだ！証拠も無く俺のゼロにケチつけんじゃねえ！」
玉城もシュナイゼル達に噛み付くように言う

「証拠ならある！」
扇がヴィレッタと共に部屋に入ってくる

「扇？」

「ゼロはずっと俺達を騙していたんだ。ずっと、駒として怒りで扇の顔が歪む

「しかし、それが本当なら」
千葉も表情を曇らせる

「だからと言ってこれまでのゼロの功績を消し去ることは出来ません。それに本当にギアスがあるのなら頼もしい限りじゃないですか？ブリタニアに対抗する強力な武器になる」
デイトハルトは嬉しそうに笑みを浮かべる

「その力が敵に対してのみ使われるのであればな」
扇が目を瞑る

「まさか、私達にも？」

藤堂や玉城も椅子から立ち上がる

「そうだ、奴は実の妹であるユーフェミアを操って、特区日本に集まったイレブンを虐殺させた」

コーネリアは眉間にしわを寄せる

「証拠はこちらです」

シュナイゼルはそういうと録音機のボタンを押す

「ルルーシュ、君がユフィにギアスをかけたのか？」

「ああ」

「日本人を虐殺しろと？」

「俺が命じた」

内容はルルーシュとスザクの会話だった。

「これで分かっただろう？あの虐殺はゼロがやったことだ。我が妹ではない」

「ゼロが日本人を殺せと？」

「それと、こちらがギアスをかけられた疑いのある人物のリストです」

カノンが写真つきの資料を藤堂に渡す

「草壁！？片瀬少将まで！」
それだけではなく

ユーフェミア、ジェレミア、ダールトン、シャーリー、ギルフォード、その他十数名がその資料に載っていた。

「これでジェレミアたちがこちらに寝返ったことも説明がつく」
ジェレミアとギルフォードの資料を見る

「私とて彼のギアスに操られていないとは言えない。そう考えると
ても恐ろしい」
シュナイゼルは顔を俯かせる

「まさか、俺達も！？」

「そしてもう一つ。私達は事前にフレイヤ弾頭のことをゼロに通告
しました。無駄な争いを避けたかったからです。ランスロットに通
信機録が残っています。ご要望とあれば後程お渡ししましょう」
カノンが席に着く

「我等に伝えなかつた？」

『ゼロは信用できません！』
朝比奈の声を思いだす

「省吾」

朝比奈の無念を感じ目を伏せる

「俺は彼を信じたかった。信じていたかった！しかし、彼にとつて俺達はただの」

「駒だつて言うのか！？ちくしょう！ゼロの奴よくも！」

「そんな」

4者4様の表情をするが、それはゼロに対する怒りや恐怖であることは変わらない

「……」

マックスだけは静かにそれを眺める

「皆さん。私の弟を引き渡してくれませんか？」

シュナイゼルが見計らってから扇たちに聞く

「条件がある」

扇が涙を拭いシュナイゼルに挑むように見る

「取引できる状況だと思っっているのか？」

コーネリアがそんな扇を睨みつけるが

「聞きましよう」

シュナイゼルがそれを手で制して扇の話を聞く

「日本を返せ」

静かな表情でシュナイゼルに言う

「なっ！」

そんな発言にシュナイゼルも目を見開く

「信じていた仲間を裏切ったんだ。日本だけでも救わなくては俺達を信じてくれていた人を裏切ることになってしまっ。それだけは絶対に避けなくてはいけない」
表情を崩さずに言い切る

「私の一存では決めかねますが、前向きに検討することをお約束しましょう」

シュナイゼルも少し扇を見つめ、何かを感じたのか頷く

「そうか。では、俺達はこれからけりをつけに行ってくる」
そう言うと、扇は部屋を出る

その後続くように玉城や藤堂も出て行く。

「君は行かないのかね？」

残ったマックスにシュナイゼルが聞く

「後でな」
姿勢を変えず偉そうな態度で答える

「それにしても随分冷静だね。他の方達は驚いていたと言うのに」
マックスだけになったからなのか口調を崩す

「俺は元情報屋だぜ？提供された情報は疑うことからはじめてんだ」
なめんなよ？と言う表情でシュナイゼルを見る

「なるほど、だが、私達の話に不審な点は無かったと思うが」
シュナイゼルは不思議そうにマックスを見る

「まず、アイツ等は頭が花畑だから納得しているが、オマエの出してきた証拠の音声が旦那本人だとどう説明する？オマエ等が細工していないとどう説明をつける？」

「それでも、あの被害者の資料が」
その言い方が癪に障ったのかカノンがマックスに突っかかる

「ジブン達が矛盾してんのに気づかねえのか？何でギアスにかかってるかどうかわからねえんだろ？それなのに裏付ける証拠もクソもないだろ？ギアスにかかったときに何か発作や症状が出るなら別だ

「がな」

「……………」

シュナイゼルは真剣な表情でマックスを見る

「それにフレイヤもだ。危険な兵器持ってますので帰ってくださいって言われて。はい、そうですね。ってなるわけ無えだるボケが。それに枢木スザクは通告後すぐに撃たなかつただろ？それじゃあ、ハツタリだと思つて普通だ。もし俺が旦那の立場でも同じことをするぜ？」

「それは」

カノンも言葉が詰まる

「なら、何故それを彼等に説明しなかつたんだい？」
シュナイゼルは前屈みになりマックスに聞く

「星刻や神楽耶なら俺の話を聞かなくても俺と同じ考えに辿り着くと思うが、アイツ等は旦那に前から不信感を抱いていた上に無駄に頑固だから言うだけ無駄だ。それにそんなヤツ等に命を預ける気はない。アイツ等が旦那を見捨てるなら俺も黒の騎士団を抜ける。オマエ等からしたら嬉しい限りだろっ？」

「さあ、どうだろうね」

苦笑を浮かべる

「まあいい、俺もそろそろ行くか。オマエ等も来るんだったら旦那にバレないようにくるんだな」
乱暴に立ち上がり部屋を出る

「やはり、彼は侮れないな。それにコーネリアを救った理由は何なんだろうね？」

マックスが去った後、椅子の背もたれに背を当てる

「誰か他の者のためと言っていましたでしたがそれが誰かまでは。それにゼロの正体がルルーシュだと言うこととギアスのことは前々から知っていたようです」

「元情報屋か。その情報源が何処からなのか、それに彼に関する情報を集めてくれるかな？」

シュナイゼルがカノンを見ながら聞く

「可能だとは思いますが他の幹部達に比べ分かっていないことが多い過ぎます。少し時間がかかるかと」

「構わないよ。では、そろそろ行くこうか。ルルーシュの、ゼロの最後を見にね」

視点 変更 ジェレミア

トウキョウ租界でナナリーを探していたジェレミアはそこでスザクを見つける。

「昔、私は君に助けられたことがあっただろうか？その礼を伝えただけだ。しかし、奇妙な関係だな私達は結局敵になる運命にあるかもしれないな。では、私はここで失礼する。私はナナリー様を探さねばならないのでな」

言うだけ言ってサザランランドJに向かう

「ナナリーは、もう」

ジェレミアの後姿を見ながらスザクは呟く

「（ロロか？）何だ？ルルーシュ様に何かあったのか？」
携帯電話を出ると

「始めましてジェレミア卿」
知らない声だった

「誰だ？そして何故私の電話番号を知っている？」
その声に怯むことなく聞く

「今は秘密ですが時間が経てばお教えしましょう。で、電話を

かけたのには理由がありまして」

「 用件は何だ？」

「流石、話が早くて助かります。ルルーシュさんの忠実な部下である貴方にお願ひがあるんですが、ある場所に来て欲しいんです。そこで待っている人に貴方のギアスキャンセラーを使ってもらいたいですよ」

視点 変更 ルルーシュ

ナナリーを失ったショックでルルーシュの顔にはまるで生気がない。

「扇さんが4号倉庫に来て欲しいって。細かいことは私も聞かされないんだけど」

カレンが斑鳩内にあるゼロの部屋に入る

「ご主人様。あの、私頑張りますから」
本棚の陰に隠れながらだが必死に言う

「 私がいない間にアンタ達は一体何やってたのかしら？」
蔑むような目でルルーシュを見る

「違う。このC・Cはその 記憶が失っているんだ」
重々しく答える

「え？」

本棚に隠れているC・Cを見る

そのカレンから隠れるように更に隠れる。

「だから、お前の知っているC・Cはもういない。俺のせいだ」
ゆっくりと仮面を被り、マントを羽織る

「ご主人様？」

不安そうにルルーシュを見る

「心配するな。すぐ戻ってくる」
そう言い残しカレンと共に部屋を出る

「（ライがいなくなって、次にC・Cがいなくなって。今度はナリーも。これじゃあ、ルルーシュは）」
4号倉庫へ向かうエレベーターの中でルルーシュを見ながら思う

「カレン、助けに行くのが遅くなってすまなかった」
言いながらエレベーターから降る

「ルルーシユ」

何とか慰めの言葉を捜すが見つからない

すると、眩いライトの光がカレンとゼロを照らす。

「何だ!?!」

一瞬目がくらんだがライトの位置を見上げると

「ゼロ観念しろ!」

「よくも我々をペテンにかけてくれたな!」

そこには黒の騎士団の創立からの幹部達達が銃を構えて立っている

下には量産型の暁が並んでいた。

「君のギアスのことも分かっているんだ」
扇がゼロに言い放つ

「（何だと!?!）」

驚きながらも逃げ道を探そうとすると

「伝説の英雄ゼロは、志半ばにして戦死。しかし、その勇敢なる生き様は永遠に語り継がれるでしょう」

暁の足元でディートハルトがカメラを回しながらゼロを映す

「ディートハルト、それがお前の台本か？」

「本当なら、貴方がブリタニアに勝利する所まで取りたかったので。残念ながら番組は打ち切りです」

残念そうに首を振る

「（どうする？ギアスのことが何故ばれているのかは今置いといて、扇たちは目を保護してないところを見るとギアスの全てを知っていると言っ訳でないようだ。なら、ギアスをかけてしまうか？

駄目だ。コンタクトを取るのを忘れていた」

ルルーシュはギアスが使えないことに気づくと舌打ちをする

「待つて！一方的過ぎるわ。ゼロのお陰で私達はここまで来れたんじゃない？彼の言い分も」

カレンが庇うようにゼロの前に立ち腕を広げる

「離れるカレン！ゼロと一緒に死にたいのか？」

「まさかギアスにかかってるんじゃないだろうな？」

玉城と吉田がカレンを離れるように言う

「 答えてルルーシュ。貴方にとって私は何？」

顔を動かさずに目で聞く

ルルーシュが周りを見回すとシュナイゼルがカノンと共にその光景を見ていた。

「（！　そうか、これは貴方のチェックなのか。ならば、万が一の隙もないか）」
諦めたようにため息を吐く

「お願い答えて！」
カレンが待ちきれず声を上げる

「フハハハハ！馬鹿が、今頃気づいたのか？自分達が利用されていることに。貴様達は駒でしか無いと言う事を」
笑い声を上げながら仮面を外す

「ゼロ、君はやはりか」
扇はやはりと言う様な顔でルルーシュを見る

「ルルーシュ」
カレンは強張った表情でルルーシュを見る

「カレン、君はこの中で特別優秀な駒だった。そう、全ては盤上のことでしかない。ゲームだったんだよ」

笑みを浮かべながらカレンを見る

「そう、 さようならルルーシュ」

ルルーシュに背を向け

その目から涙が零れる。

信じてた相手に裏切られたのだから当たり前だ。

「構え！」

藤堂が言つと幹部たちがルルーシュに銃を向ける

「カレン、君は生きる」

誰にも聞こえないような小声で呟く

「え？」

「おいおい、自分が死にそうつてのに相手の心配か？ やっぱり旦那は甘いな」

横からマックスがルルーシュの前に立つ

「マックス！」

ルルーシュが何の恐れも無く立っているマックスを見る

「お前もルルーシユから離れる！撃たれたいのか！？」

「まさか、そいつを助けるつもりか？」

扇と南がマックスに問い掛ける

「かっかっか！旦那を助けるのは俺じゃない。俺は時間を稼ぐだけだ。おい、そこにいるのは分かってる。約束どおり後は頼むぜ」
後ろを見ながら呟く

「兄さん、大丈夫！？」

屋気楼が動き出し倉庫にロロの声が響く

「ロロ！？」

体を屋気楼の腕に掴まれる

「構わん！屋気楼ごと撃て！」

藤堂が下にいる暁部隊に言う

「待つて！」

カレンが止めようとする

「兄さんは僕が護る！」

ロロがギアスを発動させ斑鳩を出る

「雇気楼が消えた？」

ハツと見ると雇気楼はルルーシュと共に消えていた

「これは、バベルタワーの」

カレンが同じ現象を思い出す

「アーニヤ、ゼロが逃げたわ。モルドレットで捕まえられる？」

カノンが外で待機させていたアーニヤに通信をつなぐ

「破壊なら！」

シユタルクハドロンを雇気楼に向けるが何かに縛られる

「動くとも機体が粉々だぞ？」

縛っていたのはブレイドの蛇腹剣である

「何で邪魔するの？」

アーニヤが首を傾げて聞く

「一応俺の上司からの命令だからな。まあ、あの機体が逃げ延びたら俺はお前と殺しあっているからそれまで我慢してる」

「屋気楼が奪取された。戦闘可能な部隊は屋気楼を破壊せよ！」
デイトハルトが暁部隊に通信をする

すると数機の暁が屋気楼を狙って攻撃を始める。

「うわっ」

暁の攻撃に屋気楼が揺らぐ

「もういいんだロロ、もう」

屋気楼のコックピットに入ったルルーシュがロロに言う

「駄目だよ兄さん。兄さんは殺させない。絶対に！」
ロロの目が赤く光る

「やめ」

ルルーシュはロロを止めようとするがロロのギアスで言葉が止まる
超広範囲に展開したロロの絶対静止の結界に入った暁部隊は次々と
海面に衝突する。

「僕はずっと誰かの道具だった」
それを確認するとギアスを解く

「るんだ、ロロ！どうして俺なんか」

ルルーシュが言う前に再びギアスを発動させる

「僕は嚮団の道具で」

ハドロンショットでポートマンを破壊する

「を助けるんだ！？俺」

「その次は兄さんの。確かに僕は兄さんに使われていただけかもしれない。でも、あの時間だけは本物だった！」

今度はブリタニア軍のサザーランドを

「はお前のことを利用し」

「あの思い出の お陰でようやく 僕は、人間になれた！ ゲホゲホ！」

次は量産型ヴィンセント・ウォードを破壊したロロだが苦しそうに咳き込む

「して ロロ！？」

ギアスが解けたルルーシュが見たのはさっきまで元気だった顔が蒼白になり、苦しそうに胸を押さえているロロの姿だった。

そんなロロに休む暇も無く前方には軽アヴァロンが塵気楼目掛けて

撃ってくる。

「だから　もう　僕は　ゲホゲホ！」

再びギアスを発動させようとするがむせて発動が出来ない

「止めてくれ！ギアスをもう使うな。死んでし」

ルルーシュはそんなロロを必死で止めようとするが

「僕は　道具じゃ　ない。これは　僕の　僕の意思な
んだから！！」

最後の力を振り絞り屋気楼の構造相転移砲で軽アヴァロンを破壊する

ロロはもう操縦するだけの力も残っておらず、屋気楼はそのまま下の林に落下する。

「ロロ、どうして俺を助けた？」

ロロの目を見ながらルルーシュが聞く

「兄さんは　嘘つきだから。嘘　だよな？兄さんは　僕の、こと

嫌い　じゃないよね？」

「そうか、すっかり見抜かれていたのか。流石は俺の、ルルーシュ・ランペルージの弟だ」

ルルーシュは精一杯の笑顔でロクを褒める

「そう…だよ 僕は、兄さんのことなら 何でも 分かる
だって、兄…さんの 弟だ…もん」

その笑顔を見て嬉しそうにロクも笑顔になって、幸せそうに目を閉じる

ロクはそれ以降ピクリとも動かなかった。

「 そうだ、お前の兄は嘘つきなんだ」

ルルーシュは薄く笑みを浮かべロクの手を持っていたソケットを取る

その後、ルルーシュはロクを埋葬し、ロケットを墓石代わりに立てた太い木の枝に吊るす。

「ナナリー、ロク、シャーリー、黒の騎士団。 俺は全てを失った。これが結果、いや、報いか。でも、だからこそロク、お前が繋いでくれたこの命で俺は成さねばならないことがあったんだよな？
そうだ。シャルル・ジ・ブリタニア俺の地獄への道行きにはお前も一緒に来てもらうぞ！」

遠くの空に浮いているシャルルが乗っているであろう重アヴァロンを見上げる

視点 変更 ライ

黒の騎士団幹部とシュナイゼルが会談をしている頃。

謎のメールを受け取ったライは式根島の指定された場所にマーリンで来ていた。

「誰だ？」

マーリンから降りたライは後ろに生えている一本の木を見る

「ほう、あやつの言う事は本当であったか」
木の陰に1人の男が立っていた

「私は誰だと聞いている」
その陰に銃を構える

「よく思い出すのだ。お主は我輩のイケメンフェイスに見覚えがあるはずだ」
キラツと歯を光らせてライを見る

「（！ 何だ？目の前の男を私は知っている？）」
ライは頭痛の激痛に頭を押さえる

カレンと接しているときとは違い、中の自分も驚いているような感

覚。

「やはり、お主の中のお主は覚えておるようだな。あやつが来るまで待とうではないか。あやつが来ればお主のモヤモヤが抜けるらしいからの」

第六十話 次本編20 ゼブルと皇帝 失格 (前書き)

テスト終了!

そして半端投稿

第六十話 次本編20 ゼブルと皇帝 失格

「う！（また、頭痛が！）」
アーニヤの頭に頭痛が走る

サーズとの戦闘が面倒で少しの間逃げ、ほとぼりが冷めた頃戻ってきた瞬間のことだった。

「そう、始まったのね。なら、私も あら？」
急に笑みを浮かべると、斑鳩の甲板にいるC・C・Cを見つける

「直接会うなんて久しぶりね。私よ私」
モルドレッドから降り、C・C・Cに近づく

「ごめんなさい！ごめんなさい！」
しかしC・C・Cは見に覚えが無く必死に謝るだけ

「　　そういう事ね」
何かを理解したのか別人格のアーニヤがC・C・Cを合わせギアスを発動させる

C・C・Cの深層精神の世界と言うのか分からないがそこには椅子に

座っているＣ・Ｃがいた。

「何やってるの？こんな所に閉じこもって。試しに使ったギアスも効いたから驚いたわよ」

そのＣ・Ｃに後ろから声をかける

「ん、誰だ？」

Ｃ・Ｃも別人格のアーニヤに気づく

「私よ」

アーニヤの体が足から変わっていき黒髪の女性になる

「お前、こんなとこまで何の用だ？」

その姿は知っているのかＣ・Ｃがその女性に聞く

「貴女がまだ私たちの味方なのかの確認にね。Ｃ・Ｃ、何でコードをシャルルに渡さなかったの？シャルルなら貴方の死を叶えてくれるのに」

「分からないんだよ。自分でもちよつと驚いてる」

「じゃあ、確かめましょう、現実でね」

その女性が言うと背景がＣ・Ｃの精神世界から斑鳩の甲板に戻る

「全く私を何だと思ってるんだ？」

「気にしないの。でも、感謝はしてるのよ？私にギアスを与えてくれたことにはね。ほら、乗るわよ」
モルドレッドに乗り込む

「契約不履行のクセによく言うな」

狭そうに体を屈めてC・Cもモルドレッドに乗り込む

「そう言うなら一緒に行くわよ。シャルルも待ってるだろうしね」

視点 変更 マックス

ルルーシュが屋気楼と共に斑鳩を出て数時間後。

星刻と神楽耶はその話を聞くために大竜胆を離れ、斑鳩に着いた。

「ゼロ、いやルルーシュは我等に強力な催眠術であるギアスを使って我等を駒として使っていたか。にわかには信じられんな。だが」
星刻が扇たちをジロリと見る

「ゼロ様は本当に裏切ったのでしょうか？」
星刻の後を神楽耶は続ける

「ですから証拠の書類が」

デイトハルトが星刻たちの前にある書類を読むように促すが

「ギアスをかけられて前後の記憶が定かでないのにどうして信じられるのですか？そんな不確かな記憶が証拠になりますか？」

「それに向こうは交渉だけでEUの半分以上の領土を奪ったシュナイゼルだぞ？そんな奴の話を疑わず口車に乗せられるとは」
神楽と星刻が同じように扇たちを蔑むかのような目つきで見る

「ほら見る、俺と同じこと言ってるだろ？」

机に足を乗せて偉そうに状況を見ているマックスが言う

「うう」

返す言葉がないのか藤堂やデイトハルトも目を逸らす

「だが、自白したと言うことは事実もあつたのだから。なら、我等はそれを最大限利用しなくてはならない」

「いいけどさ、ゼロがない黒の騎士団は誰が仕切るの？」
ラクシャータがキセルを吹かしながら聞く

「最高責任者が不在の場合は独立型零番隊長が新たに最高責任者が現れるまで代理となる。つまり当分の間黒の騎士団最高責任者はマックス、君だ」
星刻がマックスのほうを見る

「おいおい、旦那に代わるヤツなら俺よりオマエのほうが適任だろ？」
面倒そうに手を払う

「そうしたいのも山々だが私の体が弱いことは承知しているだろ？ラクシャータのお陰で楽にはなったが完治したわけではない。それに君は優秀だ」
わざとらしくで咳をする

「確かに、マックスさんなら実力、指揮能力、カリスマ性も申し分ありません。少し口が悪いですけど」
神楽耶も頷く

全員の視線を集めるマックスだが

「いや、最高責任者どころの前に俺は黒の騎士団を脱団するつもりだ」
何でも無いことのように姿勢を更に崩す

「何を考えている！君は幹部の1人なんだぞ！？冗談だとしても

つと」

扇はマックスに近づくが

「扇、俺は約束したよな？どんなことがあっても旦那を信じろつて。それを守らなかつたヤツ等に俺は命を預けたくねえ」

鋭い目つきで扇を見る

「だが」

「それに旦那のブリタニアへの恨みは本物だ。旦那は小さいときに母、マリアンヌ・ヴィ・ブリタニアを謎のテロリストに殺され妹、ナナリー・ヴィ・ブリタニアとともに外交の道具としてこのエリア11に来た。時間的に言えば極東事変よりちょっと前だな」
マックスが話し始める

「なるほど、ゼロ、いや、ルルーシュがあそこまでナナリー総督に固執するのは同じ母を持つ唯一の妹だからか」
今までナナリーへの異様な固執の訳を考えていた藤堂が納得できる理由だ

「は！もしかして」

神楽耶は思い出したように手を叩く

「気づいたようだな。神楽耶と枢木スザクはそこで初めて2人に会うんだ。枢木スザクと旦那は最初は喧嘩が絶えなかつたが時間が経

つにつれ仲良くなっていった。しかし、日本とブリタニアの戦争は止まらず、ブリタニアの勝利。ブリタニア本国では旦那達は巻き込まれて死んだと公表され、旦那と枢木スザクは離れ離れになった」

「確かにそんなことがあつたら例え生まれ故郷でも恨むようになるよな」

玉城は自分のことのように悲しそうな顔をする

「それに旦那達が生きていると他の皇族の後ろ盾貴族共に知られれば、後ろ盾貴族共は自分達が推している皇族の邪魔だと判断し、殺そうとするだろう。旦那達は暗殺者に怯えながらの生活を強要された。そうして旦那は決意した。目が見えなく足が不自由な妹が暗殺者に怯えることなく幸せに過ごせる世界を作ると、そのために黒の騎士団を作った」

「誰だつて体が不自由な妹が命狙われてるんだつたら救うために何だつてするよな」

再び玉城が感慨に浸る

全員は静かにマックスの話を聞く

「ライもライでアイツは日本人とのハーフだからな。それだけで腹違いの兄弟達からは苛められていた。ジブンが苛められるだけならまだ耐えられる。だが、同じ母を持つ妹が苛められるのだけは我慢できなかつた。そうしてライは決意した。ジブンが皇帝になり妹と母が安心して過ごせる国を作ると。結局、ライも旦那も似たもの同士

ってことだ。ジブンより弱い存在が悲しまない優しい世界を作ろうとしていた。そんな旦那達をオマ工等は裏切った。カレンは旦那の嘘が原因とはいえ旦那から離れた。それはライも否定するのと同じだ」

マックスが鋭い目つきでカレンを見る

「……………」

カレンは必死に涙を堪えていた

「何故その事を話さなかった？話していればルルーシュを信じていたかもしれないかったんだぞ？」

扇はマックスに聞く

「オマ工等に言っても無駄だと分かったからだ。シュナイゼルにまんまと誘導されてるオマ工等にはな。サーズは置いていく、オマ工等が好きに使え、戦力的にはラウンズと肩を並べられるし、アイツは戦場さえあれば満足だからな。じゃあ、今まで世話になったな」

そう言うとポケットからボールを取り出し床に投げつける

ボールからは煙が噴出される。

さっきまでいた場所にもうマックスはいなかった。

「ゼロに続きマックスまでもいなくなったか」

視点 変更 ジノ

黒の騎士団が撤退した後、シュナイゼルはすぐにアヴァロンを離れ、黒の騎士団に向かいその付き添いにアーニャが同行した。

アイネはアヴァロンにある休憩室に閉じこもり、ジノはロイドからツヴァイの死を聞いた。

そして、その死がフレイヤによるものだと言うことも知った。

そのフレイヤを撃ったスザクを問い詰めようと一室にロイド達と共に呼んだが

「シュナイゼル殿下に、コーネリア殿下？いつこちらに？」

スザクが入ってきて話そうとした時に部屋にシュナイゼルとコーネリア、そしてカノンが入って来た

「そのままでもいいよ。ロイドたちを探してたらここにいて聞いてから」

畏まった表情のジノやセシルを見て優しく言う

「殿下、自分はフレイヤを放ち黒の騎士団に多大なダメージを与えました。すぐにでも追撃命令を」

スザクがシュナイゼルに寄る

「急にどうしたんだい？」

スザクの目つきを見てただ事ではないと感じて聞く

「思い知ったんです、昔の自分は甘かったと。結果や手段といいながら、自分が大切にしていたのは理想や美学だったのではないかと。そして分かったんです。そんなものでは戦争を終わらせられないと」
シュナイゼルに答える

「しかし」

「それとも、殿下がしていただけるんですか？自分をナイトオブワンに」

真剣な表情を崩さずにシュナイゼルを見つめる

「あまりにも不敬な発言だぞ枢木。ナイトオブワンの任命は皇帝の特権の一つだ。つまり」
チラリとシュナイゼルを見る

シュナイゼルは一度を瞑り、少し考え

「では、なるとしよう。私が皇帝になれば問題はないね？」
スザクに聞く

「幾ら殿下でも皇帝陛下の騎士である私の前でのその発言は見過ごせるものではありません」
ジノがシュナイゼルの前に立つ

「俗事と仰ったそうだよ。陛下は黒の騎士団との戦争のことを。それに父上は危険な研究にのめり込み、たびたび玉座を離れている。そう、政治を、戦争をゲームとして扱ったんだよ。この世界に、今日と言う日に興味を失い皆が苦しんでいるのをただ眺めているだけの男に王たる資格はない」

そんなジノに真剣な目でジノを見返す

「これってつまり」

セシルがロイドを見る

「クーデター」

ロイドも少し驚いたように呟く

「殿下、自分に皇帝陛下の暗殺の御命じ下さい」
そんなシュナイゼルにスザクが進言する

「スザク、お前はいつまで裏切り続ける気だ!？」

「ジノ、人を殺め偽るのが人の業なら僕はこれを認めよう。必要なのは結果だ!」
迷いのない目つきでジノを見る

「枢木スザク!」

部屋の扉を乱暴に開けアイネが入ってくる

そして、入った瞬間スザクの顔面に手加減一切なしの拳を放つ

「ぐっ！」

仰向けに倒れる

「はあはあ、立て！肅清できないだろ！立たないのならそのまま息を荒げながらそんなスザクを殴ろうとする

「止めるアイネ！シュナイゼル殿下やコーネリア殿下の前だぞ」

ジノがアイネを押さえシュナイゼルとコーネリアを見る

「コーネリア様」

コーネリアを見て一瞬驚くがすぐにコーネリアに抱きつき、胸の中で嗚咽する

「どうしたんだ一体？」

アイネの行動が理解できず困惑する

「肅清、そうかフレイヤのことか」

立ち上がりながらスザクが聞く

「うるさい！お前がフレイヤを撃たなければあの人死ぬことは無

「かった！」

「やっぱりか、君はドウ卿が死んだから悲しんでいる。他の被害者を考えずに一番近い者が死んだから俺に怒っているだけじゃないか？君がドウ卿に惚れていたからって」

スザクはそんなアイネを冷たい目で見る

「貴様！」

アイネが再びスザクに殴りかかろうとする

「アイネ！」

それをジノが押さえる

「そうだろうか？満足に飛べない君のナイトメアがフレイヤから逃げ切れたのはドウ卿のお陰だ。だが、そのドウ卿は君を助けるために死んだ。なら、君にも罪はあるはずだ」

アイネ目を見ながら指を差す

「！ 僕が殺した？」

考えてみればツヴァイのフローレンスは黒の騎士団との戦闘での破損はほとんど無かった。

逆にアイネのゲイラントはカレンの紅蓮にフロートをやられ飛行す

らままならなかった。

そんなゲイラントをフローレンスはフレイヤから離し、そしてゲイラントは助かりフローレンスはフレイヤに飲み込まれた。

「いい加減にしろ！今回は誰が見てもスザク、お前が悪い！結果はともかくお前はツヴァイが死ぬ原因と過程を作ってしまった。それだけじゃない、何の罪のない何千万の命を奪った。これは変えようのない事実だ！」

ジノはそんなスザクの態度に怒りを露にする

「だからこそ僕は止まれないんだ！それが僕が殺してしまった人達、通じてはドウ卿への償いにもなる！」
スザクも声を上げる

「そんなことでツヴァイが喜ぶわけないだろ！」

「そんなことはない！ドウ卿は「ツヴァイ殿の正体がゼブルだとしてもそんなことが言えるのか！！え？」

スザクのジノの言い争いに我慢できなかったアイネが入る

涙を流さんと必死に我慢しているが、言葉に出したことで我慢できなくなり止まらずポロポロと流れる。

「ドウ卿の正体がゼブル？」

「そつだ、あいつは あいつは くっ！」

アイネは言葉が出せず部屋から走って出て行く

アイネが去った後、スザクは驚愕のあまり地面に膝をつき呆然とする。

「あれ？何でナハトム卿も知ってるの？」

ロイドは違う意味で驚いている

「ロイドさんは知っていたんですか!？」

「まあね」

「ロイド、ドウ卿の正体と言うゼブルと言うのは誰だい？」

ゼブルとの直接の接点のないシュナイゼルは困ったようにロイドに聞く

「スザク君やニーナ君と同じ学校の同級生で、僕の研究も手伝ってくれていた協力者兼友人ですよ」

「学生だったと言うのか？あの老練なツヴァイが？」

コーネリアだけでなくシュナイゼルやカノンも驚いている。

素顔が分からなかったがその常人離れした先読みやただならぬ雰囲気から自分たちと年代がそれ以上と考えていたのだ。

「(ゼブル、本当に君の命を俺が奪ったのか？ 君のためとはおこがましいことだが俺は必ず皇帝陛下を討つ！ ルルーシユやナナリ一の絶望も込めて！)」
スザクは表情を変え、壁の装飾として置いてあった剣を取り部屋を走って出る

「スザク！」

ジノは追いかけようとしたがスザクはすぐに見えなくなった

「さてと」

ロイドはポケットの中から何かのディスクを出した

「それは何だ？」

「彼が死んだ後に見てくれて言っていたものです
それを置いてあった再生機の中に入れる

「こんにちは、これを見てるって言うことはスザクはフレイヤを撃つちゃったんだね」

ゼブルは椅子に座ってツヴァイの仮面を弄りながらカメラ目線で話す

「口調が全然違うではないか。本当にこいつがツヴァイなのか？」
疑うような目つきでロイドを見る

「口調のことは言わないでほしいね。それにほら、この仮面が証拠
つてことで」

まるでリアルタイムで聞いているかのように答える

「……（何故分かった!?）」「……」

「で、用件なただけどまず1つはアリスちゃん達　ああ、ツヴァ
イ・ドウの部下権娘の特別フアカルティース工作部隊の子達ね。あの子達に俺のこ
とは秘密にしてももらえるかな？年も違う俺が親だと知ったら色
々面倒だし、面倒だからね。あと、ここからが本題だけど2「お父
さん！ナナリーが紙で指斬っちゃった！！」
「大事なことを言う前にアリスが部屋をドンドン！と叩く」

「はあ、今行きます。あと、深夜ですので声は抑えてください！
ため息を吐く」

「これ取り直しかな？全く、ナナリーちゃんのことになるとこれだ
から」

仮面を被りカメラの電源を押した

映像はこれで終わり。

「……」

中途半端な終わり方に誰も声を出せなかった

「ゼブル君らしいね。とにかく、これでゼブル君がドウ卿だと分かりましたね？」

シュナイゼルとコーネリアのほうを向く

何とも言えない顔だが納得は出来たようだ。

「それを知っていて何でロイド博士はスザクを怒らないんですか？博士は先輩の友人だったのでしょう？」

ジノは飄々とした態度のロイドに聞く

「フレイヤの装備を許可したのは僕だからね。僕にも責任はある。それに僕はもう壊れちゃってるから」

あはは、と笑っているが目だけ笑っていない

自分を友と呼び、自分も友として接した者の死にもまるで涙が出ない。

「（ああ、僕は本当に壊れちゃってるんだね）」
屋根を見上げそんな自分にただ単と感想を述べる

「（ロイドさん）」
セシルはそんなロイドを心配そうに見る

「問題はこの事実です。ドウ卿の戦死は遅かれ早かれ伝わります。

その時に正体が一学生だと公表しますか？」
カノンはシュナイゼルに聞く

「いや、彼は英雄のまま死なせてあげるのが一番だろう。それに正体を言うなど言っていたのだから尚更だ。彼の意味を尊重しよう」
少し考え頷く

コーネリアもジノもセシルもその意見に頷く。

「スザク君のほうはどうなったかな？」

視点 変更 ライ

S・Sと共に式根島で待っている

「あれは黒の騎士団の」

ライは近づいてくるサザerland」を見つめる

「彼等か」

ジェレミアもライたちを確認するとサザerland」を着陸させ、降りる

「（名も知れぬ同士よ。ルルーシュ様のためと言うその言葉、信じろぞ）」

ジェレミアはライに向かってギアスキャンセラーを発動させる

「!?!」

ライは頭に走る激痛に一瞬気が遠くなる

自分の過去、ギアス、自分を助けてくれたミレイのいい加減なイベント、友達として接してくれたゼブルとリヴァルと一緒に過ごした平和な時間、自分と同じギアス能力者にして黒の騎士団では頼れるパートナーだったルルーシュとの会話、そして自分が始めて恋したカレンと一緒に過ごした日常と戦場、その全てを思い出す。

1656

「聞いておるぞ。お主がギアスを破壊せし者か。興味深いの」
大きな石の上に座っていたS・S・が面白そうにジェレミアの左目を見る

「そう言う貴方は一体」

S・S・の雰囲気はジェレミアは思わず敬語で聞く

「すぐに分かることだ」

「僕はその男に記憶を」

息を荒げながらシャルルのギアスにかけられていたことを思い出し、

悔しさのあまり地面を殴る

「久しぶりだな。元気だったか？」

そんなライにS・S・Sが近づくと

「S・S・S！何でお前が？」

ライは驚いたようにS・S・Sを見上げる

「僕もお主同様呼ばれてな。　　どうやら来たようだな」

S・S・Sがライの背後の茂みを見ていると

「ごめんごめん、遅くなっちゃった」

その茂みからゼブルが出てくる

「ゼブル？何でここに？」

ライはゼブルが来たことにも驚いた

「電話の主か。これはルルーシュ様のためでもあるのかな？」
ジェレミアがゼブルに聞く

「勿論、説明が面倒だから後で教えるけど、皇帝シャルルに記憶を変えられる前は黒の騎士団でルルーシュさんの右腕として信用されていた」

「どういう事だ？何故ゼブルがそのことを」
ライは困惑しながらゼブルを見る

「そう言えば挨拶が送れたね。俺はアッシュフォード学園生徒会副会長のゼブル・オウサルト、更に黒の騎士団独立型零番隊長マックスにして、ナイトオブツーツヴァイ・ドウ。それが俺だよ」
笑顔でゼブルもライを見る

「どうということだ？」

「そうだね。まず、君が黒の騎士団からいなくなった後のことを全部話すよ」

全てを話すと。

「すまなかった」

本当につらそうな表情で頭を下げる

仲間として戦っていた相手に記憶が換えられていたとは言え戦い。最愛の女性も傷つけた。

「君も被害者なんだから落ち込まないの」
そんなライの肩を叩いて慰める

「しかし、ギアスがバレたとなると面倒じゃの」
S・S が唸る

「まあ、催眠術程度にしか考えてないけどね。それにスザクはシャルル・ジ・ブリタニアのギアスのことは言わなかったみたいだ」

「ゼブル、何故ギアスのことをそこまで詳しく知っている？」

「俺もギアスを持っていてね。人格を変える力なんだ」
目にギアスの紋章を浮かべる

「お前はそのギアスで何を求める」
腰にある銃を握る

不満な内容なら即発砲するつもりだろう。

「ハッピーエンドと世界平和。そのためにもライ、君は俺と来てもらうよ」

そのライの姿を見ても変わらぬ表情で言う

「一体どこへ？」
その表情に嘘がないと察し、銃から手を離す

「神根島にいるルルーシユさんの所に決まってるでしょ。そこで君は全てを決めるんだ。ギアスのことも、カレンちゃんのことね」

「我輩たちはどうすればいい？」

待ちくたびれたように欠伸をかみ殺す

「2人はここで待ってって。あと、この世界ってどうやって入れるの？」

「入りたいと念じれば普通に入れる。と言っても我輩は一度も入ったことが無いがの」

困ったように頭を掻くが

「まあ、なんとかなるかな。連絡を入れたらジェレミア卿はS・Sと一緒に神根島に来てね」

さして気にしていないように言う

「分かった」

「んじゃ、行こうか。俺は飛翠竜で行くけどライはマーリンで行けるね？フーレンスはフレイヤに吞まれちゃったからね」

「（ルルーシユ、君がナナリーを失った悲しみは僕も痛いほど分かる。ルルーシユ、僕は君を救ってみせる。それが例えカレンと敵対

することになったとしても」

視点 変更 ルルーシュ

神根島にある遺跡の中に存在するこの世界。

そこにシャルルが1人でいた。

「さあ、神よ、決着のときは来た」
手の平のコードが輝きだした

すると、底が見えない下から黒い謎の塊が2つがねじれながら渦と
なつて上へ上へと伸びていく。

「違うな、間違っているぞシャルル・ジ・ブリタニア。決着をつけ
るのは神ではなく、この俺だ」
シャルルにルルーシュがゆっくり近づくと

「俺にはギアスも銃も剣も効かぬと言うのに」
余裕の笑みを浮かべてルルーシュを見る

「貴様がここに入ったことよつて勝利の目算が立った」

ルルーシュが笑みを浮かべる

「ぬ？　！　出口を封じた！？」

この世界の空に青い雷が走る

「貴様が何をしようが現実には干渉できなければ意味がない。死んだも同然だ」

仕返しとばかりにルルーシュはシャルルの顔を見て笑う

「ルルーシュ！」

「貴様が作ったこのシステムは今や貴様を閉じ込める魂の投獄となった。さあ、俺と共に永遠の懺悔に苦しむがいい！！」

第六十一話 次本編21 ゼブルとラグナレクの 接続

式根島から移動し、神根島の沿岸にナイトメアを隠した2人が目的の遺跡に向かう途中

「どうなっているんだ？ブリタニア同士が攻撃し合っているぞ？」

ビスマルクもいると言つことはやはりシャルルはここにいるのか？」

上を見上げながらライが呟く

ビスマルクが乗っているであろうギアラハットが次々と同じブリタニアのナイトメアを破壊している。

「ルルーシュさんのギアスにかかっているんですよ。おっと、黒の騎士団も参戦か」

その一方のブリタニア軍を後から来た紅蓮と神虎が攻撃する

ギアラハットと交戦していない所を見ると共闘しているようだ。

「アヴァロン、シュナイゼルと共に来たのか？」

その後ろからアヴァロンと斑鳩が迫ってくる

「何か面倒だね。さっさと行こう」

そそくさと小走りで目的地へと向かう

洞窟の中の遺跡の奥にある扉を見つける。

「先客だね、それに扉がかなり壊れてるね」

扉の前にいる3人の影に気づき近くの岩影に隠れて様子を見る

「スザクにC・C、それにアーニヤか？どうする？接触するか？」

ライは組み合わせの意味が分からず困ったようにゼブルに聞く

「うーん、とにかく様子見だね。少し待っていないなくなったら行こう」

視点 変更 スザク

シャルルを殺害しにやってきたスザクだがすでにシャルルはこの世界に入っており、ルルーシュも入った後だったので扉は半壊していた。

どうしていいか困っていたところにC・Cと別人格のアーニヤが来て今に至る。

「こんなに壊れたら駄目ね。C・C、お願い」

神根島の扉を調べていた別人格のアーニヤは諦めてC・Cの手を握る

「本当に行くのか？」

「何言ってるの？シャルルは私達を待っているのよ。あなたがコードをシャルルに渡してたらもつと簡単だったのに。じゃあ、先に行ってるわね」

C・C・とは繋がっていないほうの手を扉に当てる

扉は赤く光、C・C・の額の紋章も同じように光りだす。

別人格がいなくなったからなのかアーニヤの体が倒れそうになる。

「アーニヤ！」

スザクがアーニヤの体を掴み、意識が無いことを確認する

「お前と私は似ているな」
スザクを静かに見る

「似ている？」
アーニヤを地面に寝かせる

「死を望みながら死ねない所がな。私はルルーシュを利用して、全てを知っていながら私は死という果実を得るためにあいつが生き残ることだけを優先して」

そんなアーニヤの頭に持っていたチーズ人形を枕のように頭と地面の間に入れる

「後悔を？」

その光景を見ながらスザクが聞く

「私は永遠の時を生きる魔女。人間らしさは捨てたんだ」

「君と僕は似てはいないよ。C・C、僕を向こうの世界に送ってくれ。例え無謀だとしても立ち止まることだけは出来ない」

視点 変更 ゼブル

数分後スザクとC・Cは扉の向こうに行った。

「やっと行ったか」

2人は隠れていた岩陰から出て扉に近づく

「アーニヤちゃんを放置とかスザクはやっぱり駄目だね。モルドレッドの中に入れておかないと危ないでしょうに」

横たわっていたアーニヤをチーズ人形ごとモルドレッドの中に入れる

「難しそうだが本当に大丈夫そうか？」
戻ってきたゼブルにライが扉を叩きながら聞く

「多分？」

曖昧な返事を取る

「疑問符はやめてくれ、僕も不安になる」
心配そうにゼブルを見る

「（大丈夫かな？）」
扉に触れて確かめる

【この程度なら大丈夫だ。早く念じれば俺が入れてやる】
リバーズがゼブルに言う

「【ありがとう】大丈夫みたい。行くよ」
ゼブルはライの手を握り扉の中に入った

視点 変更 ルルーシュ

皇帝と話していたルルーシュだが

「そ、そんな」

突然の来訪者に啞然とする

「大きくなったわねルルーシュ」

別人格のアーニヤ（以降マリアンヌ）が笑顔でルルーシュを見るとシャルルに近づく

「来たか、マリアンヌよ」

来るのが分かっていたからなのかルルーシュとは対照的にマリアンヌを見る

「これもまやかしか!？」

シャルルを睨みつける

「本物なんだけどね。まあ、このシステムでしかこの姿になれない
んだけどね」

軽く一回転し、スカートをたくし上げる

「本物だと?」

「今から半世紀ほど前、儂と兄さんは地獄にいた。皇位継承によっ

て繰り返される暗殺と裏切りの日々だった。皆死んでいった。そして私と兄さんは怒り悲しみそして誓った。嘘のない世界を作ろうと」
空中に額縁が現れ、髪の高いV・V・と幼いシャルルが手を合わせている写真が写る。

「私もC・C・もその誓いに同意したわ。でも、V・V・の裏切りによって」

今度はマリアンヌがV・V・に撃たれる写真だ。

「8年前の事件は私はV・V・に撃たれたわ。でも、死の間際私はC・C・から貰ったギアスが発動した。私のギアスは人の心を渡るギアスだったの。死にそうになった私は行事見習いとして来ていたアーニャ・アームストレイムと偶然目が合っただけでその力を知ったんだけど。肉体が死を迎えるときに時初めて分かったの。そして私はアーニャの中でV・V・をやり過ぎたの。そして私の意識を表層に上げる事によって私はC・C・と心で会話ができることを知ったわ。事実を知ったC・C・は嚮団をV・V・に預け、私達の前から姿を消したわ」

「僕は兄さんと話した。しかし 兄さんは嘘をついた！嘘の無い世界を作ろうと誓ったのに」
握り拳を固め、激昂する

「ふざけるな！死んだV・V・に全て押し付けるつもりか！？俺と

「ナナリーを日本に人質として送ったくせに！何故だ！？」
話を聞いていたルルーシュが2人に日本へ送った真相を聞く

「必要があつた。兄さんの目からお前たちを逃すために日本に送つた。そして、目撃者であるナナリーとアーニヤの記憶を書き換えねばならなかつた」

「ナナリー？目が見えなかつたのは心の病ではなくお前のギアス？」
確かに記憶を変えられるギアスなら不可能ではないだろう。

「偽りの目撃者とは言え命を狙われる危険は遭つた。ナナリーを救うためには真実に近づけない証が必要だつた」

「そして、元々の計画ではコードはV・V・Vのもつアダムのコードひとつでよかつたの。でも、研究が進むに連れ、S・S・Sが持つイブのコードが必要だと分かつたわ。でも、イブのコードを持つS・S・Sは行方を掴めず諦めかけたときに、もう1人イブのコードを持つ人間がいることを知つた。それがC・C・よ」

「……………」

S・S・Sを知らないルルーシュには2人が何を言っているのかをいまいち理解にかける

「そして、マリアンヌのC・C・説得がうまくいかぬ以上、もはやお前を使っしかなかった」

「そうか、ブリタニアと黒の騎士団の戦いですらC・C・を誘い出す止め。俺は初めから　ふっ、お前たちはどう思う?」「
自虐的な笑みを浮かべ後ろにいる2人に聞く

「気づいていたのか?」

「必要なんだろ?この計画に」

C・C・のほうを見て聞く

「その通り。故に枢木よ、ここまで追ってきてても意味はない」
もう1人の来訪者であるスザクにシャルルは

「でしょうね。貴方はすでに不老不死だと効いています。だから、確かめたい。貴方が作るうとしているこれは」
スザクが上へ上へ伸びていく黒い2つの塊（以降アーカーシャの剣）を見ながら聞く

「そう、ユーフェミアもナナリーも望んだ優しい世界だ」

「違う!貴様の作るうとしているのは決して優しい世界ではない!」
ルルーシュたちの後ろからライがシャルルを指差す

その横にはツヴァイの仮面を被ったゼブルが立っている。

「何でここにライとツヴァイが」
ルルーシュだけでなくシャルルやスザクも同じことを思った

「久しぶりだな。ルルーシュ」
そんなルルーシュにライは記憶が変えられるのクールな表情でルルーシュに向かう

「まさか、記憶が戻ったのか!？」
ルルーシュは驚愕の表情でライを見る

スザクも同じようにライを見る。

「馬鹿な」

シャルルは自分がかけたギアスが解けたことに驚く

「そうだ、シャルル・ジ・ブリタニア、貴様のギアスも解けた。僕は黒の騎士団のライだ!」

「ツヴァイ、貴様もか」
隣にいたツヴァイにシャルルが聞く

「V・Vの仇と言えば分かりますね？」
静かな口調で逆にシャルルに聞く

「そうだったな。お前は兄さんの推薦で学生ながらラウンズに入れたのであったな。ゼブル・？・プレイエントよ」
思い出したようにゼブルのフルネームを言う

「それは、敵が読んでいい名前じゃない。それはもう1人の俺の名前だ」

「ゼブル？ツヴァイの正体はゼブルだったのか!？」

「何故生きている？そしてどうしてライと一緒にここに」
ルルーシュとスザクが仮面を取ったゼブルに質問を浴びせる

「今はそれどころじゃないでしょ？後で教えてあげるから」
2人を宥めるかのような口調で言う

「あら、貴方はあの時の」
マリアンヌがゼブルを見る

マリアンヌは一度アーニヤの体を借りてゼブルに挑み、そして負けた。

「アーニヤちゃんの中にいた人ですね？アーニヤちゃんは安全な場所に移しましたので皇帝ともども亡霊は暗黒に帰ってください。帰らないのであれば妨害しますよ？」

マリアンヌだけでなくシャルルにも視線を向ける

「ふん、だが今更何が出来る」
右腕を前に出すとギアスの紋章が光る

アーカーシャの剣が更に速さを増し、上へと伸びていく

「ああ、始まる。アーカーシャの剣が神を殺すの」
恍惚な表情でアーカーシャの剣を見上げる

「後は刻印を一つにすれば新しい世界が始まる」
シャルルはゆっくりとC・C・に近づく

「ルルーシュ、君は何のために世界を手に入れようとしてた？」
スザクがルルーシュに聞く

「愚問だな。俺は俺が守る人の為に戦ってきた」
それを笑みを浮かべながら返す

「結果を求めるには何かを成さなくちゃいけない」

「それは何かを否定することにも繋がる。つまり、俺はお前を、お前の考えを認めない！人は何故嘘をつくのか、それは何かと争うだけじゃない。何かを求めているからだ。ありのままがいい世界とは、変化のない世界、その中には生きているとは言わない。完結した閉

じた世界だ。そんな世界、俺は嫌だな」
C・C・とシャルルの間に入る

「ルルーシユ、それは私も否定すると言う事？」
静かな声でルルーシユに聞く

「母さんの願いも同じなのですね？」
ルルーシユもマリアンヌの目を見て、聞く

「バラバラだった皆がまた1つになることはいい事だわ。死んだユ
ーフェミアだって」

「（死んでないけどね）」

「やはりそうか、お前たちはそれを良い事だと思っている。しかし、
押し付けの善意は悪意となんら変わりはない」
ルルーシユは何かを諦めたような口調で話し続ける

「いずれ分かる」

「そんな時は来ない！　これで分かった。お前たちは俺とナナリ
ーに善意を施したつもりなのかも知れない。だが、お前たちは俺と
ナナリーを捨てたんだよ！」

「でも、それは守ろうとして」

「矛盾だな。守るのなら何故日本とブリタニアの戦争を止めなかった？」

「そう、計画を優先させた貴方達はルルーシュさんやナナリーちゃんが生きていようと死んでいようと関係ないと言う結論に辿り着いた。自己満足の言い訳だけ残して」

ライとゼブルがマリアンヌを睨む

「それは違いわ」

「死んだ人とも会えると言っただろう！未来なんか見ていないんだ！」

言い訳を続けようとするマリアンヌの言葉を遮る

「未来はラグナレクの接続の先にある。ナナリーの言っていた優しい世界は」

「違う！お前たちが言っているのは自分に優しい世界だ！ナナリーが望んだ世界はきつと他人に優しくなれる世界なんだ」

ルルーシュは手を震わせる

「（そうかもしれない。ユフィは最後までルルーシュがゼロだとは言わなかった。シャーリーだって）」

スザクは頷きながらルルーシュを見る

「だとしてもそれが何だ？すでにラグナレクの接続は始まっている」
シャルルは冷たい口調でルルーシュに言う

「どうかな？俺はゼロ、奇跡を起こす男だ！」
左目のコンタクトを外す

「ギアスは僕には効かぬ。他の者にしたって」
馬鹿にしたようにルルーシュを笑うが

「いいや、もう1人いるじゃないか。この世界は人類の意思、
そして人は平等ではない。お前の言葉だ。平等ではないが故の俺の
力は知っているだろう？」
してやったりな顔でシャルルを見る

「（元々この世界は1人の人間だしね）」
上空にある物体を見る

「愚かなりルルーシュ！王の力では神には勝てん」

「勝ち負けではない。これは願いだ！神よ！集合無意識よ！時の歩
みを止めないでくれ！」

上にある物体に向かってギアスをかける

「ルルーシュ、あなたって子は」

マリアンヌがルルーシュを止めようとするが

「ルルーシュの邪魔はさせない」

「こんなこと、ユファイも望んではいなかった」

ライとスザクが立ちはだかる

「ユファイと話しをさせるために呼んだのに。狂王、あなたのギアスの暴走により死んだ妹や家族にだって」

「それを押し付けと言うんだ！」

2人は大事な存在を出されたことで憤怒の形相でマリアンヌに言う

「出来るはずがない。神に、人類の意思に」

「それでも俺は明日が欲しい！」

ルルーシュの右目にもギアスの紋章が現れる

「俺の力も使うか」

もう一押し状況にライが自分のギアスを使おうとするが

「ライは止めな。暴走したらどうすんの？俺がギアスを使う」

ゼブルの両目に紋章が浮かび

「キリストよ！ルルーシュさんの、俺達の願いを聞いてくれ！」

ゼブルも自身のギアスを上空に浮かぶ物体に向ける

すると、その物体にギアスの紋章が浮かびアーカーシャの剣が崩れていく。

「そんな！」

「思考エレベーターが。俺とマリアンヌ、兄さんの夢が朽ちていく
マリアンヌとシャルルは呆然と見つめる

「もう止めよう。おこがましい事だったんだよ」

Ｃ・Ｃ・はゆっくりと地べたに座る

「Ｃ・Ｃ・、俺とお前のコードがあれば！」

Ｃ・Ｃ・に寄ろうとするシャルルだが

足から粒子となって消えていく。

「あなた！」

マリアンヌもシャルル同様消えていく

「これが、嘘ではない。現実の答えだ」

「馬鹿な！飲み込まれる？この世界に！？」
驚愕の表情で自身の体を見る

「でも、C・Cはどつして何とも無いの？計画に協力していたはずじゃ」

マリアンヌがC・Cを見る

マリアンヌの言つとおりC・Cの体は何とも無い。

「気づいてしまったんだ。お前たちは自分が好きなだけだと少し寂しそうにその光景を見る

「現実を見ることなく高みに立って俺達を楽しげに観察して、ふざけるな！事実は1つだけだ。お前達の世界は俺が否定した。消え失せる！！」

ルルーシュが2人に言い放つと2人の体は一気に粒子となって消えた。

「さて、皇帝シャルルは死んだけどこれからどつする？」
ゼブルが地面に胡坐をかいて座る

「どつするもこうするもあの男に時の歩みを止めさせないと言い切ってしまったんだ。世界を壊し、造るしかあるまい」
ルルーシュも地面に座り込む

ライとスザクも同じように座る。

「じゃあ、皆でニルジヨワに行こうか。あそこならシュナイゼル・エル・ブリタニアにばれることなく身を隠せる場所が幾らでもあるからね。そこで作戦を練ろう」

「 ガーベスはどうするんだ？
スザクがゼブルに聞く

「今は我慢してもらおうよ。全てが終わったら拉致って田舎で畑を耕しながらのんびり暮らすよ」
少し寂しそうな顔をするがすぐにいつもと同じ笑顔になる

「相変わらずだな」
ライもそんな光景を見て笑みを浮かべる

「そう言えばこのメンバーで話すのも久しぶりだね」
ふと思い出したようにゼブルが呟く

「そうだな。本当に久しぶりだ」
ライも頷く

ルルーシュやスザクも

「今度は本当に皆で集まりたいな。そのためには」

ゼブルがルルーシュを見る

ライモスザクもC・C・モルルーシュを見る

「ああ、そのために俺達は未来へ進むんだ」

一カ月後

「あのフレイヤ弾頭の被災から1ヶ月が経ちました。1月もの間、公の場にお出ましになられなかった皇帝陛下ですが、本日はシャルル皇帝陛下から重大な発表があるとのこと。ペンドラゴン皇宮より国際生中継にてお送りします」

東京租界の大型テレビに映るミレイの声が響く

「皇帝陛下は行方不明だったはずでは？」

「報告してきたビスマルク本人が他のナイトオブブラウンスと共に行方知らずじゃ確認も」

「それにシュナイゼルやコーネリア、それにライアーは何故いないんだ？」

皇族たちが皇帝を待つ間話しているが

「皇帝陛下ご入来！」

衛兵の1人が言うと音楽が流れる

黒い制服に身を包んだ少年が玉座に向かって歩く。

「私が第99代ブリタニア皇帝。ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアです」

そして玉座に座り足を組む

周りはその光景に会場がざわめく。

「うそ？本当に？」

「生きていた」

皇子や皇女達が驚いたように聞く

「そうです。地獄の底より舞い戻ってまいりました」

ルルーシュは笑みを浮かべてはそんな腹違いの兄弟達を見る

「よかったよ、ルルーシュ。ナナリーが戻ってきたからもしかしたらと思っていたけど些いひか冗談いひが過ぎるんじゃないか？その席は父上の「第98代ブリタニア皇帝は私が殺した」え？」

オデュッセウスはルルーシュを席から離そうと説得するがルルーシュは表情を変えずにシャルルの死を伝える

ザワザワと周りからのざわめきは大きくなる。

「よって次の皇帝には私になる」

「あの痴れ者を排除しなさい！皇帝陛下を弑逆しじやくした大罪人です！」
皇族の1人が衛兵を呼ぶ

衛兵がルルーシュに向かって槍を向けるが

「ぐわああ！」

上から降って来た3つの影が衛兵を吹き飛ばす。

ライ、スザク、そしてゼブルの3人。

勿論ルルーシュ同様制服を着ている。

「紹介しよう。我が騎士達を。まず、彼等には歴代のラウンズを越えし騎士としてそれぞれ過去、現在、未来を司る騎士の称号、ナイトオブタイムズを与える」

カメラはルルーシュの左右に並んだゼブルたちを映す

「まずはライ。彼には過去を司る究極の存在としてナイトオブマイナスを」
ライを指差す

「そして枢木スザク。彼には現在を司る最高の存在としてナイトオブゼロを」
次はスザクを

「最後に元ナイトオブツァー、ツヴァイ・ドウとして名を馳せていた我が親友ゼブル・オウサルト。彼には未来を司る絶対なる存在としてナイトオブプラスの称号を与える」
そして最後にゼブルを差す

「いけないよルルーシュ。それに枢木卿にドウ卿？にライも。国際中継でこんな悪ふざけを」
オデュツセウスが前に出てルルーシュたちを注意するが

「そうかそれなら、我を認めよ」
ルルーシュは立ち上がり両目のコンタクトを外して自分を見ている
全員にギアスをかける

「イエス・ユア・マジエスティ！」
オデュツセウスが手を胸に当てる

「「「「オール・ハイル・ルルーシュ！」「」「」」
他の皇族や大貴族たちも同じようにルルーシュに称賛を浴びせる

（皮肉なものだな。ブリタニアを否定し続けた俺がぶつりたにア皇

帝になるなんて。だが、やるしかない。俺は皆のためにも)

(ありがとうルルーシュ、君が表に出てきてくれたお陰で動きやすくなった。全てを君に差し上げるしよう。ブリタニアと言う国すらね。問題はその先にある。世界を握るのはルルーシュのギアスか、それとも)

(さあ、残すはシュナイゼル殿下のみ。スザクのランスロット・アルビオンはもう完成してるし、ライと俺の新型ナイトメアはもうすぐ完成する。あとは最後の戦争前に2つの仕事をして、戦争で勝てば俺の勝ちだ。頑張ろう！)

次回ゼブルと皇帝 ルルーシュ。お楽しみに！)

(やっぱり掛け声も重要だね。魔法を放つ時はやっぱり呪文だね。エオルー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ オス・スーヌ・ウリュ・ル・ラド・ベオーズス・ユル・スヴェエル・カノ・オシエラ・ジエラ・イサ・ウンジュー・ハガル・ベオークン・イル!とか。

暇潰しのカッコいい呪文とか武器の名前とか考えるのは飽きたな。でも、他にやることもないしな。それにしても暇だな。)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8643n/>

コードギアス 起きたら異世界に来ていた者ゼブル

2011年10月22日03時22分発行